

TS転生したら幼馴染が光の奴隷でした

生野の猫梅酒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

スラムという最低辺で生きる彼女<sup>カレ</sup>が出会ったのは、まるで物語の中から抜け出してきたかのような少年——若き瞳に怒りの焰を燃やすクリストファー・ヴァルゼライドだった。

タイトル通りヴァルゼライド閣下の幼馴染（TS転生者）を主軸に据えた作品です。原作ではさらっと悲劇の死を遂げたらしいこの人を色々と膨らませた作品となっております。

まあそれはどちらかといえばおまけで、原作で描写されていない閣下の少年スラム時代や青春東部戦線時代を思う存分書いてみたいというのが動機ですが。

# 目次

## 第一章 スラムにて／Childhood

Chapter 1 スラムの少女／Margarethe B

rown | 1

Chapter 2 光と憧憬／Friend | 10

Chapter 3 底辺の日常／Struggle | 17

Chapter 4 覚醒／Obstinacy | 24

Chapter 5 始まりの刃／Dawn | 34

Chapter 6 突き進む者／Quarrel | 44

Chapter 7 拳と喧嘩と友情と／Brawl | 54

Chapter 8 諍い果てての契り／New Comer

66

Chapter 9 “勝利”とは／Childhood's

End | 75

## 第二章 東部戦線／Adolescence

Chapter 10 士官学校／The Adler Imp

erial Army | 85

Chapter 11 努力という才能／Mentor | 95

Chapter 12 まるで小さな砂粒のような／Fate

105

Chapter 13 卒業／To East | 115

Chapter 14 東部戦線／Frankfurt | 123

Chapter 15 最初の戦線／Thringen | 133

Chapter 16 戦場を駆ける者／First | 142

Chapter 17 最強の敵／Second | 153

Chapter 34	星辰奏者／Esperanto	329
Chapter 33	政府中央棟／Central	318
on		308
Chapter 32	新たな戦い／Stellar of Ir	297
Chapter 31	今の彼女／Gender	288
tion		288
Chapter 30	涅槃寂靜（ニルヴァーナ）の終焉／Ambi	276
rth		276
Chapter 29	怠惰と麻薬と英雄と／Fafnir	266
g		266
Chapter 28	拡大する戦火／Four Years	255
Chapter 27	ベルリン攻略戦／Berlin	245
第三章	胎動する星々／Constellations	234
ing		234
Chapter 26	ささやかな日常／Party	223
Chapter 25	未だ、覚醒（めざ）めず／Not	223
Chapter 24	賢い生き方／Not Serious	213
Chapter 23	日常に潜む“花”／Second	205
Chapter 22	平穏な日々／First	196
s		196
Chapter 21	光の信奉者／Gilbert	186
Chapter 20	四人目／Testament	176
Chapter 19	躍進／New Hero	165
Chapter 18	次の“勝利”のために／Third	165



## 第一章 スラムにて／Childhood

### Chapter 1 スラムの少女／Margaret Brown

——あの日見た光景を、後ろ姿を、オレはきつと生涯忘れないことだろう。

熱く雄々しい拳が唸る。燃え盛る情熱を胸に抱いた少年の快進撃が止まらない。まだほんの子供でしかない少年の一撃はしかし、軽く五歳は上だろう男たちをことごとく打ち砕き憚らない。たとえ殴り返されようと意にも介さず平然と戦闘を続行するほどだ。

まるで物語から抜け出てきたかのような少年だった。圧倒的な戦力差を前に単騎で戦い抜き、当然のように勝ち抜く英雄の在り方。見れば誰もが憧れてやまないような、正道を一心不乱に進み続ける者に特有の輝きを放ち続けている。

その後ろ姿があまりにも雄々しくて、格好良くて、ほんの少しも目を離せない。多人数を相手に金髪を翻し戦う姿は冗談抜きに惚れ惚れして、曇りのない蒼い瞳は途方もない意思の強さをこれでもかとしていた。

彼こそは、光の英雄。覇者の栄冠を担う器。

そんなありきたりな、けれどこれ以上ない形容が脳裏を過った。オレと同じくスラムに住まうみずぼらしい少年のはずなのに、心の有り様は不動にして不屈。英雄譚を担うがごとく、前へ前へと進み続ける気概に満ち満ちていた。

なんだ彼は、何者なのだ。どうしてそうまで真つすぐ生きていられるというのだ。その少年を構成するあらゆる全てが冗談みたいに輝いて見えて仕方ない。同じ人間とはとても思えないくらい、雄々しい姿を示している。

そうして気が付いたときには、少年は五人もいたはずの年上たちを全て殴り倒してしまった。少年自身の傷も決して浅くはないが、それがどうしたとばかりにすまし顔で立っている。要するに気合と根性

によるやせ我慢、だが極まればこうまでなれるのかといっそ感心させられるばかりだ。

「立てるか？」

仏頂面を浮かべつつ、少年はオレに手を差し伸べてくれた。そこで初めてオレは自分が座りこんだままだったことに気づき、彼の手を借りて立ち上がる。がっしりとした力強い男児の手だった。

ありがとう、と礼を述べてから自らの名を名乗った。続けてそっちの名前はと聞けば、やはり仏頂面のままだがしつかりと教えてくれたのだ。

「俺の名は、クリストファー・ヴァルゼライドだ」

◇

新西暦一〇〇二年。

アドラー帝国に存在する貧民窟<sup>スラム</sup>とは、一言でいえば塵屑の掃き溜めである。

朽ち果てた建物が並び、衛生環境も最悪を越えた劣悪。煌びやかに輝く帝都の街に連なるはずなのに、どこまでいっても屑の寄せ集めではない、そんな場所だ。

そこに生きる人々もまた人の形をした塵も良いとこだった。スラムなんぞを根城にするのは明日に困った浮浪者や意地ぎたない孤児たち、それに喧嘩に明け暮れる若者たちばかり。真つ当な精神を持った者など一人もおらず、皆が明日の糧を求めて蠢き奪い合う最低の見本市が貧民窟<sup>スラム</sup>の現実なのだから。

——当然ながらこのオレ、マルガレーテ・ブラウンもその例に漏れず屑のお仲間だった。

「ちえ、今日はこんだけか」

ガサガサとゴミ箱の中を漁る。都市の中心部に比較的近いこの場所は、どっかの誰かが廃棄した食糧が混じっていることが多い。なので今日も漁ってみたのだが、生憎とたいした量は入っていなかった。

仕方ないが、それでも食べられるだけマシな方だ。惨めな思いを誤魔化すように拾い上げたパンを頬張る。パン自体はつい昨日にでも棄てられたのだろう、衛生面さえ考慮しなければ悪くない味である。

それを貪って胃に収めてからスラム街を歩きだす。崩れかけた建物の陰には、オレと同じようにスラムで生きる子供たちが目に入る。かつてのオレならその姿をみてみすばらしいと遠ざけたかもしれないが、今のオレはその同類だ。笑うことなど出来なかった。

「なあんでこんな目に遭ってるんだろうな、オレ」

ねぐらである廃ビルへと戻り、奇跡的に水道の生きている一角にうずくまる。口をついて出るのはいっだってどうしようもない自らの境遇への嘆きだ。言ったところで仕方ないが、どうしても恨み辛みにも似た感情は定期的に湧き出して仕方ない。

オレは、いわゆる転生者と呼んで差し支えないのだろう。他人に聞かせれば間違いなく頭の病気を疑われるだろうけども、事実であるのだから仕方ない。こうしてマルガレーテ・ブラウンとしてスラムで生きる前、いわば前世の記憶をしつかり保持しているのだから。

元々のオレ自身は大したことの無い人間だった。多少サブカルに傾倒しつつも最後は若くして病で死んだ普通の人間、その程度である。だからこうして二度目の生を受けたときの驚愕と喜びは七年経った今でも覚えているのだが。

誤算は主に三つだ。

一つ、生まれの親が揃って蒸発したこと。

二つ、そのせいで二年前からスラムという最低辺で生きていく他になくなったこと。

最後の三つ目、そもそも生前とは性別が違う姿で生まれてしまったこと。

最初の二つは環境の問題なのだろう。オレの第二の親はろくでもない屑であり、そのせいでスラムで生きる事を余儀なくされた。かつての大人としての精神が残っていたのは不幸なのか幸運なのか、発狂はせず憂鬱になりながらもどうにか日々を生き延びている。

だが最後の三つ目に関してはまるつきり話が違う。オレ、と自らを呼称しているようになっての性別は男性だった。それがどうしてか女性になり、しかもマルガレーテという完全に女性の名前を付けられているのだから堪らない。今でこそ慣れたが、かつては違和感しか覚



えなかったものだ。

そんなこんなでわざわざ安全な現代日本から転生させられた挙句、こうして最底辺で燻ぶり足掻いているのがマルガレーテ・ブラウンの真実である。あまりにも惨めで泣きたくなるような生活ぶりだが、それでも死にたくはないので努力を続ける他にない。

日々の楽しみといえれば前世かつてを偲びながら眠りにつくことと、水面に映り込んだ自分を眺めることくらいだ。ナルシストな自覚はあるが、かなり顔は良い方なのだ。くすんだ茶髪と明るいオレンジの瞳も中々のもので、順当に成長できれば相当な美人になれると断言できる。

「ま、それも成人まで生きられればの話なんだけどな……」

自嘲するように呟いた。せつかく男の精神のまま可愛い少女に生まれたのだ、第三者目線で成長を楽しみたい欲望は当然ある。だがそんなことよりも今日を生き、明日を乗り越えることが最重要だ。未来のことなど考えるだけ贅沢と学んでいた。

それにしても、腹が減った。先ほど食べたパンだけだと成長期の身体には足りないようだ。そう都合よく食糧が手に入るとも思えないが、腹が減ったからにはこのままという訳にもいかなかった。

億劫ながら立ち上がりねぐらを出る。風が吹いたその先にはこのアドラー帝国の象徴、要塞とビルが融合したかのような歪な造形をした“政府中央棟”が聳え立っていた。きつとあそこでは飢えも惨めさもない、快適な生活を送っている人間がたくさんいるのだろう。考えるだけで悲しくなる。

このアドラー帝国、もとい新西暦の世界については多くを知らない。知っているのは精々この国が軍事帝国で、かつかなり内部が腐敗しているらしいこと。そして空に浮かぶもう一つの太陽、“第二太陽”から流れ出す“星辰体”なる粒子のせいで既存の法則は大きく塗り替わってしまったらしい程度だ。

なんで日本の神様の名前が浸透しているのか、そもそも星辰体とは何か、これだけでも気になることはたくさんある。しかし所詮スラムに居ては手に入る情報もたかが知れているのだ。先のものだってこ

の世界では常識に等しいもの、それ以上の詳しい内容など知る余地もなかった。

「オレも早く楽な暮らしがしたいなあ……」

オレには夢がある。いつかこのスラムを出て真つ当な生活を送ることだ。夢というにはあまりにもささやかで、ありきたりなものではないが。

平穏な日々。きっと世の中の誰もが当然のように享受し、何の疑問も持たない概念だろう。ただどうこうして一日一日を生きるのに必死になつてみれば、いかにそれが素晴らしいかよく分かる。その尊さを噛み締めたからこそ、いつかはこの最底辺を脱出したいのだ。

ともあれ、食べ物求めてスラムのめぼしいところを歩き回る。運が良ければ気紛れにパンの廃棄を配つてくれる大人が来たりもするのだが、今日は生憎と姿が見えない。第一それが来ると決まつて壮絶な取り合いが始まり、最後は喧嘩やらにまで発展するのだ。ありがたいが、しかし争いの種なものも否めなかった。

しばらく様々な箇所を歩き回り、ゴミ箱を漁り、ようやく新たな食べ物を得ることができた。やや傷んだ林檎だが、十分に食べられるし腹も満たせる。上々の結果だった。

もし露店相手に底辺らしくスリでも出来れば話は違ったのだろうが、この身体ではかなり厳しい。見つかった際のリスクも考えれば無用な危険は冒せないし、下手に目立てば角が立つ。

「なあ嬢ちゃん、その飯俺らにくんねえかな？」

「……………」

だってそう——このような手合いに目を付けられる可能性が高まつてしまうのだから。

林檎を手にホクホク顔をしたオレの前に現れたのは、見ただけで不良っぽいと分かる少年五人組だった。彼らは徒党を組んでオレの前に立つと、さも当たり前のようにこの手に握る食糧を要求してきた。

外見十二、三程度の少年たちが、七歳の少女でしかないオレに対して寄つてたかつて飯をたかる。それも傷んだ林檎一つにだ。一見すれば滑稽にしか映らないだろうが、しかしこれがスラムの実状なのだ。

から根は深い。卑怯で恐ろしい手合いだが、彼らもまた飢えていることに違いはないのだから。

しかし、そう簡単に貴重な食糧を渡してやるわけにもいかない。オレにはオレの人生がかかっているのだ。はいそうですかと渡してやるのも勘弁願いたい。

「誰が渡すかよ、バーカ」

「待て、このクソ餓鬼が！」

捨て台詞と共にすぐさま背を向け、一目散に少年たちから逃げ出した。少女の足ではすぐに少年たちに追いつかれるだろうが、幸いにしてこのスラムは入り組んだ建物も多い。小柄を活かしてそれらに逃げ込めば撒くことは十分に可能だった。

積み重なった鉄骨の下に潜り込みホツと一息。少年たちはこの奥へと入ってはこれず悔し気に見るだけだ。これであるとは反対側にも抜け出せば良いと考えていたのだが――

「そら、やっと捕まえたぞー！」

「手間かけさせやがって、ったく！」

「この、放せよッ！」

なんとも呆気なく捕まってしまった。

理由は簡単で、鉄骨の先が建物の壁で通れなかったこと、割と簡単に鉄骨をどかせるような重なり方をしていたようだ。そのせいで隙間を広げられてあえなく捕まってしまった運びである。

仕返しとばかりに思い切り顔を殴られ、薄汚い路上に放り投げられた。頬が燃えるように痛い。反射的に涙がこぼれたが、泣き声だけは決してあげてやらない。それをしたが最後、きつと自分は折れてしまおうと分かっているから。

無様に泣き叫ぶのだけは堪えるオレの前で、しかし少年たちは更に恐ろしいことを平然と口にした。

「これで食糧確保と……おい、こいつどうするよっ！」

「面倒だし放っておけばいいんじゃないの？」

「いや待て、こいつつけっこう顔立ち良いぞ。ここは一つ……どうだ？」

「どうだってお前、相手はめっちゃ小さい餓鬼だぞ。ま、いいか、中々

こんなチャンスもないしな」

「おうおうそうだな、楽しまなきや人生損だぜ」

最後の言葉に「違いねえな!」と少年たちは下卑た笑い声をあげた。オレからすればお前たちだって同じ餓鬼だろ、そう感じたがしかし言い返せない。これから何をされてしまうのか、仮にも男だった記憶があるから理解できてしまう。それだけはダメだ。

尻もちをついたまま後ずさる。首を振りながら「やめろ」というが少年たちは一切気にしない。余裕ぶって歩いて近づき、ついにオレの正面に立った。彼らの一人がオレのまとう襪褌布に手を掛け、抵抗できないように両手足を掴まれた。

もはやこれまでか。圧倒的な絶望に襲われ諦めた、そのときだった。

「——いいや、そこまでだ」

背後から、あまりにも巨大な熱量を秘めた決意の声が届いた。

思わず振り向いたのはオレだけでなく、まさに欲望をぶつけようとしていた少年たちもそちらを見た。そして、彼はそこに居た。

汚れでくすんだのだろう金髪を揺らし、やはりスラムの子供らしく服装も貧相だ。けれど鋭い蒼の瞳だけは不釣り合いなほど強烈な意志に満たされ、これでもかというくらい嚇怒の炎を燃やしている。直視すれば目を灼かれる太陽のような、圧倒的な情熱が燃え盛っているのだ。

「男どもが寄ってたかって少女を凌辱などと、情けないにも程がある。ふざけるなよ悪党ども。貴様ら全員この俺が相手をしてやろう」

「な……なんだよ、お前は？ 邪魔するってんなら容赦しねえぞ？」

「や、やんのかおい……!」

明らかに歳の離れた子供を前に少年たちの方が及び腰になるという奇妙な光景。だが彼はそれすら不思議に思えないくらい、圧倒的な存在感と莫大な感情を示しているのだから是非もない。すなわち、眼前の悪を許せぬ怒りの炎。

前へ前へと進む意志、紛れもない高潔なる心を冗談みたいに備えた彼は、それ以上言葉を交わすこともなく少年たちへと殴りかかった。

数の利はオレを襲った方にあり、彼の方は明らかに多勢に無勢も良いところだ。一分後には袋叩きにされる未来しかないはずが、しかし――

「どうした、温いぞ。その程度か？」

さも当然と言わんばかりに彼は問うた。彼の拳は容赦なく少年たちへとめり込み、逆に彼へと奮われる拳や蹴りはほとんどが当たらない。それでもたまに直撃するのだが、涼風程度の衝撃と言わんばかりに表情一つ崩さず耐えているのだ。

「なんで倒れねえんだ、なんで倒せねえんだよ……！　化け物かコイツは!？」

「ふぎけやがって、この――ガハッ」

なんて圧倒的な光景だろう。年齢、体格差、数、全てが金髪の少年の不利を裏付けているはずなのに、おとぎ話のように彼は不滅で最強だった。気が付けばオレを襲おうとした少年たちは全員が逃げることもできず路上に伸びており、ただ一人勝利を手にした者だけは厳然として立っていたのだ。

「立てるか？」

「あ……」

その彼が、尻もちをついて座り込んだままだっただけでオレに手を差し伸べてくれた。がっしりとした力強い手を握り返し、どうにか震える己の足で立ち上がった。この人の前で無様な姿はこれ以上見せられない、何故だか強くそう感じたのだ。

「その、助けてくれてありがとう」

「気にするな。俺がやりたかったからやっただけだ」

素っ気なくそう言われてしまった。誰かを助けたのだからもっと誇らしげにしても良いだろうに、少年は仏頂面を全く崩そうともしない。

そんな超然とした態度がますます気になってしょうがない。彼はいったい何者なんだろう。感謝と好奇心がない交ぜになったまま、気が付けばオレは去ろうとする少年の背中を呼び止めていた。

「オレはマルガレーテ・ブラウンっていうんだけど、よければそっちの

名前を教えてもらっても良いかな？」

この凄まじい人の名前を知りたいと心から願ひ、素直に口にする。こんなところで縁が切れてしまうなんてあまりにも惜しく感じられた。

彼は足を止めてこちらを振り向く。鉄面皮は欠片も綻ばず、しかし真つすぐな視線と共に真摯に名を覚えてくれたのだ。

「俺の名は、クリストファー・ヴァルゼライドだ」

「クリストファー・ヴァルゼライド……」

告げられた名を自分の舌で小さく唱えた。それだけで理屈でなく心が震えた。同じスラムのみすぼらしい子供のはずなのに、彼は何故だかこちらの魂を奮起させてくる。まるで英雄の卵と出会ったかのような——否、実際にそうだと言われても臆面もなく信じられる。

だって危ないところを助けてもらったオレにとつて、紛れもない英雄ヒーローなのに違いはないから。

——そしてこの出会いこそ、これから先へ続く運命への片道切符だったなど、この時は知る由もなかったのだ。

「これでよし。本当に応急処置程度でしかないけど、ほっとくよりはまだマシだと思うよ」

「感謝する。わざわざ俺などのためにすまないな」

「まさか、こつちこそアンタは恩人なんだ。好きになりこそすれ、邪険になんかできないって」

あの鮮烈な出会いの後、オレは多少なりとも傷を負ったヴァルゼライドを自分のねぐらに招いていた。水場で擦り傷などを洗い消毒、打撲なども簡単に冷やしておく。雀の涙でしかない治療もどきでも、この貧民窟スラムにおいてはこれが精一杯だ。

それにしても、助けてくれた方なのに嫌味なくらい腰が低い少年である。その視線に宿る強烈な意志は今もなお衰えることなく燃え盛っているのに、真摯に頭を下げる姿はスラム育ちにあるまじき誠実さだ。なのに自分のことを卑下するような言葉を平然と吐くあたりがよく分からない。

ひとまず彼を座らせ、自らもまたその対面へと腰を下ろした。拾い物の錆びたナイフで簡単に林檎を切り分けてその半分をヴァルゼライドへと放り投げる。

「小さいけど今回のお礼だよ。改めて、助けてくれてありがとう」

「重ね重ねすまないな。それに礼を言われることでもない。ただ俺があの場合を見過ごせなかつたから介入した、これはそれだけの話だ」

「だとしてもだ。あのままだったらきつと酷い目に遭つてただろうし、それを助けてくれたアンタは紛れもなく俺にとっての恩人だよ。素直に感謝させてくれ」

そこまで言って彼はようやく納得してくれたようだった。態度にはありありと“自分には過ぎたもの”という感情が見えているが、それでも否定しないなら十分である。

しばらくお互いにしゃくしゃくと林檎を齧る音だけが響くも、すぐにそれらは腹の底へと消え去った。多少の満足感を得られたところで何となしに話を再開してみる。

「なあ、なんでオレのことを助けてくれたんだよ？ オレとアンタは間違いない初対面で、しかもそつちは多勢に無勢だったんだぞ。そりゃああんだだけ強かったとはいえ、普通は見過ごしたってなんもおかしい。くはないだろ」

少なくとも自分なら怖いし見てみぬふりをする。だって普通に考えて格上を相手に挑むなんて恐ろしいじゃないか。しかも助ける相手すら全く見ず知らずの他人、これでは勇気を振り絞る甲斐すらない。

なのに彼はなんの躊躇いも見せず、圧倒的な意志と力でオレを助けてくれたのだ。もちろん感謝はしているが、「どうしてそのようなことを」という好奇心も隠せない。

「決まっている、俺がそれを見過ごせない性分だからだ」

よって何の銜てらいもなく返された言葉に、俺はしばし言葉を失った。

同時に、思い知る羽目になる。クリストファー・ヴァルゼライドという少年の中に潜む、あまりにも圧倒的な悪への怒りを。

「生まれた時から染みついた本能なのだろうな。不条理がのさばり正義が価値を失う世界の中で、俺は悪党が勝つ姿が許せなかった。正しく生きる者が報われてほしいし、悪人は相応の罰を受ければよい。そう考えて、俺はこれまで生きてきた」

「だから、オレも助けてくれた？」

「当然だ。他の皆がそうだからと、俺まで貧民窟こくの墮落に染まる必要がどこにある？ 重要なのは必ず成し遂げるという意志と、そして不断の努力なのだから。ただ一つを貫き通すことしか俺は知らないし、それさえ出来ない者が“勝利”という栄光を手に入れる資格など断じてないのだ」

彼は本当にオレと同じくらいの子供なのだろうか？ そんな疑問が脳裏を掠める。

とても子供とは思えないくらいに達観したその態度、スラムどころか過去ぜんせの大人にすらいなかった。ましてやそれを行動に移し、ただの一度も正道を外れず正しいことを続けられるなど——とても常人には出来ない苦行だ。



悪を許さず、勝利を重ね、周りに流されず潔癖を貫く。言葉にすればなんと素晴らしいことだろう。だが、正しいことはすなわち苦しいことなのだ。ほとんどはその痛みに耐えられず、悪に走り、敗北に甘んじ、周囲に流され腐敗へと迎合してしまう。

オレだつて今はまだ犯罪には手を染めていないが、このまま数年もすればきつと小さな犯罪には手を出し始めることだろう。そこから段々と大胆になり、最後は殺人のような取り返しのつかないところまで進んでいくのは明らかだ。でもそれがスラムの流儀である以上、良心も躊躇いも簡単に振り切れてしまうのは想像に難くない。

人間とは所詮そんなものである。周囲の人間や環境によつて簡単に悪へと転んでしまうし、悲しいが悪い行いの方が楽に出来ているのが世の中だ。ならばいったい誰が正道を脇目も振らずに進めるだろうか、辛く苦しい茨の道を踏破できるのは一握りの勇者を置いて他にない。

——故に、彼こそ勇者と感ずることに躊躇いは微塵もなかった。

「すごいな、アンタは……こんな塵屑しかいないようなスラムの中で、アンタみたいな人間に会えるなんて思つてもみなかった」

他の誰が彼と同じことを言おうとも、ただの理想論か法螺吹きにしか聞こえないはず。現実という痛みの前に虚しく破れ去るのがオチなのは間違いない。

だがこの少年、ヴァルゼライドに限ってはあり得ないと断言できた。心の裡から常時放たれている気迫が説得力を持たせ、鋼のようにブレない姿が世迷言と馬鹿にさせないのだ。さらに言えばその実例、不利を覆し勝利を手にした強さをオレは間近で知つたのだ。あの光景を見てもなお大言壮語と笑うなど以ての外である。

人として、男として、あまりにも格好良いから心の底から感服してしまう。オレもこんな風になればなら良いのにと憧憬さえ抱く始末。だからだろうか、助けられたときと同じく飾りのない正直な心をそのまま吐露してしまった。

「なあ、そつちささえ良ければオレと友達になつてくれないか？ アンタみたいな立派な人間と胸を張つて並べるような、そんな人間になり

たいんだ」

言いながら手を差し出す。どうしても面と向かって友達になつてと告げるのは気恥ずかしいが、それでも眼前の少年と友達になりたい感情が勝つたのだ。こんなにもすごい男とこれきりで終わるなんて耐えられない。

そうして握手を求める手を前にして、ヴァルゼライドは初めてその鉄面皮を微かに崩した。ほんの少し漏れ出た表情は驚きだろうか。一瞬だけオレの行動に戸惑ってから、けれど力強くその手を握り返してくれた。

「そちらが望むというのなら。これまで友などいなかった俺ではあるが、その想いを無碍にしないよう努力すると誓おう」

「そんなに堅苦しく考えなくてくれて。もつと気安い仲になればまずは良いんだからさ。でも、ありがとうな」

嬉しかった。こんな男がオレと友達になつてくれるなんて夢みただ。オレだつてスラムにおける初めての友達が彼なのだから、その喜びはひとしおである。

握った手の大きさを、オレはきつと忘れない。これから先で何があるろうと、この輝きを目に焼き付けておくのだ。そうすればこのスラムという最低辺すら、いつかは意志の力で抜け出せると信じて――

◇

とは意気込んだものの、物事はそう簡単に出来ていない。

いくら途轍もない人間と友達になれたからといって、状況が簡単に好転するなどあり得ないのだ。どのようなことだろうとまずは地道に努力せねば始まらない。当たり前の真理だった。

そういう訳でオレがゴミ漁りの他に新たに始めたのは、スラムに廃棄されるジャンクの回収だった。ほとんどは廃棄品ジャンクだけあつてガラクタの山ではあるが、たまに使える物も混じっているし、それなりの金になるパーツが混じっていることもある。これらを集めて闇市の回収屋に持っていけば多少の小遣いが手に入るという寸法だ。

もちろん、スラムの人間を相手にマトモな商売をしてもらおうなどと期待してない。実際ほとんどは信じられない安値で買い叩かれる

し、モノによつては追い出されることすらある。それはオレにこの仕事を教えてくれたクリスマスにしても同様らしいが、彼の方は文句の一つもこぼさず毎日のように続けていた。

「今日の収穫はどうだったよ、クリスマス」

「レーテか。特筆するような問題はない、今日も並だな」

いつものようにスラムの影に隠れるように存在する回収店の前へと赴けば、腕一杯にジャンクを抱えたクリスマスと落ち合えた。友人となつてから一月弱、ほとんどいつも一緒にいるせいも、いつの間にか互いに愛称で呼び合うまでになつていた。この距離感がどうにもくすぐつたく、そして誇らしい。

並とは言つたが、彼の集めたジャンクはオレの集めた量の二倍はある。それは単純にこの仕事への慣れや男女の差——忘れがちだがオレの身体は少女だ——もあるだろうが、やはり地道な努力を苦とは思わない性格に起因するのだろう。

この一ヶ月で気づいたのだが、クリスマスは才能の点ではひどく凡庸だ。一を聴いて十を知る天才では断じてないし、何かをやらせればすぐに結果を出せるような人物でもない。どこまでも普通な、天賦などという言葉とは無縁の男だった。

なのに、その全てを努力一つで越えていく。喧嘩が弱ければ勝てるようになるまで鍛錬を積み、知らないことがあれば素直に訊ねた上で必ず自らの知識とする。このジャンク集めだつてどこで何が見つけやすいか、ひたすら研究して根気強く集めた上での成果なのだろう。

努力なんて普通は嫌だ。辛い、疲れる、つまらない、報われる保証はない。そんな言葉を盾に簡単に放り投げてしまふのが当然なのに、クリスマスだけは一切泣き言を漏らさない。むしろ気合一つで苦しい努力を呼吸するように続けて、重ねて、一日前の自分よりも確実に成長していくのだ。

「今日は結構まとまった金になつたな！ これならちよつとは美味しいもの食べられるかも」

「そうかもしれないな。お前も随分とジャンク集めが様になつた、友として喜ばしい限りだ」

「クリスのおかげだよ。そうじゃなきやここと縁を持つことも、こうまで頑張ることだってできなかった」

全部違わず本音だった。いくらでも努力を続けられる男が隣にいるからこそ、オレもまた投げ出し諦めることなく続けられるのだ。もちろん常にトップギアのクリスに合わせ続けてはこちらの身が保たないが、常識の範囲で彼の光に倣うのはとても効果的なのも間違いない。

帰り際に——あくまで比較的だが——清潔で味の保証されたパンを闇市で買って、スラムのねぐらへと戻る。これまで定住の地を持たずにスラムで生きていたらしいクリスだが、友となつてからはそこそこ綺麗な水が飲めるオレのねぐらで共に暮らしていた。男女が一つ屋根の下、と言えば危ない雰囲気だが、オレは精神がまだ男のままだしクリスはそういう感情がこれっぽっちもなさそうだしで全く問題ない。

買ったパンの包みを開ければ香しいパンの匂いが立ち込める。このスラムではあまりに貴重な食べ物、それを頬張れる幸せを感じながらいつもの準備もついで行つておく。

準備を終えつつパンも食べ終えて、それから日課の時間だ。真面目な顔を崩しもしないクリスと向き合つて座り直した。こういう時の彼の前ではとてもじゃないがおどけた態度をとれはしない。

「そんじゃ、やろうか」

「ああ、今日もよろしく頼む」

クリスの片手には折れたペン、さつきまでパンを包んでいた包装紙を即席のノートにして、あたかも学生が授業を受けるようなポーズを作った。もちろんこれは振りではなく、これから本当に簡素ながら授業をするのだ。

「この前やったのは確か、割り算だったか？ んじゃ次は割合の方に進んでいこうかね——」

強大な意志の力を秘め、あらゆる努力を真正面から受諾し乗り越えられるクリスだが、一方でスラム育ち所以の無学さとはどうしても切り離せない。教育を受ける機会、権利すら有していないのだから仕方

ないといえはその通りだが、彼はその現状を全く許してはいなかった。

逆にオレの方はといえば、スラムでは最弱同然の代わりに教養はある。もちろん専門的なことまでは教えられないが、それでも今のよう  
に算数や数学といったことくらいは教えられるのだ。オレがクリス  
と負い目なく友情を結んでられるのもこうした win-win の関  
係性もあるからなのは否定しない。

「つまりこれは——こういう意味か？」

「その通りさ。こういう考え方をすればより分かりやすくなると思うぞ」

そしてここでもクリスは前進を止めない、ひたすらオレの話す知識を自らの血肉へとし続ける。少しでも分らないことがあれば謙虚に教えを請い、その果てに学んだ一つを確実に我が物としてしまうのだ。

本当に、だからこそこの男には魅了されてしまう。どこまでも真つすぐ王道で、気合一つで常人の不可能すら可能にしてしまう。普通ならあり得ないような出来事をその身一つで起こしてしまいがら、自分ではどうしようもないところは素直に他者の手を借りる。力強さと謙虚さを自然体で兼ね備えた在り方に惹かれてしょうがない。

もしオレが本当に心まで女なら、その雄々しい在り方に恋でもしていたのだろうか。

いいやそれとも、男でありながら魅了されてしまうのか。割と可能性はあるのが恐ろしいところだ。

「なんてな、あり得ないあり得ない。男なのに男を信奉するなんてただのホモだろ」

「どうかしたか？」

「いいや、なんでもないよ。さてと、続きはと——」

この素晴らしい男と友になれた事実を改めて噛み締めながら、オレは記憶を掘り返して講義を再開した。

この二か月ほど、オレの朝はかなり早い。陽が出るとほぼ同じ頃に目を覚まし粗末な毛布の下から這い出てくる。かつては太陽が昇り切るまで寝てることもままあったのに、今では信じられないほど早起きだ。それもこれも、朝っぱらから鍛錬を欠かさない友人の姿に感化されてのものだ。

軽く顔を洗ってから身だしなみを整えねぐらの外へと向かえば、そこには既に先客がいた。朝霧の中には一心不乱に鉄パイプを振るう見慣れた少年の姿、朝早くから鍛錬にいそしんでいるのはクリストファー・ヴァルゼライドに他ならない。

何回も何回も、子供には重たい鉄パイプを上を持ち上げては下へと振り下ろす、その繰り返しを飽きもせずひたすら行う。もはや数えるのも億劫になるくらいに行っているはずだが、それでもクリスは一度として「飽きた」とも「やめたい」とも言わなかった。

何となく邪魔をするのも悪くて遠めから眺めていたら、向こうの方がこちらに気が付いたらしい。鉄の棒を振るう腕は一切止めず、視線だけこちらに寄越してきた。

「レーテか」

「よお、今日も朝から苦勞さん」

軽く腕を上げて返事してから、クリスのすぐ近くにまで寄る。鍛え上げられた身体は正確無比な振り下ろしを成し遂げており、愚直なまでに繰り返し返された動作が身体に染みついてるのが見て取れる。独力でひたすら修練を積んだ結果として至った境地なのだろう。たぶんクリスが剣を握ったとしてもこの動きだけは間違うまい。

継続は力なりとは有名な言葉だが、すぐ間近に生きた実例が居るのも妙な気分だ。この男を見ていると自分も怠けてはいられない、努力すればどんなことでも可能になるのではと思えてしまう。人に不可能など一つもないと雄弁に語っているかのようで、なんだか身体がウ

ズブズしてくる。

「オレも付き合っつていいかな？」

「いつも通り、好きにすればいい。お前が努力するというなら俺にとつても喜ばしいことだ」

小難しい言い回しだが、ようは別に構わないということだ。クリスは自らが努力の徒だけあつてか、他人の努力に対してはかなり敬意を払う傾向にある。

なので早速いつも隠し持っている錆びたナイフを取り出し、それをひたすら横薙ぎに振るう練習を開始する。型とか動きとかそういう細かい話は何も知らないの、ひたすら早くはや疾くナイフを走らせるよう動きを調整しては身体に覚え込ませるのだ。

「ふっ！ はっ！ はあっ！」

一回一回短い掛け声を上げながらナイフを振るう。最初にこの練習を始めた二か月前はほんの十数回振るう程度で筋肉痛になっていたが、今では慣れたのか百回を超えてもまだ余裕だ。牛歩の歩みで動きも段々とよくなつており、初期と比べて明らかに無駄がなくなつているのが肌で感じ取れる。

努力なんて苦しいだけ、好んでやりたがる人間はそういない。これは変わらず世の真理だろうし、オレだってやはり出来ることなら楽をして過ごしたいものだ。毎日のように腕を疲れさせる鍛錬を続けるなんて昔はきつと出来なかった。

なのでただの凡人でしかないオレは、今でもたまたまに心が折れそうになる。しかしそういうときは、隣で今も黙々と鉄パイプを振るい続ける男の姿を目に焼き付けるのだ。

呆れるほど長い時間、オレよりも密度の濃い鍛錬を続けている者の姿を見てしまえばとても泣き言なんて漏らせない。むしろ自分も頑張ろうと思えるし、そうやって頑張った果てに成果を実感できる瞬間は素直に嬉しいと思えた。

「なあ、クリスは鍛錬するのが楽しいのか？」

ふと気になつてナイフを振るいながら隣へと問いかける。オレはこうして先駆者や努力の楽しみがあるから良いものの、では本人は何

を想ってこうも苦しいことを続けているのか。やはり成果を実感できる瞬間が良いとか、そういう理由だったりするのか。

それを問うと、クリスは「あまり面白い答えではないと思うが」と前置きして答えてくれた。

「辛いと感じたことはないが、楽しいと感じたこともまたないな。必要だからやるし、そもやらなければ俺の気が済まない。だから努力だけは人一倍続けるのだ。俺がひたすら鍛錬を続ける動機などそのようなもの、あまり面白い理由でもあるまい」

「気が済まない……こんな苦しい努力を続けなきゃ呼吸もできないくらいに？」

「そうだ。こんな自分は常人を外れた異常者だという自覚はあるが、しかしその上で俺は止まる気など微塵もない。例えお前がそれを言おうとな」

率直に、まるで深海魚のようだと感じた。

一般人はとてもじゃないが棲めないような努力しんかいの中でしか生きられず、それ以外を知ることすら出来ない。なのに人一倍努力を続けるその姿はあまりに眩い輝きを放ち、自分のような人間を引き寄せては魅了してしまうのだ。チョウチンアンコウさながらと例えるのは少しばかり失礼だろうか。

ともあれ、そんな男こそクリスだとオレは知っている。身体を大事にしてほしいとは思いますが、そのような言葉で止まるはずがないのもまた同様。ならばオレは友人としてその道を応援しつつ、自分もまた光に倣ってより良い明日を目指すのだ。

「悪い、変なこと聞いちゃったな。別にオレは止めようなんて思わないからさ、オレが目指す理想の努力にさせてくれ」

「気にするな、俺は少しも気にしてない」

短く答えたクリスに軽く頷いて、さらにナイフを振るう腕へと意識を戻す。

目指すは最低限の護身くらいは出来るようになること、この底辺にて自力で立脚するための基盤を得るのだ。かつてのように助けられるだけの少女などではいたくない、その想いを胸に今日もちまちまと



歩いていくのだ。

◇ かつては働き口など全く見つからず、金を稼ぐなど夢のまた夢だったが、今はクリスのおかげで最低限の職らしきものにはありつけている。もちろん真つ当な感性を持つ者からすれば信じられないような低賃金なのだろうけど、それでもオレたちスラム育ちにとっては大金も同然だった。

なので少しは真つ当な食事にもありつけるようになったし、余った金はチマチマと貯金に回している。いつかはスラム脱出の軍資金にする予定だが、最近は一とまず情報集めに切り崩しているところだ。「一週間前か……ま、いいや。これ一つください」

粗末な店頭でニュースペーパーを一つ買っていく。情報の鮮度としてはかなり遅れたものだが、そのぶん信じられなくらい安値だ。まあ売っている方もほぼスラムの浮浪者じみた装いだしオレたちとあまり変わらない立場なのだろう。

そうして手に入れたニュースペーパーを読むべくスラム街の適当なところに腰かけた。念のため周囲に人がいないのを確認してから紙面を開く。

「まあ大したことは無さげ、かな？」

ペラペラと薄い紙をめくりながらそう呟いた。一応転生者なオレではあるが、情報を読むのに苦労したことは一度もない。

何故なら、このアドラー帝国において用いられる言語は面白いことに英語と日本語のミックスだからだ。基本は英語が主体のようなのだが所々に平然と漢字を用いた日本語が混じり、純日本人の知識を持つオレに優しい仕様となっている。結果として英語がそう得意でもなかったオレでも問題なく文章を読める訳だ。

しかも会話においても似たような調子であり、そのおかげで慣れてしまえばほぼ日本語同然に意思疎通ができる。悲惨すぎるどん底転生を果たしたオレだが、この点だけは恵まれていたのだろう。

そういう訳で問題なく文字を読めるオレはどうとうこの世界について知識を増やす段階に入った。わざわざ貴重な金を払ってまで購

入している価値は——今のところある。

例えばこれまでに買った紙面から得た知識。それらは総じてオレを驚愕させるのに十分だった。

「西暦二五七八年の大破壊、これによって原因となった日本諸共ユーラシア大陸の東側がごそつと消し飛び、しかも星辰体アストララルなんて未知の物質が世に幅を利かせるようになったと。まさか千年以上も先の地球だったなんてなあ……」

こうして世界に満ちた星辰体アストララルという不思議な粒子のせいで精密機械が軒並み死亡し、代わりに十九世紀じみた技術水準まで後退、発展するようになる。世界を激変させた主原因たる日本は消滅したとか伝えられており、代わりに常に星辰体アストララルを放出し続ける第二太陽アマテラスが生まれたというわけだ。実はアドラー帝国も別世界でなく遙か未来における欧州の一部だったなんて、オレには壮大すぎてピンとこない話である。

しかも不思議なことに、ぶつちやけ戦犯レベルのやらかしをした日本は今や神格化されているらしい。旧ブリテン領に存在するカナタベリー聖教国とやらには『極東黄金教』エルドラド・ジバンクなんていう日本礼賛の教義が国教すらあるようで、機会があれば是非とも訪ねてみたいものだ。おそらく懐かしい風習がたくさん残っているはず。

きっとそのような世界だからあの空に浮かぶ大穴に第二太陽アマテラスなどと名が付き、日本語が当たり前のように言語として生き残っているのだろう。随所に日本の影響らしいものが見て取れるし、どうやら血筋重視らしいアドラー内でも日系たる貴種アマツの血が尊ばれているらしいから相当だ。

「武官の臚おほつ、文官の漣さざなみ、他にも潮うしおに奏かなでに淡あわえにと……確認できただけでも五つはあるんだから相当なもんだ。つか『淡家に待望の娘が誕生』なんてどうでもいいニュース載せんかったの。頼むからもつと国とか世界について書いてくれ」

指折り数えながらどうしても抑えきれない愚痴を零してしまおう。こつちだって仮にも元日本人だというのにどうしてこうも差がつくのか。きつとこの紙面にある『カナエ』とかいう娘も、貴族として何

不自由ない生活を送るのだろう。全くもって羨ましい。

割と不当だという自覚のある悪態を吐きながら文章へと目を走らせるものの、やはり目立って有用な情報はない。所詮日刊紙なんてこんなもの、スラムで生きるオレたちには関係のない世界の話なのだから。シヨーケース越しに綺麗な服を眺めても虚しくなるだけだ。

「はあ……やめやめ、僻ひがんでも悲しくなるっての」

仕方なくニユースペーパーを畳んで重い腰を上げた。有用な情報こそないとはいえ、これはこれで役に立つ。例えば毛布にしてしまおうとか、ねぐらの汚れを拭き取るだとか、いざとなれば燃やして暖を取ることもできる優れモノだ。

加えて肉体的な努力だけでなく、勉強面ですら学ぶことを怠らないクリスにニユースペーパーは良い教材だった。彼も毎度のように時間をかけてじっくり読み解き、着実に文字についてもマスターしている。しかも社会を知ること出来るのだから一石二鳥というものだ。

そのようなことを考えつつ、ねぐらの廃ビルへと向かって歩き出す。何処か遠くの方からはいつものように怒号が聞こえる。たぶん血気盛んな誰かが喧嘩しているのだろう。いつだって腹を空かせてイライラしているのがこの常識なのだから。

そしてうずくまる同年代くらいの子供たちも心なしか少なくなっているように見えた。この最底辺スラムで生きていくのはそう容易いことではないと改めて突きつけられてしまう。悲しいが現実だった。

ならばこうして光を仰ぎ前へ進める自分の、何と恵まれたことか。飢えてはいても心は常に満たされている。おかげで余裕はあるし希望も持てる。善悪の秤を見失うことなく生き抜いているのだから。

「誰かを殺してまで奪わなくても良い、これだけでも大したもんだよ」オレもクリスも人殺しの経験は全くない。けれど青年くらいの年齢になるとそういう後ろめたい犯罪にも手を染めるようになるらしい、きつとオレもいざとなれば躊躇ちゅうちゆしないことだろう。どこであろうと潔癖さを保てるのは一握りの英雄かいぶつだけなのだから。

まあいざとなれば箍くわが外れるのかもしれないが……その時はその時だろう。こんな身にまで堕ちたのだ、今更何を躊躇ちゅうちゆうやら。現状で

やる必要がないから犯罪にまで手を染めていないだけで、危機に陥れば間違はなく良心の枷など吹き飛ばはずだ。

何より、悪徳に対して恒星の<sup>ほむら</sup>ごとき怒りの炎を燃やす男はどうなのか。楽に流れず悪に屈しない一方で、きつと滅ぼすべき悪を見つけた途端に躊躇なく殺す気がするのだ。今はただ、そこまでする必要のある巨悪が彼の前に現れないだけで。

——もし彼が誰かを手に掛けた時、オレはいったいどう感じるのだろうか？

自分でも答えの分からぬ問いを裡へと投げかけながら、段々と小さくなる喧嘩の騒音に背を向けてねぐらへと急ぐのだった。

あの日から、たぶん一年くらいが経ったのだろう。日々を生きるの  
で精一杯だから律儀に数えることだっただけでいいが、定期的に購読  
してるニュースペーパーの日付からしてそれくらいは経ったはずだ。

その間、オレとクリスの日常はほとんど変化してない。ジャンクを  
集めて僅かばかりでも金にし、それで食いつなぐ日々。ねぐらに戻れ  
ば勉強会を開き、そして泥のように眠って明日への体力を取り戻すだ  
けだ。

最低辺からの脱出、なんて夢はまだまだ遠い話だった。クリスはと  
もかくオレは今を生きていくので精一杯、これから先で何をしたいか  
もまるで分からぬ人の形をした塵の一人にすぎない。

それでも、自慢したくなるくらいすごい友人がいるから諦めること  
だけはしない。いつだって不平をこぼさず前を向いて進み続けるク  
リストファー・ヴァルゼライドという男が隣にいるからには腐ること  
などあり得ないのだ。

「よおクリス、また随分と派手に喧嘩したみたいだな」

「心配ない、かすり傷だ」

ジャンクを金に換えて一人ねぐらで待っていたオレのところには、喧  
嘩したらしくかなりボロボロになったクリスが帰ってきた。全身に  
青痣や切り傷といった怪我が散見されるが、クリスの鉄面皮は少しも  
崩れていない。どこも相当痛むだろうに、きつと気合だけで痛みを押  
し殺しているのだろう。

「取り敢えずこっち座れよ、治療してやるからさ」

「恩に着る。いつもすまないな」

「別に良いってことよ」

質の悪い包帯と消毒液を両手に持ち、服を脱いで腰を下ろしたクリ  
スの後ろに立つ。子供ながらによく鍛えられた身体に元男としては  
憧れを禁じ得ない。一切の無駄がない努力だけで鍛え上げた叩き上  
げの結晶だ。それを傷つけることがないよう、慎重に消毒しつつ包帯  
を巻く。かなりシミで痛いだろうにうめき声一つあげないのはいっ

ものことである。

自らの意志をどこまでもどこまでも貫き通し、他者の手など絶対に借りなようなクリスであるが、これで意外と他者に頼るべきときは素直に頼る。いざとなれば独力で道を切り開いてしまう勇者の癖に、平常時はできる事とできない事の分別をしつかり付けているのだ。

とはいえ、ならば誰にでも頼るかといえれば絶対にそんなことはない。基本方針として彼は愚直なまでの努力で不可能を突破する挑戦者だし、そもそも最初から全てを誰かに頼るようならこうも凄まじい男と感じることすらないだろう。

そんな彼が他者の手を借りるとすれば、それはよほどの専門的な知識が必要となる場面か、それなりに心を許している相手だけになるか。間違いなくかなり限定される訳で、ならばこうして包帯を巻いているオレは、

「ま、友人冥利に尽きるってわけだ……そら、終わったぞ。今度は何があったんだよ？ また誰かが襲われてたか？」

「いや、そうではない。数人規模だが、何やら下らぬ諍いで争っている者たちがいてな。俺にはどちらにも道理があるように見えなかったから、両方とも力づくで止めてきた」

「力づくってなあ……毎度の事とはいえよくもまあやるよ」

相変わらずとんでもないことを平然としてくる男である。感情の秤が正しきの方に振り切れているというか、どのような難敵だろうと間違っているなら決して与することも見逃すこともない。悪徳が蔓延るスラムにおいてはあまりに損な生き方であるが、それでも一心不乱に勝利を目指して走り続けられるからクリスは強いのだ。

オレもこの男のように強く生きることが出来れば——夜中に一人そう願ったことは一度だけじゃない。ただ不貞腐れるだけじゃなくて例えば筋トレを試してみたりとか、その辺に落ちていた鉄パイプをひたすら素振りするとか、出来そうなことは勿論してる。

それでもオレは悲しいことに非力な少女でしかなく、努力しても成果はたかが知れている。力の面でクリスの足を引っ張っているのは明白だった。

「なあ、オレもクリスマスみたいにひたすら頑張ればそれだけ強くなれるのかな？」

思わず口を衝いて出た言葉に、彼は神妙な顔をした。肯定はしないが否定もしない、そのような態度だ。

「分からないな。俺には人の才能を見抜く眼力など備わっていないからどうとも言い難い。だが、お前が俺を目指す必要が無いのは確かだ。こんな前にしか進めないような破綻者など做すべきではないのだから」

「……あんま自分のこと卑下すんなよな。それじゃ、そんなお前に憧れているオレはどうなんだよ？」

「俺には分不相応な評価と受け取っておこう。逆に俺の方こそお前には敬意を表しているくらいだ。多くの知識を俺に教えてくれ、このスラムにおいて善悪の道理を見失わなかった。その良さをみすみす捨てる必要がどこにある」

「頼むからそんな真つすぐ言わないでくれよ、照れるつてば」

真摯な想いの込められた実直な言葉がとても嬉しい。だがその評価こそオレには不相応な気がしてならなかった。

彼がオレを評価してくれているのは、言うなれば前世ズルがあるからなのだ。本当の意味でマルガレーテ・ブラウン個人の力とはとても言い難く、クリスのような男から褒められるに値しないと感じてしまう。ならどうすればオレはオレらしく正道を歩めるのだろうか。この男に相応しい自分へとなれるのだろうか。

答えはまだ、とても出そうになかった。互いに相手进行评估してるのにそれを不相応と感じてしまう謙虚いびつな関係、それがオレとクリスの関係に違いないから。

「まあ、オレの良さはさておき。今はお腹も空いたし飯食べようぜ飯！」

「そうだな。腹が減っては出せる力も出ないか」

ひとまず質素な食事を二人並んで食べ始めたのだった。

◇

それから数日経ち、オレは一人スラムの街中を歩いていた。とんだ

無法地帯なスラムでの一人歩きは慎重にするべきだが、今では圧倒的な強さと覇気を持つクリスの唯一の友人という立場もあり、そうそう手を出してくる相手もない。虎の威を借る狐だありがたい話だ。

大抵の場合はクリスと共に過ごし、ジャンクを集める時や彼が喧嘩に巻き込まれたときだけは邪魔にならないよう別行動するのが常なのだが、今日は意図的に一人でいる。たぶん彼はいつも通りジャンク集めを頑張ってるか、自らの鍛錬に全力かだろう。

何故かといえば、ちよつとしたサプライズを用意したいと考えたからだ。

「さーて、何を買おうかなーつと」

しばらく前に判明したのだが、クリスはオレのおよそ一歳上らしい。なのでオレが現在八歳くらいに對して、彼はだいたい九歳程度と予想できる。……九歳児があれだけ達観した思惟を持っているのが信じがたいが、そこは“ヴァルゼライドだから仕方ない”で納得できるのがなんともはや。

ともあれ、それなら誕生日プレゼントでも買って驚かせてみようと考えた次第である。いつが誕生日なのかは本人も分かってないのはご愛敬だが、こういうのは気持ちの問題なのだし別に構いやしないだろう。

まあ、たかがスラムの孤児がなけなしの金で買えるプレゼントなど限られているのだが。それに我欲が異常なまでに薄い彼のことだから変な物を贈っても困るだけだろう。なので無難に普段よりちよつとだけお高い食べ物か、安物のお守り程度にするのがいいだろう。

ちまちまと貯めた金を懐に抱えて、いつものようにスラムの境にまでやって来た。胡散臭い露天商やいつも世話になっている回収店が並ぶそこを、今日は普通の客として歩いていく。

しばらく色んな店を物色しては何にするか決めるのは中々楽しい経験だった。あれは良さげ、これは微妙、そんな風に品々を見定めていくだけなのに飽きがこない。なるほど、女性が良い物好きというのも頷ける話だった。女になってしまった今なら心から頷ける。

結局散々迷った末に、一つ決めて店頭に持っていった。



「すみません、これをくださいな」

「あいよ。金はあるかい？」

「もちろん」

粗末な上着とスカートを着たオレの姿はとても金を持っているようには見えないらしいが、それも懐から金を出したことで問題ないと判断されたようだ。しっかりと包みに入れてもらった品を大事に抱えてその店を後にする。

さて、これを渡したら彼はどのような顔をするだろうか。たぶんあの鉄面皮は少しも揺るがないとは思うが、それでも喜んでもらえれば純粹に嬉しい。もし俺には必要ないと言われようと、意地でも渡すつもりである。

——だからホクホク顔でスラムを歩くオレは、完全に油断しきっていた。

いつもならかつてクリスに助けられた際の教訓もあり、最低限の警戒はいつも怠らないようにしていた。だが今日ばかりはこれから先の事ばかり考えていたせいで足元がお留守になっていたのだ。端的に、あまりにも分かりやすい鴨になっていたのである。

「よし、コイツでいいか」

「——ッ!? なんだおま、むぐっ……!」

そんな呟きが背後から聞こえ、咄嗟に振り向いた時には既に遅く。口元に押し当てられた布に沁み込んだ薬液にやられ、オレの意識はすぐにブラックアウトしてしまったのだ。

◇

目が覚めたとき、最初に覚えたのは危機感と既視感だった。

「……は……?」

崩れかけた壁や床という特徴からして、たぶんスラムのどこかなのは間違いない。ただし手は後ろ手に縛られており、口には猿轡よろしく布を噛まされていた。唯一自由なのは足だけだが、それも床に転がされた状態ではあまり役に立ちそうにない。

どうしてこうなったんだ、確か最後の記憶は変な布を押し当てられたところで——まさか。非常に嫌な予感がするが、先ほど直感的に覚

えた危機感と既視感がそれを裏付ける。この状況が示すのはたぶん一つだけだ。

「よう、お目覚めか」

そして即座に最悪の予感が的中してしまったことを悟る羽目になる。

視界に映ったのは三人の青年たちだ。たぶん歳の頃は十五、六くらい、だがスラムには似つかわしくない仕立ての良い服を着ている。さらに腰には権威付けか知らないが刀剣らしき武装があり、いやでも貴族か上流階級の者だと認識させられてしまう。

そんな青年たちは心底から吐き気のある態度でこちらを見下ろしていた。悪意に満ち満ちたその顔は一年ほど前に知っている。女の尊厳を粉々に打ち砕こうとする男が浮かべる、心底まで下卑た笑みだ。

「へえ、ちいせえけど中々上玉じゃんか。お前、やっぱり見る目あるわ」

「だろ？ もうちよい成長してたらもつと良かったんだけど、そこは仕方ねえ。それにほら、そっちはその方が興奮すんだろ？」

「よく分かってるなあ。アンタには頭が上がりゃんよ」

一見すれば気負いない会話を交わしているだけの仲良し三人組だ。しかし、その裏に秘められた恐ろしい企みを隠そうともしていない。あまりの恐怖に身震いが止まらなかった。

まさか貴族らしき者たちがこんなところまで来て、強姦に走ろうとするなんて。腐っているにも程がある、お前らはどれだけ傲慢なのだと叫びたくてたまらない。けれど塞がれた口から出るのはくぐもつた無様な声だけだ。

「んー！ー！ んー！ー！」

「なに言ってるか分かんねえよ。いつそこれ外してやるか」

「おいおい、騒がれたら面倒だぜ？ スラムの奴でもあんま集まってこられたら処理が困る」

「なあに、どうせ適当な浮浪者にでも罪被せればどうとでもなるさ。こいつだって、用が済めば殺して口封じすれば良いわけだし？」

「んぐッ！　ぐうー！ー！」

マズい、いよいよもってマズい。このままじゃ本当に終わってしまった。せめて抗おうと本能のまま叫んでみるが状況が変わる訳もない。むしろそんなオレの醜態をみて青年たちは大笑いする有様だ。

さらに一人がオレの口を塞ぐ布を外し、もう一人が両足首を掴んできた。成す術もなく足を大きく開かされそうになって——咄嗟に足首を掴む腕に噛みついた。悲鳴と共に反射的に離れた腕を足蹴にしてズルズルと後ろへと逃げていく。

当然すぐに壁に突き当たったが、今はそれでいい。後ろに隠した両手の内、右手の袖に隠していた錆びたナイフを握り込んだ。これがこの場における唯一の希望、手の縄を切って逃げ出すチャンスを窺うのだ。

どうにか目の前の脅威からは逃げたが、しかしそれは十秒後の悪夢を一分後へと先延ばししただけにすぎない。むしろ思わぬ抵抗にあった青年三人は相当頭に来ていると見える。急がなくては。

「くそ、こいつ……！」

「ただで上玉だろうと、所詮はスラムの野良犬ってわけだ。まずは躡してやんねえとダメみたいだな」

「スラム育ちの屑の癖に、俺ら相手に舐めた真似しやがって」

「やつばいな……」

やはり本格的に怒らせてしまったらしく、先ほどまでのふざけたような空気は微塵も感じられない。このままだと殴られ蹴られの袋叩き確定だ。それも絶対に嫌だ。どうにかして逃げなければ。

しかし焦りと錆びのせいかな全然縄が切れてくれない。もどかしいが変な動きをすれば気取られる。必死になって正面を睨みながら後ろでナイフを動かし続けているオレに、つかつかと寄って来る足音が一つ。さつき噛みついた青年だった。

「おらお返しだ、受け取りやがれッ！」

「ガッ——カハッ……！」

鋭い蹴りが思い切り腹に突き刺さった。死ぬほど痛い。涙が出てきた。さらにグリグリとつま先で抉られ呼吸さえまもらない。それ

でもナイフだけは隠し続ける。友人に倣って気合一つのやせ我慢だ。無茶だと思ふな、心一つで貫き通せ。

だってそうだろう、このまま終わるなんて認められるものか。何としても足掻いて見せる。そうだ足掻け、足掻いて足掻いてみつともなく生にしがみつけ。お前はこんなところで終わりたくないのだろう。なら、あの眩い背中に倣ってこの現実を打ち破ってみせなきや仕方ない。

「そうだ、まだだ……ッ！」

眩いた言葉は短く、そして単なる決意の表明に過ぎない。これは言葉一つで状況が一変するような魔法の呪文じゃ断じてないのだ。ご都合主義でピンチを切り抜けるなぞ英雄にのみ許された特権にすぎない。

そんなことは委細承知済み。現実などそんなもの、気合だけで覆せるはずがないと分かっているが、ああしかし——

「まだ、まだ、まだ、まだア……！ オレは、こんなところで——！」  
「なにぶつぶつ呟いてんだ、気色悪い！」

認められるはずがない。誰が死にたいものか。誰が慰み者になりたいものか。心はまだ一つも諦めてはいないのだから、それに見合った全霊を振り絞るのだ。否、振り絞らなければ絶対に生き残ることなどできはしない。

目指すべきはあの背中、誰かのために、<sup>あした</sup>未来のために、雄々しく前へと進む鋼の背中だ。彼のように、気合と根性で不条理を越えてみせろよ。絶無の希望の中から一筋の可能性をつかみ取れ。彼にはそれが出来たのだ、ならば自分にだって可能だと信じて諦めるな。

「ふざけるなよ、死んでたまるか冗談じゃない——ああ、まだだッ！」  
そして一際強く<sup>まだだ</sup>気概と叫んだその途端、まるで凶ったかのように後ろ手を縛る縄が切れた。隠し持っていたナイフでひたすら切っていたのが、ここに来てついに功を奏したのである。

奴らの下卑た目的のおかげで足を縛られていなかったのは幸いだった。もはやオレを戒めるものは何もない。あらゆる束縛を振り切ってオレは自由だった。

腹を抉る青年の足へと躊躇いなくナイフを振りかぶる。寸前で息をのむ音が聞こえたが既に遅い。錆びて刃毀れたナイフでも先端は十分鋭く、あつさりと衣類を破くとふくらはぎへと突き刺さった。ずぶりと肉を貫く感触が手に残る。気持ち悪いはずのそれはしかし、オレに何の感慨ももたらさない。むしろ身体の奥底から湧き出る力に心が奮い立ってそれどころではないのだ。

「なっ——ぎゃああああ！ 痛え、なにしやがんだコイツ!？」

「おい、大丈夫か!？」

「馬鹿、調子乗ってるからそうなんだよ!」

三者三様に慌てる姿を横目に、ナイフを構えながらゆっくりと立ち上がった。

やはり身体が軽い。空気すら別物に感じるくらい旨い。どこまでもどこまでも力が湧いてくる気がするこの不思議な感覚は火事場の馬鹿力とでも言うのだろうか。

この力に日々の鍛錬を組み合わせれば、この絶体絶命も乗り越えられるかもしれない。毎日のようにナイフを握って振り込んだ努力を思い出せ。この場において努力だけがオレを裏切らない唯一絶対のアドバンテージなのだから。

「こいつうー！ よくもー!」

大振りに振るわれた拳を屈んで避け、さらにナイフを一閃。何度も練習した横薙ぎは過たず腹部へと刃を走らせ、さび付いた刃を信じられない膂力で強引に振りぬき肉を数センチほど抉り出す。直後、室内にむせかえるような血臭と痛々しい悲鳴が木霊した。

さらに背後からの蹴りを見るまでもなく転がって回避、一目散にドアへと走る。まるで眠っていた力が目覚めたかのような、それこそ“覚醒”としか言いようのない現象に希望を見出し、ついに取っ手に手を掛けたが。

「捕まえたぞ、クソ餓鬼イ!」

……現実はその甘くないのだ。多少の不意を突いたところで彼我の戦力差はあまりに大きく、混乱から立ち直ってしまえばもう駄目だ。扉の前で首根っこを掴まれたオレの前で、さつき腹を斬りつけた

男が腰の刀剣を抜いた。これぞ本当の絶体絶命である。

首を絞められながら体重の軽い身体を簡単に持ち上げられ、そのままドアに勢いよく叩きつけられた。息を吸う事も吐くこともできず、せめてと振るったナイフも呆気なく叩き落されて床に落ちた。

「散々コケにしてくれやがって！ お前はもう楽に殺してなんかやんねえからな！ 悔やみながら、泣き叫びながら、地獄の底に落ちていけッ！」

これで本当に詰み、所詮はオレ程度では覚醒しようが何だろうが切り抜けられるはずがないという訳だ。青年の肩越しに前を見れば、残る二人も既に復帰している。もはやオレの罠り殺しは確定のようだった。

「ごめん、クリス……」

希望はない。足掻きもない。絶望だけが全てを支配する。

その最中、この人生における最初で最後の友へと向けて短い謝罪の言葉を送ったそのとき――

「――いいや、地獄に堕ちるのはお前たちだ。死ねよ塵共、ここが墓場と知るがいい」

雄々しい宣言と共にいきなり扉が外から開けられ。

ここに、全ての闇を払拭する光の英雄が満を持して参戦した。

クリストファー・ヴァルゼライドという男の本質は、狂おしいほどに悪が許せぬ逸脱者だ。

心のバランスが正しい方向へと振り切れすぎている。スラムという悪の吹き溜まりの生まれでありながら高潔さを微塵も失わず、どんな苦境が相手でも己の力で乗り越える姿は人としていつぞ破綻すらしていることだろう。

それでも、彼が悪を憎み正義を尊ぶ光の属性を有した者なのは間違いない——

故にいざ、ここに幕は開かれた。これより先に悪鬼羅刹がのさばる未来は何処にもない。

断罪者は此処にあり。全ての不吉は吹き飛ばされ、悲劇も慟哭も用はない。今日の涙を明日の笑顔へと変える為、男は意志を滾らせ艱難辛苦へ立ち向かうのだ。

さあ刮目せよ、これより始まるは圧倒的な英雄譚サーガの序章なり。

遙か未来における絶滅闘争テイタノマキアの覇者が、ついにその巨体を起こし立ち上がる時だった。

◇

「——いいや、地獄に墮ちるのはお前たちだ。死ねよ塵共、ここが墓場と知るがいい」

一切の予兆なく扉が開かれたことで、オレを扉に押し付けていた青年がバランスを崩してつんのめった。咄嗟に首を締めていた手も離れたことでオレはどうか拘束を逃れ床に転がる。そしてその先には、この場の誰よりも強大で底知れない怒りを湛えた断罪者ゆうじんの姿があったのだ。

いつだって前を向いてひた走る友の姿など見慣れたはずなのに、今日だけはあまりに桁外れだ。覇気が違う、怒りが違う、意志に至っては暴走寸前といっても良い。あらゆる要素を常とは比較にならないほどに燃え上がらせ、オレを襲った者たちの前に立っていた。

「クリス、なんで……」

「偶然だ。この辺りで仕事をしていたら、何やら見慣れぬ装いをした男たちが居たから様子を窺がっていた。まさかお前が囚われていたとは思わなかったが——」

そこでクリスは鋭い眼光で青年たちを一瞥した。それだけで歳も体格も遥かに優れているはずの彼らがビクリと震えた。ああ、その気持ちはオレにもよく分かるさ。この男の侮蔑を受けて真顔でいられるなんてありえない。だってクリスは、オレたちとはあまりに隔絶しすぎているから。

否応なしに肌で感じてしまうのだ、この人は自分たちなどとは違ふと。

「今日ばかりは大和とやらに感謝してやってもいい。こうしてレーテを救うことができ、滅ぼすべき悪を見つけることが叶ったのだから」熱く猛る宣言と共にクリスはオレを庇うように前に出た。その姿はまるで何処からともなく現れて、ピンチを救ってくれる無敵の英雄ヒーローのよう。まだ危機を脱出してはいないはずなのに、これでもう大丈夫などと無条件に感じてしまう説得力説得力があった。

「ちっ、餓鬼が一人で調子付きやがって。なんだよ、俺たちに勝てるんでも思ってるのか?」

「無論だ。仮に俺がここで倒れば、お前たちは悠々と悪徳に耽るのだろう? そんな未来が予測されるというのに、どうして負けるなどと考える。例えどのような難敵が前に立ち塞がろうとも、決まってる、"勝つ"のは俺だッ!」

「ふざけるなアアアッ!」

あまりにも真つすぐでブレない姿を示すクリスに対する畏怖が勝ったのか、唯一無傷の青年が遮二無二クリスへと向かって躍りかかった。彼我の体格差は明白だし、青年が刀剣を抜いたのに対してクリスは徒手空拳だ。マトモに考えればクリスが勝てる道理がない。

だが、それを容易く覆してこそ鋼の男。狂気と凶器を携え迫りくる青年を前に一歩も動じない。あくまで凧いだ心境のまま、懐からおもむろに何かを取り出すと無駄のない最低限の動作で思い切り投擲してのけた。



「な——づあッ」

「はアッ……！」

折れたネジ  
投擲物は勢いよく頭部へ向かうと見事に直撃、しつかり出鼻をくじかせることに成功する。加えてさらにクリスが一足飛びに肉薄、息もつかせぬ早業で懐へと潜り込むと容赦ない一撃を腹部へと見舞った。めり込んだ拳がキュツと回され、抉られながら無傷だった青年は思わず膝から崩れ落ちた。だがクリスの攻勢はそこで終わらず、ちょうど良い位置まで降りてきた顔面へと流星のような膝蹴りをかましてみせたのだ。

「すい……！」

あまりにも鮮やかで美しい攻防。遙か格上の相手に一步も引かずに攻め立てるクリスの姿に、思わず感嘆の声が漏れ出てしまった。

今の自分ではどう足掻いても到達できない高み。クリスが立っている位階はつまりそこだが、けれど彼とて元から才覚があった訳ではない。最初はオレと同じように弱くてどうしようもなかっただろうに、意志の力を頼りにそれだけの力を身に着けてしまったのである。

クリスは顔面に衝撃を受けノックアウトした青年の手から刀剣を奪うと、それを両手で構えて残る二人に立ち向かう。鍛え上げた筋力は子供ながらに重たい武器を持つことを可能とし、それを何の不自由もなく振るう権利すら有していた。

それでも彼我の根本的な差までは覆せていない。例え傷を負っていようと年上の青年二人は明確な脅威だし、剣への熟練度だってクリスとは比較にならない。さらにたった今、眼前で見せられた戦いぶりとは嚇怒の炎は死に物狂いの突撃を二人にさせるには十分すぎる脅威だった。

先に来たのは脇腹を抉られた方。足にナイフを突き立てられた奴は一拍遅れている。遮二無二刀剣を振るいながら襲い掛かる様は、しかしそれ故の必死さと気迫をも感じられて——これすら当然のようにな上回ってこそそのクリストファー・ヴァルゼライドだった。

「いいや、まだだ。この程度で俺を討ち取れると本気で考えているのか？」

「ぐ、あああああ……！」

猛る気概が宣されたと同時に、腹を抉られた青年の腕が半ばから断ち切られた。刀剣を握ったままの腕がぼとりと地面に落ち、思い出したかのように断面から鮮血が噴き出る。あまりにスプラッタな光景に思わず腰が引けかけて、そんなことよりクリスの雄姿を目に焼き付ける方が優先だと開き直った。

さっきの一瞬に起きたことは言葉にすれば簡単だ。ただ相手が刀剣を振り下ろすよりもなお速く、クリスが刀剣で斬りぬいただけの話。毎日毎日、飽きもせず愚直なまでに鉄パイプで素振りをしていた際の動きが活かされていたのがオレの目にはよく分かった。

だからもう、オレの心を占める感情は一つだけだ。

格好良い、格好良い、格好良い——格好良い格好良い格好良い格好良い！

まるで熱に浮かされた子供のよう。馬鹿みたいだけど本当にそれしか言葉が思いつかないのだ。クリスの放つあまりに眩い光に目を灼かれそうだが構わない、今ここで彼の雄姿を見なければ一生オレは後悔を抱えたままになる。

だってそうだろう。オレが勇気を振り絞ってようやく起こせた方に一つの奇跡を、クリストファー・ヴァルゼライドは息を吸うように行っているのだ。しかも特別なことなんて何もしていない。代償に必要としたのはただ努力、一つも近道や裏技を使わない。正道の努力“だけでこの奇跡を現実起こしているのだ。”

高鳴る鼓動に比例して体温まで上がっていく。心の興奮のせいだろうか、下腹が異様な熱を孕んでいる有様だ。女としての身体と、男としての精神が、共に結託して眼前で紡がれる英雄譚を見逃すなどオレに囁いている。無論、それに逆らう気は微塵も無い。

もはや友が目の前で殺人をしようとしていることすら気にならな。むしろ圧倒的な光が悪を討ち滅ぼすこの状況で、どうして制止する必要があるというのか。オレも光にあてられて多分におかしくなっているのだろうが一向に構わない。

腕を斬りおとされた青年の心臓目指し、煌めく正義の刃が奔る。最

重要器官を容赦も慈悲もなく貫かれ、ついに一人が物言わぬ死体となった。それを間近で見ると羽目になったもう一人の心境は如何なるものか。傷ついた足を引きずって後ろから襲い掛かろうとしていたのに、今度こそ心の底まで恐怖に駆られたように足が止まる。

「どうした？ 自分たちがしようとしていたことを他人にやり返されるのがそんなに怖いのか？」

「うう……あ……」

「情けない、悪に走ってなお覚悟一つ抱けぬ半端者か。ならば屑は屑らしく、惨めに這い蹲って死ぬがいい」

たかが驕った暴漢ごとき、断罪者に敵う道理はなく。

滅ぼすべき敵を前に与える慈悲などクリスの中に一欠片もありはしない。

鋭い一閃に侮蔑の言葉を乗せて、彼は人生における二度目の人殺しを躊躇なく完遂したのである。驚愕と恐怖を映した生首が床に転がり、オレのすぐ傍までやってくる。近くにいられても迷惑なので、ひとまず蹴り飛ばして隅に追いやっておいた。

「立てるか、レーテ？」

「ん……大丈夫、だ」

いつかのように差し伸べられた手を掴み、自分の足で立ち上がる。蹴られた腹と締められた首がまだ痛むが、それもじきに収まることだろう。それに、痛みよりも今しがた焼き付けた奇跡の方がよほど大事だ。

人は意志の力さえ確かならば、後は不断の努力を続けるだけでこうまで不条理を覆せる。いつも一緒に過ごし、あまつさえこうして助けられたのだから間違いない。

ならばこの世に不可能など何処にもなく——オレが憧れる男に少しでも手を届かせることだって、絶対に無理とは言えないのだ。その事実が知れただけでも十分すぎる。

「悪い、また助けられちゃったな……ありがとう」

「礼には及ばん。俺はただ俺のやりたいことを成したまでだ。結果的にお前の身を救うことができたのは喜ばしく思うが」

「クリスらしい言い草だなあ。でも、本当にありがとな」

心からの笑みを浮かべて頭を下げた。それでもクリスの態度は不動であるが、まあ素直に謝意を受けてくれているのは確かだし良しとしよう。

ちょうどそのタイミングで、膝蹴りを喰らいノックアウトしていた最後の一人が身じろぎした。もはや格付けは済みクリスの敵ではないとはいえ、見逃せば多くの禍根が残ることは間違いない。なので油断なく悪の心臓へ引導を渡そうとするクリスを、オレは敢えて引き留めた。

「待ってくれ、クリス。そいつを殺すのは——」

続いた一言を口にするのに、たつぷり十秒は使ってしまった。どうしても倫理観に阻まれて口が動かない。

それでもクリスはオレが続きを言うのを真摯に待ってくれたから、オレも覚悟を決めて先を告げた。

「オレがやる」

「……本当にいいのか？ 殺せばもう、後戻りできなくなるぞ。お前は俺のような破綻者ではないのだから——」

「それでもだ。お前ばつかに任せてられるかよ。オレはオレとして、この一件にケジメを付けたいんだ」

この言葉に嘘はない。そもそも巻き込まれたのはオレの方だ。諸々酷い目に遭ったり遭わせられかけたりしたので、その恨みをここで晴らしておきたいのは当然ある。

だがそれ以上に大きいのは、前に進む覚悟を得たいという一点だ。ここで手を汚せばオレはもう後戻りできず、そして同じく初めて人殺しをしたクリスと同じ条件に立てる。

ならばやるしかあるまい。胸に抱いた憧憬を道導に進むなら、絶対に避けては通れぬ道と確信していた。もう守られるだけの存在はご免なのだ。

クリスはほんの一瞬迷った末、オレに道を譲ってくれた。

「……良いだろう。お前の言葉にも確かに正当性がある。ならば俺はとやかく言わん、好きに本懐を遂げるといい」

「ああ、任せろ」

殺された青年たちの方へと歩み寄り、最初に足を切った男が握る刀剣を手を取った。直刀と酷似した短めの刀身はオレの身体でも扱いやすそうで、それをしっかりと握って仰向けにあえぐ最後の一人を見下ろした。

意識が朦朧としていたらしいそいつは、直刀を握ったオレを見て顔を真っ青にした。最初の立場と正反対に今度は青年が後ろへとズルズル逃げていく。それをゆっくり追いかけ、壁際へと追い詰める。

「あ……待て、待ってくれ……!」

「今更命乞いか、ゲス野郎」

「ほんの出来心だったんだ。ツ、許してくれ! 金ならやる、謝罪だっていくらでもやる、だから——」

「そういうのいいからさ、死んでくれよ」

長ったらしい命乞いなんて聞きたくない。不思議なほどに落ち着いた声音でオレは直刀をそいつの喉に突き立てた。肉を抉り、骨を断ち、頸動脈を蹂躪して、間違いなく致命の一撃を与えたのである。

ついに人を殺してしまった。その事実には手が微かに震えているが、それでも思ったより感慨は湧かない。むしろこの程度なのかと驚かすにはいられないくらい、精神はいつも通り平静なままである。

始まりの刃の感触は、笑えるくらいに軽かった。

「これでひとまず終わり、か……」

「ああ、そうだな」

返り血を浴びながら静かに呟いたオレに、クリスもまた静かに答えてくれたのだった。

◇

良くも悪くも、死んでいった青年たちが選んだ場所はスラムにおいてすら非常に辺鄙な場所だった。

スラムの中でも比較的人の居る付近からは遠く離れ、周囲には人っ子一人いないような場所である。確かにここなら人目も付きにくいし犯罪行為に及ぶのも訳ないだろうが、翻ってこの条件がオレたちにも有利に動いてくれた。

例え最低辺の地であろうと、殺人はやはり忌避されるべき行為だ。それを正当防衛とはいえ三人も殺してしまった以上、事が明るみになる訳にはいかない。しかも青年らは貴族かそれに連なる立場だろうからなおさらである。

だがこの場所ならば死体が早々に見つかることもない。オレたちがここにいたという証拠を可能な限り隠蔽し、ついでに凶器もすべて回収しておけばそれだけで工作は完了する。後はスラムの畜生らしく財布の有り金を少々拝借して放置するだけだ。

「あー……無事にここに帰ってこれたのが奇跡みたいだ……」

すっかり夕陽も沈み月が優しい光を放つ頃、人目を避けながら進んでいたオレとクリスはようやくいつものねぐらへとたどり着いた。見慣れた粗末な毛布や机もどきが愛おしく感じられて仕方ない。人を殺したという後味の悪さは既に欠片も残っていなかった。

ひとまず服を脱いで毛布を体に巻き、そのまま返り血を水でできるだけ洗い流しておく。あまり意味はないだろうが、それでも多少は誤魔化せるようになるはずだ。スラムで喧嘩は日常茶飯事、少しくらい服に血がついていたらって誰も気にしない。

それが終わったら乾かすために隅に置いて、どっかりと腰を下ろしたまま喋らないクリスの対面へと腰かけた。上から吊るされた蠟燭の灯りが、互いの顔を明るく照らしている。

「……どしたよ、さっきから無言だけだ」

「先ほど、俺が殺した者たちのことを考えていた。奴らは確かに紛れもない屑であり、お前の尊厳を奪いつくそうとした悪党だ。しかしだからといって、殺した者のことを忘れてはならないだろう」

「そりゃあそうかもしれないが……」

「勝利は重い、重いのだ。例え俺が嫌悪するような者だろうと、彼らにもまた理想があり、夢があつたはず。どうあれそれを奪ったのが俺の行いだというのなら、それらも背負った上で進まねば話になるまい」

真面目すぎるその言葉に、「本当にクリスらしいよ」と思わず苦笑が出てしまった。

勝ったから正しいし強い。負けたから間違ってるし弱い。そのよ

うな二元論で切り捨てるのではなく、斃した者の想いも背負って未来へと邁進する。究極これが彼の意見であり、背負いたがりと言えはその通りなのだろう。きつとオレも含めた誰も、この男がそこまでする必要は無いと頷くはずだ。

この幼少期からこれだけ達観した考え方を有する辺り、もはや本人も言うように本能に染みついた衝動なのだろう。だが謙虚さは美德になり得るように、自ら斃した敵のことすら背負い進む姿は理屈ではない雄々しさをも感じさせてならない。

やはり当然の理屈として光は素晴らしいのだ。この輝きが無ければ俺は抵抗できなかつたし、きつと諦めてしまっていた。頑張ることの尊さを、意義を、その姿で教えてくれたクリスマスには感謝しかない。

そうだ、だからオレの“誓約”はここに定まった。この男に恥じないような人間になりたい。これまで漠然と目指していた目標をいっそう強固にして、さらなる光を目指して進んでみたいのだ。

「やっばすげえなクリスマスは……そうだ、お前に渡したい物があるんだった」

「俺に？」

この一連の騒動で忘れていたが、そもそも攫われる原因になったのは買い物を終えて上機嫌になっていたからだ。あそこで油断さえしななければこんなことにはならなかつただろうが、全て終わったことなので今は反省だけに留めておこう。

隅で乾かしてるスカートのポケットから包みを取り出して、それを困惑したような様子のクリスマスに手渡し開けるよう促した。

中から出てきたのは本当に安っぽいネックレスだ。お守り代わりのシンプルな指輪に銀のチェーンが通された代物。装身具にしても粗末だが、これがオレに購入できる精一杯だった。

「なんだ、これは？」

「安物だけど誕生日プレゼントのつもり。ただまあ、助けられたお礼にもなるのかな。クリスマスがこういう装飾を好まないのは知ってるけどさ、どうか受け取ってもらえると嬉しい」

欲が薄い彼はきつと興味を持たないだろうし、もしかすれば『俺に

は必要ないものだ』と突っ返されるかもしれない。

けれどしばしネックレスを眺めた後、彼はそれを返すことなく首に付けてくれた。鈍い輝きが胸元で光る。

「それがお前の望みならば是非もあるまい。ありがたく受け取るとしよう」

「ああ、そうしてくれ。そうじゃなきや今日一日のオレが馬鹿みたいになっちまう」

買い物を楽しみ、攫われて、乱暴をされ、助けられ、光の素晴らしさを心に刻んだ。控えめに言っても怒涛の一日だったと思う。

それでも、こうして友情の証たるプレゼントを受け取ってもらえたことが、オレにとってはとても嬉しいことだった。



布を何重にも巻いた直刀を両手で構えた。視線は正面、同じく布を巻いた二刀を雄々しく構えた少年へと相對する。

朝靄の漂う中、緊迫した空気が場を満たす。クリスから放たれる圧力を跳ね除け先に動いたのはオレの方だ。先手を譲れば何もできずに押し切られるのは見えているから。先手必勝とばかりに果敢に切り込んだ。

踏み込んだ勢いのままに直刀を横へと振りぬく。相変わらず非力なオレではこうでもしないと十分な力を乗せられない。理解しているからこそ迷いはないし、逆にクリスの方も承知した上で防ぎにかか

「はあッ——！」

「——ふッ！」

短く息を吐いた。余計な力を入れず、自己流で研鑽した動作をただ無心で行う。横薙ぎの一刀と迎撃の二刀がぶつかり合った。

直後、布越しに鋼と鋼の噛み合う鈍い音が響き渡る。スラムの朽ちたビルの間を残響が駆け抜け、その中でオレとクリスがほんの数秒の鏝迫り合いの体勢へと移行した。拮抗状態に見えるがしかしこれはオレの圧倒的不利だ。即座にバックステップで離脱するも今度はクリスが踏み込んで追撃に入った。

振るわれた二刀の一つを転がるようにして避け、さらに放たれたもう一つの斬撃を片膝立ちの体勢から直刀でどうにか受け流す。真正面から對抗するのではなく力を逃がすのだ。そうでなければ一瞬で腕が痺れ勝負が成り立たない。

「まだまだアッ！」

刃を滑らせながら一気呵成に立ち上がる。クリスの剣を剛とするならオレの剣は疑いようもなく柔だ。その大前提をしっかりと受け止め、力での正面衝突を徹底的に外していく。

一合、二合、三合と得物と得物が重なり合い、その度にこちらの腕に衝撃が伝播する。直撃だけは避けてギリギリの見切りを重ねるも

の、上手く剣を流してなお余りある威力だ。

それはオレの剣術がまだまだ拙いというのもあるが、それ以上にクリスの剛剣が強力すぎるのだ。何物にも揺るがぬ一点突破の一撃は、ごさかしい付け焼刃の術理をいとも容易く突破して憚らない。

では力だけに頼った戦い方かといえれば決してそのようなこともなく、むしろオレなんかより遥かに研鑽の積まれた我流の剣が何度も何度も襲い来る。抜刀術を用いた加速の技はまだ拙いながらもしつかり様になっており、まるで二人の剣士を相手にしているかのような錯覚さえ覚えてしまう。

振るった直刀を軽くないなされ、反撃にクリスの刀剣が駆け抜ける。一瞬の判断で後方に下がってなければ間違いないとやられていた。

ならばとオレなりに練習した突き技を最速の動作で放つ。無茶な体勢だからこそカウンターとしてはこれ以上なく最適な一撃、クリスであろうと即座には見切れないはず。

「——やはりそう来たか。さすがだな」

なのにそれすら彼の中では想定内のようで、刀剣をクロスさせた中心で危なげなく受け止められてしまう。まるで鋏のように直刀を挟みこまれ、強引に手元からもぎ取られていった。

これで戦闘手段は無くなった——わけでもない。武装解除はこちらもまた想定済み、力に逆らうことなく直刀を手放し拳で躍りかかった。不意打ちを狙った乾坤一擲。これが決まらねば勝機はない。

しかし、オレの放った拳は全く危なげなくクリスの掌で受け止められた。パシッ、なんて小気味よい音が出る。いつの間にも刀を手放したのか、それすら分からないレベルで滑らかな防御には脱帽するしかない。

カランカランと二本の刀剣が地に落ちる音が響いた時には、もう勝負の趨勢は決していた。

「勝負あったな」

「……ちえ、そうみたいだな」

あーあと投げやりな声を出しつつ地べたにへたりこんだ。果たしてこれで何連敗だろうか、正直数えるのも億劫なくらいこの模擬戦を

繰り返しているせいで全く分からない。この敗北もある意味で慣れたものだ。

汗ばんだ額を袖で軽く拭いながら落ちた直刀を拾った。初めの頃は少し振るっただけで筋肉痛になっていたというのに、今ではそこそこしっかりと握れているから不思議なものだ。

「あれから一年か……ちよつとは成果も出てきたのかな」

しみじみと噛み締めるように呟いた。手のひらへと視線を落とせば、白い華奢な手には似合わない肉刺まめやタコの潰れた後がたくさん出来てしまっている。女らしくはないが、オレにとっては勲章だ。

一年前、またも暴漢に襲われたオレをクリスが助けてくれた時から、オレの心の中で一つの目的意識が芽生え始めた。いつまでも彼の手で助けられてばかりはいられない、オレだって少しでもクリストファー・ヴァルゼライドのように強くなりたいという想いだ。

そのためにあの暴漢三人から奪った刀剣を拝借し、一応怪我をしづらいように布を巻いたうえでクリスの自主練の対戦相手を務めている。最初の方は付き合ってくれるクリスに申し訳ない程度にしか直刀を振るえなかったのだが、今ではこうしてそれなりの戦い出来るようにはなっていた。

「なあクリス、どうして最後の一撃をああも綺麗に見切れたんだ？

結構不意を突けた自信はあったんだが」

「簡単なことだ」

彼は涼しい顔で二本の刀剣を鞘に収めた。オレより遥かに薄い汗を拭いながら何でもないことのように答える。

「お前ならば必ずそうするだろうと信頼していた。少なくとも俺ならやるし、ならばレーテがやらない理由もないだろう。後はくると予測さえしていれば不意打ちも不意打ちとはならんさ」

「なるほどなあ……そこまで言ってくれるのは嬉しいけど、それで完敗しちや世話ないよ」

常人を遥かに超えた異常なまでの克己心と、それを努力と鍛錬で形に出来るクリスを前にオレはいつまで経っても追いつけない。いや、オレとて間違いなく成長はしているのだろうが、それ以上に向こうの

成長速度が速すぎるのだ。勝利への貪欲さと自らを磨く苦行への厳しきはとてもじゃないがオレ程度には真似できない。

一度だって勝てないのはとても悔しいが、けれど不思議と安心感もある。クリスマスはまだ、オレの憧れた背中中で居てくれる。オレはこいつの背中を追いかけていられるのだと。ちよつと後ろ向きではあるが、そういう崇拜にも似た類の喜びがあるのも確かだった。

「あの時みたいなパワーが出せたらなあ……もうちよいマシに剣も触れるかもしれないに」

「ないものねだりは良くないだろう。結局最後に頼れるのは己の積み上げた努力と心の力だけだからな。土壇場で発揮できる底力があるのは認めるが、最初からそれをアテにしては心に緩みができてしまうぞ」

「分かってる、言ってみただけだよ。全く真面目な奴だな」

拗ねたような口調になってしまったが、ぐうの音も出ない正論だと思う。ピンチの時に不思議な力が宿る、それ自体はあるだろう。オレだって一年前のあの時、普段からは考えられない膂力でナイフを振るったのを鮮明に覚えている。

ただ最初から覚醒そを見越すのは捕らぬ狸の皮算用だし、心に油断を生んでしまう。何より元から鍛えてなければ覚醒したところで意味は薄いのだ。現にオレは次の日、かなりの筋肉痛に見舞われマトモに動けなかったし。毎回あんな目に遭うのもご免被る話である。

だから結論、大事なものはいかにして努力を重ねることができるかだ。辛く苦しかろうと、積み上げた基礎は絶対に裏切らない。それを体現したのが今のクリスマスの実力だし、オレだってある程度はやれるようになった。ならば信じてやり抜くしかないだろう。

「そんなじゃ、今朝はここままでにして——」

「誰だ、そこにいるのは？」

一度ねぐらに戻るか、そう言おうとしたときだった。

クリスマスがまるで誰かいるかのように朝靄の先を見つめている。問いかかけの意味はいつたいたいなんだと感じたところで、不意に足音が聞こえてきた。さらに観念したかのような苦笑まで聞こえてくる。

「へえ、これでも息を殺してたんだがなあ。こんな呆気なく見つかるとは大したもんだ」

現れたのはクリーム色の髪を後ろで一括りにした少年だ。年のころはオレたちとほぼ同じだろう。だがスラム育ちなりにがっしりした体格と生傷の多い風貌がいやでも場数慣れを連想させる。

なんの目的でオレたちの前に現れた、なんて無粋なことは聞く必要ないだろう。ぎらついた眼光は明らかにクリスへと敵意をぶつけている。俺はお前が気に食わない、目がそう語っているのだ。

「それだけ敵意をぶつけられれば嫌でも気が付く。何者だ、貴様？」

「アルバート・ロデオン、まあ平たく言えば徒党を組んでるグループのリーダーでな」

「へえ、リーダーか。そんな奴がわざわざ一人で何の用だよ」

貧民窟<sup>スラム</sup>はたった一人で生きていくことが難しい環境だ。クリスと出会う前のオレだってしばらくすれば何処かの一党に吸収されてただろうし、そうやって寄り集まって生きている子供は数多い。

むしろオレの隣に立つ男こそ異常であり、最も困難な生き方をしてる第一人者に他ならないのだが。そんな彼に憧れていつも一緒にいる辺りオレもやっぱ相当なもの好きだが、それはこの際構わない。

肝心なのは、

「手短に言つてやる。俺はお前が気に入らないんだよ、クリストファー・ヴァルゼライド」

どう見ても不良少年の長としか思えない奴に、目を付けられてしまったことだ。

ロデオンの瞳は明らかにクリスだけに向いている。オレのことなど木っ端も同然と言いたいのだろうか。悔しいがしかし、巨大な光に覆い隠されているのは否定できない。彼に比べればオレは端役もいいところだから。

だから何が気に入らないのかも当然簡単に推測できる訳であり――

「このスラムで俺が潔癖であることが面白くない、そういうことか」

「ああ、そうだよ。俺たちの流儀に染まらず一人だけ正しくありま

すってか？ ふざけてるぜ、見てるだけでムズムズする」

「ならば何とする？ こっで俺と戦うか？ 別に構いはしないが」

「いいや、俺はお前に提案をしに来たんだ。俺たちは今度、縄張りを懸けて別のグループと決闘する。そこに俺の手下として参加しろ、しなきゃ全員で卑怯者だと笑ってやるさ」

傍目からすれば「勝手なこと言ってるな」程度ではあるが、向こうからすれば本気なのだろう。こういう無法地帯においては意外と評判というのも馬鹿にならない。生きていくには舐められたら終わりなのだ。

まあそれにしてもこう、宣戦布告の割に本人が直接来てるんだから律儀というか。自分たちの数でクリスを袋叩きにするのでなく、あくまで手下になって一緒に戦えと提案してくる辺り、意外と根っこから腐っているようにも思えない。

「なあおい、どうしてそんなメンドクサイ真似すんだよ？ もっと直接やりや話は早いだろうに」

「こつちにはこつちの考えつてのがあるんだよ。つか、お前誰だ？ こいつといつも一緒にいる変わり者の話は聞いてたが……なるほど、それがお前か。勿体ねえなあ、俺たちんとこにくりや普通に面倒見てやるのによ」

「おあいにく様、そういうのには散々懲りててな。オレはいつだってクリスの味方だよ」

「はっ、そりやまた頑固なことだ」

呆れたような笑いと共にロデオンは背を向けた。最後に日時と場所だけ告げてから再び朝靄の中へと消えていく。

その背中をひたすら見つめ続けていたクリスの表情は不動にして鋼、青い瞳には不条理に対する並々ならぬ怒りが燃えていた。眼前に現れた新たな敵を前に駆動する心が軋みを上げて回転を始めたのだ。

「ま、聞くまでもないだろうが……どうすんだ？」

「決まっている、奴の軍門に下るなどあり得ん。そもそもからして奴らの目的に正義も何もないだろう。ならば俺の目指すべき『勝利』はただ一つだ」

誰も彼もを相手取り、最も困難な道を進んだ上で勝利する——それがクリスの選ぶ道だから。

卑怯者と罵られるのは我慢ならないし、かといって傘下に入り同じくスラムの流儀に染まるのも許容しない。自らが進む正道を妨げるならば、どのような無茶だろうと心の力で押し通す。つまりはそういうことだろう。

「そのために出来うる限り万全を期しておきたい。斬って捨てるほどの悪ではない以上、俺の武器は生身一つだ。多人数を相手取れるような戦い方を今から考えておく必要がある」

そして一度決めてしまえば必ずやり通す。何があろうと初志を貫いて止まらない。だから必勝を期して対策を練るし、それに対する苦労など知ったことかとはばかりに心の炎へ努力の薪をくべるのだ。

「任せろ、さっきも言ったがオレはお前の味方だよ、クリス。出来ることは今の内からやっておく、当然だから迷いもないさ。手伝えることが有ればなんでも言ってくれ」

「恩に着る」

素直に頭を下げたクリスを見て、オレも少し安堵した。こういう時に頼ってくれる程度には認めて貰えている、それが嬉しくてたまらないのだ。この世界に生まれたマルガレーテ・ブラウンとしての強さを、ようやくちよつとは手に入れることが出来た気がしたから。

——ここであと一言、しっかりと聞いておくべきだったのだ。

◇

それから数日は対多人数相手をどうするか、検証と練習の日々だった。

オレもクリスも別にその道のプロという訳ではない。なので考えることは全て我流で正しいかどうか不明な手さぐり状態だが、元より確証とか勝算が見えない程度で止まるオレたちでもない。底辺に生まれた以上そんな贅沢は無縁だった。

相手がどれくらいの人数で来るのか、どういう風に殴れば効率的か、掴まれた時はどう振り解くか、他にも他にも……色んなパターンをひたすら想定し話し合っては実際の対処を議論し合った。例えこ

れらが間違った方策だったとしても、きつと戦いへ臨む自信につながったのは間違いない。

だから迎えた当日も、オレは特に不安なんて抱いていなかった。当然のようにクリスの戦いについていくつもりだったし、少しでも力になれるよう奮戦する気でいた。

「いいや、お前はここに残れ。この戦いは俺一人で十分だ」  
「……は？」

なのに意気揚々と身体を回して温めているオレへと、クリスはあまりに誠実で優しく、何よりも残酷な言葉を放ってきたのだ。

意味が分からなかった。思わず変な声が口を衝いてでる。俺一人で十分だって？ そんな馬鹿な、相手は徒党を組んだ不良たちだぞ。いやそれよりも、なんでオレを置いて行こうとしているんだコイツは。

「な、なんでだよ……オレだってお前と一緒にたくさん考えて、鍛えて、戦えるようになったじゃないか。それじゃ駄目だったのかよ？」

「確かにお前の努力は誰よりも俺が知っている。共に切磋琢磨した者として誇らしいくらいだ。しかし厳然たる事実として、お前は俺に比すれば弱い。みすみす友を危険に晒してしまうくらいなら、俺一人だけでお釣りがくる」

「それはそうかもしれないけど……でも、そうならないようにオレだって鍛えてきた！ もう二度とお前ばつかに頼らない、そう決めてここまで来たんだぞ！ それが、なんで……」

あまりにも情けなく、そして悔しかった。舞い上がっていた数日前の自分を殴り倒したい。何が頼られているだ、この土壇場でこんな事を言われる奴が、クリスから真に頼られているのだとどうして言える？ あまりにも馬鹿らしくて、何より不甲斐ない自分に腹が立った。

だって彼の言葉もまた事実なのだ。今のオレはクリスよりも遥かに弱いし、過去に二度も助けられている。光の放つ正論はどこまでも正しく真つすぐで、それ故に反駁することを許さない。

それでも友として、「はいそうですか」と認めたくなんてない。その一心で鋼の男の胸倉を掴んで食らいつく。

食い掛った勢いで飛び出したのはいつかオレの贈った粗末な首飾



り、それが寂しい銀の光を放った。

「オレとお前は友達だろ？ だから力になりたいし、現に今日まで二人で協力し合ってた。なのにこんな肝心なところで一人で十分って、ふざけんのも大概にしるよー」

「——そうだな、お前の言う通りだ。ここまでレーテの手を借りておいて、最後の最後に信用しないなどと宣うのは言い訳の余地なく屑の所業だ。自覚はあるさ」

だがな、と灼熱に燃ゆる瞳がオレを射抜く。思わず顔を背けてしまいたいそうになって、寸前で踏みとどまった。ここで目を逸らせばオレはこいつの友達である資格を無くす、そう感じたからだ。

胸倉を掴んでいるこっちの手を優しく、けれど有無を言わさず外してから向き直った。

「友だからこそ、危険に身を晒して欲しくないと願うのも真実だ。奴の目的は俺一人、お前のことは気にしていない。ならば余計な危険に飛び込む必要もないだろう。俺が独力でどうにかすればすべて終わる話だ」

「そんな、簡単な話かよ……クリスが凄いやつだからオレだって力になってやりたいのに。お前にとってはそんな想いすら邪魔だったのか」

「すまん、親友。ここまで手を貸してくれただけでも俺にとっては過大なくらいだ。こんな俺を見限るといふなら構わない、お前にはその権利がある。認められないというなら良いだろう、対等な人間として相手になる。それがせめてもの敬意だ」

どこまでもどこまでも真つすぐで、正しくて、光に溢れた雄々しい宣言。それだけになお純粹で頑だから性質が悪い。

決めたことは絶対により遂げる。間に誰が立ち塞がろうが、それこそ友と認める相手だろうが敬意を表して譲りはしない。この男の美德とも言える精神の強さの裏に潜んだ歪みが今、初めてオレの前に姿を現したのだ。

怒りと悔しさが交ぜになって心を占拠する。冷静に反論することができない。

だから口を衝いて出た言葉も、もはや反射的に言っているようなものだった。

「つたく、馬鹿野郎！ それならもう勝手にしろよ！ オレのことなんか忘れて好きに生きてけば良いだろう！」

「……そうか。ではな、マルガレーテ・ブラウン。お前と共に過ごした時間を俺は決して忘れはしない」

最後までそのような格好良く大馬鹿な言葉を吐き、クリストファー・ヴァルゼライドは去って行った。後に残されたのはオレ一人、このねぐらでたった一人になるなんて何年振りのことだろう。そこそこ狭いはずの空間なのにとても広く感じられてしょうがない。

だからだろうか。あれだけ感情に任せた言葉ばかり生み出した脳みそが、今では急速に冷却されて冷静な思考を作り出す。友人だからと氣遣って自分の戦いに巻き込まない。ああ、確かに立派だろうさ。傍から見ればさぞや立派な人物だろう。その点は間違いないと断言できる。

「だけど、置いてかれる本人の気持ちも考えろよ……！」

お前は弱いから、ついてこれないから、安全なところでどうか息災で居てくれと？ 俺のことなど忘れて幸せに生きてくれればそれで満足だと？ なんだそれは、ふざけるな。勝手にオレのことまで背負ってくれるなよ。

友達だからこそ助けたいし支えたい。確かにオレは弱いだろう。情けなくて不甲斐ない姿も何度だって見せた。それでもこの想いだけは本物だし、例えあの頑固者相手だろうと譲ってやる気は毛頭ない。同じ“勝利”のために、明日を夢見て努力しているのはこちらだって同じなのだから。

であれば心に決めた“誓約”に背くことなんて不可能で——もはやオレの取るべき行動は一つだった。

まず結論から述べてしまえば、どうしてこのような迂遠な手を用いたのか、本人であるアルバート・ロデオンにしても理解は出来ていなかった。

クリストファー・ヴァルゼライドが気に入らない。これはまだ良いだろう。人は往々にして好かない人間と出会ってしまうものだ。今回はたまたまそれがヴァルゼライドであっただけの話であり、故に正面から喧嘩を売る行為自体はおかしくない。

ただ、それなら別に自分たちの対立に巻き込まずとも、最初から数の暴力を頼みに潰してしまえば良いだけ。そっちの方がよほどスラムの流儀に合っているのも間違いない。なのにアルバートは、迂遠な手を取った挙句に“自分たちの軍門に下れ”とまで告げてしまった。しかも、わざわざ向こうが鍛錬をしている朝に訪れてまでだ。

これではまるで――

「いや、馬鹿かよ。そんなことして俺になんの得があるってんだ」

馬鹿げている。とんだ道化で笑い話だ。

アルバートはその思考を一蹴して脳裏の片隅へと追いやり忘れることにした。それだけはあり得ないし認めてはならない。だってそんなことを認めてしまえば、不良集団の大將をやっている自らの名折れになってしまうからだ。

ここは貧民窟<sup>スラム</sup>、あらゆる悪徳こそ生存を許される力の世界である。光は光で美しく尊いものかもしれないが、それだけでは決して生きられない。それをあの真つすぐで曲がらない男へと思いい知らせてやりたいのだ。

そう、だからこの時のアルバート・ロデオンの目には雄々しき男の姿しか映っておらず、彼の友人のことなんてこれっぽっちも考えてはいなかった。所詮は女、たかが一人いた程度で何が出来ようか。むしろ男達の戦いに余計な水を差すなど言いたいくらいだ。

故にハッキリと彼女の存在は無視したし、名前だって興味はない。随分とヴァルゼライドと仲が良いみたいだが、それも奴が無様を晒せば終わりだろう。そんな端役程度にしか思っていないかった。

まさかそれが、一番の大番狂わせを起こすなんて。

この時のアルバートは毛ほども考えてはいなかったのである。

◇

果たして約束の日、スラムにたむろする不良少年たちは開けた一角で一堂に会していた。

年齢的にはおよそ八歳から十二歳程度までが揃った、十人程度の集団で一グループ。それが二つで二十人という大人数がこの場に集っているのだ。

誰も彼も粗末な服を着て、眼光をぎらつかせ、イライラしたような気配を漂わせている。だがそれも当然のことだろう。スラムで満たされるなんてことは一つも無い。いつだって腹を空かせて、世の中を恨んで、徒党を組んでは非行に走る。この縄張り争いだって切っ掛けはもう誰も分からない。ただ別のグループと同じ地域で鉢合わせたから戦う、その程度のものだ。

空気が張り詰める。誰かが動けばその瞬間にでも戦いは始まるだろう。

何か一つ切っ掛けがあれば、すぐにでも二十人が入り乱れる大乱闘となる。分かっているから互いに睨み合ったまま十秒、三十秒、一分と時間が過ぎていき――

「来たか、ヴァルゼライド」

「ああ。俺は逃げも隠れもせん」

足音も高く響かせて、クリストファー・ヴァルゼライドが登場した。恥じることも、臆することもなく堂々とした歩みを止めないヴァルゼライドに、片グループのリーダー格でこの状況を仕組んだ本人たるアルバートが一歩前に出た。やって来た男は両グループのちょうど中間に位置取っている。

「いいぜ、来たのは褒めてやる。つまり俺たちの仲間として戦うってことだな？」

アルバートの問いに敵対グループから野次が飛んだ。ここに来てまさかの助っ人を呼ぶなど、卑怯者、恥を知れなんて罵声が飛んでくる。けれどそんなもの痛くも痒くもない、何故なら自分たちはスラム生まれの屑なのだから。卑怯で上等というものだ。

半ば返答を予想しながらヴァルゼライドの言葉を待つ。彼はゆつくりと左右の人間たちを見てから、勇気と意志を携えた口調で否と返した。

「いいや、それこそまさかだ。俺はお前たちの誰にも与しない」

「……はあ？」

そのあまりに無無茶苦茶な宣言に、思わずアルバートの口から呆れたような声が零れてしまった。彼に限らずこの場の誰もが信じられないというように目を見張る。

つまりなんだ、この男はここに居る全員を相手取るつもりなのだろうか。大人しくアルバートのグループと共に戦えば良いものを、いったい何を好き好んで全員と戦う必要がある。とてもじゃないが利口なやり方ではないし、あまりにも困難な道をどうして躊躇いなく選べるという。

「お前たちは間違っている。ならば俺はお前たちに味方しない。来るがいい、全員まとめて相手をしてやろう」

どこまでも熱く雄々しく厳然と、光の奴隷は駆け抜ける。正しさの方へと振り切れ、自らが悪へと墮ちることを絶対に許さない。故にこの展開もまた分かり切ったことでしかなく――

『う、おおおオオオオッ！』

あまりにも現実が見えていない大言壮語を吐く光の勇者、その気迫に中てられたかのように一人が大声をあげて飛び出した。釣られてさらにもう一人、二人、三人と、決壊した状況はもう止まらない。

まるで怒涛のように敵も味方も入り乱れ、瞬く間に二十と一つが殴り合う混沌へと変わっていく。だがその実態は二十対一という信じられないような大乱戦であったのだ。

◇

誰かが怒号を発し、そして誰かが殴られた。鈍い音が絶え間なく響

き渡り、地面に伸びた不良少年たちの数も今や四人は超えているか。たった十分の間に血で血を洗うような闘争は更なる過激さを深めていた。

「なんだこりや、あり得ねえだろ……」

呟いたアルバートの言葉に嘘はない。それこそ目の前で繰り広げられる乱戦は、暴力と悪徳を是とするスラム育ちといえども見たことも聞いたこともないような滅茶苦茶さだったのだ。

中心で大暴れしているのは言わずもがなヴァルゼライドである。彼はアルバートの仲間を手始めに殴り飛ばしたかと思えば、次の瞬間には敵対グループの一人を殴り倒す。本当に宣言通り、両グループを相手取って真正面から勝利しようとしているのだ。

あり得ない、ふざけてる、なんだこれは——疑問と困惑ばかり胸中を支配するが、けれど現実を起こっている。仮にもグループの長だから今は一歩引いた視点で見れているが、あの中で実際に戦っている者からすれば余計に訳が分からないことだろう。

「アイツ、まさか今日のために対策してきやがったのか……?」

拳を振るうヴァルゼライドの動きはあくまでも最小限だ。出来るだけ振りを小さく抑え、多人数相手に隙を晒さないようにしている。背後はそれこそ目でも付いているかのような警戒網で奇襲を防ぎ、いざ数人で肉薄すれば足払いでたたらを踏まされる有様だ。間違いのない、大多数を相手取るための対抗手段を用意してきたのだ。

どこまでも規格外、常識ではとてもじゃないが計れない。対策したことと、だから不利を覆してまで戦えることは全く別の事象である。殴り、殴られ、殴ってまた殴って、けれど同じくらい全身をこたま殴られて。それでも、血を流しながらもヴァルゼライドは止まらない。正しい勝利をその手に掴むため、どのような不利でも諦めずに戦い続けているのだ。

「そら、どうした——ッ!」

また一人、ヴァルゼライドの拳によって地面へと転がされた。これで五人目、いいや既に六人目か。もうすぐ半分に手が届きそうなほどの勢い、相応に怪我也負っているが止まる素振りはどこにもない。

これはいよいよ自分も参戦しなければ、本当に全滅してしまう——アルバートの背筋に冷たい汗が流れた。素面では信じられないような未来なのに、何故だか“ヴァルゼライドなら出来るだろう”と自然に感じてしまう。

「馬鹿がッ……！　またそれかよ、んなこと考えたら負けを認めてるようなもんだろうが……ッ！」

それはまるで、孤軍奮闘する男をこそ信じているかのようで。

そんな弱気に駆られた自分をどうにか戒め、ついにアルバートも戦線に加入せんと一步を踏み出した。やはり長だけあつて腕つぶしは当然強い。今もなお暴れまわるヴァルゼライドが相手だろうと不足はないはず。

だからやはり、今この時は鋼の男しか眼中に入れてはいなかった。

「ちよつと待てよ、アルバート・ロデオン」

「づお……！　なんだ、お前は——!?」

そのせいで全く意識していなかった背後から思い切り殴られて、勢いのままにアルバートはつんのめつたのである。

どうにか受け身を取って背後を見れば、そこに居たのは見覚えのある少女だ。波打つ豊かな茶髪をうなじで括り、華奢な身体を粗末な服で覆い隠して立っている。ヴァルゼライドに比べれば吹けば飛ぶようにしか見えないが、その夕陽のような瞳に映る情熱だけはあの男とよく似ていた。

「お前じゃない、オレの名前はマルガレーテ・ブラウンだ。友達として、クリスの力になりに来た。そんで——」

粗野な環境に似つかわしくない整った顔立ちの癖に、出てくる言葉はどこまでも男らしい。まるで少女の肉体に少年の心が入り込んでいるようだ。

その奇妙な雰囲気戸惑うアルバートの前で、マルガレーテと名乗った少女は憚ることなく輝く決意を宣言してのけた。

「今からお前を倒す奴でもある。しっかりと覚えとけ！」

◇

深く息を吸い、そしてゆつくりと吐く。喧嘩の中心地に立っている

という緊張感がオレを押し潰しにきているが、それを気合で耐えて毅然と前を向く。大丈夫だ、かつての危機に比べればこれくらいはなんてことない。

先ほどオレが殴り飛ばしたロデオンが背中中の辺りを擦りながら立ち上がった。これまでクリスと共に鍛えてきた拳の一発ではあつたが、やはりオレの貧相な身体では致命打には程遠いようだ。不意打ちをついてようやく多少痛む程度のダメージしか与えられないのだから、力量差は眩暈がするほど明白で。

けれどオレの心の中には、絶望なんて影も形も存在してはいなかった。あるのはただ一つだけ、今も集団の中で燦然と輝く友から学んだ光だけだ。

「二応聞いといてやるが……まさかお前、俺に勝てるでも思っているのか？ そりゃ不可能だ、止めときな」

「誰が負けるつもりで勝負の土俵に乗るかよ。不可能だって？ 寝言はよせよ、人は心一つで不可能を乗り越える事だって十分可能なんだから」

チラリと戦っているクリスの姿を見た。何人もの相手に囲まれてボコボコにされているというのに、痛みを気合と根性で耐えては逆に相手も薙ぎ倒している始末。まさに一騎当千に相応しい彼の姿を見てしまえば“自分には出来ない”と最初から諦めるなんて出来る訳がないだろう。

そう、だから結局こうして戦いの場に赴いてしまった。クリスに言われたことは全部理解しているし、事実だとも認めているが——それがどうした？ 彼が自らの道を貫き通すように、オレだってやりたいことを貫徹させるのだ。そうでなければ彼の友人として相応しいはずもない。友として大切だから守ってくれるのは光栄だし嬉しいが、それが絶対に正しいとは限らないのだから。

「だからオレはお前と戦う。友達一人に全部の苦勞を押し付けて、それで自分は幸せだって？ ——ふざけるなよ」

「ちツ……なんだか知らねえが、俺と戦うってんなら容赦しねえぞ。ちようどこつちもイラついてんだ、憂さ晴らしくらいはさせてくれ



よ」

いい加減にロデオンの方も我慢の限界らしい。腕を回してこちらを敵だと認識したようだ。

喧嘩慣れしてるのは向こうだろう。単純な体格差や力の違いも大きい。ここでオレがこの男に勝てる道理なんて普通に考えれば一つも無いのだろうが……

「やってやるよ。積み重ねた努力は裏切らない、そうだろう？ クリス」  
眩きながらも一度、ほんの一瞬だけ戦うクリスへと視線をやった。ちょうどその時、彼もまたこちらを見た。

一秒にも満たない刹那の間、互いの視線が交錯して。

——いいだろう、ならばやってみろ。

怒りと呆れのない交ぜになったような瞳の奥に、そんな言葉が聞こえたような気がしたから。

「はああああアアッ！」

拳を構えてはるか格上の相手に無謀な突撃を開始した。

向こうもいよいよこちらが本気と悟ったのか、油断なく拳を構えて迎撃の体勢を取った。おそらくこちらの一撃を耐えた上でカウンターを繰り出すつもりだろう。先ほどの不意打ちでオレの拳の威力はおおよそ割れてしまっている。

だからロデオンまで残り二歩というところで、体格差を活かして逆に足元へと潜り込むように身体を屈めた。あちらからすればいきなりオレの身体が沈んだように見えただろう。鋭く息を呑む音と同時に、こちらを振り払うように足が動く。

だが遅い。蹴りをすり抜けたこちらの拳が相手のガードを抜けて太ももへと突き刺さる。その状態から一気にすれ違って背後へと抜けた。ロデオンは太ももへの痛みで一瞬反応が遅れているから振り返るだけで精いっぱいだ。

「このやろう……ッ!？」

「どうよ、オレだって少しはやるだろ!？」

さらに振り向いたところを拳で躊躇なく殴る。腹へと入った一撃に思わず不良のリーダー格もうめいた。いくらオレの殴打が弱かる

うと鳩尾に入れてしまえば無視できない苦痛となる。

それでも飛んでくる反撃は男の意地か。痛みを堪えながら飛んできた拳がオレのガードを上から貫通して痛みを与えてくる。咄嗟に後ろに下がって威力を殺したものの、やはり力の差は圧倒的。マトモに受けてしまえば即座に勝負が決してもなんら可笑しなことではないだろう。

「おらアツー」

「ごんのオー」

向こうは受け止めてからの反撃が許されるが、こちらは当然回避し続ける必要がある。理由はもちろん、そうせねばならぬから。受け止めることすらほんの数回で抑えなければ、ジワジワと削り倒されるのがオチである。

それから互いに拳と脚を振りぬき譲らない。殴って、見切って、受け止められて、どうにか受け流して、今度は蹴って、その繰り返しだ。だが、勝負は成り立っている。クリスと毎朝のように特訓を行っていたおかげだ。故にオレは今こうしてギリギリで対等の土俵に立っている、この事実が誇らしくてたまらないから、さらに自分を鼓舞するのだ。

殴り、蹴って、殴られ、蹴られ。互いにどんどんダメージが蓄積してくるが、それでも意地で立っては戦い続ける。その果てに、僅かばかり全ての激突が止まった均衡状態が出来上がった。

まるで最初の状態のように凪いだ状況の中で、心底不思議そうに口デオンがこちらを見据えていた。

「なあおい、なんでお前はそんなに戦えるんだよ。女で、年下で、場数だって俺の方が遥かに上だ。なのにどうして、一步も引かずに戦えてるんだ……!?!」

「んなこと、理由なんざ決まってるんだろ。アイツが居てくれたから、それだけだ」

“アイツ”と言いながら、今も向こうで戦っているクリスを目線で示した。もう残りは片手で足りる程度しか残っておらず、満身創痍なクリスはそれでも止まることを知らずに戦い続けている。この調子

でいけばそう遠くない内にオレたちを除いた全員があそこで倒れ伏すことになるのだろう。

だからこそ、オレはこいつをここで倒さなくてはならない。だってそうでないと、傷ついたクリスがコイツまでも相手しなければならなくなるのだ。きつとそれでも、疑うまでもなく彼は“勝利”するだろう。それこそ平然とした顔で、ボロボロになりながらなお。

でも、勝てるからその過程を無視しても良い理由はないのだ。クリスはあまりにも雄々しくて格好良いから、その道を止めようとする気はない。そもそも簡単に止まってくれる奴ではない。

けれど、一緒に並び立って少しでも負担を軽くしてやることは出来るはずだ。一人じゃなく、二人で協力する。こちらの方がより大きな力になるのは自然の道理なのだから。

そんな想いを籠めた言葉に、ロデオンはといえば意外なくらい穏やかだった。まるで何かを理解しかけているような、認めようとしているかのような。自らの中で一つの結論を導き出そうとしているかのような。

「……一つ聞かせてくれ。クリストファー・ヴァルゼライドという男は、お前がそんなにも凄いと思えるような男なのか？」

「当然だ、アイツは眩しいくらい輝いている奴だからな。オレたちなんかとは違うとも思っちゃまうけど、それでも一緒に並び立ってやりたい魅力がある。知ってるか？ 当たり前前のことを当たり前前に続けるって実は滅茶苦茶難しいことなんだぞ」

「正しいことは、辛いことでもある……か。そうだな、そりやそうだと。こんな掃き溜めで生きてりや嫌でも分かる」

不良少年は不良少年なりに、やはり世の不条理やどうしようもない痛みを知っているのだろうか。嘆息するように息を吐いて、だからこそ負けられないとばかりに再び拳を構えてみせた。

「だから俺は、お前らが気に食わないんだ。世の中なんてキツイことだらけ、他の誰より俺らスラム育ちは分かっている。なのになんで、どうしてお前たちはそうまで真つすぐ進めるんだよ。こんな所で過ごしてるんだ、俺らみたいに悪に走ったって、誰も責めはしないだろ

うに——俺たちは、そうはなれなかったのに」

最後にポツリと零れた言葉こそ彼の本音なのかもしれない。けれどその意味を問う前に、彼の雰囲気は豹変した。

次の一撃ですべて終わらせる、そう言外に伝えてきたから、オレも持ち得る全力で応えるまでである。どうにかして奴の顔面か腹に拳を叩きこんで戦闘不能にしなければ、俺にとっての勝利はない。

「これで終わりだ」

「やってみろよ」

売り言葉に買い言葉を叩きつけ、共に雄叫びをあげながら最後の呐喊を開始した。

拳を振り上げた。向こうの方がリーチが長い。だから出来るだけ速く懐に潜り込む。

小柄さを活かしてスルリと超近接戦オメガファイトの距離に入った。これで決める——覚悟を決めた直後、それを読んでいたロデオンが膝蹴りを繰り出した。強烈な一撃はオレの腹へと過たずヒットして、

「いや、お前も終わりだッ！」

痛みで叫びだしそうな身体を気合一つで抑えることで、どうにか渾身の一撃を奴の腹へと見舞うことに成功したのである。

「う、ぐうう……」

「いつ、てえ……」

互いにうめきながら同時に地面へと倒れ伏した。さすがにもう立ち上がれそうにない。かなり良い一撃を貰ってしまったし、蓄積されたダメージと合わせて完全にトドメとなっていた。

さらにクリスタたちの方も決着はついていたらしく、やはり全員が同じように地面へと倒れて伸びている。唯一血塗れのクリスタだけは膝を付いてどうにか堪えているようだが、いくら意志力の大暴走があろうと身体の方は限界だろう。

つまりはこれで二十二人を巻き込んだ大乱闘は幕を閉じたという訳だ。例外なく全員が倒れ伏す痛み分けな結果には乾いた笑いしか出てこない。

「ちつくしょう……まさかこんなひよろい女に相討ちされるとはな

……」

その中でロデオオンが悔しそうに笑っていた。言ってることは小馬鹿にしているような口ぶりだが、口調はいっそ爽やかなくらい清々しい。負の感情を何も感じさせない素直な感想である。

「鍛え方が違うからな、鍛え方が。つーかなんだよ……そんなに悔しいか？」

「そりゃ悔しいけどよ……ちくししよう、こりゃ認めるしかないみたいだな。クリストファー・ヴァルゼライドに、マルガレーテ・ブラウン。お前たちは大した奴らだよ、すげえ二人だ」

「き、急にんなこと言われても照れるっての……」

気恥ずかしさを隠すようにそっぽを向いた。さつきまで殴り合っていた相手からいきなりこんな事を言われても、光栄だがどうにも調子が狂ってしまう。

そんなオレの様子にやはりロデオオンは苦笑したように唇を歪めた。それから純粹な瞳でこちらを見ながら一度口ごもり、さらに続きを口にする。

「なあ、俺も今からお前たちみたいになれるのかな？ 正しくて、強くて、真つすぐで、正直で……そんなすごい奴になれるのか？」

「それは——」  
「無論、なれるさ」

オレの代わりに答えてくれたのは、やはり威風堂々としたクリスの方だった。傷だらけの身体を引きずりながらこちらへとやって来ている。あの状態で動くなんて、もはや気力と意地の段階だろうによくやるものだ。

力強くロデオオンの言葉を肯定しながら近くまで来たクリスは、そのままオレの隣にどっしりと腰を下ろした。さすがに限界が近いのか肩で息をしながら、それでも鋼の有り様は少しも崩れていない。

「人を左右する要因とは、結局のところ心の在り方一つだけだろう。例え悪に走ろうと、後からやり直す資格自体は誰にでもある。ましてお前は俺が滅ぼすべき、唾棄するような悪でもない。いくらでも再起は可能だ」

「は、はははっ……そりやまたなんとも、ありがたいお墨付きなこと  
で」

安心したような言葉を最後に、ロデオンは完全に気絶してしまっ  
た。

これで後に残ったのはオレとクリスだけ。結果だけ見ればとんで  
もない大逆転勝利を収めたのだろうか……

「えっと、その……」

「……まったく、お前という奴は」

取り敢えず喧嘩別れ同然のことをした目の前の親友と、腹を割って  
話をする必要があるそうだった。あれだけ感情的に振舞った後だと  
すぐく気まずいけれど、逃げる訳にはいかないだろう……うん。

## Chapter 8 諍い果てての契り／New Comer

不良グループ二つとオレたちを巻き込んだ大乱闘は、結局原因となったグループが和解することで事なきを得た。

意外かもしれないが、クリスという圧倒的な相手を前に一致団結して臨んだのが大きいのだろう。奇妙な、けれど強固な仲間意識を芽生えさせた彼らは一人を除いて合併することにし、十九人というさらに大きな規模のグループとなって存続していくことになる。

彼らはスラムを根城にする悪童たちであり、決してその存在は褒められないことだろう。それでも生きていくためには徒党を組まなきゃ仕方ないのは事実だし、オレもそれは否定できない。だからせめて、どれだけ難しかろうと彼らがちよつとしたヤンチャ程度の犯罪で留まってくれることを祈るばかりだ。

彼らの顛末についてはこんなところだろう。綺麗ごとかもしれないが少しでも正しく生きていける事を祈っているし、僅かに交わった道はもう二度と交わることもないはずだ。その先についてオレたちが関与できることは一つもない。

その代わりといつては何だが、こちらもちちらであの後は大変だった。

まず思い出すのは、大乱闘の後で全員が倒れ伏した後でクリスとした会話だ。喧嘩別れした直後に友達面して乱入してきたんだから、その気まずさといえばなかつたものである――

◇ 「……まったく、お前という奴は」

オレとクリスで二人して座り込んで身体を休める。スラムの路地裏に吹いた風が喧騒の熱を吹き飛ばし、火照った身体に心地よく感じられた。

その中で、友人はやはり呆れたような眩きを漏らしながらオレへと向き直ってきた。

「あのようなことを言っておきながら、まさか加勢に来るとはな。はつきり言えば意外だった」

「……悪かったよ、あの時はついカツとなった。冷静になってみれば、とんだ馬鹿言ったなってアホらしくなったさ」

苦笑しながら頬を掻く。あの時は本当に、我がことながら完全に冷静さを失っていた。落ち着いて考えてみれば短絡的にも程がある絶交宣言である、まるで子供だと笑ってしまうくらいだ。

けれど結局オレはこの道を選んでしまった。確かに全部クリスに任せていれば、きつといつものねぐらで傷つくことなくゴロゴロしたりも出来たのだろう。こんなにも全身を怪我で痛めさせる必要はなかったはず。

だが、それでも——この傷こそオレには何より誇らしい勲章だった。

「で、どうよう？ オレだって少しはやるだろ？ 確かにオレはクリスに比べりゃ馬鹿みたく弱っちいさ。二十人も相手取って勝ちましたお前に対して、オレは一人と相打ちが精いっぱいだ」

少なくとも今はこれが限界だった。たった一人に対して全力を出して、それでもこの結果がオレの限度だ。

性別とか体格とか、言い訳しようと思えばきつとそこそこ要因はあるだろう。それは分かっているが、けれどクリスの前でそんな懦弱を吐く気は一つもない。そんなことをしてもただの現実逃避でしかないのだから。

だから認めよう、オレはまだまだ弱いと。まずは現実としつかり向き合って事実をあるがままに認める。その上で目を逸らさずにどう努力をしていくのか、これこそが最も大切なことだと思うから。

「それでも、ちよつとはお前の力になれたと思う。だってほら、オレたちは友達だろう？ なら助け合いなんて当たり前のことじゃないか」「助け合い、か……」

まるで初めてそんな言葉を知ったと言わんばかりの表情で、クリスががしみじみと反芻した。その意味を推し量るように難しい顔をして黙り込む。



本当なら、例えクリスマスであろうと決して理解しがたい話ではないのだ。これまでだって互いに知識を持ち寄ったり、助け合ったりして生きてきた。そういう意味で彼が真から協力の重要性を理解できてないとは思わない。

けれど今回の一件で知ったように、いざという時の彼は協力関係も何もかもを振り切って一人で突き進んでしまうのだ。最終的にはたった一人の力だけで、精神力を武器にあらゆる無理無茶無謀を真顔で踏み越え乗り越える。そこに“誰かの力をアテにする”という人として当然の感情は微塵も存在しない。

——そんな凄くて雄々<sup>かな</sup>しい男だから、オレは心から協力したいと願うのだ。

「オレはクリスの友達だから力になりたい。まだまだ弱くてどうしようもないけどさ、お前と並び立てる立派な奴になりたいんだ。ダメ……かな？」

「いいや、そのようなことはない。それはむしろ人として最も誇らしい姿の一つだろう。俺のような破綻者には絶対に不可能な在り方だ、素直に尊敬すら覚える」

だが、と静謐に言葉は続く。

「お前も俺というどうしようもない男の本質を知ったはずだ。つまるところ、本心から人を信じられない塵屑が俺のことなのだろう。例えば友であろうと目指すべき未来への障害になるなら躊躇なく切り捨ててしまうし、自覚があっても止められん」

今回でいえばオレを共に連れていけば負ける可能性があったし、それではクリスの目指す“勝利”からは遠ざかってしまう。よって躊躇なくオレを置いて一人で進む決断を下して、事実ほぼその通りになりかけた。

正しいことは痛いことで、その痛いことを迷いなく実行できてしまう天然の英雄<sup>バケモノ</sup>。オブラートに包むことなく言うならきつとこれだろう。確かに本人の申告通りに破綻しているかもしれない。

「こんな俺を今も友だと言ってくれるお前には頭が上がらない、感謝すらしているとも。だからこそ、もう俺のような人間とは関わるな。

「関わればいずれ訪れる未来で、俺はお前を——」

「なら敢えて言ってやるよ。それがどうした？」

「続くクリスの言葉を一刀両断して、オレはハッキリと告げてやった。その程度がいったいどうした、と。」

彼にしては珍しい驚いたような困惑の表情が表に出た。いつもの鉄面皮をちよつとでも揺らがせたことに微かな達成感も覚えつつ、さらに続けて抱いた決意を此処に表明していく。

「オレが弱くて邪魔ならもつと強くなればいいだけで、信じられないなら信じられるような人間になればいいだけだろう。それでもオレがクリスの道の邪魔になって、対立することがあれば——その時はまあ有用性とかを説得してみたり、戦って証明したり、色々やってみるさ。その意義はきつとたくさんあると信じてる」

「……そこまでしてお前は、レーテは、俺のような人間の友で居たいと言うのか？ お前にとってみれば辛く苦しい道のりしかないはずだというのに」

「なんだよ、悪いか？ こんな凄い奴と友達やりたいって言うんだから、それくらい覚悟しなきゃしょうがないだろ。これがオレにとっての誓約だよ」

「こんな事を本人の目の前で宣言するのはやっぱり照れ臭い話だが、これがオレにとっての偽らざる本音であり誓約なのだ。破綻していったとしてもその在り方にはどうしようもなく憧れるし、格好良いと思う心に嘘は微塵も存在しない。」

「それで、改めて聞くがどうだったよ？ オレだって少しはやれるって示せたはずだと思うけど」

「そうだな——見事な戦いぶりだったとも。今回の件に関しては俺の方が節穴だったらしい、その非礼を詫びよう」

「真摯に頭を下げたクリスの姿を見て、ようやくオレも肩の荷が下りた思いだ。」

「やつとここまで来れた、その感慨に胸が溢れてしょうがない。」

「しかし、どうか忘れないでくれ。俺の本質は狂おしい程に悪が許せず、その為ならどのような困難にも足を止められない男だ。先ほども

言ったがこれから先で——」

「決定的な破綻があるかもしれない、だろ？ 何度も言わせんな、分かっているよそんなこと。そうなったらそうなったで手を尽くすさ。決意を宿した心があればどんな艱難辛苦も乗り越えられる、他ならぬクリスから教わったからな」

未来を指して脇目も振らずひた走る、そんな在り方をオレは知ることができたのだ。ならば後は心の強さと尺度の問題であり、輝く決意を胸に秘めれば道は必ず拓けるのだと信じている。

光は光でどうしようもなく素晴らしいのだ。その意味を噛み締めながら、オレは痛む手のひらをクリスへと差し出した。

「じゃあさ、ここらでしっかり仲直りでもしとこうと思うんだ。まあほとんどオレの方が一方的に喚いただけなのが恥ずかしいけれど……」

「どうかな？ なんて躊躇いがちに伸ばした右手を、クリスの無骨な手のひらが握ってくれた。無言のままに行われた握手ではあるけれど、万の言葉よりも雄弁に互いの気持ち伝えてくれる。これでやつと仲直り、今までよりもなお強固な友情の結びつきが出来たのだ。」

◇

そのような経緯いきざつがあり、たった一日にも満たない決裂は無事に元の鞘へと戻ってくれた。これでほっと一安心である。

むしろそのおかげで更に互いの本音や本質をさらけ出せたとも言えるし、雨降って地固まるというのはこういう事だろうか。友人と喧嘩なんてしても悲しくなるばかりだが、こうしてぶつかり合うのもまた重要なことだと思えたし良しとしよう。

加えて、良いことはさらにもう一つある。クリスが壊滅させた二つのグループは合併を果たした訳だが、その中でただ一人だけそこから抜け出た者がいた。不良少年たちから惜しまれつつもこちら側にやって来た彼こそ、クリスとオレに喧嘩を売ってきた張本人だ。すなわち——

「どうしたんだレーテ、そんなところでボケつとして」

「別に何でもねえよ、アル。ちよつと黄昏てただけだ」

いつもの廃ビルのねぐらから外を眺めてたオレに声をかけてきたのは、クリーム色の髪が特徴的な男子だ。もつといえ、ついしぼらく前に殴り合いをした相手でもある。

そう、かつて不良少年たちの長を張っていたアルバート・ロデオンが、オレたちの新たな友人となったのだ。

話は今からおよそ二週間前に遡る。あの大乱闘の直後、オレとクリスはいつものねぐらに戻って休息を取っていたのだが、次の日そこに唐突に現れたのがロデオンだった。いきなりやって来たから何事かと思つて驚いたが、彼はさらに驚くようなことを恥ずかしそうに告げたのだ。

——もしそつちさえ良ければ、俺と友人になつてくれないか？

まさかそんな事を言われるとは思わなかったし、わざわざリーダーをしていたグループから抜けてまでオレたちの所に来るとは信じられなかった。だから驚いたまま理由を問えば、彼は正直にその本心を明かしてくれたのだ。

「今まで俺は真面目に生きることを諦めてた。こんな掃き溜めで真つ当に生きるなんて絶対に不可能で、だから何をしてでも生きていこうと考えてた」

「なら、やつぱり向こうのグループに居た方が良かったんじゃないのか？ オレたちはたった二人だけ、生きやすいかどうかで言えばそんなことは無いと思うけど」

「言つたら、今までは諦めてたつて」

きつぱりと言い切るロデオンはいつそ清々しい笑みを浮かべてすらいた。本当に彼の中で何かが変わつたというか、あのぎらついた瞳をしていた少年と同一人物とは思えないような変貌ぶりである。

そのせいで自分たちも彼の言葉を疑うつもりは微塵も起きなかつた。真摯に語られる言葉に耳を傾けて、その本心を聴く姿勢になつている。

「自分でもなんでお前たちに喧嘩を売つたのか、本心ではよく分かつてなかつたが……昨日やつと理解できた。俺はたぶん、お前たちが羨

ましかったんだ。そんな風に正直に生きられるお前たちが妬ましく  
て、羨ましくて、凄くて……子供みたく意地になっちまった」

だから、と彼は吹っ切れたように笑ってみせた。

「今なら素直になれる。お前たちみたいな凄い奴と友達になってみた  
いんだ。勝手に巻き込んでおいて都合のいい言い分だつて自覚はあ  
るが……ダメだろうか？」

「いいや、オレは全然ダメじゃないな」

自信なさげに付けたされた言葉に思わずこちらまで笑みが浮かん  
だ。昨日とはまるつきり違う姿と、なんだかんだで誠実な態度にすつ  
かり絆されてしまっている。

本当の意味で暴力には頼らなかつたりだとか、律儀にも朝っぱらに  
一人でやって来てみたりだとか、根っこから屑かと言えばそれは違  
うだろうと感じていたが……こうして本心を聞いてみれば全て納得で  
きる事だった。

「アレだよアレ、喧嘩したから仲良くなるなんてよくあることだろ。  
いつまでもウジウジ言う気はないし、こうして素直な本心をくれたな  
らそれに応えたいと思うんだ。クリスマスはどう思う？」

「そうだな……喧嘩をして、乗り越えた後で芽生える友情こころもあるとい  
うのは俺もよく学んだ。むしろお前の気概は人として喜ぶべきこと  
だろう。因縁はあるが、それをいつまでも気にする小心者になつたつ  
もりもないさ」

「なら……」

一転して嬉しそうな顔となったロデオンに対して、オレとクリスマスは  
しっかりと頷いた。

「新しい友人を歓迎しようじゃないか、盛大になー！」

「……あまり羽目を外しすぎるのもどうかとは思うがな」

——なんてやり取りがあつて、晴れてアルバート・ロデオンがオレ  
たちの友人として迎え入れられたのである。

「黄昏てたってなんだよ、お前はそんな殊勝な女じゃねえだろうよ。  
せめて口調変えてから出直せつての」

「うっせえ、オレだつてたまにはこう、物思いに耽つてたい時もあるん

だつての」

軽口を叩き合いながら窓の外から視線を外した。スラムの退廃的な建物へしと降りしきる雨を眺めているのは好きだが、あまりそばかり見ていると心が寂しくなってしまう。人間もつと光がある方が心に余裕も出来るだろう、うん。

新しい友人が増えてから、オレが寢床にしてる廃ビルはさらに賑やかになってきた。基本的に三人で一緒に暮らして、どうにか金を稼いで食いつなぎ、そして余裕が出来れば鍛錬したり勉強したり。ライフワークは何も変わらないが、一人増えただけでも楽しさは段違いである。

いつの間にか新しい友人のこともロデオンなんて他人行儀な呼び名からアルという愛称になり始め、彼のほうもまたオレのことをクリスと同じくレーテと呼ぶようになっていた。やっぱり根は悪い奴じゃなかったおかげで打ち解けるのも随分と早かったのだ。

「つーか忘れてた、この言葉の意味教えてくれよ？ 政治関連の話になると話題が小難しくっていけねえや。こりやどういう意味だ？」  
「あー、そいつは付度って読むんだわ。意味はつと——」

こうやってオレが買ってきたニユースペーパー相手に悪戦苦闘しながら読んでるアルの姿は大変そうだが、一方で充実感も感じているのだろう。お前らみたく真つすぐ生きてみたい、そんな事を言っただけに必死で文字を追いかける姿もどこか楽しそうだ。

そしてクリスの方はといえば、隅の方で相も変わらず刀剣の素振りを続けていた。さつきまではオレも一緒になってやっていたのだが、さすがに腕が疲れたので休憩中である。普段から限界突破なんてしてたら、簡単に身体が壊れてしまうので是非も無い。

「はあー、こんな覚えることだらけでよくやれるなおい。やっぱり努力って辛いなあ」

「んな泣き言漏らしているのか？ クリスなら出来たぞ？ なら頑張りなきなな！」

「分かっているっての！ まったく鬼教官だなお前は……」

ともあれ、今この瞬間が紛れもなく幸福で楽しいのは事実だった。

まだまだスラムという辛い環境を抜け出せてはいないが、その代わり友との出会いに恵まれているのは間違いない。肉体的には満たされずとも、心の方では間違いなく満たされているのだ。

オレも立ち止まっては行られない。休憩も終わつたし、アルの質問に答え次第また素振りの練習に戻るとしよう。一秒でも早く振りぬいて、握り続けられるようにする。そんな単純なことからでいいから、ひたすら継続して努力を続けるのだ。

——光の頑固者に追いつくためには、やっぱり自分も頑固者にならなきゃ仕方がないのだから。

Chapter 9 “勝利”とは／Childhood's End

アルバート・ロデオオンが友人となつてからは、光陰矢の如しと言わんばかりの速さで目まぐるしく毎日が過ぎていったと思う。貧民窟<sup>スラム</sup>という最低の環境でも住めば都なのか、慣れてしまえば友人たちと必死に日々の糧を稼ぐ生活にも楽しみは生まれてくる。

ただ死に物狂いなだけでは決して手に入らない、光を仰いでいるからこそ理解できる”余裕”みたいなものを多く感じれるようになったのだろう。

例えば――

「おい、今日の飯はこれしか無いぞ、どうするよ?」

「まあ待てレーテ、俺は実のところそれなりに食える草を知つてんだ。そいつ見つけりゃ凌げるだろ」

「そいつはいいな、んじゃ三人で探しに行くか!」

そんな感じで空腹の中、アルの提案で野草を探しにスラムを走り回ったり。

実際に食つてみたら驚くほど不味かった後から聞いた話だが種類を間違えたらしい。ひどい話だ。もちろん後でアルは締め上げておいた。野草をクリスマスだけ真顔で食べていたのはいい思い出……ともいえないだろう。さすがにあの時はオレも止めた。何でも美味しく食べられるのは日本人的に高ポイントだが、我慢強すぎるのも考え物である。

またある時は、スラムの中で不正な薬物を売り捌いていた闇業者を叩きのめしたこともあったか。蔓延する薬物被害の噂を聞きつけてきたクリスが、「ならば止めるしかあるまい」と飛びだしたのが発端だった。悪を許せぬ男の性は例えスラムだろうと巨悪でもつて富を貪る輩を許せなかったのだろう。

悪の根絶への執念と、それを原動力にした入念な下調べで薬物売買の現場を突き止めた後は早かった。およそ一月あまりでスラムでの



活動人数や場所、さらに売買されている薬物まで調べた上での突撃である。

「そこまでだ、悪党ども。例えスラムだろうと他者を食い物にしてよい理由はない」

「結局こうなるのかよ……ここまで来たら最後までとことん付き合うけどよ」

「そうだアル、覚悟決めろよ。オレたちが足引つ張ったら勝てるもんも勝てないぞ」

そこから先は語るまでもないだろう。当時十二歳くらいだったクリスを筆頭に、オレたち三人だけで現場に乗り込み大人五人を相手に大立ち回りを演じてしまったのだ。子供と大人の無謀な争いは、けれどクリスという圧倒的な男の前に打ち滅ぼされる運びとなる。拳も刀剣も銃も英雄の前には等しく無意味、オレとアルで一人づつ相手取っている内に三人が地面に転がされていたのだ。

「で、こいつらはどうすんだよ？ 殺すか、それとも警察組織にでも突き出すのか？」

「それが一番だろうな。かつてのようにならただ殺せば全て良し、そういう話でもないだろう。むしろその根幹をアドラーには絶ってもらわなければ困る」

「その口ぶりだと既に誰か殺してんのかよお前ら……いや、今はいいさ。それなら縛ってスラムの外にでも放り出しときゃいい。ついでに薬も隣に置いときや軍に連れてかれるだろうよ」

こうして自警団じみた行いをしてスラムの秩序を守ったこともある。まあ所詮は大海の一滴、一つの悪を防いだところでオレたちの自己満足以外の何物でもないのだろうが……それでも、意味はあったと信じている。光は光で闇は闇、寿がれるべきはこうした行為の積み重ねなのだから。

あとはアレだろうな、性別的な意味で騒いだりもした。オレとクリス、アルの三人は男女の違いが当然ある訳なのだが、それでギクシャクしたことは一度もない。こっちは別に女っぽい所作をしようとは欠片も考えていないしその割にはスカート履いたりしてるが、服装を

えり好みしてる余裕はないのでとっくの昔に諦めた。慣れればそこそこ動きやすいのが救いだったな。向こうもそういつた感情を表に出したことは一度もない。クリスマスは理解できるが、アルまでそうだ。……自画自賛だが結構顔は良い方だと考えているだけに、ちよつと悔しかったのは内緒だ。なのでそれとなく理由を聞いてみたら、思いつきり呆れられたのは今でも覚えている。

「いやだってなあ、不良相手に殴り合いする女なんざ普通いねえって。それを異性として見れるか？ 冗談は止してくれって」

「お前なあ……！ それはそれですげえ複雑だぞおいこう、男から好かれたいなんて願望はないけど、それはそれとしてせつかく美少女に生まれたなら綺麗にみられる方がやっぱ良いというか……自分で言つてて面倒くさい話である。ホントにどうしてこうなった。」

「仕方ねえだろ、恨むんなら男らしすぎる自分の性格を恨めつての。つかなんでそんなに男勝りなんだよ、メスゴリラとか呼ぶぞ」

「よっしやアル表でろ！」

その後は夕暮れまでじやれるような取っ組み合いを続け、戻ってきたクリスに真顔で仲裁されて事なきを得た。その後は普通に笑い合つてギクシャクしたりはしなかったので、これも良い経験だったのだろう。

それに言われてみれば、オレの出自もかなり不思議なものである。聞いた話だとクリスマスもアルも物心ついた時にはこのスラムで生きていたらしく、親のことなど少しも知らないのだという。その中で知識などを持つているオレの事はどこぞのお嬢様が落ちぶれた成れの果てと考えていたとか。それが粗末な暮らしの反動で今のようになったのかな、なんてぼんやり考えていたらしい。

もちろん真実はもつと不可思議で説明し辛いもののだが、言つてもどうしようもない。なので二人の考えに便乗し、心苦しいがそういった過去ということにしておいた。良好な関係にはささやかな嘘も不可欠だろう。

他にはまあ、男女の体の違いで恐れていた毎月のアレ関係でやっぱりドタバタしたものの、特段おかしな関係性になつたりすることもな

く。

オレたち三人はどうかこうにか貧民窟スラムの中で生き延び、時には戦ったり騒いだりもしながら、気が付けばそれなりに年齢も重ねていたのである。

◇

新西暦一〇〇九年。オレたちは未曾有の危機に直面していた。

「よし、今日の稼ぎはこんなもんか……そっちはどうよ、アル？」

「微妙だな、ぶっちゃけ今の俺たちには全然足りねえ。なんせ腹空かせてばっかだしなあ」

「だが泣き言をいったところで状況は改善しないだろう。いざとなれば、雑草に噛り付いても腹を満たすしかあるまい」

すっかり住み慣れたスラムの廃ビルにあるねぐらにて、オレたち三人はランプの灯りの下で顔を突き合わせている。揺れる炎に照らされるアルの顔は深刻そうで、たぶんオレも似たような表情をしているだろう。クリスもまた普段の鉄面皮の下で困ったような雰囲気を隠せてはいない。

議題は単純で、オレたちが満足に食料を得るにはまるで金が足りないのだ。数年前まではまだ身体も小さかったし成長期に差し掛かる前だったから良かったが、現在オレが十四歳でクリスとアルが十五歳だ。おそらくもつとも食べ盛りな時期に差し掛かってしまい、ここ一年の間に目に見えて食料消費量が増え始めている。スラムだから食べもので困るのは当然なのだが、逆に何とか出来なければ当然の餓死が待っているという状況だ。

「ここがオレ……じゃない、私たちの正念場ってところか。マジで近いうちに何とかしないと、私たちも他の奴らと同じ末路だぞ」

この貧民窟スラムで成人できる奴なんてほんの一握り。ほとんどは真っ当に生きることができず、誰かの食い物にされ、最後は野垂れ死んで消えていく。忘れてはならない、ここは人が生きる最悪のどん底なのだ。この無情さこそ本来の道理であり、オレたちのような存在こそ異常なのだ。

そういう訳でこの状況を何とかしないと、いくら真面目に頑張った

ところでオレたちの末路は死あるのみなのだが……アルはニヤニヤ笑ってはかりだ。クリスマスですら物珍し気な視線を隠そうともしない。

「……なんだよ?」

「いいや、お前がまさか“私”なんて言い出すから驚いちまってな。似合っていないっつうか、意外にしっくりもするっつうか……不思議な感じだな」

「お前がどうだろうと俺は別に構わんが……確かに、やや面食らったのは事実だな」

「ぐぬぬ、やっぱオレが私なんて言うのは違和感あるか……」

わかっちゃいる、オレだって結構妙な感覚はあるのだ。これでは本当に女性らしくなっていると思う。その事実がちょっと怖い。

けれど、現実的に考えて“オレ”なんていう女性なんざいない。むしろもしオレが遭遇すれば間違いなくドン引きする。なので状況に応じてせめて切り替えができるように“私”という一人称にも慣れようと考えていたのだが、やっぱりこうなるか。

だが今はそんなことを言っても仕方ない。

「残ってる金はパンを数個買える分、私たちが金を稼げる仕事は限られてるし実りも少ない。遅かれ早かれ食料の需要と供給が崩壊するだろうし、そうなりやマジでクリスマスが言ったみたいに雑草噛り付いて生きるしか道がないな」

「どうすっかなあ……さすがに盗みを働いてつてのはアレだしよ。かといって俺たちがマトモに金を稼ぐ手段がそう簡単に転がってるとも思えねえ」

やべえなこりや、詰んでる——アルが嘆息混じりにそうまとめた。

これがスラムの怖いところだ。ほんの少し前まで順調に生活できたはずなのに、気が付いた時には崖っぷちに立たされている。そこから逆転する手段など数少ない。奇跡に賭けて耐え忍ぶか、犯罪に手を染めてでも生き抜くか。どちらにせよ未来はあまりに暗いだろう。

食糧管理とかちゃんとやって来たはず何だがなあ……今更後悔しても後の祭りだ。そもそも生きてくことが綱渡りなのだから少しでも計算が狂えば全て破綻する、分かっていたことだろう。

この世の中、正道を歩んでいれば全て良しでは断じてないのだ。気合と根性、それに折れない心があれば道が開けるといふのはファンタジーでしかない。もちろんオレは信じているが、心一つじゃままだらない現実があるのも受け止めなければ。

「——いいや、一つだけ道はある」

その時、クリスが重々しく口を開いた。自然とオレとアルの視線もそちらへ向く。

子供から少年へと成長したクリストファー・ヴァルゼライドは、もはや悔ることなど不可能な風格を醸し出している。独力ながら極限まで鍛え上げられた身体と、決意を宿した瞳は一目で“違う”と理解させて余りある。例え着ている服がオレたちと同じ襤褸だろうと天性の強さは一つも損なわれてはいないのだ。

「アドラー帝国軍、そこに入隊する。正式な軍人となつてしまえば当座の内は問題ないだろう」

「帝国軍に——」

「入隊、か……」

そんな男が提案してきた道とは、オレたちも考えたくらいある意味で当たり前の方針だった。

スラムの生まれは例外なく屑である——そんな風評こそ一般的だろうし、オレたちも否定はしない。だがそのせいでマトモな職にもありつけず、金を貯めてスラムを脱出なんて夢のまた夢なのだ。

しかし幸か不幸かこのアドラー帝国はガチガチの軍事国家であり、四方八方に喧嘩を売っては領土を広げる侵略国家でもある。なので軍事力の拡大に余念がないし、スラム出身だろうと幅広く軍人を募集しているのが実情だ。よって帝国軍の門戸を叩けば入隊できる可能性自体はかなり高いし、上手く軍人になれば衣食住は保証されることだろう。

しかし、そう上手い話だけでは終わらない。アドラー帝国は軍事国家であると同時に血統主義いつかにニュースペーパーでその名を目にした“アマツ”の名が有名だろう。さらに他にもたくさんの貴族が居て、家系がそのまま地位に直結する風通しの悪い国のようだ。の

国でもあり、どうやらスラム育ちは下賤な血ということでもトモな扱いを受けないとか。オレたち以外にもスラムから軍へと志願した者は多いらしいが、誰もが一番の激戦区である東部戦線日夜アンタルヤ商業連合とドンパチやり合っている最前線。ここから将校へなる者もいるにはいるが、多くは死者として明日のニュースペーパーに掲載される羽目になる。に送り込まれ、そして死んでいくと聞く。

そんな訳でアドラー帝国軍に入隊するのは最後の手段、というより敢えて候補から除外までしていたのだが……ここでクリスに現実を突きつけられてしまえばしょうがない。もはや目を逸らすことなど不可能だった。

「まあ確かに、上手いこと武勲を挙げて出世できれば最高なんだろうけどよ……かなり難易度高いぜ、それはよ」

「だがここでいつまでも悩んでいたところで状況は変わらない。ならば行動を起こすしかないだろう」

「なるほどな……確かに一理あるか。アドラーで地位を手に入れるにはやっぱり軍隊で成り上がるのが一番手っ取り早い。後はオレたちの頑張り次第でどうにかなるって寸法だな」

「その通りだ。そしてその“頑張り次第”こそ、俺たちが最も得意とすることのはず。違うか？」

問いの形ではあるが確信に満ちたその言葉に、オレとアルは揃って頷くしか出来なかった。

確かに苦しい道になるだろう。簡単に死んでしまうような戦場に送られることは必至だし、どうにか足掻いて生き残ってもそう簡単に出世すらできるかどうか。

だが、それこそ今のオレたちの日常だった。気を抜けば死ぬような世界での綱渡り、住めば都と言っても限度はある。良き友人たちと過ごせたから良い思い出になっているだけで、普通に考えて悲惨も良いとこな環境で生きのびているのだ。

そんな劣悪な中で成長した仲間にして、おそらく誰よりも輝いている男が“お前たちならば可能だろう”と告げているのだ。これで奮い立たないならば男じゃない、そう確信できる重みを含んだ言葉であ

る。

ならばやるしかないだろう。元よりオレは彼の友人として並び立ちたいと願ったのだ、ならばその背中を追いかけるなど至極当然ではない。アルにしたってここに来て「やっぱり俺は遠慮する」なんて言ったりする気はないだろう。

「勝利」とは、何だろうな——」

ふと、クリスが口を開いた。誰よりも勝利を求め、鋼の心を有する彼らしくない感うような呟きだった。

「誰もが求め、手に入れようと足掻き、積み上げていく勝利の栄光。だが一度それを手にしたが最後、二度と敗北することは許されない。何故なら、勝者とは勝利の分だけ敗者の嘆きと無念をも背負うことになるからだ」

「……そうかもしれないな。正しいことは辛くて、痛くて、目を背けてしまいたい。たった今までオレとアルが、最も困難な道を避けていたように」

「ならば勝利とは忌むべきものなのか？ それとも開き直って全ての勝利を手に入れるべきなのか……難しい話だな。つかいきなりどうしたんだよ、クリス？」

“勝利”とは、なんて随分と抽象的かつ哲学的な話題である。不意にその話題を出してきたクリスの意図が分からず、不思議そうな表情をアルはしていた。オレからしてもどのような考えがあるかはわからない。

「俺は今まで勝利だけを目指して一心不乱に駆け抜けてきた。悪を倒し、生き残るという単純明快な理論を胸に勝利を手にしてきた。しかしこれから先は違うだろう。ただ簡潔な勝利だけで良いのか？ 勝利することが逆に悪を喜ばせることになるのでは？ これまでと違う環境に飛び込むからこそ、“勝利”に普遍的な概念など無いと思いついたのだ」

「そういうことか。なら、それこそ簡単な話だろ？ オレたち三人で“勝利”の在り方を見つければ良い。『勝利』とは、何だ？』——なんて高尚な悩み、一人で解決する方が無理だろうさ」

オレたちは決して完璧ではない。それはクリスという凄惨な奴ですら同じことで、時には道に迷ったり困ったりもするだろう。それが人として当たり前だ。

でも、そういう時に助け合ってこそその友人である。もしかしたらクリスは知ったことかとばかりに一人で突き進んでしまうかもしれないが、その時はその時で追いかけるだけだ。かつてオレはクリスに助けられたのだから、こういう時はお互い様である。

「ま、要は全員で助け合えば乗り越えられない困難なんざ無いって事だろ！ なら良いさ、どんな地獄でもやってやろうじゃないか、なあレーテ？」

「そういうこつたな。どうせ今までも生きるか死ぬかの生活だったんだ。なら、今更どんなところに飛び込んだった変わりはないっての」「お前たち……ならば、取るべき道は決まったな」

最後はクリスの一言によってオレたちの今後は決定付けられた。アドラー帝国軍に入隊し、そこからどうにか成り上がり生き延びる。キツイことは確定しているが乗り越えるしかないだろう。

ぶつちやけると想定していたスラム脱出とは掠りもしない大胆さだが、きつと大丈夫だ。だって尊敬するべき友と、共に頑張れる友にオレは恵まれているのだから。ならば不可能なことなど何もない。

“勝利”とは、一体どのようなものだろうか。共に並び立ちたいというオレの誓約と同じなのか、違うのか、何一つとして分からない。まるでこれからの未来のようで、ふと不安になることもあるだろう。

それでも、足だけは決して止めてはならないのだ。勝算だとか予定だとか、そういうモノは一切切無視して良い。大切なのは前に進み続けられ、きつとたどり着ける地平があるということ。その体現者が隣に居るのだから、どのような環境であろうと進むことに間違いはないのだ。

いつか抱いた夢、このスラムからの脱出。本当はちまちまと金を貯めて、それを元手に身だしなみを整え、どこかで雇ってもらおう——なんてことを考えていたのだが。ずっとずっと波乱万丈で、けれど誇らしい生き方の道へといつの間にかシフトしていたようだ。



その契機が何であったのか——今更語るまでもないだろう。

## 第二章 東部戦線／Adolescence

### Chapter 10 士官学校／The Adler Imperial Army

新西暦。それは旧暦より続いた文明が大破壊カタストロフによって一掃され、新たに星辰体アストラルと呼ばれる未知の粒子で満たされた現在の世界のことである。

その発端は旧暦二五七八年、深刻なエネルギー不足から勃発した第五次世界大戦だ。かつて日本と呼ばれていた国が開発していた、星辰体式新型核融合炉が不慮の事故で大爆発を引き起こしたことに起因する。まだ人類にとっても扱いきれない粒子を用いた大型設備は日本どころかユーラシア大陸の半分を吹き飛ばし、世界中に大きな変革を強要した。

一つ、空には新たに第二太陽アマテラスと呼ばれる不可思議な存在が発生した。昼は太陽のように、夜は月に寄り添うように輝くそこを起点に星辰体アストラルは現世へと現れている。

二つ、世界中が星辰体アストラルに覆われた事実そのもの。これにより金属の抵抗値が全て消え去ったことで電子機器類は軒並み死滅し、代わりに十九世紀水準の技術まで文明は後退した。加えて空気抵抗まで増大したことで空を飛ぶことは永久に叶わなくなった一方、燃料類が低出力高燃費になったおかげでエネルギー問題が解決の兆しを見せる。

三つ、大破壊カタストロフによって引き起こされた次元振動は物理的な破壊のみならず、世界各地の座標を滅茶苦茶に入れ替えてしまった。そのせいで日本の重要施設が何故かヨーロッパにまで転移していたり、あるいはまったく別の施設同士カタストロフの座標が重なってしまったことで途方もない融合を果たしてしまったケースも確認されている。

こういった未曾有の大被害を齎したのが大破壊であり、常識では計れないような大災害は数多の混乱と犠牲を生み出したのだろう。

それでも人間とは逞しいもので、根本から常識が覆った世界でもなお千年もの繁栄を続けてみせた。寄る辺を失った者たちは分かりや

すい建築物を拠点にし、集い、力を合わせ、少しずつ地道に適応と開拓を行っていったのだ。

軍事帝国アドラーの興りもその例に漏れないと歴史書は語る。

なにせアドラー帝国の象徴たる政府中央棟こそ、旧日本軍の軍事施設とフランスのモンサンミッシェルが融合した摩訶不思議な建造物なのだから。その特徴的な威容の下に人々が街を作り、国を作り、いつしか軍事帝国アドラーとして新西暦にその名を轟かせたのだ。

——というのが、現在オレの習っている新西暦の始まりとアドラー帝国の歴史であるらしい。

「なんとも凄いもんだなあ……」

カリカリとペンを走らせる音が響く中で、オレは誰にも聞こえない程度の声量で呟いた。

滔々と講師の口から語られる内容を手元のノートに走り書き程度にメモしつつ、思考は完全に明後日の方向だ。おおよその事情はニュースペーパーなどから断片的に知っていたとはいえ、こうしてしつかり解説されると旧暦と新西暦の違いに改めて圧倒されるばかりだ。

転生したら遙か未来の地球で、しかも既存の法則とは完全に違った実質別世界でした——なんて、それだけでSF小説の一つでも書けそうな勢いである。そんなのが我が身に起こっているのだから笑えないが。

「であるからして、現アドラー帝国の三十六代総統は——」

それにしても催眠術でも掛けられているかのような、講師のやる気が感じられない声が辛い。興味深い内容だしかなり面白いのだが、どうにも欠伸をかみ殺すので精一杯だ。オレと同じように講義を聞いている者たちも、ほとんどは眠そうにしている有様である。

まるでオレのよく知る学校のように懐かしい——というより、現在オレたちが所属しているのはアドラー帝国の士官学校なのだから、紛れもない学校だったな。例えばどこであろうと講義中に眠くなるのは共通のようだ。

と、ちょうど良いタイミングで授業終わりの鐘が鳴り響いた。講師

はこれ幸いとばかりにすぐさま話を止めて教室を出ていき、二十人ほどの軍人見習いたちだけが眠い顔のまま残される。特に明言はされていないがオレを含めた全員がスラムから軍に志願したいわば同郷の者たちであり、それだけに勉学は苦手なのだろう。

そんなことをボンヤリと考えていたら、後ろから不意に肩を叩かれた。咄嗟に振り向けばそこにはオレと同じく黒い軍服を着こんだ見慣れない姿の、よく見慣れた友人たちが立っている。

「やーつと終わったぜ。寝なかつたか、レーテ？」

「寝てないつつうの。せつかくなんだし話を聞いておかなきゃ損だろ。クリスはどうよ？」

「当然、敬意をもって全て学ばせてもらった。俺たちには時間がないのだ、一分一秒も無駄にはできん」

眠そうながらどうにか耐えきつたらしいアルと、いつもの調子で崩れないクリスの姿はスラムから何一つ変わっていない。あの最底辺から大きく変わった現状でも変わらない存在が近くに居るのはとても心強いことだ。

貧民窟スラムを抜けだしたオレたちが士官学校に入学してから早一ヶ月。周囲を取り巻く環境はかつてと大きく違っていた。

◇

士官学校。オレたちが居るのはつまり新たな軍人を養成するための施設である。どうしてスラムを這いずっていたオレたちがそんな所で勉強しているかといえば、もちろんアドラー帝国軍の門を叩いたからに他ならない。

入隊にあたって一応は適性試験なども受けたものの……正直言って拍子抜けするくらい簡単だった。健常者で、かつ簡単な質問に答えられればそれでよし。本当に意味があったのかと疑うほどだ。

おそらく、国の方も軍事国家として兵力は出来るだけ多く欲しいのだろう。だからスラム育ちだろうと幅広く受け入れるし、そのおかげで思った以上にすんなりと入隊まで漕ぎ着けられたほどである。

ただし上手い話はそうそうないように、こうして呆気なく入隊できた裏では当然代償もあった。その最たるものといえば――

「期限は半年、それを過ぎれば俺たちは全員東部送り、か……」

夕方になり士官学校に併設された寮の自室スラムから軍に志願した者のうち、同期の女はオレ一人だけらしい。なので三人部屋に押し込まれた訳だが、個人的には見知った友人と一緒にかなりありがたい。なんでも、女性軍人の比率は現状数%程度しかないのだとか。に戻って早々、アルが重々しく呟いた。オレとクリスも持っていた荷物をベッドの上に置き、壁に掛けられた蝋燭に火を付けながら相槌を打つ。揺れる炎がこちらの不安を見透かしているかのようだった。

通常、士官学校を卒業するまでは数年かかる。その間にしっかりと基礎を学び、下地を固め、軍人として恥ずべきことの無いように鍛え育てられるのが習わしである。これは仮にも学校であるのだから不思議はない。

けれどオレたちスラム出身の者たちはこの辺りがかなりおざなりで、ほんの半年程度しか学ぶ時間がない。最低限の時間で最小限の知識と実力を付けさせ、後は戦場に一直線という訳だ。スピードトレーニングも真つ青な倍速過程であるが、決して喜ぶべきことではない。

「つまるところ、コスト削減の一種なのだろう。下賤な生まれの者より普通の生まれの者、あるいは貴族を優先して育てるべきだと。血統主義だからこそ力を入れる部分も分かりやすい」

「最底辺は適当に育てておいて、最前線で肉壁にでもなっつてろつてことだ。後は野となれ山となれ、遅れて卒業してくる奴らの踏み台にもなっつてろつてことだ」

オレたちがとうとう食うに困り始めてスラム脱出を決意したように、軍に在籍している限りは例え下士官だろうと衣食住は保証されることになる。ただ勉強して鍛えているだけで人間らしい生活が出来るなんて感涙ものだが、重要なのは“どうあれ金が掛かる”という点だ。

食費や維持費、教育のための費用に各種武器やら何やら……ほんの一人だけでも色々な要素が積み重なれば馬鹿にならない出費となる。だから短期で教育を終えさせて安価な兵士として戦場に送り出したいのだろう。

そして半人前以下の兵士など普通はバタバタ死んでいくはずだが、オレたちに帰る場所などないから必死になつて戦わなければならぬ。それで結果的に教育費以上の成果を挙げてくれるなら上層部も万々歳という寸法だ。

——本当に、忌々しいくらい良く出来ていると思う。これが血統主義の国の真実という訳だ。

そうしてこつちが下で頑張っている内に貴族の者らがやって来て、大上段から指示を出しては手柄を持っていく。上は上で下は下、貴族は貴族で屑は屑という理屈は単純だから意図も理解もしやすいのが腹立たしい。

加えて、ほんの一ヶ月しか経過していないのに懸念はまだまだある。例えば、他の生徒や物事を教えてくれる講師に関してとか。

「講師はあんましやる気ないし、たまに一般組とかち合えば無視やらサボりやら……真面目にやる気あるのか、アイツら？」

「同感だぜ。真面目にやつてるこつちが馬鹿なんじゃねえかってたまに錯覚しそうになつちまう」

「この国の悪しき風習なのだろうな。生まれながらに栄達が約束されているから努力などするまでもない。そして使い捨てが決まっている者に無駄な時間を割こうとも思わない。道理ではあるのだろうが、人としては度し難い」

基本的に座学系の授業は底辺組と一般組、それに貴族様組で完全に分離させられる。だがたまに時間割や内容の都合なのか、これら三つの組がごちゃ混ぜになることもあるのだが。それがもう酷いというか、サボつたり真面目にやらないのは当たり前、重症になつてくるとこちらを指さしてコソコソ笑ってくる有様だ。大方、惨めな生まれの奴らがどうだの言っているのだと容易に想像できた。

もちろん全員がこうではないのだが、特に上流の貴族ほどの傾向が強い。簡単に人を見下し、必死さの欠片も感じられない。生まれながらの成功者だから真面目にやるのも馬鹿という理屈だ。さらにはこのような人物達の権力に阿り、まるで取り巻きのようになってい

者も多いのだから救えない。

思い返せば、いつかにスラムでオレを強姦しようとした奴らもそういったタイプをより悪化させた手合いなのだろう。こうして断片的に見るだけでも中々ヤバそうな内部事情を窺わせられる。

「まあ講師の人に関しちや、理解は出来るからそこまで言う気はねえけどよ……教えてはくれるだけありがたいもんだ」

「だからと言ってこのまま手をこまねいている訳にもいくまい。向こうにやる気が無いのと、だから俺たちも手を抜くのは全く関係のない事柄だ。猶予が短いというのなら、その数倍は努力しなければ追いつけない」

クリスの言う通りだ。このままただ流されて士官学校を卒業してしまえば、何をやるにも中途半端な一兵卒の出来上がりだ。それでは遠くない将来の内に必ず死ぬ。戦場に出て学ぶこともきつと多いのだろうが、敵はオレたちの成長を律儀に待ってくれるはずがないのだから。

他のスラム組の奴らはそれを理解しているのだろうか……正直、それが一番不安だった。オレたちとは全く面識のなかったせいからは、ようやく手に入った衣食住に満足しているだけにも見える。良く言えばなるように成ると信じていて、悪く言えば現状で停滞してしまっているのだ。

「とにかく、勉強して鍛えてるだけでも飯は食えるし寝床はあるんだ。なら今までやってきたことを続けていくしかないって事だな。当たり前を当たり前に繰り返す、それだけの話だ」

「環境自体は恵まれてるもんなあ……他のお仲間たちもその辺り理解して欲しいもんだけど」

スラム組は面識こそないが、やはり同郷の誼だけあって気にかかると。だから何度か忠告もしてみたものの、胡散臭そうな顔をして話半分に分けられて終わってしまった。きっと今の段階から先を意図的に考えないようにしているのだろう。

忘れがちだが、スラム育ちなのに真っ当に前を目指そうと思えるクリスやアルが例外なのだ。普通はそうそう努力をしようと思えないし、むしろ墮落に流れる方が自然である。仕方ないと割り切るしかない

いが、モヤモヤするものはどうしても残ってしまう。

「しかし俺たちが他の者に気を揉んでも仕方あるまい。変わるかわからないか、そればかりは当人の心掛け次第なのだから。どれだけ周囲が怠けこちらを嘲笑おうと、大切なのは一念を貫く純度に他ならない。そうだろうか？」

その言葉にオレもアルも「その通りだ」と頷いた。環境がどう変わろうとやることは同じ、後はそれをどれだけしつかりこなせるかに懸かっている。

「とはいえ、何か目標でもある方が良いよな。取り敢えず生きるために軍に入隊しましたなんて格好つかないしさ」

「それもそうだな……だけどどうするよレーテ？ 『偉くなって他の奴ら見返してやる』とかそんな具合か？」

「いつそ総統でも目指してみるとか。頑張ればあんがい出来るかもしれないぞ？」

「はははッ、そりゃ面白いな！ そんなことになったら痛快だぜ！」

スラム育ちから国のトップな総統職だなんて夢物語もいいところだが、語るくらいはタダである。それにどれだけ実現困難な目標だろうと、やれるだけやってみても損はないのだ。未来へと続く道は笑えるくらい狭く厳しいが、あらゆる可能性はまだまだこの掌の中に納まっている。

「クリスは何かあるか？ 夢とか目標とか、そういう感じのやつ」

「……そうだな。軍に入った暁には、悪を倒し弱い者を守るような人間になりたいと考えていた。無論のこと、それ以外にも思うところは多々あるが——」

「良いじゃないか、軍人として立派な心得になると思うぞ？ まだオレは見習いだから分からないけどさ、戦えない人を守ることこそ軍人の本分とか言えたらカッコいいな」

かつて全くの無力だったオレがクリスに助けてもらったように、無力な人間を守るようになれたらきつと誇らしい自分になれるのだろう。夢や目標としてはちよつと大げさすぎるしそんな心構えも全然出来てはないが、人として立派な在り方だとは思う。目指してみる



のも悪くない。

偉くなつて見返してやるとか、誰かを守れるようになりたいとか、これから先で成れる自分はたくさんある。軍人になったこと自体は追い詰められた末の決断だとしても、それから先にも新たな価値を見出さなければ甲斐がないというものだ。

「ま、どれだけ期間は短かろうとやることは山積みつてことで。そんなじゃちよいと着替えるから、目でも適当に瞑つてろよー」

とんとん拍子に新たなステージへとやってきたオレたちであるが、前途多難な日々はまだまだ長く続きそうだった。

◇

そして翌日、身支度を整えたオレたちは足早に校内の廊下を歩いていた。目指しているのは屋外にあるグラウンドである。今日の一発目は剣術に関する講義なのだ。

教養を付けさせるための座学の他にも、軍人として当然体力や技術も必要となる。その一環としてこのアドラーでは一般配備される刀剣を用いた剣術が必修技能となっており、我流で剣を振るっていたオレやクリスにとってこの講義はかなりありがたい存在だった。

なぜ前時代的な剣術をわざわざ学ぶのか？ 理由は単純で銃の質も数も落ち、近接戦闘の機会が意外とあるからだ。新西暦にも銃カタストロフやら爆弾やらは普通に存在はしているようだが、大破壊の影響でかつてとは比較にならない品質と生産速度らしい。なので数を揃えて面制圧が主流の戦法でありながら、現実に行ける者は少ない。まるで戦国時代の日本だ、銃と剣が同時に戦場で生きている辺りとか特に。

さらにはこの剣術を教えてくれる存在がまた凄腕で、なんでもアマツの護衛を剣一本で任されていた剣豪らしい。それが老齢となつて引退した後、新人のために実戦的な剣術の面倒を見てくれるのであるとか。加えてオレたち底辺組にも普通に接してくれる貴重な講師でもある。なのでこの授業の時はいつも気分が高揚するものだが――

「チラチラ見てきて、鬱陶しいな……」

「気にするなよ。どうせ半年程度の付き合いだ」

廊下で他の生徒とすれ違う度に寄越される好奇と侮蔑の入り混じった視線は、やはりいつまで経つても慣れないものだ。中には割と気持ちの悪い視線を向けている者もいて、それがかつての危機を思い起こさせてしようがない。ぶっちゃけ、軍服の腰に提げた直刀かつて貴族の青年を殺したのではなく、軍から支給されたものだ。これまで使っていたものはかつてのねぐらの隅に隠しておいた。もし誰かが見つけたとして、変に扱われないことを願うばかりだ。を引き抜きそうになる程である。

そんな鬱陶しい視線に気を取られていたからだろうか。ほんの少しよそ見した途端、ちょうど誰かと肩がぶつかってしまった。反射的に声が出た後、すぐにぶつかった相手に向けて頭を下げる。運の悪い事に、上流の家柄らしい雰囲気滲み出ている相手だ。

「すみません、失礼しました」

「いや、気にしないでほしい。それにしても……」

それにしても——何なのだろうか？ 悪いのはこっちとはいえ、眼鏡の奥に輝く青い瞳はまるで心の奥底まで見通すかのような無機質さを見せている。そのまま数秒見つめられた後、足を止めてこちらを待ってくれているクリスとアルの方まで視線が動く。なんとも言えない不思議な所作だ。

……いや待て、確かこの男は名前こそ忘れたものの、凶抜けた秀才として知られる人物では無かったか？ てつきり何か意味のある行いかと思っただが、もしかしたら天才しか分からぬ謎の行動なのかもしれない。あまり考えても詮無いことだ。

「えつと、私たちに何か？」

「ああ、いや、そういう訳ではないのだが……ふむ、どうであれ、目指す道は人の勝手だ。止めてしまっすまなかつた、次は剣術指導の間なのだろうか？ 今日教官は遅く出てくる、そう焦らなくとも大丈夫だ」

「はあ……では、私たちはこの辺で」

最近になってようやく慣れてきた「私」という一人称を駆使しつつ、この奇妙な相手からそそくさと距離を取った。何というかあまり

にも理解の埒外の存在である。天才とはやはり常人に理解できない相手なのだろう。

「それにしても……」

「どうした？」

「いや、なんでオレたちの次の予定が剣術指導だと分かったのかなって」

まるで未来を見通しているかのような物言い。そして実際、オレたちが辿り着いてから十分も経った後によく教官は姿を現したのである。

# Chapter 11 努力という才能／Mento

新西暦にて尊ばれる日系の血筋の一つに、ムラサメという家系がある。

質実剛健な武系の家にして、自らが主人とならずにより貴いとされるアマツの家系に仕える者たちの総称だ。彼らは主人たるアマツの者の護衛にして懐刀として剣技を磨き、いかなる相手であろうと断てない存在はないという。

愚直なまでに鍛え上げられた無骨な刀の前に敵は無し。主人の為に生き、そして死ぬ。ムラサメの名を継ぐ者とはまさしく一振りの刀そのものとすらいえよう。

しかしそんな剣豪だろうと寄る年波には勝てず、時には主人から暇を貰うこともあるという。そのような人物は大抵その後も忠義を貫くか、新たな後継者でも育てて主人に尽くすよう導くらしいのだが、稀にそういった通常とは少し外れた生き方を選択する者もいるのだとか。

つまりオレたちの戦技教導官をしてきている老練の剣士トナリ・ムラサメ中尉は、ムラサメの中でも珍しい人物ということだ。

「ブラウン！ 踏み込みが甘いぞ！ お前が握るそれは玩具なのか！」

「——ッ、いいえー！」

厳しい叱責の言葉と共に、あまりに鋭い刀剣が翻った。

目にも留まらぬ速度で繰り出された刺突をどうにか直刀で逸らし、反撃とばかりにもう一度踏み込んだ。先ほどは半歩足りずに悠々と回避されてしまった振り抜き、今度はさらに前のめりとなった攻勢に全精力を注ぎこむ。

相手は剣豪といえど老齢、若さによる優位はこちらにある。現に突きを逸らされた格好から教官はまだ復帰していない。身体が反射的な思考に追いつけていないのだ。

ついに一本取れるか——いいや、相手はそう甘くない。

この人は数多の戦場を剣一本を頼みに生き抜き、この年齢まで到達した剣鬼とも称すべき存在だ。都合の良い温い<sup>ぬる</sup>考えなど捨てて然るべきであり、現に有利な展開など何一つ起きはしない。

「良いぞ、先ほどよりは見れるようになった。だが、練り込みがまだ足りぬな。お前の呼吸は読みやすいぞ」

予想外にも、いや、半ば予想した通りに相手は軽々と対応してのけた。真つすぐ落ちてくるこちらの直刀を半身になって避けると、右足でその切っ先を抑えてしまう。代わりにこちらの首元に刃が突きつけられることで勝敗は決していた。

「今度こそ一本取れるかと思っただのですが……まだまだですな」

「当然だ、そう容易く教え子に超えられてたまるものかよ。しかし良いだらう、今のは及第点をくれてやってても良い」

ありがたいお言葉を貰えたものの、正直素直に喜べる気はしない。今の攻防は完全にこちらが読み切られていた。向こうは身体の自由度という観点すら計算に入れた上で、あらかじめオレの次の動きを予測して身体を置いていたのだ。まるで仕掛けられた罠に鮮やかに引っかかってしまったようで逆に清々しさすら覚えてしまう。

そういえばいつか、クリスとも似たようなことがあったが……やっぱり、昔からあまり成長していないのだろうか。何だかとても悔しく感じてしまう。

「では次はヴァルゼライドの番だったな。ブラウン、お前はロデオオンと見学だ。しっかり技を見て覚えろ」

「はい！」

大人しく引き下がり、グラウンドの片隅でオレと教官の模擬戦を見学していた二人の元に戻る。入れ替わりでクリスが前に出て、教官と対面して腰の刀剣に手を掛ける。彼のもつとも得意な剣技、抜刀術を用いる構えだ。

そして次の瞬間には中空で剣がぶつかり合い、凄絶な火花を散らし合う。とても模擬戦とは思えない迫力を食い入るようにつめてるオレに、アルがふと肩を叩いてきた。

「まあそう落ち込むなよレーテ。さっきの模擬戦、割と良い線いってたと思うぜ？」

「アル……ありがとよ、そう言ってもらえるだけ嬉しいぜ」

心配されるくらい目に見えて落ち込んでいただろうか。そんなつもりはなかったのだが、もしかしたら無意識に表出してしまったのかも知れない。それくらい自分の成長のしなさい具合が歯痒かった。

目指すべき背中はまだまだ遠い。こんな調子じゃ並び立つなど不可能だろう。今もクリスは教官相手に鬼気迫る表情で戦っている。模擬戦というのを忘れそうなくらいの迫力、ともすれば殺してしまうのではないかと錯覚するほど。けれど対面するムラサメ教官は涼しい顔で、着実にクリスの剣をいなしては退路を断っていく。

「どつちも凄いよな、ホントさ……いつだって前向きに頑張ろうとは思うけど、たまにちよつとだけ不安にもなる」

「気持ちにはよくわかる。だけどアレだ、上ばっか向いても仕方ないぜ？ 少なくとも教官にかんしちや今の俺たちじや逆立ちしたって敵わねえさ」

それはまあ、確かにそうだろう。自分たちのような揃って十代半ばの若輩者と、既に六十は軽く超えてるであろうムラサメ教官。積み重ねた経験も蓄積も何もかもが雲泥の差という他ない。指導者としても間違いなく尊敬に値する人だ。

そもそもこの戦技指導において、この教官に当たったことは士官学校入学以来の幸運だったと断言して良い。基本的には全体で訓練をして着実に技術を身に付けていくのだが、このような模擬戦などは数人組に対して一人の教官が付けられる。オレたちはそれが偶然ムラサメ教官だったという訳である。

だからグラウンドの別の方向へとチラリと視線をやれば、やはり教導官と一対一で向き合い刃を交わらせる生徒が多々見受けられる。しかし、これもまた断言しよう。現在練り広げられているクリス程の腕を持つ生徒も、それを悠々と受け流すムラサメ教官程の指導者も、他に存在はしなかった。

「呼吸を抑えろ、心を研ぎ澄ませ。次に振るう剣の事を考えながら、し

かしこの一刀で終わらせるといふ気概を持って。蛮勇と臆病の感覚を  
乗りこなして戦うのだ」

「——ッ!!」

ひたすら果敢に攻め込むクリスを前に、ムラサメ教官はしっかりと  
彼の太刀筋を見ながら指摘を出せている。これがもし他の教官なら  
ば、少なくともそのような余裕はないだろう。ともすれば斬り殺され  
るようなクリスの勢いを前に他の思考を挟む余地など何処にもない。

けれど、それが出来るからこそムラサメ教官は頭一つ以上抜きんで  
た剣士なのだ。言葉こそ抽象的で概念的なものが多いが、それでも一  
太刀一太刀丁寧に合わせて読むことで読み取れる境地もある。あの人は  
そういう教え方を好むらしく、オレたちもまたそこから学び取れる内  
容を吸収するのに必死だった。

「心の在りよう、矛盾した表現を現実に出てこそ一人前ってことな  
のかな……勉強になるよ」

「蛮勇も臆病もそれだけじゃ簡単に死ぬるような危ないもんだしな。  
あのクリスに限って臆病とかそういうのだけは無さそうだけだよ」

「はは、確かに」

軽く笑いながら初めてムラサメ教官と対面した時を思い出す。あ  
れはまだほんの一ヶ月前の話、この士官学校に入学した当初の戦技指  
導でのだった。

今日と同じくグラウンドに集い、初めて顔合わせをしたオレたち相  
手に教官はいきなり告げてきたのだ。

『剣か、それに類する物を振るったことは？ ……あるか、なら今から  
俺と模擬戦をしてみよう。端的にお前たちの今の實力を見せてもら  
おう』

そう言葉短く言われた時には既に刀剣が抜かれていた。目で追え  
ないような速度ではなかったはずなのに、抜刀の瞬間をその場の誰も  
目で追う事が出来なかった。まるで魔法にでも掛かったかのような  
鮮やかさに、三人揃って冷や汗をかいたと後になって話し合ったほど  
である。

ともあれ教官がオレたちの實力を知りたがっているなら応えるま

で。仮にもスラムで何度も繰り返した鍛錬の成果を見せてやろうと意気込み……それはもう呆気なく、笑えるくらい簡単にひねり潰された。

『なるほど、こんなものか』

呼吸一つ乱さず、オレたち三人の拙い猛攻を捌ききった教官の呟きは静かだった。

膝について呼吸を整えているこっちが何を言われるかと身構えていると、彼は滔々と諭すように語り出したのである。

『基本が何もなっていない。我流で鍛えたのだろうが、それでは動作に無駄が多すぎる。ひたすら鍛錬すれば我流だろうとより練磨された技術になるなど、甘えた夢想は捨てることだ。はつきり言って話にならない』

『な、それは……！』

白状すれば、この時はけっこう腹が立った。こっちは正規の剣術を学ぶ機会など無かったし、生き抜くために必死で昇華させた技術なのだ。どれだけ無様に映ろうとも、それをこうも上から目線でこき下ろされるなど。例えば正しいのは向こうであろうと我慢できなかった。

だから、もしムラサメ教官がこれしか語っていないのならば、オレはこの人のことが嫌いだったろう。実力は確かだが個人的に嫌な相手、そういう認識で終わったはずだ。

『しかし五体に染みつかせた努力と研磨の足跡だけは見事だった。お前たちはお前たちなりに、相応な苦しい修練を続けてきたのだろう。ならば次は、正しい苦しみ方をオレが教えてやる』

そして続けて放たれた少しの賞賛は紛れもない本心なのだと理解できたから、トナリ・ムラサメ中尉を嫌うどころか尊敬に値する人だと素直に認めることが出来たのだ。

ただこちらの力を見極め、冷徹に批判するだけでない。努力もまたしっかり認めてくれる相手だと分かったからこそ嬉しかった。オレたちが今までやってきたことは無駄ではない、そう言ってもらえたも同然だったから。思えばスラムで生きてきたオレたちを評価してくれる者なんて、これまで出会ったこともない。



『体力筋力の付け方、剣の握り方、振り方、心の構えまで。例え短い時間だろうと——いいや短いからこそ基礎は全て叩きこんでやる。基礎こそ万事に通じる奥義だ、それさえあればどのような地獄だろうと生き抜けるようになる。分かったか?』

『はい!』

威勢よく返事をしたのはオレだけでない。クリスもアルも、間違いなくオレと同じような想いを胸にしていたはずだ。

今になってさらに分かる。ムラサメ教官のような人物はごく一握りだ。普通の講師や教官はスラム生まれなど気にしないし、たった半年という間に指導を叩きこむのすら無駄と感ずることだろう。こうやって真正面から認めてくれ、講師としての本分を果たしてくれている人に会えたのが奇跡のようなものである。

ぶつちやけ、『正しい苦しみ方』と堂々と言っていたように課される鍛錬ノルマはかなりキツイ。死ぬほどキツイ。加えて勉強面でも手を抜けないのだから精神的にも辛い。たった一ヶ月の間に気絶するように眠りこけたことも割とある。

それでも、衣食住が保証されているだけマシな方だ。次の日の食糧を計算したり草を食べて飢えを凌いだり、ゴミを漁ってまでやるような涙ぐましい生存の努力に気を配らなくて良い。例えスラム生まれと後ろ指を指されようが生きやすい環境なのは間違いないだろう。

「心の構えを作るのは難しいよな。体力とかは分かるくらいに上がったし、剣の振り方もだいたい効率良いやり方を知れたけどさ。精神修養は一朝一夕にはならずか」

「心なんざさういうもんだろ。アイツみたいに心だけでどんな苦境も突破できるような奴だっていれば、俺たちみたいに心の強さだけじゃまだ足りないようなのだっている。弱さも強さもあまざらず知って、それで初めて一人前ってことなんだろうさ。まだまだ悩んでたって仕方ないだろうぜ」

らしくもなく難しい考えを語るアルに、オレも「そうかもしれないな」と呟いた。本当にこの男は、特に計算をしている訳じゃないのにな手く空気を読むというか。まるで気を遣われてしまったようで

ちよつと恥ずかしい。

「そうだ、オレたちはまだまだ未熟者なのだ。」あんな風になりたい  
“だとか、” こういう風に生きてみたい” だとか、理想ばかり追い求  
めても現実との軋轢の前に碎け散るのがオチだろう。別に未熟を誇  
るつもりはさらさらないが、ほんの少しの間に成果が出てないからと  
いって落ち込むのは時期尚早というものである。

「お、向こうもそろそろ終わるか？ クリスの奴もだいぶ食いついて  
はいるけど……」

「経験値が段違いだな。アイツもそりやあ凄い奴だが、さすがに勝負  
の土俵が違いすぎる」

何度となく剣を振っても掠りもせず、逆にジワジワと自分の体力ば  
かりが削れていく。息が上がってもなおクリスは気力で立ち上がる  
が、それすら弁えているかのように教官は油断をしない。適切にいな  
し、的確に身体を動かし、視線と呼吸をしっかりと見ながらクリスの動  
きを先読みし続ける。

「ひとまずはこんなものか。お前の異常なまでの伸びしろにはいつも  
驚かされてばかりだ」

本当に驚いているのか分からないくらい感情の希薄な言葉を手向  
けに、教官がほんの少し右足を前に突き出した。それは言うなれば道  
端に落ちている小石のようなもので、普段ならば絶対に躓くはずがな  
い。けれど今この時だけは違っていて、僅かにズレたクリスの足並み  
を遮るように置かれた足は確かに彼を蹴躓かせたのである。

前のめりに地面へと転びかけてどうにか受け身を取ったクリスを  
見下ろし、ムラサメ教官は静かに剣を鞘へと納めた。既にアルの模擬  
戦は済んでいるから、今日はこれ以上剣で切り結ぶこともない。

「各々、今日はここまでだ。しっかり身体を伸ばして休息を取ってお  
け。空いた時間は無駄にするな、隙間だろうと鍛錬一つ挟む余地は十  
分にあるぞ」

「はいー」

こうして、今日の戦技指導はひとまず終わった。毎度のことながら  
この後に受ける講義は非常に眠くなるのだが、そこは気合と根性であ

る。眠るな、オレ。

◇

トナリ・ムラサメという男から見て、自分の受け持つ三人はかなり特殊な者たちだと断言できる。

それは何故か。決まっている、何せ三人が三人とも――

「凡庸であるから、ですか。ああ、あなたの疑問はよく分かりますとも。私も一目見て同じ疑問をいだいたのですから」

「……お前か」

戦技教導を終えて廊下を歩くトナリを呼び止めたのは、この士官学校始まって以来の秀才とも称される青年だ。まだ入学してから一年程度しか経っていないだろうに、明晰な頭脳の評判は誰もが知っている。知らないのはそれこそ不定期に編入されては半年で消えていく、スラム出身の者たちくらいのもだろう。

だから当然トナリもまた知っている。教導官として彼に剣を教えたこともあった。拍子抜けするくらい簡単に剣の術理を盗み取った癖に、それでもなお驕って努力を止める事がない気真面目さは好感すら覚えるほどだ。

けれど、この青年への評価は好感だけでは収まらない。能面のような無表情、眼鏡の奥に輝く理知的な青い瞳、それらはまるで人間をデータか何かで見ているようで、どうしても不気味さを覚えてしまいがたないのだ。

そのような男が、いったい何用なのか。いいやそれより、どうして自分が彼らのことを考えていると理解し、同意すら示してきたのか。底の知れない先読みの具現は知っていてもなお驚嘆しか浮かばない。「ムラサメ教導官、あなたから見て彼らの評価はどうですか。おそらくは私の考えている通りでしょうが、忌憚なきあなたの言葉を聴かせてほしい」

「……才能に恵まれている、などとは口が裂けても言えんだらう。劣等生ではないが、優秀でもない。どこまでも才能それ自体は普通であり、お前とは比べることすらおこがましい」

全てありのまま事実だった。クリストファー・ヴァルゼライドも、

アルバート・ロデオンも、マルガレーテ・ブラウンも、飛びぬけた才能を持つわけでは断じてない。いうなれば中の中、スラムという生まれも加味すれば中の下と評しても差し支えないだろう。

眼前に立つ青年のような、一を聞いて十を知るような明晰な頭脳など望むべくもない。一を聞いて一を知る、そんな当たり前の存在こそ彼らである。

「しかし、素養それ自体は凡庸だろうと誰より努力を続ける様は抜きん出て強い。それこそ才能差が何だとはかりに諦めない。前を向く。不平を漏らさず、弱音を吐いてもすぐに立ち直り走り出す。お前たちのような温室育ちの者には望むべくもない力だ」

「これは手厳しい。だがしかし、あなたがそう言うのなら間違いないでしょう」

あの三人の中でひときわ目を引くのは、やはりヴァルゼライドだろう。彼はそれこそ努力と決意の概念が人になったかのようで、どんな状況だろうと諦めないし怠らない。一步一步は常人並の速度しか出せずとも、それを常人では及びもつかない反復で補っているのだ。あと数か月もすれば、この士官学校でヴァルゼライドに匹敵できるようになるのは目の前の青年と、友人である二人の男女を置いて他に居なくなるのは間違いない。

「アルバート・ロデオンも中々見応えのある男だが……俺としてはマルガレーテ・ブラウンも興味深い。本人は力不足に悩んでいるようだが、はつきり言って杞憂だろう。例え模擬戦だろうと俺と打ち合えている時点で実力は非凡の域に達している」

これがただの大言壮語でないというのは本人のみならず青年もよく分かっていた。もしこの場で完璧に不意を突かれ複数に襲撃されたとしても、鼻歌混じりで切り抜け襲撃者は殺される。彼の炯眼ですらトナリを敵にすればその未来しか読み取れないのだから。

だからそんな男から高評価を得ている時点で、マルガレーテ・ブラウンもまた努力の徒であることに疑いはない。ただ目指したい友が規格外すぎるだけであり、十分すぎるほどに常人からは逸脱した存在なのだ。

「ならば、それを本人に伝えても良いのでは？　そうやって本人たちの自発的な力に任せるのは、ご老体の悪い癖だと思いますが」

「構わん、どうせ俺が言うまでもなくどうにかするだろう。それこそ、そういった心に関しては何デオンが一步先を行っている。中々良い組み合わせだよ、あの三人は」

とにかく前進していくクリストファー・ヴァルゼライドと、その背中を追いつつまだ一般人側に寄っているマルガレーテ・ブラウン。二人と上手く付き合いながら心の面では先を行っているだろうアルバート・ロデオンが調和を取る。まさしく惹かれ合うべくして友となった者たちだ。

「さて、それにしてもこんな事を俺に聞いてどうするのだ、お前は？

確かにアイツらは興味深い教え子だが、何がお前の興味を引いた？」  
「——私には一つ、信じてみたい夢がありました。いや、それが絵空事だという自覚はあるのですが、もしも現実に可能ならばきっとこの世は良くなるだろうという夢が。もしかしたら彼らは、私にそれを教えてくれるかもしれないのです」

そこで初めて能面のような表情をした青年——ギルベルト・ハーヴェスは口元に薄ら笑いを浮かべた。三人の行きつく先にある未来を待ち望むかのような、祈っているかのような、寿いでいるかのような。今までの無感情が嘘のように感情豊かな笑みを浮かべて佇んでいたのだ。

「可能性は極小だ。あまりにも低い。けれどそれを乗り越えるような事が、もしあるというのなら……」

希望の光を見つけた敬虔な信者のようなその姿に、初めてトナリはギルベルトの本質を垣間見たような気がした。

## Chapter 12 まるで小さな砂粒のような Fate

正直に言っつて、思った以上に呆気なく士官学校での半年は過ぎ去つていった。

勉強して、鍛錬して、食べて、寝て、時には怒ったり時には笑ったり。人として当たり前の、されどスラムでは絶対に不可能な恵まれた生活を送ることができたのだ。勉強なんて辛いだけ、鍛錬なんて苦しいだけ。そう考える人が多いのは事実だし否定もしないが、それでも不満は少しもなかった。

この価値はオレたちをスラム出身と嘲笑う者たちにはきつと理解できない、オレたちの胸だけにある宝物だろう。だからこそ他の者たちの墮落やら蔑視を受けてもなお、三人で正道を貫くことが出来たのだから。

「ま、そういう訳でオレたちもめでたく戦場送りつてことだけどさ。どうする、何が入用だと思うよ？」

「私服は一着あつた方が良くないんじやないのか？ オレたちの着てた襦袢なんざ有つても仕方ないしよ。後は日用品の類も用意しとかねえと」

「あまり持ち込める私物は多くない、必要最低限で済まさねばな。その辺りはしつかり弁えておけよ、二人とも。ピクニックに行くわけはないのだから」

人の波をかき分け歩きながら「そりやそうだな」と答えておいた。雑踏の中ではぐれないようにするのは一苦労だが、俺よりもだいたい背の高くなった二人が居るから意外と困らない。

あと数日もすれば俺たちは士官学校を卒業し、ついに東部戦線に送られる。だからその為に入用な物、特に私服や日用品の類を持つてない俺たちは、与えられた一日だけの休暇の間に買い求める必要があつたのだ。

アドラー帝国の街並みは、同じ首都の一部といえどスラムとは比較

にならないくらい活気と清潔さに溢れていた。誰も彼も、生きるのに必死じゃない。綺麗な服を着て、笑顔を浮かべて、当然のように日々を送っている。別に誰が悪い訳でもないし、その事自体の是非を問うても仕方ない話なのだが……やっぱりどこか、羨望とも嫉妬とも思える感情が渦巻いてしまう。

「……まあ、今更いってもホントに仕方ないよな」

「どうしたよレーテ？」

「いや、何でもないよ。それにしても、ちゃんと給料自体は出してくれるつてのが意外だったなーつてさ。ぶっちゃけ『お前たちに払う金なんざねえから！』とか言われても不思議じゃなかったし」

「あ、それはすごい分かるぜ」

見習いだからまだ正式な軍人ではないのだが、実は給料も出ているのだ。前世に照らし合わせてみれば研修時にも発生する給料だろうか。さすがに正式なものに比べれば雀の涙としか言えないが、スラムで稼いでいた僅かな金額よりもなお多額である。

それだけかつてが頭のおかしい環境だったと痛感すると同時、こうしてマトモに金を持てた事実が嬉しいものだ。まあその金も軍から支給されない私服だとか、そういう私物を買うために消えていくのだから。今も軍服のまま街中を歩き回ってるので割と違和感はある。軍事国家だからそこまで変に思われてないが、早く着替えたいたいものだ。

「つーか、私服と言っても何をかうよ？俺たちってそういう知識全然ないだろ？」

「……確かにな。こればかりは学ぶ機会も全く無かった。そもそも俺は私服など必要ないと考えているが」

「おいおいクリス、ここまで来てそれ言うのかよ。さすがに毎日軍服なんてのもどうかと思うし、もう少し自分のことも気にした方が良さぞ」

「構わん、そういったものは俺には不要だ。むしろお前たちに俺の分まで渡してしまっても良いと思ってるが……」

「いや、それこそ友人としてどうなのよって話だ。使わないにせよ取り敢えず持つとけよ、それはお前のもんだろ」

相変わらず頑なで、しかも自分の欲が薄いクリスマスだ。たかが私服一つ、確かに必要ないかもしれないが……軍服おおやけと私服わたくしを分ける線引きは大事だとオレは思う。それが要らないという事はつまり、彼には公私の公しか存在しないという事だ。

スラムの頃から見慣れた在り方、いつそ清々しいくらいに潔癖で自己に対して緩みがない。だからカツコ良い男だと信じているが、こうしてふとした瞬間に物悲しくさせられるのもどうかと思う。

ちよつとだけオレとクリスマスの間に沈黙が流れるが、それを遮るようにアルが割って入って来た。大雑把に肩に手を置きこちらへと笑いかけてくる。

「ま、考え方は人それぞれってことさ。むしろクリスマスが変なことに金を使い出したら俺はひっくり返って驚く自信があるぜ」

「そ、そういうもんかあ……う？」

「確かに、もし俺が散財でも始めたらそれは偽物だろうな。その時は二人が斬り捨ててくれることを願うばかりだ」

「お、おう……」

それはクリスマスなりの冗談なのか、それとも真面目に考えた末の言葉なのか。

何だか珍しいものを見た気がして、オレもアルも揃って曖昧な返答しか出来なかった。

◇

結局、買い物自体はほぼ滞りなく終了した。

そもそも大部分——例えば下着や歯ブラシ、タオルなど——は軍から支給されているので当然のだが、買うもの自体はそう多くない。なので必需品の買い物自体は半ばおまけのようなものであり、どちらかというところオレの本命は都会の探索にあったといえよう。スラムの外をじっくり歩くのは初めての経験なのだから。

「おーいクリスー、本当に良いのかー？」

「何度も言わせるな、構わないと言っている。俺は外で待っているから好きに見てくるといい」

「マジかよ。んじゃまあ、俺とレーテだけで行ってきますか。がさつ



なレーテならそう時間かからないだろうし、ぱっぱと終わらせてくるさ」

なんてやり取りが見つけた服屋の前であり、ひとまず失礼なアルの頭を引つ叩いてから入店した。かつて纏っていた襪褌とは文字通り格の違う服の数々には、あまり衣装に興味のないオレでも目が右往左往してしまう。

もちろん、だからといって女性服のセンスなんざ微塵もないので、店員さんに頼んでそれっぽく似合うものを用意してもらったが。でもスカートは即刻却下した。今までは他に無いから我慢していたのだが、これでもうあんなスースーする格好とはおさらばである。

そんなこんなで見た目の良い服装案をいくつか選んでもらい、その中から出来るだけ安く済むのを買ったのだが――

「……で、こうなるのもどうなのよ」

「良いじゃねえか、割と似合ってるぜ。なんつーかレーテらしいな」

「そりやどーも。確かにスカートじゃないけどさあ……」

白いシャツにカーキ色のズボンを履いたアルは、オレからしても中々シンプルにまとまっている。素朴だがそれ故に飾らない良さがあるというべきなのか。これにエプロンでも付けたら元不良少年とは思えないくらい優しそうな見た目である。

一方でオレの方とは言えば、白いワイシャツにグレーの薄い上着と、黒いショートパンツに水色のストッキングという格好だった。まあ確かにスカートじゃないし、一つ一つの値段は安かったので高く付いてはいないものの……まさかタイツを履くことになるうとは。恥ずかしさとはまた違った違和感を覚えてしまうものである。

「なんかこう、ぴっちりしてるといいうか……どうしよ、やっぱり普通のズボンに変えてこようかな。スースーはしないけどこれはこれでどうかと思ってきた」

「いやいや、別にそうしよっちゅう着る訳でもないし気にしなくともいいだろ。それよりクリスマスも待たせてるから早く行こうぜ」

「むむむ、確かに……ならもうこれで良いか」

別に個人的な感覚以外に嫌なところは一つもないのだ。動きやす

いいし、普通に可愛い服装だなとも思う。

ただ何となく、女性らしい格好に未だ抵抗感が残っているだけで。客観的に見たらオレは間違いなく女性なのだし、誰もこの姿を気にすることはないだろう。

なので開き直ってこの格好で通すことにした。どう足掻いても今生では女性なのだ、いい加減にそれを受け入れなければ始まらない。会計を済ませ、着ていた軍服を入れた袋を抱えて店の外へと出た。アルの方は先に出ている。

「悪い、待たせたな」

「問題ない。無事に気に入った服を買えたのなら幸いだ」

そんな事を言ってくれたものだから、ふとオレは訊いてみたくなった。こんな男でも誰かの外見について、なにがしかの感想を持つことがあるのだろうか。

「どうよ、オレのこの格好はさ？ 似合ってるか？」

「ああ、よく似合っていると思うぞ。アルも言ったことらしいが、お前らしい装いだ」

「あ、ありがとよ……お前がそう言ってくれるなら、私も嬉しいよ」  
余計に今の格好を意識して、ちよつとだけ頬が熱くなったのはきつと気のせいじゃないだろう。

うん、素直に嬉しかったのだ。そればかりは否定するのも惜しいと感じて、照れ隠しに俯くのがだった。

◇

その後はのんびりと適当に必要な物を買いがてら、帝都を歩きに歩き回った。

雑貨屋に入って色んな品物を見物したり。

パスタが美味しいらしい店に入ってみたら、出てきたのがまさかのうどんにミートソース乗つけたものだった。

運よく東部戦線を生き延びればたどり着けるだろう政府中央棟セントラルの正門まで赴いてみたり。

他にも他にも、未知のアレコレを求めて三人で歩き回った。この半年はずっと士官学校に居た訳だから、こうしているだけでも凄く楽し

い。見るもの全てが新鮮という驚きは、今しか味わえないものだろう。

そして陽が傾き始めたところで、オレはある願いを口にした。

「なあ、最後にスラムの方に寄っていかないか？ 何だかんだあそこも思い出がある訳だし、ちよつとだけ行ってみたいんだけど……」

「おう、奇遇だな。俺もまさに同じことを考えてたさ。やっぱりこう、自分たちの過去を振り返っておくのも必要かなと思つてさ」

「……なるほどな」

貧民窟はオレたちの始まりの場所であり、惨めな生活を強いられた肥溜めのような場所である。けれど、そんなところだろうとオレたちの故郷であるのも間違いない訳で、最後かもしれないなら一度は見納めしておきたかったのだ。

というオレの提案に、アルは乗り気だがクリスはちよつと迷つてる。やはり彼からすれば悪の温床たるスラムに訪れるのは嫌なのだろうか。それとも何か、他に理由でもあるのか。どこか迷っているようなクリスの姿は、今日何度目かも分からない見慣れないものである。

「別に嫌ならクリスは先に戻つててくれても構わないけど……」

「いや……俺も同行しよう。自らの過去を知るというのもまた、間違はなく大切な事の一つだ。俺個人の感覚どうこうの前にな」

「なんだよクリス、お前は嫌だったのか？」

「嫌というより、過去は振り返るものではないと考えている。礎にして未来を目指すならともかく、そればかりに拘泥してしまえば後ろ向きな思考に偏つてしまつてしまうだろう。未来とは、明日まえを目指す者だけが掴める特権なのだから」

なるほど、その考え方も一理ある。オレたちはひたすら前を目指して突き進む者であり、そこで後ろ向きになつてしまえば足を止めてしまつてしまうだろう。あるいは後悔だとか、悲しみだとか、どうしようもない感情に囚われることもままあるはず。誰よりも光を目指して歩む者にとつて、過去うしよとは迫りくる闇に他ならないのだ。

だけどもあ、それだつて一念的なものだろう。過去から得るもの

だつてたくさんあるし、礎にしてこれからも頑張ろうと決意するのも立派なことだ。クリスマスだつて頭では理解しているから、嫌とは言い切らずに理解を示す姿を見せたのだ。

「ならさっさと行こうぜ。あんまうだうだしてたら日が暮れちゃうし、原点を確認するのも悪いことじゃないハズだ」

「よっし、なら行くか！ ほら、クリスマスもな！」

「分かっている、そう急かすな」

そうして華やかな帝都を抜けて、廃れたかつての住処へと足を踏み入れる。たつた半年程度離れていたくらいじゃ何も変わらない、底辺の掃き溜めと称すべき土地。飢えた子供たちがこちらへ好奇の視線を超越すのを自覚しながら、悪に染まった少年たちが虎視眈々と狙ってくるのを警戒しながら、数年間を過ごした懐かしきねぐらへと歩を進める。

果たして、ねぐらにしていた廃ビルは変わらずそこに聳え立っていた。崩れかけた威容はそのままに、住む人が消えてより寂れたようにも見える。何だかそれが少しばかり寂しくて、隣に立っているクリスマスとアルの方を見た。

「どしたよ？」

「いや……変わらないものがあるのは良い事だなってさ」

言葉少なに答えてから、静かに足を踏み入れた。何年も何年も住んでいたねぐらだから、楽しかったことも辛かったことも昨日のように思い出せる。置かれているボロ布も、かろうじて生きていた水道も、貯め込んだニユースペーパーも、全部がそのまま残っている。

「……そのまま？」

「埃も積もらず、やけに綺麗に残ってるな。まるで誰かが触れたかのようにだ」

半年も放置していたのだ、もう少し荒れていてもおかしくない。なのに意外なほど綺麗に残っているということとは、つまりこのねぐらに誰かが入り込んだのか――

「誰か住んでるってことか。おーい、誰かいるのかー？」

「あつ、おいアル!？」

「良いじゃねえか、こういうのは呼びかけてみるのに限る」

廃ビルの中にアルの声が響き渡る。しばらく反響して、それから残響も消えていって、ようやく静かになったところで奥の方から物音がした。ちやうどこちらから死角になっているスペースだった。

出てきたのは、黒髪の少女と少年だ。おそらく姉弟なのだろう、少年の方はまだ三歳くらいに見える一方で、少女の方は十歳手前くらいに見える。おそらく七、八歳くらいか。

「……あなた達、誰？ 怖い人なの？」

「あー、いや悪い、驚かせるつもりはなかったんだ。何といひかな、昔ここに住んでた人だよ」

「住んでたの、お姉さんが？ とてもそうは見えないけど」

「色々あってな、今は軍の方に居るんだ。それで今はどうなってるのかなーって思ってた来てみたんだけど……あはは」

ヤバい、滅茶苦茶警戒されてる。弟らしい子供を背後に隠して、姉として精いっぱい意地で向き合っているのが丸分かりだ。足が震えてるし、声音から警戒心を隠そうともしていない。このスラムに善人なんてほとんど居ないと理解してるのだ。

これはどうしたものだろうか。さっさと退散するのが一番なのだろうが、それはそれで此処に来た甲斐がない。けれどいつまでも警戒している子供を前に大人げないこともしたくないし……さてどうしよう。

「おいアル、何かお菓子とか持ってるか？ 甘い奴かそういうの」

「いいや、持ってないつうの。てか買おうとしたときに『ピクニツクじゃないんだし止めとけ』って言ったのはお前だろ」

「げっ、そうだったか……」

オレとアルが情けなくコソコソと相談する横で、クリスは静かに懐から小袋を取り出した。それは彼の所持金が入っている財布であり、ほとんど私物を買ってないからまだまだ潤沢に余っている。

それをあろうことか、クリスはそのまま少女へと手渡した。いきなり手のひらに乗せられた重みに、さしもの彼女も面食らったような顔をしてクリスを見つめ返している。

「あの、お兄さん、これ……」

「あまり芸が無いとは思いますが、俺には必要のない代物だからな。お前が有効に扱おうと良い」

「でもこれ、本当にいいの……?」

「構わない。今の俺に出来るのはこの程度だからな。けれど待っていてくれ。俺が必ず、お前たちが胸を張って過ごせる世界を築いてみせると。身勝手な大言壮語に思えるかもしれないが、そう誓わせてくれ」

まるで押し付けるかのように金の詰まった袋を渡して、クリスはそう締めくくった。少女の方はかなり困惑気味だが、それでも返そうとはしない辺り結構したたかだ。

オレとアルはいえば、予想外すぎる行いに言葉が出ない。同類とどうか、スラムの後輩とはいえまさかそこまでしてしまうとは。本当に欲が無さ過ぎるし、弱者を救うために躊躇うことを知らない男だと感心してしまう。もしここに居たのが別の人間であろうと、間違いなくクリスは同じことをしていたはずだ。

「その、本当に貰ってしまつて良いの?」

「……まあ、クリスは良いつて言うなら良いんだろうさ。俺たちが止める義理もない」

「そつか……ありがとうございます。これで私も、ゼファーも、もう少しだけ生きていける」

彼女はもしかしたら、クリスと出会えなかったオレなのかもしれない。スラムという誰も信用できない世界に放り込まれ、擦り減りやつれて野垂死ぬ。そんなありきたりな未来しか、もはやその先に残っていない哀れな少女だ。

けれど彼女にオレたちが出来ることなど一つもない。今やオレたちの所属はアドラー軍であるから世話を焼くなど出来ないし、他に渡せる物もない。ほんの少しだけスラムで生きる時間が伸びるだけで、結局最後は本人がどれだけしぶとく生きていけるかに掛かっているから。

「まあそうだな……勝手な言い分かもしれないけど、スラムだろうと

光はある。絶対にあるんだ。前を向いて希望を抱けば、道は必ず開けるとオレは信じてる。難しいかもしれないけど、どうか忘れないで欲しい。明日はきつと、今よりも少しは良くなるはずだから」

無責任な言葉という自覚はあるが、それでも言わずにはいられなかった。オレはこうしてどうにか生きられたのだから、彼女も同じように生きられるかもしれない。その希望を少しでも持つてほしかったのだ。

少女は困ったように微笑んでから、オレたちに背を向けて隅へと下がった。これ以上こっちに構うつもりはないという事だろう。寂しいが仕方のないことだ。こっちもこれ以上は長居せず、そそくさとかつてのねぐらに背を向けて立ち去った。

これで今度こそ、本当に過去との決別だ。あの廃ビルもオレたちの足跡は消え去り、次第にあの姉弟へと染まっていくのだろう。吹けば飛ぶような小さな小さな砂粒でも、前を向いて生きてくれると信じている。いいや、もはやそれしか出来ないのだ。

「なんつーか、昔の俺たちを見てるようで辛いわな。そりや底辺じやこんなことが日常茶飯事だなんてよく知ってるけどよ……」

「貧民窟<sup>スラム</sup>で生きる奴らをさ……全員どうにか幸せにするにはどうしたら良いんだろうな」

「そんなこと、決まっているだろう」

堂々と、どこまでも力強くクリスは答えた。太陽の如く燃える決意が、瞳の奥に強く強く輝いている。

「このアドラーを変えれば良いのだ。せめて自らの手で未来を切り開けるような、そんな国にすれば良い。出来る出来ないではなく、成し遂げるのだ。例えどのような不条理に襲われようとも」

そうだ——勘違いしてはいけない。

今こうして居るオレたちだって、先の少女と何も変わらない。一歩間違えれば呆気なく死ぬような戦場で、勝利を掴み生き延びる必要があるのだから。戦うのは彼女だけでない、オレたちもまた同じだった。

戦い、生き残り、そしてその果てに勝利を掴むのだ——。

そして迎えた士官学校卒業——と言ってよいかは知らないが——の前日、グラウンドに集まったオレたち三人はムラサメ教官と最後の模擬戦闘を行う直前であった。

うん、白状すれば自分でもこの展開には驚いた。せめてお世話になった相手に挨拶をしようという事になり三人で教官の下へ出向いたのだが、気が付けばあれよあれよという間に剣を握って対面していたのである。

「さあ、お前たちがこの半年の間に学んだことを見せてくれ。生半可なら戦場に出るまでもなく俺が斬り殺してくれよう」

別に武器を交えて挨拶をしなくとも良いのではと感じたものの、こういう方がオレたちらしいと思えたので。

次の瞬間には三人揃って教官へ足と剣を踏み出していたのである。

◇

剣と剣が重なり合い、甲高い音が周囲に響き渡った。余韻も冷めやらぬうちにもう一撃、さらにもう一つと鋼が噛み合い金属音を奏でて止まらない。その度にこちらは苦しい顔になるというのに、相手——ムラサメ教官は涼しい顔で少しも揺らぐことがないのだ。

だが、この戦いはオレ一人で行っているのではない。ひとときわ大きく弾き飛ばされたのを合図に後ろへと下がっていけば、待ってましたとばかりにアルが後方から駆け抜けていく。

「レーテ、入れ替わるぞ！」

「了解、クリスのフォローに入る！」

即座にオレとアルの位置が入れ替わる。前もって決めておいた手順によってスムーズに攻めを切り替えたオレらは、前面でひたすら教官へと食らいつくクリスのフォローをさらに続けていく。作戦通りメインアタッカーはあくまでクリス、三人で円を描くように教官を囲みながらオレらは彼のサポートとして戦況を優位に導くのだ。

三対一という卑怯さも感じられる戦い方だが、これを教えてくれたのは他ならぬムラサメ教官である。一人が注意を引きつけ、他の二人



が背後や側面から叩いていく基礎的なやり方。言ってることは誰もが思いつく簡単なことだが、流動的な戦闘中にこれを実行するのは意外と難しい。

「足運び、呼吸、連携……全部合わせてようやく多人数での戦いは成り立つ。そうでしたよね、教官……！」

「その通りだ。数だけ揃えたところで連携も何も無ければ烏合の衆に過ぎない。単純だからこそ必要とされる要素は多岐に渡り、それを満たせれば容易には打ち破れない必殺の戦法になるのだ」

位置を入れ替わるタイミングの共有、相手の隙を見逃さない洞察力、互いが行動の邪魔にならないようにアイコンタクトや身振り手振りを交え、常に有効な立ち位置をキープし続ける――

困んで叩くという簡単な戦法でも、実はこれだけ多くの要素が絡み合って初めて成り立つのだ。この半年の間にみっちり教えられた基礎はしっかりとオレたちの血肉となってこの戦いに活かしている。

基礎こそ奥義であり、簡単なことほど後になって有用となってくる。この短い間に教官がオレたちに伝えたかったこととは、つまりそういうことなのだろう。

「とはいえ、まだまだ俺を仕留めるには練度が足りないな。あと十年もしたら出直してこい」

けれど、逆を言えばだ。三人に常に包围されている状況でなお一歩も引かない教官の技量はオレたちと隔絶した位階にあるのは間違いない。

クリスの無駄のない抜刀術を捌きながら、背後に回ったオレの一撃を身を捻ることで容易く躲し、身体の軸がぶれたところをアルが狙えばそれすら予定調和のように剣で弾いて逸らしてしまう。まるで魔法のように攻撃が少しも当たらないという現象を前に、ジリジリと焦燥感ばかりが募っていく。

「本当に、強い……！」

「落ち着け、レーテ。自棄になって冷静さを失えば教官の思うつぼだ」「つと、悪いな。ちよつと熱くなつてた」

落ち着け落ち着け、ここで連携を崩してしまえばオレらの勝ち目は

皆無となってしまうのだ。どのような時でも冷静に状況を見極め慌てることをしてはいけない、そう教官から教わったのを思い出せ。

特に命のやり取りをする戦場においては普段通りの行動が出来ない者から死んでいくと聞かされた。弱気になって縮こまってしまふとか、逆に強気になつて積極的に前に出てしまふとか、そういう精神がブレた者から死んでいくという。

「だがまあ、仲間との支え合いという意味では良い連携だろうな。ややヴァルゼライドに頼り気味ではあるが悪くない、そうやって仲間を諫めたり信じたりできるのは良いことだ」

人殺しの戦場においては尚更な——教官はそう締めくくった。微塵の躊躇いもなく刃に殺意を乗せてこちらへと向けてくる。これは模擬線だから本当に斬られるはずがない、そんな甘えた感情を抱けば次の瞬間に身体が二つになっていると確信できるほど。一瞬だけ身体が震え、けれどすぐに持ち直した。

……自分でもたまに忘れそうになるが、オレはかつて人を殺している。突き立てた錆びたナイフの感触を忘れることは出来ないし、殺人という禁忌に対して「こんな程度か」という感想を覚えたのもよく覚えているとも。

今更殺しを躊躇ったりはしない、とつくの昔に一線を越えたのだから。命のやり取りをする戦場に恐怖が無いと言えば嘘になるが、別に逃げ腰になつてしまう程ではない。それは何故か、決まっている。

だつて一度でも躊躇つてしまえば、クリスはオレを置いてどこまでも進んでしまう。彼は躊躇うとか迷うとかそういう余分が少しも無いから、オレが惑っている分だけ前へと突き進んでいくのだ。ならばオレもまた躊躇などしてられない、どんな地獄だろうと隣に光があるのなら、間違いなく踏破できると信じるのみ。

この模擬戦闘はそれを確かめるために重要なことなのだ。相手は強大、オレごときが敵う存在では決していない。それでも光があるから諦めずに挑み続け、これから先の戦場も乗り越ええらえると証明する。何よりもまず、自分自身に証明してみせるのだ。

その最中でふと、教官がこちらへと問いを投げた。別に惑わそうと

するつもりとかではなく、純粹に疑問を感じたかのような呟きだった。

「お前たちは何のために軍へと志願したのだ？ 真つすぐでひたむきなお前たちのこと、例えスラム生まれといえど他に道はあったように思えるが……それを知らずにむざむざ死地に送るというのも寝覚めが悪い。なあ、何がお前たちを突き動かしたのだ？」

「ははは、そりゃ勘違いですぜ教官」

流れるように剣を振るい位置取りを変えながら真つ先にアルが苦笑してみせる。教官の誠実で裏表のない疑問に対して、「何故今更そのようなこと聞くのか？」という呆れにも似た感情を抱きながら。

「例え真つすぐでひたむきで、隣には誰かに自慢したくなるほどすげえ友達がいたとしても、俺たちスラム育ちは最初の時点でどん詰まりなんですよ。いくら頑張ったって理不尽は唐突に訪れる、俺たちが軍に志願したのだって食うに困ってやむを得ずがほとんどでした。教官だってアドラー帝国の血統主義はよくご存知でしょう？」

「……なるほどな。これは愚問だった、こちらの非礼を詫びよう」

例え上位の一族に仕える従者の家系であろうとも、トナリ・ムラサメ教官は間違いなく恵まれた側の人間なのだ。少なくとも飢えに困ったことはないだろうし、身の回りの品にすら困って数年間も同じ服装だったことなんて一度も無いはずだ。

悲しいかな、いくらお互いに敬意を表し嘘偽りのない評価をしようと思いがたい溝は確かに存在してしまう。底辺の気持ちは底辺にしか分からないのだ。貶すつもりが欠片もなくなつて認識の差は確かに存在してしまう。

「では、さらなる非礼を承知で訊かせてくれ。お前たちはその意志の力で何を成そうとする？ 明日を生きるためか、それとも飯のためか。いいや、何か胸に抱いた大望があるというのか。ここで一つ、俺に聞かせてほしい」

「知れた事、少なくとも俺の目指す行いなど一つだけです。悪を許さず善を貴び、今日涙を流した者が明日は笑えるような世界を作る。手段や順序などどうだって良い、やると決めたから俺は成し遂げてみせ

たいのです」

胸に抱いた覚悟を炎と燃やしながら今度はクリスが力強く答えてみせる。やはり迷いなど一欠片とて存在しない。

彼は、オレが憧れるこの男は、いつだってそうなのだ。“自分がそうと決めたから”、たったそれだけの理由で意地でも意志を貫き通す。そして抱いた決意は正しい方向性のものであり、誰かのために身を粉にして止まることがない。いつかオレを助けてくれた時のように、そうしなければ気が済まないという理由だけであらゆる無茶を薙ぎ払うのだ。

果たしてそんな荒唐無稽な信念を聞いたムラサメ教官は――

「この国を変える、か……他の誰が言おうと無理だと断言してやるどころだが、誰でもないお前たちが言うのなら希望は持てる。ならばやってみるがいい、俺の教えた技術がその助けとなるのなら見応えもあるというものだ」

「教官……？」

「なに、老人の楽しみが一つ増えたというだけの話だ。お前たちの活躍でもう少し教え甲斐のある生徒が増えてくれれば、この仕事にも誇りを持てるものだからな」

その言葉を最後に教官が強引にこちらの包囲を突き破り、そして刀剣を鞘へと納めた。これで模擬戦闘は終了という合図なのだろう。不意打ちで訪れた静寂にしばし三人並んで呆気にとられ、ついで教官の動きに倣って武器を収めた。

戸惑い気味に教官を見やるオレたちに、彼は初めて少しだけ微笑んでみせてから、

「これに俺の講義は全て終了だ。後はお前たちの努力と決意次第で道を開くことは十分可能だ、使い捨ての兵士ごときで終わってくれるなよ。教えた俺の沽券にも関わるからな」

そのような言葉をかけてくれたから、オレたちも一斉に頭を下げて感謝の言葉を述べたのだった。

◇

教官と最後の挨拶を交わした後、オレたちはすぐに自室へと戻って

荷づくりの最終準備に取り掛かった。もうほとんどの準備は終えているので後は足りないものがないか、忘れ物がないかを確認する程度だ。

模擬戦闘の余韻も少しずつ冷めながら黙々と準備を終え、ほとんど三人同時に荷物となる小さめのトランクケースの蓋をパタンと閉じた。呆れるほどに少ないが、元よりスラムから持ち出したオレたちの持ち物なんて一つもないのだから是非もないか。

「明日からは戦場か……いざそうなるとビビるもんだな」

「一応言わせてもらえば、意外と人を殺すことってのは平気なもんだよ。少なくともオレはトラウマになったことなんざ一度もないから安心してくれ……っていうのも変な話だけだ」

「ありがたいお言葉をどうも。つーかその話は前にも聞いたわ、すっげえ驚いたから今でもよく覚えてるぞ」

アルの軽口も普段よりかは覇気がない。無理もないだろう、軍事帝国の兵士として最前線に赴くのだ、むしろ怖がらないという方がどうかしている。ここで落ち着いていられるのは戦争狂いの破綻者か、今も無言を貫きベッドに腰かけているクリスくらいのもだろう。

「つうかクリス、お前マジでこの国を変えようって決意してるのか？

冗談でも何でもなく本気か？」

「ああ、本気だとも。確かに俺たちのような者が軍の上層部に至った前例はないだろうが、ならば俺たちもまた不可能と諦めるか？ いいや、否だろう。誰かのために生きて死ぬし、悪を許すつもりも毛頭ない。俺がやりたいことはたったこれだけだからな」

「……まったく、お前は本当に他人本位に見えて自分本位な奴だよな。しかもそれが悪いことにはちっとも思えないから凄いいし性質が悪いっつうかよ」

普通なら、「この国を変えたい」と願ったところで「現実的に考えて無理だから止めよう」となるのが道理だ。オレだってスラムから這い出したいとは願ってもスラム自体を無くしたいとまでは思わなかった。それは無理だと無意識のうちに常識が訴えかけてきたからだ。

でも、クリスを見ているとどのような絵空事でも頑張れば叶うので

はないかと錯覚してしまう。現実はまだまだ辛いしクリス自身目的を達成している訳ではないのに、何故か無条件に信じられてしまうのだから。

「そういうアルとレーテこそどうなのだ、お前たちには何か夢や目的があるのか？ あるというのなら俺もまた微力ながら応援くらいはさせてもらうが」

「夢や目的ねえ……今のところオレの目的なんざ一つきりだよ。ひとまず、いつまでもクリスと友人で居られればそれで良いさ。お前に相応しい自分であれるように頑張れば、後は自然となるようになるだろう」

「俺も自分に正直に生きられればそれで良いさ。昔みたいな奴に戻りたくはないし、ほっとくとすぐにも突っ走っちゃう奴が二人もいるからな。それで楽な暮らしが出来るようになればそれで良いのかもな」

別に夢とか目標とか、そんな大層な目的なんて抱いてない。そもそもスラムからの脱出が目標だったはずなのに、気が付けば軍属という形で叶ってはいる訳だし。そういう意味でも本当に「クリスの友人として立派になりたい」くらいしか目標が残っていないのだ。

まあオレも人並みに欲とかはある訳だし、出世して偉くなりたいくらいの願望やぼんやりとある。軍事帝国だけあつて軍功を立てれば出世も夢じゃないとは聞くし、ひとまず具体的な目標として「高官になる」くらいは有って良いかもしれないが。

何にせよやることはスラムだろうと戦場だろうと一つも変わらない。それを改めて理解出来ただけ十分だと思おう。

「ともあれ、夢や目標の話はひとまずこんなところで良いんじゃないのか？ それよりもほら、オレたちが送られるところの確認でもしとこうぜ」

「えーっと確か、旧・ドイツ領の——」

「フランクフルトだったな。そして当面の目標は、アンタルヤに占領されているベルリンを帝国の領土とすることだ」

旧・ドイツ領のフランクフルトとベルリン。かつての巨大都市こそ

オレたちの初陣を飾る戦場だった。

t

旧暦の地理に当てはめてみると、およそフランスが存在した位置に現在のアドラー帝国首都は存在する。

そこから軍事国家として侵略戦争を続け、アドラーは千年の間にジワジワと国土を拡大していった。周囲の国を屈服させ、軍備力を整え、さらにさらにと手に入れた力で他国を侵略して憚らない。すべては帝国の繁栄のため、気が付けば国土は最初期の数倍にまで広がり新西暦でも屈指の国となっていたのだ。

しかしそれも現在では頭打ち、弱小国が次々と淘汰されていく中でしぶとく生き残り幅を利かせる大国というのも確かに存在する。彼らこそ帝国の進撃を止める最大の要点であり、今もなおバチバチと火花を散らす最大の敵なのだ。

北は旧・ブリテン領に存在するカンタベリー聖教国。極東黄金教をエルドラド・ジパング掲げるこの国は領土拡大の意欲は低く帝国と衝突することも多くはないが、そのぶん大和の遺物が絡めば打って変わって重い腰を上げてくる。

東は旧・東ヨーロッパ地域一帯に領土を構えるアンタルヤ商業連合国。様々な国が連合して成り立ったこの国は、十氏族と呼ばれる豪商一族たちが日夜血みどろの権力闘争を繰り広げる蟲毒の底だ。けれど外敵に対しては一致団結する姿勢も見せ、普段の武力争いが嘘のように手を取ることも珍しいことではない。

そしてこのアンタルヤこそアドラー帝国の進軍を阻む現状最大の敵であった。商業国だけあって経済的な強さはかなりのものであり、他国との貿易に加えて武器の製造から麻薬の密売まで何でもござれだ。さらにアンタルヤで一旗揚げようと目論む傭兵や暗殺者も多く有していることから、戦力的な意味でも決して帝国に劣ることはない。

端的に言って厄介な国。それがアドラーからのアンタルヤの評価



であり、幾度となく武力衝突してもなお終わりの兆しが見えることはない。もう戦端が開かれてから何年も経過したはずの東部戦線だというのに、未だ最前線と言われるゆえんの一端はここにある。

——けれどこの膠着は、ついに動きを見せることになる。

今はまだ誰も知らないただの一兵卒でしかないクリストファー・ヴァルゼライド。後の英雄となる彼がこの東部戦線に配属された時から、アドラーとアンタルヤの版図は大きく塗り替わる。彼と、その盟友たちの活躍が冗談のように戦線を変化させるのだ。

まずはその序章、まだ新兵だった彼らの配属された先は旧・ドイツ領の一大都市フランクフルト。旧暦からここまで残り続け現在まで存続した歴史あるこの地から、彼ら彼女らの新しい運命の歯車は静かに回り出す。

◇

アドラー帝国の誇る黄道十二星座部隊の中で、東部地域を担当するのは主に二つだ。

第六東部制圧部隊血染処女と、第八東部駐屯部隊狼追地蠍である。この二部隊が東部方面を受け持ち、また最前線であることから兵隊の数も十二部隊の中で最も多いという。

オレたちが配属される先は第六部隊の血染処女の方だ。正直部隊長の名前を聞いた時からあまり良い予感はないし、そもそも最前線の一兵卒になるのはやはり不安も大きいのだが……ここまですぐにばやるしかない。腹を括ろうではないか。

なんてことを考えつつも東部への移動は問題なく進み。

アドラーからの列車がフランクフルトの駅に到着したのは、正午も過ぎて早くも太陽が雲に隠れだした頃だった。

「へー、ここがフランクフルトか……さっむいなあ」

蒸気駆動の列車から降りた途端、身を刺すような冷気の洗礼に見舞われる。のんきな感想と共に零れた吐息は白くなっていて、しかも手袋をしているはずの指先がかじかむような寒さであり、トランクケースを掴むだけでも一苦労だ。さすがに北の方だけあってアドラー首都とは比較にならない外気温である。車内に置いてあったストーブ

が早速恋しく感じられてしょうがない。

とはいえこのまま列車に戻れば首都へと逆戻りなので、厚手の軍服に感謝しつつ身を縮こませた。スラムで冬を乗り越えた時はたいいてい三人で薄布に包まり身を寄せ合ったものだが、それに比べればまだマシである。

「いやあ、長旅で背中や肩がガチガチだわ。ジツとしてるだけでも疲れらつてのは贅沢だなおい」

「同感だ。何もしないよりは鍛錬に身を置いている方がよほど性に合っている。まさかこの程度の時間で身体が鈍ることもないだろうが……」

「心配性だなクリスは。まあちよいと筋肉は固まってるだろうけど、ほぐせば大丈夫だろ」

肩を回しつつ降りてきた二人と軽口を叩きながら、オレもならつて軽く腕を伸ばしたりしておく。なんてことはない列車の旅、外の景色を眺めるのも楽しかったが身体が強張って仕方ない。

なんてことをしていたら他にもぞろぞろと新配属の新兵たちが駅のホームへと溢れ返り、さらに引率役のなんとか少佐に引き連れられて一気に移動を開始する。さすがに軍人なので勝手な私語は慎んだが、好奇心に負けてキョロキョロと周囲を見渡してしまふ。

フランクフルトの駅は旧暦と新西暦の混じったような装いだ。所々に旧暦らしい自動改札や照明などの名残が散見される一方で、普段一般市民が使うような改札は古き良き駅員さんが切符を売って制御している。鉄で出来た頑丈な壁は前世かつてに見たものと似通った雰囲気を感じ取れるが、壁には篝火を刺しておくための受け皿？ がある始末。近未来なのか十九世紀なのかよく分からないこの光景こそ新西暦といった具合だ。

「なあレーテ、フランクフルトってこんな寒いもんなのか？ 雪まで降ってきてこりやヤバいだろ」

「気持ちは分かるが我慢しろって。フランクフルトならこんなもんらしいぞ」

駅を出てアドラー帝国軍の拠点に向かう道すがら、トランクケース

を引きずる音に紛れてアルから不意に話しかけられた。ひそひそ声で答えつつ空を仰げば、確かに分厚い曇から雪がしんしんと降り始めているのではないか。そりゃ寒いはずだ。

「確か冬になると最高気温の時点で五、六度くらいまで落ち込むとかなんか。でも夏はわりと暖かくて過ごしやすいらしいぞ」

「そりゃいいや、夏まで生きてられれば最高じゃねえか。はー、こんな街並みを好きに散策してみたいもんだぜ」

「下手して麻薬でも売られたら大変なことになるけどな。どうするよ、そんなことにでもなったら」

「馬鹿言え、そうなたらすぐ軍に報告してしよっぴいてやるよ。……ま、新米の俺が何できるかは知らないが」

旧暦の頃もこのフランクフルトは犯罪が結構多い都市だとは聞いていたのだが、今になってもなおそのジंकスは変わっていないらしい。特に麻薬被害には手を焼かされているらしく、治安維持をするにも一苦労だと士官学校で習っていた。

このフランクフルトの都市は中心にメイン川という巨大な河川が流れていて、今も昔も貿易の要所となっている。しかも現代では飛行機もなく旧時代的な鉄道や自動車程度しかないので、河川のルートはより重要だ。そのため帝国もこの地を東部における前線拠点の一つとしているらしいが。

「色んな物品が流通するせいで麻薬やら何やらも次から次に紛れ込んでくると……世知辛いよな全く。冗談抜きで街歩いてたら変なもの売りつけられてもおかしくなさそうだ」

「確かニルヴァーナだっけか？ 迷惑な野郎だぜ全くよ……」

アルが呟いた『ニルヴァーナ』とは、アンタルヤ商業国に根城を構えると言われる巨大麻薬組織の名である。どうやら手広く麻薬関連の商売をしているらしく、莫大な利益を得てはアンタルヤにも還元しているとか。そのくせ組織の主要な拠点はおろか詳しい麻薬流通ルートすら判然としていない秘密性の高い組織であり、アドラー側が是が非でも潰したがっている勢力の一つだった。

ちなみに“ニルヴァーナ”とはうろ覚えの記憶によれば仏教の用

語らしく、要するに煩惱を捨てた悟りの境地とかなんとか。これもう覚えだが涅槃とも言い表されていた気がする。

まあ確かに麻薬を吸って多幸福感にでも酔いしれれば、その瞬間から煩惱を捨てて俗世のことなどどうでもよくなってしまうのかもしれない。好きに夢を見て現実など忘れてしまえ、俺たちはそうして金を手に入れると。随分と皮肉が効いているし反吐が出る思想だ。

「現実から逃げたところでしようもないだろうにな……そりや嫌なことなんざたくさんあるだろうけど、だからって人生棒に振っちゃ全部お終いだろ」

「確かにそうだけどな。でもやっぱ現実辛いもんさ。正しいことを正しいようにやれる奴なんざこの世には一握りだ。誰だって夢を見たいし、嫌な事からは逃げたいもんだ。麻薬なんてふざけた代物だろうとな」

「そういうもんか……」

「そういうもんさ。誰もがお前やクリスマスみたいに強くは生きられる訳じゃない。辛いことがあつても頑張つて乗り越える、そいつは見た目よりずっと重労働だ」

昔の俺がそうだったようにな、そうアルバート・ロデオンは締めくくった。彼なりに実感の籠もった言葉にオレとしても口を噤むしかない。

別にオレは自分自身が強い心の持ち主だなんて考えたことは一度もない。ないのだが……もしかしたらそれは、無意識に驕りとなっていたのかもしれない。アルの態度を見て改めてその反省をさせられる。

しかしだからといって、麻薬などといった非合法のブツに手を出す気持ちなど欠片も分らない。理解したくもない。

「難しいもんだな、色々と——」

「おい。レーテ、アル」

ちよつとばかり感慨に耽っていると、唐突にクリスが話に割って入ってきた。彼はこれまで真面目に無言を貫いていたのにどうしたのだろうか。

「なんだよ急に」

「興味深い話をしているのは分かるが、もう少し静かにしろ。さすがに目立っているぞ」

「あー……ごめんなさい」

気が付けば周囲の視線がかなり突き刺さってしまっている。どうやらアルと二人で話し込みすぎたみたいだ。

こんなことで叱責を喰らってもご免である。なので誤魔化すように愛想笑いを浮かべながらアル共々ペコリと頭を下げ、それ以降は口を噤んで歩くこととしたのだった。

◇

フランクフルトの街並みも駅と似たような具合に近未来と旧時代的な施設の入り混じったものだ。

旧暦から残っている高層ビル群が異質を放つ一方でチラホラと煉瓦や石造りの家屋も混じっており、また遠くの方にはうっすらドイツらしい装いの建築物も残っている。マイン川を横切る川も旧暦のものから新西暦になって新たに建造されただろうものまであり、新旧入り乱れる情緒を感じさせる。

そんな不思議な街並みを見物しながら歩くことしばらく、ようやく我らがアドラー帝国軍の拠点に到着した。引率の少佐に続いてぞろぞろ兵が入っていくのは、まさに旧暦から残る高層ビルの一つだった。

「大きいなー……」

首都にある政府中央棟も非常に広大な面積を誇るが、高さだけでいえばこっちのビルの方がよほど高い。新西暦になってからは技術衰退の影響でビルが増えることも全くなかったそうだし、このビルも立派に貴重な建築物の一つとも言えよう。帝国軍が拠点にしてるのも頷ける話だった。

踏み込んだ内部はよくある広めのエントランスとなっているが、機械類が完全に全滅してる影響で電力は一つも通ってない。ビル内も駅と同じく松明や蠟燭で灯りが取られており、自動ドアは手動ドアに、電子ロックは機能せずエレベーターはただの箱となっているよう

だ。

こういうところでも新西曆まと旧曆むかしの差異を感じられるのは楽しいやら寂しいやら。あまりにも今更だが、やはり自分が生きている世界がガラツと変わったことを強く実感させられる。

ともあれエントランス脇の幅の広い階段でどんと上層へと昇っていき、四階まで辿り着いた辺りで一つの大部屋へと到着した。そこはどうやら廊下や部屋を仕切る壁をほぼ全て取り払って作った大部屋らしく、一フロア分が丸々集会場のようになっていた。

「総員整列！」

少佐のよく通る低い声が木霊し、全員が即座に綺麗な列となって直立する。この辺りは士官学校で散々習ったことでもあるからオレたちにも戸惑いはない。軍隊なんて縁遠いと思っていたのに気が付けば適応してるのだから人間万事塞翁が馬と言うべきか。

集った人数はおよそ七十人程度、フロアの半分にも満たない程度の面積を占めている。この時期に配属される輩はだいたいオレたちと似たような理由持ちだろうし数が少ないのも頷ける話だった。

なんて考えている内に、前方の少し高くなっている舞台に一人の男が登壇した。まだ若い男だ、たぶん三十代に足が掛かった程度だろうか。神経質そうな細身の体軀は、失礼ではあるが前線で戦う者とは思えない貧弱さだ。たぶん文官系の人物なのか、あるいは――

「君たちは本日付けで黄道十二星座部隊グの一つ、第六東部制圧部隊バルゴ血染処女所屬となる。その部隊長である私から君たちに求めることは一つだけだ」

そうして彼は表上は友好的に、けれど口調と瞳には隠そうともしない侮蔑の念を込めてオレたちを舐めるように見渡した。あまりにも分かりやすいその態度に、こちらも表には出さず内心で嘆息した。

配属先の部隊長の名を聞いた時点で覚悟はしていたが、やはりアドラーの血統主義にガチガチに凝り固まった人物であるようだ。であれば次に飛び出す言葉も想像に難くない。

「我ら帝国のために生きて死ぬ。それだけが君たちが生まれた意味であり、この場にやって来たただ一つの至上命題なのだから。役に立つ

てくれたまえ、それすら出来ない者は生きる価値すらないのだから」  
ああ、全く。本当に分かりやすくっていつそ笑えてきてしまう。スラムの屑はその程度がお似合いだと突きつけ笑う様は絵にかいたような「傲慢な貴族」であり、悪い予想をこれっぽっちも裏切ろうともしてこない。オレ以外もだいたい予想はついていたのか、特にざわめくことなく彼の言葉を受け止める。

カイト・影・アマツ。それが血染処女部隊長の名前であり、アマツの血筋に系譜を連ねる東部戦線の指揮官であった。同時に実力ではなく家系によつてのみ成り上がった者であり、だからこそ前線の者らしくもない貧相な身体つきなのだろう。軍人として真つ当に身体を鍛える必要すら今の彼には存在しないのだ。

「まあ良い、誰がどのように役立つかは君たちの頑張り次第だ。あるいは思いもよらぬ方向で力を発揮できることもあるかもしれないが……」

言つて、改めて値踏みするようにオレたちを見渡す。その視線がほんの一瞬だけオレのところまで止まったように感じ、無意識に身体が強張った。細められた視線はこちらを女として標的にしたかのようにも見えて……考えすぎの自意識過剰だと信じたい。その手の危険はもうお腹いっぱいだし勘弁してほしいのだ。

「どうであれ、諸君らの健闘を祈ろう。ベルリン侵攻予定はこれより二週間後、それまでは各自戦いに向け余念のないように過ごすべし。詳細はまた追つて連絡する、以上だ」

最後の最後に部隊長らしく真つ当な事を述べ、影隊長はオレたちの前から去つて行った。そのまま少佐の方からこれからの通達と解散の指示が出たため、ひとまずそれに従い動き出す。やはりというかこの高層ビルの一室がそのままオレたちの自室となるらしかった。

上の方へと向かつて階段を上りつつ、隣のアルとクリスへこつそり舌打ちする。話題はもちろん先ほどの部隊長についてだ。

「なんつーか嫌味な感じの隊長だな……あれだ、慇懃無礼っていうのか？」

「俺も同感だぜまったく……そんな感じはしてたけど、いざ会ってみ

るとやっぱキツイわ」

「アレは相手を対等と見ていない故の態度だろうな。言葉の端々に士官学校で経験したような悪意が滲み出ている」

やはりアルやクリスも同じように感じたらしい。特に人一倍正義感の強いクリスのこと、あのように大した努力もせず高官の地位に就いている手合いは嫌悪とはいかずとも好かないだろう。オレはもっと直截的ちやくせきに嫌いと言断言してしまうが。

話しながらも階段をひたすら上り、上り、たぶん十階層くらいはさらに上ったところでようやくオレたちに用意された自室へと来た。ここでもやはりオレたち三人は同じ部屋としてまとめられているらしい。たぶん面倒だからいっしょくたにしたとかそんな理由だろうが、どう考えてもこの方がありがたいので良しとする。

雑にトランクケースを放り出して荷物の整理を始めがてら、二週間後に想いを馳せる。

「にしても初陣が大規模作戦つてのもどうなんだって話だけだな。もうちよつと楽な任務から始めたのが本音だわ」

「確か現時点での国境線はこのフランクフルトとベルリンの中間くらいなんだっけか？　そこから戦線を押上げてベルリンまで侵攻すると。つたく、考えるだけで眩暈がするぜ」

「だが同時にチャンスでもある。ここで手柄を立てることが出来れば、俺たちもまた不当な扱いを受けることはなくなるはずだ。何より帝国繁栄の切っ掛けとなるなら無茶でも何でもやるしかあるまい、そのためにここまで来たのだから」

旧・ドイツ領に陣取る二つの国家。それがぶつかり合う日までほんの二週間程度しかない。移動中の列車の中で大まかに話は聞いていたが、いざ部隊長の口から聞くとより現実味も帯びてくる。

オレたちはその作戦用に連れてこられた肉壁みたいなものなのだろう。ほぼ消耗品じみた扱いであり、正規に軍人となった者たちの踏み台となるのが影部隊長らの描いた未来図であるはずだ。

——だがそのような道理、オレたちが知ったことはない。

どんな不条理に見舞われようと必ず生き延びてみせる。心が諦め



さえしなければ、絶対に現状を踏破し打ち破ることは可能なのだから。

「例えどれだけの困難があろうとも、決まっている。勝つのは——」  
「オレたちだ。そうだろうか？」

頷いた二人の親友と共に、まずはこの東部戦線最初の作戦を無事に生き残ってみせるのだ。

あまり良い印象を抱かなかった顔合わせの翌日、さっそく戦闘に向けて新たに武器が支給される流れとなった。いつまでも士官学校時代の武器では前線で渡り合えない訳だし、それ自体は何一つ異論ない。

今朝には各々に適性のある武器が配られ、今は自室で三人揃って確認しているもの――

「おいおい、これがオレたちに支給される武器なのかよ……」

「マジか……冗談キツイぜ」

「さすがに予想外だったな、まさかここまで冷遇される立場にあるとは」

武装の貧弱っぷりはこちらの予想を遥かに突き抜けるようなものであったが。

三者三様に苦言を漏らして顔を見合わせる。あのクリスマスですらいつもの不屈の闘志ではなく、呆れとも驚きとも付かない色を瞳に浮かべているのだから相当なもの。それくらい、兵士としてオレたちに渡された武器たちは貧相なものだった。

内訳はオレに支給されたものが直刀一本と旧式拳銃が一つ、クリスとアルにはそれぞれ刀剣が二本という具合だ。それだけなら大したこと無さそうだが、生憎とどれも新品ではなく使いまわしの品である。第一、仮にも軍事帝国を名乗るからには銃は貴重でも出し渋るほどの武器ではない。取り分け拳銃程度なら一人に付き一つくらいは平気で量産されていると基礎教育で教わっていた。

それすらほとんど渡されないとなれば……上層部の悪意が透けて見えるようである。元より剣一本で前に出る覚悟はあったが、実際に銃火の只中を“これだけで戦ってこい”と示されてしまえば心証も悪くなる。コスト削減の一環というのは理解できるが共感までは永劫できないことだろう。

こんな部隊で戦って大丈夫なのか——オレたちに共通した想いだった。

そして同時に、このくらいでへこたれないのも同様である。

「しかし、元よりこの程度は皆で想定していたはずだ。スラム出身は冷遇されると知っていたなら驚くに値しない。ならば次は結果を見せる、それだけだ」

「だな、今度はオレたちの方が上を驚かせてやる番だ。目にモノ見せてやらなきゃな」

「全くだ、むしろムラサメ教官に習ったことを活かせるチャンスだと思えば待つてましたってくらいだぜ」

やる気は十分、不遇なんて慣れたものだ。これを跳ね除けてこそオレ達らしいというもの。むしろここにきてまで不平不満を延々吐き続けるならば、そんな懦弱は去れば良い。

覚悟も新たに直刀を左腰に提げ、拳銃は懐へと仕舞い込んだ。ずつしりとした重さが今は無性に頼もしく感じられる。かつては剣を振るうのだった一苦労だったのに、気が付けばよくもまあここまでになったものだ。

などと考えていたら、アルの方は刀剣を一つ装備したきりもう一本を神妙な顔で見つめている。

どうしたのかと思えばいきなり「よしっ」と一言意気込んで、

「おいクリス、こいつはお前が使えよ」

「何?」

言いながら右手に持っていた武器をクリスへと差し出した。突然の一声にクリスも怪訝そうな顔つきで聞き返す。

「俺は二刀流なんてやってこなかったからな。予備にしてもちと重いし、お前が使った方が効率的だろ」

「申し出はありがたいが……本当に良いのか? わざわざお前の物を俺に渡す必要など——」

「二度も言わせんな、俺が良いって言うてるからいいんだよ! お前みたいな凄いな奴が使った方が武器だって本望だろ? 俺がわざわざ二本も持ったって宝の持ち腐れってやつだぜ」

その強引ながらアルらしい言い草に思わず吹き出してしまった。本当にまあ、彼は彼でオレと同じくらいクリスのことを信じているというか。いくら自分に不必要とはいええこうも躊躇いなく渡せてしまふ辺り、やはり気持ちのイイ奴だと思う。

クリスもまたその想いを汲んだのか、それ以上は何も言わなかった。

「ならばお前の心意気をありがたく受け取らせてもらう。その代わり、この剣で必ずや勝利を掴み取ってみせると誓おう」

「そう固くなるなよ、互いに要所要所で助け合えば良しき。だってほら、俺たちは友達だからな」

「……なるほどな。まったく、本当にお前らしい理屈だ。素直に尊敬する」

「……………おーい」

気が付けばいつの間にかオレだけ蚊帳の外である。なんだこれ、男同士の友情の確かめ合いなのか？ オレだって元は男だし自然に割り込んでいけるはず。そうは思うものの、今は女なのでなんか入り込み辛い空気があった。

一抹の寂しさを覚えて軽く自己主張。いつも一緒だった三人組のはずなのにオレだけ仲間外れなのは少しばかり心に来る。これが思春期というのだろうか。

「二人だけの世界に浸るなってんだ。オレのこと忘れんな、オレのこと」

「ああ、悪い悪い。レーテちっこいからすぐ視界から見えなくなっちゃまってよ」

「いや待てよ、その煽りは初めて聞いたぞ！ 別に小さくねえし、そっちが一気に身長伸びすぎなんだよ！」

「えーと、俺とクリスが一七〇超えてて、レーテがまだ一六〇未満だったっけか？ ああ、悪いなこりゃ」

「あのなあ……………」

呆れながらアルの頭を叩こうとして、ごく自然にオレは背伸びをしてみてください。なんだろう、この敗北感と楽しさは。いつの間にか

んな差が出来ていたのかと驚きながら、それでも変わらない関係に安心してしまう。

これじゃさつきまで寂しさを感じてたオレが馬鹿みたいではないか。それくらいいつも通りのバカ騒ぎで、クリスマスもまた止めることなく見守っている。いつも通りのオレたちの光景だった。

と、クリスマスがふと胸襟の中に手を入れた。彼には似つかわしくないチェーンのネックレスが引っ張り出され、その先には古ぼけた安物の指輪がある。

「忘れてなどいないさ、お前の分の想いはしっかりと貰っている。それも含めて俺は勝利を掴むのだ」

「——なんだよ、まだ持つてくれてたのか、そんなのをさ」  
「当然だ。こんな俺を友としてくれる存在を無碍にできるはずがない」

いったい何年前の話だろうか。いつかクリスマスに送った安物のお守りじみたネックレス。質実剛健を地で行くようなクリストファー・ヴァルゼライドが唯一身に帯びている装飾品が、よりにもよってオレの贈ったものだなんて。しかもそいつを今もすっかり所持しているなんて正直考えもしなかった。

懐かしさと嬉しさと誇らしきがない交ぜになって心の中を支配して憚らない。ちよつとだけ泣き出しそうになったのは、やっぱり女になったせいで涙腺が緩んでるからだろう。でもこの感情を素直に表現できるなら、別に嫌なことではないと素直に思えた。

「ホントにずるい奴だよな、クリスマスはさ……自分だけでどこまでも突き進める癖に、たまにそんなこと言いやがって」

「そう言われてもな……俺はせめて当然のことをしているだけだが」  
「だからだよ、全く。それが当然だなんて、臆面もなく言えるからずるいんだ」

ならばせめてその想いに報いられるように、オレはオレの願いを貫き通したい。

こんな格好良い男の隣に立てるような凄惨な奴に。いつか決意した誓言を改めて噛み締め、うつすら滲んだ涙を拭いた。結局これくらい

で泣いてしまうなんてちよろい女だ、だけど否定する気はないしさせもしない。

「で、なんだよ、これじゃ俺がすっかり場違いって感じじゃねえか。おーい、俺のこののけ者にしてんじゃねーぞー」

「分かってるっての、ここまで来たらオレたち三人で最後に死ぬまで一緒だろ。言わせんなよ」

「いや、俺そこまで重たいつもりで言っていないからな!? どうしたレーテ!？」

「んー、なんだろうな、ちよつと場の空気に酔ったのかもしんない」  
アルの言葉に笑いながら応えた。嘘や誤魔化しは微塵もない、心からの本音である。

ほんの少しのことで落ち込んだり、泣きそうになったり、また大笑いでもしてみたり。なんだか今日は自分の感情にとても素直な気がするが、いいじゃないかそれくらいは。もしかしたらこうやって馬鹿騒ぎ出来るのも最後かもしれないのだ、なら全部話してしまっても悪くない。

「なんだか悪かったな、変なことばっか言っつてさ。こつからはいつも通り、オレたちに来れることを頑張っつてみようぜ?」

「……ま、そうだな。時間もそう多くないんだ、一秒だつて無駄には出来ないか」

「正しいことを続ける、それだけが俺たちに許された道だ。であればやるしかないだろう、どのような茨の道であろうとも」

正しい努力が報われるとは限らない。これだけ息巻いているオレたちだつて、戦場に出れば呆気なく死んでしまうかもしれないのだ。まあクリスが呆気なくやられるなんて考えられないが……とにかく、一筋縄ではいかないだろうし死に物狂いになるのは間違いない。

それでも、やるのだ。何度繰り返したかも知れないが、まだ言わせてもらおう。心一つでどうにかする、それが出来なければ何も始まりはしないのだから。

◇

それから思ったより大したこともなく時間は過ぎていった。

どうにも反感を覚えてしまった影隊長とは最初の顔合わせ以外で特に出会うこともなく、オレたちは軍隊として訓練に励んだりたまにフランクフルトの街並みを見物するといった具合だ。ありがたいが身構えてもいたこちらにしては拍子抜けである。

ただよく考えてみれば、隊長格がたかがスラム生まれの一兵卒を一々差別する方が面倒だろう。あの時に感じた嫌な視線もやはり気のせいだったと思い直し、来るべき戦争へ向けて牙を研ぐ毎日である。

そして——ついにこの日がやって来た。

「攻撃目標は旧・ドイツ領におけるテューリンゲン州に敷かれた現国境線、そこに張られたアンタルヤの防衛網を突破することだ」

ガタゴトと揺れる軍用車の中、淡々と影隊長の語る声が無線越しに伝わってくる。オレも含めて車中にいる十数人全員が、隊長からの命令を聞くべく張り詰めた空気をまといだす。

既に作戦の数日前に突入し、前線で戦う兵士たちは当然フランクフルトからの移送が始まっていた。オレたちはかなり最後の方に移動させられている組であり、準備期間は多かつたぶん現地に到着したら待ったなしで戦線が開かれることだろう。

なので車中では大人しく体力の維持に努めていたのだが、上官からの命令が流れ出せばそうも言ってはられない。

「かつて緑の心臓とも呼ばれていたこの地域は、その名の通りに木々が多く見通しが悪い地帯が多い。そのせいでゲリラ戦が頻発しやすく、我々アドラー帝国は動きの軽快なアンタルヤの傭兵たちに苦戦を強いられていた」

特にニルヴァーナの雇った精鋭にして懐刀にはな——そう隊長は言葉を濁した。余程煮え湯を飲まされてきたのだろう、苛立ち混じりの声音が通信機越しに伝わってくる。

軍隊は厳格な上下組織である一方、行動については融通が利かないこともままある。上からの命令を待っているせいで現場の思考が硬直化したりする、なんてことはその最たる例と言えるし、かといって命令違反に走れば必ず良い結果が出るわけでもないのだから難しい。

まあ今のアドラーは結構上層部が腐敗しているところはありますが……それは脇に置いておく。

だが翻ってアンタルヤはどうか。あちらは国家としての軍隊は大したことがない代わりに、潤沢な資金で傭兵を数多く雇っては戦場に出してくるのが基本だ。

彼らは国のためではなく金と地位のために戦う。なので忠誠心や愛国心はないが、動きに制約がないので非常に身軽である。襲撃や撤退の判断の見極めが上手く、また最小限の被害で最大の被害を与える術に長けているのだ。

そのような傭兵たちがよりにもよって木々に囲まれ視界や足場の悪い地帯を戦場に選べばどうなるか。その答えが先ほど影隊長の述べていたようなゲリラ戦法であり、地味ながら非常に強力この上ない。このせいで単純な兵力では勝るアドラー帝国軍をして今の国境線から先に進むことは出来ないでいたのだ。

「しかしそれも今回の作戦で終わるだろう。アンタルヤの守りを突破し、帝国の国境線をさらに押し上げる日は近い。故に君たちに私から要求することはただ一つだ」

——実はこれまで、オレたちは今回の作戦の詳しい概要はほとんど聞いていない。

だから今回の作戦の肝が何処にあるのか、オレたちがどのような戦えば良いのか、詳しいことはこれまで何も聞かされていなかった。一兵卒の扱いとしてはそこまで不思議でもないだろうが、上官が上官だけにやや疑念は残る。

果たしてこれまで説明されていなかった、この東部戦線の行く末を左右する中でのオレたちの役割とは何なのか。予想は付くが、それでも固唾を飲んで隊長の言葉を待つ。

「派手に戦い、最後の最後まで一人でも多くアンタルヤの者を倒すことだ。命令はこれだけ、それ以上は期待しない」

その言葉を最後に通信機は無言となり、車中にはガタゴト揺れる音だけが虚しく響きだした。対面に座るアルやクリスも含め、全員が今の命令ともいえない“玉碎指示”に考えを馳せているのだろう。



最初の顔合わせから理解していたが、やはりあの隊長はこちらのことを捨て駒程度にしか考えてはいないのだろう。その上で今回の命令の意味を考えれば、数にモノを言わせた物量作戦か、あるいは陽動にして自分たちは裏からアンタルヤの拠点に攻め込むかのどちらかだろう。前者だと印象が悪いを通り越して無能な指揮官でしかないと思うので、せめて後者であることを祈るばかりだ。

誰もが無言のまま車は進み、日が沈んだ頃になってようやく停車して揺れが収まる。ついに到着したのだ、東部戦線の最前線へ。

車外へと降りてみれば、そこは丘陵地帯に造営された古風な村のようになっている。れつきとしたアドラーの拠点として目まぐるしく人が行きかっていた。さらに視線を太陽と反対の方角へと向けてやれば、微かな光の中にぼんやりと森林が広がっているのが見て取れる。つまりアレこそ、アンタルヤの守りの要たる天然の要衝なのだ。

「ついに来たんだなあ……」

軍用車が忙しく動き回り、そこら中で人や物が行きかう慌ただしさ。松明や篝火の明かりも含めて一大作戦の真ただ中という空気であり、改めて自らの置かれた状況を肌で感じ取ってしまう。

きつとアンタルヤもこちらの動きは把握しているだろうから、森に踏み込んでしまえば容易く生きては帰れないだろう。迎え撃つ用意は当然あるだろうし、オレたちはその渦中で捨て駒となりながら生存を目指さなければならない。

ただし、そのためには“絶対に戦ってはいけない存在”というのも確かにいる。ひよつこのオレたちでは逆立ちしても敵わないような強大な相手、そいつと出会えば確実に殺されるという情報はこの数日の間に仕入れていた。

影隊長が苦言をこぼしていた“ニルヴァーナの精鋭”、麻薬組織が護身のために雇った傭兵らしいのだが、彼らはそのままこの東部戦線でも帝国軍を相手に猛威を振るっているらしい。それも当然、アンタルヤの景気が傾けば麻薬の売買も難しくなるから当然というべきか。

「傭兵団、“血塗れの雛罌粟”か……洒落た名前の癖にとんでもないよ」

——いわく、皆殺しの傭兵団。

——戦闘狂ばかりが集ったとんでもない組織。

——首領と戦って生き残った者がいないから、リーダーの情報が一つも存在しない。

どれもこれもすさまじい逸話である。狂犬としか思えないくらい戦闘に振り切れた傭兵団だが、それだけに戦場の機微にも聡く引き際も鮮やかなのだとか。規模はほんの十数人程度しかいないらしいのが逆に恐ろしさを際立たせる。

あまり後ろ向きに考えたくはないものの、こんな奴らとは出来れば遭遇しないことを祈るばかりだ。オレだって普通に命は惜しい。勝てない相手へ無謀にも挑むのは勇気でなく蛮勇であり、ハッキリ言っ  
てやりたくない。

「だけど、まあ。もしクリスが「それでも俺は戦う」と言うのなら。きつとオレは、どこまででも着いて行ってしまおうのだろう。」

## Chapter 16 戦場を駆ける者／First

巨大麻薬組織ニルヴァーナ。涅槃の名を冠するこの組織は、アンタルヤ商業連合国に根を下ろす十氏族の一つと密接な関係があると言われている。

仮にも国の最大手が犯罪組織と蜜月の関係にある訳だが、ことアンタルヤにおいてそれは問題とならない。何故なら、この国では経済力と権力こそ全てなのだから。多少の犯罪に手を染めていようと揉み消し煙に巻くなど朝飯前、大した手間にもなりはしないのに得られるメリツトは膨大となれば是非も無い。

なにせ麻薬とはすなわち金の生る木だ。秘匿性の高い栽培環境さえ整えてしまえば、末端価格での儲けは何十倍、何百倍にも跳ね上がる。麻薬中毒となった者たちの人生を踏み躪るという行為さえ許容できてしまえば、これほど楽に稼げる仕事も他に無い。

だからニルヴァーナと手を結んでいる十氏族が麻薬組織を保護するなど当然の成り行きだったし、そうして得られた金はステータスにも力にもなり得る莫大なもの。組織としても、その十氏族としても、絶対にニルヴァーナを壊滅させる訳にはいかないのが共通の見解だった。

例えばそう、敵対氏族の足を引っ張ろうと画策する者から。

正義感に駆られた自警団や麻薬の被害者家族たちから。

果ては麻薬被害を憂い組織の壊滅を企むアドラー帝国軍まで——このような輩の手より組織を守る必要性があるのだ。現にニルヴァーナはその本拠地や流通ルート含め数多の敵から幾度となく探りを入れられていた。

にも関わらず未だ誰一人としてニルヴァーナの尻尾を掴むことから出来てないのが現状だった。これほど大々的に名前や存在を知られているにも関わらず煙を掴むように成果は実らない。あまりにも不可解な実態の背後には、彼らの雇う腕利きの傭兵たちが居るともつばらの噂である。

名を、“血塗れの雛罌粟”<sup>ひなげし</sup>といった。

いったいどのような経緯で巨大麻薬組織お抱えの用心棒となったのか、今では誰も知る者はいない。ただ一つ確実なのは、彼らの暗躍のおかげで今も犯罪組織がのうのうと生き残っている事実だけ。どのような密偵を送つても返り討ちにされ、また何処からか情報を仕入れては先回りして敵対者を潰していく。果ては戦場にすら駆け付け、猛威を振るいアンタルヤの領土と影響力を維持するまでなつているとなれば、その厄介さは計り知れないものがある。

もはや一組織の用心棒という枠組みからは外れているし、国家にすら頭を抱えさせる高い実力は大したものだ。戦場で出会つても決して戦つてはいけないという評もあながち、どころか欠片の誇張もない真実だった。

そんな彼らの次なる目的は東部戦線の戦況を遅延させること。強欲にも帝国にまで麻薬の手を伸ばしているニルヴァーナとしては、今より国境線が押し下げられてしまえば確実に儲けが少なくなつてしまう。それを避けるべく用心棒を前線に出すという矛盾した荒業さえ行つてみせるのだ。

そして今、旧・ドイツ領の森林地帯にて。彼らの暗躍は静かに始まっていた――

◇

テューリンゲンにおける戦線が開かれてから、既に数時間が経過している。

満を持してのアドラー帝国軍の侵攻に対し、その動きを察知していたアンタルヤ側も即座に応戦を開始した。長閑な森林地帯は瞬く間に血と鉄の嵐が吹き荒れ、そこかしこで銃声と怒号が飛び交う激戦地へと変貌したのである。

状況としては現状五分五分と言えるだろうか。軍事帝国として軍備に一日の長があるアドラーは質も物量もアンタルヤ側を上回るが、代わりに地の利はアンタルヤが一步先を行く。森という地形を上手く活用したゲリラさながらの戦法と、時間をかけて構築された防衛線は容易な突破を帝国軍に許さない。

だから戦況はほぼ互角であるのだが――例外が二つ、ここに存在し

た。

「つまんねえな」

森の中、吐き捨てながら大剣についた血を振り払ったのはまるで雲を突くような巨漢であった。刈り込んだ頭部、鍛え上げられた肉体、傷だらけの顔は歴戦を示すように男に箔を与えている。そのうえ身の丈にも匹敵するような大剣を担いでいるとなれば、誰が見ても「コイツは強い」と警戒してあまりあるだろう。

そして実際、その警戒心は限りなく正しかった。男の足元には血だまりに沈む五人の帝国兵たちの姿がある。鎧袖一触、行きがけの駄賃とばかりに彼らと交戦したこの巨漢は汗一つとてかかず勝利を収めてしまったのだ。

いいや、それだけでない。この現場以外にも彼は何人も何人も斬り殺し、簡単にその命を奪っている。さながら移動する台風のように彼の進んだ後に敵は残らない。拮抗しているはずの戦況も、この男が本気で動けば即座に塗り替わることだろう。

——東部戦線における禁忌<sup>タブー</sup>、交戦してはならない者たちとされる傭兵団“血塗れの雛罌粟”。その内の一人、仲間からはクラックと呼称されているのがこの巨漢だった。

「……………捨て駒されてもな」

クラックはゆつくりと剣を収めると、無防備にも戦場の真ただ中で葉巻へと火を付ける。森という視界の悪い中、奇襲を恐れる素振りすら見せないのは強者の余裕ゆえか。紫煙をくゆらせて佇む彼の心境はあまり穏やかではない。

その大柄な体躯と真逆に寡黙な彼だが、この戦場には一言二言物申したいことがある。例えばそう、雑兵ばかり当てられてもただの作業にしかならない事とか。『戦場を左右する一騎当千』を求められても、それは英雄の領分だという不満とか。もつと言えば雇い主<sup>ニルヴァーナ</sup>の依頼とはいえ、そもそもこのような辺境で戦っている事とか。

はつきり言ってる気に欠ける。士気が上がらない。仕事だから任務はきっちりこなすが、どうにも独り歩きしてしまった“血塗れの雛罌粟”の評判を考えると頭が痛い思いだった。

「強い奴、どこかにいるかね……」

他の構成員がどうかはともかく、少なくともこの男にとっては名誉や畏怖や金はそう重要なことではない。あくまでも生きていくために傭兵となり、その中で強者との命のやり取りを楽しむようになっただけ。やれ麻薬組織がどうだ、政治的な思惑がこうだ、英雄らしい活躍が云々、そんなものには一切興味がないのだから。

故に弱兵ばかり現れては散っていくこの戦場には微塵の興味も抱けない。まるで促成栽培によって量産されたかのように、その実力で戦場に送られてしまったことに憐れみすら覚えるくらいだ。

そのような具合で活躍する気にもなれず、さりとて仕事だから投げ出す訳にもいかないクラックだったが。

しかし、それでも。

「……フッ！」

英雄に興味がなくとも、英雄に匹敵する次元の強者なのは疑いようもない事実だ。

まるでナイフのように軽々と抜かれた大剣が背後からの銃弾を阻止、一拍置いて振るわれた横蹴りが遅れてやってきた襲撃者の体勢を崩す。奇襲を防がれ驚いたように目を見張るのはまだ若い少女だ。後ろで括った茶髪の映える美貌は戦場に似つかわしくないものがある。

けれどそれもクラックにとってはどうでも良い事だ。奇襲を防がれた時点で彼女の敗北は確定している。蹴られた際に咄嗟に受け身を取ったのは見事だが、晒した隙の代償は大きい。後はこれまで通りその命を奪わんと大剣を掲げて、

「……ほう」

するりと茶髪の女は真横にブレた。決して早い動きだった訳ではない。ただ意識の虚を突くような動作にほんの一瞬惑わされ、剣の狙いが修正できなかった。少女の真横へと振り下ろされた剣が土煙と共に地面へ刺さり、けれど少女は隙を突こうとせず即座に後ろへと下がることで木々に紛れ姿を見失う。まだ気配を追う事は可能だが、クラックは敢えて深追いをせずには様子見に徹した。

——少女の判断は正しい。もし先ほどの攻防を隙と見て攻めてくるようなら、跳ね上がった大剣は即座に少女の胴を二つに断っていたことだろう。

ただしそれを出来なかったのがこれまでの帝国兵たちだった。誰もがわざと晒した隙に飛びついてしまい、あえなく散っていったのである。それを鑑みれば、先の少女がこれまでの雑兵とは頭一つ抜けているのは火を見るより明らかといえよう。

これは面白いことになってきた。少しは戦い甲斐のある相手を見つけたかもしれない。退屈だった心に燃料が注がれ、この任務にかけるモチベーションが多少なりとも上昇した。

クラックは静かに口元に笑みを浮かべると、少女を追うべくゆつくりと前へ一步を踏み出した。

◇

時間はしばらく前に遡る。

一進一退を繰り返し大きく戦況の変わることのない戦線だが、例外が二つ存在した。

一つは血塗れの雛罌粟の一員であるクラックの立つ戦場だ。彼の飛び抜けた実力はシーソーゲームが発生する余地もなく蹂躪しか起こりえない。

では二つ目は何か。こちらはアドラー帝国側の兵士であり、他とは一線を画する勢いで森の中を前へ前へと駆け抜けていた。

青年が二人と少女が一人。ひたすら敵を斃してきたのか返り血を軍服に染み込ませ、それでもなお怯むことなく突き進む。

「後ろはオレらがやる！ クリスは前だけ見てろ！」

「ああ、任せたぞ」

「つたく、初っ端からキッツいなおい……！」

現れた敵兵を前にヴァルゼライドが三刀を構えて突き進み、マルガレーテとアルバートで即座に背後からの奇襲を警戒する。士官学校時代に仕込まれた三人一組の動きは初めての戦場でも彼らに自信と勇気を与えていた。

敵の内訳は前が三人と背後に二人。当然ながら全員が成人した傭

兵たちであり、マルガレーテたちとは踏んできた場数が異なっている。尋常に考えれば絶対に太刀打ちできるはずもない。

けれど、そのような道理を踏み越えてこそその三人だった。

互いに強い信頼関係で結ばれているから、仲間の実力を疑うことなど一切しない。後ろを振り返ることなく前だけ向いて正面の敵を討ち果たすべく駆けだした。

「はアッ——！」

まず踏み込んだのはヴァルゼライドだ。彼は前方を塞ぐアンタルヤの傭兵三人に向けて一直線に突き進む。相手は剣と共に銃をも携えている。このままでは一秒後にでも風穴を空けられて死ぬのが道理だろう。

そして即座に発砲、銃弾が吐き出されマズルフラッシュが明滅する。だがヴァルゼライドは止まらない。怖れを知らぬとばかりに銃火の中へと身を投げ出すと最小限の動きだけで銃弾の雨を掻い潜る。並の度胸と修練では決して出来ない荒業だ。

「なんだ、こいつは……!?!」

戸惑いの声が漏れた時には既に遅い。当然のように剣の間合いへと肉薄したヴァルゼライドは、最速の刺突で心臓を貫きまず一人を始末した。達人きょうかんの下で愚直なまでに何度も何度も鍛錬を重ねた一撃はいつそ鮮やかにすら映るほど。

ただしヴァルゼライドも無傷ではない。無謀な突撃の代償は当然その身で支払っている。あくまで行動不能と即死を避けただけであり、腕や足に掠り傷は無数に存在する上、腹部は一発銃弾が貫通してすらいた。常人ならその時点でうずくまってしまうだろうし、せめて顔を苦痛に歪ませるくらいはするはずだ。

なのに、

「おかしいだろ、銃弾は当たってんだぞ……!　なんで平気な顔して——」

ヴァルゼライドは止まらない。表情一つ変えることなく、心臓に突き刺した剣を引き抜き負傷したはずの身でなお敵へと追い続ける。既に一人を殺された傭兵たちはすぐに距離を離して銃弾をばら撒くが、



今度は掠りすらしない。弾丸を躲して、見切つて、刀剣を盾にし、あらゆることか叩き落して止まらない。さつきまで銃弾を避ける経験など皆無だったはずなのに、恐るべき成長速度である。

追う者と追われる者のどちらが有利かなど明白だ。ましてやこの森の中、背後を気にしながらでは大した距離も稼げない。足場の悪い状況かでは大した距離も稼げず、あっけなくヴァルゼライドが接近して、

「終わりだ」

居合切りの要領で鞘から刀剣が走った。逆手で抜き放たれた刃は圧倒的な速度で二人目の胴を切り裂き、息の根を止めてみせた。さらに右手の刀剣を手放して三本目に手を掛け、目にも留まらぬ早業で居合切り。引き金を引くよりも早い抜刀に反応できるはずもなく、三人目もこれまた自らの血の海へと沈む羽目になったのだ。

「おま、え……は……」

断末魔と共に息絶えた傭兵たちの疑問は仕方のないことだろう。

これがクリストファー・ヴァルゼライドという男の本領なのだから。徹底的な鍛錬により高い基礎能力を持つのに、実のところ本質は何処までも格上殺しに振り切っている。自らより強い者にこそ追い継り、覚醒し、逆転して、英雄譚を紡いでみせる圧倒的な光の使徒。

窮地に追いやられるほど経験値を獲得して強くなる英雄こそ、この男に他ならないのだ。受けた傷など気合一つで我慢できる程度でしかない。むしろこの傷から得た経験値こそ重大なものであり、この先で必要になる技量だから痛みに呻く暇すら惜しかった。

自身の請け負った戦闘を終え、状況次第で後ろを任せた二人に加勢しようとは振り返ったヴァルゼライドだが、果たしてその必要は薄いようだった。

◇

少女と成人男性の身体能力。あまり認めたくはないものの、その差はハッキリ言って歴然だ。例えばオレがアルやクリスと腕相撲しても絶対に勝てない。同じだけの鍛錬はこなしているにも関わらずだ。こればかりはどうしようもない厳然たる事実と受け止めるしかない。

い。

けれどそこで腑抜けて諦めたところで何も解決しないのだ。であれば、自分なりに戦う手段を考えた上で勝てるように努力を積み上げていくしかない。自分の持ち味、武器を活かすのだ。

ではオレにはどのような才能や武器が存在するのか。白状しよう——何も無い。

「どう足掻いてもオレは三流だけだなアツ……！」

たった一人の、それも銃を持っていない相手を前に直刀と拳銃で必死に牽制を繰り返す。相手のペースのまま懐に入れてしまえば終わりだ、力負けして押し切られるに決まっている。だからつかず離れずの距離を取って、悪くいえば逃げ回るような戦い方に徹してみせた。

別にオレは殺しのセンスがある訳じゃない。人間相手なら絶対勝てますだとか、そんな生粋の殺人鬼では断じてない。あくまで一般的な女性の身体しか持ち合わせていないのだから。

じゃあ他にはない一芸でも持っているのかと言えば、それも否と返すしかない。オレはあくまで凡人である。鍛錬して、反復して、自分の中に技術を強く定着させることは可能だ。けれど特別な何かなんてちつともない、人より早く走れはしないし力だって非力な方だ。悲しいくらいどうしようもないだろう。

ならこんな戦場に出たことが間違いなのか？

お前は何も出来ないから、大人しくスラムで生にしがみついていたれば良かったと？

「ふざけんな、そんなこと出来る訳ないだろう……！」

心の中に鎌首をもたげた疑問を一喝して吹き飛ばす。馬鹿げてる、向いてないから絶対に無理だとどうして言い切れる？ 出来ない奴は出来ないかもしれないし、どうしようもなく苦手なことは誰だってある。それは事実だ。

それでも、オレは無理無茶無謀の三拍子へと挑んでみたい。憧れた彼のように、どんな困難でも涼しい顔で踏破できるようにになりたいのだ。

だってそうでもなければ、オレはクリスの友人で居られない。

生涯を彼に守られたまま、あくまでも庇護するべき対象としてしか見られないのだ。そんなものは対等とは言わないし、まして友人などとは口が裂けても言えないだろう。一度足を止めれば最後、目指すべき鋼の光はどこまでも遠ざかって永久に追いつけない。

「だからッー」

どれだけ遠回りをしても良い。準備期間を重ねても良いだろう。でも最後は絶対に難題へと挑むし、その道から逃げてはならない。心を強く持て、オレはオレの誓約を忘れてはいけないのだ。

距離を取っていた状況から一転して懐へと肉薄する。突然の直接的なアクションに相手も面食らったのか、一瞬動きが遅れた。その隙に距離を詰め切り、自分から相手のごく間近へと踏み込んだ。

「——ッー」

「この——ッー」

オレの振るった直刀が相手の刀剣と噛み合い、鈍い音と衝撃を響かせる。かなりキツイ。たぶん両手で握ったとしても数秒持たずに押し負けてしまうだろう。

だから素直な力勝負の土俵には立たない。オレは弱いんだから、愚直な力比べなんてやったところで勝てるはずもないのだ。故に力を逃がすように手首を返して、するりと半身になって相手の隣へと潜り込んだ。

『そうだ、それでいい。お前は自分の弱点を理解しているようだ、相手の領分で張り合おうなどと考えては目も当てられない』

スラムに居た頃、オレとクリスの模擬戦でよくやっていた手口だ。力で勝てないから受け流す。我流で行っていた技術はムラサメ教官の教えによって昇華され、今や一つの技術と化している。練習すれば誰でもできる基礎的な技術だが、オレにとっては生命線の一つである。

こうなれば相手はもう無防備を晒したも同然だった。不意を突かれてこちらを見失った次の瞬間にはこめかみに銃口が当たっている。更に状況を理解した時にはもう遅い、飛び散った血しぶきと立ち上る硝煙が勝敗を物語っていた。

これまでの数時間通り、一対一なら何とか勝ち拾えるもの。  
あまりにも泥臭くて素直に喜ぶ気になれないのは贅沢だろうか。

「はあ、まったく……い…… たった一人相手にこんな苦勞するなんてな」  
息を整えながらクリスを見れば、彼は既に三人もの相手を前に勝利を収めていた。顔色一つ変えてない辺り楽勝だったのだろう、さすがと言う他にない。

アルの方はといえば、やはりオレよりもかなりスマートに済ませていた。いつの間に手に入れたのか、縄のようなものを巧妙に森へと隠して転ばせる。後は生じた隙を逃さず刀剣で一刺しという具合だ。

「へえ、いつの間にそんなの準備してたんだ？」

「さっき倒した奴が持ってたのを拝借したんだ。なんつうか、この方が正面から戦うよりしつくりくるもんでな」

「森の中なら分かり辛いもんなあ……もしかしてアル、暗殺者とか向いてたりして？」

「まさか、どっちかといえば戦わずに勝つ方が性に合ってるぜ。にしてもまあ、すっかり人を殺すことにも慣れちまつたつうかよ…… やってみればあっさりなのが逆に怖いぜ」

オレやクリスはとつくの昔に人殺しをしたことがあるが、アルは今回の戦いが初めての人殺しだという。むしろスラム育ちとはいえ経験のあるオレたちの方がおかしいのだが。

そんな彼も良くも悪くも殺人に適應してしまったのか、言葉通りあまり堪えた様子はない。まあ下手に蒼褪めたり騒がれたりするよりはよほど良いのだが、なんだかんだアルの精神力も相当なものだと再認識してしまう。

「そっちも終わったか。もたもたしてる暇はない、このまま一気呵成に攻め込むぞ」

「はいよ、何処まででもついてつてやるさ」

「まったく、猪突猛進な奴らだぜ……」

初めての戦場は今のところ、思った以上に順調に進んでいた。このままいけば三人揃って生還も決して不可能ではない、それくらいの希望を持てるくらいには。

だが、それも。

——背後からの奇襲を完璧に防いで見せる、規格外のバケモノに遭遇するまでの話だが。

## Chapter 17 最強の敵／Second

「おいおいおい、なんで今の不意打ちを完全無傷で防ぐんだよ……!?!」  
たった今、ほんの少し刃を交えた巨漢の男から全速力で逃亡する。  
恐ろしい事態への動揺を隠すことなく、むしろ心を落ち着けるため  
に口は独り言を喚き続けていた。バクバクとなる鼓動がうるさい。  
後ろを振り返らずにひたすら森の中をひた走る。戦場において致命  
的なまでに隙だらけな逃亡だが、それくらいしななければ先の理不尽か  
ら立ち直ることも逃げることも出来そうにないのだ。

だっておかしいだろう、向こうにしてみれば完璧に不意打ちだつた。こちらに気が付いている様子もなかったし、それで先手必勝とばかりに仕掛けた途端に動き出して、流れるような動作でこちらの奇襲を防いだのだ。

なまじ勝算があると考えてしまったのと、アンタルヤ側の拠点が男を越えた先にあるのが悪かった。どうせならばと欲をかいて一人で奇襲を仕掛けた結果がこれだ。笑ってしまう限りである。

幸いなのは、クリスとアルはいったんオレと別行動で周囲を警戒していることだろうか。おかげでオレさえどうにか逃げきれば、合流して別のルートを探すのは容易い。

「アレはまずいぞ、オレたちとは格が違う類の相手だ。あんなのと関わったら命が幾つあっても足りないぞ……!?!」

後ろから微かに葉や落ちた枝を踏みしめる音が聞こえてきた。きつと先の巨漢の男だ。まだ見つかつてはいないはずだがそれも時間の問題だろう。急がなければ。

どれだけ努力を積んで戦場へ臨んだところで自分たちはまだ若造、年季の違う相手なんてそこら中に居るのだ。アンタルヤの傭兵たちに勝っている事だって半ば奇跡のようなもの、このうえ明らかに数段格上の相手に喧嘩を売るほどオレたちだって考え無しじゃない。

走りながらチラリと隣の木を見た。さりげなく真新しい傷のついた幹がある。これはアルが目印に付けたものだろう、つまり彼らはこの近くにいます。静かに目を凝らして——いた、ちようど茂みの

陰に潜んでいる。

彼らの方へと滑り込みつつ、まずは端的に要点だけを伝えた。

「悪い、しくじった」

「マジか。そんなヤバい相手なのか？」

すぐに顔つきの変わったアルへとオレは頷く。クリスもより表情を引き締めている。

「とびきりだ、アレはオレたちが敵う相手じゃない」

「なるほど……これは噂の“血塗れの雛罌粟”の者と遭遇してしまったと考えるべきか」

遠くからでも響く銃声や悲鳴より、微かに聞こえる枝葉の音が今はよっぽど危険だ。それだけの圧と脅威をあつめた男は備えている。

とにかく事態の深刻さを呑み込んでくれたらしい二人を引つ張つて、この場から離脱しなければならぬ。アレと交戦でもしたら最後、ご都合主義のような奇跡でも起こさない限り勝ち目はないのだ。「だからとにかく今はここを離れるぞ。モタモタしていると手遅れになる」

「しかしレーテがそうまで言う相手だ、下手に逃げたところで追いつかれるのが関の山だろう。ここは迎撃をしても良い場面だと思うが？」

「待てよクリス、目的を間違えるな。アドラーの目標はアンタルヤ側の拠点の制圧で、俺らの目的は生きてここから帰ることだ。下手なりスクは冒せないし他の仲間を見つけた方が絶対良い」

「だが、肝心の帝国兵はここに至るまでほとんど見ない。そう都合よく見つかると思えない方が良くだろう。ならば万全の内に勝利を掴む方がいい」

——などと二人していきなり口論を始めてしまうものだから、かなり焦ってしまった。

待て待て、今議論すべきはそこじゃない。確かにどちらも正論だろうが、それはこの場で留まってまでする内容ではないはず。むしろ正しいからこそ議論してまで迷っているのだろうが、今は違うのだ。

「その話はここから移動しながらで良いだろ！とにかく今は——」

言いかけたその時だった。背後から迫る圧倒的な殺意の奔流。それまで何一つ感じなかったはずなのに、まるで裏表が反転したかのよう  
に襲い掛かってきた。

背筋がゾクリと震える。これまでの戦場の熱とは比べ物にならない冷たい殺意だ。その本物と呼ぶべき害意に晒され、足が竦んで動かないのが情けないし命取りだ。マズいと頭が考え、けれど何も出来ないでいるところを、

「……ッ！ 伏せろレーテ！」

クリスの手によって強制的に頭を下げさせられた。その次の瞬間、髪の毛を擦過しながらナイフのようなものが数本飛んで行った。殺意の正体、というより大元が投げた武器だろう。つまり、追いつかれた。

「……見つけたぞ」

低く重々しい声が正面の大木の影から聞こえてくる。それと同時にピシリと大木に閃光が走った。

なんだ、今のは？ 疑念を抱いたのもつかの間、信じがたいことに大木が真っ二つに折れた。斬られた大木はメキメキと音を立てて地面へ豪快にダイブし、周囲の木諸共に薙ぎ倒される。悪い冗談のような光景だ。

あまりの力業にさしものクリスすら絶句する中で、残った切り株の後ろから悠々と出てきたのはやはりというか、あの巨漢の大剣使いだった。天を衝くような巨体、鍛え上げられた筋肉、全てがオレたちと桁外れの圧を誇っている。

「いいな、泳がせた甲斐があった」

意図も容易くこちらの位置を見破った、というより最初から敢えて逃がされたのか。つまりあの微かな移動音も、全速力で逃げたのも、全て相手の掌の上だったという訳だ。

彼我の距離は十五メートルはある。なのに知らず足が一步後ろに下がりかけ、気合で我慢した。さつき無様を晒したばかりなのだ、これ以上は譲れない。

「なるほど、な……これは確かに圧倒的な相手だ」



「レーテが呑まれたのも分かる気がするぜ。正直ビビって震えが止まんねえぞ」

無骨な大男を前にさしもの二人も冷や汗が流れるのを止められないようだ。それでも気丈に前に出て武器を構える。向こうもそれを見て大剣の切っ先をこちらに向けてきた。まるで隙のない身のこなしはムラサメ教官を彷彿とさせてあまりある。

勝てるだろうか？ いいや大丈夫、三人揃えばオレたちは無敵だ。どんな相手にだって必ず勝てると思えばいい。心の中でそう唱えたと同時に、戦闘に立ったクリスが信じられないようなことを囁いた。

「レーテ、アル。お前たちは先に行け。ここは俺一人で食い止める」

「はア!? お前いきなり何言ってる!?」

「そうだって、あんなヤバい相手は三人がかりでやっただろ？ いくらクリスの実力でも……」

「否、むしろ逆だ。三人で勝てる可能性が無いというのなら、逆に二人を確実に生かすべきだ。元より俺がつまらぬことを言ったばかりに足が止まったのだ、その意味でも俺が適任だろう」

「だからって……」

そりゃあクリストファー・ヴァルゼライドは諦めの悪い男だ。相手が強いからといって膝を屈することはない。むしろより闘志を燃やし、格上殺しを成し遂げようと足掻くだろう。オレもアルもそんな姿が容易に想像できてしまう。

だけど今回の相手はあまりにもマズい。不意打ちで、しかも死角から放たれた銃弾を容易に躲す男だぞ？ おまけに追撃すら鼻であしらうような気軽さで防ぎ、巨体に見合わぬ狡猾さと慎重さまで見せつけてきたほどの実力者だ。

潜った修羅場も含めて実力差は明白、たった一人では足掻く間もなく磨り潰されてしまう。なのに鋼の男は前言を撤回することなく、さらに一步前へと出た。まるでオレたちを庇うかのように。

「おいクリス……本気なのか？」

「先ほどお前が言ったことだぞ。目的を間違えるなアル、ここで俺たちが全滅する方が最悪だ。ならば少しでも生存率の高い手段を取る

まで。それに、俺とてただで負けてやるつもりは毛頭ない」

「そこまで言うなら……分かったよ。お前の意見に乗ってやる」

「ちよつと待って、クリスを一人で置いてくなんざ——」

理解は出来るが納得がいかない。それはアルバート・ロデオンもまた同じだろうに、彼は覚悟を決めた顔つきでオレの手を取った。ゴツゴツした男性らしい手、そこから伝わる熱量にハツとさせられる。

——彼は既に、覚悟を決めていた。

「ここはクリスの案に乗るぞ。ここで全滅したら本当に洒落にならねえ。まずは引いて体勢を立て直す」

「……ッ！ 分かったよ」

ここどうだうだしていたところで意味はない。例え見殺しにも等しい行いだろうと、まずはオレたちが動かなければ何も始まらないのだ。時間も相手も律儀に待ってくれるはずがない。

その証拠にあの巨漢は一步を踏み出していた。きつと十数メートルの距離なんて数秒で詰めてくる。その確信があったからこそ、いよいよこつちの手を引いて走り出したアルに逆らわず駆け始めた。

「死ぬなよ、クリス——ッ！」

最後に叫んだその言葉に、彼は、

「無論、〃 勝つ〃 のは俺だ」

どこまでも雄々しい宣言と共に、刀剣を抜き放ち前へと猛進を開始した。

◇

とにかく走って走って走り続け、クリスと大男の戦いから離脱したオレたちは木陰に隠れて息を整えていた。全力疾走をしたせいで身体中が酸素を求めている。肩で大きく呼吸をしながら、二人して周囲一帯を見渡した。

「他に人はいないか……そつちは？」

「同じだ、帝国兵も傭兵共もいやしねえ。つーかまずこの場所がどの辺なのかも分かんないけどよ。コンパスでもありゃ別なんだが」

肩を竦めたアルに「どうしたもんか」と相槌を打つ。敵も味方もいない以上、危険はないが援軍も望めない。しかも場所が分からないと

なれば、開き直って自軍に戻ることもすら出来ないのだ。こうしている間にもクリスは最強の敵と戦い続けているというのに。

「こっからどうする？　気取られないように戻って、上手いこと寝首を搔くか？」

「出来んのか？　奇襲にはもう失敗してんだろ、相手も警戒してるぜ」「なら打つ手なしでクリスを見捨てろってか？」

「そうは言っつてねえよ！」

とても戦場とは思えない静けさな森の中にアルの大声が木霊した。一瞬ドキリとしたが幸い敵に見つかつたなんて事はないようだ。

だがそれよりも、アルの張り詰めた顔の方がよほど気になって仕方ない。

「……ハッキリ言っつて、さつき俺は滅茶苦茶ビビった。意外と殺人にも慣れて、案外軍属でもやってけるんじゃないやねえかと思つた矢先になんだありや。俺たちとは格が違いすぎる、言っちまえばバケモノだよ」「それはオレも同じだつての。でも、ここで勇気を出さなきゃオレたちはクリスを見捨てることになつちまう」

「そう、だよな……」

歯切れの悪い返答に首をかしげる。まるで何か言い辛いことでもあるかのような。

視線で続きを促せば、彼は正直にその心境を語ってくれた。

「白状すりゃあ、俺はクリスの奴が囹をやるつて言つた時に“安心”したんだ。これでこんな怪物と戦わなくて良い、上手いこと逃げて別の戦場に行けば良いつてな。笑ってくれよ、友達<sup>ダチ</sup>を裏切ろうとした最低の野郎だ」

「誰だつて木を剣で斬り倒すような奴と戦いたくなんざないさ。むしろ躊躇なく突つ込めるクリスが異常なんだぜ」

「それも分かつてる。だけどよ、レーテの手を握つて思い直した。だつてお前、ちつとも逃げようなんて考えてなかつたら？」

今度は無言で頷く。もしアルがあの場合に居なければ、それとも手を握られてなければ。たぶんクリスと一緒に無謀な突撃を敢行していたはずだ。それこそ親友と一緒に死ねるなら本望だなんて、彼

が最も望まないだろう理屈を胸に。

「女で華奢なマルガレーテ・ブラウンは諦めてなんざないのに、男で力もあるアルバート・ロデオンはここで諦めちゃうのか——なんて考えたら目が覚めた。いや、お前を女だなんて意識したことは一度もないけどよ」

「一言余計だ馬鹿。でも、オレだってお前がいたから冷静になれた。お相子だよ」

まあ精神的にはまだまだ男のつもりなので欠片も気にしてはいないのだが。

別にアルを臆病だなんてちつとも思わない。むしろ人として真つ当な危機感と恐怖心だろう。それを指して軟弱者と笑う輩がいるならオレはそいつを許さない。

前だけを見て進むのが絶対に正しい訳じゃない。時には臆病風に吹かれることがあってもなお、正道を歩める者こそ強いのだ。

「いつかお前が俺に向かって戦いを挑んできたみたいく、あの勇気を俺も振り絞ってみたい。付き合ってくれるか？」

「バーカ、当然だろそんなの。クリスを助けられてお前の力にもなれる、ならどうしてオレが躊躇うんだ」

空を見上げた。木々の間から微かに見える太陽は中天を通りすぎ、もう少しで夕暮れに染めようとしているところだった。もうずいぶんと長い事、この森の中で戦っているらしい。

今ならまだ戻れる。太陽を頼りにこの森を抜け出せるはずだ。けれどそんなつもりはない。頼まれたってしやしない。

「とはいえ、ただ戻ったところであっさり殺されるだけだろうけどな。アルは何か策とかあるか？ 無ければ突撃あるのみだけど」

「脳筋かよ。安心しろ、馬鹿みたいなもんだけどどちらかと考えてあるさ。要は負けなきや勝ちなのさ、ならやってやれないことはねえ」

「はは、それなら頼りにさせてもらうぜ」

軽く笑ってから頷き合い——真つすぐ来た道に戻っていく。全ては“勝利”をこの手に掴むため。



クリストファー・ヴァルゼライドの剣術は、主に抜刀術の方面に特化されている。

刀剣を抜く際の加速を利用した超高速の居合切り。武器を抜き放った一度にしか使えないこともありトリッキーさと速度はかなりのものだ。とはいえ主戦法とするには些か特殊な技術なのだが、果たして彼にはこの方法こそ性に合ったのかスラムに居た頃から抜刀術を極めんと力を入れていた。

最初は単に剣を振るう方が抜刀よりも早かった。それでも諦めずに昨日より速く鞘を滑らせるのを繰り返す。さらに士官学校に入学してからは剣の達人であるトナリ・ムラサメとの出会いもあり、彼の我流の剣は紛れもない剣術へと昇華されたのだ。

常軌を逸した密度の鍛錬量と、良い師から学んだ技術の組み合わせは類を見ない程に強力無比だ。それこそ今の彼は力量だけみれば熟練の兵士にも匹敵する強さだ。後は戦場で経験値さえ積んでしまえば向かうところ敵無しになるのも時間の問題だったろう。

ただしそれは——より圧倒的な敵と出会うことがなければの話だ  
が。

足場の悪い中をモノともせずヴァルゼライドが攻める。右手に持った刀剣で迫りくる大剣を流しながら、左手はもう一つの刀剣を抜刀している。勢いの乗った一撃は常人ならば反応すら出来ず終わっているが、目の前の巨漢は違う。

大剣が蛇になった、などと思えるくらい有機的で不可解な軌道だった。ついさつき振るわれたはずの大剣は魔法のように巨漢の懐へ戻ると、何の苦もなく抜かれた左の刀剣を受け止めてみせたのだ。

さらにそれだけでは終わらない。二刀を構えたヴァルゼライドへ果敢に大剣一つで前が出る。風切り音、たまに鋼の噛み合う音。鉄塊のごとき大剣がナイフのように宙を舞う。一撃一撃は非常に重たい。マトモに受け止めれば腕の骨を折られるだろう。胴や肩に直撃でも許さうものならその瞬間に泣き別れた。

ほんの少しのミスが死へと繋がる死の綱渡り。ヴァルゼライドがやっとの思いで反撃をねじ込む間に、相手は十や二十では飽き足らな

い攻撃回数だ。それでもどうにか五体満足で生きているのは他でもない、マルガレーテと何度も繰り返した模擬戦闘があつたから。

「……随分と粘るな。お前、新兵なのだろう？」

「力で勝る相手にどのように立ち回るか、無二の友は既に考えていた」  
彼女はいつだってヴァルゼライドの攻撃を受け止めたりはしなかった。常に見切り、流し、マトモに相手をしない。剣の実力でいえば彼の方に軍配が上がるものの、自分の弱みと相手の強みを把握した戦い方はとても参考になっている。

そう、ヴァルゼライドの精神は油断も慢心もない。例え戦う相手が今の自分より格下だったとしても、明日には逆転される可能性も皆無ではない。いいや、自分ならば確実に明日の逆転を目指すだろう。ならば彼女がやれない理由がない。

「故に、敬意を持って学ばせてもらったまでだ。所詮は付け焼き刃の猿真似だが、こうして命拾い出来ているのは事実だろう」

「なるほど……」

否、これの一体どこが付け焼き刃なのだ。巨漢の男——クラックは心の中でごちた。

本当にその場しのぎの技でしかないのなら、そもそも戦いが成り立つ以前に彼は死んでいる。こうして同じ土俵にたろうじて乗っている時点で付け焼き刃以上の修練を積んでいたのは明らかだ。

つまりこの恐るべき金髪の青年は、クラックという歴戦の兵と打ち合えるだけの技量を磨きながら、しかも別の相手が使う技術まで吸収してしまつたということだ。いふなれば右手で方程式を解きながら左手で銃を撃つようなもの、両立させるなど至難の業と言う他にないに。

どれだけの時間を鍛錬に費やしたのか。そこらの軟弱な帝国兵など歯牙にもかけない量なのは確かだ。その事実がよりクラックを奮い立たせて憚らない。闘志という燃料が無限に注がれ肉体を駆動させる。

だが考えてみれば、この青年は鮮やかな奇襲と引き際を兼ね備えた少女の知り合いなのだ。ならば最初から実力が担保されていたのは

当たり前だし、こうして予想を裏切ることなく戦える。その事実が堪らない。

「最近、弱い者虐めばかりで面白くなかった。待っていたよ、お前みたいな男を」

「そうか。ならば俺はお前の力を糧とし、さらに前へと進ませてもらうまでだ」

剣戟はより苛烈に。もはや二人だけの世界とばかりに互いしか見えていない。

変則的な二刀流と豪快な大剣が嵐のように空を切った。森の中だというのによるめきもせず、木に武器を当てるへますらしない。完全に自分たちの武器の間合いを把握し、死線を潜り抜け、飛び越え、下がり、踏み出し、駆け引きを続けながら戦いは続いていく。

「——そこだッ！」

その中でついにヴァルゼライドが仕掛けた。横薙ぎに振るわれた大剣を身を投げ出して避けた直後、右手に持った刀剣をクラックの足元へと投擲した。まるで矢のように一直線に飛び出した刀剣を巨漢は苦もなく弾くが、その時にはもうヴァルゼライドが三本目の刀剣の柄に手を掛けている。

この戦いの前にアルバートから譲り受けていた三本目。空いた右手で握りしめたその一刀を鞘から弾き出した。シャツと音が鳴る。乾坤一擲、必殺の抜刀術が逆襲の刃となって遥か格上へと牙を剥く。

この一撃は過去最速だ。加えて剣の投擲を防いだのもあり、大剣で守るにはわずかに時間が足りない。

その刹那を縫うようにして勝利の刃はひた走り——

「今のは驚かされた」

「なに……ッ!?!」

服の袖から飛び出たナイフを握りしめ、クラックは渾身の一撃を受け止めていた。

何も驚くには値しない。初めにクラックがマルガレーテを狙った時、彼はナイフを投擲していた。ならば他にもナイフを所持しているも不思議ではないだろう。その隠し場所もまさしくこのような事態

を狙っていたとくれば、むしろ予定調和の防御にすら思えてしまう。

豪快な体躯、豪快な剣。そんな第一印象とは裏腹に慎重さを併せ持つクラックは、決して小手先の技をバカにしない。逆にそういったテクニックこそ戦場では細やかに命を繋いでくれるのだ。例えば今のように。

さしものヴァルゼライドもこの瞬間ばかりは無防備だった。咄嗟の事態に対する驚愕と、振り抜いた姿勢の影響で防御が追い付かない。もちろんクラックは最初から“それ”を狙っていたのだが。

先ほどの意趣返しといわんばかりにヴァルゼライドの腹へとナイフが吸い込まれ、トドメとばかりに真横へと振り抜かれる。銀の刃に追従して血飛沫が飛び、クラックをさらなる返り血で染め上げた。

「終わったな」

腹を裂かれて戦える人間などいない。ましてや新兵ともなればなおさら、かつて味わったことの無い痛みを前に頭は正常な思考を保つなど不可能だ。激痛という危険信号に脳は埋め尽くされ、防衛反応として意識が落ちる。そんな兵士たちをクラックは数十年も見てきたのだから間違いない。

終わってしまったえば呆気ないものだった。青年はかつてない程に研ぎ澄まされた剣技を持つてはいたものの、年季や経験値の時点でクラックに及ばないのは仕方のない話だ。ここまで食らいついただけでも称賛に値しよう。

これは例えるなら、選択肢を一つも間違えていないのに中盤で最強の敵と出会ってしまったようなもの。誰が悪いなどではなく、単に運が悪かったのだ。

その無情さを噛み締めながらクラックは青年へと目をやって——  
待て、何かがおかしい。

「まだ、立っているだど？」

腹を裂かれた痛みに悶え、一秒だって我慢できず地面を転がるのが普通の反応だ。我慢強い人間でも膝を屈して耐えようとする。人間の防衛機能からしてそのように痛みを耐えるのだから無理もない。

なお、青年はまだ立っている。



それが自然の摂理とばかりに、顔を苦痛に歪めることなく、血に染まる自分の身体を気にすることもなく、一秒ごとに血の失われていく手足にさらに力を籠めて――

「いいや、まだだッ！」

勢いよく振り抜かれた一刀は、これまでのどの一撃よりなお鋭く速いものだった。

## Chapter 18 次の“勝利”のために / Th ird

——気合と根性。

人間なら誰しもが大なり小なり備えている意地の発露、身も蓋もな  
く言い換えればやせ我慢だ。肉体的に、精神的に、辛く苦しい事象を  
心の持ちようだけで我慢して乗り越えるための起爆剤。古臭い精神  
論と言われれば否定はできないが、ともすれば奇跡すら手繰り寄せ、  
本当に不可能を可能にする魔法の力なのも事実である。

ただしそれだけで奇跡を起こせる人間などたった一握りだけ。ほ  
とんどは無情な現実の前に敗れ、意地があろうと不可能を乗り越える  
ことなど出来やしないのだ。

所詮は精神論など夢幻のごとく、心だけで結果を残せるはずもな  
い。だから誰も本気で気合と根性を信奉しようとは思わないし、また  
それが如何に難しいことかを言葉にせずとも理解している。

でも、だからこそ。もし本当に気合と根性だけであらゆる奇跡を掴  
み取れるというのなら——人はきつと、その者を“英雄”と讃えるこ  
とだろう。

◇

「なんだ、コイツは……ッ！」

予想外の事態にクラックの声が上がった。らしくもない動揺が表  
情に滲み出ている。これまで見せていた余裕ある姿とはまるで反対  
に、目の前で起きている事態が信じられないと言わんばかりの様子  
だ。

だがそれも無理はないことだろう。なにせこれは因果が狂ってい  
る。まるで筋が通らない。水が上に向かって流れていくかのような、  
太陽が西から昇って東に沈んでいくような、それくらい不可解な事態  
が起きている。

「ふッ、ハアッ——！」

だってそうだろう？ 瀕死の肉体からだで更に攻撃のペースを上げるな

ど、常識的に考えてありえないのだから。

対峙する金髪の青年は腹を横一文字に斬られ、血と内臓を零して痛みに悶絶して地面をのたうち回っていないければおかしい重傷だ。そうでなくとも戦闘の続行などまず不可能だろうし、こうしている今も刻一刻と命を削っているのは間違いない。

なのにどうしてだ。どうしてこの青年は、傷を負った後の方がより技量が冴え渡っているというのだ。足運び、剣捌き、身体の重心移動に視線の誘導まで、全てが先ほどより研ぎ澄まされていた。しかも一秒ごとに精度が上がり、まだ足りないとはかりに貪欲に経験値を吸収する。

鞘から刀剣が振り抜かれた。先ほどの数倍は速く、そして巧い。咄嗟に大剣で受け取めたクラックの右腕が痺れた。腕力ではクラックがずっと有利だったはずなのに。つまり一秒後には倒れるような身体で、さらに腕力すら引き上げているということ。なんだそれは、長い戦場暮らしでも聞いた例がない。

火事場の馬鹿力にも限度がある。まるでこれまでの戦いで本気を出していなかったかのような——いや、それは違うとすぐにクラックは考え直した。間違いなく眼前の青年は今までずっと本気を振り絞っている、出し惜しみなど絶対にしないだろう。

つまり、

「……『覚醒』した、とでも言うのかッ……!」

それ以外に今の青年を形容する言葉を、クラックは持ち得なかった。

青年は自らの窮地を起爆剤にすることであらゆる不都合を取り払ってしまったのだ。あたかもお伽噺に出てくる英雄の如く、『追い詰められてからが本番』などと告げるかのように。激痛も、実力差も、身体能力すら気合と根性だけで補って遥か格上へと追い縋っている。

考えるまでもなく道理が通らない。心一つで不可能を可能にするなど、罷り通れば世の中は全て茶番になってしまう。だからあり得ないし認めてはならない。こんな英雄が存在して良いはずが——

「いいや、あるに決まっている……ッ!」

茶番も道理も知った事かと投げ捨てて、クラックは口元に無骨な笑みを浮かべてみせた。

どんな理屈を持ちだしたところで、今日の前にある現実が全てなのだ。だから新兵が覚醒を果たし熟練の傭兵と斬り結ぶという信じがたい光景だつて否定しない。そもそも古の大和様<sup>カミ</sup>だつて精神論を唱えていたと言うではないか。ならば第二太陽<sup>アマテラス</sup>が何か影響していたとて不思議でない。

だからこの時ばかりは考えるのをやめて、この青年と満足するまで戦おうではないか。心も新たにクラックは大剣を勢いよく振り下ろし、青年は刀剣をクロスさせて防いでみせた。勢いで僅かに青年の身体が後方へと流れる。もはや当初の受け流す動きを必要としないのは、急激に上がった技量と身体能力の賜物だろう。

空白のように凧いだ戦場へ一陣の風が吹き、微かに戦いの熱を奪い去る。気が付けば既に陽は落ち、森の中はかなり暗い。そんなことにも気が付けなかった頭がほんの少しだけ冷静になったところで、クラックは無意識に訊ねていた。

「俺は、クラックと呼ばれている。お前の名は何だ？」

別に答えなど期待していない。戦場で名を訊ねるなど時代錯誤も良いところ。けれど、これだけの男の名を知らないままなのは惜しいと感じたのだ。

果たして青年は、その望みに応えてくれた。

「クリストファー・ヴァルゼライドだ」

「……クリストファー・ヴァルゼライド、か」

もう一度その名を唱える。らしいというべきか、良い名前だ。眩いだけで身体が熱く震え、闘志がさらに沸き上がってくる。まるでこの男の存在に鼓舞されているかのよう。

いや、まるで何も鼓舞されているのだろう。人間の限界を意志の力で越える姿は美しくも格好良くて、相手が自分より格下などという侮りはもはや微塵も抱いていない。自分もまた負けていられないという心に忠実となつて、さらに激烈に剣を合わせていく。

ここにきてどちらの方が強いかなどという議論は無意味で無粋で

しかなかった。クラックは積み上げた技量と経験値によって他の追随を許さない実力を誇るが、ヴァルゼライドはその優位性を覆しかねない爆発力を備えているのだ。ならばクラックが優位を保つうちにヴァルゼライドを打倒し逃げきるのか、ヴァルゼライドの方がクラックを上回る速度で成長してしまうのか。勝負の分かれ目はそこにある。

「ぐおおッ……!」

「うおおおッ!」

吹き荒れる風のように剣と剣が交錯する。三つの刀剣を今や手足のように操るヴァルゼライドと、無骨で巨大な大剣をこれまた軽々扱うクラック。その余波で周囲の木々には幾重にも傷が走り、あまつさえ自重を支えられずメキメキと折れていく始末だ。その目を疑うような光景の中でお、両者は相手のことしか眼中にない。

新兵に負けるかもしれない、なんてみみっちい恐怖はクラックの中に存在しない。何せ彼は精神力だけで不可能を乗り越える手合いだ、きつと数年もすれば“英雄”と呼ばれるに相応しい人物となることだろう。その確信があるからこそ、全力を振り絞って追い続けるヴァルゼライドと挑戦者へと対峙する。

一方のヴァルゼライドもまた、生半可な覚悟で倒せるような相手とは思っていない。相手は間違いなく現在の自分より強く、重傷を負った身でお逆転を望むなど虫の良い話だろう。だが、それは膝を屈して良い理由にならない。

「何がお前を、こうまで突き動かすのだ——!」

「決まっている、やると決めたからだ」

剣の噛み合う甲高い音を響かせながら、言葉短く問答が交わされる。

「俺はいつか、必ずやアドラーに光を齎してみせる。そのためにはここで折れることなどあつてはならないのだ」

「それだけで、これ程の奇跡を……!」

「当然の対価でしかない。分不相応な目標を抱いたのだ、その道が生易しいはずがない」

それは、ヴァルゼライドにとって呼吸と同じくらい当たり前前の認識だった。

苦もなく楽に成し遂げられる道などあるものか。しかも彼自身は才能や血統などとは程遠い生まれであり、他人より劣っている事の方が余程多いと自認している。そのうえ悪を病的なまでに許せず、友との絆すら時には捨ててしまえるのだから救いようもない大馬鹿だと知っていた。

だが、なればこそ理想の為には妥協などしてられない。才覚が足りないのなら徹底的に自分を高めるまで。その過程で軟弱を晒せばどのような大望とて藁にも劣る屑にしかならないだろう。

「障害に突き当たり、それを言い訳に諦めるような輩が何かを成し遂げられるはずもなし。決めたからこそ貫き通す、それだけが俺に出来る唯一だと信じている」

故に彼は、決意も新たに改めて叫ぶのだ。

「どのような難敵が相手だろうと、俺は必ず諦めない——」勝つ“のは俺だッ！」

その熱く雄々しい宣言がどこまでも青臭く、されど本心からの決意だと心で理解出来たから。

「クッ、ハハハハ、ハハハハハッ！ 本当に面白い奴だよ、お前は！」  
あまりの痛快さに大笑いしながら、歓喜と共にクラックは大剣を振り落としたのである。

こんな人間がこの世に生きていることがそもそも奇跡だ。世界の不具合、特異点とでも言われれば素直に納得してしまうかもしれない。もし彼が成熟し、より力を付ければどうなるのだろうか？ こうして剣を交えるからこそ興味が湧いて仕方ない。

だがここはあくまで戦場の一角であり、どちらかが死なねばならない修羅の巷である。そしてこの場合、どちらに勝利の天秤が傾くかといえば——

「どうした、身体が鈍ってきたか？」

「いいや、まだ……だッ！」

ヴァルゼライドの剣技が僅かに翳る。本人もその異常を感じ取っ

たのだろう、気概を叫ぶが変化は止まらない。戦いの中で急激に磨かれてきたあらゆる技量からほんの少しずつ精彩が欠け始め、釣り合っていた天秤は着実にクラックの方へと傾きだしたのである。

別に特別な事は何もない。ただただ単純に、ヴァルゼライドの肉体が精神について来れなくなってきたているのだ。彼の猛攻を前に忘れがちだが、今もヴァルゼライドの腹部は大きく裂けて一秒ごとに命を削っている有様。その状態でなお歴戦の傭兵と渡り合っているのに、どうして反動が何もないなどと言えようか。

「お前は紛れもなく凄まじい男だ。しかし、どのような者だろうと起こせる奇跡には限度がある」

どれだけ精神力があろうと物理的な限界は当たり前に存在した。もしこの戦いが今より数年後なら、あるいは外科的な肉体の強化を可能としていれば、ヴァルゼライドの身体は必ずや耐え抜いたことだろう。心一つで全てをねじ伏せ、あるいは格上すらも倒してしまっていたかもしれない。

だが現実はえてしてこのようなもの。奇跡を起こせる人間は一握りだが、それを最後まで維持できる人間はもっと少ない。悲しいことにこれが自然の摂理であり、ヴァルゼライドはまさにその代償を払わんとしている最中だった。

「まだ、まだまだッ……！」

剣技が乱れる。足運びも、呼吸も、視線の誘導も、何もかもが先ほどよりも劣化し始めている。それでも不調を跳ね返そうとヴァルゼライドの精神は咆哮をあげるが、既に落下を始めた彼の肉体は止められない。

重ねて言おう。仮にヴァルゼライドがあと数年は経験を積み身体を鍛えていれば、まだ倒れることは無かったはず。しかし“たられば”の話をしての意味はなく、そもそもここまで戦い抜いただけでも十分な異常事態である。

「……お前には何の慰めにもならないとは思いますが、よく戦ったと俺が保証しよう」

よってこの場合は順当にクラックの勝利で終わるだろう。ヴァルゼ

ライドの肉体の崩壊はもはや精神力で押し留められるものではなく、クラックの方は息を切らしてこそいるがまだ無傷である。やはり圧倒的なまでに開いた経験値の差は、覚醒一つでどうにか出来るものは無かったのだ。

無論のこと、ヴァルゼライドもそれは理解している。いるのだが……諦めることだけは決してしない。まるで心から諦めという感情が抜け落ちてしまったかのように、死に体に鞭打ってなおも足掻き続けるのだ。

だが、無情にもついに不屈の青年の手から刀剣が零れ落ちた。間髪入れず三本目が引き抜かれるが、そちらはクラックのナイフに弾き飛ばされる。いつの間には抜いたのだろうか、霞む視界の中ではヴァルゼライドでも捉えきれない早業だった。

どれだけ心が否と叫ぼうが覆せない不条理はある。それをよく知っているヴァルゼライドであるからこそ、今の状況が本当に手詰まりだと理解していた。またも覚醒したところで焼け石に水でしかなく、この巨漢に二度目は通用しないだろう。

だからもし、この窮地から逃れる方法があるならば。

「こっちを向け、デカブツ野郎！」

彼がどうしても心から信じることの出来ない、仲間という存在しかあり得なかった。

威勢の良い少女の声が木々の暗がりの間に木霊した。その言葉に反射的にクラックが振り向いた直後、銃弾が三発飛来する。先と同じような奇襲だ、これを防ぐなどこの手練れには容易いことである。だが、対処に使ったその数秒がこの戦いの趨勢を完全に覆してしまう。クラックが大剣で銃を防いだ直後、一直線に彼らへ突っ込む人影があった。顔はよく見えないが体格からしてヴァルゼライドと同年代の少年だろう、彼は一目散にヴァルゼライド目掛けて走り込むと彼の手を引いて走り出す。

「逃がすか……ッ！」

もちろん、目の前で勝負に水を差されたクラックが黙っていられるはずがない。即座に追撃を仕掛けようとするモノの、踏み込んだ足が



何かに引つかかっていたたらを踏んでしまう。たぶん、走ってきた少年が設置した即席のブービートラップのようなものだ。あまりにも簡素でお粗末だが、この暗がりとは急な事態を前に対応が遅れてしまった。

その間隙を縫うようにしてさらに銃弾が二発、別方向から撃ち込まれる。たまらずクラックも体勢を立て直して迎撃するものの、これが全ての明暗を分けた。

「何処へ行った……？」

ほんの数秒の間にヴァルゼライドともう一人の青年、それにおそらくは最初に奇襲してきた少女の三人は忽然と姿を消してしまっていた。周囲を見渡しても気配がなく、目を凝らそうにもほぼ真つ暗な森の中は視界が悪すぎて敵わない。

だが耳をよく澄ませば、微かにガサガサという足音は聞こえてくる。かなり距離がある、おそらく一直線に距離を稼いだのだろうか……この足場も視界も悪い中で、どのようにして一気に離脱したのか。クラックですらこの状況では木にぶつかったり、根っこや段差に足を取られる心配があるというのだ。

理由は分からない。しかし一つ確実なのは、間違いなく彼らはクラックの想像の上を行ったということか。熟練の傭兵と対峙してなお諦めず、一瞬の隙と何らかの策を活かして見事に逃げ延びてみせたのだ。

勝負としては引き分けだろうが、クラックとしては良い訳のしようもない負けである。光るものがあつたのはヴァルゼライドがダントツだが、他の二人も中々どうして大胆不敵で度胸がある。この先の成長が楽しみになるような三人組だ。

「ハハハ……また次に相まみえる時が楽しみだな、クリストファー・ヴァルゼライドよ」

ゆっくりと大剣を担ぎ直し、クラックは暗がりの中を拠点に向けて歩き出したのだった。

◇

暗闇の森の中を歩くのは結構怖いものだが、三人揃えば意外と心細

くはならないものだ。

しかし幽霊よりも怖い巨漢の傭兵が追いかけて来ている可能性はある。なのでビクビクと警戒しつつ、ゆっくりと手元の糸を手繰って先を急いでいた。

「おいクリス、大丈夫か？」

「問題ない……と言いたいところだがな。身体が言う事を聞こうとしないのは困ったものだ」

「そりやそうだろ、そんな重傷で戦えてた方が驚きだったの。まったく、相変わらず無茶しやがるぜ」

クリスを背負ったアルが呆れたようにぼやいた。オレも大いに同感であるが。だってお腹を大きく斬られたというのに、平然と戦闘行為を続けていたというではないか。いやまあ、確かにクリスならやりかねないという説得力はあるものの……とにかくその無謀な行いには友として心配になるばかりだった。

今までだつて自分たちより年上相手に戦つてみせたりだとか、何人もの不良相手に無謀な取っ組み合いをしたりしたが、今回ののはぶつちぎりでナンバーワンの無理無茶無謀と言えるだろう。こんな大怪我自体が初めてかもしれない程だ。

「それにしてもだ。何故、お前たちは戻つて来た。それにどうして今も道に迷わず進めているのだ？」

「簡単なことだよ。そこらへんに倒れてた傭兵の服を解体して糸にして、アリアドネの迷宮攻略法よろしく伸ばしてるんだ。そのおかげで木にはなんとかぶつからないし、足元にだけ注意できるから逃げるのも早いつて寸法だ」

「全部俺の発案だけだな！ お前もレーテも目を離すとすぐ一人で突撃しそうになるから、俺くらい頭使つておかなきゃ仕方ないだろ」

ハハハ、なんて小さな笑い声が漏れた。もちろん敵に見つかる可能性があるので控えめなもの、戦場という非日常の中ではまるでいつもの日常に戻ってきたかのような安心感を感じてしまう。

それでまあ、何故クリスのところに戻つてきたかだったか。そんなの今更話すまでもないけれど、彼にとっては心底不思議なのだろう。

だから簡単に言ってしまうえば、

「そんなの、親友見捨てて逃げるなんざ出来る訳ないからに決まってる。それにほら、オレたちは仲間だからな。助け合うなんて当たり前だろう?」

「そうだそうだ、お前は俺たちのことなんざアテにしてなかつたかもしれないが、こつちにしてみりや違うんだよ。三人揃えば文殊の知恵、なんて言葉も大和にはあつたらしいしょ」

「なるほどな……俺は素直にお前たちを尊敬する。よくお前たちのような真つすぐな人間が、俺ごとき破綻者の友であつてくれるものだと思ふ」

まあ要するに、当然のことをオレたちはしたというだけ。そしてクリスがどれだけ仲間を信じられないと言おうが、それとは別に友情をしっかりと抱いてくれているのも知っているのだ。ならば今はそれで良い、仲間としてハッキリ認められるのはこれからの努力次第で何も変わらない訳だ。

「だが……今回の戦いは俺の負けか。奴を相手に粘りはしたが、結局このザマだ。勝ち目すら見えないと感じたのはいつ以来だろうな」

「お前程の奴がそこまで言うかよ……でもまあ、負けじゃないだろうや」

「……何故だ? 勝つつもりで戦い、それでもなお力及ばずに敗北を覚悟した。お前たちが来なければ俺は確実に死んでいただろう。単に運よく生き延びただけを、負け以外になんと評すればいいのだ」

「決まつてる、勝ちだよ」

アルの言葉をオレが引き継いだ。クリスは“勝利”についていっそ潔癖なくらいだが、オレたちは別にそうでもない。負けは負けと認めるし、そこから這い上がれるかが重要だと思う。要するに、諦めなければいいだけのこと。

とはいえ、今回は別に負けではないだろうと思う。

「めっちゃ強い相手と戦って、善戦して、最後はどうあれ生き残ったんだぞ。これを勝ちって言わなきゃ何が勝ちになるんだよ? 相手を打ち負かして殺せば完全無欠の勝ちなのか? それは違うだろうと

オレは思うな、生きてればまだ次があるんだからさ」

「だから勝負に負けようとも、生き残った時点で勝ちだと言いたいのか？」

「そうだ。まさかとは思うけど、ここで負けたからもう二度とアイツには勝てないし戦う気もない、なんて考えてる訳じゃないだろう？」

わざと挑発でもするように言ってみれば、即座にクリスの闘志に火が点いた。身体が弱っていることなど微塵も感じさせないような荘厳さが溢れ出す。彼はまだ、ちつとも諦めてはいないのだ。圧倒的な相手と戦ってなお、心が折れてなどいなかった。

「無論だ、次は必ずや勝利してみせる。例えば肉体的に敗北しようが、心までは必ず負けない。来るべき再戦に備え準備を始めなければな」

「その意気だ、お前に負けは似合わねえよ。まだ負けが決まった訳じゃないんだ、なら次の必勝を誓えばいい」

「オレたちだっていつまでもクリスにおんぶに抱っこって訳にもいかないし、努力はしてみせるさ。お互いに頑張ってみようぜ」

今はまだ負けは負けじゃないのだ。敗北から学び、受け入れ、次の勝利を模索する。これから先がどうなるうとも、今のオレたちにはまだチャンスが残っている。たった一度の敗北で全てがおじゃんになるなんて次元には到達していないのだから。

ハッキリ言っておレも悔しい。どうにかクリスの手助けは出来たものの、今回は——今回“も”な気はするが——何も良い所なしだ。これじゃ『彼の隣に並び立てる友人になる』という、心に決めた誓約だって果たせるかどうか。現状では何も変わらないし変わらない。ただし焦っても仕方ない。それよりも今、もつとも恐れるべきことは——

「オレたち、まさか敵前逃亡とか思われてないよな……」

「いやあ、それは無いと思うがなあ、ハハハ……」

「さて、どうなるだろうな。全ては影隊長の思うようになるはずだが」  
負けてはないが勝ってもいないという現状を、どう上官に釈明するかだろう。

まずは結論から言えば、先のテューリンゲンの森での戦いはアドラー帝国の勝利で終わった。

オレたち三人は大局には一切噛んでないので後から知ったのだが、どうやら帝国軍は正面から派手に攻め込む陽動たちと、森を迂回してアンタルヤの本陣に攻め込む二つを用意していたらしい。特に前者については情報管理に敢えて穴を空けておく一方で、後者の本命は自軍にすら徹底して秘匿しておく周到ぶりである。

そして作戦開始直後に一部の兵を連れて行動を開始し、警戒網を潜り抜けて敵陣に大打撃を与えたそう。夜が明ける前にアンタルヤの傭兵たちは散り散りになって逃走し、アドラーは軍事帝国としての面目躍如を果たしたことになる。

捨て駒作戦は正直癪だし腹は立つが、それでしつかり成果を出しているから何とも言い難い。などと感想を抱いていたオレたちではあるのだが、現在はちよつとしたピンチに陥っていた。

「つまりまとめると、君たちはかの悪名高き“血塗れの雛罌粟”の構成員と交戦、そして命からがら逃げてきたということかな？」

「まあ……」

「……その通りですね」

影隊長あいきいからの否定しようがない言葉に、オレとアルが歯切れも悪く返答した。別に悪いことをしたとは思ってないが、かといって上官の前で直立不動なのは純粋に緊張してしまうものだ。こういうとき、いつだって表情を崩さず不動を保つクリスが羨ましくなってしまう。あのとんでもなく強い傭兵との交戦からおよそ一週間が過ぎた頃、オレたち三人は影隊長の呼び出しを受けていた。ビクビクしながら隊長室に赴き整列したのは三十分も前だったか。先の戦いのあらまは既にも上層部へ報告していたものの、今回改めて詳細を話す形となったのだ。

ただし治療を受けたクリスの傷はまだほとんど癒えていないのだがお構いなし、本人もなんら躊躇なくベッドから出ていたので止める

暇もなかったほどだ。医者も無理はさせるなど言っていたのだが、  
ちらも気にする素振りすらない。

軍隊において一兵卒が上官の命令に従うのは道理だろう、そこは理  
解できる。だが仮にも怪我人で、しかも生還できた一番の要因をこう  
も無碍に扱うのはどういう見なのか。個人的に怒りが沸き上がる  
ものの隊長の手前なのでグツと我慢する。

「ふむ、なるほどな」

そしてこつちの心情を知ってか知らずか、影隊長は思案するように  
顎へ手を寄せる。黒髪黒目という大和が直系の証を見せつけるよう  
に身を乗り出し、値踏みするようにオレたちを見渡した。

さてここからどうなるか。変ないちやもんを付けられてしまえば  
どうしようもない。なまじ血統主義の頂点かつ平気で捨て駒発言を  
出来る上官だから、変な意味の信頼は多分にある。

動揺を表に出さないように意識しながら待つこと数秒、影隊長が口  
を開いた。

「成果が挙がらなかったのは残念だが、それ以外に特段責めるべき箇  
所はないだろう。君たちの今後の活躍も期待させてもらうとしよう」

一瞬、自分の頭が馬鹿になったかと錯覚した。それくらい隊長の発  
言は常識的であり、かつ普遍的なものだったからである。少しばかり  
見直したまでであるかもしれない。

これまでの態度とは正反対な言葉に今度こそ動揺してしまい言葉  
が出ないが、それをフォローするようにアルが先んじて頭を下げた。

「……ありがとうございます、影隊長」

腑に落ちないといった具合のまま礼を述べたアルに続き、オレとク  
リスも一緒に頭を下げる。どうであれ評価された上で期待されてい  
るのは事実なのだ、ここでおかしな態度を取る方が余程相手の機嫌に  
障るだろう。

だけど、本当にそれだけなのか？ あのととき、初めて顔を合わせた  
タイミングで臆面もなく「役に立たない者に価値はない」と宣言し  
てみせた男にしてはやけに素直なような。

目くばせで隣の二人を視線を交わす。やっぱりどちらも似たよう

な感想を抱いてるらしく、瞳は疑惑の色に染まっていた。

果たして隊長の方は、オレたちの悪い期待を裏切ってはくれないようである。

「ああ、礼は不要だよロデオン二等兵。つまり君たちは見込みがあり、かつ格上に追い詰められても戦い抜けるということだ。これは良い、非常に便利な手駒と言えよう。その活躍には大いに見込みを持てる、是非とも精進してくれたまえ」

「は、はあ……」

真正面から手駒とかいう辺り、ちよつと見直した感情が一気に下方修正されていく。やはりなんというか、この上官はオレたちスラム育ちの一兵卒を人として見ていないのだろう。有用ならば多少は気に掛けるが本質的には何も変化がない。役に立つか立たないか、それ以外は至極どうでも良いから簡単に色々と言えてしまうのだ。

これがアドラー帝国に蔓延る血統主義とやらの弊害なのだろうか。人を人とも思わないその感性は、今も昔も理解しがたいものがある。なまじ特別な感情など少しもなく、「それが当然」と言わんばかりの態度だから余計に酷いのだ。

「だから君たちを見込んで、早速だが次の戦線に出てもらおうことにした。喜びたまえ、今度こそ武勲を稼ぐチャンスだ」

「それは……!?!」

「発言は許可していないぞ、ブラウン二等兵。いいかね、今回の勝利によって他の膠着していた戦線も動きつつある。これは紛れもないチャンスだ、我ら血染<sup>バ</sup>処<sup>ル</sup>女部隊<sup>ゴ</sup>がこの機を逃がす訳にはいかないのだよ」

理屈は分かる。旧・ドイツ領におけるテューリンゲン州での戦いがアドラーの勝利に終わったことで、東部戦線の各地で変化が起き始めるのは自然なことだろう。自国の勝利によって勢い付いている現状を指揮官が利用しないはずもなしだ。

けれどその意味するところは、つまり……

「ですが隊長！ まだクリ——ヴァルゼライドは完治していません！

無茶をさせればそれこそ期待も何も——」

「先ほども言ったが発言は許可していないぞ、ブラウン二等兵。それとも営倉に入れられなければ分からないかね？」

「ツ……！ すみません、でした」

「よろしい。私も美人の顔を殴る、などという事はしたくないからね」  
今更どの口が言うのやら。謝罪しながら心の中で吐き捨てる。今までもこの手の輩とは何人も出会ってきたが、彼は上官だけに性質が悪いし腹も立つ。こちらが言い返せないのを知っているのだ。

しかしそんな個人的文句より遥かに問題なのは、オレたち三人が次の戦線にも順当に送られるということである。この流れを活かす以上、さらなる戦火まで数か月も間を取るなんてしないだろう。遅くとも一ヶ月か、早ければ数週間単位かもしれない。時間はそう多くないだろう。

そうなるとクリスの大怪我はいつたいたいどうなるのだ？ 本来なら今も安静にしてなければならず、こうして上官の前で不動の佇まいを維持していることが異常なのだ。なのに傷も塞がらない内から戦線に放り込むようでは、実質的に死ねと告げてるようなものではないか。

ハッキリ言っており得ないし考えられない。だがついさっき、影隊長はわざわざ真正面から教えてくれたじゃないか。オレたちはあくまで手駒であると。その観点からみて、安静させてる暇があるなら肉盾にでもなつて来いということだ。

「君たちは何か忘れてはいないかね？ スラム出身で成り上がりを見える若者なんて毎年いくらでもやって来るし、それこそ補充の利く要員なのだよ。確かに君たちの能力は秀でていられるかもしれないが、かといって特別扱いする程でもない。この意味を理解できるかな？」

だから文句など口にせず、黙々と上に従っていれば良いということか。

ハッキリ言つて反吐が出るような思想だ、これと同じ人間であることが恥ずかしいくらいである。

それでも今度こそ何も言わず黙っていると、隊長はクリスの方を見た。「出来るか？」ではなく「やれ」という意味の込められた視線に、



クリスは力強く頷いてみせた。

「承りました。この命に替えてでもアドラーに勝利を齎してみせましょう」

「うん、良い返事だ。だが勝手に口を開くなど、私は二度も言わなかったかね？」

満足げな笑顔のまま、隊長はツカツカとクリスの目の前に来ると、大きく右腕を振りかぶって彼の頬を殴った。突然の凶行にオレもアルも開いた口が塞がらない。

しかし当の本人はその一撃に揺らぐことすらなく、口の端から血を流してもなお揺るがない。そんな有様が癩に障ったのか、それとも面白いとでも感じたのか、無表情になった隊長は短く退出を促してきた。これ幸いとばかりに三人揃って部屋を出て、本来クリスの居るはずの病室まで戻ったところで深い溜息を吐いてしまった。

「ったく、なんだありや……おいクリス、大丈夫か？」

「委細問題はない。そう心配せずとも大丈夫だ」

「本当か……？ お前の我慢強さは見てて心配になるぞ」

そこでようやく張り詰めた緊張がほぐれ、ちよつとだけ口元に笑みが浮かんだ。本当にあの状況は胃に悪いし、一秒だって滞在したくない程にムカムカする。だけど三人で居ればなんとかその悪感情も隅に追いやれる気がした。

ともあれ、今回の一件で影隊長のスタンスはこれ以上なくハッキリしたと言えよう。丁寧な態度ながらあくまでこちらを人とは見ず、替えの利く消耗品程度にしか考えていない。重傷を負った相手を容赦なく殴れる辺り胸糞の悪さはトップクラスだ。

だが完全な無能でもないから余計に困る。今回の作戦もこちらの感情や兵の損失を除けば有効だったし、一応成果も出している。時期を鑑みて畳みかけようとするのも指揮官なら当然だろう。どうしてもその“ある程度は筋の通った合理性”まで責め切れない。

たぶん二人も似たような感情を抱いているのだろう。アルは苦虫を噛み潰したような表情だし、クリスはなんら気にしてない様子でベッドに腰かけている。一番怒り狂つても良いだろうに、この中で最

も冷静だ。

「んで、どうするよ？ このままやるしかないのか？」

「だろうな。問題あるまい、幸いにしてお前たちに怪我はないのだ。ならば後は、俺さえ早期に復帰すれば懸念はないだろう」

「そういう問題かよ……」

またそうやってこの男は、こちらの気持ちも知らないでそんな雄々しいことを言う。ついこの前無茶をしたというのにまた無茶を繰り返そうとする。それしか自分に出来ることはないとばかりに、狂気じみた不転の覚悟で。

「今回はオレ達が守ってもらったんだ、次はこっちがお前を守ってやる番だろ？ なあアル？」

「そうだけ、いつまでも一人で背負うなってんだ。俺達は親友で、仲間だろ？」

「仲間、か……そうだな、お前達が言うならそうなのかもしれない」

だが、と鋼の男は続けた。有無を言わさぬ強い視線に射抜かれる。「そのような気遣いこそ俺には無用だ。お前達は俺などを守るより先に、自分の事にまずは集中してほしい」

「お前は……！ この後に及んでまだそんなことを——」

「事実を言ったまでだ。この程度の傷で遅れを取るなどない。だからまずは、自らがしつかり生き残る事を考えろ」

もしかしたら、それはクリストファー・ヴァルゼライドという男からの不器用で正論混じりな気遣いだったのだろうか。反論しそうになるのをグツと堪えて彼の言葉を反芻した。それ自体はとても嬉しいのだが、正しさだけで世の中は回らない。

絶対に無理などさせたくない。下手をしなくとも今度こそ死ぬかもしれないのだ。けれど、そう——クリスならあるいとは思えてしまうのだ。この誰よりも強い男は、本当に傷などモノともせず活躍してしまうだろうと。

そう考えてしまった時点でオレはクリスの友人失格なのだろうか。だけでもその雄姿に憧れた一人として、彼の紡ぐ逆転劇を見てみたい。二つの感情の板挟みとなってしまい、うまく言葉を探せなかつ

た。

「つたく、そうなるとお前は強情だからな。分かったよ、なら折半だ」  
ポン、とアルが手を叩いた。二人してそちらを見やる。

「クリスはクリスで好きなようにすりやいいさ、止めはしねえよ。ホントは養生して欲しいが命令ともなればそうはいかねえしな。ただし、俺とレーテも勝手にお前を守ってやる。それで良いだろ？」

「……お前も、随分とまとめ役が板についたな」

「言ってる、誰のせいでそうなったと思ってやがる。レーテもそれで良いな？」

確認されたので静かに首肯した。確かに、現状の最善手はそれしかないだろう。互いに感情論で突っ走っても平行線のまま終わらない。

なんだか最近アルの冷静さに助けられてばかりだと、ふと感じた。彼が居なければどうなっていたことやら。あまり考えたくない想像だ。

「ありがとな、アル。お前がいてくれて良かったよ」

「よせよ、照れるって。俺達だつて今回の反省しなきゃならねえし、やる事は沢山あるんだからな！」

本当に照れ臭そうに頭を掻いて話を逸らしたアルに、こちらも照れ臭くなって視線を逸らしたのだった。

◇

——それから先の出来事は、もはや語るまでもないだろう。

鋼の英雄の不屈が、その光に憧れた者の努力が、たかが尋常の戦争ごときで折れるなど決してありえない。光を仰ぐ者たちは程度の差こそあれ、どのような窮地に追いやられようとそれらを糧にし、成長し、自らを磨き上げ、必ずや勝利と共に生還するのだから。

テューリンゲンの戦いから僅か二週間足らずで三人は次の戦場へと送られるが、先の戦いで既に要領は掴み始めている。さらに此度は単騎で戦局をひっくり返せるような規格外クラックの存在が無かったのもあり、ヴァルゼライドを筆頭に三人は切り込み役として大きく戦功を挙げたのである。

ただし、最初の方はこの評価にも色々と疑念や虚偽の視線が向けら

れた。なにせ一人はまだ重傷も治らぬ新兵で、さらに一人は少女ではない。これにもう一人青年を加えたところで本当に先陣が務まり、かつ生還できるのかと疑問視されるのは当然といえよう。

もちろん実際のところはひたすらに気合と根性、怪我を負つていようがお構いなしにヴァルゼライドは突き進むしマルガレーテも後を追う。むしろピンチはチャンスとばかりに学習速度を高めていくものだから、ハンデがあるはずなのになお無双してしまう有様だ。前だけ向いて走り出す両者のフォローに回るアルバートが苦勞する羽目になったのは言うまでもない。

精神力が限界を凌駕する、などと荒唐無稽な理論は既に芽を出しているのだが、普通はそう考えるはずもなし。

——どうせ他人の手柄を横取りしたのだろう。

——いいや、最初だけ勇猛に見せかけて逃げ惑っていただけかもしれない。

——あるいは単に運が良かっただけやも。

そんな多くのやつかみが軍内で飛び交ったが、謂れのない中傷程度を気にする様な繊細なメンタルの持ち主など一人もいない。好きなように言わせておくとヴァルゼライドはにべもなく切り捨て鍛錬に励むし、マルガレーテもアルバートもそんな彼に倣って無視をする。

こうなると面白くないのは悪評を噂する兵士たちだが、彼らも次第に黙らざるを得なくなる。波に乗った帝国軍が短期間の間に一気に戦線を押し上げた結果、アンタルヤとの武力衝突が幾度となく起き、マルガレーテ達もまた様々な戦場をたらい回しに送られることになったからだ。誰もが次こそは野垂れ死ぬだろうと信じて疑わなかった。

なのに次の戦場で、その次の戦場で、次の、次の次の、そのまた次の、あらゆる戦場で。どれだけ過酷だろうとなお先陣を切り、五体満足で生き残るとなればぐうの音も出ないだろう。次第に疑惑の声ややつかみは消え、代わりに彼ら彼女らへの尊敬の感情が強くなっていく。

——彼らはいったいどれだけの強さを持っているのだ？

——なんでも、ヴァルゼライドとやらは他者の数十倍の鍛錬を一日も休まず続けているとか。

——他の二人も似たようなものらしいぞ。おまけに勉学にすら励んでいるらしい。

一度風当たりが正の方向へと傾けば、後は容易く前評は覆るものだ。これまでの悪評判が嘘のように立ち消え、戦場で輝かしい活躍を残す若き英雄たちへの憧憬の念が大きくなる。加えて三人とも一回たりとて成果を鼻にかけたことはなく、常に謙虚な姿勢で鍛錬を続け、時には教えを請うことすらあったのだから心証は一挙に右肩上がり。

まるで物語から抜け出したかのように奇跡を起こす青年と、その友として弱音を吐かず背中を追う二人。インパクトとしては十分すぎたし成果も伴うなら言う事なしだ。

僅かに一年と少し。それがヴァルゼライドたちが期待のホープとして頭角を表し、不動の戦績をモノにし始めるまでの時間だった。

◇

「ああ、まさかこれほどまでとは。素晴らしい、噂に伝え聞くだけでも身震いするくらいだよ」

故にこそ、“彼”は想う。あの時抱いた自らの予測は外れていなかったのだと。彼らは紛れもない傑物として名を上げ、東部戦線に存在感を知らしめ始めている。嘘のような真の話は遠くアドラー帝国首都の、士官学校にまで届いていた。それだけスラム育ちの新兵<sup>ルーキ</sup>らの活躍は衝撃的だったのだ。

「だが伝聞はあくまでも伝聞であり、百聞は一見に如かずとも言う。ならば良いだろう、君たちの輝きを是非とも間近で見届けさせてくれ。あるいはそれこそが、全てを変えてしまふ一因かもしれないのだから」

まだ完全に信じ切っている訳ではない。彼らの輝きを知るには直に視ることが一番だから、一刻も早く東部戦線へ投入されることを“彼”は望むのだ。例え強大な光に両眼を潰されようとも構わない、もとよりこの不誠実で不平等な世の中が見えなくなろうが一向に構わなかった。

「綺麗なもの、理路整然としたものが好きだとしても、全てが上手くいく訳ではない。だからこれが現実だと諦めたが——さて、君たちはいったい何を私に見せてくれるのだろうか？」

“彼”にしては珍しく、それこそ滅多に見せないような楽し気な響きを含ませて、眼鏡の奥の青き瞳を輝かせたのである。

アドラー帝国に、とある男がいた。

彼は肉体的にも、精神的にも、頭脳も、身体能力も、家柄も性格も容貌も何もかもが優れた人間だった。だがそれらに胡坐をかいて驕ることなく努力できる謙虚さすら持ち合わせた彼は、士官学校始まって以来の秀才とすら目される。実際、努力できる天才ほど完全無欠な事はないだろう。彼が素晴らしい人間と評することに誰も疑いは持たなかった。

けれど彼の中では、そのような評価や自らの才能など些末事に過ぎない事象だった。彼にとって重要なのは『世界は正しい方向を目指せるようになっていく』というその一点であり、故に自分が努力するなご当たり前の認識だった。

何故なら、そちらの方がより正しい選択だから。彼は綺麗なものや理路整然としたもの、つまり道理に適った善行こそ好んだわけである。やはり人として間違っていないし褒められるべき認識だろう。

けれど現実はその簡単にはいかない。確かに彼は天才だし努力もできる理想の人間だが、他の者まで全員がそうとは限らない。むしろ彼に比べればほんのちっぽけな才能程度で慢心し、自分を磨くことを放棄し、墮落に走る者たちの何と多いことか。そしてそのような手合いに限って彼が注意すると決まって言うのだ。『天才に俺たちの苦悩など分かる訳がない』と、上から目線で偉そうに。

普通なら怒って良いだろう。その理屈は自分を棚に上げてよい理由にはならないし、子供でも間違っていると分かる穴だらけの理論だ。しかし彼にとってこの言葉は一応間違っていないし、『まあ確かにその通りだ』と納得できる潔さと度量の広さを備えていたのは幸いだった。

ならば仕方ないとひとまず納得して、彼は自分に出来る範囲で善行を行おうと考えた。他人に無理強いをしたところでどうにもならないし、自らの在り方を変える必要もない。墮落や諦めといった負の要素はどうしようもなく存在するのだから、もし無くすなら世界を丸ご

と叩き壊して再構築するより他に道はない。論ずるまでもなくそんなことは不可能だ。

この時点で、彼は紛れもない傑物だった。自分に出来ること、他人に出来ないことをしつかりと見定めていた。いつか社会の上に立つたあかつきには、今よりもう少しより良い評価社会を作りたいと現実的な願いを持っていた。

だけど心のどこかでその反対を、全ての言い訳を薙ぎ倒して正しい方向だけを目指せる世界を希求する想いも確かにあつて。明晰な頭脳はその可能性を否定しながら、心はどこかで望んでいた。

——故にこの出会いは必然だったのだろう。

恵まれない生まれながら心一つで全ての障害を乗り越える光の傑物と、彼に感化されて諦めずに努力する友人たち。まさしく彼の望んだ理想の人間たちがそこには居たから、思わずその行く末を気にかけてしまったのは無理もないことだった。

◇

東部戦線へ投入され、第六部隊血染処女パルゴの一兵卒として戦い出してから既に一年と半年もの時間が経過していた。

オレからすればそんなに時間が経ったようにはとても思えない。せいぜいが半年とかそれくらいな感覚なのに、実際にはその三倍も経っているのだ。それだけ戦いに明け暮れ時間も早く過ぎ去ったということだろうか。

戦いに続く戦い、青春時代を過ごすにはあまりに凄惨で血なまぐさい経験であるが……意外にも心の方はちつとも悲観していなかった。

「どうしたよ、レーテ？」

「いや、悪いな。ちよつとボケつとしてた」

「あまり気を抜くなよ。少しの慢心、油断が命取りになる」

「分かってる、そんな真面目に言ってくれなくても大丈夫だよ」

相変わらずガタゴトと揺れる軍用車の中で軽口を叩き合う。軍人とは思えない気安さではあるが、これくらいの雰囲気と真面目さが心地よい。これから命のやり取りをしに行くならばなおさらに。

軽く十人以上は乗れるはずの軍用車であるが、生憎と搭乗員はオレ



たち三人とスラム育ちの新兵が数人程度だった。一ヶ月前に起きた旧・ドイツ領バイエルン州での戦いでほとんど死んでしまい、生き残った者はごく僅か。首都から送られてくる人員だって当然限りはあるのでしばらくはこのままのようだ。完全に人手不足だが文句を言つてはいられない。

オレたちの同期は既にゼロだ。大部分は予想外の“血塗れの雛罌粟”との出会いで殺されてしまったし、それ以降の数多の激戦を潜り抜けてきた者は皆無だった。その後やって来た者もつい最近全滅し、最新の兵士は既に説明した通り。誇張抜きで酷すぎる状況だと思う。きつとオレたちだって運が悪ければそうなった。

「なあ、俺たち次も生き残れるかなあ……」

「馬鹿、不安になること言うなよ」

ふと対面を見れば、その新兵たちの二人が深刻な顔で会話していた。無理もない、オレたちに支給される装備はどれも粗末なものだ。もちろん装備が良ければ絶対に生き残れる保証もないが、安心度が違ってくる。ましてこの前の戦いで同僚はほぼ全滅したとなれば不安に駆られるのも無理はない。

そんな彼らに何か言葉を掛けるべきだろうか。ちよつと迷ったがその心配は無いだろうと判断した。さらにもう一人が毅然と拳を握って語り出したからである。

「やる前からそんな諦めちやダメだろ！ ヴァルゼライド先輩たちだって僕たちと同じ境遇からここまで来てるんだから、どうにか出来るって信じようぜ！」

「た、確かに……」

「うん、そうかもしれない……弱気になっちゃダメだよな」

どこことなく熱血青少年な雰囲気を漂わせる彼の言葉に不安そうだった二人が元気づく。さっきまでの弱気を忘れて前を見据え、自分たちの力で未来を切り拓こうと決意をしたのだ。見てるこっちも何だか勇気づけられる。

ただその切っ掛けがクリスなのは納得できると共に親友として

ちよつと気恥ずかしいが。オレとアルの間に挟まって座ってる彼を一斉に小突く。気分は学生時代の恋バナ状態である。

「おーおークリスマス、めっちゃ尊敬されてるんじゃないかよ」

「どうよ、目の前で言われた気持ちには？ やっぱクリスマスでも照れるか？」

ニマニマと笑いながら問いかけて、

「照れるも何も、あれは彼らが自分たちで悟った意志の力だろう。俺はその切っ掛けになったかも怪しいというのに何を関わった気持ちになれば良いという」

「お、お前なあ……」

「ここでマジレスするとは思わなかったぞ……」

取りつく島もなく二人揃って撃沈した。

まあ確かにクリスマスはそう答えるかもしれないが、にしても堅物すぎる。ほら見ろよ、例の新人君たちが割と驚いた様子でそっちを見てるぞ。謙虚も過ぎると大概というか。もうちよつと威張ってみた方が向こうもやり易いだろうに。

「だがその意志自体は尊いものであり、寿がれるべき感情だろう。それを持つお前たちに俺は敬意を評させてもらおう」

『あ、ありがとうございますッ！』

そしてこれまた意図せず株を上げ、三人揃って彼への憧憬をより強めるまでがテンプレだ。うん、さすがは魔性の男である。この一年半で魅了した男たちは数知れず、勇猛な戦いぶりと謙虚な姿勢で一兵卒とは思えない支持者を獲得したのも領ける話だ。狙ってやってる訳じゃないからなおすさまじい。

などとやっている内に軍用車が止まり、いつの間にか静けさが辺りを支配した。もう戦場間際まで到着したのだろう。時期に室内の無線からオレたちへ指示が入るはずだ。たぶんいつも通りに先駆けを務めろという類の内容だろうが。

「ま、いいいさ。どうにか皆で生き残ろうぜ、なあ？」

『はいー』

「はは、お前の方が代わりに先輩面かあ？」

「うつせえつての」

三人揃って威勢の良い返事をするのが何だか初々しい。オレたちも昔はこうだったのかなーと思いつつ、僅かな猶予時間を過ごすのだった。

◇

兵士としてのオレたちの仕事は非常にシンプルだ。ただ最前線へと切り込み、一人でも多く敵を殺せ。与えられる命令は過不足なくこれだけである。

だが何事も単純な方が意外に難しい。最前線だから敵側の洗礼を一身に浴びるし、アドラー兵の誰よりも長く戦わなくてはならない。疲労と緊張と死への恐れ、それらすべてと戦いながらアンタルヤの傭兵と刃を交える必要があるのだ。

自分で言うのもなんだが、あり得ない難易度である。常識的に考えれば絶対に生還できるはずもないし、よしんば運を味方に付けても一回二回が限度だろう。それ以上は運や偶然の埒外と呼ぶほかない。

だからこそ何度も生き残ってこれた理由は、光を仰いだ以上に思いつくはずもなし。

「今回もすごいなおい」

「いつものこった、やるしかねえだろ」

「泣き言は後だ、正面から食い破るぞ」

戦況はそう複雑ではない。荒野じみた広い土地に塹壕があり、アドラーもアンタルヤもその内部を拠点にしている。地上では重火器による援護を受けながら刀剣での泥臭い接近戦が演じられ、また戦車や爆弾すら存在する文字通りの地獄だ。毒ガスが無いだけマシだが、ほぼほぼ前世で習った第一次世界大戦の様相が一番イメージに近いだろうか。

その只中をオレたちはこれから駆け抜ける訳だ。塹壕に隠れて縮こまっていることなど軍としても、個人の心情としても許されない。征くべきは前のみ、そのために全てを貫き進むのだ。

ここしばらくの連戦連勝で勢いに乗っているアドラーがまずは仕掛ける。オレらを含め刀剣を持った兵卒が前を歩き、後方からは戦車

砲の轟音と銃の発砲音が響きだす。そうして相手側からも銃やら兵やらの応酬が起き、停滞していた戦線は一気に火が入り鉄火の吹き荒れる死線と化したのだ。

敵陣から銃火器の洗礼がやって来る。最初のこの時が最も命の危険が多いだけに気を抜けない。向こうも同士討ちを恐れず気軽に銃弾をばら撒けるし、こちらは敵陣へ踏み込む先鋒かつ肉の盾なのだから。どちらの陣営からも死んで当たり前と思われるのが今のオレらの役目である。

もちろん簡単に死んでやるはずもない。この場面の対処法は三人揃って散々頭を悩ませ、そして一つの解決策を見出した。運が悪ければ腕などに銃弾が当たることもあるが、それでも死ぬよりは余程マシだ。

まあ解決策といってもかなり力任せな感じであり……要するに撃たれる前に殺れの精神である。

「おいアル、次はどっちだ！」

「二時と十時の方向だ！　しっかり狙え、外すなよ！」

「分かってる！」

叫びながらセーフティを解除した拳銃を構える。戦場においてその小ささはどこまでも頼りないが、オレたちの持つマトモな遠距離武器はこれしかない。それを走りながらアルのいった二時の方向へと向ければ——居た。塹壕からこちらに向けられた銃口だけが上に出ている。さらに一拍置いてガンナーらしき頭が出てきて、

「そこだ」

即座に撃った。カン、と小気味よい音が響いてそいつの被ったヘルメットに弾かれる。殺せなかったがその勢いでガンナーは後ろに倒れ込み、銃弾は吐き出されることなく置き去りになった。惜しいところだが戦略的には十分だ。

さらに十時方向のもう一人はクリスが短剣を投げつけ対処していた。いつか戦ったクラックというらしい傭兵から盗んだ小技で真つすぐ二人目のガンナーへと吸い込まれ、恐るべき勢いで喉に突き刺さる。何度見ても信じられないパワーと精度だ。

「他には!？」

「今のところ大丈夫だ。向こうも今のですつかり及び腰になったな!」

こうなればもうオレらを止める者は誰もいない。一気に敵陣へと乗り込み抜刀した。クリスが三刀を用いた抜刀術で暴れまわり、サポートをオレとアルの二人で行う。何度となく繰り返した戦場での黄金パターンだ。

洞察力に長けたアルが敵のガンナーを探り、それをオレとクリスで出来るだけ迅速に処理してしまう。これがオレたちの出した結論であり先制攻撃への対処法である。頭のおかしい事をしている自覚はあるが上手くいつているのだから良いだろう。気合と根性、意志の力の前に不可能は無いと信じておく。クリスなんて放っておけば銃弾を斬りかねないし。

ともあれ、アンタルヤ側のと真ん中までくれば逆に安全だ。銃弾は飛んでこないし適度な密集はオレの小柄な体躯ですり抜けやすい。上手く間を縫って走り回りながら直刀で斬りつけ、時には同士討ちを誘発しながら立ち回る。かつては一对一の戦いで非常に苦戦していたが、どのように戦うかの型が出来ればすんなりと動けるものだ。実践に学ばされた。

走り回り、斬りつけ、たまに紙一重で攻撃を躲し、明らかに息も上がってきたところでガラガラと機械的な音が聞こえてきた。それはこの一年半で何度も聞いた無限軌道の音、キリキリ回転する砲塔の音はいつそトラウマにすらなってるほどだ。

「あ、おいアレは……」

「戦車か、しかもこっち向かってきてやがるぜ!」

「ならば潰すまでだろう。どのみちアレを自由にさせるのは危険だ」

「あ、おい!?! ……ったく!」

言うが早いかクリスが一気に駆けだした。その途中で剣を向けてきた相手をバツサバツサと薙ぎ倒しながら戦車へと肉薄せんと突貫する。生身で戦車に立ち向かう無謀さなどお構いなし、知ったことかと勇猛果敢に距離を詰めていく。いつものことながらとんだ命知ら

ずと言う他ない。

戦車の潰し方なんてオレたちが知ってる訳ないので、やり方はいつも強引で力任せだ。どうにかして接近し、よじ登り、ハッチを空けて突入し制圧する。それだけだ。やっぱり頭のおかしいことをしている自覚はある。

だがまあ、この状況で泣き言を漏らしている暇はない。周囲には敵だつて多いし戦車自体が難物だ。油断すればあつという間に死ぬのは確実だつた。

警戒すべきは銃座からの支援射撃と砲塔からの実弾、それに戦車自体が回転してこちらを轢き殺そうと動くことの三つだ。逆にそこさえ気を付けておけばひとまず死ぬ危険だけは免れる。だからといって潰せるとは微塵も思わないが、現にクリスはやらからすから何ともいえない訳で。

まずキヤタピラー部分まで詰め寄ったクリスは、相手がある場で旋回をするより先に履帯の隙間へと刀剣を突き刺した。隙間にねじ込まれた刀剣はキヤタピラーが動き出せば呆気なく折れるだろうがクリスの狙いはそこでない。恐ろしいことに柄の部分足を足場にして、ひらりと戦車の上へ飛び乗ってしまったのである。

そうなると上部に備えられた銃座と射手に鉢合わせだが、そこはこつちの出番である。先んじて発砲して相手の気を逸らしておき、その間に彼はいとも容易く銃ごと首を切り裂いた。後は内部に侵入して、たぶんまだ持っているのだろう短剣で制圧してしまえばお終いだ。

現実離れたジャイアントキリングの証人になりながら周囲で直刀を振るうこと一分弱、平然とクリスが戦車上から飛び降りてきた。折れてダメになった刀剣を履帯から取り出し、ひとまず鞘に納めている。

「これでクリスが戦車潰すの何台目だよ!？」

「教えてねえつての! そんなこと言っていないでお前も戦え!」

「こんなところであまり騒ぐな、二人とも」

かくして平然と戦車を潰したり、敵陣のど真ん中で大暴れすること

数時間。そろそろ身体の限界を感じ始めた辺りで無事に戦闘終了の狼煙が上がり、何とか今回も無事に生還することが出来たのだった。

◇

「ふむ、今回も君たちは見事な活躍だったそうだな。結構結構、素晴らしいではないか」

パンパンとどこか白々しい拍手が鳴り響く。一応は影隊長から手柄を賞賛されている訳だが、今更素直に喜べるほどオレも楽観的ではない。まして親友二人に至っては白けた視線を向けられないようにするだけで精一杯なくらいだろう。

今回の戦いも無事にアドラーの勝利で終わり、東部戦線はまた一つこちらが陣地を得た形になる。この一年半の間に旧・ドイツ領での勢力図は大幅に塗り替えられ、今やアンタルヤ側の主要拠点であるベルリンまで目と鼻の先という段階だった。

「ここまでの躍進には君たちの手柄も大いにあると部下たちからは聞いている。あまり下賤な身である君たちに便宜を図るのもどうかとは思うのだが……他の者の手前何も褒美を与えない訳にはいかないだろう」

これまた臆面もなくこつちを見下してくれる。いい加減に慣れたがこの慇懃無礼な態度はどうにかならないものなのか。今のところ態度や言葉以外で実害は無いから良いもの……それが逆に不気味ですらある。いったい何が狙いなのかとついつい上官を邪推してしまいう程だ。

「一年半の間、君たちはよく戦ってくれた。その功績を鑑みて、今この時をもって二等兵から一つ上げて一等兵に昇格とする。感謝したまえ、これまでスラム生まれから一等兵まで来れたのすら一握りだぞ」  
『ありがとうございますー！』

揃って礼を述べるものの、内心は『どの口が』としか思えない。粗末な装備を与えて使い捨てるように前線へ送っていくのだから、昇格する者がほぼいなくて当然だろう。それをこうも恩着せがましく言われれば怒りも覚えるというものだ。

だがそれを表に出せばまた話が拗れることだろうし、ひとまず素直

に昇格は喜んでおこう。これで軍隊の最底辺からはどうにか脱出できた訳なのだから、この調子で頑張っていくしかない。

「ああ、それから。君たちを呼び出したのは何も昇格と祝いの言葉を掛けるだけではないのだよ」

「……？ 私どもに何か落ち度でも？」

「いやいや、落ち度ではないさ。だが紹介したい人間が居てね。もう外で待っているだろう、入りたまえ」

部屋の外へと影隊長が声をかける。すると「失礼します」という冷淡な声と共に扉が開けられ、一人の青年が入室してきたのだ。

年の頃は十七歳までなったオレたちとほぼ同じだろう。だが眼鏡の奥にある表情はまるで能面のようにであり、どことなく精密機械のような冷たい印象を与えてくる。そして何処かで顔を見たことがあるのだが……はて、どこだったか。中々思い出せない。

その同年代らしい青年はツカツカとオレたちの前まで歩いてくると、サツとこちらを流し見た。

「その、この方は……？」

「彼は本来ならこちらとは別の戦線に配属される予定だったのだが、本人たつての希望で君たちと行動を共にしたいらしい。私としても彼ほどの人材が君らから良いも悪いも学んでくれるのは願ったりだ。故にこうして引き合わせた」

さ、自己紹介をと影隊長はやけに丁寧に促した。一応彼はアマツでトップクラスの血脈のはずなのだが、その彼をしてこの青年の家柄は無視できないということだろう。そんな男がどうしてオレたちに関わりを持つとうとするのだろうか？ 理由がよく分からないが……どうしてだろうか。ほんの一瞬、彼の口元に笑みが浮かんだような気がした。

「本日付けで第六部隊血染処女バブルゴに所属されました、ギルベルト・ハーヴェス少尉です。以降よろしくお願いします」

——どうやら唐突に新たな仲間が増えたらいいということは、すぐに理解できたのだった。



## Chapter 21 光の信奉者／Gilbert Harveys

ギルベルト・ハーヴェス少尉。略歴を聞くに彼は士官学校を首席で卒業し、かつてない天才としてその名を欲しいままにしたらしい。さらに血筋、家柄、容姿の全てにおいて一流以上という先天性の要素にすら恵まれた、一片の隙もない完全無欠な人間なのだとか。聞いているだけで眩暈がしそうだ。

「彼と君たちは確かに名目上は同じ学校の卒業生だが、それはイコールで同格を意味する訳でない。あくまで付け焼刃の知識を詰め込まれた者と、士官になるべく上等な教育を施された者。どちらが優れているかは明白だろう？」

まあ、言われなくともさすがに分かる。オレたちはあくまで士官学校の端っこにひとまずの席を与えられただけ。他の者に約束されるような将来なんて欠片もないし、何なら地位の格差をより浮き彫りにするための踏み台とも言って良い。それはこの男とオレたちの階級差からして一目瞭然だ。

ただしその割に不思議なのは、彼の視線には貴族お得意の侮蔑やら憐れみといったモノが少しも含まれていないことか。普通に考えれば影隊長のようにもっと偉そうに、かつ格下だと断定して見下すだろう。なのに彼からはそのような負の感情がちっとも見受けられない。どころか、しげしげと観察するような瞳の奥には信じられないことに――

「ええ、影隊長の仰ることも道理ではあるでしょう。ですが私は彼らを一目見て、紛れもなく尊敬に値する人物なのだとは半ば確信をしました。そうでなければこれまでの戦歴に説明がつかない」

「なるほど、君はそう評価するか……だからこの東部戦線に来たのかね？ 君ほどの才があるなら、もっと安全なところから手柄を立ててもすぐに頭角を現しただろうに」

「それで満足できない恥知らずな強欲者が自分なのです。私は彼らに

貴ぶべき光を見た。故にこうして此処に來た。これはそれだけの話であり、期待を裏切られることもないと今は確信していますから」

そうだ、この若き少尉はオレたちに対して全く色眼鏡で見えていない。いや、まあ、眼鏡はしているがちつとも心根が歪んでいないのだ。その炯眼はこちらの全てを余すことなく見通し、さながら心の奥底、感情の棲み処まで暴かれているかのような錯覚にすら襲われる。

そしてここに来てようやく、オレは彼に対する既視感の源を思い出した。確か二年前のことだった、廊下ですれ違いにぶつかった男が同じ瞳をしていたのだ。下賤な者——と自分で言いたくはないが——の非礼を一切気にせず、むしろこちらの何もかもを把握し、まるで未来を知っているかのようにオレたちのその後を予言してみせたあの男だ。

だがどうして、当時より学校一の秀才と目されていたギルベルト・ハーヴェスがオレたちの事を気にかけているのだろうか。あの口ぶりでは明らかにこちらの事を認識し、わざわざ会うためだけに東部戦線へやって來たということだ。端的に言って正気の沙汰ではないし、その価値があるとも思えない。

もし可能性があるとするとするなら……やはりクリストファー・ヴァルゼライドという規格外の男が原因なのだろうか。何事にも膝を屈せず、諦めず、勝利のためにあらゆる代償を是と出来る彼の姿は眩い。他の血染処女隊員がその姿に敬意と憧憬を持っているように、ハーヴェス少尉もまた何かを感じたのかもしれない。

果たして影隊長も似たような考えを抱いたのだろうか。一つ溜息をつくと、事務的な口調で続けた。

「ギルベルト・ハーヴェス少尉、貴官にはこれより第六東部制圧部隊血染処女の中尉として活躍してもらおう。部下はクリストファー・ヴァルゼライド一等兵、アルバート・ロデオン一等兵、そしてマルガレーテ・ブラウン一等兵を含め二十人を貸与する予定だ。しかし最初からそれだけの人数を統べることはいくら君でも難しいだろう」

「だからまずはデモンストレーションも兼ねて、我々だけで分かりやすい手柄を立ててみせろということですね？ 死なない程度に汗水

流し、他の者から抵抗感なく受け入れられるようにしろと」

「百点の解答だ。では期待しているよ、士官学校始まって以来の天才君」

最後に大きく満足げに頷いた隊長に促され、オレたちはそのまま揃って部屋を退出した。唐突にオレたちの上官となった彼は口元に薄ら笑いを浮かべて上機嫌そうだ。ちよつと気味が悪いのが本音だが、こつちへのマイナスの感情はやはり微塵も感じない。本当に、心の底から、対等の人間と見ているのが理解できる。

これまで出会った人間とはまるで違う思考を持った男に、オレたちの誰もが戸惑いを持っていたのは否めないだろう。

「立ち話もなんだろうから、まずは私の自室へ来るのはどうかね？」

そちらの方でゆつくりと親睦を深め合うのも悪くないと思うのだが「だからその戸惑いを狙い撃ち、隙間を徹すように滑り込んできた彼の言葉に、オレたちは一も二もなく揃って頷くのだった。

◇

「殺風景ですまないが、好きにかけてくれたまえ。作法を気にする必要はないさ」

案内されたハーヴェス少尉の部屋は謙遜ではなく確かに質素な佇まいの部屋だった。少尉待遇だけあって執務机と応接用のソファア、それに簡易キッチンとカーペットが敷かれた様は豪勢だが、それ以外の余計な装飾は一切ない。奥にある扉はたぶん寝室へ繋がるものだろう。けれど決して殺風景ではなく、むしろ質実剛健を形にしたような印象を受ける。

ひとまず三人並んでソファアに腰かけた。すごいフカフカ、しかも座り心地が良い。これだけでも招かれた甲斐があるかもしれないなど、割と本気で思ってしまった自分が少し恥ずかしい。

「レーテ、あんまはしゃぐなよ」

「はしゃいでないっての。恥ずかしいからそういうこと言うなつて」

「ハハハ、構わないさ、好きにくつろぐと良い。むしろ私の方がこのよ  
うな椅子しかなくて辟易していたところさ」

鷹揚に笑いながらハーヴェス少尉が対面に座り、ようやく場が整つ

た。

「まず単刀直入に聞かせていただきたい。何故、あなた程の者が我々ごときに目をかけているのです？ それこそ影隊長も言っていたように、もつと穏便かつ手早いルートも存在したことでしょう」

「そう固くならないでくれ、ヴァルゼライド一等兵。階級の差は確かにあれど、人としては間違いなくあなたと私は同格だ。いや、むしろ私などよりあなたの方が遥かに上と言っても良い」

「またクリスの奴を随分と高評価してるんですね。貴族のお偉いさんでそういう見方をする人は初めてですよ」

やや、アルの口調が砕けた。彼を相手にいつまでも肩ひじ張っては逆効果だと考えたのだろう。オレとしても少々ながら躊躇いはあるが、ハーヴェス少尉にとつてはそのの方が好ましいと見て間違いはない。それが証拠に彼はオレたちの態度の軟化に満足そうだ。

「君たちを取り巻く環境はよく知っている。スラムで生まれ、育ち、やつとの思いで生き抜いた後は軍隊の門を叩いた。しかしそこは血統と権力の世界であり、君たちにとつてはあまりに大きな向かい風だったことだろう。しかしそれでも、不満を漏らさず胸を張り、正しい在り方を保ち続けた君たちの強さは賞賛に値すると私は思っているのだよ。この世の中はそんな当たり前前のことが出来ない人間が多い、嘆かわしいが事実だ」

「あなたは、貴族でありながら今のアドラーが嫌いなのですか？ だから私たちに肩入れするの？」

「その通りだよ、ブラウン一等兵。貴族だからと胡坐をかけば下から追い継る者に簡単に抜かされる、それを君たちはこの東部戦線で存分に証明しているではないか。私はそれが嬉しくてたまらないのだ」

かなり主観は入っているが、血統主義に染まった貴族たちは碌でなしばかりだと思う。

それは九歳の時、オレを襲ってきた青年たちだとか。

士官学校でスラム育ちへの陰口を叩いていた貴族たちとか。

今の上官である影隊長も含め、貴族たちの中でマトモな人間に出会ったことが一度もないのが実情である。唯一尊敬できる大人とい

えば、アマツに仕える由緒正しい家系のムラサメ教官くらいなものだろう。改めて考えても酷いラインナップだ。

その中でこのハーヴェス少尉は明らかに思想が異なっていた。端的に言って発言が“非常にマトモ”なのだ。たかが生まれ一つで人を差別することなく、他者を正當に評価してくれる。例え貴族だろうと正しくないなら批判も辞さないし、その逆もまた然りだ。あくまでも人間性や能力で評価し、鼻負することが一切ない。

正直に言おう——とても感心した。自分たちが素晴らしい人間である、とはさすがに口幅つたくて言えないが、それでも他者より努力して成果を出しているのは事実だ。けれどそれを認めてくれる人もいれば、認めてくれない人もいる。彼は普通なら認めてくれない人の側だろうに、こうして正面から胸の内を語ってくれているのだ。

「ああ、しかし先ほどの言葉は一つ訂正させてもらおう。私はこの国が嫌いなのではなく、この国に多くいる努力をしようとしもない者が嫌いなのだよ。人間は確かに怠惰に逃げる性質があり、それを否定することは誰にもできない。だが、私が見てきた“怠惰に逃げる者”は決まって誰も彼も、君たちより恵まれていたと断言できる。誹謗中傷を受けず、才能に溢れ、己を磨くための環境と時間に困らないというのに、どうして誰も努力をしようとしないのか。私にはてんで分からなかった」

今から少しばかり失礼なことを言うがどうか許してほしい、そう前置きして彼は話を続ける。

言葉に反して申し訳なさそうな様子はなく、むしろいつそう活き活きとしているのは気のせいでないだろう。

「君たちは彼ら恵まれし者たちとは真逆だ。スラム出身故に誹りを受け、才能にも決して恵まれていたとは言えず、また己を磨くための環境も時間も満足に手に入らなかつたことだろう。私はスラムを知らない故に想像で恐縮だが、きつと日々を生きていくだけでも苦労したはずだ、違うかな？」

「そう、ですね……毎日毎日、その日の糧を手に入れるだけで精一杯。その合間を縫っては独学で鍛錬の真似事なんざしてみても、わりと

しよつちゆう命の危険に陥ったり……もしかしたら今よりも苦勞してたかもしれないね」

「そう、それでも君たちは正しさを投げ出すことなく毅然と前を向き、こうして今に至っている。皆が模範とすべき行いなのは論ずるまでもないだろう。なのに私の見てきた怠惰な者たちは、君たちの苦勞の影さえ踏まぬうちから怠惰に逃げて言い訳を重ねた。今にしてみれば恥ずべき惰弱の徒だろうさ」

段々とハーヴェス少尉の声に熱がこもっていく。口元に浮かぶ薄ら笑いはいつそう主張を増し、彼がこの現状に怒りながらも別の何かに喜んでるのが伝わってくる。まるでドロドロと煮えたぎるマグマのように、熱く、粘ついた感情の澱が吐き出される寸前なのだろう。発言も思想も紛れもなく良識者のそれだ。恵まれているはずなのに努力しないのはおかしい、彼はそう告げているし理解もできる。真逆の存在であるオレたちを評価してくれているのも光榮だった。

なのに何故だろう。今このとき、おかしな直感が最大限に警鐘を鳴らしていた。別に特別感覚に鋭いわけでもないというのに、無性におかしな鳥肌が止まらない。

——オレたちは今、致命的なエラーが起きている様を目の当たりにしているのだと。

何の根拠もない直感だし、信用したところでどうなるのか。まだ会って一時間と経過してない相手に感覚で判断を下すなど愚の骨頂である。だからこの変な予感のせいで切り捨てはせず、でも信用もせずに頭の片隅に置いておいた。

その間にもハーヴェス少尉の熱弁は続いていく。

「だから話は最初に戻るのだ。君たちはどのような苦境にも甘んじず、逆境を跳ね返さんと戦い結果を残してきた。それは私や他の者のような、最初から恵まれている者が結果を残す以上の偉業なのは間違いない。故に君たちは人として私と同格以上であり、また敬意を払うべき人間であると思うのだよ」

「そちらの言葉に水を差すことになりましたが、敢えて言わせていただきます」

クリスが強い語調で少尉へと言葉を返した。もちろん彼はそれを却下などせず、むしろ眼鏡の奥に輝く瞳を好奇心で輝かせたほどである。おそらく自分の意見を述べた上でのクリスの発言を待っていたのだ。

「そのブラウン一等兵並びにロデオン一等兵はともかくとして、生憎と自分はその評からは些か以上に外れるでしょう。自分はいくまで諦めを知らなかっただけであり、言い換えれば往生際が悪く引き際を知らなかっただけです。ただ我武者羅に自らの道を走ってきただけの人間を、そのように評価してしまうのは如何なものかと」

「ふむ、つまりこういう事か。『自分は評価に値する人間では無いから、正しさの基準に含めてはならない』と。ならば言わせてもらうが、それこそまさかだ。何故なら私は、あなたのような人間の登場をずっと待っていたから」

まるで信奉者のようだと思った。クリストファー・ヴァルゼライドという男が放つ雄々しく巨大な光を仰ぐ敬虔な信奉者。他の誰よりも光を拝し、そして目を焼かれてしまったかのようにそれ以外が目に入らない。どこことなくそのような印象を受けたし、あながち間違いないだろう。

ただ、それはオレも似たようなものだから。むしろ共感を覚えるところがあるし否定をするつもりも無い。アルは無言で事の推移を見守っていた。

「その謙虚さもまた美德と評すべきか……ふむ、他ならぬあなた自身がそう言うのなら今はそれで良いのかもしれない。しかし、その在り方に影響された二人は私としても非常に興味深いのだ」

「俺たち、ですか？」

「そうだとも。正しい光を目標に出来れば、人はどのような環境からだろうと立派に立ち上がることが出来る。それを証明しているのは他の誰でもない、君たちだろうか？ 人間、誰しもやろうとさえ思えばいかなる困難をも突破できる力があるのだ」

——すべては、心一つなり。

彼のそんな言葉が聞こえた気がしたから、オレも思わず口を開いて

しまっていた。

「私は、例えばどんな状況だろうと諦めなければ道は開けると信じてここまで来ました。あなたもやはりそう思いますか？」

「無論だとも。ここに歩みを諦めなかった者が三人も居るといふのに何を疑う必要があるのか。私にはない」

これはもう、確信できた。彼はオレと同じような人間だ。心一つでいかなる道を開けると信じているし、その為の如何なる障害も苦にしない。どちらがより強く信じているかはこの際置いとくとしても、アルを除けば初めてそのような相手と出会えたのは純粹に嬉しかった。「そのオレ、いえ、私は、あなたと上手くやれると思いました。これからよろしくお願いします」

「そう畏まってくれなくても良い。だがそうだな、私の方こそ君とは上手く付き合えるという確信があるよ」

そうして、差し出した右手が硬く握り返された。がっしりとした男の掌から、火傷しそうなくらい熱い感情の迸りが伝わってくる。やはり彼もオレと同じ、光に憧れそれを追う人間なのだろう。このほんの短い時間でそこまで理解できるくらい、彼の心は一途だった。

「ま、レーテがそう言うなら大丈夫なのかな。クリスみたいなタイプがまた一人増えたのは誤算だけど……こちらこそよろしく願いますよ、ハーヴェス少尉」

やれやれといった風に頭を振りながらアルも笑った。何だかんだ彼としても理解者が得られたことは事実だから、それを否定するつもりもないのだろう。

そして最後の一人。ある意味で最もハーヴェス少尉が熱を上げている東部戦線の若き英雄はといえば――

「どうであれ、共に戦うことに異論はないか……ハーヴェス少尉、あなたが正しい思想の下にこちらを評価しているのは十分に理解できました。このような男を参考にするのは推奨しませんが、善き付き合いを出来ればと思います」

「こちらこそ、どうぞよろしく頼むよ、ロデオン一等兵、ヴァルゼライド一等兵。私は君たちこそあるべき人の鑑だと信じている、その雄姿



を間近で見せて欲しいのだ」

笑う姿に安堵して、こうしてオレたち三人の中にまた一人新たな仲間が加わったのである。

ただし——オレとハーヴェス少尉の思想は非常に似通っていたものの、ある致命的な点で擦れ違いを起こしていたのだが。

それによろやく気が付けたのは、今よりずっと先のことだった。

初めてフランクフルトの街並みを見た時は、確か冬の季節で雪も降っていたと思う。アドラー首都とは全く違う寒さに体を震わせながら、東部戦線の本拠地まで移動していたはずだ。

あれから気が付けば一年半が経ち、景色も気温もすっかり様変わりしていた。

「思えば、こうやってフランクフルトの街を見物するのも初めてかな」

「確かななあ……最初に来たとき以来、自由に歩き回る機会はちつとも無かったぜ」

「各地の戦線をひたすらに駆け回っていたからな。お前たちには良い息抜きになるだろうさ、楽しむと良い」

「そう硬くなることもないだろう。あなたもまた人並みに楽しむ権利はある」

フランクフルトの街並みに飛び出したのは、つい先日オレたちの上司となったギルベルト・ハーヴェス少尉からの提案が発端である。

彼も知識として旧暦から続くこの街を知ってはいるようなのだが、実際に歩いてみたことは無いという。だからオレたちに案内してほしいと頼んできたのだが、生憎とこちらも戦争漬けで街のことなんて全然知らない。そうでなくとも自分を鍛えることばかりしていたものだ。

なので案内はちよつと出来ないと遠回しに言ったら、どうやらそれもお見通しだったらしい。ならば四人で学びに行こうとか何とか言いだして、言われるがままに全員揃っての観光ツアーが始まったのである。

「夏は暖かかってレーテが言っただのは本当だったんだな。こうやって軍服着てると熱くて仕方ないぜ」

「我慢したまえ、ロデオン。あまり市街地で軍人が軍服を着崩す訳にもいかないだろうさ」

「ギルベルトの言う通りだな。あんま格好付かないとやっぱどうかと

思うし。ほら、クリスの方見てみるよ。汗一つかいてないぞ」

「鍛錬や戦いで身体を動かしている時に比べればどうということはないからな。アル、お前はもう少し我慢強くなった方が良いかもしれないな」

「つたく、なんだよ皆して！ はいはい、俺が悪かったですよー……」  
すつかり、という程でもないがオレたちとギルベルト・ハーヴェス少尉は打ち解けていた。年齢がほとんど同じで、かつ互いに敬意を抱けているからだろう。オレたちは気付けば彼のことをギルベルトと呼ぶようになったし、向こうもオレたちのことは普通に名字で呼んでくる。敬語ももうほとんど抜けてしまっているが、もちろん軍人として公私混同はしない。

ともあれ賑やかに会話をしながら古くからの街並みを歩いていく。旧暦の遺物たるビルや機械的な街頭が多く残っているが、そのどれも電気を必要とするので無用の長物か、まったく別の使い方をされている。例えばビルはアドラー帝国軍がやっているように自動ドアが手動ドアに、内部も空間だけを再利用しているし、街頭は新たにランプが吊り下げられてガス式となっていた。

コンクリートで整えられた自動車道も今はほとんど車が走らず、たまたに通る軍用車を除けば人間が好きに闊歩できる有様だ。歩道との区別がほとんど無い光景は旧暦を知っている身からすると新鮮で仕方ない。

「なんだか、変な感じだなあ……」

旧暦と新西暦が混じり合い、全く違う形で奇妙な共存を見せているのは現代の特徴の一つだった。本当なら段々と進化していく技術によって古いモノは駆逐され、次第に新しいモノへと移り変わっていく。けれど新西暦では第二太陽から溢れる星辰体アストララルの影響で技術進歩に事実上の蓋をされ、旧暦に追いつくことも追い越すことも不可能な有様となっている。

なので旧暦の遺物の方が質が良いというのはザラにあるし、今では生み出せない物質や加工だって山ほどある。こうしてかつてのビルやら街灯やらを外面だけでもそのまま再利用しているのは、下手に取

り壊してしまえばもう二度と取り返しがつかないからだろう。

確か昔に習った四字熟語に、この状況を表すような言葉があったよ  
うな無かったような――

「温故知新か……ああ確かに気持ちには分かるとも。ブラウン嬢、君の抱いた感想は実に正しい。今の我々は古き大和やその周囲の国々が遺した恩恵にあやかかって生きている状況だ。過去から学び、そして今に繋げ新しい生活基盤を得る。まさしく言葉の通りだろうな」

「えつと……いや、ちよつと待って。そんな当たり前に私の思考を讀まないでください」

怖い。割とマジで怖気が走った。

なんでギルベルトはオレの思考を当然のように理解して、しかも先回りまでしてきたのだろうか。その気持ち悪いくらいの思考能力に反射的に距離を取ってしまう。そもそも仲良くなってるはずなのに超人行儀になるくらい衝撃的だった。

当の本人はといえば、若干失礼なオレの言動を全く気にする素振りもない。むしろ薄ら笑いを崩さず平然としているくらいだ。この妙な器の広さはいったい何なのだろうか。

「いやすまない、つい癖が出てしまったものでね。君は特に街灯やビルといった旧暦から存在するものを気にしていたから、おそらく今と昔を比較していると考えてしまった。他にも数パターンの候補はあったが素直な答えで安心したよ」

「待て、俺は今猛烈にお前のこと気持ち悪いつて思ったぞ……頼むからそんなの俺たち以外にやってくれるなよな。変態の部下とか言われたら立ち直れねえからよ」

「ふむ、善処はしよう」

本当に善処する気はあるのだろうか……思わず疑ってしまうくらい説得力に欠けるといふか。それが彼の持ち味なのだろうし先読みの具現は素直に凄いと感じるのだが、こんな形で実感したくは無かったのが本音だ。

「クリスはこのこと、どう思いますかー？ 是非とも意見を聞かせて欲しいなー」

「……それを俺に聞くな。答えに困る」

「へえ、お前が困るなんざ珍しいな。良かったじゃないかギルベルト、あのクリスが言葉に詰まるなんざ相当だぜ」

「まったく、ああ言えばこう言う……お前たちはいつもそうだな」

常に堂々として勝利を目指すクリスでも、やっぱり困ることはある。長い付き合いではあるがオレもそうそう見た事はないし、アルが楽しそうにギルベルトへ語る姿もよく理解できた。オレもちよつと驚いて心のメモに仕舞い込んでるくらいだし。

ただしギルベルトとしては、全然別の方向に興味を抱いたようだった。

「そういえば、君たちはスラム出身とは知っているがその経歴は私も知らない。もし差し支えなければ話を聞かせてもらっても良いだろうか？ もちろんプライベートに関わることだし、辛い過去があるというなら無理強いはいしないが」

「まあ……プライベートなんて昔は気にしたこと無かったし。そもそも辛い過去なんて言っても、全部乗り越えたことばっかだからな。クリスとアルが構わないなら大丈夫だよ」

たぶん普通の女性なら強姦されかけたなんて一生モノのトラウマになつてもおかしくないのだろうが、生憎とオレは普通でない。気にしてないと言えば嘘になるが、いつまでも引きずる程でもなかった。第一それが無ければクリスとこうして親友になる未来すら無かったと思えば、感謝こそしないが忘れようと思うほど辛いとも感じなかった。

二人も同じように過去を話すことに異存は無かったようで、無言で頷いてくれた。なのでフランクフルトの街を歩きながら、ぽつぽつとギルベルトへと語っていく。なんだか自分語りのようで気恥ずかしいが、まあこれも一種の精神的特訓だと思っておこう。

「初めてクリスと出会ったのは十年くらい前の、たぶんオレが七歳くらいの時だったかな——」

ふり返ってみればかなり数奇な人生だ。転生して性別まで変化した時点でもう冗談みたいなのに、スラムに捨てられ、小悪党の手から

クリスに助けられ、仲良くなって。しばらくは平和に過ごしていたのが貴族の青年たちに襲われて、それをクリスの助けもあって返り討ちにし。アルから喧嘩を売られたと思えばクリスとも喧嘩別れをしかけ、それでもクリスの友人としてありたいと自覚した。

後はアルとも仲良くなり、こうして今に至るまでの関係を築いている。そんな話を二人の相槌も挟みながら簡潔にした。さすがに貴族の青年たちに襲われて返り討ちにした辺りはぼかしたが、彼の炯眼ならば裏にある事情も読み解いているかもしれない。

いつしかマイン河の上に架かる橋の上にオレたちはいた。フランクフルトを横切る雄大な自然を眺めながら、話も既に終わりへと入ったところである。搔い摘んで話したからそこまで時間は経っていなかった。

「とまあ、今日までにだいたいそんな事情が有ったって感じだよ。色々あったけど思い返せばどれも貴重な経験になったと思うよ、オレはさ」

太陽が真上にやって来た頃、オレはそのように話をまとめた。河川からやってくる風が頬に当たり心地良い。

熱心かつ静かに話を聞いていたギルベルトはといえば、まるで感動しているかのように身体を静かに震わせている。そんなに面白い話だったろうか？

「——実際に話を聞いてみて、やはり私は君たちに敬意を表したいと思う。よくぞここまで登り詰めたものだ」と

「お、おう……それはどうもありがとう」

ちよつと反応に困ってしまった。なんだか本当に感動しているような口ぶりで、あたかも熱にうなされてるように恍惚としているのは気のせいでないだろう。彼は本当にオレたちの経歴を聞いて、何故か知らないが感動までしている。どんな言葉を掛ければ良いかわからず三人揃って沈黙してしまった程だ。

「えつと……大丈夫か？」

「ああ、すまない。少々感極まりすぎたようだ。私も知識の上では貧民窟スラムの存在とその実態を知ってはいたが……所詮は知識だったか。

君たちの話を聞いては自らの浅学さを恥じるばかりだ」

「貴族としてこれまでを過ごしてきたそちらと、スラムの最底辺から成り上がってきた我が身らと。前提からして違うのは当然のことだし、それを指して自らを恥じることはないだろう」

クリスの指摘はもつともだったが、ギルベルトはといえば「いいや、否だ」と頑なに否定する。

「例えばの話だ。もし貴族の慣例や礼儀作法を君たちが知らないとすれば、貴族たちはその無知を間違いなく笑うだろう。そのような事を知り、学ぶ余地など何処にも無かったとしてもだ」

「それは、まあ、そうかもしれないけど」

「だが翻って貴族が君たちの背景について詳しくなくとも、誰もその事を恥じはしないだろう。指摘される事もない。しかし相互理解の点において、これは実に不公平で正しいことではないと私は思う」

自らの想いを語るギルベルトの口調が段々と強く、そして激しくなっていく。まるで今まで抑えられていたものが噴出するかのように堰を切って止まらない。初めて顔を合わせた時にも感じたが、彼は正しさや光の方向に話が向くとかなり饒舌で熱意を見せる。初めて士官学校で顔を合わせた時の無機質な印象が何処にも見当たらないのだ。

それとも、これこそギルベルトの本質なのだろうか。彼の精神は紛れもないプラスの方向だが、それだけに今のアドラー帝国では紛れもない異端である。話の合う人間が居るとは思えないし自分の思想を説いて納得されたとも考えづらい。

いわば今のギルベルト・ハーヴェスとは、誰に憚ることも否定されることもなく自らの考えを好きに語れる状況なのかもしれない。だとすればここまで熱意を見せる気持ちは、オレにも理解できる。自分の好きな物事を語る時ほど楽しい時間なんて無いのだから。

「綺麗で格式高ければ誰もが知っていて当然で、汚くて低俗ならば知らなくても良いと？ それは道理が通らないだろう。他者に理解を強いるのならば、自らもまた相手を理解して当然だ。少なくとも知るための努力はするべきであるし、小賢しい言い訳を盾に放棄しては言

葉の重みが全て無くなってしまふのは想像に難くない」

つまりは自分と他者における平等性と正しさのテーマに到着するという訳だ。

——相手に一方的な理解を強制しておきながら、自分たちは相手を理解しようとしてもしない。そういつた本来して当然の努力を怠り、また居丈高に他者を弾劾し排斥する者が許せない。彼の思想は一貫してそこに終始するし、相手が出来ることを何故自分たちはやろうとしないのかと疑問に感じている。

「で、それがさっきの話にも繋がるか?」

「然りだ。私は今まで君たちの置かれてきた境遇を知らずに、ただ自らの知識のみで天秤を作り、そして評価していた。これは由々しき事態だったと私は思うし、改めて知った今では考えも変わると言うものだ」

彼はそこで言葉を溜めると、くい、と眼鏡を上げた。あからさまにインテリらしい動きでありながらちつとも鼻につかないのは彼の雰囲気そうさせているのか。むしろ端正な顔立ち——あまり男相手に言いたくはないセリフだが、オレの周囲はカツコいい奴ばかりだ——に似合っているのが何だかちよつとむかつくくらいである。

「過去に起きた出来事を物ともせず未来への糧とし、こうして歩む姿はやはり人間の模範と言えるだろう。光を目指して歩む限り、人の可能性は決して途絶えない。ああ、君たち全員が私にとっては奇跡のような存在だとも」

「それはまた……どうもありがとう」

なんだかこう、そうまで手放しに褒められてしまうとこちらが恥ずかしくなってしまう。上手い言葉が全然見当たらない。

それに、クリスやアルはともかくオレのはそのまま褒められるに値しないと思うのだが。前者は憧れた大元だから当然だし、アルはといえばオレたちになく冷静さや視点を持ち合わせている。比べてこっちは何が出来ているやら、まったく自信が無かった。

しかし、そんな葛藤すら彼には見抜かれていたのだろうか。

「むしろ私にとって興味深いのは君だよ、ブラウン嬢。女性の身であ



りながら軍人として活躍し、真つ当であり続けている。どのような人間だろうと光を仰げば君のようになれると、誰よりも雄弁に語っているのだ」

「おいおい、そりゃ極論じゃねえのか？ それはただレーテが特別我慢強くて頑張れる奴だったってだけだろ」

「俺も同感だ。こんな破綻者を見て目標に定め、しかも歪まない者が多いはずもない。この二人があまりに特別過ぎるだけだと考えるが」

真つ当な指摘に対して、それでもなおギルベルトは意見を翻さない。

「なに、別に全ての人間に彼女のようになれとは言っていないさ。ただその在り方を模範とし、自分の中の限界まで努力するようになればより世界は美しいものになると、そう考えているだけさ」

「なるほど、そういう……それならまあ、そうかもしねえわな」

人には誰しも限界はあるだろう。だがそれにすら向き合わずに言い訳を述べて逃げるようでは話にならないし、ましてや負の方向へと突き進んでしまうなど言語道断だ。だから自ら出来る事は積極的にやるべきだし、その見本こそマルガレーテ・ブラウンであると。ギルベルト・ハーヴェスはそう述べていて、アルもそっちは否定しなかった。クリスすら無言で頷いているように――

「止めて……それ以上は普通に恥ずかしいから勘弁してくれって……」

横で聞いているオレはといえば、思いがけない褒め殺しに顔から火が出てしまいそうだから両手で隠すのに精一杯だった。

Chapter 23 日常に潜む“花” / Seco  
nd

予期せぬ褒め殺しをされてしばらく撃沈していたものの、ようやく顔の火照りも収まってきた。熱の引いた頬に吹き付ける河川の風を浴びて頭を切り替え、パンパンと頬を叩いて気合を入れ直す。どうして全員が全員オレに対する評価で一致しているのやら、あまりにも恥ずかしいから勘弁してほしいものである。

そうしてオレが復帰するのを待っていたかのように、ギルベルトへと向き直ったアルがまずは口火を切っていた。さっきまでの雰囲気は既になく、自然と空気も固くなる。

「で、本当の目的は何なんだ、ギルベルト・ハーヴェス少尉殿？ まさか本当にフランクフルトの観光がしたかった、なんて訳じゃないだろう？」

「ふむ、慧眼恐れ入るよ。確かにその通り、今日の私の目的は他にあった。もちろんこの街の実態を自分の目で見てみたったのも事実ではあるがね」

まったく悪びれないギルベルトだ。その様子にこっちは三人揃って目くばせ、『やっぱりな』で意見が共通する。

本当にただの親睦を深めるだけだった可能性も無くはないが、彼ほど優秀な人間なら何の目的もなく街を散策するだけとはとても思えない。何か別の目的を覆い隠し、後からこちらを巻き込むくらいはやりかねない。

オレは確信も掴めなかったので中々切り出せないでいたが、どうやらアルはある程度の確信を持っていたらしい。ちよつとした意趣返しに「さすがはアルだな」と頷いておく。

「まったく、照れるからやめろつて。というか、街を眺めるギルベルトの眼はどつちかといえは路地裏とか死角とか、そういう方ばかり行ってた気がしたからな。ちよつと明るい方ばかり見てたレーテの真逆だ」「悪かったな、細かいところを見てなくて」

「大した観察眼だよ。その細やかさからして、君は調査や諜報といった仕事に適性があるのだろう。やはり私の見込みは間違っていないかったようで安心した」

何か小馬鹿にされたような感じもあるが、とにかくフランクフルト散策の本題はもつと後ろ暗い。何かで間違いない。ではその「何か」とはいつたいどういうことかだ。

考えられる可能性は多くない、むしろ一つしか無いだろう。とりわけ今のアドラー帝国を悩ませているフランクフルトでの出来事などこの街に住む誰だつて知っている。

「巨大麻薬組織ニルヴァーナの売る麻薬の出どころ、それを探ろうという訳か」

「ご明察。影隊長から言われた“手柄”の立て所としてこれ以上相応しいものはあるまい？」

「まあ、確かにそうかもしれないけど……出来るのか？ そんな大それたこと」

初めてこのフランクフルトに足を踏み入れた時もアルと少し話したが、ここでの麻薬被害はかなり根が深い。古くは旧暦から始まった因縁は新西暦となった今でも続いており、特に麻薬売買で大儲けをしているアンタルヤの一部はこの地を根拠地の一つとしている程である。それには流通の便が良いとか、敵国相手に情けは不要だとか、そういった理屈も多くあることだろう。

どうであれ、アドラー帝国は特にニルヴァーナによる麻薬被害に頭を抱えている。なので躍起になって仲介役などを潰そうとはしているものの、狡猾で影も形も見えない彼らには非常に手を焼かされていた。

それを、一介の軍人四人で潰そうとする？ いくら何でも無茶が過ぎるだろう。国や軍隊を挙げての調査と防止策すら功を奏さないのにちよつと理想が高すぎるのではなからうか？

……確かにこつちには無理無茶無謀を奇跡へと変える男もいるにはいるが、そういう問題でもない。だというのにギルベルトはいえ、大真面目に「可能だとも」と言い切ってみせた。

「その根拠は何処にあるんだ？ 多少の手柄にしてはちよいと難易度が高すぎる気がするが……」

「いいや、それが君たちが一緒ならばそうでもないのだよ。何やら自覚はないらしいが、君たちの軍部及びこの街での評価は如何ほどだと思うかな？」

咄嗟に「質問を質問で返すなよ！」と言いたくなるのをグツと堪えて考えてみる。

オレたち三人とも各地の戦線を転々として戦い続けていたから、こうしてフランクフルトに戻ってきたのも数日前の影隊長からの呼び出し時だ。久々の都会での評判など気にしていなかったし、大したことも無いだろうと踏んでいたのだが――

「なんかその口ぶりだと、まるでオレたちが有名人みたいだな」

「まるで、ではなく現実にそうなのだよ。数々の戦場で戦い生き抜き、そして武勲を挙げた君たち三人は今や若きエースと知られて久しい。人は下克上や不遇の者が成り上がることを好むからこそ余計にな」

「……そう、だったのか？ 二人はどう思うよ？」

「まあ、なんか視線は感じるなーと思ったけどよ。てつきりいつものやっかみ的なばかりかと」

「同感だな。このような街中で一般市民から好意的な視線を貰うこと自体、想定すらしていなかった」

軍の内部ではまあ、強さを示した者が評価されるのも理解できる。どれだけ懐疑的で仲が悪かろうと、実際に自分の眼で見えてしまえば認めざるを得ないからだ。そうやって理解者を増やした事実は間違ない。

ただ、それが軍人でもない一般市民にまでなると戸惑いは大きくなる。本当に新聞や雑誌に掲載される有名人みたいではないか。戦いに続く戦いを潜り抜け、対策と鍛錬ばっか頭にあっただけでそのようなこと考える余地すらない。

揃って首を傾げたオレたちの反応は折り込み済みだったのか、ギルベルトは特に驚くこともなく話を続けた。

「どのような時でも謙虚さを忘れないのは紛れもない美德だが、もう

少し自らの影響を考えてみることを推奨しよう。考えてもみたまえ、ただの一兵卒の三人がどのような激戦区でも必ず勝利を齎すのだ。しかも揃って美男美女であり、生まれは決して恵まれたものではない。軍としてはプロバガンダに使わない理由がないだろうか？」

「言われてみれば確かに……」

「軍事帝国、だもんな。その辺は抜かりなしってか」

一人でも兵士を多く徴用し、周辺国を奪って領土を広げたいアドラー帝国らしい考え方だ。同時によく血統主義のお偉方がオレたちを利用したなとも思うが、スラム云々の下りはどうせボカシているのだろう。むしろ使えるならば骨までしゃぶり尽くしてやれの問題か。

でも、それが何だというのだろうか。オレたちがこの街で多少なりとも有名だとして、どうしてギルベルトの思惑に関わってくる？ 因果関係が上手く読み取れない。

ちょうどそのタイミングでギルベルトが「君の疑問はもつともだよ、ブラウン嬢」と言ってくるのは何となく予感があったけど。気持ち悪いくらい思考を読んでくるのは今後彼と付き合う上で慣れなきやなのだろう。

「光差す地平に闇は無いように、後ろ暗い行いに覚えのある者はこぞって輝く者を忌避するものだ。ほんの短い時間この街を歩くだけで、もう君たちを避けるような仕草をしていた者を確認したよ。そのような人物に絞って麻薬に特有の症状や特徴を探せば、糸口は簡単に掴めるものだ」

「入手経路を辿っていけば必ず大元か、それに準じる組織にまで突き当たる。それを俺たちで制圧するまでがお前の計画か。……随分と個々人の資質に頼った思考だな」

三人揃えば文殊の知恵と言うように、軍隊は規模が大きい分のメリットは確かにある。集合知は全く馬鹿に出来ない素晴らしい要素だ。

一方でオレたちは身軽に動ける利点こそあれ、一人一人の負荷はそれなりに大きい。常識的な観点からクリスが苦言を呈すのも無理はなかった。

「そう言わないでくれヴァルゼライドよ。やれるならば、やるべきなのだ。能ある鷹は爪を隠すように謙虚かつ静かに姿を潜ませるのもありだろう。だがあなた達や、傲慢な物言いだが私のように、何かを可能とする力を持つならば使用を躊躇うことこそ悪だろう。誇るべき力を持つのなら役に立てるのが世のためだ」

下手に他人に遠慮する必要はないということか。まあそんな理由でクリスが止まるとは到底思えないが、一般論としては賛同できる。出る杭は打たれると言われようが、やれるなら突っ走る方が良いに決まってるのだ。そしてこの若き少尉はオレたちになら出来ると確信しているらしい。

とにかく、ギルベルトの思い描く計画の全貌は臆気ながら見えてきた。このフランクフルトに蔓延る麻薬の流通を叩くことを目的として、行動を起こすつもりだろう。詳細は分からないがたぶん入念な準備をしたうえで後日にも――

「ああ、この計画は今日の内には実行する予定だ。あまり初動が遅いと何処から情報が洩れるかもわからないし、軍もそれで何度となく煮え湯を飲まされたという。少数精鋭のメリツトを最大限に活かすならここだろう」

「マジかよ……」

「そんな突貫で大丈夫なのか？」

あつさり予想を覆されて驚くばかりだ。発案者は自信満々とはかりに薄ら笑いを口元に浮かべている。なんだか無性に腹が立つような、頼もしいような、そんな印象を与える笑みだ。

「私はここに来る前からフランクフルトの内情と、それに関する軍の動向は聞き及んでいたのさ。後は実際に伝聞と実情を擦り合わせ、頼りになる者を見つけたら十分に行可能と踏んで計画は練っていた。無論のこと、君たちは想定以上に素晴らしい人物だったと保証しよう」

当然ながら予定外の出来事に備え複数のプランは用意していたが、と何でもないことのように彼は言う。いったいどこまで未来を想定し、予測したうえで準備をすれば気が済むのだろうか。オレからすれ

ば異星人か何かのようにすら感じられる頭脳に戦慄を禁じ得ない。

ギルベルト・ハーヴェスの先読みの具現はオレが思っていた以上に底知れないものであるようだ。もしかしたら彼の中にはスーパーコンピュータでも詰まっているのかと、益体もない馬鹿げた想像なのになぜだか納得できそうなのがちよつと腹立たしい。バグでも起こしたら一瞬でショートしてしまいそうだ。

「故にこそ、今この時より私はかねてよりの計画を実行に移してみたいと考えている。当然だが手柄は私たち四人ですべて折半だ、家名に誓って私だけが独占をしないと誓おう。どうだろうか、君たちはこの話に乗ってくれるかね？」

敢えて問いかけるような口調ではあるものの、彼にしてみればこっちの答えなんて想定済みなのだろう。

オレたちからしても、まさしく言うべきことなど一つだけである。「それが上官からの提案だというのなら、私たちに従わない理由はないでしょう——なんて言うのを期待してるんだろ、最初から」

結局のところ、軍人という立場に縛られるオレたちは上官の命令に逆らうことなど出来はしない。例え死地に飛び込んで来いと言われなくても逆らう訳にはいかないのだ。飛び込んだうえで生還するかは別として、だが。

それに加えればギルベルトの言葉はまだ可愛げもあるし誠実だ。正しいことを信奉する者としての正直さはしっかり伝わってくる。

——そのような男にこそ、オレは微力ながら報いてみたいと思う。「私もまだまだだということか。ああ、その通りだとも。正しさに裏打ちされた行いならば必ずや断るまいと最初から高を括ってしまっていた。その非礼をここに詫びさせてくれ」

皮肉気に笑い、彼は真摯に頭を下げた。その在り方に対して怒りを持ち越す程、オレも狭量な人間になった覚えはない。二人に至っては猶更だろう。オレよりもはるかに出来た人間なのだから。

さて、そのうえで彼はどのようなやり方を考えているのか。

「で、ギルベルトの計画だとオレたちはどうすれば良いんだ？」

「まずは、そうだな——ブラウン嬢、君にはこのフランクフルトの令嬢

となつてもらおう」

「……は？」

なんだかあまりにも予想外な言葉が耳に飛び込んだので、思わず聞き返したオレは何も悪くないと思いたい。

◇

唐突だが、アルバート・ロデオンからしてみると、マルガレーテ・ブラウンとは仲の良い異性の幼馴染以上の感想を持ちえない無二の親友だった。

かつてヴァルゼライドを気に入らないからと喧嘩を売った際に、まだ子供だった——彼らも同じ程度の年齢だったが——彼女が果敢に挑んできたときのことは鮮明に覚えている。あの小柄な体躯でアルバートへと拳を振るい、そして相打ちにまで持ち込んだのだから大した奴だと兜を脱いだものだ。

「へえ、なんだよ。レーテお前、ちゃんと女らしい格好も出来たんだな」

あれからもう十年弱も経った今、まさか彼女の女性らしい服装をこんなところでもう一度見られるとは思ってもみなかった。なのでつい、隣に並んでフランクフルトの大通りを歩く幼馴染へと軽口を叩いてしまう。

ぶつちやけるとアルバートはマルガレーテのことを女性だとは思っていない。確かに豊かな茶髪と猫のような愛くるしい顔は美少女に相応しいけれど、いかんせん口調が男っぽすぎて異性と思えないのだ。だからこそ今まで適度な距離感で過ごせたのだろうし、スラムという法の介在しない土地で節度を守って暮らせたのだとは思うが。

ただ、こうして私服で着飾っている彼女を見ると意見も変わりそうになる。いつか首都で披露した服装に加え、顔を隠すために探偵じみた黒いハットを被った姿は実に似合っている。あまり言いたくはないが「カッコいいし可愛らしい」と評しても良いものだ。

物珍しさからしげしげと眺めていると、彼女は口を尖らせて不満を露わにした。

「なんだよ、ジロジロ見やがって」



「おう、レーテの女っぽい格好なんて久々に見たからな。こういう時くらい目に焼き付けておかなきゃ損だろ」

「ちえ、このムッツリめ。まあ良いけどさ、アルなんてフード被って陰気さ満々じゃないか」

「それは言ってくれるなよ……俺だって好きでやってる訳じゃねえんだからさ」

苦し紛れに反論してから、アルバートはさらにフードを深く被り直した。彼とて好きでやっている訳ではないのだが、司令塔たるギルベルト直々の指示ともなれば無視するわけにもいかなかった。彼の言葉の正しさはほんの短い時間でもしっかり伝わっている。

彼らは一度東部アドラー軍の本拠地へと帰還し、アルバートとマルガレーテだけが私服へと着替えて街中へと繰り出しているところだった。軍服を着てる時は確かに周囲の視線が気になったものの、服装を変えただけで堂々と街中を歩いても注目を浴びないのには苦笑を隠し切れない。

「なんというか、軍服だけで俺たちって判断されてるのかね？　だとしたらちよいと寂しいもんだよ」

「まあそれが一番の特徴だろうからなあ……いくら写真があるっても詳しい人相まで覚えるのは不可能だろうし。むしろギルベルトの計画がやり易くなったって喜んでおこうぜ」

「ったく、レーテはいつもとことん前向きだな。そのポジティブさは尊敬するぜ」

「ばーか、そうじゃなきゃこんな恥ずかしい格好やってられないっての」

怒ったように彼女は白いシャツの裾をひらひらとさせた。アルバートからすれば十分似合っているし恥ずかしいと思う必要など無いと思うのだが、本人がそのように言うなら否定しない優しさを持っていた。

あるいは……彼女は少々特殊な人間なのかもしれない。薄々感じてはいたのだが、肉体の性別と精神的な性別が違う人間も世の中にはいるらしい。マルガレーテもそのような人物である可能性は高いの

だが、確証がない以上は切り込むことも出来なかった。このようなデリケートな問題は慎重に扱わないと思わぬ爆弾になると直感で理解出来ていたのだ。

「まあ、まさか俺たちに囹捜査なんてやらせるとは思わなかったけどな。ギルベルトの奴ちよつと過信し過ぎじゃないのか？」

「それだけ信頼してもらえてるってことなら良いことだろ……だからってこんな大金を渡されるとは想像してなかったけどさ」

言いながらマルガレーテは肩にかけた鞆を揺すった。その中にはギルベルトから預かった多額の現金がこれでもかと詰まっている。彼らの言う囹捜査に必要な代物だった。

上手く麻薬を売り捌く相手に接触できたら、まずは大金をちらつかせて麻薬を手に入れるか、出来るなら直接取引所まで案内させる。そうして麻薬売買組織の主要な潜伏場所を突き止めたら、あとはギルベルトとヴァルゼライドの二人が一気に制圧してしまうという算段だった。軍と違って少数すぎるおかげで実行が早く、警戒されづらいのも彼の考慮の内だろう。

もしこれをスリでもされたら大惨事なので、アルバートはさりげなく鞆の側に身体を置いている。また取引所——マルガレーテは何となくスナックバーのようなイメージをしている——が予想以上に大きければそれだけ護衛の人数やらも多いはずなのだ。不確定要素や困難は間違いなく多いはずなのだが……それすら織り込んだうえでなお、ギルベルトは「何も問題はない」と言い切ってみせた。

「なぜそう言い切れるか？ 決まっている、君たちの正義に限界など無いと信じているからだ。数多の戦場で不可能を可能にしてみせたその手腕、たかが現実に耐え切れなかった者に負けるはずがないと確信しているのさ」

清々しいまでにキツパリと言い切った男に免じて、今回の計画をアルバートは了承した。どちらにしてもマルガレーテという少女一人に任せるには荷が重いのだ、自分もしっかりサポートしてやらねばと気を引き締める。

しばらく歩き、いつの間にもやらギルベルトの指定した地点にまで到

達していた。左手には野菜売りの露店があり、右手には暗い路地裏がある。その奥の方に緑色の上着を着た男か、灰色のワンピースの女性がいれば間違いないと言っていたのだが、

「あれは、緑色の上着の男性、だよな……？」

「あともう一人、灰色のワンピースの女性もいるぞ。おいおいマジかよ、どうなってるんだ」

ギルベルトの予想通り、彼らは路地裏の奥に座り込んでいた。まるで焦点の合っていない茫洋とした瞳を彷徨わせ、道行く者たちを眺めている。明らかに薬を服用している者だろう。アルバートたちの狙いで間違いなかった。

「いよいよもって、アイツが実は宇宙人とか言い出してもオレは驚かないぞ」

「それよりはまだ第二<sup>アマテラス</sup>太陽の先からきた大和<sup>カ</sup>の人間<sup>ミ</sup>って方が信じられるっての。とにかく、腹括って行くぞ」

「おう、任せろ」

たぶんすぐ近くで監視してるであろうあまりにも人間離れた上司に驚きながら、彼らは路地裏へと足を踏み入れたのだった。

## Chapter 24 賢い生き方／Not Serious

あまりにも気持ち悪いくらい正確なギルベルトの読みにより、オレたちはアツサリと麻薬中毒者らしき人物と接触できた。どちらも気弱そうな雰囲気をしていて、第一印象ではとてもじゃないが悪事に手を染めるような人物とは思えない。

帽子とフードで顔を多少隠しながら話を聞いてみることにしばらく、最初は渋っていた中毒者たちもお金を握らせればアツサリと口を割ってくれた。金持ちなギルベルト少尉様々である。

「その、ここからしばらく行った先のバーに寄ったら赤髪の男に勧められて……」

「わ、私は、変な男に話しかけられて……生活に困っていたからつい、その、ね？」

何が「ね？」だよ、と内心思いながら根気強く話を聞くこと数分、ある程度具体的な情報をようやくゲットした。

どうにも両者ともに俯きがちで、また話是要領を得ない。その中で最も正確な情報は今の二つが精々であり、どっちも似たような男から薬を手に入れていたという。販売人は赤い髪のまだ若い青年らしく、彼によって地下のバーに案内されてそこで薬を買ってしまったようだ。

たぶんその男とバーこそ、このフランクフルトにおける麻薬被害をもたらす一端だろう。青年の方はただの下つ端で使い捨てという可能性もあるかもしれないが、取引所らしき方は全くもって見過ごせない。

話はそこで終わりであり、後は後腐れなくさようなら——とはいかないのが軍人の辛いところだ。

「んで、どうするんだよレーテ？」

「決まってるだろ、オレたちだつてこのまま見過ごす訳にはいかないんだから」

「そりやそうか」

アルが溜息を吐いた。オレも同感だから気が重い。

なんだか騙すようで悪いが、麻薬は立派に犯罪である。売るのはもちろんのこと、買うのだって許されない。ここで情報を渡してくれた二人を見過ごす訳にはいかないのだ。だから心を鬼にして彼らに接しよう。

「えつと……？」

「まだ私たちに何か？」

「それが、あるんだよ。黙ってて悪いが、俺たちはアドラー軍に所属する者でな——」

驚き戸惑う二人には悪いのだが、ここは大人しくオレたちに同行してもらおうしか道はないのだ。

◇

この軍事帝国では警察は存在せず、軍が治安維持や警察の代わりも担っている。よって二人の麻薬中毒者は待機していたギルベルトの手引きによって迅速にアドラー軍へと引き渡された。幸いにして彼らはまだ初犯であるらしいからそこまで重たい罪にならないことを祈るばかりだ。後は自分の意志で薬に依存しないような人生を取り戻してほしいと願う。

必要な情報は手に入れたし、後は情報の場所へと乗り込むだけだ。ただしアドラー軍にはまだ詳しい話を通してなく、ギルベルトはあくまでもオレたち四人だけですべて終わらせてしまってもりらしい。先の麻薬中毒者たちも偶然見つけたから引つ張ってきたと誤魔化しており、後は間髪入れずにすぐ本丸へと乗り込みである。軍の了解も得ずに動いてしまう辺り、随分と大胆な行動だ。

「その方が都合が良いのだよ。あくまでも『偶然にも麻薬販売の現場を見つけ、速やかに制圧した』という体が欲しいのだから。正規に軍の力を借りれば狡猾な彼らのこと、逃げられるのは火を見るよりも明らかさ」

本当にこう、どこからその自信が来るのだろうか。オレたちだけで丸く収められる保証なんざ無いのに、彼の瞳には今回の顛末まで含め

た至るべき結末が映っているらしい。よほどオレたちを信用に足ると考えているのか、一度たりとも揺らがないのは大したものだ。

……思うところはあるが、こうなったら後で独断行動云々で叱責さえなければ良いから突っ走るまで。開き直りなんざ慣れている。まずは正面の物事に集中して、後はギルベルトに任せてみよう。

「しかしまあ、さっきのはちよいと堪えたな。『お前たちみたいな強い人間に、俺たち弱者の心なんざ分らない』、か……」

改めてアルと二人、街中を歩きながら呟いた。今度は悪の巣窟というべき親玉に乗り込む訳だが、どうにも先ほど投げられた言葉が気にかかって仕方ない。まるで奥歯になにか挟まったようなもどかしさだ。

どうであれ、悪い事をしたのは軍に引き渡されたあの二人でありそこは揺るがない。どれだけ嫌なことがあるうと麻薬に手を出す気持ちだって分かりたくない。それで人生を壊してしまえば元も子もないだろう。なのだが、最後に男の方が悔しそうに漏らした言葉だけはヤケに耳に残っていた。

真つすぐ、曇りなく、堂々とした正道を歩める人間は思っている以上に少ない。誰だって弱い方向に流れてしまい、楽なことばかり好んでしまうのは仕方ないのだ。皆がそう簡単に出来ることではない。いったん謙虚さを捨て、オレたちみたいなの人間なんて稀だという事実をまずは受け止めよう。

では、強者であるオレたちは弱者の気持ちに共感できないのか？  
いいや、そんなことはないはずだ。オレだってクリスと出会わなければ間違いなく弱者だったろうし、何なら精神的にはかなり凡庸だと思っている。共感できる点は多々あるはずだ。

……それでも、気が付けば弱者のことなんて気にも留めない人間になつてしまうのだろうか。出来ない奴は死ねと、正しくない奴は間違っている、なんの疑いもなく感じてしまうのだろうか。正論は心地良いからこそ、弱者にとつての麻薬のように心へと作用してしまうから。正論ばかりを振りかざす存在にはなりたくないと思つて願う。

「どうよアル、オレたちって強い人間なのか？」

「んな訳ないだろ。俺らはたまさか精神が良い方向を向けてるだけの奴らなんだから、強いも弱いもあるもんか。出会いが良かったっていうだけの話だろうよ。さっきの奴の言葉ならあんま気にしても仕方ないぜ」

「重要なのは切っ掛けであって、個人の問題どうこうではないって事か。ま、確かにそうだよな」

——切っ掛けがあったからオレたちは強い人間と言われるまでになれた。

——切っ掛けが無かったから、彼らは弱い人間と言われるまでになっちゃった。

これらは結局のところ等価の事実であり、過程を無視した結果だけを抜き出してどうこう言える問題ではないと言う事だ。もつと極論を述べてしまえばクリストファー・ヴァルゼライドという男に出会えたから今があり、出会えなかったから中毒者<sup>かれら</sup>があるのかもしれない。荒唐無稽な話であるが、マルガレーテ・ブラウンとアルバート・ロデオンに与えた影響を鑑みればあなたがち冗談とも笑い飛ばせなかつた。それだけ若き英雄の影響力とは甚大なのだ。ほんの少しの偶然と機会があればそれだけで誰かの今後をあっさり変えてしまいかねない程に。分かっていてもすさまじい話である。

などと考えている内に、気が付けば情報の場所へとやって来ていた。旧暦から残るビルの地下へと続く階段と、その入り口には控えめに飾られた看板が立っている。

フランクフルトに蔓延る麻薬被害の元凶たる大元、ここはその一つらしかった。洒落た酒屋といった具合の風貌の店はどんな人間が入りしてもおかしくない。麻薬の取引にはうってつけといえるか。

「……取り敢えず無駄話はここまでみたいだな。ようやく目的地に到着だ、俺らがハマしたらクリスやギルベルトの奴に迷惑をかけちゃう」

「んなこと分かってるさ。まずは情報にあった赤髪の男を探してみても、上手く証拠を掴めればそれで良し。ダメそうなら——」

手元の筒をポンポンと弄びながらチラリと背後を窺えば、人込みの

中に紛れるようにクリスとギルベルトが立っているのが確認できた。どちらも紛れるにはちよつと目立ちすぎる風格を備えてはいるものの、軍人が普通に闊歩しているこの街ではそこまで目立たない。少なくとも軽い変装をしているオレたちとすぐに関連付けられる人間はそう居ないことだろう。

「この爆竹をぶん投げて向こうに知らせて、一気に決着をつけると。シンプルで良いじゃないか、オレは好きだな」

「そのぶん責任重大だけだな。ま、何とかしてみるしかないわな」

いくら顔の利くギルベルトが後ろにいたとは言えども、軍の上層部の思惑とはかなり違った動きをしているのは事実だ。

あんまり派手なことになってもそれはそれで心配なので、手っ取り早く済ませてしまいたい——なんて考えながらオレたちは地下への階段へと足を踏み込んだ。

◇

下へと降りていく二人を見ながら、ヴァルゼライドとギルベルトは控えめに言葉を交わしていた。

「今回の件はさすがに独断専行が過ぎるのではないか？ 俺たちが個人でやれる裁量を逸脱していると考えるが」

「確かに、否定できない事実だな。君たちと私のたった四人で敵陣の一つに乗り込むなど正気の沙汰ではない。まして軍すら手を焼いている地に益を求めてとなればなおさらだろう」

「そこまで理解しているなら、何故このような事をする？」

目に見えて分かりやすい手柄を示し、他の者から受け入れられる土壌を作る。

言葉にすれば非常に簡単だし筋も通っているが、やはりリスクは大きいだろう。もし失敗すれば大惨事どころの話ではなく、また独断専行を咎められれば少なくともヴァルゼライドたちは何も言い返せない。個人と組織という規模で比べれば、危険度すら戦場とそう大差ないと言えよう。

「何故だと？ 決まっているだろう、私が君たちを信じているからだよ。どのような困難だろうと彼は、彼女は、必ず成果を出せると。無



論のこと、君は言うまでもないが」

だが返ってきたのは曇りなき信頼の言葉と、揺るぎのない自信の二つだった。

半ば以上予想していた事とはいえ、思った通りの言葉にヴァルゼライドは嘆息する。

「不可能を可能にする、言葉で見れば綺麗で美しいかもしれない。だがな、それを当然のように求めてしまえば待っているのは過剰な期待と過度な信頼のつるべ打ちだ。まだほんの数日の付き合いでしかないが、端的にお前の考えは理想論に過ぎないのではと思うが？」

「これはまた手厳しい。しかし、一つ忘れてはいないかな？ 不可能を可能にする奇跡を起こしているのは誰であろう、君たちなのだ。たかが出来ないかもしれないという理由一つで諦めたりはしないだろう？」

これにはヴァルゼライドも押し黙った。当然だ、人より遙かに諦めが悪く、意志の力で数々の奇跡を起こしてしまうのは彼の特権にこそ他ならないのだから。自覚はあるが止められるはずもなし、進めるならば進んでしまうのが彼の性だ。誰かに言われて直せるようなものでもない。

「どのような不遇にあらうと、危険に放り込まれようとも、決して折れず朽ちず諦めなかった輝きを私も直に見てみたいのだ。本来ならばもっと相応しい場があるのは同感だが……だからこそ、これは重要なことなのだ。英雄が輝くための舞台が凡百の戦場で良いはずがないのだから」

「……つまり、俺たちにも手柄を挙げさせておきたいのがお前の魂胆か」

功績をさらに重ねて上官すら侮れない存在となってしまうえば、それだけヴァルゼライドたちの八面六臂の活躍の機会も増えていくだろう。やれ上下関係がどうだの、やれ生まれがどうだの、下らない些末事に煩わされるなど彼らにあってはならないのだ。

だからギルベルトは大きく頷き、ついで安心させるように微笑を浮かべた。

「その通り。ああ、付け加えておけば影隊長にだけは既に話は通してある。故に後のことは気にしなくても構わないさ」  
「まったく……食べない男だ」

◇

店内は意外にも騒がしく、大衆向けの酒場とそう違いのないように思えた。木製のテーブルやカウンターが配置され、吊り下げられたランプが柔らかな光を放っている。がやがやと酒を片手に笑う人間たちには活気があり、何やらウエイトレスらしき金髪の少女たちが席の間を忙しなく走り回っていた。とてもそっくりな容貌だが、双子なのだろうか。

外の落ち着いた雰囲気から予想もつかない姿には驚いたが、むしろこうした活気があるから穴場として機能しているのかもしれない。もし真面目な理由でここに訪れていなければオレも場の雰囲気に絆されていそうだ。

だけど、賑やかで騒がしいからこそ麻薬取引の会場としても優秀なのは皮肉としか言いようがないのだが。

ひとまず入口に立ってアルと一緒に辺りを見渡すものの、これといって怪しい雰囲気は感じられない。あくまでも賑やかな酒場といった風情だ。

ついでに言えば二人揃ってこういう酒場に来たことは一度もない。なので逆にオレたちの方が浮いた存在になりそうなものだが、悪目立ちする前に給仕の少女たちがオレたちの方へとやってきた。

どう見ても未成年らしい二人は随分と愛くるしい容姿をしているが……浮かべた笑みはとて小悪魔的なそれを感じる。

あ、マズいかも——咄嗟に足が一步引いた時だった。

「いらっしやいませー。お二人様のご来店でよろしいでしょうかー？」

「お、これはもしかしてカップルだったり？ ひゅー、お熱いねー」  
「いや、ちよつと、はあ……？」

「でもデートで酒場に来るのはちよつとどうなのかなーって。お兄さん、甲斐性なしとか言われちゃいますよ？」

「せっかく美人さん捕まえてるならチャンスは活かさなきゃ！ この街でカップルにお勧めのスポットでも紹介してみようか？」

「待て待て、お前たち、何か勘違いしてないか？ 俺とレーテは別にそんなんじゃ——」

何だこれ。いやホント、なんだこれは。

金髪双子の息もつかせぬマシンガントークに対応が追い付かない。気が付けば勝手にオレとアルはカップル扱いだし、しかもなんかセックスのない彼氏扱いを喰らってるみたいだし。うん、申し訳ないがそこだけは面白い。

でもそれ以外はあるまり笑えない、というか笑ってる暇すらなくらい弄り倒されてる。ホントに何だろう、この二人は。人を揶揄うことに命を懸けてるのかってくらい勢いが凄まじい。給仕として大丈夫なの？

「あ、申し遅れましたが私はティナと言います。どうかお見知りおきを」

「私はティセだよー！ このお店に来ちゃった以上はガンガン有り金を貰ってくからそのつもりで！」

「ま、まあ覚悟だけはしとくよ……」

否定はせずに曖昧に笑っておいた。そうやって遊んでみるのもちよつと憧れるが、今はそれどころではないのだ。ティナとティセの双子には悪いが店の売り上げにはあまり貢献できそうにない。

そしてどうやら、このお店では双子の毒舌ラッシュも普通に受け入れられているらしい。入口でさっそくタジタジにさせられているオレたちは思った以上に注目されておらず、「またいつものか」といった具合で流されている。仮にも潜入捜査の途中なのでこれはありがたい。

「では二名様ご案内ですー！」

最後は従業員らしく元氣よく席へと通され、二人席の方へと揃って案内された。たぶんまだあらぬ勘違いをされているのだろう。

席に着いたところでメニュー表を渡され、双子給仕はそのまま次の客へと向かおうとして——

「んー……お姉さん、ちょっとお名前を聞いてもいいですか？」

「え、私ですか？」

不意にティナの方がこちらへと向き直った。さつきまでと違いかなり真面目な顔つきをしている。知りたいことがある、疑問が浮かんだ、そう形容するのが最も近いだろうか。まるで人が変わったかのような雰囲気である。

……本当はあまり本名を名乗るのもよろしくないのだが、その妙な気迫に押し負けてしまった。いや、この表現はあまり適切でないかもしれない。なんだろうか、オレの方も何かモヤモヤとした疑問を感じるので。

「……マルガレーテ・ブラウン、です」

「なるほど……すみません、変なことを聞いてしまった。なんだかこう、私たちとどこかで会ったような気がしたもので」

「はあ、それはまた。たぶん街中ですれ違ったとか、そんな程度じゃないですかね」

「たぶんそうだと思いますねー。お手間をかけてすみませんでした」  
ペコリと頭を下げて今度こそティナは去って行った。後に残されたオレたちは何が何やら分からず、二人並んでポカンとするしかない。

「レーテ、あんな知り合いいたか？」

「んな訳ないだろ。たぶん人違いか何かじゃやないのか？」

「ま、それが無難な線か。つうかおい、なにを頼むよ？」

「え、うーん……何も考えてなかった」

これは困ったなと軽く笑って、じゃあミルクでも頼んでみるかと冗談でも飛ばしてみる。これでもまだ未成年の十七歳である、残念ながらお酒を飲もうという気にはちつともなれなかった。

そういえばこの新西暦ではやっぱり未成年の飲酒は禁じられているのだろうか。これまで試したことも調べたことも無かったので知らなかった。なのでもしかしたら、オレの脳裏にある前世かつての常識とは色々と違っているのかも――

「……あれ？」

「どうしたよ。まさか本当にミルクでも頼む気か？」

「いや、そういう訳じゃないんだが……何でもないよ」

——そういえば、何度も“前世”と比較をしている割には、個人としての具体的な記憶を思い出したことがほとんど無いな。

ふと気が付いたものの、だからどうしたという話なのだが。さつき感じた妙なモヤモヤといい、この大事な時に余計なことに気を取られるのはあまりよろしくない。もっと気を引き締めなければ。

ひとまずカモフラージュ？ にアルがビールを二つ注文しているのを横目に周囲を見渡してみる。やはり怪しい雰囲気や人物は見られないような——いや、一人いた。テーブルを一つ挟んだ壁の近く、深めにフードを被った男の横顔はかなり若い。チラリと見えたその髪色は赤、これはもしかして。

「……おい、アル」

「ああ、分かっている……さっそく当たりを引いたかもしれないな」

この男が情報にあった人物で間違いないだろう。麻薬を売りさばくニルヴァーナの手先、彼を上手いこと捕まえれば目的は全て達成される。だが焦りは禁物、慎重にことを運ばないとどうしようもない。

と、赤髪の男のテーブルにもう一人の男が座った。中年らしき彼はしきりに辺りを見渡し、キョロキョロと落ち着かない様子だ。どこかうだつの上がない様子は先の中毒者二人とどこか似た雰囲気を感じていた。

随分と大胆な取引だ。いや、店側もある程度承知の上と見て良いのだろうか。周囲の客も気にした様子はちつともない。

「……その、ここに来れば、アレを……」

ボソボソと喋る中年男性の声を遮るように、赤髪の男は鼻で笑った。すべてを小馬鹿にしているようなそれに思わず顔を顰めてしまう。

彼はドンとテーブルの上に乗りと出すと、囁くように語り出した。こっちも必死になって内容を聞き取ろうと耳を傾ける。

「本気で生きたところで報われる保証なんざどこにもない、そうだろう？ アンタはそれをよくわかってやがる、賢い生き方って奴をよ

「うやく見つけられるんだ」

まるで獲物に這い寄る蛇のように、狡猾な蜥蜴のように、彼は滔々と語り出したのである。

## Chapter 25 未だ、覚醒（めざ）めず／No t Awakening

——この世のありとあらゆる物事全て、努力すれば叶うと思うのは大間違いだろう。

人よりも努力して、頑張つて、汗水垂らして夢を追えば理想は実現するのか？ いいや、否だ。それで本当に成功できる奴なんてほんの一握りにすぎず、たいていの努力など徒労という言葉一つで片付けられてしまう。

成功した人間はすべからず努力している——そんな格言もあるらしいが、これも下らない世迷い事にすぎない。成功という結果を手に入れてない人間だつて、やはり努力してない訳ではない。なのに、どうしようもなくこの世界とは残酷で、ほとんどの人間の結果は悲しいかな実らないのだ。

前置きが長くなつてしまつたが、つまり頑張つて努力したところで報われる保証など何処にもないということだ。それですべてが罷り通る世界など、所詮は泡沫のごとき夢幻にすぎないのだから。修行すれば最後はどんな敵にも勝つてしまふ、英雄譚の主人公とは違ふのだ。現実はその都合よくは出来てない。

だから結論、努力なんて下らないのだ。  
報われる保証もないのに、正しい痛みをいつまでも我慢できる人間などいるはずがない。

程ほどに頑張つて、程ほどに手を抜いて、“本気”なんて出すだけ損だから普段体で。他者がどうなろうと知つたことはないから蹴落とし、自分が楽に生活できるようにだけは維持する。これが人としてもっとも賢い生き方であり、真面目に生きたところで甲斐がないのは疑いようもなく。

故にこそ、邪竜はまだ目覚めない。

討ち滅ぼすべき真の勇者がやって来るその時まで、ひたすらに宝の山を抱えて眠り続けているのだ。

◇

フランクフルトの一角にある酒場で、オレとアルは運ばれたビールを片手に座っていた。

新西暦初の酒に躊躇するオレを片目に、アルは何か場慣れした大人っぽい雰囲気すら漂わせてビールを呷った。さすがに飲む量は一口二口程度だが、存外草草は堂に入っている。

オレも負けじと客らしく振舞うために一口飲んでみたが……苦い。思わず渋い顔になったのをどうにか取り繕ったら、アルからもニヤツと笑われる始末だ。「どうせ子供舌だよ畜生」なんて視線で抗議しておいた。

なんだか差を見せつけられてちよつと悔しいけれど、今はそれより重要なことがあるのを忘れてはならない。

「随分と若いな」

「ああ、もしかしたらオレらとそう年齢は変わらない……どころか、年下かも？」

「なんつーか、世も末って感じだわな」

麻薬の密売人らしき赤髪の男を油断なく見張りつつ、ごく小さな声でアルと意見を交わし合う。

仮にも違法組織の人間であるのなら、少なくとも相手は大人で間違いないと考えていた。それがどうにも若いというか、たぶんオレたちよりもまだ若い外見なことに動揺を禁じ得ない。

この新西暦ではこんな若者ですら違法行為に手を染められてしまうのか。まあ帝国首都にスラムがあったり、この地は戦争の最前線にほど近い地域なのだから不可避といえはその通りではあるものの。底辺を這いずった者としてはやや悲しくなってしまう。

犯罪の片棒を担ぐ生き方をしないで、仰ぐべき光さえ見つけられれば堂々と陽の当たる道を歩むことも出来るのに。

どうして自分から後ろ暗い生き方を選択してしまうのか。少なくともオレたちよりはまだ用意された道も多かっただろうに、あまりにも勿体ないと感じる。

だけどこれはあくまでオレ個人の考えであり、人に押し付けられる



ようなものでもない。価値観なんて人それぞれなのはついさつき思い知らされたばかりなのだから、自分の答えが全てに通じる最適解とは思わないし思えない。

「オレたちとは違って選択肢もあつたらうになあ……ま、それも僻んでるようなもんか」

「少しくらい羨んだって大和様の罰とやらはあたんねえさ。それにあれだ、悪いことするような奴を羨んだってしようもないだろ」

「どうであれ、偉いのは真面目で正道を行ける奴か。そりやそうだな」  
生まれも育ちも関係なく、凄い奴は凄いいし駄目な奴は徹底的に駄目である。

その中で少しでも良い方を目指す人間もいれば、せつかくの立場や才覚を棒に振ってしまふ人間もいるだけの話だ。そこについて考えたところで何が変わる訳でもない。

などとビール片手にアルと話しているものだから、気分は酒場で管を巻いている大人な感じだ。もし機会があれば是非ともクリスも誘って三人で一緒に酒を飲んでみたいものである。まあクリスが飲酒を好むようには見えませんが、まさか弱いこともないだろうし。ギルベルトを誘っても楽しそうだ。

などと益体もないことを考えつつ、耳だけは例の青年へと注目させていたのだが――

「じゃあ取引成立……とする前にだ。ちつとばかし気になることがあるもんだな」

不意打ち気味に立ち上がった赤髪の青年が、いきなり周囲を舐めるように見渡した。油断ない眼光がオレたちの方を見て、通りすぎ、また別のところへと投げられる。どうみても警戒している動きだ、まさかバレてしまったのか？

青年の思わぬ仕草に反射的に身体が強張ってしまうが、平静を装って普通の客らしくビールに口を付ける。やっぱり苦いが気合で我慢だ。

どうにか穏便に終わってくれとありがたい――などと考えてはいたものの、生憎と大和様は気紛れであるらしい。

赤髪の青年はふとこちらに目を留めると、ツカツカと真つすぐ歩み寄ってきた。

「そこのお二人さん、ちよいと良いか？」

剣呑な声音だ。近くの何人かが反射的にこちらへ振り向いた。

誤魔化すことは、もう出来そうにない。

「……なにか俺たちに用ですかい？」

「いや、用って訳じゃねえんだがな。その顔、見覚えがあるぞ」

あくまで落ち着いた調子で答えたアルの顔を、青年は訝し気に眺めてくる。

ついでオレの方も覗き込むように観察してくるものだから咄嗟に顔を逸らしてしまったのだが……どうやら、彼はその心当たりに行きついてしまったらしい。

「見た事ある面構えだと思つたら、お前たちは確かアドラー帝国の軍人だったか……ああ、話には聞いてるぜ、戦場で武勲を挙げた叩き上げの兵士だつてな」

「……それはまた、どうもありがとうございます」

ひとまず対外的な笑みを浮かべ、柔らかな態度で応対した。しかし疑念の眼差しは弱まらない。

さらに周囲の客たちの視線がこちらへ集まつてしまった。ひそひそと声を潜めたような会話も散見され、否が応でもオレたちがこの場での中心になっていると自覚させられる。

どうにかして誤魔化しこの場を切り抜けるか？ いや、もうそれも遅いだろう、軍人がいると知られた時点で警戒心は最高までなっているはずだ。だが力だけで切り抜けるにも今はオレたち二人だけ、ごり押しなんて真似は出来るはずもない。

「あの、まだなにか私たちに用でも？」

「軍人が酒を飲んでるなんざ珍しいと思つてな。ましてや有名人ならもっと良い店に行くかと思つたが」

「私たちだつてたまには息抜きしたくなりますからね。ここは偶然見つけたのですが、中々良いところだと思えますよ」

「へえ、そりや良かったな。ま、確かに人間息抜きは大事だ、いつだつ

て本気で生きてちや疲れてしようがねえからな」

大仰に手を広げ、肩を竦めるようなポーズをとる。表向きはこちらに共感しているような言い草であるが、その実小馬鹿にしているように感じてしまうのは気のせいでないだろう。彼はオレたちを下らない存在と言つて憚つていないのである。

……なんだか、話しているだけで不快な男だ。何事にも本気で真面目に取り組む人として当然の姿勢をバカにされるのは我慢ならなところがある。もしアルがさりげなく抑えてくれなければ怒りのままだに椅子から腰を浮かしていたかもしれない。

「で、つまりなんでしょう？ 用がないなら自分の席に戻つてもらえませんか？」

「おう、悪い悪い、別に用が無いってことでもねえんだわ。つまりよ——」

ヒュツ、と風を切つて青年の手が動く。銀色の線が空を斬つた。

不意打ちに対して脳が理解するよりも先に身体が動いたのは普段の鍛錬の賜物だろうか。床を蹴つて勢いよく立ち上がった衝撃で椅子が倒れ、けたたましい音が鳴る。だがそれ以上に、さっきまで首があった辺りを駆け抜けたナイフの一閃に驚かされた。

静寂、店内の誰もが言葉を失い全ての動作が消える。

そこから遅れること一拍、思い出したかのように店内に悲鳴が上がった。ほとんどの客が席から立ち上がったはオレたち三人から我先にと離れていく。まるで舞台の端役のように、オレたちを取り囲んでは遠巻きに見ているのだ。

「へえ、やるじゃねえか。女だてらに軍人をやつてないつてことか」

「当たり前だろ、お前みたいな奴にそう簡単に殺されてたまるかよ」

「つたく、出来るだけ穩便に行きたかつたんだがなあ……仕方ねえか、こうなりや武力行使だ」

バキバキと拳を鳴らしながらアルも立ち上がった。こうなればもう手段は選んでいられない。ひとまずこの赤髪の青年を取り押さえ、すぐにでもクリスたちを呼ばなければ。

一触即発の空気が流れる。互いが互いの出方を窺つたのはほんの

一瞬のことだった。

まずは先手必勝、数で勝っているオレたちで速攻をかけてしまう。いくらこの青年が凶器を持ち、かつ手練れだとしても現役軍人たるオレたちに敵うなどとは思えない。

対する青年は不自然なほどに冷静だった。その視線はオレたち二人ではなく、何故かアルだけに向けられている。まさかオレのことは眼中にないのか——そう訝しんだところを狙いすましたかのように、横合いからコップが飛んできた。

咄嗟に右腕で弾き、そつちへと向き直った。

「な、なんだッ!？」

「はいはい、酒場で喧嘩はご法度ですよ!」

「やるなら外でやってくれって話ね。それが嫌なら私たちが相手になるのでそのつもりで!」

「はあ?」

そこにいたのは、なんと金髪双子ウエイトレスのティナとテイセである。どちらもモップを槍の様に構えてこちらへと向けている。どことなく場にそぐわない可愛らしい雰囲気であるが、どうにも侮れない風格のようなものを滲ませているのだ。

今はそんな場合じゃない、なんて叫んでみても聞く耳持たずだ。既にアルの方は青年だけでなく、他にも紛れ込んでいたらしい如何にも用心棒らしい男達と殴り合いに入っている。早くそつちの手助けに入るか、どうにかして持たされた爆竹を鳴らして外の二人へと連絡をしたいのだが——

「おつと!？」

「あ、すばしっこいですねー!」

「待て待てー!」

思った以上に勢いのある槍捌き、ならぬモップ捌きを見せつけられるとそうも言っていられない。咄嗟に落ちていたお盆を掴み、それでどうにかいなしていく。大丈夫だ、クリスの放つ神速の突きよりはまだまだ遅い。見切れない速さではなかった。

ポコン、ポコンと間拔けな音を響かせながら一対二の戦いをどうに

かないして逃げていく。あまり時間はかけたくない。この双子が何者で、どうしてオレの妨害をしてくるかを考えるのは後回しである。今は一刻も早く仲間を呼びたいのだ。

「おいアル、そっち平気か!？」

「ま、なんとかな！ つーかレーテは何やってんだ、メイド二人と遊んでないでさっさとこっち来てくれ！」

「んなこと言われてもな、意外とこの二人手練れなんだよ——」

互いに別々の相手をしながら叫び合う。アルの方はオレよりもひどい一対三という状況だが、さすがに男性故の体格や筋力もあつてか遅れは取っていない。ただ長引かせればじり貧だろうし、ここはどうにかして加勢したい。

殴り合い、取っ組み合いの激しい音が耳に届く。壁の方に寄った客たちはまだ楽観視しているのか、それとも酔いが回ってこれも余興だと考えなおしたのか、呑気なことに観戦している始末だ。いったい何を考えているのやら。

「つたく、出来ればやりたくなかつただけだな！」

さすがにこんな事で膠着しても埒が明かない。仕方なくお盆をティナの方に投げてまずは足止め、その間に近くに転がっていた酒瓶の口の方を握り締めた。間髪入れずに突き出されたモップの穂先を酒瓶でいなし、空いた左手の手刀でモップを弾き落した。

「あっ！」

「やられたー！」

「つたく、なんか気が抜けるなー……」

やってることは麻薬売買の現場を直接抑えるという結構なことなのに、どうしてこうも緩い感じなのか。この奇妙な双子がいるだけで場の空気が弛緩してしまうからどうにもやり辛い。それともこれが二人の持ち味なのだろうか。

ともあれ、片方は無力化したとなれば後はやりようもある。外に内部の異常を伝えるだけなら、むしろもう少し手っ取り早い手があるじゃないか。

懐の爆竹を取り出し、それを高々と掲げて叫んでみる。

「爆弾がここにあるぞー！ 早く逃げなきや全員一緒にお陀仏だぞー！ それでも良いのかー!？」

もちろんハツタリである。そんな派手に爆発してオレたちごと心中なんて起きるはずもないが、いかにもな円筒形の筒を見せられれば誰だつて不安がるだろう。オレだつてたぶんビビると思う。

これがただの一般人なら言わずもがなである。呑気にオレたちの乱闘を眺めていた他の客たちもさすがに状況のまずさを悟ったのか、急いで出口の方へと走り出した。地下の酒場から階段を駆け上がり、地上へとワラワラ出ていく。狙い通りだ。

「これでクリスたちにも異常は分かる。いきなり出入口から客が押し寄せてくれば誰だつて分かるだろ」

「お、考えたな、レーテー！」

用心棒を殴り倒しながらアルが途切れ途切れに言う。さすがに疲れてはいるようだが、まだまだ元気そうだ。しかし赤髪の青年はまだ捕らえられておらず、もう一人の用心棒はまったく以つて元気そうである。

これで双子を除けば二対二か。さすがにタイマンでの戦いならそう簡単に負けはしないし、すぐにオレの知る最強の男がやって来る。問題は少しも存在しないだろう。

「つたく、ここは良い隠れ蓑だと思つたんだがなあ……こうなりや仕方ねえか、撤退だ。この酒場も放棄するしかねえ」

「撤退？ そんなのオレたちが許すと思うか？」

「それが意外と簡単なんだよ。なあ？」

青年の目線がオレを飛び越え、さらにその後ろへと注がれた。待て、そこにいるのは確か――

「ここらが潮時つてことですねー」

「ウェイトレスも楽しかったけど背に腹は代えられませんもんね。という訳で、さようならー！」

双子の弾んだ声が店内に響くと共に何かが床を転がった。それが手榴弾ではなくスモークグレネードの類だとすぐに理解した時にはもう遅く、一気に噴き出した白い煙幕スモークに視界を奪われてしまう。とん

だ隠し玉を出されたと言わざるを得ない。

ハッキリとしない視界の中で下手に動くのは危険だ。とはいえ何もしない訳にもいかず、すぐに出口の方に走ってそちらの警戒にあたったのだが……クリスとギルベルトが突入し、煙幕が払われた時にはもう、床に伸びている用心棒の二人を除いて誰も残ってはいなかった。

◇

「く、はははッ。まったく助かったぜ、礼を言わせてくれよ」

「別に構いませんよ。それが私たちの仕事ですから」

「でもお礼をくれるってんならありがたくもらうよー？」

「悪いな、生憎と持ち合わせがねえんだわ」

青年の哄笑が路地裏に響く。それを冷めた目で見ているのは、金髪が似合うウエイトレスの二人だ。

言うまでも無くティナとティセの双子と赤髪の青年の計三人である。彼らは見事にあの酒場から脱出を果たし、のうのうと難を逃れていたのだった。

「それにしても驚きましたよ。有事の際は隙を見て煙幕を投げろ、なんて前に言っていましたけど、いつの間にあんな隠し通路を用意してたなんて」

「見つけたのは偶然だったが、これは使えると思ってな。旧暦の遺物の中に作られた酒場だから、一見分かり辛い非常扉も案外とあるんだよ」

「なるほど、そういうことですか。でも意外ですね、そんな抜け目ない一面があつたなんて」

ティセの言葉はもつともだった。まるで世の中を舐め腐ったかのような態度と仕草からは程遠い周到で抜け目のない行動である。実のところ用心棒をわざと殴り倒して見捨てたのすら、逃げる際に邪魔になるという冷徹な損得勘定からだ。

少なくともこれだけの事が出来る周到さと、あの場から逃げおおせる機転と脚の速さはあるのだ。もつと真面目に生きることだつて十分に可能な能力はあるだろうに、どうしてこんな生き方をしているの

か。

「決まってるだろ、その方が楽な生き方だからだよ」

それとなく訊ねた双子に帰ってきたのは、当然だろうと言わんばかりの答えだった。

「確かに、本気で頑張ればこんな芸当だって可能だ。だけど考えてみるよ、毎回こんな手間をかけるような仕事でいったい誰が得できる？

頑張って用意したから報われる、救われる、そんな保証はどこにもない。なら俺は楽な方を取るね、そっちの方がよほど賢い生き方さ」

「それがあなたの生き方なんですか」

「なんだか勿体ない気がしますけど、それも人それぞれですものねー」  
「言ってる。俺の人生は俺だけのもんだ。叶うかも分からない理想に全て費やして燃え尽きるなんざ真っ平ごめんなもんでな」

人生なんて一度きりであり、ならばこそ後悔をするような生き方なんて損なだけ。

本当に賢い奴ならもっと手を抜いて生きるし、それでしつかり楽をするのだ。この青年はあくまでもそんな理論に基づいて動いているだけであり、いくなれば甘い蜜だけをどうにか啜って生きるために、ちよつとだけ本気を出している小悪党に過ぎない。

「んじや、俺はそろそろ行くとしようかね。すぐにこの隠し通路もバレるだろうから、あまり長居しても面倒だ」

「では、私たちもこの辺で」

「また縁があればお会いしましょう」

「おう、じゃあな」

鷹揚に片手を挙げ、赤髪の青年はその場を去る。

双子はその後姿をただ黙って見送り、そして同じく背中を向けたのだ。

「にしてもあの女……そんなに良いもんだと思ってるのかね、頑張ってる生きることがよ」

「それにしてもあの女性、いったい何者なのでしょう」

「他の端末に接触できればもうちよつと詳細な情報も……でも思い違いだったら面倒ですしー……」



——未だ、光の信奉者が彼らの道と交わることはない。  
その時まで、あと数年だ。

あの酒場での乱闘から、今日で三日が経過した。

麻薬売買の主犯である赤髪の青年は逃してしまったものの、取引の場となっていた酒場を抑え、さらにその関係者らしい用心棒を二人捕らえた時点でオレたちの成果としては十分だった。

オレたちが店内で乱闘を起こしたすぐ後にアドラー軍へ連絡が行き、即座に店内も改められる流れとなったのだ。詳細な調査が行われた結果、バーの裏や天井の照明、果ては酒瓶の中など至るところに隠された麻薬や隠された金が発見され、見事にあの店そのものがニルヴァーナとグルになって利益を得ていたと証明されたのである。

それに伴いあからさまな隠し通路も発見されたのだが……その先はどこぞの路地裏と繋がっていて流石に誰の痕跡も残ってはいなかった。あの青年と謎の双子が煙幕の中でこの通路へ逃れたのは間違いないだろうが、阻止できなかったのは痛恨の極みだ。

それでも都市の中に潜んでいた取引所を潰せたのは大きいし、何なら用心棒たちからも僅かだが情報を引き出すことは出来た。おかげでアドラー帝国軍はさらに二つの酒場へ即座にガサ入れを行い、結果として酒場に偽装された犯罪の温床を取り締まることに成功した。

最善の結果とはいい辛いですが、それでもほとんど個人の力で動いたにしては上々の結果である。なにせこれまで帝国軍でも尻尾を掴めなかった麻薬流通の取り締まりを、一気に三つも出来てしまったのだから。これら全ての発端はギルベルトの読みであり、すなわち彼の炯眼は国家すら超越したのと同義な訳で……味方ながら空恐ろしくなってしまう。

そう、ギルベルトと云えばだ。

事が済んだ後に薄ら笑いを浮かべつつ、いきなり様々なネタばらしをしてきたのはちよつとどうかと思う。

その際に交わした会話はこうだ――

「それにしても結局この爆竹は使わなかったな。まあ別に良いけどさ」

「ああ、それなのだがね。中身は何もないただの張りぼてだよ」

「……はい？」

「だからその導火線に火を付けたところで何も起きない。むしろ市街地で爆竹とはいえ派手なものを渡す訳にはいかなかったのですね、当然のことさ」

「じゃ、じゃあなんでそんなものをオレに渡してきたんだよ。もし本当にこれをアテにしてたらどうしたんだ!？」

「決まってる、君たちならきつと『これは爆弾だ』とハツタリを効かせてくれると信じていたからさ。もし本当に爆竹と思い込んで使用したとしても、元から武器としてはアテにしない以上損にはなるまい？」

「お、お前なあ……どこまで読んでたんだよ」

「すべてを——というのは少々傲慢かな？　今回は取り逃しもあつたことだし、十全に予期出来ていたとは言い難いな。そこは私の不徳だよ」

などと謙虚に頭を下げつつニヤリと笑ったその姿を、オレはしばらく忘れることが出来ないだろう。

本当にこの男はどこまで物事を読み切ってしまうのか。もしギルベルトがより成熟した力を発揮すれば、たった一人であらゆる人間を超越した国家貢献<sup>リタイン</sup>を国に齎<sup>リ</sup>してしまふのではないだろうか。そう素直に信じられる、いつそおぞましい程の才覚を感じられてしまうがな

だが逆説的に、こんな男がオレたちの味方として敬意すら表示してくれているのだ。その事実を改めて噛み締め、彼の期待を裏切るような真似をしないようにいつそう頑張りたいと思う。

——それが例え、予想外すぎる方向からのお誘いであつてもだ。

「交流会、ですか？」

「その通りだ」

場所は第六東部征圧部隊血染処女<sup>バブルゴ</sup>の現隊長、カイト・影・アマツ隊長の部屋だった。

すっかり、という程でもないが見慣れてしまった室内で、オレたち

四人は揃って隊長の前で整列していた。つい数分前に呼び出されて来たのだが、議題は思いも寄らぬ切り口から始まった。

「今回、潜伏していた麻薬組織の摘発に当たって君たちの活躍が如何に大きかったか、それが分からぬ私たちではない。よって活躍へのささやかな褒美と、なにより——」

言いながらギルベルトと、それに何故かオレの方にもチラリと視線をやった。

すぐに視線は戻っていったが、どうにも意味深な仕草に内心で身構えてしまう。初めて配属された時から今日まで、この隊長のイヤな視線を度々感じてしまうのは何とかならないものだろうか。

こっそり嘆息してる間にも、話は滔々と進んでいく。

「私がハーヴェス少尉に下した命令は、誰もが分かりやすい手柄を立てることだ。この時点でその命令は達成できたと考えてよいだろうから、となれば次は顔合わせだな。そのためのセッティングという訳だ」

「お心遣い感謝します。しかし、よろしいのですか？ いきなりそのような大きな舞台を用意しては——」

「なに、まさか部隊の軍人全員でやる訳ではないさ。あくまでも中枢を担う人物と、君が率いることになるだろう者たちの顔役に限定されるがね。そこで円満な関係を築ければなお良し、というヤツさ」

理屈は分かるし簡単に言ってくれてるが、それはつまり上司たちと一緒に酒を飲む場になるのではなからうか。正直なところ勘弁願いたいのだが、まさか上官が好意で設置した場を部下が無碍にするわけにもいくまい。ましてこのアドラー帝国軍では尚更にだ。

つい先日ビールに口を付けて、そして飲めなかった身としてはどうしたものか……無言で直立しながら考えてしまう。

「日時についてはいつ頃か？」

「明後日の夜が最も都合が良いらしいから、それに合わせるようだ。君たちも構わないかな？」

「はい、もちろんです。謹んで参加させてもらいましょう」

「ああ、是非そうしてくれたまえ。これは君たちを労うためにあるの

だから」

笑みを浮かべて語る影隊長をどうにも信じられないのはなにもオレだけじゃないだろう。隣に立つアルやクリスもまた、オレと同じような雰囲気を出している。

人からの好意を素直に受け取れなくなってしまったのは悲しいものだが、それだけ軍内部での腐敗やら扱いの悪さを身をもって知っているのだ。警戒して何が悪いといっそ開き直る方がよほど気が楽である。第一初対面でオレたちのことをあつさり「捨て駒」と評した男の言である、信用しろという方が無茶だろう。

ただ、しいて言えばだが。言葉は露悪的だし端々に傲慢さが滲み出ているものの、影隊長が直接的な悪意の妨害を齎したことも殆どない。お人好しにも思えるが、その点だけは信用してみても良いのだろうか。

なにはともあれ、オレたちの上官という立場のギルベルトが了承したならこれは既に決定事項だ。今更こちらからどうこう言えるような状況でもない。

「——では、話は以上だ。改めてになるが今回の活躍は見事だった。君たちの今後の働きにも大いに期待しよう」

「はっ！」

本心の見え辛い影隊長の労いに揃って敬礼を返し、ひとまずその場を後にしたのだった。

◇

——切っ掛けはほんの些細な会話であった。

「ところで、しばらく前から気になってたんだけどよ」

「どうした？」

「オレたちって酒を飲んでも平気なのか？　こう、身体とか法律とかそういうの的に」

「ふむ、この新西暦においてそのような法は存在しないな。旧暦の世においては二十歳未満の者は飲めないであったが……今では十七にもなれば平気で酒を嗜んでいるさ。むしろそのような古い事実を知っているブラウン嬢に驚かされたよ」

「まあ、ちよつとな。昔色々あったから……」

一応嘘は言つてない。前世の記憶というのはオレからすれば昔のことだし、そこから転生したなんてまさに“色々あった”の範疇だろう。未だにオレの中でも消化しきれてない嘘のような本当の話だし。

それにしてもなるほど、新西暦だと若者でもお酒を飲んで平気なのだ。旧暦では戦時下において子供もワインを飲んで身体を温めた、なんて話を聞いたことがある。さすがに第四次世界大戦ともなればそんな話は無かつたはずだが……時代は繰り返すとはこのことか。

「でだ、明後日いきなり上官とお酒飲むとか言われても困るだろ。オレたちがどれだけ飲めるかなんざ分らないし……」

「なるほど、心配は当然だろうな。人間誰しも未知を恐れるものだし、対策もなしに無知なまま挑むなど愚の骨頂だ。なにより、君たちの気がそれを許さないのではないかね？」

だから、とギルベルトは珍しく茶目っ気を含めたような笑みを浮かべてみせた。

「ここは一つ、私たちも親睦会というのを開いてみてはどうかね？ せっかくの機会だ、より気兼ねなく意見を交わしてみようではないか」

「つまり、俺たち四人で個人的に飲みに行こうってことか？」

「その通りだ。一石二鳥というヤツだろう？」

確かにギルベルトの言に間違いはない。今の自分がどれだけお酒を飲めるか、これを知るのは重要なことだろう。

ついでにオレたちは何だかんだ出会ってまだ数日程度の仲である。ここらでより腹を割って仲良くなるというのも良いだろう。まして一つ大きな物事を共同で達成した後ならなおさらだ。

「いいじゃねえか、楽しそうだ。俺は乗ったぜ」

「オレも同感だな。まあたぶんお酒は弱いだろうけど、慣れておくのは悪くないし」

「上官の前で無礼を働いてはそれこそつまらぬ諍いの種にもなる、か……あまり酒精というのは好ましく思えないが、知らぬのもまた悪手か」

「ふむ、では決まりだな。良い店を知っている、案内しよう」

などと会話が あつたのだ。

そうしてあれよあれよという間にオレたちはギルベルトに連れられ、夜の街へと歩き出していたのである。普段なら絶対にやらないし軍に許可されるはずもないのだが、そこは他ならぬギルベルトの提案なのもあつて簡単に許可が下りた。なんというか、ちよつと呆れてしまうほど良くも悪くも貴族に甘すぎる軍隊だ。

夜のフランクフルトはガス灯の光に照らされ、派手な明るさではないが穏やかな温かみがある。ぼんやりと滲む明かりの下で、新旧入り混じった石畳を人々が行きかうのがそれだけで風情のある光景に感じてしまう。旧暦から続いた街並みの放つ気配、そう言い換えて良いのかもしれない。

さらに少しばかり感傷に浸つてみるなら、オレたち帝国軍人が守るべきアドラー帝国とはこのフランクフルトも含めるのだ。隣を通りすぎた親子や、どこか初々しい男女の連れ添い、夜なのにとてもハイテンションな青年たちまで、その全てがこの景色を形作っている。

だけど考えれば、オレたちはこのフランクフルトの景色を全然知らないのだ。お勧めのお店や、スポット、知り合いといったあらゆる全て、守っているはずなのに分からない。軍人が国のために戦う意義となるものがすつぽり抜け落ちていくように感じてしまうのだ。

もちろん、生きるために軍の門を叩いたオレたちなのだからそれも不思議ではない。これまで戦場をたらい回しにされて戦い続けているのだから仕方のないことだろう。それでも、何のために、誰のために、こうまで戦っているのかも知らずにこれからを過ごすのも何だか悲しい話だと思うのだ。

だから歩きながらもしつかり周囲を見渡して、この光景を目に焼き付けておく。いきなり愛国心がどうだのはちよつと難しくても、どんなモノのために軍人として戦っているかはちゃんと知っておくべきなのだから。

「なあ、クリスは何のために戦ってるんだ？」

ふと、聞いてみたくなつた。

隣を歩くこの男はやつぱりいつも通りの仏頂面であり、今も楽しそうな気配は全く見えない。だがそれでも、普段より若干ながら気が緩んでいるのは分かる。彼もまた今の状況に思うところがあるのだろうか。

突拍子もない質問だった自覚はある。けれど彼は驚くこともなく真摯に答えてくれた。

「無論、この国の繁栄のために。誰かの涙を止めるため、蔓延る悪を裁くために、俺は戦い続けるためだ」

「……それは、あの日の姉弟との約束か？」

思い出すのは首都を離れる直前の記憶だ。かつてオレたちが使っていたねぐらを新たに使っていた、まだ幼い姉弟たち。クリスは彼女たちに誓ったのだ、底辺の者でも胸を張って過ごせる世界を作ってみせると。

思えば、その時からクリスの決意と覚悟は定まっていたのだろうか。やりたい事を見つければ、後はその先へ一直線。脇目も振らずに走り抜けてしまう光の性がそこにある。

だがオレの言葉にクリスは静かに首を振った。

「いいや、彼女たちだけでない。俺はこの国の全ての民に光をもたらししてみたいのだ。未だ一兵卒でしかない俺が言うには大言壮語にも程があるが……それでも、やると誓ったのだ。途中で諦めることなど出来ないし、許されない」

「クリスらしい言い草だよ。諦めないし諦められない、挫けたり手を抜いたりなんてやり方すら分からないもんな」

「そうだ。ブレーキを知らぬ破綻者だという自覚はあるがな。こればかりは変えられない」

「知ってるさ。そんなお前がカッコいいから、オレはお前の友人でありたいと思っただけだからな」

薄く笑って肘で小突いた。忘れる訳がないだろう、それはオレがオレであるための一番大事な誓約なのだから。誰よりもこの凄い男の横に立ちたいと願っているのだ、そればかりは譲れない。

なんて歩きながら話していたものだから、気が付けばもう店はすぐ



そこだった。アルからは「んな真面目な顔で話し込むなよな！」と諭され、ギルベルトからは冷静に「さあ着いたぞ。積もる話はまた後だ」と言われてしまったものだから、なんだかすごく恥ずかしい。クリスは何も動じていないので余計に気にしてしまう。

連れてこられた店はちんまりとした酒場であり、落ち着いた雰囲気、の漂うオシャレな店だ。カウンターに丸テーブルというのはこの前の酒場と同じだが、なんというかより健全で静かな佇まいなのが分かる。知る人ぞ知る酒場、とでも言えば良いのか。

果たしてギルベルトはいつの間にかこんな穴場らしきスポットを見つけたのか。もう彼のことだから一々驚くこともなく、ただ『そういうものかー……』と諦めつつあるくらいだった。

ひとまずテーブル席の方に通され、四人で席に座ったところから一杯とばかりにビールが運ばれてきた。ジョッキに並々と注がれ、泡立ったアルコール飲料は何故だか美味しそうに思ってしまう。この前飲んだ時はダメだったのに、店の雰囲気の中てられてしまったのだろうか。

「では乾杯といこうか」

「誰が音頭取るんだ？ やっぱ上官のギルベルトか？」

「……レーテで良いだろう。俺はこういうのには向かんし、それはハーヴェスも同様だろう」

「マジか。ちよつと待ってな、言う事考えるから——」

いきなりクリスに無茶振りされた訳だが、さてどうしたものか。ギルベルトの奴もそれで納得してるらしいし。

まあ、ここはシンプルに行こうじゃないか。悩んだところで仕方ない。

「それじゃ、今回はお疲れ様でした。今後はこの四人で活動すること多そうだし、明後日はちよつと面倒なことになりそうだけど、今は忘れて気楽に行きましょう！ それじゃ、乾杯！」

掲げたジョッキを打ち鳴らし、ひとまずの祝勝会が幕開けたのである。

ゴクゴクと喉に流し込むビールはやっぱり苦手な味だがどうして

だろう、今はそんなに悪くない。大した緊張もせず、親しい仲の人たちと一緒に飲んでいからだろうか。

ひとまず全員がジョッキから唇を離れた後、まず口を開いたのは意外にもクリスだった。

「今回は悪かったな、アル、レーテ。お前たちが頑張った横で、俺はなんの役にも立たなかった」

「なんだ、そんなことかよ。気にすんな、いつも戦場で助かってるのはオレたちの方さ」

「そうだぞ、たまには肩の力抜いて誰かに任せてみたって罰は当たらないさ。全部背負いたがるのはお前の悪い癖だ」

確かに今回は状況などもあり、麻薬売買の現場の制圧はオレとアルだけで終わってしまったが、別にそんなこと誰も気にはしていないのだ。むしろいつも危険へと突き進むクリスが今回は大人しく出来たのだから安心していいくらいである。

なので二人して一つも気にしていないし、むしろこんなところで謝られても逆に困ってしまうくらいだ。もつと英雄は英雄らしく、胸を張ってほしいと思う。

「二人とも困っているようだし、そこまですておいたらどうかね？

あなたの活躍は今後何度でも拝見できるだろう、私はその時を楽しみに待っているのだから」

「……………良いだろう、その通りだ。困らせるつもりはなかったのだがな、やはり俺の悪癖だったか」

「だから謝るなって。いいんだよ、そんなことくらい。オレたちは友達だからな」

助け合って、たまにふざけて、時には可笑しなことやらかして。それを含めての友達なのだ、こんなの物の数にも入らない。

まだどこか納得しかねるような無然とした表情のクリスは、そのまま一気にジョッキのビールを流し込んだ。喉を鳴らして飲む様に圧倒されるが、飲み終えた後の彼はまったく顔色が変わっていない。

「やはり酒精は好かん。酒以外のものがあればそっちの方がありがたい。ミルクか、オレンジジュースか、無ければ水でも構わん」

などと告げた口調も常と変わらぬしっかりしたものである。やはり酔った様子はない。

「クリスお前、酒強かったんだな……」

「もしかして酒豪<sup>ザル</sup>ってやつなのか？　すげえなおい」

「ははは、そんな男が次に頼むのがミルクかオレンジジュースとは、これは愉快だな」

そんなクリスの姿にオレたちは三人揃って脱帽するしかなかった。

というか、その風貌でミルクやオレンジジュースを頼むつもりなのだろうか。ビールやウイスキーを派手に飲む姿が似合いそうなものなのに、逆にすぐ目立ちそうで見てみたい欲求が高まってしまう。

ともあれ、今は飲まなければ始まらない。ちびちびとビールへ口を付けつつ、運ばれてきたポテトに舌鼓を打ったり。たまにはこういう酒肴も良いのかもしれない。

「さて、それではささやかながら楽しむとしようではないか。ああ、金のことは気にしないでくれたまえ。今回は私の奢りだ」

「お、太っ腹だな！」

「そりやいいぜ、これで気兼ねなく楽しめる」

「二人とも、あまり羽目を外しすぎるなよ」

「構わないさ。優れた者がしっかり報われてほしいのが私の願いなのだ、こんな時くらいは存分に羽を伸ばしてくれたまえ」

こうして、一晩限りの酒宴は静かに始まったのだった。

……まあ結局、オレは適当に酒を飲んでたらいつの間にか記憶が飛んでいたのだが。

「なあレーテ、なんか気を紛らわせるような話ってあるか!? ちよいと頭がおかしくなりそうだ!」

「んなこと言ってる場合があるか! 真正面に集中しろって! うっかり死んだら笑い話にもならないぞ!」

走る、走る、走る。爆炎と銃声の轟く街中をひたすらに走り回る。軽口を叩きながらも感覚だけはひたすらに研ぎ澄ます。夜の帳と赤い炎に彩られたベルリンの街並みは地獄もかくやと言わんばかりの様相を呈していて、一年以上も戦場を駆けてきたオレでも非現実感を強く感じてしまうのだ。

なにか一つ違えば、オレらのよく知るフランクフルトの街もこうなっていたかもしれない——感傷に浸ってしまいそうだが、戦場でそんな命とりをする余裕はない。

「十メートル先、敵が出てくるぞ。各自構えたまえ」

「ッ、了解!」  
ボジテイフ

普段と変わらぬ涼やかなギルベルトの声に即座に反応、懐から拳銃を抜いて準備した。

数秒後、きっかり十メートル先の物陰から飛び出してきたのはアンタルヤの傭兵たちだ。予言めいた先読みのおかげで先手必勝とばかりに銃撃で応戦、一発二発当たったような感触はあるが、あまり分らない内に物陰に飛び込んだ。

「まったく、遭遇戦が多いな。こども銃持ちが多いとやってられねえぜ」  
「なに、心配することはないさ。相手の銃の種類からしてあと三秒後に弾切れだ。そこを突いて一気呵成に畳みかければいい」

「その前から突っ込んでる奴もいるけどな……!」

呆れたようなアルの言葉に呼応するかの如く、敵の悲鳴が響き渡った。銃弾が飛び交うはずなのにお構いなし、刀剣の間合いに一足飛びに突撃するのはクリスを置いて他にない。

戦場に幻想なんて持ち込む余地はない。ないはずなのだが、しかしこれは、もはや冗談のような流れだった。複数人で、銃を持った傭兵たちが、剣を携えた唯一人の兵に斬り伏せられる。真正面から道理をひっくり返して勝利を掴み取ってしまう男こそ、クリストファー・ヴァルゼライドという男に他ならないから。

「なるほど、さすがはヴァルゼライドだ。この状況でなお前へと進み、敵を粉碎してしまうとは。素晴らしい、やはり全ての障害は意志の力の前に無意味だったか！」

「喜んでる暇があるならクリスのフォローしろ！　ったく、オレたちも行くぞ！」

「ああ、分かっているっての！　物陰でいつまでもビビってちやあいつに顔向けできねえからな！」

ただ安全地帯からクリスの活躍を眺めているようで、どうして彼の友人を名乗れるというのか。いつまでも引っ込んだままではいられない。

ギルベルトに関しては……まあ、今日の彼はそういうものだと思うしておく。このベルリン戦線が始まって以来ずっとこんな調子というか、クリスが奇跡的な勝利を繰り返し積み上げる度に感激している有様である。それでも平時は非常に優秀な上官兼指揮官として活躍してくれるので文句はないのだが。

などと考えている間にも身体は淀みなく動き、クリスの援護をすべく射撃を繰り返していた。この辺りは短いながらも濃密な戦場経験をした為か、ほぼ無意識の内に身体が動くようになっていく。どこまでも効率的に敵を殺せるよう、三人でのコンビネーションが染みついてきているのだ。これに今はギルベルトも加えて、より円滑な連携が可能となっている。

そうしてオレたちより戦場経験豊富なはずの傭兵たちを呆気なく屠り、さらなる敵影を求めてベルリンの街を走り出す。

——東部戦線における要、旧・ドイツ領はベルリンの争奪戦は次第に佳境へと差し掛かっていた。



話は変わるが、まずは結論からまとめてしまおう。四人だけのささやかな酒宴を終えた数日後、影隊長の言及していた交流会は意外な才子を見せた。

これは別に予想外でも何でもないのだが、ひとまず軍上層部の悪意かそれに近い意思があったのは本当らしい。というのも、佐官階級の人間たちがこぞってアルコールを大量に持ち込んだのである。しかもご丁寧に『上官の酒が飲めないの?』というアピール付きでだ。

加えて一気飲み誘導だとか、意図的に酔い潰そうとしたりだとか、それはもう分かりやすいアルハラというヤツで……だ。いぶ酒に弱いことが判明してたオレとしては非常に困った。

意図は非常に明白だろう。影隊長が内心どう思ってるかはともかくとして、他の上役たちはオレらの活躍が目の上のたん瘤だったのだ。特にクリストファー・ヴァルゼライドに至っては未だ一兵卒でありながら他の兵達の信望を一身に集めてしまうとなれば、多少なりとも腐敗の自覚がある者からすれば面白くない。放っておけば部下が全員下っ端に寝取られた、なんて笑えない事態にも発展しかねないからだ。

なので酒の力を使って強引に不祥事を起こさせるか、飲まなくても上司の言う事を聞かなかったとかで難癖付けるつもりだったのだろうか……さすがに相手が悪かったと言うしかない。英雄はこんなところでも英雄だった。

なんとも剛毅なことに、クリスはアルハラをかましてくる上司全員——確か四人はいたはずだ——と飲み比べをした挙句、全員を逆に潰してしまったのである。さすがにこれにはオレたちも度肝を抜かれた。

あいにくとオレはまたも記憶が朧気なので後でクリスに聞いてみれば、「酒は好かないがそれを武器に迫って来るものはもつと好かん。負けるのも癪だから全員に勝利してみせたまでのことだ」なんて軽く言ってくれたもので。あまりの酒豪<sup>ザル</sup>っぷりにオレたち揃って呆れ返ったものである。

まあそのおかげで大した問題が起きることもなく、どうにかその場

は丸く収まってくれたのだが。もう少しドロドロとした意思や展開が絡んでくるかと身構えてただけに拍子抜けも良い所で、代わりに顔合わせという本来の目的が息をしてないけれどそこはそれだ。

後日改めてギルベルトが顔を合わせたらしいが、その際にはもうこの件はすっぱり無かったことにされていたようだった。まあ、アルハラしようとして撃退されたなどと恥ずかしくて言える訳もないか。こっちからも取り立ててネタにするつもりは無いし。

ただし、いったい影隊長の意図はどこにあるのだろうか？ これはもう考えてもよく分からないので考えるのを止めた。こういう悪意の場を用意した割に自分は特に手を出してこない辺り、妙にねちっこい印象を受けてしまう。

などと疑問も残しつつ、相変わらず性根の腐った軍上層部とそれを跳ね除けるクリスの強さを再認識して交流会なるものは終わったのである。ぶっちゃけ慰労も何も無いけれど、そこは最初から期待なんてしていないので何とも。むしろ心労が増えただけという悲しい結末だ。

そういう訳で無事に関門を一つ乗り越えたオレたちであったが、悲しいかな次の試練はすぐにやって来る。特に何もしてなかったオレたちにも、一人でアルハラ上官を撃退したクリスにもお構いなしな平等さでだ。

「で、次はベルリン攻略戦か……帝国軍も来るところまで来たという感じだな」

「これも君たちが各地の戦線で予想以上の活躍をしたからだろうさ。私はまだ聞き及んだだけだが、今からその活躍を目にするのが楽しみでならないよ」

「なんだか他人事だなおい。頼むぜ指揮官殿、上手くやってくれよ」  
「無論俺たちも努力は惜しまないがな。帝国の勝利のために、ハーヴェス少尉の力になれるならば喜んで剣を執ろう」

それはありがたい、いつも通りの薄ら笑いを浮かべてそうギルベルトが言ったのだ。

旧・ドイツ領のフランクフルトにはアドラー帝国軍が、同じくベル

リンにはアンタルヤ商業連合国の戦力が陣取っている。目下のところ帝国軍の目標はこのベルリンの奪取であり、これを足掛かりにフランクフルト、ベルリンの二方面から東の方へ攻め込む算段なのだ。おそらく次の目標は旧・チェコ領にあるプラーガのほず、大破壊カタストロフによって大和の国会議事堂が転移してきたかの地は政治的にも宗教的にも大きな価値を持っている。

フランクフルトから東へ一直線にプラーガに攻め込まず、遠回りをしてまで帝国がベルリンを先に落としたがったのは、単純に進軍に際して後顧の憂いを無くすのと、大破壊カタストロフによって滅茶苦茶になった関係で障害物が多いからだと聞く。

「進軍の方向性に不満はないが、しかしかつての大事件には今も驚かされるばかりだ。政府中央棟セントラルも旧・フランス領の遺物と日本軍の軍事施設の融合体だったか。この世の常識などお構いなしと言わんばかりだ」

「いや、それにしてもなあ……大破壊カタストロフとんでもないな。なんで歴史的な“壁”ばつか集めて融合させるんだよ意味が分かんないぞ」

「そんなに凄いのが集まっているのか、えーつと、その——」  
「嘆きの壁、ベルリンの壁、それから万里の長城の一部だったか。ふむ、私としても興味深いよ。まるで作画的とすら感じる程に著名な建造物が集まっているが、さてこれもまた大和カミとやらの思し召しなのか……」

これがまたなんとも恐ろしいことに、旧・ドイツ領の東寄りの地域ではユダヤ教の聖地である嘆きの壁と、かの有名なベルリンの壁、それに中国の万里の長城の一部が融合したのが鎮座してるとか。そのせいで南北に渡って塞がれてしまい直進出来ず、破壊しようにも旧暦の遺物を不用意に壊せない困った状況らしい。

なのでまずはベルリンから陥落させ、しかる後にプラーハへ行こうという作戦のようだ。うん、真面目に考えても訳が分からないような話である。まるで悪夢だ。第二太陽アマテラスの馬鹿野郎と言っておこう。

「意外とベルリンにも何か変な旧暦の遺物があるのかね？」

「いや、それはおそらく無いだろう。そのような噂は聞いたことがな



い。むしろ政府中央棟をくまなく探した方が新たな発見があるかもしれないぞ?」

今より遙かに科学技術の発展していた時代ともなれば、未だに発見されてない機能やらがあっても不思議ではない。もしかしたらオレも見覚えがあるようなアレやコレやらがあるのだろうか。ちよつとばかり楽しみである。

アルもそのように感じたのか、ニヤリと笑みを浮かべた。こういう時、彼はノリがいい。

「へえ、そりや面白そうだな。もし首尾よくいって国のお膝元まで戻れたら、そんな時は存分に探索してやろうぜ」

「果たして鬼が出るか蛇が出るか……いいや、その前に悪を貪る腐った輩と遭遇するのが先だろうな。旧暦の遺物がどうこうより、今を生きる恥知らず共の方が問題だ」

吐き捨てたクリスが拳を硬く握り締め、その言葉に思わずオレたちも押し黙ってしまった。話の転換としては急だが、首都の話となれば避けては通れない問題であるのも事実だからだ。

貧民窟スラムの頃から貴族たちには散々な目に遭わされ、今も振り回されてばかりなのだから彼が怒るのも無理はない。だってオレの幼馴染は、なによりも闇に染まった悪が許せない光の奴隷なのだから。簡潔に言えば曲がったことが許せないし、そのために自らは何があるろうと正しく強くあろうと努力を惜しまない。

そんな人間が悪徳を行いほくそ笑むような輩を許せるはずもなし。いずれ対面することになるだろう帝国腐敗の元凶たちを考えると今から頭が痛いくらいだが、目を逸らす訳にもいかないのだ。

「……ま、確かにな。昔が今に追いつくなんて無いけれど、未来はオレたちを待ち構えてる訳だ」

「それも悪意増しませでらろ? ったく、今から考えるだけでも嫌になるぞ。こう、旧暦の遺物とやらで嫌味な奴らをパーっと一掃出来たら良いのにな」

「だが、そう都合のいい展開など訪れまい。夢を見るよりもまず現実に足を着け、叶わぬ夢想をするよりも努力を重ね確実な力を得なければ

ば話にもなるまい。悪を重ねる者は悪を重ねるなりに努力しているのだ、それに劣るようではどうしようもない」

「そのために必要な『功績』という力は、まさに目の前に寄越されたのだ。であれば、これを活かさぬあなた達ではあるまい？」

クリスを含むオレたち全員に投げかけられた言葉。もちろん答えなど決まっているから、全員揃って頷き返した。こちらの意志を確認したギルベルトは満足そうだ。

「今度のベルリン攻略戦で成果を挙げれば、いい加減に上も君たちの実力を評価せざるを得なくなるだろう。これまで東部戦線を転々としながら生き残り、かつ成果を挙げた者に対して一等兵の地位はあまりに安い。もしそうならずとも私が微力ながらサポートしよう、これでもやり口は幾つか知っているのではな」

「そりやまた、頼もしい限りだよ」

若き天才がオレたちの味方であることに改めて感謝しつつ、思わず苦笑してしまうのだった。

◇

「へえ、ここがドイツの誇ったブランデンブルク門か——ツと！」

炎に巻かれた街を走ることにしばらく、記憶の中で覚えのある建造物が目に入った。炎に赤く照らされてなお荘厳な門に目を奪われるのもつかの間、反射的に伏せた頭上を銃弾が駆け抜けた。即座に右手に握った銃で応戦、門の陰に潜んだ敵手が頭をひっこめた間にクリスたちが猛然と突撃する。

ここまでに何人倒してきたのか、もはや数えていない。きつと頼んでもいないのにギルベルトが勝手に数えていることだろう。なので気にすることなくオレたちは眼前の敵へと集中した。射撃で牽制し、突撃役のクリスが斬り殺し、アルが油断なく周囲を警戒して伏兵を確認し、ギルベルトが全体の指揮を執る。とても分かりやすい役割分担だ。

この四人で連携して戦うのはこれが初めてのはずなのだが、意外なほどすんなり協力が取れていた。突出して強く、また躊躇のないクリスを筆頭にその脇を固める戦い方はギルベルトという頭脳ブレインの登場で

いつそう冴え渡っている。

「これで全部か」

チン、と鞘を鳴らしながらクリスが刀剣を収めた。ギルベルトの計らいで彼の腰にはさらに一本の武器が増え、今や四本の刀剣を自在に操り抜刀しながら戦っている。その様はまるで四人の相手から同時に切り刻まれているかのように高速かつ正確無比なものである。

それに合わせてオレたちもいったん武器を収めた。クリスに比べればオレたちの武器は特に代わり映えもないが、別に不満は無い——実はオレもこつそり直刀と拳銃のスタイルも気に入っているのだ。

「みたいだな。随分と殺して回ったんじゃないのか、俺たちもよ」

「四人合わせれば軽く百は超えていよう。それだけの相手をしてなお五体満足で立っている、誇って良い成果だよ」

「二人頭で二十五人以上か……まったくそんな自覚は無かったけどな……」

黒い煙をあげて大炎上するベルリンの街並みを見上げながら、これまで遭遇してきたアンタルヤの傭兵たちを振り返る。誰も彼も出会い頭に倒して回る戦い方だったが、まさかそれほどまでに死骸を積み重ねていたとは。今更怖くなどならないが、どこか遠くに来てしまったような寂寥感を覚えてしまう。

旧暦から続く歴史ある街並みもこうして戦争の動乱に巻き込まれればひとたまりもない。最初に攻め込んだ時は火の手なんてちっとも無かったのに、いつの間にかここまで燃え広がってしまったのか。この地に根を下ろしている人たちからすれば堪ったものではないだろう。

「せめて、この戦いに報いるような結果を出したいものだな」

なんだかクリスみたいな事を呟いてしまい、らしくないなと恥ずかしくなって頭を掻いた。

オレはそこまで真面目になることも出来ない半端者だが、やっぱり奪ってしまったからには報いるだけの光が有れば良いなと思ってしまう。例えそれが誰に頼まれた訳でもなく、また自らが悪い訳ですらない勝手な想いだらうと、善いことがあつて欲しいと願うのは何も悪

いことではないだろう。

「——まったくもってその通りだよ、異論を挟む余地もない」

「クリス……」

ふり返って仰ぎ見た若き英雄の瞳は、今この時も覚悟と怒りを薪とくべて燃え輝いていた。自らが斬り伏せた敵兵たちも、このベルリン攻略戦で巻き込まれた無辜の人々の犠牲も、あらゆる全てを一身に背負って前に進むと言葉より雄弁に物語っているのだ。

「例え全てに報いることが出来ずとも、今このとき犠牲になった者たちを背負って進むことは可能だ。俺たちが倒してきた相手にも抱いた想いがあつたのだ、なればこそ彼らの無念を背負わずしてどうしても前に進めるといふのか」

「すべては、勝利をこの手に掴むため……か？」

「そうだ。勝利とはどこまでも重いのだ、踏み躪ってきた者たちの分まで勝利を積み重ねなければ、いつか負けた時にどう償うというのだ？ 故にこそ俺は負けられんし、いずれ必ずこの光景にすら報いると誓おう。女々しい言い訳など断じて不要だ」

「……………ああ」

どこまでも雄々しく。

どこまでも真つすぐで。

たった一つの意味を始点から微塵もブレず、曲がらず、貫けるからこの男はカッコいいのだ。

そして今、オレと同じ感想を抱いた男がもう一人いた。彼は震える身体を抱きとめるように腕を回し、狂喜とも思えるような笑みをその顔に張り付けている。

「くく、ハハハッ、ハハハハハッ……！ ああ、まったく、あなたはどこまで私を喜ばせてくれれば気が済むのだ！ その思想、その意志、どれをとつても素晴らしすぎる。生まれが劣悪ならそれに準じた才能しか持たない？ なんて下らない言い訳なのか、あなたを見ていよいよ私は確信したよ」

心の底から愉快でたまらないとばかりにひとしきり笑い声をあげ、ギルベルト・ハーヴェスは生まれて初めてと言わんばかりに盛大な喜

びを発露させていた。

普段の冷静さとは明らかに違う変貌ぶりに驚くが、それすら遮って炯眼の男は言葉を紡ぐ。

「折れず曲がらぬ意思さえあれば、才能など所詮は誤差なのだ。こうして戦場を駆けるあなた達を直に見てようやく確信できた、今までほんの少しでも疑いのあった自分が情けなくて死にたくなってしまっよ」

「……おーい？」

「改めて頼む、どうか私にその輝きを間近で見せてほしい。人は誰も〝頑張りさえすれば出来るのだ〟という証を知らしめて欲しいのだ」

こいつ大丈夫か？ といった具合のアルの問いかけなどお構いなし、それどころでない歓喜がギルベルトの明晰な頭脳を支配しているらしい。およそ戦場にすら似つかわしくない光景だが、どうにもそれを止める気にもなれないのは、本質的にオレもまた彼と同じ思想だからだろうか。

そしてまた、未来を目指して歩むことを止めない男の返答などただ一つに決まっている。

「無論だ、ハーヴェスよ。例えどのような困難があろうと、俺は決して歩みを止めるつもりはない。いつの日かこのアドラー帝国に光を齎すまで——そう、〝勝つ〟のは俺だ」

「なればこそ、どこまでもお供しよう。不肖な我が身ではあるが、どうかその先に役立ててほしい」

感極まったように頭を下げ、そして戻した時にはもう、若き少尉は常の薄ら笑いを顔に戻していた。

「であれば、このようなところでいつまでも留まってはられないな。英雄には英雄に相応しい舞台が必要だと、かつて告げた通りだ。存分にその力を振るってみせてくれ」

「……その様子じゃ、激戦区にアテがあるって感じだな。俺たちをそこに突っ込ませる訳だ」

「最短で行くにはそれが一番だろうさ。なに、大丈夫だ、君たちならば

絶対に乗り越えられる程度の死地でしかない。案ずる必要はないとも」

「なんて言われても安心できるはずがないけど……」

クリスも、ギルベルトもやる気なのだ。ならばオレとアルが乗り遅れるなどあり得ない。

何より彼は、意志の力を見せてくれと言ったのだ。ならば英雄の友として遅れる訳にはいかなかった。

「任せろ、望むだけ輝いてやるさ。そんでこのベルリンを生き残って、さらに土台を固めなきゃな」

やることなど単純明快。なら、迷う余地なんて最初から存在しないのである。

◇

アドラー帝国とアンタルヤ商業連合国によるベルリン攻防戦は、蓋を開ければアドラー帝国の圧勝で終わった。

中でも最大の戦果を挙げたのは言うまでもなく若き英雄クリストファー・ヴァルゼライドとその仲間たちだった。縦横無尽にベルリンの街を走り回り、自分から激戦区に飛び込んではあらゆる敵を薙ぎ払う。もはや一兵卒と呼ぶのすらおこがましい活躍を成し遂げたその戦果、実に数百にまで上るといふ。非現実的なまでの戦果はしかし、後になって回収された遺体の数から鑑みても決して誇張ではないと断言できる。

もはや認めるしかないだろう。この男は英雄であり、それに着いて行く仲間もまた英雄に近い者たちなのだ。この異常なまでの戦果にはさしもの帝国軍も報奨を渡さざるを得なかったのか、即座に彼らの階級は一つ上がることになる。

だが、その程度で満足できるはずもなし。彼らの本質は格下の立場からの下克上なれば、このようなところで停滞など無理な相談なのだ。さらにさらにと戦果を積み上げ——月日は、飛ぶように過ぎていくのだった。

### 第三章 胎動する星々／Constellations

#### Chapter 28 拡大する戦火／Four Years Ago

新西暦一〇一六年——軍事帝国アドラーは破竹の勢いで領土を広げていた。

激戦区の東部戦線をさらに東へ東へと押し上げ、ついにアンタルヤの保有する一大都市であるベルリンまで手中に収めたのが新西暦一〇一二年のことである。これには商人とその傭兵たちも堪らずベルリン一帯を放棄し、アドラーは東部領土をより広げる結果となった。このベルリン攻略戦において若き英雄クリストファー・ヴァルゼライドとその仲間たちが多大な戦果を挙げたことなど、今更語るまでもないだろう。

あれから既に四年の歳月が経っていた。帝国はベルリンからさらに東へ、そして南へと進軍を続け、今や旧・チェコ領に位置するプラーガまでもう少しという位置にまで軍を届かせるに至っている。これまでの遅々として進まぬ東部戦線の膠着状態から考えれば、僅か数年の間にここまで状況が動いたのは破格の事態と呼んでいい。

もはや文字通りの無敵もかくやな帝国に対し、いよいよ重い腰を上げたのはこれまで二国の戦争に不介入を貫いていた聖教国——旧・ブリテン領に国土を構えるカンタベリーだ。エルドランド・ジバンク 極東黄金教を掲げるこの宗教国家にとって、アドラーの進撃先となるプラーガは大きな意味を持つている。それ故に理由もまた明白だった。

というのもこのプラーガ、先の大破壊カタストロフの影響によって本来あり得ない建造物が鎮座しているのだ。それこそは旧暦アマテラスにおける大和の政を決めたもの、国会議事堂を置いて他に無い。第二太陽の先に消えたとも、大破壊の震源地として消し飛んだとも定かでない日本国だが、その最重要遺物があるとなればカンタベリーが黙っているはずがない。

よってアンタルヤ商業連合国の支配するプラーガの一角、国会議事

堂が鎮座する一帯は聖遺庭園リグロワイ・サデーと呼称される聖地に認定されており、古都で唯一カンタベリー聖教国の軍が幅を利かせている土地でもあるのだ。旧暦の特級遺物ともなれば、この地に巡礼に訪れる信者もそれなり以上に存在した。

そこに、軍事帝国アドラーの矛先が凄まじい勢いで迫っている——これにはカンタベリーもアンタルヤも頭を抱えた。どちらもプラーガという都市を蹂躪されてしまえば困るのだ。何としても食い止めたいし、そのために一時的に共闘してでも帝国の武威を跳ね返そうとするのは自然の成り行きだろう。

こうして、古都プラーガに鎮座する国会議事堂を皮切りとしてアンタルヤ並びにカンタベリーは帝国に対する共同戦線を敷き、アドラーも堪らず進軍速度を緩める事態へとなったのである。

だが……たとえ軍隊自体が足を止める運びになろうと、この男が無為に立ち止まることだけは天地がひっくり返ろうとあり得はしないのだ。

◇

アンタルヤとカンタベリーが臨時にせよ手を組んだ以上、アドラーも必然的に苦戦を強いられることになる。各地で勃発する局地戦において帝国は敗走、ないし痛み分けの結果となることが頻発し、ベルリン陥落前後のような進軍を出来ないでいた。

しかし、数多ある戦線の中でも例外が一つだけ存在する。思うように勝利を得られないアドラー帝国の最前線に立ち、唯一にして確実な勝利を齎すのは——若き英雄、光の徒に他ならない。

そして彼は、彼女らは、今日もまた戦い続けている。

此度の戦場はベルリンより南東に位置する荒れ野。かつては木々が生い茂り、美しい川も流れていた地であったのだろうが、今や戦場と化したことで灰色の岩地と無残に折れた木々ばかりが主張する物悲しい景色となっていた。

戦車が闊歩し、少なくとも数の銃弾が飛び交い、怒号と爆発音が鼓膜と脳を揺さぶる狂乱の戦場を駆け抜けるのは四人の影だ。誰が見ても無謀と分かるような無茶な突撃はしかし、味方からは歓迎されて



敵からは畏怖の視線で受け止められる。

何故なら、それだけの実績が彼らにはあるのだから。

「無茶すんじゃねえぞクリス！」

「気遣いは無用だ、このまま押し通る！」

物陰に隠れたアルバートの警告を不要と断じ、脇目も振らず駆け抜けるヴァルゼライドの視線の先には、歩兵たちに守られた戦車の姿がある。自分たちに近づいてくる英雄の足音かいぶつに怯え、歩兵たちが狂ったように銃弾を浴びせかけるが、まるで冗談のように鉛玉は当たらない。むしろ弾の方から避けているかのよう。

さらに彼は腰に装備された七本もの刀剣を煌かせ、その刃で冗談のように銃弾を弾いて止まらない。故に回避動作すら最小限、最短距離をただただ愚直に駆け抜ける様は敵からすれば恐怖の象徴以外にあり得ないだろう。

「それでこそ我らが英雄だ！ 私も共に往かせてもらおう！」

「男ばっかで盛り上がるな、オレだっけ行くぞ！」

予定調和のように無傷で弾雨を潜り抜け、ついに歩兵を斬り倒し始めたヴァルゼライドの背中を見てさらに奮い立つのが二人。彼に遅れること一拍、即座に駆けだしていたギルベルトとマルガレーテもさらに奮い立って彼の背中を追いかけた。散発的に向けられる銃弾など、数々の戦線を乗り越えた今ではもはや物の数ではない。英雄の行いを自分なりに咀嚼して、見切り躲すことを可能としていた。

「ったく、結局こうなるのかよ……！ ちよつとは自分の身も心配しろってんだ！」

そんな三人に対して呆れるような、けれども不思議と愉快そうに声を荒げ、アルバートも戦線に加わった。この中では彼が一番真つ当で常識的な思考を兼ね備えてはいるが、それでも歴戦の兵士であることは誰にも否定できない。同時に、マルガレーテがそうであるように親友の雄姿を見て憧れないはずもないのだ。

とはいえ、アルバートの出番は今やそう多くない。歩兵たちはあらかた切り伏せられた後であり、ヴァルゼライドは残った戦車を単独で潰さんとばかりに猛っている。数年前の時点で戦車を潰すことを可

能としていた彼だが、もはや洗練された域で“手慣れたもの”となっている。

だがそれ以上に大きいのは、幼馴染の三人に新たな仲間が増えたことだろう。

残っている歩兵たちの相手をしつつ会話を交わす二者の声が届いてくる。油断はしていないが、同時に余裕を感じさせる振る舞い。着々と戦車攻略を成すヴァルゼライドを片目にマルガレーテが呆れたような声音を漏らした。

「戦車の効率的な壊し方、か……なあ、どこでそんな知識を入手してくるんだよ？　そういうのも学校で習うものなのか？」

「まさか、私はただ式に数値を代入しているだけさ。例え戦車だろうと材質や各部パーツによつて強度は異なる、後はそこに適切な衝撃を加えれば簡単に壊せるというだけの話さ。それさえ理解すれば、刀剣で履帯を止めるのすらスマートに可能だよ」

薄ら笑いを浮かべて語る表情に戸惑いも嘘も欠片すら存在しえない。ギルベルトは真実『ヴァルゼライドなら必ず出来る』と信じて知識を授け、そして実際に実現させている姿を目撃しているのだ。そのサポートは単なる力よりもなお強大無比とすら呼べるだろう。

本来ならこの四年の間に功績が認められて“少尉”から“大尉”の階級まで昇進しているギルベルト・ハーヴェスが、こうして前線に立つこと自体が道理に合わないと言えはその通り。後方で部下たちに指示を出している方がよほど立場にあった振る舞いだ。

けれど、世間に合わせた常識なんて知ったことではない。指揮官が前線に出てはいけない道理など無いのだ。ならばこそ、彼にとつては珠玉唯一たる英雄の助けになることが本望であり、現に彼の助けを得たヴァルゼライドはさらなる戦果を重ね続けているのだから是非も無い。簡素な連絡しか出来ないような通信機器を駆使して他の者への指示すらの確に出せるとなれば文句などつけようはずもなしだ。

「ま、大前提からしてクリスじゃないと出来ないとは思うけど……！」

もはや握り慣れた直刀を振るしつつ、彼女は視線を戦車の方へと

やって見せる。すぐ傍らでは履帯をただの刀剣によって破壊された戦車が擱座しており、上部のハッチから侵入したヴァルゼライドが次々とその刃で塵殺している音だけが聞こえてくる。こんな無理無茶無謀、いくら効率的な戦車の壊し方を知っていても実行可能なのは彼くらいだろう。

気合と根性さえあれば戦車含めた敵兵の一団すらまとめて葬れるなどと、そんなことは現実的にあり得ないのだ。あらゆる理由で不可能だと分かってしまうのに、それでもヴァルゼライドは可能としてしまう。そんな不可能を可能とする姿に二人は心惹かれたから、こうして共に前線を駆けている。その後ろ姿が理屈抜きにどこまでもカッコいいから、まるで熱に浮かされたかのようにその足跡に続きたくて仕方がなくなる。

かくしてたった四人で二十は超える敵兵士と、戦車一台を散歩でもするかのように壊滅させてしまった四人であるが、この程度の戦果で英雄たる男は満足などするはずもない。その手に握った刀剣が全て折れるまで、決して歩みを止めることなどないのだから。

「これでこの辺りは片付いたか。となれば——」

「次は向こうの方だろうな。指示は出しているが、苦戦しているようだ。英雄の助けを求めているようだ」

「ならば論ずる余地はない。すぐにでも向かうぞ」

「おいおい戦車潰してすぐに連戦か？ 勘弁してくれっつんだまったくよ……」

光の奴隷は止まらない。往けるならばどこまでも突き進んで憚らず、妥協とか諦めといった軟弱な言葉なんて生まれる前から持ち合わせてなどいないのだ。故にこそ、鮮烈なまでに輝く意志の力は個人の方で劇的なまでに戦場すら変えてしまう結果を齎す。いいや、望むまでもなく齎してしまうのだ。

かくして休憩は終わりとはかりに刀剣の血糊を払い、次の戦場を目指してひた走る。誰も彼もが止まらないし止まらない。ここまで来れば仕方ないとばかりにアルバートもまた走り出す。

——彼らの紡ぐ英雄譚は、新たなステージへと突入を始めていた。

◇

英雄とは、多数の人間を殺した者に贈られる称号であるといつか聞いた覚えがある。その言葉を額面通りに受け取ればオレやアルもすっかり英雄の仲間入りでもしているのだろうか……本物がすぐ隣にいるとなれば口が裂けても英雄などと名乗れるはずもない。

軍人となってから早五年以上は経つのだろうか。振り返ってみればあつという間だが、特筆すべきことは悲しいくらい何も無い。戦場を巡り、敵を殺し、自分を高めていくだけの日々。いつ死ぬかも分からないような激戦区に放り込まれ続ける毎日。心は擦り減つて当然かもしれない。なのにこうしてマトモな思考をする余地が存在する。辺り、オレもすっかりおかしな方へと足を踏み出しているのかもしれない。なかった。

今回の戦いも順当にアドラー帝国の勝利で終わった。当然のことだろう、こちらにはクリスという一騎当千すら生温い男が居るのだから。彼が存在する以上は帝国の勝利は微塵も揺るがず、勝者たるアドラーは戦場の後始末をすべくこの地に留まっている真つ最中だ。オレも今は休憩中だが、いつ新たに呼び出しがかかるやら。

今やオレたちもすっかり階級が上がってしまい、身分は既に一等兵から軍曹にまでなっている。なので下に兵を持っていて当然なのだろうが、生憎とそんなに多くは回ってこない。

たぶん、クリストファー・ヴァルゼライドという“英雄”が多くの部下まで手に入れることを上は恐れたのだろう。だから階級は上がったというのに、戦場での役回りは変わらず一兵卒と同じようなものである。

「はあ……さすがに疲れたな」

眩きながらそこらの岩に腰かけた。爆発によつて転がったそれは腰かけるのにちょうど良く、走り続けて疲労の溜まった足を休めるのに適していた。周囲を見渡せばアルが新兵たちに簡単な指示を出しながら働いている姿が見える。オレもさっきまでは混じっていたのだが、彼の厚意で休憩させられてしまったのだ。

少しばかり足が届かないのでぶらぶらさせつつ、二つ結びにした茶

髪を結び直していると、すぐ隣に立役者たるクリスが腰かけた。

「よっ、お疲れさま。今日も獅子奮迅の活躍だったな、さすがだよ」

「この程度は出来ねば帝国に勝利を与えるなど出来はしまい。いいや、更にアドラーの犠牲を少なくするべく精進していかなければな」  
「……つたく、褒めてるんだからもう少しは喜べよな。素直に笑ってみたらどうだ？」

「生憎、笑うなどとは無縁な身の上でな。悪を許せぬ憤怒ばかり抱くこの破綻者が、人並みに笑うことすらおこがましいだろう」

「そんなこと無いさ。お前が幸せそうなら嬉しい奴だつて隣にいるんだぞ？」

冗談めかして伝えてみるが、この頑固者は領けないとばかりに首を振った。オレからすれば何処までも格好良くて憧れて、目指すべき背中であつてくれるのに。これ程までに自己評価が低いのがどうしても悲しいし、それを否定させられない自分への不甲斐なさばかりが募って仕方ない。

いつか必ず、彼に並び立ちたい。そして自らの行いを笑顔で肯定して欲しい。そんな気持ちを抱きながら、話題をこの戦場跡地の方へと動かした。

「……それにしても、日に日にアンタルヤもカンタベリーも勢いを増してる気がするな。それだけプラーガへの進軍は抑えたいってことかね？」

「だろうな。プラーガは商業国にとつてはベルリンに並ぶ流通の要だ。これすら失つてしまえば損失は計り知れず、また逆説的に帝国が手に入れた時のメリットも凄まじいのは目に見えている。なんとしても勝ち得なければならん」

「全ては帝国の勝利のために、決めたからこそ成すべきだ——そういう事だろ？」

「その通りだ。どれだけ難易度が高かろうと、さりとて足を止めて良い理由にはなりえない。決めたならば、成し遂げるのみ」

先ほどとは一転して燃え滾る意志の込められた言葉に、オレは無言で頷いた。これこそがクリスの強さなのだから。誰にも折ることの

出来ない鋼の意思を以ってして、すべての無理難題を乗り越え踏破し打倒してしまう。

そんな鋼の英雄は休憩も終わりとはかりに立ち上がると、スタスタと歩き出す。オレも遅れないように腰かけた岩から降りるとその後を追った。

向かう先にあるのはこの戦場に用意された仮設陣営の本部だ。上官たちがこぞって詰めているそこにはもちろんギルベルトもいるだろう。むしろ本来ならば後方で指示を出す方が自然なのだから。

「どうした？」

「一つ、気にかかることがあってな。ハーヴェスなら何か知っているだろうと考えた」

「気になること？ ……いや、それってまさか」

先の戦いでクリスが気になるような事柄など一つしかない。実はオレもちよこつと気になってはいたのだが、戦闘も終わって気が抜けたのかすっかり頭から抜け落ちてしまっていた。

「おそらくだが、今回の敵兵は麻薬に手を出しているだろう。これまでより明らかに斬った際の恐怖や痛みを感じにくい体質が有ったように思える」

「薬キメて身体感覚が鈍ってるってことか……ニルヴァーナも随分と派手に儲けてるようで」

「忌々しい限りだがな。あの“血塗れの雛罌粟”<sup>ひなげし</sup>とやらも、この付近の戦いでは散発的に見受けられた。末端まで麻薬が出回っている事といい、存外にニルヴァーナの抱える麻薬製造の本拠地も近いのかもしれない」

「で、その情報が何か出てないかギルベルトに聞こうって訳か。確かにアイツなら情報ゲットしてそうだもんな……」

アンタルヤとも繋がりとされるとされる巨大麻薬組織ニルヴァーナは、オレたちが東部戦線に配属された五年前から今日まで変わらず悪の巣窟として蔓延り続けている。これまではまったく本拠地が掴めず麻薬をひたすら横流しされ続け、しかも用心棒たる傭兵組織“血塗れの雛罌粟”の存在もあって深入りは不可能という有様だったのだ。

かつて、まだ駆け出しの新兵だった頃を思い出す。あの時に遭遇したクラックという名の大剣使いはまだ現役なのだろうか。元気にしててくれとは欠片も思わないが、初めて出会った格の違う強敵は強く印象に残っていた。

あれ以降、あの男ほどの強敵と垣間見えることはついぞ無かつたし、今のオレたちは数年前とは段違いに成長している自信はある。それでも、仮に彼ともう一度遭遇したとして勝てるかどうか。今になってもなお弱気になりかけるくらいには鮮烈な強さだった。

「今は進軍も停滞気味だが、これまでより帝国の版図がより東へ進んでいるのは事実だ。現状ならば日陰に隠れ潜んだ唾棄すべき者どもを一掃する機会があるやもしれん」

「で、そういうのを見抜く力はアイツが図抜けてる訳だ……もしそれで本当に本拠地が割れたらどうするんだ？」

「無論、攻め入るのみだ。民に墮落と腐敗を蔓延させて甘い汁だけを貪る輩、この地上に一秒たりとて生かしておく理由などない」

一つの戦いが終わったばかりだというのにこの男は、悪が存在すると理解するが早いか放たれた矢のように止まらない。目立った負傷は無くとも疲労はあるだろうに、躊躇いなく言い切れる強さが羨ましい。

などと話している内に、仮設陣営の本部前まで辿り着いた。そこには既にギルベルトがああ薄ら笑いを浮かべてオレたちを待つかのよう立っていた。

「ああ、待っていたよ我らが英雄。ニルヴァーナの件を訊ねに来たと思うが、違うかね？」

「お前には俺の行動原理など既にお見通しだったという訳か」

「気を悪くしないでくれ。だが、あなたほどの男ならば滅ぼすべき悪を前にして、ただ坐して待つなど不可能だろうと信じていたまでさ」

「は……オレはもう何も言わないからな、何も」

気持ち悪い程の先読みに苦言を呈すのも飽きたので、速やかに本題へと入ることにする。

「で、オレたちを待ってたってことはだ。もしかしてだけど——」

「その通りだとも」

鷹揚に頷いたギルベルトはオレの言葉を引き継いで、

「ニルヴァーナの本拠地がとうとう突き止められた。ここよりそう遠くない場所にあるという」

至極あつさりとその情報を渡してきたのだった。

これまでまるで尻尾を出さなかった巨大麻薬組織の本拠地が割れた理由はどうでも良い。ただ重要なのは、“悪の敵”が純然たる悪の塊を裁く機会を得たというその一点である。

「——詳細な情報を頼む、ハーヴェス。もはや一刻の猶予とてない、必ずこの手で滅ぼしてみせよう」

「それでこそだ、英雄よ」

この日、まるで散歩に行くことが決まったかのように気安い調子で、帝国を悩ませ続けた悪徳の終焉が決定づけられた。



## Chapter 29 怠惰と麻薬と英雄と / Fafnir Birth

——まずは結論から告げてしまおう。“その男”にとって成功という蜜は、同時に自らを滅ぼす毒でもあった。

別に彼は天才に生まれついた訳ではないが、さりとて無能でもなかった。出自が劣等という訳ではなく、家が貧しかった訳でもない。それなりに努力して頑張ればそこその結果は出せるだろうし、真つ当な幸せを得ることだって当然可能だったはず。

しかし彼は、努力なんて下らないと一蹴してしまった。真面目に生きたところで仕方ない、もつと楽に生きられる道があるならどうしてそれを選ばない？ 本気で生きてても辛いだけ、怠惰に生きられるならそれが一番ではないかと。

悲しいかな、その理屈も一面では間違つてはいない。努力しても成果が出るかは分からないから、不安になるのも仕方ないのだ。努力すればそれに見合った報酬が出るなんて甘い考え、意志力さえあれば何でも叶うなど夢物語にすぎない。むしろ徒労に終わる方が一般的だろう。正しいことはどうしようもなく痛い事で、只人にとってこれは動かせない事実である。

故に、彼の運命を決定的に変えてしまったのは。麻薬という世の日に陰に分類されるものに手を出してしまい、しかもそれが“成功してしまった”ことだろう。

新西暦一〇一二年のフランクフルトにて。帝国の誇る若き英雄たちを前にどうにか逃げだしてみせた手腕は、巨大麻薬組織ニルヴァーナをして一定の評価を下した。彼は少しだけ上の立場へと登り詰め、下つ端としては上等な類の分け前に預かることとなる。危険な橋を渡つてまでのし上がるつもりは無かったのに、これこそ降つてわいた幸運と言えよう。

しかし皮肉にもこれによって小物ゆえの謙虚さすら忘れた彼は、更なる怠惰と傲慢の沼に溺れる羽目になった。仮にも敵の襲撃から逃

げ出した周到さは消え失せ、自分の失敗は他人へ押し付ける癖に他者の成功には飛びつき分け前に預かろうとする。悪党の中でも一等等うしようもない屑と呼んで差し支えないだろう。

それでも、成功によって手に入れた蜜の味を忘れられるはずもなく、よつて彼は当たり前のように組織からも切り捨てられる運命となるのだが……煌びやかな輝きしか目に入らない本人は、それに気が付きもしないのだ。

だが敢えて断言しよう。この時点での彼は、何処にでもいる小悪党の一人だった。

小物で強欲で謙虚さの欠片も無いが、まだ只人の範疇だ。人としての箍は何一つとして外れていない。探せばそこら中にいるだろう屑の一人として生を終えたことだろう。

よつてこれはどのような運命の悪戯なのか。

何処にでもいるはずの取るに足らない蜥蜴風情が、まさか邪竜にまで成り上がるとは——この時はまだ、誰も知らなかったのだ。

◇

「おい待てクリス、本当に行くのか？　このままニルヴァーナの本拠地まで、今すぐに？」

「当然だ。場所が分かり、討伐の許可も降り、この身体は往けると言っている。ならば立ち止まる理由など欠片もないだろう」

早足で歩くクリスの後ろをオレは小走りで追いかけていく。数年の間にさらに開いた身長差が恨めしいが、とにかく置いていかれないように半歩後ろを意地でも付いていった。

ほんの数時間前には戦争の渦中で大活躍を果たし、さらにほんの十分前にギルベルトからニルヴァーナの本拠地の情報入手したばかりだというのに、この男は躊躇など微塵も見せようとしない。先ほどオレに語ってみせた言葉を実行し、あらゆる墮落の根本を殲滅すべく心が猛り続けていた。まるで冗談のように止まることを知らない姿はブレーキのない暴走特急のごとくだ。

さらに言えば、軍からも即座に許可が出たことも後押ししてるだろう。なにせアドラー帝国にとつても麻薬流通は頭の痛い問題であり、

可能な限りすぐにも取り除きたい癌なのだ。元より血眼になって流通ルートや製造元を探していたから軍の腰も例外的に軽かった。

未だに戦場での後始末や怪我の治療に専念している大多数の兵士たちを横目にクリスは歩いていく。そんな彼の堂々とした姿に視線が集まるがお構いなしである。

「だけど今の状況じゃほとんど——いや、たぶん誰もついて来れないぞ。なにせまだ戦後すぐだ、怪我した奴や後始末に走り回ってる方が大半なんだからな」

「理解している。だがレーテよ、敢えて問うが」

こちらに視線を合わせたクリスの瞳は、まるで太陽の様に熱く燃え盛っていて、

「たかが俺一人しかいないという程度の理由で、どうして尻尾を巻いて悪を見逃せるというのだ？ 奴らは無辜の民の幸せを踏み躪る塵屑どもだ。先も話したが、一秒たりとてこの世に生かしておく理由がない」

「でもあの『血塗れの雛罌粟』の奴らとか、他にも私兵の類もいるはずだぞ？ 裏でアンタルヤの十氏族が後ろ盾になってる話も聞くん……いくらなんでも無茶だ」

「委細承知の上だ。それでも、俺はこの足を止められん。愚か者だという自覚はある、お前の言う事はもっともだと分かってる。だが

——悪が相手である限り、『勝つ』のは俺だ」

眩暈がする。その圧倒的な熱量に。

鼓動が高鳴る。その雄々しき宣言に。

オレだって本当は分かっている。どれだけ理屈を並べたところでクリスが止まる訳がない事を。そうでなければ憧れなかった。そうでなければ親友になどなれなかった。それでも危険性をつらつら並べてしまうのは、彼の事が心配だから。

「けどそんな言葉ばかりの説得などより、もっと先に言う事があるはずだ。

「分かった、それなら勝手にしろ。だけど代わりにオレのことも連れていけ」

「……自分の言ってることの意味が分かっているのか？ 先ほど危険性を述べたのはお前のはずだ、俺とてむぎむぎ死地に友を連れていく趣味はない」

「それでもだ。前にも言ったろ、オレはお前の友達なんだから一人で突き進むのを黙って見送れるほど冷血にはなりきれない」

敵組織の本拠地に乗り込もうというのだ。普通に考えれば死ぬしかない。むしろ勝利してしまう方がおかしいだろう、常識的に考えて。たとえ英雄といえど無茶が過ぎる。

でも、クリストファー・ヴァルゼライドがいる限り、きつと勝利を手に入れることが出来るとオレは信じている。だから死地に飛び込むことにだって迷いはない。もしクリスが首を縦に振らなかつたと勝手についていこうとするだろう、あのとキスラムでそうしたように。

「……まったく、お前というヤツはいつもそうだ。こんな男を信じてどこまで突き進むもうとする。その強情さ、果たして誰に似たのやら」  
「さて、誰だろうな。きつと自分の決めたことを意地でも曲げないカツコいい奴さ」

「そうか」

彼にしては珍しく曖昧に頷いた。今も自分のことを『そのような賞賛を受けるに値しない』とでも卑下しているのだろう。もう慣れつこだし、是が非でも認めさせてやりたい。自分が凄い奴なのだ、何よりも本人が認めてあげて欲しいから。

そうこうしているうちに、オレたち二人は軍用車の下へと辿り着いていた。整備士にも既に話を通してあるのか、ごく自然に厳つい車の受け渡しは完了する。オレが運転席で、クリスが助手席だ。彼よりオレの方が運転がちよっぴり得意なのだ。

「クリスは負けず嫌いだからな……」

「なんだ、レーテ？」

「いいや、なんでもない」

含み笑いをしながら鍵を入れ込めば、エンジンがかかり振動がシートを伝わってやってくる。

あとはハンドルを握りアクセルを踏みこめば発進というところで、整備士がエンジン音に負けない大声でこちらへと叫んだのだ。

「アドラー帝国の誇る若き英雄、クリストファー・ヴァルゼライド軍曹！ あなたがあらゆる不条理を薙ぎ払い、あのニルヴァーナを肅清してくれることを祈ってます！」

「任せておけ。アドラー帝国のため、貴君らのため、必ずや腐敗を齎す墮落の都を消し去ってみせると誓おう」

「それでこそ、我らが英雄というものです。お力添えすら出来ず齒痒いばかりであります……お二人とも、どうかご武運を！」

ピシツとした敬礼にこちらも敬礼を以って返した。同時に今度こそ軍用車を発進させて帝国軍の前線基地から一挙に離れていく。

目指す先は東部戦線のさらに先。ニルヴァーナの拠点は押し上げられた国境線のちょうど境に存在するらしい。おおよその目安が記された地図とにらめっこしながら車を軽快に走らせていく。

風を切って駆動する車の感触が心地よい。隣に座るクリスをチラリと見つめてから、前に向き直って笑ってみる。

「しっかしまあ、軍も本当に二人だけで壊滅させられるなんて思っているのかね？」

「思っているはずも無いだろう。万が一成功すればそれでよし、失敗したところで下賤な生まれの成り上がりが一人消えていくだけだ」

「……一人じゃなくて二人だけだな。死ぬときはたぶんオレも一緒だぞ」

「そうかもしれないな。故にこそ、俺は決して負けられん」

気が付けば太陽はゆっくりと沈み、逢魔が時へと差し掛かっている。魔性の生まれいづるとされる時間帯だが、鮮やかなオレンジが目眩しくて美しい。

その先に待ち受ける魔性の都を遠くに見つめて——クリスは鋭い眼光を投げかけていたのだ。

◇

アドラー東部にかけて広く麻薬を製造し、売り捌いていた悪徳の根源ニルヴァーナ。

その本拠地は今、いつそ惨めに思えるほどに大混乱と大炎上に見舞われていた。

城塞にも似た施設の中を怒号と悲鳴が駆けまわる。最新鋭の兵器たちが惜しみなく投入され、この騒ぎを引き起こした下手人相手に容赦も呵責もなく解き放たれて憚らない。銃火や砲弾の雨あられば轟音と共に壁を砕き、地面を抉ってその破壊力を見せつける。

なのに——なのに、たった二人の狼藉者には掠りもしないのはどういうことだろうか。

無謀にもニルヴァーナへと殴り込みをかけてきたのは、帝国軍人が二人だけ。片や七刀を携えた金髪の青年で、片や直刀と拳銃を構えた茶髪の美女。その特徴的な容姿は違法組織に身を置く者をしてよく知っている。

すなわち、アドラー帝国の英雄ことクリストファー・ヴァルゼライド、そして彼に次ぐ者として評されるマルガレーテ・ブラウンの二人だ。苛烈な戦場でなお光輝く英雄たち、その断罪の刃がついにここまですべて来た。あまりにも無謀で無茶で現実の見えていない殴り込みも、この二者ならばやるだろうという奇妙な納得すら生まれてしまう。

だからこの不条理とて当然の帰結だろう。燦然と煌く英雄たちが、悪の手先の一撃に屈することなどあり得ない。

まるで物語から抜け出してきたご都合主義の権化が如く、笑えるくらいに銃弾も砲弾も当たらない。たった二人と侮った者から逆に容易く斬り伏せられ、悪の敵によって血だまりへと沈められていくのだ。

どこまでもどこまでも圧倒的な英雄譚<sup>サーガ</sup>が紡がれていく。卑しき悪がその輝きに触れる事すら許さないとばかりに突き進む。特にヴァルゼライドはすさまじい。マルガレーテの前を駆け抜け、どのような窮地に晒されようと覚醒して対抗策を生み出しては切り抜け斬り伏せてしまうのだから。

無数の銃弾に囲まれたなら、最低限のみ刀剣で叩き落して突破する。

爆破が起きれば瓦礫を投げつけ相殺する。

人数差で囲まれようがお構いなし、鍛え上げた七刀の抜刀術はあたかもヴァルゼライドが七人に分身したかのように敵手を切り刻む。

完璧、最強、無敵、絶対——！　まるで男が抱く稚拙な夢がそのまま形を取ったかのようだ。いっそ愉快で痛烈な進軍は一切の躊躇も停滞もなく麻薬の園を蹂躪して浄滅せしめる。

「……おい、クリス」

「ああ、分かっている」

だが、ついに快進撃を続ける二人の足が止まった。片手間に組織の者を撃ち殺したマルガレーテが足を止め、ヴァルゼライドもまた油断なく前方を見抜く。炎と爆発の背景に彩られて立っているのは、大剣を携えた巨躯の男だ。

その男——クラックが一步前に出た。ヴァルゼライドもまた前に進み出る。数年振りの再会は突然で、しかし敵対しているからには容赦も油断もありはしない。言葉を交わすことすらなく、互いに刀剣を抜き放って対峙した。

「レーテ、お前は先に行け」

「……いいのか？　こいつはあの時の——」

命からがら離脱した時の記憶をマルガレーテは今も鮮烈に覚えている。三人でかかってなお勝てず、ヴァルゼライドが覚醒を起こしてなお勝てなかった途轍もない相手だ。あれ以来数年にわたって戦場を駆け抜けたが、彼ほどの手練れにはついで出会うこともなかった。

それくらい格の違う傭兵で、今だって彼女一人では勝てるか分からない。だというのにヴァルゼライドは臆することなくさらに一步踏み込んだ。

「構わん、この男は俺が片付ける。お前は先に他の奴らを始末しろ」

あくまでも譲らない態度。一度は実質的に敗北したからこそ、今度こそ“勝つ”のは俺だとばかりに意思は猛っている。

その熱量を感じ取ったマルガレーテも短く嘆息してから引き下がった。こういう時、何を言っても無駄であると知っている。

「……分かったよ、クリスに任せる。でも気を付けてくれよ、お前が無

茶をやって傷ついたりするのなんて嫌だからな」

「善処はしよう。だがあまり期待はしないことだな」

もはや互いに真正面しか見えていない。駆けだしたマルガレーテすら意識の外にあり、武器を構えた両者だけに集中する。

極限の集中状態の中でふと、クラックが小さく言葉を漏らした。侘びたような笑みも一緒だ。

「見違えたな、アドラーの若き英雄よ。かつて戦った時とは大違いだ」  
「お前に負けてから、お前に勝つことだけを目指して剣を振るってきた。二度目はない、今度こそ勝つのは俺だ」

「面白い、やってみろ」

——二人には奇妙な予感があった。

この戦い、長くは続かない。いやむしろ、最初の一撃ですべてが終わる。

ヴァルゼライドの戦い方は抜刀による素早いもので、対するクラックは剛力によって大剣を叩きつけるように振るうもの。かつては技量の差から後者が圧倒的な有利を維持していたが、戦場で莫大な経験値を獲得した英雄を前に同じアドバンテージがあるなど思えない。

だから結論、この戦いは一度で決まる。最初の抜刀術をクラックが防げれば、その後も彼が押すだろう。逆に防げなければ速さに追いつけないことの証明で、ヴァルゼライドが勝つものだから。

ジリジリと距離が縮まる。

爆炎と銃声が遠くから聞こえるのすら気にならない。

瓦礫が落ち、音が鳴る。それを合図とばかりに両者は同時に地を蹴った。

◇ 自分が生き残れたのは、ただの偶然だった。

英雄の刃が悪を見過ぎすなどあり得ない。なのにこうして重傷を負いながらもどうにか生きていられるのは、ひとえに他の雑多な者たちとまとめて斬り伏せられたから。有象無象の草木を刈るが如くに倒されたのだ、その扱いには屈辱どころか奇妙な嗤いすら覚えてしま



だってそうだろう。彼と彼女に比べて、自らはいったいこれまで何をしていたのだ。

あの男は——クリストファー・ヴァルゼライドは本気で怒っている。本気で挑んでいるし、全力を出して勝利へ勝利へと突き進んでいるのだ。いつそ愚直なまでに限界を超え続け、悪を前に敗れるなどあり得ないと真顔で宣して実行しているのだから。自分の全体重を懸けて戦う男の重さ、そこらの雑多な者ごときでは比較するにも値しない。

あの女——マルガレーテ・ブラウンもそうだ。ヴァルゼライドに比べれば天に輝く太陽と月のように差はあるが、彼女もまた本気であることに変わりない。それが証拠に見るがいい、只人ならば次の瞬間に死んで然るべき銃火の中を生きているのだ。だからああして英雄の後ろについていくことが許されているのだと強く分かってしまうから。

故にこそ、昨日までの自分に燃える怒りが止まらない。本気でやつても報われない？ 努力が結果を出さなんて夢物語も良いところ？

なんだそれは、どこまでふざけた理屈だったのだ。

もしその言葉を口にするならば、あらゆる努力を本気でこなし、結果を追い求めてもなお駄目だった時だろう。少なくとも金でも、女でも、俗的なことでも未来だろうと、何もかもに不真面目に生きていた自分が吐いて良い言葉では断じてない。訳知り顔で努力をバカにする資格なんて自分には欠片も無いのだ。

理解した、頑張れば人は報われると。

肌で感じた、本気を出せば人はどこまでも限界を超えられると。

そのかつてない実例が、こうして目の前で英雄譚を紡いでいるのだ。あまりの威光に魂が揺さぶられ、比べて矮小な我が身への羞恥に自らを呪い殺したくなってしまふほど。かつてフランクフルトで出会った時にどうして気が付かなかったのだろう。無駄にしてきた四年間が途方もなく大きく感じられる。

しかし駄目だ、ここで自死など選べるはずもない。

英雄と、その介添えを許された戦乙女。この二人の視界の外で死ぬ

なんて、もはや絶対にありえないのだから。

「待て、待ってくれ……！ 俺を見てくれ……！ 不死身の英雄、  
戦乙女……！ 俺を置いていかないでくれ」

自らの血に這いずりながら手を伸ばす。けれど、その手は虚しく届かない。

炎と爆音の先へと消えていく両者の視線は、既にその先に立つ偉丈夫へと向けられていた。知っているとも、あの男はニルヴァーナの雇った“血塗れの雛嚳粟”のメンバーの中でも最強格の男である。確かクラックと言っただろうか、小悪党だった自分と比べて如何に輝いているか、今ならよく分かる。

だから、彼らの視線がクラックに向くのは当然なのだ。自分は努力してないけど、彼は実力者になる程の努力を積んでいるから。汚泥に塗れた雑草よりも、力強い花の方が視線を引くに決まっている。

「お前なら……勝つ、よな。そうだろう、不死身の英雄……!?!」

この輝きに目を焼かれても構わない。一秒一瞬でも長く自らを変えてくれた英雄の光を記憶に刻み込みたいのだ。

もはや善悪や敵味方の所在すら忘れている。本当はクラックが勝たなければ状況は絶望的になるだけのハズなのに、心は笑えるくらい一途にヴァルゼライドを応援してしまっている。でも、仕方ないのだ。人生で初めて見た至高の輝きを前にして、『地に墜ちて敗北してほしい』などどうして願えようか。

ヒーローに憧れる少年のように、アイドルに恋する乙女のように、英雄の勝利を祈って対決の行く末を見届ける。敗亡ばかりの手を伸ばして、彼の雄姿を絶対に見逃さないと誓ったのだ。

果たして、両者は示し合わせたかのように飛び出した。

「はああああッ！」

「おおおおッ！」

共に全力、後のことなど考えない。魂を込めた抜刀に唯一の傍観者は眼を奪われて――

「ああ……！」

気が付いた時にはヴァルゼライドの刃が、クラックの胴体を一閃し

て駆け抜けた後だった。

とてもじゃないが目では追えないような速度だった。それくらい刹那の出来事で、あたかも過程だけが抜け落ちてしまったような空白感すら感じてしまう。瞬きの間に翻った刃が鞘に納められ、クラックはその場に倒れ伏す。小さな声でヴァルゼライドに何かを告げ、彼はそれを受け取ったようだが男の耳にまでは届かない。

しかし事実として、ヴァルゼライドは歴戦の兵士すら一刀のもとに斬り伏せた。この結果に絶望すべきはずの男の心は、けれど際限を知らぬとばかりに燃え上がる。

「……待っていてくれ、麗しの英雄よ……！　俺は必ず、お前の本気を受け止めてみせる……！」

もはや怠けるつもりはない。次の瞬間には気を失って死んでもおかしくない怪我だって気にならない。

そうとも、本気で頑張ればこの程度の怪我がどうだという。少なくともヴァルゼライドは絶対に止まらないだろう。ならば自分もここで膝を屈している場合ではなかった。今も天井から落ちた瓦礫が自らを束縛するように押し掛かるが、それすら跳ね除け必ず再起を果たしてみせよう。

先に奥へと進んだマルガレーテを追うようにヴァルゼライドも眼前から消えていく。今の英雄の視界には唾棄すべき悪の群れと、後はあの女しか入っていないのだから。自分なんて歯牙にもかけない、仕方ないと分かっているが羨ましくてしようがない。

そうだ、羨ましいのだ。不死身の英雄と共に行くことを許され、彼の視界に入っているマルガレーテ・ブラウンという戦乙女フルキューレに嫉妬心すら覚えてしまう。自分も彼女のようにになりたい、英雄に見てもらいたい。こうして本気の素晴らしさを心に刻み込んでくれたのだから、その礼をしたくて心が猛っている。

昨日まで怠惰に溺れていた男の勝手な言い分だ。自省と悔悟の自覚はある。

でも、一度決意したことを絶対にやめられないのもまた、光に焦がれた者の宿痾しゆくあであるから――

「戦乙女フルキューレ、お前の立ち位置は俺が必ず、奪つてみせる……！  
不死身の英雄ジークフリートに魔剣を突き刺し、添い遂げるのはこの俺だ……！」

瓦礫と炎の中に消えていく英雄たちへと精一杯に宣言して。

崩壊する組織を生誕の揺り籠としながら、ここに人知らず  
邪竜ファヴニル・ダインスレイフにして魔剣となる男が誕生したのだった。

## Chapter 30 涅槃寂靜（ニルヴァーナ）の終焉／Ambition

人も、麻薬も、鉄も、何もかもが燃え落ちていく。

アンタルヤとも繋がりを持った巨大で狡猾な背徳の組織ニルヴァーナはもはや見る影もない。アドラー帝国からやって来たほんの二人だけの軍人の手により、冗談みたく壊滅させられ崩れていた。

不死身の英雄と戦乙女の前に敵は無し。光の側に属する英雄とその介添え人を相手にすれば、悪に墜ちた者など頭を垂れて裁きを待つしかないのだから。かつての強敵すら滅ぼした断罪の刃は、更に悪を誅殺すべく刃を走らせ駆け抜ける。

きつと鋼の英雄は定めた目的を全うするまで滅びはしない。

一度の死がなんだというのか。地獄の底から何度でも蘇るだろうし、ましてそこらの小悪党が殺せるはずもなし。

故にこそこの不死身の英雄なのだ。英雄の背中を見て目覚めてしまった邪竜の言葉はまったく間違つてなどいない。

それが証拠に見るがいい。麻薬流通組織の元締めながら古風な城塞にも似た造りだからだろうか。炎に包まれた内部を駆け抜ける青年の姿は、英雄譚サイガに紡がれる伝説の存在そのものにすら思えるのだつた。

しかし勿論、新西暦ヴァルゼライドの英雄が抱える光と怒りは神話に語られる英雄たちとは一線を画したものがあつた。

「死ねよ貴様ら、帝国に仇なす塵共め。腐つた墮落の蜜と共に燃え尽きてしまふがいい……ッ！」

銃火を退け、砲撃を掻い潜り、これまで腐敗をばら撒いてきた人間たちを塵殺しては刀の錆びへと変えていく。誰が見ても異常と分かる進撃を続けるヴァルゼライドの原動力は真実たつた一つだけ、蔓延る悪を許せないからその全てを滅ぼし尽くしてしまいたいと願っているのだ。

そのために本気で努力し、本気で怒り、本気で挑み続けている。求

道者であると同時に覇道を邁進する者、自己を高めた結果として他者を轢殺していく悪の敵——それこそヴァルゼライドの本質であり全てなのだろう。

故にこそ、もはや後のことを語るまでもないだろう。一方的な蹂躪なんて英雄譚に綴る価値すらないのだから。

どこまでも順当に、相応しい末路を辿り、帝国へ仇名す巨悪は一夜にして滅び去ったのである。

◇

一晚経過して炎も収まれば、昨夜の凄惨な戦いの余熱もすっかり風へと消えていく。

瓦礫の山を眺めながら帝国軍の到着を待つこと数時間、太陽も上がり切った頃に軍用車たちが続々とやって来た。

「かくしてニルヴァーナは滅び去り、裏で糸を引いていたアンタルヤの重鎮も痛手を負ったと。さすがだ、我らが英雄よ。君たちならば出来ると思じた想いに不足はなかった」

「ま、ギルベルトの目に不足が無いのはいつもの事だと思っけどな……」

開口一番に浴びせられた賞賛の言葉に、思わずはあ、と溜息をついてしまう。

普段から狂ったように狂いのない予測を立てる男がなにを言っているのやら。呆れながらも腰かけていた瓦礫から飛び降りると、「そういうば昨日もこんなことしたな」と既視感に襲われてしまうがない。それでやつと、国境線でアンタルヤの傭兵たちに勝利してからまだ一日程度なのだと自覚する。

たぶん他の帝国兵は昨日の今日で殲滅劇が発生するなど予想だにできなかったことだろう。昨日の戦いからいきなりニルヴァーナ跡地へと来る羽目になった兵たちのほとんどは、帝国を悩ませた組織の壊滅を前に喜ぶよりも訝し気な表情ばかり浮かべていた。

実際、こんな電撃戦が叶ったのはクリスが居たからこそである。普通はもつと準備を整え、計画を練り、大人数で油断なく殲滅するような規模の組織がニルヴァーナだ。その道理を全てねじ伏せ踏みつぶ

し、こうして成果を手に入れた。強引にもほどがある故に最短距離を突っ走ったのだ。

そんな訳で現実的にあり得ないような成果を一晩で成し遂げてしまったオレたちであるが、悪の組織が滅んだので万々歳と簡単には終わらない。軍による施設跡地の調査や残党狩り、血染処女パルゴと政府中央棟セントラルへの報告をまとめるなどやることは多いのだから。

そんな訳で少ない数の人員がこちらへと寄越され、その指揮を今はギルベルトが握っているという訳だ。彼とて階級的には大尉なのだ、それなりの権限は有しているって当然だった。

「しかし、ここまでの戦果を挙げるなど私以外の誰も考えてはいなかったろうな。上層部もこの結末には腹立たしいやら喜ばしいやら大騒ぎだろう」

「んで、アルの奴は頭を抱えてるんだろうな。アイツのことだからすぐにでも飛んできそうなもんだと思ったけど、来てないのな」

慣れ親しんだ幼馴染の姿を探して目線を彷徨わせても、アルバート・ロデオンの姿は全くもって見当たらなかった。

「ああ、彼も彼で言いたい事は山ほどあったろうがな。呆れたような顔で言伝を頼まれたよ、『美味しい飯でも作ってやるからさっさと帰ってこい』とね」

「達観してるなー、アルも……」

たまに振舞ってくれるご飯はまあ、美味しくもマズくもない普通の味というのはいいとして。

いつもいつも心配させてしまっているアルにも悪いから早く帰ろうかなと思うのだった。

◇

とはいうものの、実地検証やら何やらが一日程度で終わる訳もない。このニルヴァーナの存在した土地でどれだけの麻薬が生産されていたのか、帝国への被害はどれだけになる見積もりか、裏で繋がっていたと思われるアンタルヤの重鎮に繋がる証拠は無いのか、他の麻薬組織に関する情報が残ってないか……他にも他にも。調査すべきことは山ほどあるし、それらの情報すらまとめて燃やし尽くしたオレた

ちは最後まで現場の覚えてる限りの内容を話す義務があった。

そんなこんなでギルベルトの手伝いをしたりしながら数日、ある程度落ち着いてきたところでようやくオレたちも戻れる時期になったらしい。いつまでも瓦礫と麻薬の山に居座っつていては気も滅入るから大助かりだ。

「……まったく、こんな組織に今まで何人の帝国民が狂わされてきたのか。思い返すだけでも腹立たしい。このような弱者を食い物にする組織が再び起こらないことを祈るばかりだ」

去り際の直前のこと。背後を振り返って珍しく溜息をついたのはクリスだった。彼なりにニルヴァーナへは思う所があるのだろう、怒りと同時に何か哀愁も感じさせるような声音である。

だから「どうしたんだ」と反射的に訊ねてしまった。彼はこちらを一目見て、ゆっくりと語り出す。

「悪行に走る人間は度し難いが、一方で誰もが最初から悪だった訳でもないだろう。意志の力だけではどうしようもない現実の数多ある。それは麻薬を売り捌いていた者も、買ってしまった者も同じようなものだろう」

「つまり、もしかすれば悪には悪に染まってしまっただけの理由があったかもしれないってことか」

「俺は善人でもなければあらゆる全てを救いたいなどと烏滸おこがましくも考えたりはしないが……しかし、あるいは悪を選ばずにすむ環境が用意されているならばどうだろうか」

その言葉に少しばかり思考の海へと沈んでみる。悪を選ばずともいい環境……例えばそれは何かがあるか。

一番当たり前なのは皆が幸せに過ごせるような世界だろう。抽象的で夢のような話ではあるが、誰もが幸せならわざわざ悪い方へと向かう人間はきつと激減するはずだ。

あるいはもうちょっと具体的に、悪い事をした人間にはしっかりと罰が下るような世界とか。いい事をした人間が報われ、悪いことをした人間は報いを受ける。因果応報、善悪が正しく定められた世界ならばやはり悪を選ばない環境と言えるだろう。



でも、この二つは結局のところ――

「悪のない世界を作ろうにも、ほとんど机上の空論になっちゃうんだな。言ったり考えたりするのは簡単だけど、いざ悪い事をしない環境を考えると不可能なことばかりだ」

「……だろうな。俺とて察しているとも。どれだけ悪の芽を摘んだところで際は無く、完璧な因果応報など作ろうものなら人類は即座に滅びるだろう」

「どうしたんだよ、やけに素直じゃないか」

静かに息を吐いたクリスの姿はやはり珍しい。普段ならば「出来ないから諦める？　なんだそれは」と言いそうなものだが、今回はどうしたのだろうか。絶対に斬り捨てるべき巨悪を滅ぼしたことでスイツチが切れたのか。いいや、胸に抱いた炎が途絶えるなんてそこそ天地がひっくり返ろうが絶対にあり得ない。そんなことはオレが一番よく知っている。

「大したことではない、自分の願いの度し難さを改めて噛み締めただけだ。レーテも考える通り、悪を無くすにはそれ以上に大きな犠牲をいつまでも払い続ける必要がある。それでもやると吠える俺は傍から見れば身勝手にも程がある」

「でも、諦める気は無いんだろ？」

「当然だ。簡単に理想を諦めるようなら俺はこの場に立ってなどいない」

つまりは何としても理想を目指して突き進むという宣誓に他ならない。根っこのところでは何も変わらないクリストファー・ヴァルゼライドそのままである。

でも、そのためにはどうするべきなのか。こうしてニルヴァーナを壊滅させるという手柄こそ立てたが、あくまでも功績の一つでしかない。たとえ机上の空論だと分かっているとしても、東の先に配属されたままでは挑戦する事すら覚束ないのは論ずるまでもないのだ。

「つまり差し当たっては――」

「首都に戻る必要がある、という所かな？」

こちらの言葉を継ぐようにしてオレたちの会話に割って入って来

たのは、もはや聞きなれた上司兼戦友のもの。

いつから聞いていたのだろうか、薄ら笑いを浮かべたギルベルトがオレたちの背後に立っていた。眼鏡の奥に輝く蒼天の瞳に曇りなし、変わらぬ熱量のままオレたちを強く射抜いている。

そんな彼の言葉の真意は、オレでも理解できるくらいにシンプルで明快なもの。

「このまま東部戦線で成果を挙げ続けたとして、“戦場の英雄”以上の評価を得るのは難しい。特に上の者たちにヴァルゼライドという英雄を知らしめるには単純に距離が遠すぎる。であれば、懐に潜り込んで掌握するのが筋だろう」

「力だけじゃなく、頭を使って成り上がれってことか。簡単に言ってくれるな」

「その通り。道筋というのは明白になればなるほどシンプルになるものだよ」

我が意を得たりとばかりに頷くギルベルトを軽くねめつけた。

懐に潜り込む、要するにオレたちの生まれ故郷とも呼ぶべきアドラー帝国首都へ戻るということだ。しかしそれは言う程簡単なことではない。

オレたちはあくまでも力によって成り上がっている最中の一兵卒であり、政府中央棟セントラルに戻ったとして政治関連の知識や場数は貴族たちに比べ二歩も三歩も劣る。いいように扱われるのが関の山だろう。第一どうやって向こうに戻るのか、その手段すら不透明である。

なのだが、炯眼を持つこの男にとってあらゆる道程は透明に見通せるらしい。不敵な薄ら笑いは味方にとってみれば頼もしくすら映って仕方ない。

「近い内に向こうから我々を呼び寄せることだろう。故に今の私たちに必要なのは、理想を実現するために何が必要で何を成すべきか、それを明白にしておくことに他ならない」

そう、ギルベルトは一つの躊躇もなく言い切った。向こうから呼び寄せるとはどういうことか……理由は思い当たらないでもないが、果たしてそんなことがあり得るのだろうか？

いいやしかし、彼が言うのならそれは近々真実になるのは間違いない。オレもクリスもそこに疑いを抱く余地はないのだ。

……正直なところ、最初から分かっていたことではあった。今のまま我武者羅に剣を握って戦場を走るだけではいずれ袋小路デッドエンドに出るのだと。クリスという個人の武ですべてをひっくり返せる男がいるから現状が成り立つのであり、それでも大きな理想を成し遂げたいなら舞台を移す必要があると。

そのためにはギルベルトの力は必要不可欠だ。この天才はオレたちには不足しているものをすべて備えた万能の人物であり、その協力なしにアドラー中枢で成り上がるなどほぼ不可能。まあ、クリスならいずれ不屈の努力で何とかしてしまおうだろうが、どれだけ時間を要するか見当もつかない。

だからいずれは政府中央棟セントラルに巢食う血統派とバチバチに火花を散らす展開があるはずだ。クリスには為したい理想があり、オレはそれを友として助けたいのだから不可避の未来だろう。

そんなことを考えていると、不意にギルベルトがこちらを見た。蒼穹を映したような瞳がこちらを射抜き、知らず背筋が伸びるような感覚を味わう。

「ああ、そうだ。先ほどは『悪のない世界』について興味深い話をしていたようだが、一つ私の意見を言わせてもらっても良いかな？」  
「なんだ、藪から棒に。お前の意見を聞くまでも無くあの話は終わっているが」

こういうとき、クリスからギルベルトに対する態度は割と冷たい。理由は知らないが今もそうだ、好奇心に満ちた瞳に対して胡乱気な視線を送っている。忌憚なく表するならば「溝」とでも呼ぶべきか。

オレとしてはこう、どちらも大事な戦友なので仲良くしてほしいと思うが……両者共に結構な頑固者なのでどうなるやら。普段は紛れもなく光を仰ぐ同士として仲が良いのに、一步踏み込むとこうなのだ。

とはいえ、クリスからのぞんざいな態度もどこ吹く風、ギルベルトには一つも堪えた様子はない。

「私個人としては、因果応報というのはこの世で最も美しい言葉に思える。優れた者にはその証を、情弱な者には叱咤を、それがあべき理想に思えてならないのだよ。ブラウン嬢、君はどう思う？」

「オレは……」

思わず言いよどんだ。それはついさつきクリスとした会話とは真逆の結論を思ってしまうから。

白状すれば、ちつとも悪くないと思える。頑張った人が頑張っただけの褒美をもらい、怠けた人間には相応の報いがある。確かにこうすれば努力を笑う人間なんていなくなるだろうし、報いを覚悟で悪に走る人間だって少なくなる。良い事づくめなのだ。

「やっぱり努力にはそれなりにご褒美とかあると嬉しいなと思うよ、うん。もちろん出来たらの話だけだな」

でも、それを素直に評するにはどこかギルベルトの雰囲気怪し気で。だから当たり障りのない言葉でお茶を濁した。

何故だろう。オレとしてはかなり最初の方から、ギルベルトの意見には共感できるところばかりだったのに。いざ内面深くまで話題が伸びると途端に肯定し辛くなる。その理由を言葉にすることは出来ないが、もしかしたらこの感覚こそクリスとギルベルトの間に横たわる“溝”の正体なのだろうか。もちろんただの考えすぎかもしれないが。

「ふむ、なるほど、それが“そちら”の意見ということか……参考にさせてもらおう」

「ハーヴェス、あまりおかしなことは考えない方がよい。完璧な因果応報など絶対に不可能だ、実現する術もした後の未来もない」

「ああ、あなたに言われずとも分かっているさ。これを成すにはそれこそ世界を変えてしまうような力が……俗に言う“魔法なり超能力なり”の領域まで行かねば不可能なのだ。故にこそ、これはあくまでも参考にしかなり得ない」

では、もしもその“魔法なり超能力なり”が実際に存在したらどうするの？

その問いを投げかける前にギルベルトは嘆息してから話をまとめ

た。

「あくまでも現実的な範囲で理想を追い、公平で正しい世界を作るべきだと理解してるとも。いくら私とて現実にはありえない手段を模索するなどしないさ」

などと嘯いた男は仰ぐように天を見上げ——その先には常と変わらぬ第二太陽アマテラスが鎮座しているのだった。

## Chapter 31 今の彼女／Gender

オレは別に哲学に興味がある訳ではないが、たまに自分の“ルーツ”というものを考えたりする。

はつきり言って小難しいことは好きじゃない。物事はなんだってシンプルな方が良いのは道理だ。なのにこんなことを考えてしまうのは、やっぱり自分の存在そのものが特殊だと確信してるからに違いない。

「なんて言ったらまるで中二病を拗らせた可哀そうな子だけどなー……」

小難しい話は脇に置き、鏡の前に立って苦笑した。鏡の中のオレも苦笑を返したのを他人事のようにちよつと眺める。

もはや着慣れた軍服に袖を通してシャツの襟をしっかりと正す。髪を後ろで一つにまとめ、後はネクタイの位置だけ微調整すれば、どこに出しても恥ずかしくない軍服美女の完成である。

……まあ、自分でそんなこと考えるのもどうかとは思う。どこに出しても恥ずかしいナルシストなのは否定しない。

「だけどなあ」

おもわず溜息が出てしまった。滑稽な話かもしれないが、既にこの身体と付き合って二十年あまり、未だに鏡に映った自分を自分と捉えられないのだ。女になった自覚がない、なんて言い換えてもいいだろう。

精神と肉体の齟齬について折り合いを付ける、というのは想像以上に難しい。だってオレの中身は最初からずっと“男性”であり、女性的な思想も価値観も趣味も一切持っていない……はずだ。しいて言えばクリスへの憧れがあるくらいで、少なくとも男にときめいたり恋したりなんて微塵も考えられない。

なのに肉体面ではもう言い訳のしようがないくらいに“女性”だから困ってしまう。声こそちよつと低めな方だが、胸は小さいながら確かに出るので下着で押さええないことには痛くて運動もできない。体付きなんかも筋肉が付いた上でなお丸みを帯びているのが分かる

くらいだ。

しかも“月のもの”は悲しいくらい順調に起きているので毎月が若干憂鬱になるくらいだし、なんなら十年くらい前、アルと一緒に血塗れで大騒ぎしたのも軽いトラウマになってる。幸いにもオレは軽い方だったのでどうにか対応して今に至るが、一方でクリスが珍しいくらい役に立たなかったのが印象強い。それでオレは確信した、「あいつは将来、女性関係で間違いなく苦勞するな」——と。

閑話休題。

そういう身体面での違いというのもどうにか慣れはした。一六〇センチをちよつと超えたくらいからちつとも伸びない身長とか、最低限の化粧術みたいなのとか、色んな箇所の処理だとか、思う所はあるけど問題なく付き合えてる範疇だろう。

なのにそれが自分だという自覚が未だに薄い。主観的でなく客観的で、それこそ鏡を見たところで実感が湧かないのだ。

セミロングの茶髪にオレンジの瞳の美女は傍目には目の保養になるくらい綺麗だ。だが、断じてオレ自身がそうなりたかった訳じゃない。せめて当事者じゃなく傍観者になりたかったと考えたのは数えきれないほど。

「まったく、なんでこんなことになったのやら……」

三度目の独り言が漏れ出た。もう慣れと諦めの境地に達したとはいえ、やつぱり“そもそも原因”は依然として不明なままなのが気持ち悪いのだ。転生なんて言葉はそれこそ旧暦から続くありふれた言葉だが、いざ我が身に起これば疑問は大挙して押し寄せる。

どうしてそんな魔訶不思議をオレが体験する羽目になったのか？

わざわざ性別が変わった理由は？

あの双子になんとなく覚えがあるのはどうしてだ？

前世をまったく意識してないのは何故？

そもそもオレは何者だったんだ？

空に浮かぶ第二太陽アマテラスへ感じる不思議な懐かしさの出どころは？

何もかもが理解不能で、もしかしたら理由なんて無いのかもしれない

い。むしろそっちの方があり得そうまである。

でも考えたところで仕方ないのだ。分からないものは分からないし、過去うしろを見て煩悶まげんとしているようでは未来まえへと進むクリスに追いつけるはずがない。何があるかと今のマルガレーテ・ブラウンという女オトコにとつて光への憧憬が全てなのは変わらない。譲れない純然たる事実がそれだというなら、止められない憧れを自らの核として進めばいい。

「ま、要するに悩んだって仕方ないって訳だな、うん」

最後はそんな当たり障りのない意見に落ち着くという訳だ。

男だからどうか、女だからどうか、そんなものは総じてくだらない。大事なのは貫くこと、正誤の別を置いてもお自分の意志を押し通せる強さに他ならないとオレは知っている。

それに、だ。あまりこういうのもどうかと思うのだが……なんだかんだ今の状態も得ではあるのだ。主に可愛い女の子——ただし自分だが——を好き勝手に着飾ったり磨いたり鑑賞したりできる点で。倒錯的だけどそれくらいは役得とでも思い込まなければやってられない。もう変態だろうが知ったことか。

……ホント、世の女性はよくこんな苦勞をしながら平然と生活出来るものだ。当事者の身になると尊敬の念しか湧いてこない。これに本格的な化粧やらオシヤレやらが増えるとうなってしまうのか。などと改めて考えたところで、パンパンと頬を叩いて気合いを入れ直した。

だって今日は久々にフランクフルトに戻ってきて、特に予定もない貴重な日なのだから。いつまでも自室でダラダラしては勿体ないというもの。しばらく前からついに別室扱いとなったクリスとアルも同じく部屋から飛び出していることだろう。

そういう訳で、現在時刻は午前九時。天気は快晴。

オレは意気揚々と部屋を出て、数か月ぶりのフランクフルトの街へと繰り出した。

◇

「賑やかだけど静かっつうか……」



予想通りクリスとアルは既に部屋にはいなかったもので、今はオレ一人で街を歩いている。おそらく休日の朝早くに起こしに行くのも悪いとでも氣遣われたのだらう。そんなことせずとも軍人なのだしキツチり起きてるのだが。

ともあれ、一人で行動というのも珍しいとは思う。スラムで初めてクリスに助けられてから今日まで、ほとんど単独行動というのは無かった。その後の貴族の青年たちに襲われて以降はより顕著になったというか、アルと親友になって以来はどんな時でもずっと三人で過ごしてきた。思えばオレの幼少期は守られてばかりだな。

だから今この時、どうしても寂しく感じる原因はきつとそれだろう。今朝の哲学めいた思考と合わさって妙に人恋しいというか、見慣れた二人が近くにいないと落ち着かないし心細い。おかしいな、オレはそんなに甘えたがりではないはずなのだが。

まあそれはともかくだ。なにも二人がいないことだけが寂しさの原因ではない。もつと根本的に、この平和な街並みにも因はあるのだらう。なにせ戦場暮らしに慣れ過ぎたせいとか、銃撃や爆発音が響かないことに違和感を覚えてしまう。というか、いつ物陰から銃撃や敵兵が飛び出してくるかとかと神経がちよつと張り詰めているくらいだ。実に疲れることこの上ない。

いわゆる戦場帰還兵はこうした平和に馴染めずおかしくなったり、また闘争を求めて戦場に出向いたり破滅的な後遺症があると聞く。生憎とオレは繊細な人間だなんて言えないのでいずれ元通りに馴染めると思うが、確かに慣れないうちは氣が減入る。

なので一々物陰に視線を走らせたり、たまに聞こえる大きな音に反応して咄嗟に振り向いたり、過剰反応をちよくちよくしながら歩くと数分。こそこそと適当なお店でサンドイッチを買い、近くのベンチに腰かけた。

そう、まるで人目を避けるようにこそこそとである。敵地のど真ん中でもないのに何をやっているのやら。

「はぁ……」

また溜息が出てしまった。こそこそしてるのは何も警戒ばつかし

てるからでない。もっと別の要因がある。

結論から言おう、オレは座ってるだけで変に衆目を集めているらしい。それはもう、サンドイッチ持って腰かけてるだけのオレへ通行人が視線を投げてくるのだ。なにか悪いことをしたわけでも、目立つ行いをしたわけでもないのになんだこれ。

当然ながら居心地が悪いので誤魔化すようにサンドイッチを食べつつ、ちよつと耳を澄ませてみる。良くも悪くも過敏になった聴覚はそこらの会話くらいなら至極あっさりと拾ってくれた。

「おいあれ、マルガレーテ・ブラウンか……?」

「ぜってーそうだろ、あんな美人見間違えるか」

「戦場の英雄に付き添う戦乙女ってか、ありや確かにな」

「すつげえなおい、声かけてみるか」

「いやいや、そんなの恐れ多いっての」

……どうしたものか、自分の耳と正気を疑いたくなるような会話が漏れ聞こえてきたのである。

割とマジで「なんだその評判!?!」とツツコミを入れたい気持ちでいっばいだ。クリスが戦場の英雄と呼ばれることに異論はないが、じゃあオレがその戦乙女だって? 冗談は止してくれ、オレの中身は乙女どころかバリバリの男性だぞ。男が脳内で思い描く“いじらしい”ものじゃ断じてない。

第一、だ。戦乙女といえど神話における戦神の遣いであり、死後の英雄を導く存在じゃないか。しかし実際はその逆、オレはクリスを導くどころか彼の光に導かれてここまで来た。戦乙女なんて評価はお門違いも良いとこだ。

もちろん事情を知らない人間に対して一々説明するのも馬鹿らしい。それにせつかくオレたちの活躍が評価されてもいるのだ、わざわざ水を差してまで否定するのも勿体ない話だった。

にしても体感八割くらいの人間がこつちへ視線を寄越すし、さらに好き勝手言われてしまえばいくら褒められてたって座りが悪い。ましてや戦乙女として褒められているのがメインなのだ、オレとしてはどうしても齟齬を感じて肌に合わない。

結局のところ、どう足掻いても女性としての肉体からだと男性としての精神こころの違いを突き付けられる。分かつちやいるがやるせなくなってしまう、恥も外聞も捨ててサンドイッチを一気に平らげた。がつつくと品が無い？ 知るか知るか、貧民窟スラムで育って戦場で青春過ごしたオレが今更ま気にするはずがないだろ。

服に落ちた食べかすをパンパンと叩きながら立ち上がる。せつかくの良い天気だし散歩でもしようかと思っただが、こうも注目を浴びるとなれば大人しく引ひつ込むしかないか。テキトーにギルベルトでも捕とまえて雑談するのも一興いちきやうだろう、たぶん。雑談を楽しむアイツの姿が全然想像できないのは置おいといて。

「さて、と——」

わりかし不毛なことを考えながらもいざ帰ろうと踵かかとを返した、ちよちうどそのタイミングだった。

「あ、いつかの軍人さんじゃないですかー！」

「お久しぶりですね」

「アンタら……あ、いや、あなた達は……」

ついアンタらと口走くちつてから慌あわてて言い直す。今日はやけに意識する羽目はねめになつてるが、オレの外見は女性なので男言葉ばかり人前で使つかつてると違和感違和感を持たれてしまう。軍ではもう“男勝りな女軍人”として受け入れられてるが、どつちかと言いえばそれが特殊だ。

などと前置ちんざいきが長ながくなってしまったが、オレの眼前まへに立たっているのはお揃そろいのメイド服メイド服に身を包つつんだ金髪きんぱつの少女しょうじよたち。数ちよつとだけ年前ねんにとある酒場さかで出会あわせた双子ふたごのウエイトレスウェイトレスだった。

………なんだろう、今の違和感違和感は。

「確か、ティナさんとティセさん、でしたっけか？ 私になんの用ようですか？」

「あ、ちゃんと覚えててくれましたねー。こんにちは、マルガレーテ・ブラウンさん！」

「特別な用ようがある、という訳わけでもないのですが。つい見かけたものでして」

「はあ……」

つい曖昧な返事を返してしまう。相変わらずにこやかに笑う双子の笑みは眩しい。でも前に出会った時のことまで否応なく思い出してしまうのだ。

澆刺としてあからさまに悪戯好きっぽいのがテイセで、ちよつと落ち着いた雰囲気の方がティナだったか。数年前、この双子は麻薬の取引現場となっていた酒場で働いていて、その売人を捕らえる際にこちらを妨害してきた食わせ者である。どさくさに紛れて何処かへ消えてしまつて以来見かけることは無かつたが、まさかこんなところで再会する羽目になろうとは。

「あなた達、数年前のことをちゃんと覚えてる？ あんな派手にこちらの妨害までしてきて声をかけるなんて良い度胸、本当なら軍まで引つ張りたいところですが」

「それはまあ、昔の事つてことでー。きれいさっぱり水に流したりしてくれませんかー？」

「お客様同士の戦いを止めるのも仕事の内ですから。あ、それと、そんなに猫を被らなくても構いませんよ。私たちは気にしませんので」  
「……つたく、マイペースな奴らだな。まあ確かに、今更終わつたことぐちぐち言つても仕方ないけどさ。用がないならオレはもう帰るぞ」  
天を仰いで呆れながら口調を元に戻した。やっぱり女性らしく振舞うのは何となく難しい。オレの場合はちよつと露骨に寄せすぎてる気もするが、周囲に女性軍人なんてちつともいないので参考例すらないのだ。

とにかく、もう四年以上は経つてる事柄を持ち出して軍に報告なんてしても面倒が増えるだけだ。なので余程煽つてもこない限りは適当に流してこの場を去るつもりなのだが……向こうはやっぱり何か用があるらしい。

「まあまあ、そんなこと言わずに雑談でもどうですか？ 私たちもちよつと休憩中の身でして、暇潰しを探していたんです」

「ついでに何か奢つてくれると嬉しいなー、なんてー！」

「悪いけどそんな給料が多い訳じゃないんだ、諦めてくれ」

嘘である。適正よりワンランク下くらいの給料はちゃんと出てい

るが、この双子に「ごちそうするのも癪だな」という子供っぽい理由だった。

そんな嘘を信じたのか信じてないのか、ニヤツと笑みを浮かべた二人はそれ以上追及はしてこない。妙に聞き分けのいい様子に逆に興味悪く感じるのは失礼か。

「それにしても聞きましたよ、戦場で大活躍の英雄と女傑のことは！アドラー東部ばかりでなく首都の方までその名前は知れ渡ってるとか」

「ついたあだ名は戦乙女、いやー綺麗なものですね。スラム上がりの女の子も今じゃ超有名で立派な軍人さん、世の中なにが起きるか分かりませんね」

「で、だからどうした？まさかそんなこと言いに来た訳じゃないだろう？」

現在戦場で成果を出してるオレたちがスラム出身なのはそんなに秘匿されてもない。あまり大きく喧伝すると『貴族より優れた劣等がいる』ことを認めてしまうが、さりとて徴兵の為のプロパガンダにも使えるということだろう。まずもってオレが妙な二つ名を付けられるのがその一環なのは周知で羞恥の事実である。

しかしそんな話をこの双子に振られると、表面的な事実よりもむしろ奥底を見透かそうとしているようにも思える。冗談と悪戯が好きで元気な双子というキャラに対して、どこか底知れない雰囲気をも漂わせているからだろうか。飄々とした態度や急な店内戦闘にも動じない胆力がその考えをより強くする。

見れば見る程よく分からなくなるこの双子こそ何者なのか。ある意味かつてのオレの正体以上に気になる点ではある。

「いやいや、そんな凄い人に喧嘩売っちゃったなんて私たちもやんちゃしてたなーってさ。ほら、後で気が付いたらすごい人だったみたいなの？」

「どうだかな。オレよりもクリスの方がよっぽどすごいさ。オレがやってることなんて、アイツの後ろをついてくことくらいだ」

「謙虚ですねー、憧れちゃいますねー。そんなあなたにはきつと大和<sup>カミ</sup>

様も微笑んでくれることでしよう」

「さあな、むしろ第二太陽がどつかで助けになったことがあるやら……」

「おや、意外と不信心なんですね」

「天に在るだけのよく分からない存在に、やれ幸せにしてくれだの祈っても仕方ないからな」

「カンタペリー聖教国の熱心な信者に聞かせたら怒られてしまいそうだ。信じる者は救われる、なんてのはつまるところ余裕がある人間の言葉に他ならない。否定もしないが、オレは信じるつもりはない。最後に信じられるのは現実に即した力と、そして強固な意志の力なのだから。」

「とはいえ大和様を信じるといふのは意外とこの世界では常識として浸透している。オレの生まれが特殊だからちよつと波長が合わないのだろうか。」

「なるほどなるほど、そう考えますか……これは良い事を聞けました」

「……？ そんなに面白いことでも言ってたか？」

「私たちからすれば意外と。相変わらず面白い人間だなと思つたまでです」

「お褒めに預かりどうも。っていうか、しばらくフランクフルトにはいなかったから相変わらなうなんていう程会つてないと思うけど」

「そこはほら、ちよつとだけでも戦つた誼つてことで一つ！」

「よくもまあ適当なことを言うもんだ。思えば最初に出会つた時も『オレと会つたことがあるかも』なんて言われたか。案外オレのそつくりさんみたいなのが居るのか、でなければこの双子が電波系なのかのどつちかである。後者の方がまだ可能性は高そうだけど。」

「まさかこの二人がベルリンや他の街に居たなんてことはないだろう。」

「——全く同じような金髪の双子を見た記憶なんて、ない。」

「……………ホントにそうだったか？」

「分からない、もしかしたら出会つていたのか？ どうにも記憶が曖昧だ。それこそすれ違つただけで気付かずに、なんてこともあるやも」

しれないのに。まるでモザイクでもかかったかのように詳細を思い出せない。

まあ長いこと戦い続きだったし、素で忘れてるだけかもしれない。きつとそうだろう、でなければこの奇妙な感覚——しばらく前にも出会ったことがあるはずだという不思議な確信を説明できない。

「別にどっちでもいいか。じゃあオレはそろそろ行くよ、元気だな」

「え、もう行っちゃうんですか？　せつかくですし暇潰しに弄らせてくださいな」

「そうですねよ、こんなか弱い双子メイドを放つとくんですか？」

「あのなあ……どの面下げてそんなこと言うんだ」

「今ならあんなことやこんなこともし放題！　……かも？」

「さあ、その心に秘めた内なる獣性を解放するのです！　もちろん料金は頂きますが」

「やるか馬鹿。まったく、同じ女に向かってなんつー言い草だよコイツら……」

確かにこの二人が可愛いのは認めるけど、それで手を出すのは色んな意味で負けた気がするので無しである。オレにだって常識はちやんとある。

第一そんな見境ない訳じゃないし、女の身体に触りたいならそれこそ自分ので——いや、この話はやめよう。ホントに男としての尊厳が微塵と碎けて戻らなくなりそうだ。

「それじゃ今度こそ、さよなら」

「またお会いしましょうね」

「次はたくさんお金貰っちゃうのでそのつもりで！」

「はいはい」

まったく、とんだ休日だと内心で苦笑いしつつ、これもこれで穏やかで悪くない。いつの間にか過敏に張り詰めてた神経も元に戻っているのは馬鹿話をしてリラククスしたからか。

元気に手を振ってくる双子へと軽く手を挙げて答え、ようやくオレは軍本部のビルへと歩き出したのである。さてと、帰ったらどうするか。せつかく私服だつてあるのだから、たまには着替えるのも良いか

もしれない。たぶん軍服で出歩くよりはマシだろう。  
それにしても本当に……男の精神で女の身体とは、大変なものであ  
る。



## Chapter 32 新たな戦い／Steellar of Iron

「まずは単刀直入に本題を告げてしまおう。本日付けで君たちには政府中央棟への異動が決定された」

ついにこの時が来たか——もはや馴染みとなってる四人揃って、上官の言葉に対する感想は全く同じだろう。思わず強張った身体を意識しないようにして、努めて自然体のまま嫌味な血染処女隊長へと相対する。

「急ですまないが、君たちには明朝には政府中央棟へと発ってもらおう手筈となっている。よって速やかに荷物を纏めてもらい、準備を整えておくように」

「了解しました、そのように用意を進めておきます」

淀みなく返答したのはギルベルトだ。彼は最初からこの展開を見通していた。よってこうして呼び出された時点で、影隊長の目的などお見通しであったのだろう。

そう、いずれオレたちの舞台が東部戦線から帝都へと変遷するのは分かっていた。軍の上層部はクリストファー・ヴァルゼライドという男の活躍を疎みだすだろうし、英雄に必要な戦場を取り上げるだろう事も承知の上だ。何せ権力というレンズを通すしかできない上層部は、クーデターを恐れるからこそ兵卒たちの信頼と憧憬を一身に集めるクリスを見無視できない。いずれ下賤な血の者が自分たちの首を噛み千切ると、そんな見方と警戒しか出来ないのだ。

まあ確かに、邪悪や腐敗を許さぬクリスの在り方からしてその警戒は間違ってもいない訳で。

つまりは帝都による飼い殺し。自分たちの腹の中で何事も成させず、『いつかは英雄と呼ばれた人間たち』へ貶めてしまうつもりなのだ。

「では確かに伝えたぞ。各々、すぐに準備へ取り掛かれ」

「了解しました！」

揃って返答次第すぐに隊長の前より退出していく。なんだかもう見慣れた光景というか、この数年の間に結構な回数あったなとふと懐かしく思えてしまった。

帝都へ行けばこの隊長とも結局これきりになるのだろうか。分からないが、あまり一緒にいたいと思える人間でないのは確かだった。正直に言えば初めて見た時からちよつと気に入らないし。フランクフルトの基地に来た直後の妙な視線は今でも印象に残っている。

……というより、あれは本当にそういう類だったのだろうか。嫌でも自分の肉体的性別を意識してしまう今だからこそ、まわりつくような視線がそこまで単純で下卑た意味だったのかと考察してしまう。嫌味で血統や立場に厳しい影隊長がオレ相手にそんなことを考えるかと言えば、やっぱり首を横に振るしかない。

「あの人の意図は一体なんなのか……」

「ん、どうしたレーテ？」

「いや、なんでもないよ。こっちの話だ」

気のない返事をアルに返しながらかもついつい考え込んでしまう。

改めて考えると実に不気味で不透明だ。もつと目に見えて『腐敗した軍人の典型』だったら悩むこともないのに、実務においては最低限のことはしっかりこなしているようにも思えるから性質が悪い。単純な悪者、などと片付けられないのだ。

今の東部戦線において、どこまでも腐り切った人間というのは実は多くない。当初は新兵を平気で盾にする古参だとか、訳の分からない命令を下す上官なんてのも存在したが、クリスがあまりにも活躍しすぎたせいかなそのような手合いは恥じ入る様に消えていった。文字通りに戦場で命を散らして消えた者も多いだろうし、どうしようもない奴はオレとアルで結託してさりげなく激戦区へ——なんてのは置いておこう。

だがあの上官が真っすぐな輝きに感化されたとは到底思えない。そう考えると実に不気味で、見通しの悪い人物と言えた。真意も何もあつたものじゃない。

「レーテ、考えごととも良いが今は目の前のことに集中しろ。そのよう

では足元を掬われるぞ」

「あ、ああ、そうだな……悪かったよ」

「しかし、今回の異動はまさしく好機だ」

気が付けば既にギルベルトの私室に辿り着いていた。階級の高い彼の部屋はかなり豪華で、ゆったりしてるが少し落ち着かなくもある。

ともあれクリスに注意されつつソファアに腰を下ろした。これもある意味で見慣れた構図というか、戦場以外で四人集まって話し合う時はいつもこうだった。そんな感慨を抱きながら炯眼を持つ男の言葉を待つ。

「向こうは君たちが東部で兵士を掌握し、帝都の貴族たちへ刃を向けることを恐れている。だから自分たちの腹へとおびき寄せ、そこで生かさず殺さずの策を取るつもりなのだろうが……」

「それは同時に、俺たちが上層部の首に手を掛ける切っ掛けにもなる」と

「その通りだ」

アルの言葉に我が意を得たりとばかりに頷いて、

「彼らが妙手と思ひ込むからこそが、こちらにとってもまたとないチャンスとなるのだから」

大胆不敵にギルベルトは言い放つのだった。

「なんつーか、大胆かつ難しいやり方だよな。どうあれしばらくは飼いや殺しにされる未来は決まってるし、向こうも都合よく気を抜いてくれるか？」

「いいや、逆に考えてみる。その“しばらく”の間は相手にとっても油断が生じている。あわや既存の権勢をひっくり返しかねない危険人物を自分らのホームグラウンドにまんまとおびき寄せ、しかも慣れない政治の土俵に持ち込んだ……これで気を抜くなどという方が無理な相談だろう。そこに付け入る隙がある」

「まあ確かに……そうかもしれないけど」

いつも最悪の事態を考え、“勝算”なんて贅沢とは無縁だったクリスにしては珍しく言い切ったなど感じた。

それだけ帝都に居を移した後での振る舞いに目途が立っているのだろうか。疑問に感じてギルベルトへと視線をやる。彼は腹立たしいくらいに落ち着いた様子で、オレの疑問すら考慮の内といった様子である。

「これはまだヴァルゼライドにしか話していなかったことだが……そもそも今回の異動の件、私は何も関係が無かったのだよ」

「え、そうなのか？」

「おいおい、そりや初耳だぞ。じゃあどうしてお前まで——つてまさか」

「そう、私も君たちの異動指令にねじ込んでもらったのだよ。なにぶん元から君たち三人の上司でもある、貴族という立場も合わせてそう難しい事では無かったさ」

事もなげに語るこの男の先読みを前にして、オレもアルも流石に言葉に詰まった。つまりなんだ、オレらからすれば遥か雲の上の存在である軍高官たちの動きを、距離すら離れたこの地から完全に先読みして手を回していた訳だ。確かにこれまでも『近いうちに帝都に呼ばれることになる』とは予見していたが……こうもピツタシ合わせてくるとは。

しかしそれ以上に、今回の異動がオレたち三人の狙い撃ちだったことが一番の冷や汗モノなところだったが。いくらチャンスに繋がるといえども事実上の左遷に対し、普通なら将来有望かつ家柄まで保証されているギルベルトが巻き込まれるはずもない。すっかり気安くなっていたが本来の彼はそういう立場の人間なのだ。

「向こうとしては私まで一緒に来られてはむしろ困るのだろうが、それに従う道理もない。出方さえ分かっていたら先に手回しを行い、別系統から帝都に“栄転”する事は実に容易かったよ。なにせ君たちと共に築いた戦果もある、手土産は十分だったさ」

ちよつとしたことのように涼し気に笑うギルベルトだが、その意味は非常に大きい。

スラム出身の三人だけではどうしたって政治についての知識や経験はすぐ頭打ちになる。今でもギルベルトから教えを請うたりはし

ているとはいえ、彼本人が居るといえないでは大違いでもある。

政府中央棟でもきつと同じことだ。彼の頭脳とコネはあまりに貴重かつ強大な武器となる。言い方は悪いが存分にアテにさせてもらいたいくらいだった。

「ま、お前も一緒ってんなら力強いことこの上ないけどよ……何だか悪いな、いつも俺たちに付き合ってもらおう形だよ」

「何を遠慮する必要がある。力ある者、意志ある者が輝ける場を整えることに喜びはあれど苦勞など一切ない。再三言わせてもらうが、君たちはそれだけのことを成しているのだ。胸を張り誇るべきだろう」

「ありがとな、そういうところは本当に感謝してるよ」

「まったくだ、お前には頭が上がりらん」

こればかりは三人揃って素直に頭を下げた。軍に入ってからこれまで、純粋にオレたちの味方をしてくれる人間など片手の指でもまだ多いくらいだ。その一人がこれだけ親身になってくれるというなら、オレたちもまたその期待には応えたい。

「さて、話が横に逸れてしまったな。元に戻すが、そういう訳だから私も君たちと共に帝都へ戻る運びになり、これに際して上の人間たちは間違いなく安堵し緊張の糸を緩める。何故なら、私が君たちの監視役になると考えているからだ」

「監視役だって？ 出来るのか、そんなこと？」

この血染処女部隊の中でオレたちと最も親しいのがギルベルトなのは周知の事実だろうに、正反対の監視役をやらせようとするものだろうか。

そんな当然の疑問を前にしてもこの男は揺るがない。

「出来るとも。最初からそういった条件込みで異動する予定なのだから。『ヴァルゼライドたち三人を帝都でまで好きにはさせない、むしろそれとなく見張っておくから自分も帝都に行かせてくれ。同じ貴族として下賤なる者たちの成り上がりまでは見てられない』……などと向こうが共感するよう大げさに語ればアツサリだ。良くも悪くも彼らは自分たちの物差しで考えるのが得意なのさ」

「要するに二重スパイじゃねえか……ほんつとうにやりたい放題してるな、お前は」

「お褒めいただき光栄だよ」

立場も頭脳もある男に万全の準備期間まで与えてしまえばどうなるのか。その結果がギルベルトの独壇場とも呼ぶべき根回しの数々となる訳だ。オレたちの敵となるはずの相手に取り入りながらこちらの利になるよう動く様はいつそ芸術的ですからある。

そんなものをまじまじと見せつけられてオレとしては頼もしいやら恐ろしいやら。将来なにか埒外の出来事があったとしても彼だけは絶対に敵に回したくないと思わされる。というか絶対にイヤだ。

「いずれにせよ、ハーヴェスの助力もあって俺たちはこの上ない形で帝都へと帰還することが出来るのだ。本来ならばこれだけの下準備、前情報など望むべくも無かったことを鑑みれば僥倖が過ぎる。これで一つも成果を出せないとあらば光を掴む資格無しだ」

ハッキリと断言したクリスの語気はかつてない程に強かった。頷きながらもごくりと喉を鳴らす。

そうだろう、これまでがいわゆる下積み時代ならば次からが正念場だ。不慣れな“戦場”でどこまで足掻き戦い抜けるか、どれだけ己が光を貫き腐敗に抗うことが出来るのか。やれる全てで成果を出せねば待つているのは無為な人生に他ならない。

「その覚悟、しかと受け取った。微力ながら私も尽くせる限りの援助をしよう」

どこが微力だ、反射的に呟いた言葉はアツサリと流された。

「だが改めて確認しておこう。君たちは軍の高官たちに抗うつもりであるらしいが、何故そのような茨の道に行く？ 飼い殺しといえど大人しくしている方が遥かに賢く、また身の丈にあつた振る舞いなのは自明のことだが」

「愚問だな。だが敢えて誓ってやる。今日の涙を明日の笑顔に出来るような——そんな世の中を俺は作りたい。そうである人間に俺はなりたい。なればこそ、大志を抱き前に進む以外にありえない」

「敢えて言っておくが、オレはそこまで大それた目的意識は持ってな

いぞ。ただクリスの奴を友達として放っておけない、それだけだ」  
「俺だつて同じだ。でもその途上で俺たちみたいな不遇を受ける奴が一人でも減るならやる甲斐はあるだろ、間違いないな」

いつでもどこであろうと、それだけは絶対に変わることはない核となる部分。

この想いがある限りは決して負けないと声高に叫んでみせよう。いいや、むしろこの想いを無くしてしまったその時こそ、オレがオレでなくなってしまう時なのだ。光を目指さず足掻きもしない自分なんて想像もできないから。

「ならばよし、その決断を最大限に尊重しよう。なに、案ずることは無い。君たちは正しいのだから、必ず勝って報われるとも。正義を担う煌く勝者、その称号は君たちにこそ相応しい」

「止せハーヴェス。正しさだけを信じ、悪とあらばあらゆる全てを斬ってしまう俺に正義など似合わない」

そこで一拍だけ間を置いてから、  
「俺はあくまで、邪悪を滅ぼす死の剣——“悪の敵”でしかないのだから」

どれだけ正しかろうとも、我が身に正義など一片たりとも無いのだと。

誰よりも悪を憎み清廉潔白に突き進む男は告げるのだった。

◇  
それからはとんとん拍子に用意が進んだ。

こちらとしてはやる気十分、躊躇う要素なんて何処にもない。だから多くもない荷物をすぐさま纏め、明朝には余裕を持ってフランクフルトを旅立つ備えが出来ていたほどである。

まだ日も昇り切っていない、少しだけ肌寒い朝。隊長含め関わりのあるあつた幾人かに挨拶も終えたオレたちは揃って駅のプラットホームに立っていた。

「結局、あんましフランクフルトでの思い出みたいなのは出来なかったな」

「そりゃ仕方ねえだろ、ずっと戦場を転々としてたんだから。ま、それ

でも悪くなかったとは思いたいところだが」

「酒場で双子に手を焼かされたのは一生忘れないと思うけどな。あ、そういうえばこの前あの二人にも会ったぞ」

「マジか。はー、俺も一言文句でも付けてやりたかったぜ」

あの双子は元気にしてるかなあとか、そういうえば挨拶もしてないし何者だったのやらとか思うものの、縁があればまた何処かで会うだろう。楽観的に考えながら帝都へ向かう便を待つ。

旧暦から残る駅のプラットフォームは初めてここを訪れたときと何も変わっていない。無機質で機械的な壁がずらりと続く一方で、篝火や蠟燭を用いて灯りを採るのは旧暦以上に旧時代で新西暦らしさを感じられる。

「それにしても帝都、帝都かあ……あんま考えたくないけど政府中央棟にはどんな奴らがいるのやら」

「本質はそう変わらないさ。既存利益の獲得ばかりに腐心し、下の者を見下し権勢に固執する典型的な者ばかり。たまたま良い家柄に生まれたから高い地位に座っている、そんな者たちの巣窟だよ」

「地獄絵図じゃねえか……こつちでアンタルヤの連中と斬り合ってる方がマシなんじゃと思えてきたぞ」

「なんだアル、帝都に着かない内からもう弱音を吐くのか？ そんな情弱では先が思いやられるが」

「冗談だつーの！　　ったく堅物はこれだから……」

はあ、と苦笑交じりに溜息をついたアルを横目にのんびりと線路の先を見やった。遠くまで続くその先に、アルの言う地獄絵図な伏魔殿が待っているのだろう。もしオレだけで異動にでもなっていたら流石に心細かったかもしれない。

政治なんてサツパリな今のオレたちは、帝都ではきつとやる気があるばかりの弱小者たちの集団と思われることだろう。軍事国家なのだから戦績も多分に重要とはいえ、実質的には張子の虎も良いところはず。

その中でどれだけの事が成せるのか。本当に腐敗した国を変えるなんて大それた行いが可能なのか。たった数名の個人がどれだけの



波紋を起こせるのか、不安がないと言えば嘘になる。

でも、その不安を全て薙ぎ倒して突き進んだから今がある。ならばもう行けるところまで行くべきで。

「これまでが英雄の紡いだ英雄譚なら、これからは持たざる者たちの逆襲劇になるのか……」

「詩的だが的確な表現だ。血染処女が誇る戦乙女の口から軍の若者に聞かせればきつと喜ぶのではないかね」

「やめろ、その言い方はホントやめてくれ。お前のせいでなんか猛烈に恥ずかしくなってきた」

ちよつとカツコつけて中二っぽく呟いたのがアホっぽくなるじゃないか。そういうのは大人としてスルーして欲しかったものである。

どうにせよこれまでとはあらゆる面で勝手が異なるのは間違いない。身体を鍛え剣を振り、最前線を駆け抜ければ良かった頃とは全てが違ってくる。出来ることならこの身体に残っている前世の記憶も参考にして早くそういった場に慣れてしまいたいものだ。

……そういえば。

こうして今とは違う自分の記憶を持つ人間は過去にも存在したのだろうか？ オレという実証がいるのだから過去に存在しない理由もない。もしかすると政府中央棟にそういった記録があるかもしれないし、調べてみるのもありかもしれない。

過去千年とまでは言わないから、数百年分くらいのデータベースでも残っていればの話だが。あんまり期待もしてないけど。

◇

——そこは、まるで墓場のようなであった。

この新西暦ではまず見られない複雑な機器類がいくつも並んでいるが、そのほとんどは沈黙を保ったまま動かない。埃を被ったそれらはまるで『作つたは良いが使い所が存在しない』と言わんばかりに放置されたままである。

なのだが、しかし。使われもせず埋もれた機械たちのその奥に。あまりにも巨大な硝子管の中で、圧倒的な意志の熱量を放つ“モノ”がいたのだ。

「ほう、久方ぶりに人員の入れ替わりが起きるか。さて、次こそは己の眼鏡に適う人間が見つければ良いのだが……」

硝子管越フラスコしにくぐもった声はどこまでも平坦だが、そこには微かな期待と共にやはり目を見張るような“力”が籠っている。まるで何年も、何十年も、何百年も同じことを繰り返してきて、それでもまだ飽きずに続けているかのような。期待はしてるが結果はほとんど見えていない、それでも一縷の可能性があるから迷わずやる——などという理論を声の主は疑いなく掲げているのだ。

「この数百年ついぞ現れなかった己と手を組むに値する逸材。今度こそ見いだしてみせようぞ」

嘯きながらも声の主は分かっている。自身の設定した基準が高すぎるから適格者が現れないのだ。

なにせ求める者は紛うこと無き傑物だから。

冥府魔道を苦もなく踏破し、不条理を一瞥しながら斬り捨てて。清濁を併せて？みながら、闇ではなく光をいつまでも掲げられる勇者こそを求めている。その難易度、その高望み、いかに厳しいものかは余さず承知しているとも。

だが、それがいったいどうしたという？

「勇者が現れぬというのなら、いつか世に羽ばたくその日まで己は待ち続けるのみ。いずれ運命の車輪を回し、大和をこの地に下ろすその日を目指して——」

鋼の恒星ほむらは未だ独り。

帝国の地下深くで、己が宿敵にして無二の協力者を待ち続けている。

## Chapter 33 政府中央棟／Central

軍事帝国アドラーにおける首都の象徴と言えば、何においても政府中央棟セントラルを置いて他にない。

大破壊カタストロフによって旧暦は日本軍の軍事施設と、フランスのモンサンミッシェルが融合したことで生まれてしまった摩訶不思議な建造物。旧暦のロストテクノロジーや複雑に融合した内部も相まってか未だその全容は割れていないが、それでも帝国の象徴として日夜灯りが消えることはなかった。

とはいえ、ならば軍事帝国の象徴らしく質実剛健、清廉潔白まつりごとな政が内部でされているかと思えば、これがそうでもない。

政府中央棟セントラルは怪物よりも怪物をしている人間たちの住まう万魔殿である——そんな冗談じみた感想を本気で持つようになったのは、オレたちが帝都にやって来てから3か月が経過した頃だった。

「報告・連絡・相談の風通しは恐ろしくらいに悪いし、ちよつとでも自分らに不都合な事案があれば速攻で握りつぶしにくるし、そのくせ態度ばかり偉そうで回りくどいし、まったく何なんだよホントにさ——！」

執務の間によく訪れた十五分だけの休憩時間——

そのわずかな時間にちよつと見かけたクリスを強引に捕まえ自室に連れ込んだところだった。そうでもしないとこの男は休憩を返上して働こうとするので仕方ない。現に今も手元の資料に目を通したままである。

「そう叫ぶな。こんな展開が待っていると覚悟の上で乗り込んだのは俺たちのはずだぞ？」 弱音を吐いている暇はない」

「弱音つっ——か愚痴だよ愚痴！ クリスは何も思わないのかよ……」  
まるでなじるような口調になりつつ備え付けの椅子に思い切り身を沈ませた。これまで体験したことのないようなフカフカした座り心地に思わず気が抜けるような声が出てしまう。心までダメになつてしまいそうだ。

この政府中央棟セントラルではオレたちに与えられた簡素な自室ですら調度

品の質は非常に高い。さらに贅の限りを尽くしてるのだから高官たちの部屋は一体どうなっているのやらだ。帝国らしい質実剛健とはハッキリ言って程遠い。

「そりや覚悟の上で政府中央棟に栄転されてきたけどさ。ここまで筋金入りで腐つてるとは思わないじゃんか。今なら影隊長の方が合理的ではあっただけ聖人君子に思えてくるよ」

「笑えない冗談だな。あの隊長も、ここに在る者共も、結局は弱者を踏み躪ることに長けた卑怯者共だ」

そこで一度言葉を切ってから、

「先ほどの問いだが、何も思わない訳がないだろう。いずれ俺の手で必ずや不徳の清算をさせてやる。だが今はまだ雌伏の時だ、打って出るタイミングを間違える訳にはいかん」

「そのために色々下準備もしてるわけだしな。行動すれば結果がすぐに結びつく訳じゃない、分かっているも苦しいな」

スラム育ちなのだから当然だが、オレたちには帝都での知り合いなんてほぼ存在しない。特に権力者との繋がりがなんて皆無な以上、後ろ盾のない身としては早急に誰かしらとのパイプが求められている。

そのためにオレたちが選んだ手段は同類探しと呼ぶべきものだった。今のアドラーの現状に不満を持っている者は必ずいる。例えば立場の弱い貴族だとか、能力はあるのに不当な扱いを受ける若輩だとか、もしかすれば遙か上の立場にすら腐敗を憂う高潔な人間がいるかもしれない。可能性は低いがゼロでないのだ。

都合の良い高望みだが、そこに一縷の望みをかけなければズルズルと腐敗の波に押し潰されるだけである。よってオレたちは帝都に戻ってくるや否や行動を開始した。

出来るだけ仕事を早く覚えてこなし、空いた時間でさりげなく同僚などに探りをかけていく。大概はスラム育ちという事実だけで蔑んでくるような者ばかりだったが、中にはギルベルトのように正当にこちらの能力や東部での活躍を評価してくれる人間もいた。そのような人間相手にちよつとづつ政治や政府中央棟での身の振り方の教えを請い、自分たちの知識として吸収している真つ最中なのである。

「道は長く険しいのが当然、報われる保証など何処にもない。俺もレーテもそれをよく知っているはずだ」

「千里の道も一歩からってか。幸いなのは意外と仲間を見つけられたことなのかね。思ったより好意的な人間も多くて驚いたよ」

「腐つても軍事帝国だ、純粹に武力に対する憧憬は強いのだろう。人殺しが上手いだけの男がこうまで評価されているのだから」

「良いじゃないか、そのおかげでオレたちだって動きやすいんだからさ。そんなに自分を卑下するなって」

元々ギルベルトなどはまず東部で功績を立ててから帝都に凱旋する予定だったと聞くと、やはりこの国において単純な力とは案外馬鹿にできるものではない。とりわけ東部戦線の英雄たるクリスに憧れる者はこの帝都にも少なくなかった。この点はこれまでの無茶無謀な戦いの成果を実感できた瞬間だろう。

ただ、それ以上に家柄や血筋のお陰で勞せず上に立ってしまう者が多いだけで。単にそう生まれたからという理由でのうのうと高い地位に就いた人間ほど、実力でのし上がってきた者に対して敵意と警戒心を抱く。自分を脅かすかもしれない相手を全力で排除しようと動き出すのだ。

だからまあ、オレたちもやっぱり万事が上手くいってるわけじゃない。むしろ向けられる感情のほとんどは僻みや妬み、侮蔑に差別とより取り見取りだ。何も嬉しくないけれど。

「そろそろ時間だ、行くぞ」

「分かってるよ、んじや行くか」

先が思いやられるというか、オレたちが存在感を示せるようになるまでどれだけの時間がかかるやら。

思わず出そうになる嘆息をグツと堪えて自室を出た。やるべき仕事はまだまだある。といつてもこれまでと違い派手さなんて欠片もない。それはクリスが剣ではなく書類の束を抱えてる時点で明白だろう。

コツコツと軍靴を響かせ廊下を歩く。隣に並んだクリスと行先は同じだった。

「今日はどこの部隊のを回されたんだ？」

「瞬<sup>カブリ</sup>山<sup>コリン</sup>羊のものだな。とはいえ現在は聖教国と事を構えている訳でもない、変わり映えのしない報告だけが並んでいる有様だ」

「こっちは銅<sup>タウ</sup>盾<sup>ウラ</sup>金<sup>ラス</sup>牛<sup>ス</sup>だけど同じようなもんさ。特に戦線を展開してる訳でもない駐屯部隊からの報告なんてたかが知れてるよ」

前線から異動したことにより、オレたちに求められる役割も文字通りに一変した。今や握るのは剣ではなくペンだし、向き合うのは戦局ではなく机になった。睨むのは敵兵でなく書面に記された数字や文字の羅列ばかり。この数か月で身体ではなく頭を動かす文官へと見事にシフトチェンジしたのである。

なのだが仕事の内容はハッキリ言って無意味な雑業そのものだ。東<sup>げ</sup>部<sup>き</sup>戦<sup>せん</sup>線<sup>く</sup>の血<sup>バ</sup>染<sup>ル</sup>処<sup>ル</sup>女<sup>ゴ</sup>や猟<sup>ス</sup>追<sup>コ</sup>地<sup>ビ</sup>蠍<sup>オ</sup>と違って大した動きもない部隊部署から送られる、非常に雑多な書類や報告書と延々睨めっこする毎日の繰り返し。やれ予算がどうだの物資や人員がどうだのと、向こうも通る訳ないと分かっている要求をこちらで見易くまとめはやる気のない上司に提出するだけだ。重要そうな仕事に見えて肝心なところは何一つとしてこちらに回ってこない徹底ぶりにはいつそ感心すら覚えてしまう。

執務仕事の新米の業務なんてたかが知れていると言われればその通り。ただの意味もやり甲斐も何もない日々には辟易する。というより穿ちすぎでなければ、わざとこういう閑職に回されているのだろう。オレとクリスはこうしてほぼ意味のない仕事に従事してるし、アールは別部署だがやっぱり無味乾燥な仕事ばかりやっていると聞く。ギルベルトだけはマシだと聞くが、そんなところだ。

出る杭は打たれ、かつて英雄と呼ばれた人間も所詮は人——なんて意思が透けて見えた。これまでとは大きく違うフィールドで閑職に追いやってしまったえば下賤な者に打つ手なしと、きつとお偉方は考えているのだろう。分かりやすいにも程がある。

そうこう考えている内にオレたちの職場へと辿り着いた。あんまり光の入らないような隅っここの部屋だ。漂う陰鬱な空気はこの場所が厄介払いされた人間だけを集めたものと如実に理解させてくる。

「それじゃ、また後でな」

「ああ」

ひらひらと手を振っていったんクリスと別れた。机に向き合い面白くもなんともない書類に目を通しては、テキスト極まりない要求をピックアップするだけである。チラリと横目で確認すればクリスも黙々と同じことをしていた。その横顔からは何の感情も見取れない。

さらに周囲を盗み見れば、他の者はほとんど生気のない顔で淡々と事務をこなしているだけだ。もはや長くはないだろう。彼らはこの状況に反抗する気概すら失ってしまった抜け殻みたいな人間になっている。

ただの剣を振るうしかない英雄であつたなら、この手はきつと効果的だった。

つまらない仕事をこなす間に気が付けば心が腐り、何事にも無関心になり飼い殺される。向こうとしても自分の土俵で相手を骨抜きにしてしまう必殺の布陣のつもりだったはず。これに立場や生まれによる差別、侮蔑まで加われれば簡単に心をやられて引退だ。

なのだがそこは鋼の英雄、この程度の謀略など涼しい顔だし気にも留めない。むしろ閑職だけあつて時間は余っていることを有効活用しては水面下で走り回っている。

カリカリ、カリカリ。ペンを走らせる音と、たまに紙をめくる音だけが静かな室内に響く。

ずっといれば魂さえ抜き取られそうな無気力空間で、ひたすら無心で作業だけに没頭してやる気を保つことしばらく。

「……………つと、終わりか」

気が付けばもう終業時間だった。あまりにも面白がなさ過ぎて思考が半ば飛んでいた気がするが構わない。重要なのはむしろこれからのだから。

各部署からの要求をまとめた書類を上司に渡して確認してもらおう。しかし文章へと目を通す姿はあまりにおざなりで、本当に読んでいるのかすら不明だ。はつきり言つて覇気もやる気もない。

まだ年若い青年であるこの上司も、聞くところによれば下級貴族の生まれながら優秀ゆえに左遷されてしまったのだとか。おおかた自分のポストが奪われることに恐怖した高官だれかの差し金だと予想はつく。その末路が袋小路の閑職部屋の主ともなれば無気力になるのも無理はない。

「確認した。今日の作業はこれにて終了だ、ご苦労だった」

機械的に署名し、機械的に終了を告げられる。本当に目を通したのかすら怪しいが仕方ない。なのでこちらもまた事務的に返答してから一礼してからその場を後にした。

「ホントにさ、見てるだけでもキツイよ。理不尽のせいであんな姿に成り果てるなんてさ」

「それがこの国の中枢に蔓延る歪みそのものだ。稚児でも分かる不条理が横行していて、それに声を上げられるものはごく少数。存在したところですぐに潰されるのがオチだろう。その中で正しくあれる者、毅然と前を向ける者など奇跡に近いと言っている」

先に退室していたクリスの隣へ足早に追いついた。彼の言葉こそ今のアドラーの現状を正しく述べている。

上に立つ者で本当に優秀なのはごく一握り、その他大勢の“真面目で向上心のある人間”ほど台頭を恐れる小物の手により潰される。不当な左遷、苛烈な同調圧力による追い込み、実質的に仕事を取り上げる、他にも他にも——何もオレたちだけが特別に飼い殺されてるわけではないのだ。

ただ親友クリスの隣に立ちたい一念のオレには、大きな野望も成したい勝利ユメも無いけれど。この帝都に横たわる理不尽にはどうしたって腹が立つ。小市民的な怒りかもしれないがやっぱり不正は許せない。

ならば、現状を是正するためには、この腐敗した政府中央棟セントラルで上へ上へと成り上がる他に道はなく。

オレだけなら周囲に潰され流され諦めてしまったかもしれないが、オレは一人ではないから。信頼できる幼馴染と戦友がいて、共に未来を目指している。ならば不可能など何処にもない。



だからその為にはまず——地道な活動が不可欠なのだ。

◇

このアドラーに不満を持つ者、より直截的に述べてしまえば改革派を見つげ出すのは並大抵の事でない。

まず上位の者から率先して不道徳と汚職へ手を染めているうえ、声高々に不満を語ればそれだけで肅清される危険性すら存在する。そんな中でコネも繋がりもない、帝都へ異動してすぐの若造たちが彼らと手を結ぼうとするなど不可能と言って良かった。ギルベルトの神算鬼謀ですら信用を貰い渡りを付けるには時間がかかりすぎってしまう。

よって、打つべき最初の一手は満場一致で決まっていた。

帝都へと戻ってきてからほんの数日後に、オレたちは懐かしい場所へと訪問していた。

「果たして何年振りになるのか……久しいな、変わらず健勝のよう何よりだ」

神妙に頷いたのは、かつてオレたちが剣術を教わったトナリ・ムラサメ教官である。彼はムラサメというアマツの傍仕えとなる家系の一族だが、今は引退して士官学校で教官をしている。とてつもない剣の使い手である教官とはほんの半年程度の関わりしかなかったが、それでも縁は縁である。

今は一線を退いていようとかつてはアマツの懐刀であったのだ。だからオレたちよりも明らかに上層部の内部事情には詳しいはずだし、そうでなくとも様々な生徒を見ているのだ、思いも寄らない情報を聞けるかもしれない。

そのような打算と、後は純粹にもう一度会いたい気持ちも含めて三人揃って教官の下を訪れたのである。

「この帝都でもお前たちの活躍はよく聞いていた。短い間でも俺の手掛けた生徒と剣が武勲を残したことを誇りに思うぞ」

「光栄です。自分たちは出来ることをやっただけ、そして出来ることを増やしてください。それは教官の指導があればこそでした」

「英雄とも呼ばれる男が謙虚なことだ。いや、お前はあの頃からそう

だったな」

——それで、お前たちは何を成すためにここへ来た？

鋭い視線だけで言外に問われた。

老体から放たれる威圧感に身が竦んだのも昔の話、戦場を渡った今なら真正面から相対できる。

「自分たちはこのアドラーに革命を齎したい。そのためには仲間が多く必要です」

「ですが当然ながら私たちに横の繋がりなど全くありません」

「なので教官ならばあるいは現状に不満を持つ者をご存知なのではと  
考え、こうして足を運んだ次第です」

「なるほどな……言いたいことは理解した」

単刀直入、飾り気のないこちらの訴えに教官は静かに頷く。

無理とも言わず、言外にアマツを打倒すると告げるこちらに怒ることもない。ただ凧いだ湖面のように姿は揺るがず、しかし紡がれた言葉には隠しようなない落胆が含まれていた。

「確かに今の帝国の姿は目に余る。ああ、大した能力もないのに金だけ積んで裏口から入ってきた者もごまんと見てきた。こんな奴らに我が剣を教える羽目になるのかと本気で悩んだこともある」

「なら……」

「だが、それと俺の持っている情報量の多寡はまた別だ。引退した老骨一人が持ちうる情報などたかが知れている。はつきり言ってお前たちの必要とする量にはちつとも届かないだろう。それでもか？」

「それでもです」

明瞭にクリスが断言する。そんなことは一つも問題ではないと視線が、口調が、全てが物語っている。

「ここで教官から頂ける情報は非常に貴重で有用なものに疑いはありません。ほんの僅かでも一つの道筋があるのなら、そこから幾らでも望む未来へと邁進できる。自分たちはそのようにして生きてきました」

「それが持たざる者たちの考え方、か……リスクも勝算も度外視で突き進むとは。いいや、だからこそ東部戦線の最前線で戦ってなお生き

残れたという訳か」

「自分はこういった生き方しか知らないものですから。誰かの幸福のために、光を目指して突き進んでしまおう大馬鹿者です」

「本当に大馬鹿だ。個人が抱く野望にしては大言壮語も程がある。それに付き合うお前の友も大概だな」

この場の四者の視線交わる。お前にそれが出来るのか——言われるまでもない、成し遂げる。譲れない意志がぶつかり爆ぜて、知ったことかとばかりに一歩も後ろには引かない。

そんなやり取りを交わしてから、教官はフツと笑い肩の力を抜いた。呆れたように頭を振って

「良いだろう、ならばやって見せるがいい。俺とて実力ある剣士が磨り潰される様は我慢ならん。かつての主を裏切ることまでは出来な  
いが……」

「結構です。どのような些細な情報だろうと、必ずやこの手に勝利を  
掴んでみせましょう」

「よくぞ言った。まったく、この時代に生まれた癖に眩しすぎる男だ  
よ」

まさかこんな若造に憧憬すら抱くことになろうとはな。

噛み締めるように呟いた教官の言葉が、とても印象的だった。

◇

それから先はとんとん拍子、とはやはり行かず。

まずはムラサメ教官に仲介してもらった数少ない改革派の人間に  
接触して頭を下げ、志が同じであること告げ。それからは自分たちを  
信用してもらえよう地道に磨き、身の振り方を学び、さらにギル  
ベルトと協力して情報をいっそう集めたり……政府中央棟を所狭し  
と駆けずりまわった。

やはり改革の意志を持った者は少なく、帝国全体を支配する貴族主  
義な血統派からすれば吹けば飛ぶ藁のようなものである。表立って  
動くことも出来ないからには同じ理想を抱いて燻る者を探すことす  
ら遅々として進まないことだあってある。だけでも諦めてしまえばお  
終いなのだ、それだけは出来ないとはかりに面従腹背を貫き通した。

どうやらその間にも、東部戦線で活躍した若き英雄の噂は少しずつ広まっていたらしい。実質的な左遷であることは政治に携わる者からすれば瞭然らしいが、それでも腐らず動き続ける姿に感化された者も僅かずつ出てきている。自分から頭を下げて協力を要請する姿も帝都ではとても珍しいのか感心されたことすらある。

牛歩の歩みながらも信用を得て、仲間を増やし、段々と改革派の規模が大きくなってくる。

一年も経過した頃には、謙虚な姿勢と絶大な意志の力を見せたクリスの立ち位置は改革派の中でも中心に近い位置にまで到達していた。アルは調整役として上からも認められる程度には部署間でのバランスが上手くなっていったし、ギルベルトは相変わらず二重スパイじみたことを続けている自由つぷりである。

それに比してオレの活躍はと言えば非常に地味であるものの、不本意ながら得てしまった戦乙女の称号を活かして仲間の獲得に奔走していた。カリスマ性も無ければ頭脳だって凶抜けてる訳じゃないが、クリスに続く象徴になるくらいは出来る。使えるものは何でも使えの精神だ。

後はまあ、暗殺されかけたこともそこそこある。深夜にいきなり襲撃されたりとか、飲み物に毒を混ぜられていたりとか。前者はどうにか撃退できたが、後者は何気なくギルベルトが予言してなければ危なかった。感謝しかない。

——なのだが、しかし。それ以上の転機は唐突に訪れる。

ある日から急にクリスの姿を見ない時が出来た。いつも精神的に活動しているしちよつとした会話なら毎日交わっていたというのに、まるで政府中央棟から消えてしまったかのように姿が見えないことが頻発したのだ。

いったいどうしたのかと悩むことしばらく。疑問も晴れないままに何故だかオレは地下深くへと向かう通路を歩いていた。いきなり降って湧いた謎の特命に首を傾げ、もしや暗殺かとも警戒しながら下へ下へと進んでいく。

「まるで冥府に続く道標……みたくない」

ふと心細くなつて冗談を言うも、それすら暗い廊下に吸い込まれ消えていく。あたかも墓標のような静けさだ。

そして、辿り着いた先に存在したのは嚴重に封のされた巨大な扉。しかしオレが近づいた途端に勝手に開き、まるで歓迎するかのようにその先への道を示してくる。

「……は……」

まず目に入るのは見るからに複雑そうな機械の類だ。新西暦に生まれてこの方、このようなものにお目にかかったことなど一度もない。前世の知識にだつてこんなものがあつたかどうかだ。

けれど、それ以上に目を引かれるのは真正面に鎮座する巨大な硝子ガラスの円管。隣に立っていたクリスの姿に思わず安堵の息を漏らしてしまふが、今回ばかりは硝子管ガラスコの中に漂う奇怪な人影に視線が釘付けになつてしまふ。

太陽の如き熱量を携えた存在が、そこに鎮座していたのだから。

「よくぞ来た、マルガレーテ・ブラウンよ。喜ぶがいい、お前を己の選ぶ二人目に据えてやろう」

「……ッ！」

尊大な物言いが実にしつくりくるほどに圧倒的な意志の力。

こうと決めた事柄を必ず曲げずやり通す頑固さ。

声音に秘められた燃え盛る熱情。

その全てがクリスに匹敵するという規格外の存在が、オレを真つすぐ見据えていた。

——この出会いこそ、オレにとっての第二の始まり。

後に世界の行く末すら左右することになる、星辰感應奏者エスベラントの技術と出会った瞬間だったのだ。

## Chapter 34 星辰奏者／Esperant

星辰体<sup>アストラル</sup>——それはこの新西暦を新西暦たらしめる最大の要因にして、未だ詳細不明の粒子である。

世界に齎される主な現象は既に判明しているが、いったいこれらごどのようなようにして生み出されているのか、他に役立つ使い道があるのかすら依然として不明な有様。出所だけは天空に鎮座す第二太陽<sup>アマテラス</sup>から常に放出されていると分かっているが、本当にそれだけのブラックスボックスなのだ。

そして、全ての元凶たる大破壊<sup>カタストロフ</sup>からおよそ千年の時を経て。人類が未だに星辰体の正体すら掴めていない傍らで、鋼の恒星<sup>ほむら</sup>は静かに静かに、星辰体を用いた新技術と計画を練り上げ続けていたのである。

◇  
「なんだ、この男は——？」

眼前の硝子管内<sup>フラスコ</sup>に存在する圧倒的なそれに対し、まず抱いた感想がそれだった。

外見は長身？ 軀の黒髪の男性……ということでもいいのだろうか？ 疑問形になつて理由は一目瞭然で、彼には下半身と片腕が存在していないからだ。常人ならば明らかに生きてるはずがないというのに、なにがしかの溶液で満たされた円管の中で泰然として浮かんでいる。というか、信じがたいがチラリと傷口から覗いているのは機械の類か？

“それ”はこちらを真正面から見据えると、傲岸不遜な口調で語りかけてきた。

「よくぞ来た、マルガレーテ・ブラウンよ。喜ぶがいい、お前を己の選ぶ二人目に据えてやろう」

「……おまえ、は」

どうにか声を絞り出す。気が付けば喉がカラカラだった。

はつきり言つて状況の理解が追い付かない。なんだコイツは、いつ

たい何者なのだ。どうしてクリスマスまでもがこの場において、しかも彼に匹敵する意志の力を携えていると一目で理解できてしまうのか。肌を感じるプレッシャーは天井知らずのようであり、馬鹿げた比喻かもしれないが、まるで太陽を目の前にしたかのような圧迫感と熱量を覚えてしまう。

この異様な状況にオレが戸惑いと気後れを見せるなか、“それ”はあくまで自然体のままだった。

恐ろしいし信じられないが、“それ”は何ら気負わぬ自然体で他者を圧倒できるだけの熱量を維持しているのだ。

「ああ、戸惑いを持つのは実に自然な反応だろう。しかし懇切丁寧に説明をする義理もないのでな、単刀直入に言わせてもらおうが……お前には新西暦における最新最強の人間兵器<sup>エスペラント</sup>、その第三号になる栄誉がたつた今渡されたのだよ」

気遣っているようでその実、尊大で威圧的で、加えこちらを下に見ている物言い。なのにその態度が板についていると感じる程度には似合っているというか、まるでオレたちよりも上位の種族であるかのような……あたかもすべてを掌の上で操る神にすら似ていると思ってしまうのは大和<sup>カミ</sup>に対して不遜だろうか？

だがそんな印象より先に、新たな単語が出てきたのが気になった。エスペラント、とはいったい何を指しているのか。察するに人間に対して何か行うということなのだろうか……きつとコイツに聞いても罅が明かない。

「なあクリス、簡単でもいいから説明してくれ。コイツはいったい何者で、そのエスペラントとやらは一体何なんだ？　ここしばらくお前を見ない日が多かったのはこんな所に来てたからなのか？」

だからその隣で無言を貫いていた幼馴染<sup>ケッリス</sup>へとようやく意識を切り替えた。

普段なら彼のことから目を離すなんて頼まれようと無理なのに、今度ばかりは完全に注意を奪われてしまっていた。それだけでも現状の異常性がよく理解できてしまう。彼に匹敵するような存在がまだいるなど、正直言って考えたことすらない。

オレからの問いに対してクリスは、珍しく渋い顔で答えてくれた。だがその態度はまるで「お前には教えたくなかった」と言っているかのようで。その様を面白そうに眺めている正体不明の“それ”の姿が何処となく不快だった。

「二つずつ答えるでしょう。」 “それ”の名は迦具土神——大和の遺物にして星辰体アストラルを用いる人型人造兵器だ。そして今の俺はカグツチの代行者にして、同盟者でもある」

「星辰体アストラルを用いる人型人造兵器……!? つーか待て、大和の遺物……確かに政府中央棟こは旧日本軍の施設が融合したものだけ……それがクリスの同盟者？ ちよつと待ってくれ、整理させてくれ」

「……当然だろうな。俺とて最初は戸惑った」

「いいや、お前は最初から実に堂々と振舞っていたと己は記憶しているが？」

冗談めかした合いの手もいったんシャツアウトし、大きく深呼吸。冷静にならないとちつとも情報が頭に入ってこないのだ。

ざっくりまとめれば、カグツチとはつまり旧暦の日本が作ったロボットという認識でいいはず。それがおそらくは大破壊カタストロフによってこんな欧州方面ヨーロッパにまで飛ばされ、以降は地下に潜んでいたという訳か。それなら新西暦で見たことのない機械がそこら中に転がっている理由も、このカグツチ自身が半壊ながら平気で生きているのにも領ける。中核コアとなるCPUやメモリが破壊されていないならどうにでもなるということだ。

そしてクリスの語った代行者にして同盟者というのはつまり、「要するに、そのカグツチとやらはそのデカイ試験管から出れないってことだな？ だけどやりたいことがあるからクリスを選んで代行者に仕立て上げた。で、大人しくクリスが従う訳もないだろうから見返りも渡して、それで同盟者ってことだ。違うか？」

詳細な目的も理由も知らないが、推測としてはこんなところだ。当たらずとも遠からずだろう。

それが証拠に初めてカグツチがこちらに対して感心したような表情を向けてきた。



「ほう……存外呑み込みが早いではないか。さすがはヴァルゼライドの朋友、やはりただの凡夫ではなかったか」

「俺が友誼を結んだ人間は数少ないが、それだけに誰もが誇るべき友であると思っている。あまり見くびってもらっても困るな」

「クク、それはすまなかつたな」

「つたく、随分と仲が良さそうなことだ」

思わず毒づいた。褒められたなら素直に受け取っておくが、それはそれとしてこの二人の奇妙な仲の良さが気になってしまう。

いわばシンパシーでもあるのか、互いに隙は見せないながらも息が合っているように感じる。利用し利用される無味乾燥な関係だけではないか。もっと損得を外れた地点でノリが合っているかのような、これまで一度として見たことが無いクリスの姿だった。

……昔からの馴染みであるクリスのそれに、どこかモヤモヤした感情も広がるが。今はもつと重大な情報に目を向けよう。

「で、話の続きだが。エスペラントとやらはどういう意味なんだ？

まさかオレをカグツチこいみたいなのロボに改造しようとか言うんじゃないだろうか？」

「似ているが、そうではない。正確には人間のまま強化手術を受けることにより、星辰体アストラルの恩恵を受けることが可能な超人へと進化させる。それこそが星辰体感応奏者——すなわち星辰奏者エスペラントだ」

「星辰奏者エスペラントって……まるで物語に出てくる超能力者みたいじゃないか。本当にそんなことが可能なのか？」

「可能だとも、間違いなく。その生き証人がそこにいるではないか」

その指摘にハツとした。そうだ、クリスはもつと前からカグツチと邂逅しているのだから、当然ながらその星辰奏者エスペラントになる時間もあったはず。最初にカグツチも言っていたではないか、オレは『己の選ぶ二人目』だと。ということは間違いなくオレの前にあと一人、この話を知っている人間がいる訳で。

もはや考える必要すらない結論へと達し、クリスもまた頷いた。

「そうだ、俺は既に星辰奏者エスペラントになっている。身体能力はかつてと比べ物にならないほど上昇し、更にこの手は塵殺おうぎつの光を宿すに至った。そ

の証拠が、これだ」

言いながら七刀の一本を引き抜いた。東部戦線から愛用している七刀流のスタイルは見慣れたものだが、刀剣の形状はわずかに異なっているようにも見えた。

果たしてそれで何をするのか。期待と怖れと好奇心とに支配された心情のまま固唾を飲んで見守る。

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星」

まるで祝詞のりとのように厳かに、地下空間にその一節が響き渡った。

それと共にクリスの握る刀剣が輝き出す。眩いまでに黄金の光を纏った剣。ただそれだけだが、そうではない。

遠くから見ても分かるのだ。その輝きが秘めた圧倒的な熱量を、燃え盛る激情をそのまま形にしたかのような攻撃性を。理屈ではなく直感で途轍もない光であると理解出来てしまうのだ。

だけど、そう。何よりもまず、その輝きに目を奪われる。

彼の理想と意志が光になったような輝きに魅入られてしまうがない。

「綺麗……」

鮮烈で、眩くて、憧れる。

もうずっと昔になってしまったあの日、クリスが助けてくれた時の背中を思い出す。あの輝きに魅了された瞬間を思い出し、半ば反射的に触れてみたいと手を伸ばしかけた。もちろん触れば最後破滅しかないで頭では理解してるのに、それでもあの光に自分も近づきたいと願ってしまうのだ。

けれどオレが理性と本能で逡巡してる間にクリスは光を鎮めてしまい、静かに刀剣を鞘に戻した。地下の空間を照らしていた黄金光も掻き消えてもとの薄暗さが舞い戻る。

それを残念だと感じてしまった気持ちを引き締め切り替えた。本題はここからだ。

「これが星辰奏者の宿す力、星辰光だ。レーテが言った超能力者という例えものを射ているだろうな」

「今のが、星辰奏者の力なのか……あの輝きが……とんでもないな」

「カグツチ曰く、より詳細には個人によって千差万別になるらしい。個々人の性格や信条、星に対する素養の大小などがそれを決定付ける。まだ俺ともう一人しか検証出来ないがほぼ間違いないはずだ」

「もう一人？ いや、何となく想像は付くが……」

「ああ、そいつで間違いない。奴にはいずれ問わねばならないことがあった、これを機に腹を割って問いただすつもりだが……それは横に置いておこう。重要なのはこの力を改革派に持ち帰れば、政府中央棟におけるこちらの立場が計り知れないほどに巨大となることだ」

それはもちろん承知していた。この技術が公になれば軍事国家アドラーに超能力者が量産され始めるのだ。すなわち戦場はアドラー帝国一強となり、東部戦線という激戦区すらさらに押し上げることが可能となる。帝国へ齎す利益は莫大という表現すら生温く、よつて星辰奏者とは政治的立場など容易にひっくり返せる最強の切り札となるのだ。

確かにこれだけの見返りを提示されればクリスがカグツチの同盟者となったのも頷ける。彼の目的はあくまでも帝国の腐敗を一掃することなのだから、そのために必要な鬼札ジョーカーは喉から手が出る程に欲しいはず。きつと時間をかければいつかは改革も成功するだろうが、それまでに犠牲になる人間を鑑みればここで躊躇する理由すらない。「ひとまずの詳細は理解したよ。つまりカグツチは星辰奏者を生み出す技術を持っていて、それをクリスに渡す代わりに何某かの行いを代行させようとしていると。で、それならカグツチはクリスに何をさせようとしてるんだ？ わざわざオレを選んだ理由はなんだ？」

こちらを見据えるカグツチの圧にも今や怯みはしなかった。大丈夫だ、状況は呑み込んだし隣にはクリスだっているのだから。いつまでも縮こまってばかりではいられないとばかりに疑問を叩きつけていく。

「いいだろう 後者の疑問程度なら答えてやってもいい。これは単純に、検証結果が多い方がより良いからに決まっている。己の計画には数多くの実験結果があることが望ましいが、取り分け女性を星辰奏者

にした場合の情報が必要なのだな」

「女性を、ねえ……」

それが精神的な意味だというなら、カグツチの思惑は見事に木端微塵な訳だがそこは黙っておくとして。

なんとも機械らしい合理的な理由付けだった。計画を成すなら当たり前にあらゆる角度から検証したデータがあった方が良く、そうすればどのような事態が起きようと対処が可能になるうえ、新たなことに挑戦する場合もサンプルとして活用できるからだ。基本にして奥義と言ふべき情報収集をカグツチは愚直に成そうとしているのである。

「付け加えれば、己はお前個人にも多少の興味があった。クリストファー・ヴァルゼライドという傑物を友と仰ぎ、その背中を追いかけた人間が果たしてどのようなものなのか。あと数人ほど候補はいたが、これに先の理由を加味してお前を選んだのだ、マルガレーテ・ブラウン」

「そいつはどうも。なら聞かせてもらうが、実際に会ってみてどうだった？」

「興味深い——というのが率直な感想だ。大和の使者たる己と相對しても立ち向かえるその態度、記憶回路メモリーに残っている一般的な女性とはかけ離れたその言動、ヴァルゼライドへ向ける信頼と憧れ……総評すれば『それなりに気に入った』と表現するのが妥当だろうよ」

「それなりか、随分とまた上からな褒め言葉をありがとう」

別に自分が傑物であるなんて思ったことは無いが、こうもあからさまに評価を下されるとさすがにムツとくる気持ちもある。

クリスが凄いのオレも同感だが、初対面のお前にここまで言われる道理もないというか。さつきからどうにもカグツチとは反りが合わないような気すらしてくる。自分はある限り怒りっぽい性格でないかと自認してるが、これはもう相性が悪いのか。

「ならもう一つ、お前の目的は何なんだ？ 何をするためにこんな破格の技術を渡してまでクリスを引き込んだ？」

「そちらに答えるつもりはない。最初に告げたであろう、懇切丁寧に

説明をする義理はないと」

「ちつ、そうかよ。なら遠慮なくクリスの方に聞いてやるさ」

薄々そうなるだろうと予測していたので、すぐにクリスの方へと向き直る。

「こんな見るからにヤバそうな奴から出された条件なんざ碌なものじゃないだろうし、出来る限りはオレも手伝うからさ。言ってみろよ、お前はコイツへの見返りに何を要求されたんだ？」

よっぽどんでもない話だとしても、微力だろうとオレはクリスに着いて行くつもりだった。当然だろう、彼がいればオレたちに負けなんてないのだ。最終的にカグツチと反目するのか協力するかも知らないが、どう転ぼうが最後は必ずクリスが勝つと何ら疑うことなく信じている。

だから、そう、たった一つだけで良いのだ。これまでと同じように共に往けるならば少しの文句もないというのに。

「いいや、こればかりはたとえお前だろうとも明かせない。カグツチの目的に付随する艱難辛苦の全ては俺一人で背負うべきものだ」

「……おい、今更そんな水臭いこと言うのかよ。これまでだって——」  
「この件はこれまでとは全く違う領域の話なのだ。どれだけの困難がその先に待ち受けているかなど想像すら出来ん。故にこそ、友であるお前にまでこの業を背負わせる必要はない」

「お前はまた、そうやってツ——！」

オレを置き去りにして一人で雄々しく前へと進んでしまうのか。その言葉が喉の奥から出てこなかった。掠れたような声だけが小さく木霊する。

幼少の頃の誓いであり、同時にトラウマにもなったあのときを否応なしに思い出した。こいつはオレのことを気遣っているかのようで、その実『一人で進む方が都合が良いから』という理由で前へと進んでしまうのだ。抱いた友情が本物であることはオレだってちゃんと理解してるのに、呆気なく切り捨ててしまえるし孤高の選択を躊躇うことなく選んでゆく。

だからオレはこいつの隣に立つのに相応しい人間になりたかった

のに、友であることを誇れる人間になりたかったのに。まだ駄目なのか。オレには力も頭脳も大してないが、ここまで共に歩んできた道程だけは本物だと思っていたのだが。

「理解してくれなどと都合のいいことは言わん。恨んでくれて構わんし、友としての絆を断ち切るというならそれも一つの報いだろう。だが俺は決めたのだ——このアドラーに光を齎すためならば、どのような悪鬼外道が待ち受けようとも全てを斬り伏せ進むのだと」

「そうかよ、まったく……ホントにお前は子供の頃から変わらないな。いつまで経つてもあの頃と同じ頑固者だよ」

呆れや怒りを通り越して乾いた笑いしか出てこない。本当に、始点からベクトルが微塵もズレていないのだから恐れ入る。分かっていたが筋金入りでどうしようもない。一度決意を抱いたクリスを説得するなんて、無限の時間があつたとしても不可能という他ないだろう。

しかし、分かっているならやりようは幾らでもある。

「ま、それならそれで良いさ。秘密って事にしといてやる」

「……意外だな、お前らしくもない。レーテならばもつと食い下がると予想していたが」

「そんなことしてもお前が相手じゃ押し問答で時間の無駄だからな。

我慢比べなんてしたら誰がクリスに敵うかよ」

「ならばお前はなんとする、マルガレーテ・ブラウン？ 諦めて泣き寝入りするというなら己は止めぬが」

「ここで問いを投げかけてきたカグツチへ、オレは誇りをもって宣誓する。」

「決まってる、オレはオレで勝手にやらせてもらうだけだ。別にお前やクリスの邪魔はしない、だけど事情を知らないからと一人で諦めたらだつてしない。どうかかして食らいついて関わるさ」

「自らを役立たずと言って切り捨てたも同然の男を、まだ見放さぬということか」

「そんな当たり前のことを聞くか普通？ 悪いがオレだつて意固地で諦めが悪いんだ、じやなきや友達なんてやってないさ」

その程度でこれまで積み上げた絆が壊れるほど、やわな関係ではないと信じているから。

今度こそオレは「誓約者」であり続けよう。胸に刻んだ決意に恥じない人間として、クリスを助けてやるために。

「忘れるなよクリス、オレは何があってもお前の友達なんだから。絶対にお前の力になる」

「……………そうか」

ゆつくり、深く、クリスは一言だけ呟いて。

「後日叡智宝瓶から新たに特命が来るはずだ。星辰奏者になることに異存がなければそちらの指示に従って行動しろ」

「異存なんか一つもないさ。お前に追いつくための第一歩、必ず踏み出してみせるとも」

——かくして此処に、オレの運命は再び決定づけられた。

共犯でもなければ敵でもない、第三者として鋼の英雄を追いかけるといふ運命へとひた走りだしたのだ。

◇

そして、薄暗い地下から光差す地上へと帰還したマルガレーテを見送って。

後に残された英雄と神星は二人して静かに言葉を交わす。

「お前は随分と友に恵まれているな。まさか怒ることなくあのような反応を返すなど、己をしても予期してなかったと認めるほかない」

「ああ、まったく得難い友だとも。アルもそうだが、光しか知らぬ俺にはあまりに過ぎた友人だ。誇りと思う心に嘘など欠片もありはしない。だからこそ、お前がアイツを呼ぶと言い出したときは忸怩たるものがあったが…………」

だがそれでも、目的の為なら躊躇なく友を切り捨て駆け出せるのがクリストファー・ヴァルゼライドのどうしようもない宿痾である。自覚はあっても止められない。いいや、そもそも止まり方すら知らないのだ。

一度走り出せば後は目的を達成するまで絶対に屈さず駆け抜けてしまうその在りよう。そんな姿に驚愕と賛辞を覚えたからこそカグ

ツチもまた彼を代行者に選んだのだから。喝采こそすれ正そうという気は少しもない。

「しかし、これで『聖戦』に向けての準備は整った。彼女を星<sup>エスベ</sup>辰<sup>ラント</sup>奏者とし、データを得ればもはや盤石だろう」

「後は俺とお前、どちらが『第二太陽』<sup>アマテラス</sup>を手に入れるかの勝負だけだ」

どちらもそれこそが本命。しかし目的は正反対であり、いずれヴァルゼライドとカグツチは雌雄を決することになる。

互いに利用し利用されるが、最後の一戦だけは決して譲らず揺るがない。

「いずれ来るべき『聖戦』に向け——」勝つ『のは己だ』

「いいや、『勝つ』のは俺だ」

両者は強く強く宣言し、本懐を遂げるその日を待ち望むのだ。



## Chapter 35 星々の力／Astral

星辰奏者エスベラントになるための強化措置、などと聞いていたのでどんなえげつない手術が待ち受けてるかと思ってみれば。

終わってしまったえば拍子抜けなほど呆気なく、叡智宝瓶アケエリアスの技術士官の指示に従うままにアツサリと新世代の強化人間へ生まれ変わっていったのである。なんとというか、劇的な展開が一つもなく良かったような残念なような、そんな気分だった。

どれくらい呆気なかったかといえば、

「本当にこれで終わりなんですか？ ベッドで寝てる内に終わったよ  
うなものですけど……」

「戯けか貴様、その身に宿した力を何も感じぬというのか？ であればお前は失敗作よ、さつきとここから失せよ」

「ええ……そんな言い方しなくてもいいでしょうに。私もちゃんと感じ取れますから心配には及びませんけども」

などと目覚めた直後に間の抜けたやり取りをした程度にはアツサリだ。あの時は本当に寝て起きたら星辰奏者エスベラントになってたくらいの感覚しかなかったせいで、とても実感なんて湧かなかったから仕方ない。

それにしても、思い返せばあの時の老技術者は随分と口が悪かったし、研究職とは思えないくらい身体を鍛えてたようにも見えた。この件に関しては叡智宝瓶アケエリアスの中でも超一流の技術者を集めた上で固く緘口令が出ているらしいが、どうやら天才や秀才に際物が多いというのは本当らしい。奇人な天才に生まれなくて良かったなー、なんて暢気のんきに考えたりもしたくらいだ。

ともあれ、随分とのんびりした感想ばかりになったが無事に星辰奏者エスベラントになることは成功した。星の力を宿すためには大気に満ちる星辰体アストラルとの感応が特に重要であるらしく、こればかりは先天的な才能が幅を利かせるとか。星辰体アストラルと感応する才能アンテナがなければいくら強化措置を施したところでうんともすんとも言わないと最初に説明を受けていた。

だが幸運にも——といつてもカグツチが選んだ時点でそのようなだろうが——オレには星辰光アステリズムを宿せる才能がしっかり有ったようであり、第一関門はどうか突破出来たという訳だ。その後は簡単に経過を見守り、特に身体に異常がなければ基本的に元通りの生活に戻れる……とも説明を受けてはいたものの。

叡智宝瓶アケエリアスの研究施設より退院？ してから早二日。既にオレは新西暦の最新兵器となった自分との付き合いに悩まされ始めていた。「すっごくいい身体能力上がってるな、これは……」

あてがわれた自室で一人ごちた。どうしたものかと頭を抱えたその先には、床の上で粉々となったグラスが落ちている。

別に落として割ったわけじゃない。ただ水を飲もうとグラスを取り、そして力加減を間違えてしまい割ってしまったという単純な話だった。ペンや服などに力を入れすぎて壊してしまったのも含めれば、これで都合四度目だ。

政府中央棟地下でクリスが見せてくれた星辰光アステリズムのインパクトは凄かったが、それだけでなく身体能力もこれまでと比較にならないほど上昇していた。これまでのオレはどう鍛えたところで“女性”という肉体の括りから脱却することが叶わなかったが、今は違う。脚力、走力、腕力に握力、さらには聴力嗅覚視覚といった五感まで余さず全てが常人より遥かに強化されている。これほどまでとは正直思ってもみなかったという次元だ。

しかし当然、それだけの力をいきなり宿してしまえば振り回されるのも自然なことだ。つい普段の感覚で力を入れてしまえばこの通り、床で散らばるコップの姿がどうなるかを証明していた。

自分の手のひらを改めて見直してみる。傷や剣だこも多いがあくまで普通な肉付きなのに、ちよつと力んだだけでこうも簡単に何かを壊せてしまうことをまじまじと実感する。

「これでうっかり握手でもしたら相手の手を握り潰しそうだな。ゴリラかオレは……これはゴリラだな……」

またも頭を抱えた。言い訳のしようもなくゴリラ並みのパワーであつた。

だからこの二日は出来るだけ他者と接触しないようにしつつ、力の調節に苦心していた。その甲斐あってか段々と感覚を掴めてきているものの、たまに気を抜くとアツサリこうだ。本当に気を付けなければ。

これだけでも“超人”という比喩が相応しいというのに、さらに星辰光アステリズムという固有の星まで発現させるとなれば、その強大無比さがよく分かる。こんな人間兵器が戦場で暴れまわれば簡単に戦況は傾くだろう。一騎当千という言葉がクリス以外にも当てはまる日が現実に到来するのだ。

「つくづくとんでもない話だよ……」

これだけの力を持ったことの意味を改めて噛み締める。実際に成ってみて肌で理解した、星辰奏者エスペラントはまさしく新西暦の覇者を決め得る切り札であると。だからこそ、使い方を間違えれば大惨事になるだろう。社会的にも自戒としても、それだけは避けなければ。

白状するなら前世むかしも現在いまも、特別で不思議な力を手に入れて、嫌いな相手や気に食わない相手を完膚なきまでに倒せれば痛快だろうなと考えたことはやっぱりある。強くてカッコ良くて無敵の存在にはどうしたって憧れてしまうのだ、それを否定するほどオレは悟ってないし男の子を止めてもない。なんなら今も結構舞い上がりそうなくらい嬉しい気持ちもあるわけだから、心の中でニヤニヤしている実に気持ちの悪い男オシナだろう。

けれどこの感情はあくまでオレの内心だけで完結させるべきであり、舞い上がった心のままに現実で星を揮えば結果は火を見るよりも明らかだ。そんな奴は力に溺れて破滅への坂を転がり落ちる愚者の典型に他ならない。故に使い方を間違えてはダメだと、憧れと現実に区別を付けて前を見る。

だってオレはクリスの隣を堂々と歩きたいのだから。なのに後ろ暗いこと、自らの欲望へと星辰光アステリズムを用いてしまえば何一つとして誇れない。自己満足の為だけに己が誓約を破った日には死んでも自分を許せないのだ。

……星辰光アステリズムはそんなオレの精神に呼応したのか、なんとというか“重

たい”ものである。別に面倒くさい男オシナになつたつもりはないのだけれど、星の性質は個人の信条にも左右されるとか何とかガグツチからも聞いていた。オレとしてはただ純粹に憧れた背中に並び立ちたいだけなのだが、それがそんなに重たいのか。思わず首を傾げてしまふ。

まあそんな述懐は置いて、だ。今はひとまず床に散らばったグラスの破片を片付けるとしよう。ついでに能力の練習もしてしまえばちようどいい。これも早く慣れておかないとうっかり暴発でもさせたら堪らない。

こういう時にもオレの星辰光アステリズムは案外使えるな、と思ひながら盛大に能力を無駄遣いして、自分の失敗を手早く片付けたのだった。

◇ 現在、政府中央棟セントラルで活動する人間たちの中で星辰奏者エスペラントに関する情報を知っているのはごく一部の存在だけだ。

当然と言えば当然の話だが、やはりこれだけの技術を発表すれば混乱や衝撃はどう足掻いても免れない。いくら改革派に持ち込もうと適切に扱えなければ宝の持ち腐れであり、無為に時間をかければ血統派側も技術を盗んでしまう可能性すらあった。

だからもつとも効果的にカードを切れるその時まで、星辰奏者エスペラントに関する技術は絶対に外部へ漏らす訳にいかない最重要機密だった。今はクリスを中心となって時間をかけつつ改革派の上層部へと事情を説明し、ある程度の土壌が出来たところで一気に血統派へと下克上をしてしまふ算段である。

別に秘匿自体は納得できる。だからこの話で問題となるのは、実際に超人に成ってしまったオレやクリスがどうやって周囲を誤魔化すかにある。もつと明け透けに表現すれば、共通の友人となるアルの目をどう掻い潜るかだ。

「なんつーか、最近のクリスとレーテは何か隠してやがる気はするんだがな……」

「おいおいまたその話かよ、クリスはともかくオレがそんなのある訳ないだろ」

内心で表情をひくつかせつつ真顔で嘘をつけるようになったのは嬉しくない成長だった。

仮にもクリスに並ぶ親友に対してこんな嘘なんかつきたくないが、内容が内容だけにそう簡単には種明かしなど出来やしない。だからいつも当たり前障りのない返答でお茶を濁しているのだが、ほんの十日かそこらでもう厳しくなってきた。やっぱり良心が痛むのだ。

「でもなあ、レーテお前、最近どっかに行つてて見ないことがだいぶ増えたぞ。一時期のクリスの奴と同じだ。しかもアイツはアイツでよく見るようになったと思えばお偉方との会合ばかり。そのうえ“アレ”とくりやあ、何かあると疑われない方がどうかしてるだろ」

「そりやおレだつてクリスがあんな傷を付けたのには驚いたさ。すつごい心配したんだからな」

アルの語った“アレ”というのは、数日前、突如としてクリスの顔に大きな傷跡が出来ていたことに起因する。

これまで無敵無敗も同然だった彼がよりにもよつて顔面に一撃を貰うなど並大抵の事態ではない。まして政府中央棟は切つた張つたとはあくまで無縁な政治の場であり、暗殺されそうにでもならない限り戦闘自体発生しないのだ。そんな状況下でいきなり英雄たるクリストファー・ヴァルゼライドという男が消えない傷をつけられたとなれば、オレたちや他の者が気に留めないはずがなかった。

ましてクリスは今や星辰奏者として常人とは隔絶した強靱さを誇っている。そんな存在に傷を負わせるとなれば、もはや相手の心当たりなど一つしかない。あの地下空間にて仄めかされた二人目の星辰奏者で間違いないだろう。アイツはあまりにも有能で表裏関係なく必要なことは躊躇いなく出来る精神の持ち主だから、よつてもし二人目の星辰奏者を選ぶとなれば、オレだつて友としての鼻肩目無しでアイツを選ぶのは確実だった。

つまり——戦つた相手は戦友でもあるギルベルト・ハーヴェスではないのかと、オレはクリスへ実際に訊ねてみた。

結果、返答は肯定でありやはりクリス対ギルベルトという星辰奏者

同士の戦闘ころうしあひが人知れず発生していたようだ。その際に互いに重傷を負ったというのもサラツと聞かされたが、どちらもその傷をおくびにも出していないのだから大したものである。

何故そのような事態にまでなつたかは聞き出せなかったが、どうも互いの思想に食い違いがあつたらしい。あの二人は似た者同士なようで、たまにクリスの方から不穏な視線が向けられていたことを鑑みれば、不思議と納得しか感じなかったのを覚えている。まさかそこまでするとは思わなかつたし、あの時は色々心配しすぎて逆に心配されてしまったが。

どうにせよ、裏ではそんな事態も起こつていたらしい。友人同士での戦いなどオレとしては本当にやめてほしいし、事情を少しでも知る者としてギルベルトにも話を聞いてはおきたいのが、きつとはぐらかされるだけな気がしてならない。友人同士のプライバシーに首を突つ込むのもどうかと思うので無理に聞き出すつもりもないけれど。

しかしこの余裕は裏事情を把握してるオレだから持てたものであり、知らなければアルの様に勘ぐつてしまうのも道理でしかないだろう。

「ぜつてえクリスの奴は何か企んでやがるし、もつといえは巻き込まれてるのは間違いないだろうな。ただその内容が分かんないつつうか……いつものように一人で雄々しく前を向く、なんてやつなのかね？」

「さあ、どうだろうな。でも今回は上層部も巻き込んで動いてるみたいだし、そう遠くない内にオレたちにも秘密の正体が分かる気はするけどな。本当にアイツが秘密にする気なら、きつと誰も巻き込もうとすらないだろ」

「そりや確かに、一理あるわな」

確信があるわけではないが、かといつて出まかせでもない。クリスの事だから下準備さえ出来てしまえばすぐにでも星辰奏者技術エスベラントを発表、確立して大きな力にするはずだ。ではそれまでにかかる時間だが、既に二人目、三人目と被験者を増やしながらか上層部も巻き込みだしてるとなれば遅くはないはず。

希望的観測だけど、オレだっていつまでも友達相手に嘘をついてシラを切り続けたくなんかない。せめて星辰奏者の話エスベラントが公になれば表立って説明も出来るし、何ならオレ一人では難しいだろうカグツチの目的についての調査、推測も一緒に出来ると思うのだが……これでも軍人だし事の重要さも理解している、友だからと不用意に漏らす訳にはいかないのだ。

果たしてその想いが通じたのか、アルは一つ溜息をつくと困ったように頭に手をやった。

「ま、どうしても言えないならいいさ。今回はレーテに免じてこれ以上の追及は無しにしてやるよ。だけど俺だってお前たちの友達で仲間なんだから、いつまでも蚊帳の外に置くのはなしだぞ？」

「アル……なんとというか、ごめんな」

「謝るなよ、むしろ『何のことかやら分かりません』って太々しく笑つとけよ。そんな正直じゃこの先やってけないぞ」

……まったく、本当に。

どうもオレは、素晴らしい友人に恵まれすぎているらしいと痛感した一幕だった。

◇

それ以降は特に目立った事件や出来事もなく、思ったよりも穏やかに時間が過ぎていった。

三人目の星辰奏者エスベラントとして定期的に叡智宝瓶アクエリアスへ身体情報報告デーの義務はあったし、時にはオレもまたクリスやギルベルトと共に改革派上層部の説得に駆り出されたこともあったが、変わったことと言えはその程度である。基本的な仕事は特に変わらず閑職であり、空いた時間は星辰光アステリズムの制御や使い方を体得するのに費やした。

これに関してはオレより先に星辰奏者エスベラントになっていたクリスの意見も非常に役立った。おかげで自分の星についての理解も深まり、身体の動かし方もだいぶ様になったと思う。ギルベルトに関しては何故か自分の星を教えてくださいなかつたのだが……まあ彼のことだ、理由はきつとあるのだろう。

そして、星辰奏者エスベラントとなつてからおよそ二ヶ月が経過し、年も跨いで

新西暦1022年のこと。

予想通りの時期になり、いよいよ最新にして最強の人間兵器を生み出す技術が改革派の上層部より公表されたのだ。

発表された直後は流石に内部でも荒れたというか、「そんな夢物語など信じられるか!」という意見が大半だった。いきなり星辰体アストラルと感応して超人になれる技術が発表されたとなればそう考えるのも無理はない。特に血統派側からの反発はすさまじく、在りもしない事実を吹聴するなど言われたほどだ。

だがそれも、持ち込んだのが他ならぬ東部戦線の英雄、クリストファー・ヴァルゼライドであると判明すれば話は別になる。主にクリスに憧れる若い世代を中心に星辰奏者技術エスペラントが信用され始め、この流れに対して事前に協力体制を敷いていた改革派上層部が便乗を始めたのである。

すなわち、一番分かりやすく新技術を誇示するためにはデモンストレーションを行えばいいわけ。誰の目にも理解できる形で異能力を開帳すれば、もはや星辰奏者エスペラントという新技術を疑う者は存在しなくなるだろう。

で、その模擬戦デモを行うために白羽の矢が立ったのが――

「なんでわざわざオレを選ぶんだか。ここは改革派に文字通りの革命を齎した英雄、クリストファー・ヴァルゼライド少佐の方が相応しくありませんかね?」

「茶化すな、俺よりもお前の方が適任だと考えたから任せたままでだ。加減の効かない俺の星辰光アステリズムより、そちらの星の方がよほどデモンストレーションに向いているからな」

大真面目に返答されているからな、まさかの大役を得てしまったオレはと言えば大きく嘆息した。

政府中央棟セントラルの中にも数は少ないが訓練場は存在する。そのほとんどは今や倉庫となっていたり使われなくなって久しいらしいが、数少ない生き残りの一つを今回デモンストレーションに際して使うことになったのである。

ざっと訓練場を見渡せば、戦車が二両に一般的なアドラー軍兵が数



十名。全員が当然のように銃火器を装備し帯刀までしている精鋭部隊だ。いくら星辰奏者<sup>エスベラント</sup>は回復力も上昇してるとはいえ、下手に当たれば普通に死にそうな装備たちには流石に驚かされる。随分と贅沢かつ念の入れようだ。

「確認しとくけど、相手を殺したり重傷を負わせない限りは好きに戦って大丈夫なんだよな？」

「ああ、その認識で間違いない。だが一つ注文を付けるなら、観戦して上層部の人間にも分かりやすく星辰光<sup>アステリズム</sup>の力が伝わるようにしろ。そうでなければ力を見せびらかす意味が無い」

「それはちゃんと意識してるから心配するなつて。精々派手にやってやるさ」

横目で確認した先には、急ごしらえで用意された観覧席に腰かける高官たちの姿があった。

今回の主役は星辰奏者<sup>オレ</sup>であると同時に、これを評価するアドラーの高官たちでもある。その大部分は改革派の中でもまだ事情を知らされていない者たちだが、中には少数ながら血統派の貴族すら混じっていた。つまりは彼らがこの戦いを見届け報告することで、真の意味で帝国に星辰奏者<sup>エスベラント</sup>が誕生することを意味している。

その責任は思っていたより重大だが……大丈夫だ、何とかなると信じよう。それでもオレは新西暦における最新兵器なのだから、自信を持たないでどうするのだ。クリスなら生身でだって立ち向かうような相手に気後れしてるようじゃ、いつまで経っても彼の背中には追いつけない。

「それじゃ、行ってくる。精々恥じない成果を出してやるさ」

軽く笑ってから訓練場へと躍り出た。それと同時に兵士たちもこちらへ向けて銃を構えて展開する。

お互いに本気で殺し合うつもりはないが、漂う緊張感は戦場さながらだった。向こうとしては未知数の敵と戦うことになるのだから仕方ないし、オレだってうっかり銃弾を頭に貫えば即死なのだから気は抜けないのだ。

ピリピリとした空気に東部戦線を思い出しながら、腰に差した直刀

の柄を握る。これまで愛用していたものとは材質からして違うこの武器こそ、オレにとつての肝心要だ。

膨れ上がる圧力に、誰かが唾を飲み込んだその瞬間。

「それでは——第一次星辰体感応奏者評価試験、開始をしてください！」

高官の誰だかの丁寧な合図と共に開戦の合図が響き渡り。

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星」

——ここに、己が授かりし星の猛威を開帳した。

## Chapter 36 誓約者／Tellius

星辰奏者の出力を表す指標として、基準値と発動値の二つの用語が存在する。

基準値はその名の通りに基準となる出力値であり、常態の星辰奏者が発揮できる身体能力や星辰光の強さを表す。普段はもっぱらこちらの状態であり、しかもこの時点で常人より遥かに強力な人間兵器として完成されているのだが……これはまだ序の口にすぎない。

そう、星辰奏者の本領とは発動値へ移行した時にこそ発揮されるのだ。各人固有の詠唱を紡ぐことで星辰体との感応量をより上昇させ、あらゆる能力が一時的に更なる高みへ押し上げられる。この状態で用いる力こそ、星辰奏者の強さを真に評していると考えて間違いない。

つまり、だ。

今回の星辰奏者評価試験においては全力を出す必要がある訳だから——マルガレーテ・ブラウンは躊躇なく己の位階を発動値へと切り替えたのである。

◇

最初から遠慮など何も無しに、マルガレーテ・ブラウンは己が兵器としての全力を発現させた。

「創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌めく流れ星」

そして、紡がれゆくは人の身を最小単位の星へと変える詠唱。

統一された規格に沿って人造星辰がここに具現を開始する。

「原初の願いはただ一つ、皆の幸福なればこそ。この惨劇は目に余る。血で血を洗い、傷つき憎んだその果てに、望む明日があるというのか。分からぬならば良いだろう、我が怒りにて思い知れ」

穏やかに、静謐に、そして厳かに唱えられるは地母神の苦悩と怒りの情。

神話に謳われて久しい大地の怒りが、個人の内より解き放たれんと唸りを上げて目覚め出す。

「地の獄舎にて伏す子らよ。その身に巻かれた戒めを、今こそ地母が

解き放とう。

天の楽土にて座す子らよ。その身に宿した傲慢さ、今こそ地母が打ち砕こう」

朗々と紡がれる言の葉に迷いなど一切ない。自らの心へ無意識に浮き上がった想いのままに唱えるのみだ。故にマルガレーテ本人すらこの詠唱の真の意味など理解していないが、そんな事はどうでもいい。

重要なのは貫く意志。そして必ず成し遂げると誓った心なのだから。幼少期から微塵も変わらぬ芯を支えとし、宿した星の宿命をただ粛々と編み上げる。

「誓約を此処に。槍を握りて剣を執り、この手で願いを遂げるのだ——子息の庇護など求めない。」

殺して救うその矛盾、覚悟の刃を最終闘争に突き立てよう」

「我こそまさしく誓約者、守られるだけの存在ではないと高らかに告げていく。」

それが証拠とばかりに放たれた圧力が暴力的な段階へと膨れ上がる。自分にもまた戦う力はあるのだと、宣するように吹き荒れる星辰体の奔流は今や星辰奏者でなくとも感じ取れる域にあった。

さあ、今こそ目覚める地母神よ、微睡む時間はもはやない。

己が手すらも血で汚し、最終闘争を踏破して、輝く勝利を抱くのだ。「目指すべき鋼の未来は、天頂の先にこそ在るのだから——」

望むのはただ一つだけの未来。憧れの立つ輝く地平へ追いつくため、鳴動する地球の鼓動を携えた誓約者が降誕する。

その名はまさしく——

「超新星——いざ希求せよ誓約者、眩き地平を抱くがいい！」  
紡ぎ上げられし星辰光が、光と誓約を糧に花開く。

地球を支配する普遍的な法則、重力へと訴えかけるマルガレーテの星がここに顕現されたのだ。

「やてと……それじゃ、やってみましょうか」

発動値へと身体を移行させたマルガレーテは静かに呼吸を整えて前方を睥睨した。その先には銃を構えたままにどうしたものかと困

惑している兵たちの姿がある。彼らをしても彼女の変化は理解しているはずなのだが、味方に向けて銃を撃つのはどうしても躊躇われないだろうか。

だがしかし、何も心配することはない。ここに立つは新西暦に産声をあげた超兵器、たかだか銃弾如きで斃れるようならかの神星の計画に採用すらされないのだから。自らに対し遠慮はもはや無用なのだとマルガレーテは直感で理解した。

「このままじゃデモンストレーションになりませんから、遠慮なくどうぞ。話はすべてこれからです」

向けられた無数の銃口を一瞥するだけで恐怖心など消え去った。この程度の攻撃、今の自分ならば呆気なく見切れるし対処できると感覚が告げている。対外的な目を意識して女性らしい言葉遣いを選ぶ余裕すらあつたほどだ。

当の相手からそんな言葉を告げられてしまい、いよいよ困ったように隊長格だろう兵が高官たちを見やった。彼らもまたマルガレーテの変貌を見届けているからか、恐れるように喉を鳴らして小さく頷いた。ここまでお膳立てを整えられればやるしかない。

「これで名高き戦乙女ワルキューレに死なれたらあんまりにも寝覚めが悪いんで、どうにか死なないでくれよ——ッ！」

ほとんどヤケクソな掛け声を発して、とうとう数の暴威がただ一人に向けて放たれた。

彼らもまた兵卒であり連携は大の得意とするところ。躊躇を捨てた都合三十人の兵士たちから放たれる銃撃はもはや点でなく面であり、音速を超えて迫る津波が如き弾丸たちが個人へと殺到して逃がさない。

死ぬのが道理、虚しく地に伏せることこそ条理というべき鉛の波濤。これに対する星辰奏者マルガレーテはどこまでも落ち着いた様子を見せており、恐ろしいことにその場から動こうとすらしなかった。

「こうやって……星を使えばいいと！」

ならば身体中に穴をあけた女の姿がそこにあるかと言えはそうではなく。

弾丸が、勝手に逸れて行くのである。間違はなくマルガレーテへと向けられたはずの弾丸の軌道は不思議なほどに曲がり逸れては背後の壁へと弾痕を刻んでいく。それどころか彼女の位置に達する前に地面へ急速にめり込むものすらある始末。戦車から放たれた砲弾すら不自然なほど上へと曲がり、銃弾と同じく壁の跡となつて粉碎した。

そうして全ての弾丸が吐き出された時、本当にただの一步も動くことなく、どころか銃弾自体が避ける形でマルガレーテは無傷を演出してみせた。

「どういう……ことだ」

誰かが思わず呟いてしまったこの言葉こそ、この場に集つた者たちの紛うこと無き本音だろう。

こんな不条理が起きるはずがない。いくら鋼の英雄だろうとこれ程までに無傷であるなど不可能だ。であればこれが星辰奏者エスベラントの力だとも言うのか。あまりの理不尽さに力を見せつけられてなお信じられずにはいられない。

一方、驚愕が辺りを支配する中で当事者たるマルガレーテは冷静だった。自分の授かつた力の凄さを改めて認識しながら浮かれ過ぎずに思考を回す。

「今のは操縦性と干渉性を使ったやり口な訳だから……うん、これが出来るなら他にも色々試せるな」

小さく呟き自分の力を確かめるマルガレーテ。先の不条理は彼女アステリズムの星辰光となる重力操作グラビトンと、特に優れた資質である操縦性と干渉性を活かした技であつたのだが、この分ならばこの二つを組み合わせるだけでさらに色々出来ることだろう。

そう、星辰光には大きく分けて六つの性質が存在する。集束性、拡散性、操縦性、付属性、維持性、干渉性の合計六種類に分けられるそれらは、星の素養によって才の優劣が決まってくる。六つの資質のどれもが高ければ星の力を万能に揮える者となれるし、秀でたものがないければどれだけ扱いやすい能力に目覚めようが出来ることの幅は少ない。

この点を鑑みてマルガレーテの星辰光アステリズムを評価すれば、その特徴はまさしく二点特化と呼ぶべき尖ったモノとみるのが妥当だった。決して総合力に優れた万能な星ではないが、さりとして応用の幅は非常に広いものがある。

まず特筆すべきは能力自体が“重力操作グラビトン”であること。これに起因した万物全てに訴えかける有効範囲は驚嘆に値する代物だ。さらに操縦性並びに干渉性に特化した性質を駆使することにより、一つの物質へ粒子レベルで自在に干渉した上で重力を操作し捻じ曲げて、拳句の果てに強弱を付けることさえ可能とするのがこの星光の正体だった。

先ほど行った銃弾の雨霰を回避した手法も種を明かせば簡単だ。一つ一つの弾丸へ星辰体を介して干渉することで重力のかかる方向を真下から左右方向へと変更し、軌道を逸らしてみせたのだ。発動値ドライブ状態にある星辰奏者エスベラントの動体視力と反射神経ならばその程度の認識は造作もなく、更には自分に直撃しそうにないものは床へと叩き落してみせる実験すら行えた。

つまりマルガレーテ・ブラウンという存在を銃弾で倒すことは事実上不可能なのだ。どれだけ撃ち込もうが近づく傍から重力に干渉され、軌道を逸らされてしまえば当たるものとして当たらない。

「それじゃあ、今度はこちらから行ってみますか」

嘯きながら腰に差しした直刀を引き抜いてみせる。これこそが星辰奏者にとつての肝心要、星光アステリズムを用いるのに必要不可欠な触媒アダマントであった。これがなければ如何な星辰奏者エスベラントといえど発動値ドライブには移行できないとなればその重要性は推して知るべしというもの。

武器に用いても非常に頑丈なそれを構えてマルガレーテは一步踏み込む。その単純な動作だけでもう速い。元より戦場で鍛えあげた体捌きはあるにせよ、これは尋常でない踏み込みだった。

人間兵器となることで強化された脚力に加え、さらに自分に対して重力の向きを真横へ変更したことで射出装置カタパルトの如く加速した結果である。

「よし、と」

「な、いつの間に……ッ!？」

「こいつ、早すぎるぞー！」

認識すら許させない刹那に間合いへと飛び込むや否や、直刀の峰で兵の持つ銃を叩き落とす。圧倒的な臂力の前にたまらず銃を手放した兵を一瞥し、さらに次の二人ほど武器を落とさせたところで勢いよく跳躍した。

強化された脚力にものを言わせたジャンプ、のみならず自らにかかる重力を天地逆さにすることで勢いよく上昇してみせる。訓練場だけあつて高い天井にも即座に到達してしまうが、今度は自身への重力を無とすることで滞空しつつ眼下へと視線を向けた。真つ向から地球法則に抗った光景に度肝を抜かされたのか、ヴァルゼライドを除いた誰もがぼかんとした表情でマルガレーテを見上げているのがよく見える。

「重力に関して思いつくこと全て、自由に出来るみたいだな……つと！」

本人も二ヶ月の間にシミュレーションはしていたし扱うための訓練も続けてはいたが、大つぴらに<sup>アステリズム</sup>星辰光を揮うのはこれが初めてだ。故にこれまで試せなかったあらゆる使い方を試しながらもデモンストレーションを続けていく。

空中から全員を見下ろしながら標的を武装だけに限定する。遅れて銃口が空へと向けられるがもう遅い。全ての銃への干渉は既に済んでおり、後は彼女の意志次第で――

「沈め」

たった一言唱えるだけで、銃の重さが何倍にもなってしまうのだ。何も彼女の<sup>アステリズム</sup>星辰光は重力の偏向だけが取り柄ではない。平均的な収束性でも活かしてしまえばこの通り、重力自体を何倍にも増幅させることすら可能である。その気になればこの場の全員を地に這いつくばらせ、骨を折り、ミンチにすることだって容易い極悪無比な能力だった。

もはや持つてられない重さとなり、それどころか地面へと埋まる勢いで落ちた銃を横目にマルガレーテが羽毛のように舞い降りる。天



より下ったその姿はあたかも通り名である戦乙女か、それとも命を刈り取る死神か。これが戦場なら自らの命は彼女の掌の上であることを兵達も理解しているからこそ、安直な表現だと笑い飛ばすなど出まっこない。

「さてと……とりあえず、これが私の星辰光アステリズムの力ですね。ひとまず星辰奏者技術が嘘ではなく、しかも帝国にとって有益な技術となることは理解してもらえたと思いますが、どうでしょう？」

途方もない実力を見せつけた本人は汗一つかかず涼しい顔で、冷や汗をかいた高官たちへと問いかけた。彼らとてもはや認める他にないだろう。これだけの実力、特殊性を見せつけられてなお首を横に振るなど自殺行為もいとこだった。星辰奏者エスペラントという規格外の間人兵器の实在と有用性はこれを以って不動のものとなるはずだ。

その反応を確認してかマルガレーテもホツと息を漏らした。これでも上層部の前で力を揮うことに緊張感を覚えてはいたが、どうにかプレッシャーに負けずに役割を真つ当することが出来たのだ。ヴァルゼライドの方へと視線をやれば、彼も珍しく「よくやった」と言わんばかりに頷いた。彼女にとってはこれだけでも報われる想いである。

「ま、これで何とかなつたかな。大変なお役目もこれで終わりだ」

聞こえない程度に呟いて、未だに呆然としている帝国兵たちと少し会話でも出来ないかと足を向けたその時に、

「ああ、それは少し待ってはいただきたい。これではまだ星辰奏者エスペラントの本領は見れていないと思うのですが、どうでしょう、私との追加模擬戦エキシビジョンをさせてはもらえないでしょうか？」

「……おいおい、このタイミングでかよ、ギルベルト」

曇りなき蒼天を瞳に宿したギルベルト・ハーヴェスが、“待った”をかけてきたのである。

## Chapter 37 審判者／Elysium

——その男は、既に自らの夢を封じ込めていた。

理想ヒカリに焦がれる者たちが集い、徹底した信賞必罰により誰もが正道を目指して歩めるようになる極楽浄土エリユシオン。この世界が実現すれば正しい人間はどこまでも賞賛され、屑は屑としてどこまでも蔑まれる徹底的な優劣の世界となる。正しい選択をする者に、それに見合いし光あれ……それこそまさしくギルベルト・ハーヴェスという傑物バケモノが目指した理想の世界であったのだ。

しかしその野望は他ならぬ英雄リソウの体現者によって潰された。クリストファー・ヴァルゼライド、弛まぬ努力と不断の意志で前へと進み続ける鋼の英雄。彼こそがもつとも極楽浄土エリユシオンに歓迎されてしかるべき英雄であったはずなのに、ギルベルトの理想を一蹴すると当然のように彼を下して自らの管理下に置いてみせたのだ。

その際にどのような激突が生じたか、また極楽浄土エリユシオンの本質的な悍ましさはどこにあるか、それはこの場で語ることはないだろう。

重要なのはギルベルトは既に敗北していること。彼は完璧なまでに公平な優劣主義者、能力主義者であり、勝者の総取りこそ正義であると信じている。故に負けない限りは恐るべき意志の力であらゆる命を轢殺しても進むのだが、一度敗北すれば自らもまた勝者に服従することへ一つの異論も挟まない。いつそ潔い程の優劣の物差しはこの男の宿す歪みであり、またある種の美德でもあるのは違いなく。「ああ、それは少し待つてはいただきたい。これではまだ星辰奏者エスベラントの本領は見れていないと思うのですが、どうでしょう、私との追加模擬戦エキシビションをさせてはもらえないでしょうか？」

だから真実、この場においてギルベルトの目的に悪意も足掻きも誓って存在しなかった。

自らを下した上位者に対して忠誠を誓っている以上、今更になって極楽浄土エリユシオンの野望を推し進めようとはしないだろう。ヴァルゼライドが生きている限り、あるいはヴァルゼライドすら打ち破る更なる上位者が存在する限り、恐るべき炯眼の男は二度と勝手は起こさない。

ではどうして星辰奏者評価試験の場に赴き、そしてマルガレーテ・ブラウンの眼前に立ったのかといえ——純粹に興味があったのだ。己が英雄と仰ぐ男に必死で追従する彼女の本質つよきに。敬意を表しているからこそ、超えてみたくて堪らなくなる光の宿痾を発動させる。

確かにギルベルトの野望は否定された。しかし頑張る者が報われる社会にしたいという願いまでは否定されておらず、ならば可能な範囲でそういう世界にしようと努力を続けることは自由である。

後はやることなど一つだけ。直接剣を交えることで戦乙女フルキューレを見定め、これまで抱いていた彼女への敬意が確かなものであることを改めて証明する。その果てに同じ理想を掲げることが出来るならそれで良し、仮にダメでもそれはそれだ。実は眼鏡に適わなかったという決を下してそのように対応するだけである。

かくしてここに、満を持して審判者ラダメンテユスが参上する。

これが模擬戦であろうがなかりうが、肝心なのは戦える機会そのものでありそれが全て。自らを下した光より授けられた名前を戴き、白夜の如き意志で審判を行う時が来た。

◇

唐突なギルベルトの登場に虚を突かれたのもつかの間、彼はほんの一分くらいの間に高官たちへ向かって言葉を重ねると、当然のようにオレの立つ訓練場へと歩を進めてきた。おおかた星辰奏者エスベラントの本領がどうだの、それらしい言葉をさらに加えたのだろう。もはや何も語る場所がない程に手慣れた説得の手管には驚きすらしない。

こうしてオレが何かを言う前にあれよあれよと場を整えてしまった戦友ギルベルトは、装備を片付け引っ込んでいく一般兵士たちを横目にオレの前へと立ち塞がった。特に気負いもせず、腰に提げている剛剣をすらりと引き抜く姿は見慣れたもの。しかし刀身の輝きは間違いなくアダマンタイトで出来たものとみていいだろう。

「さて、まずは一言謝罪をさせてもらおう。突然にこのようなパフォーマンスを加えることになってしまい、申し訳なく思う」

「別にそこは構わないけど……目的は何だ？ まさかおま——あなた  
が、ただ純粹に戦いたいただけだなんて考え難いですけども」

戦友だけあり普段は気にしていないが、一応向こうの方が階級は上である。

なのでひとまず畏まった喋りになったオレを見て、ギルベルトは何がおかしいのか微笑を浮かべて憚らない。

「こうして君に畏まられるのも不思議な気分だ。お互い同じ戦場を駆け抜け、功績を挙げたというのに、どうしてかこのような“溝”が出来てしまう……世の在り方というのを考えさせられてしまうよ、まったく」

やれやれと頭を振ったギルベルトの姿に苦笑する。本当はもつと言いたいこともあるだろうに、一応は人目を気にして直接的な言動を避けたのだ。今更そんな気遣いをしたところで遅いだろうに、と内心で呟いた。

彼は既に二重スパイという立場から完全に脱却し、改革派として精力的な活動を始めている。なので血統派からは裏切り者扱いすらされているはずなのだが……本人はほとんど気にしていない素振りなのが彼らしい。

この世は結果がすべてであり、他者を弾劾するならまず自分が克己し乗り越えろ——なんて文句が聞こえるようだ。

「故にこそ、私はここに証明したいのだよ。君たちと私はあくまで同格であるのだと。軍としての階級が下らないとは言うまいが、しかしそれ以上に必要な評価が必ずあると信じているから挑むのだ」

「だからこうして、他人の目があるところで挑んでくると」

「ああ、その通りだとも。それに何より——」

そこで急に声を落とすと、エスペラント星辰奏者の聴力でしか聞こえない程度の声量で続きを語る。

「こうでもしなければ、君と戦える機会などそうはあるまい。訓練ならばまだしも本気で友人と戦おうなどは考えないはず、違うかな？」

「……違わないな。つーかこれも模擬戦ではあるんだけど、そこんところは？」

「さて、言い訳はいくらでも可能だろうさ。むしろ派手に演出した方

が今後の展開も有利になると私は考えているとも」

なるほど、そっちが本命か。

これまでの戦いや日常の中で、ギルベルトの言う通りオレらが本気で戦うことは一度もなかった。当然だ、戦友同士が本気で殺し合う理由なんてこれっぽっちも存在しないのだから。もし普通に申し込まれたのならオレは絶対に断っていた。

なのにこうして、避けられない状態でギルベルトからオレへと挑戦状を叩きつけてくるとは……絶対に何かしらの裏が存在するはず。まさかここで謀殺するつもりじゃないのは目をみれば分かる。

アレは悪意など欠片もない本気の敬意を持ったうえで、こちらに戦いを挑もうとしている白夜の如き瞳だ。こうなればすべて遅い、どう動いてもアイツの掌の上で踊らされることになるのは確定だった。

「いいさ、そこまで言うなら受けて立つ。オレがお前の相手になるかは知らないけどな」

「ああ、まったく、そう謙遜しないでほしいものだ。我が英雄といい君といい、過ぎた謙遜は卑屈にさえ映る」

嘆かわしい、勝者がこれでは誰一人として報われない。

そう嘆息したギルベルトは向こうで座る高官たちと、そして何よりクリスの方へ視線をやった。

いい加減に模擬戦を始めようという意志を向けられて高官たちが頷いた。クリスの普段よりもなお頑なに引き結ばれた口元がちよつと気になるものの、また否定せずに見守っている。

「では――」

「ああ――」

互いの視線が交わり、そして。

『始めようか！』

同時に地を蹴り、相手へと向けて肉薄した。

◇

ギルベルトの強みというのは、嫌味な程に総合力が高い面にあるとオレは考えている。

例えば才能。どのタイミングで剣を振り、どこでフェイントを置

き、いつ呼吸していつ剣を戻すか、タイミングを掴み動かす才が卓越している。この感覚を得るために並の剣士がどれだけ修練をしなければならぬことか、幼い頃から付け焼刃だろうと剣を振っていたオレにはよく分かる。

加えて均整の取れた肉体、相手の次手を先読みする炯眼、さらには才能に胡坐をかかない鍛錬量、並大抵のことでは動じない精神力、どれだけの苦難に晒されようと諦めない意志の強さ——他にも他にも、およそ戦闘者が欲しがらる要素の全てを備えていると評して良い。要素だけ挙げ連ねればクリスですら勝つことは不可能ではと疑う次元の存在である。

努力出来る天才、そのような褒め言葉すら恥じ入り裸足で逃げ出すしかない男。それこそがギルベルト・ハーヴェスという人物の誇張なき評価であり、たった今オレと剣を打ち合わせている<sup>エスベラント</sup>星辰奏者なのだった。

極限まで無駄を削いで剣を奔らせ、敵手の呼吸を乱し、歩を詰めて虚を突いて、視線を用いた誘導すら行い……オレの持てる技術を総動員してなお、対応してくるのが空恐ろしく感じられる。

「まったく……いー 本当に、強い！」

「褒め言葉、恐れ入るよ。ここまでの百十三合、予想通りとはいえずべて凌ぎ切ったのは賞賛に値する」

「そりやどうも……ッ！」

吐き捨てながら斬り込んだ直刀は事もなげに払われた。甲高い音と共に衝撃が吹きすさぶ。

その最中に返す刃で追撃されたのをいなして後方に下がると、ここまで激しく斬り結んでいたのが嘘のように状況が膠着した。

「分かっただけ、マジで隙がないな……」

努めて冷静になるよう意識しながらギルベルトに聞こえないように一人ごちた。息はまだまだ上がっていないが、涼しい顔をしているあちらと比べられればどちらが優勢かは火を見るよりも明らかかというものだ。

戦闘が始まってからおよそ二分、互いに星の力を使わず純粋な身体

能力だけで斬り合っていたのだが、その差は歴然も良い所。こちらの剣はギルベルトを捉えることは出来ても次手に繋がらず、さりとて相手の剛剣は的確に隙を突いて動いてくるから守勢に回ってばかりである。攻守の比はオレとギルベルトが四：六といったところであり、散々な押されっぷりと評すほかない。

おそらく基準値アベレージの時点では互いに差はないはず。これに加えてデモンストレーションという名目も意識してか、今は星の力を用いず単純な身体能力の向上を見せつけるのをメインに戦っている段階だ。

その上でギルベルトの剣筋にはこれまで同様に一切の隙がない。バランスよく整った総合値は綻びや弱点が一切なく、すべてを合理的に突き詰めるかと思えば一定の余地で遊びすら残している有様。エスベラント星辰奏者となつて出力の上がつた肉体すら難なく乗りこなし、オレが突飛な奇策に訴えかけても抜かりなく対応してくるとなればもはやどうしようもなかった。

「さてと、ここからどうするか……」

割と状況は絶望的である。いい加減に能力を用いなければジリ貧で敗北する未来しかない。

そのようなことを考えてしまうほど、オレが戦友として共に戦ってきた男の実力をこれ以上なく見せつけられてる一方だ。

さりげなく視線を動かしてみれば、どうやら高官たちの方はまったく別の事柄エスベラントに注意を取られているらしい。

「これが星辰奏者たちによる戦闘か……!」

「ヴァルゼライド少佐、彼らは本当にまだ異能の力を用いてはいないか?」

「ええ、事実です。どちらも未だアステリズム星辰光を解放してはいません。これまでの戦いはまだ前哨戦も良いところでしょう」

「なんと……!」

チラリと会話を盗み聞いてみる限り、偏った戦況や剣の腕よりも周囲の状況の方が遥かに注意を引くらしい。

まあその気持ちも理解出来る。普通は信じられないだろう、ただ剣で斬り合うだけで床に亀裂が走り、壁に罅ひびが入る状況など。訓練場は

あたかも台風か巨大怪獣でも通りすぎたかのようになっており、砕け散った破片が散乱している惨状を呈している。それだけの破壊を爆薬も使わず二人の人間が成し遂げたのだから兵器としての強力さなど今や語るまでもないだろう。

何のトリックもなく、単純に剣が空を切っただけで圧力が発生し衝撃波となるからには、高官たちはとっくの昔にクリスに誘導されて遠くへ避難を済ませていた。下手にその場に留まれば“剣戟”の巻き添えを喰らってしまうのは誰の目にも明白なのだから仕方ない。

この場を満たす驚愕と焦りは分かっているだろうに、やはりギルベルトだけは憎たらしい程に普段と同じ様子だった。

「さて、デモンストレーションはここまでだろう。そろそろ勿体ぶらずに星辰光を開帳すべきと考えるが？」

「そんなこと、言われずとも——！」

この状況を打開するには星辰光アステリズムの力を解放せねばならないことくらい、ギルベルトにはお見通しであるようだ。おそらくこの状況に到達した時点でオレが星辰光こそ唯一の突破口と考えるのも織り込み済みなはず。

いいだろう、上等だ。優位を作っている男の言葉に乗るのも癪だが仕方ない。こちらはギルベルトの星辰光アステリズムを全く知らない不利こそあるが、どのような能力相手だろうとボロ負けしない汎用性はあると自負している。

『創生せよ、天に描いた星辰を——我らは煌く流れ星』

朗々と詠唱ランゲージを口にしたその途端、ギルベルトもまた己が星の真価を出さんと覚醒を開始した。

同時に紡がれる言葉はしかし、状況を支配している男のモノだけが道理を超えて大きく聞こえてきてしまう。

「いざ並べ、死後裁判は開かれた。眠りにまどろむ魂魄ならば、我が法廷に凜と立て。

公正無私な判決に、賄賂も媚態も通じはしない。宿業見通す炯眼は、清白たる裁きのために重ねた功德を抉り出す」

それは、死者を裁く冥界の判決。



オレが紡いだ地上せいじやの祝詞と全く正反対となる、地底しじやの法則を具現化するものに他ならない。

「汝、穢れた罪人ならば禊の罰を受けるべし。地獄の責苦にのたうちながら、苦悶の淵へと沈むのだ。」

汝、貴き善人ならば恐れることなど何も無し。敬虔な光の使徒に、万代不易の祝福を」

……なのだがしかし、肌が粟立つ感覚が止まらない。

謳われしは地獄の判決、いわば閻魔のりの法に他ならないはずなのに。どうしてこの言葉ランゲージが地上で生きる人間へと向けられたものと感じてしまうのか。あたかも人の生き様を点数で評価し今後を決めるかのような、無機質で不条理な沙汰がどこまでも不吉を連想させてしょうがない。

「これぞ白夜の審判である。さあ正しき者よ、この聖印を受けるがよい。約束された繁栄を極楽浄土で齎そう」

「——ッ、目指すべき鋼ヒカリの未来は、天頂の先にこそ在るのだから——！」

この勢いに押されてはならない、その直感に導かれるようにしてオレ自身の星を一息に紡ぎ上げる。

これより先は手加減も油断も一切不要。ただでさえ純粋な剣技で劣っている以上、星辰アステリズム光まで気圧され負ければ勝機はないのだ。これが「ただの模擬戦闘である」という認識すら捨てなければいけない難敵と改めて理解して、

「超新星Metainova——楽園を照らす光輝よ、正義たれッ！」  
「超新星Metainova——いざ希求せよ誓約者、眩トき地平Esplanantを抱クくがいいッ！」

自らを最小単位の星と定義する、二人の星辰奏者の本領がここに発揮された。

感じる圧力それ自体はオレと同じ程度のもの。おそろくギルベルトドライブの発動値もこちらとそう変わりはないだろう。さらには目に見えて大きな変化もない以上、少なくともクリスのような派手な星辰アステリズム光でないとも予想できる。

ではどのような能力を発現させたというのか。近距離型か、遠距離

型か、それとも直接的な攻撃力は存在しないのか。星は一人につき固有のものが宿るとなれば、情報がなければまずそこから探らねば話にならない。

「悪く思ってくれるなよ、ギルベルト——！」

もはや口調を取り繕うつもりもなく、最初から全力で重力操作の星を解放した。

影響させるのはオレでなくギルベルトの方。アイツにかかっている重力そのものに干渉し、下向きの矢印を一瞬だけ上向きに、ついで無方向へと操縦してみせる。所要時間はほんの数秒足らず、その間に白夜の天才は“空気のある宇宙空間”へと放り出されたのだ。

どれだけの力があるかと無重力下で踏ん張るのは不可能。能力によつてはこの時点で何も出来ずに藻掻くだけで終わるだろう。しかし、まさかギルベルトともあろう男がこの程度で終わるはずもない。油断なく見据えていればああ、やはり——

「ふむ、対抗策は幾らか考えつくが……こうするのが最も効率的だろうな」

パチン。

軽快に指を一つ鳴らした瞬間、空を優雅に泳ぐようにしてギルベルトの身体がこちらへと飛んできたのである。

なんだそりや。思わず毒づきかけたのをグツと堪えた。ギルベルトはまるで身体に推進器でも取り付けているかのように自在に宙を移動しこちらへと突撃してくる。それこそ宇宙でカツコ良く機動するロボットの如く、身体全体を使ってバランスを取りながらどのような手段でか推力を得ているのだ。

当然ながら種を見破るなど現時点では不可能だ。よつて重力の向きをさらに変更、今度は上方向へとするもそれすらギルベルトは対応してくる。下方向へとしつかり勢いを付け加速して、気が付けばオレを剛剣の射程内へと収めていた。

「フッ——」

「この……ッ——」

振るわれた一撃を直刀で受け流す。オレの星辰光はあくまで重力

に干渉するものであり、質量にまで影響を及ぼすのは難しい。なので重力の関与しない運動エネルギーを削ぐだとかは難しいのだが、不安定な姿勢から放たれる攻撃ならば培った剣技で跳ね除けられる。

だからこの一撃自体に脅威など微塵もない。そう考えて二の矢で攻勢に転じようとして、おかしな事態に見舞われた。

「……剣が、曲がった!？」

そうとしか表現できない異常事態。ブレない軌跡を描いていた直刀が不意に横へとズレたのだ。そのせいでギルベルトを捉えることが出来ず、それどころか一步たたらを踏んで交代したところで、今度は足元が爆発した。

「な、なんだそりゃー!」

予想もしてなかった意識外からの攻撃、下手な一撃よりも性質が悪い代物だ。

これに動揺して星辰光の操作を無意識に解いてしまったのか、既にギルベルトは地上へと華麗に着地していた。その顔に焦りや驚きなどは一切なく、故に一連の流れが全て予定通りなのを明確に物語っている。

「いやはや、素晴らしい星辰光<sup>アステリズム</sup>だとも。豊かな発想を操縦性と干渉性に長けた能力値で見事に支えている、先達として素直な賛辞を送らせてほしい」

「……そっちはまた、随分と小憎たらしい能力じゃないか。嫌がらせに特化してるようにしか思えないぞ」

「それは済まない、なにぶん凡俗な私ではこのような能力を授かるより他になかったのですね」

「勝手に言ってる、まったく」

常人ならパニックに陥るだろう無重力を何事もなく突破しといて何を言うのやら。おそらく単純な使い道こそオレの星辰光<sup>ホシツバキ</sup>が上回っているのだろうが、応用性に関していえば同格だろう。これがギルベルトという天才と組み合わせればどうなるのか、想像もつかない脅威となるのは間違いない。

どうやら初の星辰奏者<sup>エスペラント</sup>同士の戦闘は一筋縄では終わってくれそう

にない。その事実を改めて認識し、オレは懐に仕込んでいたもう一つの武器を取り出すのだった――

## Chapter 38 努力と対価／Rhada manthys

胸元から取り出したのは東部戦線でも愛用していた小型の拳銃——と、同型のものである。実際にはこれも既に新調しているのだが今は気にすることでない。

最初にハツキリ言っておくが、この戦闘で拳銃など悲しいほどに役に立たない。星辰奏者の<sup>エスベラント</sup>身体能力ならば銃弾を見切り躲すなど容易であり、なおかつギルベルトならこちらの僅かな所作と銃口の向きだけで正確に発射タイミングすら予測してくる。目と頭を疑いたくなるがこれまで何度も見せつけられた炯眼を疑うつもりは一切ない。

「ま、それでも撃ちまくるんだけど、なッ！」

バン、バン、バンとリズムミカルな銃声と共に弾丸が放たれる。弾頭は全て重力偏向済み、地面と平行になった重力に導かれ『水平に加速』しながらギルベルトの下へ殺到する。進めば進むほど加速するという狂気の弾丸たち、たとえギルベルトであろうとこの速度を前にすれば多少の動揺や計算ミスを狙えるかと考えていたのだが。

「まさか、今更このような攻撃が通用すると?」

「……そりゃそうだろうけどな!」

最低限の回避動作だけで危なげなく回避されてしまう。剣で弾かれ、身体を一步横にブラシ、それだけだ。特別なことは一つもしていない、故に恐ろしいのはいくらでもこの光景を繰り返せるということ。どれだけ星光で強化した銃弾を撃ち込もうが一切のダメージも動揺も誘えない事実だった。

しかしオレだってただ翻弄されっぱなし、やられっぱなしではない。今の一撃も当然ながら布石として用意したもの。干渉した銃弾たちの操作を、オレはまだ手放していないのだから。

「集束再干渉——戻ってこい!」  
重量再偏向。

壁や床へとめり込んだ銃弾にかかる重力へと一気に再干渉してい

く。今度は可能な限り重力を集束させることにより、通常の重力加速度を遥かに超えた加速力を発生させた。その上で当然ながら重力の向きはギルベルトへと設定、彼我の距離もそこそこ離れていることで到達時の速度は馬鹿にならないものがある。

よって、一度は完全に防ぎ切ったはずの攻撃が今度は死角から再来、これに乗じてオレも真正面から攻め込むことで疑似的な全方位攻撃オールレンジを実現させることに成功した。どれだけギルベルトが先読みの天才だろうと剣は一つで腕は二本に限られる。加えて向こうの重力を強化することにより動きを鈍化、全てに対応するにはどうしても手数が速さが足りないという『読めていてもどうしようもない状況』へ無理やり追い込んだ。

「ほう、これはまた。良い手だが、しかしすまないが読めている」

「……ま、そうだろうな」

「驚かないのかね？」

「驚かないさ。この程度でお前をどうにか出来ると思う程、オレだっておめでたくないんでね」

この局面を打開するにはどうしても星の力を解放する必要がある——そういう状況に白夜の如き天才を引きずり込めただけで儲けもの。本当はこの全方位攻撃で決着を付けければ一番手っ取り早いのが、そこは高望みとしてすぐに諦めている。これすらギルベルトの能力を暴くための布石として利用するのだ。

剣を打ち合う刹那に交わした会話すら置き去りにして、予定調和として全ての銃弾がギルベルトへと殺到するその瞬間。三度目の不条理が今度はオレの狙い通りに顕現した。

いっそ素直なまでに正面からオレの直刀が剛剣により受け止められた。これはまだ想定範囲内。だが同時に到達するはずだった銃弾のいくつかが、突如として見えない手に叩き落されたかのように軌道を変えた。

もちろんオレ自身は重力方向の操縦を止めていない以上暴発などあり得ない。となればこれこそがギルベルトの星辰光の一端に他ならず、

「つと……！」

銃弾の一発がこちらへと曲がったのを認識して即座に数歩後退。追いかけるようにギルベルトも身を屈めつつ踏み込んだことで、数瞬遅れで誰もいない空間を銃弾が通過した。まんまと必殺の包囲網をやり過ごされてしまった訳だが今回はこればかりはこれで構わない。正体不明の星を使用させたことで能力解明へとまた一歩近づけたのだから。

幸いにして重力による軛くひきはまだ生きている。よって多少は受けやすくなった剛剣に集中しつつ、正体不明なギルベルトの星辰光アステリズムを暴くことにも思考を傾ける。

まず発動条件。これはシンプルにギルベルトの意志に応じて発動と考えて良いだろう。そうでなければあも自由に無重力下を移動したり、オレの太刀筋を捻じ曲げたり足元を不意打ちで爆破させたりは出来ないはず。

ではいったい何を起こしているのか。オレが星の力で重力操作を行っているように、アイツもまた何かしらの現象を起こして空中移動や不意の起爆を行っているはず。そこまでは推察出来るのだが、では条件がどうなっているのか掴めない。

見えない力と考えてパツと思ひ浮かぶのは重力、磁力、それに風といった代物だ。しかし剣や弾が曲がったときに風など感じなかったし、磁力や重力であも派手に足元が吹き飛ぶとは考えづらい。この三つは除外して良いだろう。

ならば詠唱にいずれかのヒントがあるか？ どうもオレの星辰光アステリズムには直接的に重力を示唆するような名称グラフィトンが入っているが、これを考慮すればヒントくらいにはなるかもしれない。

確かギルベルトの詠唱に含まれていたのは――

「聖痕ステイグマ、か……」

心の中の男の子はまだまだ生きています。前世かこに学んだ中二病ご用達の用語にはそれなりに覚えがあった。

うる覚えだが聖書に曰く、聖痕ステイグマとは救世主が磔刑に処された際の傷跡を示すのだとか。真偽はともかく中世の頃は救世主と同じ位置

に聖痕が発生する信者も存在し、しかも流血や痛みを伴うというオカルト現象もあつたらしい。

「……………いや、まさかー!」

武器によって付けられた傷跡。

何故か同じ位置に出来る聖痕。

そこから流血や痛みを伴うという不思議な現象。

これらはずまり、ギルベルトが起こしている不可解な現象と全く同じことを示しているのではないのか？

突飛な発想だがそう考えるとこれまでの全てに辻褃が合う。

直刀と銃弾の軌道がいきなり曲げられたのは直前で受けた一撃を『同じ位置にもう一度発生させられたから』であり、足元が爆発したのはギルベルトの踏みこみによる衝撃が再び発生したため。無重力下でも動けた理由は『自分の身体を対象にして衝撃を再発生させた』ことによる慣性移動と考えれば理屈は通る。

ここから導き出される結論はつまり、『一度与えた衝撃きざの再発現』だ。これが完璧な正解とまでは考えないが、似通った能力であるのはほぼ間違いないと見た。

そして同時に、剣戟を防御に徹していたこの状況がどうしようもなく詰みであることに思い至り背筋が凍り付く。これは、非常にマズい

「私の星辰光アステリズムに気が付いたかね？ だが少しばかり理解が遅かった、これにて詰みだ」

——ひたすらギルベルトの剣を受け流してきたオレの直刀は、どれだけの衝撃が再発現してしまうのだ？

致命的なミスに理解が及んだ時にはもう遅かった。パチンと指が鳴らされた瞬間、しっかりと握り込んだはずの直刀が突如として手の中で暴れ出す。滅茶苦茶な方向へブレようとする直刀は星辰奏者エスペラントとしての膂力を以つてなお抑えきれるものではなく、もはや振るうどころでない暴れ馬と化したそれは呆気なく掌から離れ飛んでいく。ダメ押しとばかりに空中でも衝撃が発動、オレの手の届かない所へと音を立てて転がった。



これは駄目だ、特殊合金製の媒介が存在しない限り星辰奏者は  
駆動値へと移行することが叶わなくなる。現にオレの身体能力も一  
気に基準値相当まで低下、今やギルベルトとは比べるべくもない差が  
出来てしまう。星辰光も同様に性能低下は免れず、今のままでは重力  
で足止めすることすら不可能となる。

「く、そ……ッ！」

やけに時間が遅く感じられる。走馬灯とはまた違う、極限状況故の  
スローな感覚。ギルベルトの剛剣がこちらへと振り抜かれる一瞬が  
途方もない時間に感じてしまうが。

……別にこの戦いで負けても命まで失う訳じゃない。ついつい忘  
れがちだがこれは模擬戦闘であり、そこは向こうも意識している以上  
せいぜいが気絶する程度で留まるはず。むしろそれくらいでキリよ  
く終わらせてしまった方が星辰奏者の力をアピールするにはちよう  
ど良い塩梅だろう。

ここでの負けは本当の意味で“敗北”ではない。ならば潔く諦め  
て地力を鍛え直す方が、ここでみつともなく足掻くよりも遙かに賢い  
選択肢なのは当然で。分かっているが、ああ、けれど——クリスはこ  
の男に“勝利”したのだ。その事実が脳内で煩いほどに疑問を呈示  
してくる。

お前は本当に、成す術もなくこれで終わって良いのかと。

「そんな、のッ……！」

ふざけるな。オレにだって譲れない矜持の一つや二つは存在する。  
確かにここで負けても肉体的な再起は出来るだろう。だが心に刻  
まれた敗北を拭うことは叶わず、ここで負けてしまえば最後ギルベル  
トには勝てないという確信が不思議とあつた。それは駄目だと直感  
が警鐘を鳴らしている。

だけどそれ以上に、クリスはギルベルト相手に勝利を収めたという  
のに、その背中を追いかけるオレが無様に負けて終わることが許され  
るのか？ いいや、否だ。そのような様では未来永劫クリスに追いつ  
くなど不可能であり、オレの誓いは出来もしない大言壮語として終  
わってしまう。まだ後が残っているからなどと、そんな懦弱な理由で

勝利を諦めることが許されるはずもなし。

オレは光を目指す男の幼馴染であり、誰よりもその背中に憧れて追いかけてきたという自負がある。

それがつまらない言い訳を重ねてただ敗北するなどあり得ない。意地を見せろよ、マルガレーテ・ブラウン！

「ああ、そうとも——まだだッ！」

振り絞る声は何てことのない決意と気合の表明。しかしたったそれだけで心の底から無限に気力が湧いてくる。これまでの自分は眠っていたのかとばかりの覚醒に逸る心が止まらない。

無手で剛剣を受け止めるなど不可能で、<sup>アベレージ</sup>基準値の重力操作では<sup>エスベラント</sup>星辰奏者に意味を成さない？

知ったことか、そんな理屈は捨ててしまえ。出来ると信じてやり抜けよ、それも無くしてどうして勝利を掴めようか。

狂った時間感覚が一気に平常へと戻される。スローに見えたギルベルトの一撃は一秒後には届く位置にある。猶予はない、考えるより反射で動け。

剛剣だけに狙いを定めて重力操作。目的は上への偏向。

振り下ろされる剣筋がわずかに鈍った。<sup>アベレージ</sup>基準値ではあり得ないはずの動作妨害。気合一つで強引に上昇した出力がそれを成す。初めてギルベルトの瞳に微かな驚きが映る。

続けて両手を前に出す。普段ならばやろうともしない無茶無謀。だが極限の集中に入った今なら可能だと直感が吠えている。ならばやれ、恐れるな。それだけのお膳立てはあるだろう。

眼前に迫った剣の腹を両手で挟み——白刃取り。重力操作で勢いは削いだ、故にやれない方がどうかしている。確信のままに受け止めギルベルトへと横蹴りを見舞った。ヒットと同時に自分の重力を後ろへと偏向、勢いよく後方へと距離を取りながら銃を抜く。

銃弾三発を間髪入れずに撃ち込みながら牽制。どうにか間合いを取って難を逃れた。自分でも気が触れたとしか思えない手段で乗り切れたことに心の昂揚が止まらない。

そして、必殺を凌がれたギルベルトはといえば。

「素晴らしい、さすがだよ我が戦友。君ならばこの程度の窮地、必ず凌いでくると信じていたとも」

「いっそ不敵で傲慢なほど満足そうな声音と表情で、大いにこちらを讃えてきた。」

「仮にも自分の必殺を防がれたというのに、あたかも『その覚醒こそ見たかった』と言わんばかりの態度である。余裕があるからではなく本心で紡がれるその言葉に、思わずため息を吐きかけたのをグツと堪えた。奮起も挫折も好きにやらせ、どう転んでも自分の得になるよう転がすのはギルベルトの十八番だろう。一々呆れていても仕方ない。「同じ光に焦がれた者として、限界を超えてくれる姿ほど胸に響くものはない。この点に関して私と君の意見は相違ないと考えるが違いかね?」

「そう、だな……理解はできるさ。ピンチを乗り越えて勝利を掴む姿ってのは、どうしても憧れるし格好いいよ」

「英雄のように、君がたった今実現させたように、どのような危機に直面してもなお心一つで自らを克己し踏破できる、それこそ人間の持つ強みだ。だというのに——」

「忸怩たる思いを噛み締めながらギルベルトが距離を詰めてきた。軽快に鳴り響く爆発音はこれまで仕掛けていた衝撃の再利用だろうか、奴の足元で爆発するそれが更なる加速力を与えている。」

「この世には言い訳を重ねて何もしない人間の何と多い事か。頑張る者ほど鼻つまみ者とされ弾圧され、墮落した周囲に迎合した人間ほど歓迎される不条理。ふざけていると思わないか?」

「確かに、世の中そんなのばっか、だなッ!」

「こちらもただ手を拱いている訳じゃない。バックステップで宙に飛んだ瞬間に自分を無重力状態に置き、さらに後方へと重力を重ね掛けすることで疑似的に空を飛んで見せる。これで床に仕掛けられた無数の罠にもひとまず対策は出来た。」

「正体が知れたギルベルトの剣はもはや迂闊に受けられない。一撃でも身体や拳銃で防げば最後、そこから衝撃を与えられて予定調和の詰将棋へと持って行かれる。よってこの場で最大の妙手は距離を

取って遠距離攻撃、それしかないのだが。

「でも、だからこそクリスが、オレたちがいるんだろ？ このアドラー帝国が是正されれば、正しい人間が評価される社会になる。お前の言うような懸念はきつと無くなるはずだ」

「二理ある。ならば見方を変えよう。頑張る者が歓迎される世の中になつたとして、頑張った者が報われるのはいったい何時だ？ 成果を出した者に評価を与えるより上位の人間、彼らが報われる日は果たしてどこだ？」

「随分とまた、未来を見てるじゃないか。来年の話をするに鬼に笑われるぞ、知らないのか？」

「ふ、私は来年ではなくいずれ来る未来の話をしているのだがね。なるほど、君にとつてはもはやそれだけ近い日のことだったか。言われてみれば同感だ」

「揚げ足を——ッ！」

衝撃による加速を行うギルベルトが相手では距離を離し続けるなど土台不可能なこと。さらに飛び散った瓦礫や破片すら衝撃再発生により飛来させて絶妙にこちらの退路を塞いでくる。あたかもオレの一挙手一投足まで予測しているかのように的確で無駄がない。

読み合いや場を活かした騙し合い。そういった状況下でギルベルトに勝負を挑んだ時点で負けている。敗北をほんの少し先延ばしにただけであり、このままではいずれ訪れる負けを甘んじて受け入れるより道はない。

「話を戻すが、誰よりも努力して上へと到達した人間は、果たしてその瞬間に誰が報いてくれる？ どうやって幸せになれば良いのだ？」

栄光ある勝者の冠を戴いたその瞬間から、誰が報いてくれるかも定かでない茨道へと放り出される。これは少々、努力と成果の採算が合わないのではないかね？」

「言わんとしていることは分かるさ。国のトップ——首相やら教皇やら総統やら、そういう人間には誰が褒美を与えてくれるのかって話だな。その地位にまで昇りつめた事そのものや、既にルールで定められた報酬があれば構わない、なんて収まりのいい話題でもないんだろ

？」

「然りだ。大した努力もしてない人間と、気が遠くなるような歩みを重ねた人間に対する報酬が、等しく杓子定規に決められたものであって良いはずがない。馬鹿らしく青臭い話かもしれないが、頑張った人間には頑張っただけの輝きに見合う何かを得る資格が存在すると私は思う」

「そうだな、そうなれば理想的だよ。でもそれは結局、本人にしか分からない事じゃないか。お前が言う杓子定規な報酬で十分に満足できるトップだっているかもしれない。敢えて言うが、もしクリスが総統にまで至ったとすれば、きつと同じことを言うはずだ」

こちらの勝ち筋は後にも先にも一つだけ、弾かれた直刀をもう一度手にして発動値ドライヴにまで戻すことだ。さっきまでは正体不明の能力ゆえに翻弄されたが、種が割れた今なら敗北必至とまでは言い切れない。

オレと奴の星辰光アステリズムを比較する限りでは、間違いなく後者の方がタイムン性能は高いと見た。代わりにこちらは広範囲に影響を及ぼし敵手へ触れない対集団の戦い方を得意とする。よって特別に有利ではないが、距離を開けられる性質から不利でもない。

だがその程度の狙いはギルベルトも当然理解しているはず。だから床に落ちている直刀へとオレを近づけさせないよう巧妙に退路を断っているのだ。基準値アベレージの身体能力と星辰光でどうにか距離を取れているのは、向こうもそちらを強く念頭に置いているからだろう。

結局のところ、もはや敗北は秒読み。いい加減に詰ませに来るのは間違いない。

よって勝負を仕掛けるならここだった。握りしめた新型の拳銃――アダマンタイトで出来た試作型拳銃がすべての鍵を握っている。

「ああ、その意見にもまったく以って異論はない。現実と同じことを言われたとも。だが、本当にそれで良いのか？　総てを手に入れるはずの勝者が報われず滅私奉公する先は、たった一つの汚点があれば即座に引き摺り下ろそうとする自称弱者たち。これではあまりに甲斐がない、英雄をそのように扱って良いはずがなからう」

「つまり要点を抜き取れば……なんだ、単純な事じゃないか。報われて欲しいんだな、お前は。クリスにさ」

「……理解してくれるか、私の想いを」

「当たり前だろ、オレはお前よりずっと長くアイツの幼馴染をしてるんだ。あんなに凄いやつがいつまでも評価されず燻ぶって、最後まで自分の幸せを得られずに死んでいく。そんなのはご免だな」

「ならば共に目指せるはずだ、誰かのために頑張れる者が報われる世界というのを。私たちならば、いずれ——」

「だけど、だ。ギルベルト、お前のそれは一つだけ致命的な見落としがある。はつきり言って、らしくないぞ」

元々オレの戦闘スタイルは直刀と拳銃を用いた遠近対応で非力を補うものだった。これに目を付けた<sup>アクエリアス</sup>叡智宝瓶の技術者から、『異なる触媒を用いた場合、<sup>エスベラント</sup>星辰奏者の発動値にどう作用するか』の実験として渡されたのが手の中にある試作型拳銃だった。

一部パーツをアダマントタイトで作成されたこの拳銃は当然ながら星辰光に感応する触媒として使えるが、如何せん同調が甘く不安定だ。なのでほんの短時間しか<sup>ドライブ</sup>発動値へと移行できないうえ、使えば最後フレームが歪み拳銃としても役に立たなくなる諸刃の剣。文字通りの切り札である。

渡されたのはつい先日、なのでギルベルトですらこれの存在自体は知らないはず。あるいはこの切り札すら予想の範疇として考慮に入れているかもしれないが——構わない。読まれていようが関係ない、光に倣って力技でねじ伏せる。

「お前の考えてるそれは、言ってしまうえば善意の押し付けじゃないか。もっと報われたいと考える人間も存在するかもしれないが、今のままでも別に良いと語る人間だっているはず。なのに意見も聞かずに『お前は報われるべきだ、私たちがどうにかしてみせよう』なんて、善意だろうと迷惑に取られるかもしれないだろ」

「ならば英雄が民衆に使い潰され消えていくのをただ傍観していくのみだど？ 相手が望まないからはい、そうですかと従うだけが正しいとでも言うのかね？」

「そうじゃない。頑張った人間に報酬を与えられる人間がいないなら、オレたちみたいな人間が隣に立てるまでになればいい。誰だって一人じゃないし横並びになっちゃいけない道理もない、たったそれだけの話だろう」

「それでは解決になっていないと私は思う。理解者が居ればそれで良しと、つまりは勝者が我慢しやすくなるだけの話で終わってしまおう。同じ言葉で返すが、それもまた一つの押し付けだろう」

「ああそうだな、その通りだよ否定はしないさ。だけどオレの人生なんて結局、最初から今日までずっと勝手に抱いた誓約の押し付けみたいなもんでな。振られ続けてきたけれど、いつか振り向かせてみせるさ」

拳銃型の発動体アダマンタイトにより星へと感応——瞬間的にすべての能力がドライブ発動値へと引き上げられる。

果たしてギルベルトはこれすら予測の内だったのか、これまで以上の加速で一気に距離を詰めてくる。だが遅い。ギルベルトにかかる重力には既に干渉済み、増幅された重力をオレと逆方向に動かし強制的に距離を取らせる。再び接近されるまで持つて数秒、充分だ。

続けて弾き飛ばされたまま放置されているオレの直刀へと干渉。一気にこちらへと引き寄せる。だがそれもギルベルトが発動された衝撃によりあらぬ方向へ飛ばされるが、それすら覚醒を果たした今では関係なかった。自分に出来る極限まで集束された重力を前に、ほんの些細な方向転換など大した意味を持ちはしない。

あと目測一メートル、七十センチまで来た。五十センチ、衝撃で方向が変わったが関係ない。あと三十センチ、残り十——手が、届いた。柄を握った次瞬、役目を果たしたように拳銃がひしゃげる。良く保もつてくれた、後は不要とばかりに投げ捨ててしまおう。

相変わらず手の中で直刀は暴れているが、それがどうした。事前に暴れると分かっていたいれば力で強引に抑え込める。それに衝撃の再発生も先に比べればまだ大人しい。おそらく回数制限もあるのだろう。

そして、掴んだチャンスを固く握ったその先で。

重力の軛を強引に振り払ったギルベルトはもう、オレの目前にあつ

た。

「ならば良し、その誓約を尊重しよう。だが——」勝つ〃のは私だ！」  
「違うな、〃勝つ〃のはオレだ！」

防ぐことなど最初から考えない。距離を取ることすら後回し。

目指すのはただ一つ、相手より先にこちらの刃を届かせることだけ。

速く、疾く、何よりも鋭く——最短に最速を突き詰めた刺突を放つ。

こちらの直刀と向こうの剛剣、互いの打倒を目指して迸る一閃が、触れ合う、その刹那に、

「——両者とも、そこまでだ。これ以上の争いに益はないと理解しろ」

「な……クリスツ！」

「おっと、これはまた」

オレたちの間に割って入った雄々しき英雄が、輝く二刀で彼我の刃を受け止めていた。

思わぬ乱入者の登場に思考が冷や水を掛けられたように急速に冷えていく。同時にクリスの言葉の意味も染み込み、ゆつくりと現状を理解する。

そうだ、途中からすっかり熱くなってしまったが、これはあくまでデモンストラーション模擬戦闘である。殺し合いではないのだ。だというのに、最後の瞬間オレもギルベルトも明らかに相手を傷つけるつもりで……もつと言えば、殺すつもりで剣を振るっていた。どう考えてもヒートアップしすぎだった。

「……悪い、確かに熱くなりすぎてたな」

「私としたことが、つい状況を忘れてしまった。許してくれたまえ、我が英雄」

「まったく……どうせ焚きつけたのはハーヴェスだろう。何を話していたかまでは問わないが、勝手をするのもそこまでにしておけ」

「心得た、次は気を付けるとしよう」

などと嘯くギルベルトは何一つとして堪えた様子がない。ここまでの展開がすべて彼の掌の上から出ていないと言われても無条件に信じられるような余裕ぶりであった。いつも通りとも言えるが。



「ひとまず二人とも、ご苦労だった。多少筋書きからは外れたが、エスベラント星辰奏者の力を見せつけるという意味では十分すぎる結果だろう。お偉方も今やこの技術を軍に転用することで頭がいっぱいだ」

言われて観戦者の方を見てみれば、誰も彼もが心此処に在らずといった有様である。破壊され尽くした訓練場に超常の異能を揮う超人たちを見てしまったのだ、そうなるのも無理はないかもしれない。ともあれ本懐はこれで達した訳である。思いがけず突っ走ってしまったが成果としては上々だろう。これでエスベラント星辰奏者技術を持つている改革派の立場もうなぎ上り、血統派に比肩するまで規模が膨れ上がるのも時間の問題だ。

大役を果たしてホツと息をついて肩の力を抜いたオレに、疲れた様子もないギルベルトが声をかけてくる。

「決着がつかなかったのは口惜しいが、君の宣誓は確かに聞き届けたとも。そういう在り方もまた一つの解だろう、そのまま貫いてくれることを祈っているよ」

「そいつはどうも……ま、お前の言ってることだつて理解は出来たさ。あとは匙加減だろうから、オレも応援してやるよ」

「これはありがたい。かの戦乙女ワルキューレからの激励ともなればやる気が出るというものだ」

「冗談は止せよ、恥ずかしいだろ」

ちよつとだけ笑って受け流した。すっかり言われ慣れてしまったが、やっぱりその二つ名は恥ずかしいものがある。

そんなこちらの心情を見透かしたのか、ギルベルトはあたかも審判者のようにこちらを見据えて――

「ならば、誓約者テールスとでも名乗るのが良いだろう。そちらの方がまだ文句もないだろう」

「テールス？ それってつまり――」

「誓約と誓言の神、それにちなんだ名前だよ。戦乙女ワルキューレが嫌ならそちらを名乗ると良い」

それだけ告げて、神託でも授けたようにギルベルトは去っていった。クリスもひとまずお偉方の方へと戻り、オレだけ一人残される。

誓約者<sup>テール</sup>。それはオレの星辰光<sup>アステリズム</sup>にも含まれている名称であり、確かに  
誓言の神である。似合っていると言われれば領けるのだが……  
「結局これも女神じゃないか……」  
「思わず眩き、頭を抱えたのだった。」

## Chapter 39 瞬く星々／Rise

第一回星辰奏者評価試験は、オレの予想を遥かに超えてアドラー帝国へと多大な影響を齎した。

まず改革派の変化だが、上層部の面々に目に見える形で星辰奏者の強力さ、有用性が明かされたことで、一気に新時代の超人が量産される体制に入った。これまでの密かな研究体制や超能力への半信半疑から状況はひっくり返し、今や金に設備に権力にとあらゆる手段を用いて星辰奏者の量産および星辰体へのアプローチが始まっていた。

さらに、星辰奏者の技術は政府中央棟内でもあくまでも改革派だけが握っていたのも流れを変えている。政局と戦局を大きく動かす力を独占しているのは非常に大きい。これまで以上に力を得た改革派の下へ、血統派に足蹴にされて燻ぶっていた者、どちらにもつかず静観していた者、利益を求め勝ち馬に乗ろうとした者まで……思惑は様々ながら一挙に人が押し寄せたのである。その規模はもはや帝国を支配してきた血統派にも劣るモノではないだろう。

こうして強まった勢いを下に、改革派はより間口を広げる手段を取る。

すなわち、星辰奏者適性を持つ者の調査及び引き抜きだ。既に改革派に属する人間の半分以上は星辰奏者の適性検査を終えており、さらにその半分ほどは実際に強化措置を受けている。しがらみのない最前線の兵士たちも少しづつ呼び戻しては適性検査および強化措置を受けさせるといふ計画が始まっており、驚くことに貧民窟からすら軍属希望者を募集する話すら持ちあがっているようだ。適性があれば好待遇が約束される——その謳い文句を掲げられれば、食うに困った孤児たちが門を叩くのも時間の問題となる。

それだけ星辰奏者の力とは規格外のものであり——国一つの舵取りを変えるには十分すぎる起爆剤だったのだ。

「オレたちの頃にこの待遇があれば楽も出来たろうにな……お行儀よく勉強なんかして最前線で使い潰される、なんてことも無かつたらうに」

「使い潰されるどころか大暴れしてやったけどな。つーか俺は今でも信じられねえよ……クリスの奴はどっからこんな技術持ってきたのやら。明らかに技術のブレイクスルーってやつだろ、こいつは」

自分の手を開いて握って感触を確かめているのは、つい先日強化措置を受けて無事に星辰奏者エスブランドと化したアルバート・ロデオンである。廊下でばったり出会った旧友はまだ強化された身体能力に慣れていないのだろう、オレもその気持ちはよく分かるから苦笑を零した。

「クリスが持つてきた、というよりはクリスが居たから実用化出来たみたいな感じらしいな。どうもこれまでは星辰奏者の適性がある人間が見つからなかったらしくて、そこにクリスが第一号となったことで後続が生まれる改良余地が出来たとか」

「へえ、そうなのか……なんともまたアイツらしいぜ」

本当は単にカグツチが星辰奏者の技術を提供しなかっただけなのだが……そこは敢えて嘘を交えて語っておく。

アルはまだ帝都の地下深くに座す鋼の太陽ほむらを知らない。いいや、そもそも数が増え始めている星辰奏者の中でも奴を知っているのはオレとクリス、それにギルベルトの三人だけだろう。後は叡智宝瓶アケエリアスの極々一部といった程度か。あくまでもほんの一握りである。

「ま、これでやつとレーテ達が何を企んでたのか理解できて腑に落ちたぜ。こんなとんでもない技術、友人だろうがおいそれと漏らす訳にはいかないな。適性があつたおかげで俺だけ蚊帳の外にならないでホツとしたぞ」

「四人揃って星辰奏者になれたのは幸運だったと思うよオレも。これで揃って適性無しとか、一人だけ脱落だったら悲しいにも程がある」  
「だわな。何にせよこんなすげえ力が入り込んだ訳なんだ、上手く使ってやらないとな」

どこまでも明るく星辰奏者の力を捉えているアルが羨ましく、そして裏の事情を知る身としては申し訳なく感じられてしまった。

だってそうだろう、彼にはまだカグツチの話をしていない。友人には何一つとして隠し事をしないとまでは言わないが、嘘をついてまで隠し立てしている事柄があるのもまた事実。どうしても負い目を感じ

じてしまう。

……オレの目的はクリスとカグツチが企てている計画を暴き、難事へとたった一人で挑もうとしている幼馴染の力となることだ。そのため行動を起こそうと決意するのは良いが、事はそう上手く運ばない。筋金入りの頑固者であるクリスは決して口を割るはずがなく、ギルベルトもまた一枚噛んでいるのだろうが思わせぶりな態度で煙に巻くばかり。計画の根幹について明らかに口止めされているのが見て取れた。

そしてカグツチのいる地下施設にも何度か足を運んでみたものの、生憎と扉が開くことは一度もない。もはや用済みと言わんばかりに沈黙を保っており、元凶へ直接コンタクトを取ることも出来ない有様である。

他者と比べればまだ取っ掛かりは存在する。だがそれ以上踏み込む手段は存在しない。これがオレの現状であり、数ヶ月もの時間を手をこまねいて過ごすしかなかった原因だった。

しかし状況は刻一刻と変化している。もはや星辰奏者であることを隠す必要はなくなり、堂々と自らの力を誇示し能力を高めることも容易だ。星の力をより効率的に用いるだとか、さらなる高みを目指すために身体を鍛えるだとか、分かりやすい対抗手段は取りやすくなった。

だから必要なのは情報面での協力者だ。悲しいがオレは凡俗であり、切れ者といった評価とはかけ離れている。そういう意味では頭が回り協調性もあるアルは英雄たちの裏を暴くのにうってつけの仲間には違いない。

いずれ、アルにもカグツチ周りの詳細は語るつもりである。しかしそれは今ではない。現在はオレにもさりげなく監視の目がついているし、そうでなくとも真正面から『お前たちの計画に勝手に関わってやる』と宣した以上ノーマークはありえない。迂闊に動けばより身動きが取れなくなるか、あるいは最悪の場合………

「どうしたレーテ、体調悪いのか？」

「ん、ああ……いや悪い、なんでもないよ。少しボーっとしちまって

た」

「なんだそりや。考え事もほどほどにしろよな」

呼びかけられ、頭を振って最悪の想像を振り払った。

もし、どこまでもしつこく食い下がりが続けたら……その果てにオレは、クリスの野望を阻む“敵”となってしまうのだろうか。あり得なくは、ない。かつて貧民窟スラムで言われたことを思い出す。

『つまるどころ、本心から人を信じられない塵屑が俺のことなのだろう。たとえ友であろうと目指すべき未来への障害になるなら躊躇なく切り捨ててしまおうし、自覚があつても止められん』

それがどうしたと、かつてのオレは豪語した。

同じように、カグツチの前でも胸を張って宣言した。

けれどもし、本当にクリストファー・ヴァルゼライドという男の前に立ちほだかる敵になってしまおうとしたら——やはりそれは、非常に恐ろしくて悲しいことだった。

覚悟の上だ。けれどいざ実行するとなれば勇氣は必要で、アルに語ることで彼にまでこの業を背負わせることになるのなら、早まった行いもまた出来ない。今の関係性に亀裂が入ってしまうことをオレは望んでいないのだから。

………だけど、あまり悪い事ばかり考えすぎると、察しの良いアルは隠し事に気が付いてしまうかもしれない。なので話を逸らすように今度はこちらから口火を切った。

「最近は一気に戦線拡大の主張が強くなってきてるけど、星辰奏者っていう切り札をゲットしたアドラーの目標は、目下のところ英雄の抜けた穴が大きい東部戦線なのかな」

「それしかないと思うぜ？ クリスが政府中央棟セントラルに左遷されてから数年、戦線は膠着どころかやや押し戻されたとか聞いているぞ。お偉いさんも星辰奏者の力でどうにかかつての勢いを取り戻すと躍起になるはずだ」

「一騎当千の英雄が抜けたとして、一騎当百くらいの星辰奏者が十人いれば理論上は同じ働きになる。考えただけで眩暈がするな」

英雄量産計画とでも称すべきか、物量でもって質を覆す帝国の姿勢

は人類史の中で幾度となく見られた行いだけに手慣れたものだった。とりわけ個人の資質に左右され、言葉ですら曖昧な“英雄”という概念すら複製するとなれば、ついに行きつくところまで来たかと思えてしまう。オレにとつては英雄などたった一人しかありえないのだが、それは置いておく。

まあ、そんな感想はともかくとして、アドラーはやはり近日中に東部戦線に星辰奏者を投入するつもりなのは間違いないようだ。戦線が徐々に押し戻されているのもそうだが、なにより激戦区で先陣切つて暴れる”とある存在”が危険視されているらしい。

「確かアンタルヤの傭兵だっけか。それこそ一騎当千クラスの働きをする相手がひたすら帝国だけを狙つてくるとなれば、血染処女バブルゴや猟追地蠍スコレビオとしても強化兵は喉から手が出るほど欲しいだろうしな」  
「そんな奴がいるなんざ信じられないから偽情報だ、なんてのは俺たちだけは言っちゃいけないだろうな……」

二人揃つて遠い目をしてしまう。意志の力だけで不条理を覆す男の存在をよく知るからこそ、生身で一騎当千という眉唾物な話を疑うことは出来なかった。

ともかく、噂の傭兵はここ最近で驚異的な戦果を挙げ始めた新進気鋭の人物であるらしい。これまでいっただいどこで燻つていたのかとばかりの活躍ぶり、経歴を調べてもそれこそ突然変異的に誕生したとしか思えないほど、傭兵や兵士たちの間でもその人物は知られていなかったとか。

しかも厄介なのが、その傭兵はアドラー帝国だけを執拗に狙つてくるといふ点だ。戦場ならば傭兵同士の激突や、場合によっては身内での小競り合いや裏切りに巻き込まれることなど日常茶飯事だろうに、それでもなお帝国以外に目もくれない。

徹頭徹尾アドラー狙い。まるで英雄の抜けた穴を突くかのような活躍ぶりに加え、戦闘手段に倫理的な葛藤や人として真つ当な意識など欠片もない。水源に毒を盛る、死んだ味方を盾にする、市街戦なら一般市民に爆弾を持たせて横合い特攻させる等々——あまりにも人道に悖る戦いぶりと、個人とは思えぬ手段の選ばなさ。故に軍事帝国

アドラーをして苦戦を強いられているのだ。

長くなつたが、今の東部戦線はクリスと入れ替わるようにその傭兵が大暴れしているせいで、思うように戦線が前に進まないどころか一部では後退すらしているらしい。信じられないような苦戦ぶりに驚かされるが、例外は何処にでも存在するということか。

そんな時に流星の如く現れた星辰奏者技術に人工的な超人たち。ある意味では巡り合うべくして出会う星の下にあったのかもしい。

「もしかしたら、オレたちもまた東部戦線に送られたりしてな」

「十分ありそうだから困るな。んな超人みたいなやつと一戦交えるならんぎ勘弁願うぜ」

「いいじゃないか、アルの能力は生き残るのに便利だからさ。指揮官として活躍できるんじゃないのか？」

「こっちは死に辛いだけでレーテみたく派手で強力な能力じゃないんだよ……ま、便利ではあるけどな」

「アルらしいと思うけどな」

伝え聞いた能力の詳細は本人の言う通り決して派手な能力ではないようだが、軍隊という枠組みの中ではこれ以上ないほどに便利で重宝されるものだ。オレやギルベルトみたく戦闘で敵を打ち負かすことに特化した能力に比べればサポート特化とも表現できる。

……考えてみれば、前線で死ぬ兵士の数を抑えることが出来るうえ、東部戦線で戦った経験も持つアルは星辰奏者の力を振るわせるのにうってつけの人材な気がしてきた。段々と数は増えてるとはいえ、最初に戦線に投入される星辰奏者の一人はこの男になりそうな予感がヒシヒシと。

「ま、頑張つてこいよ。オレは遠くからアルの活躍を祈ってるぜ」

ポン、と冗談めかして肩を叩く。

気分は出向を見送る同僚か上司のそれだろうか。

「そんなときはレーテも道連れにしてやるから覚悟しとけよな……！」

「やれるもんならやってみろってんだ」

本人も自覚はあったのか、いい笑顔で道連れ宣言をされたものの。



星辰奏者となっても特に関係性が変わることなく、オレたちは面白  
おかしくふざけ合うことが出来ていた。

◇

などとしやれ合っていたのだが。

マルガレーテ・ブラウン並びにアルバート・ロデオンの二名に東部  
戦線への転属指令が出たのは、それからわずか三日後のことであり。

どうやら実戦に投入される星辰奏者の第一号に、オレたち二人は選  
ばれてしまったようだった。

## Chapter 40 東部戦線、再び／Return

首都からここまで乗ってきた鉄道から降り、記憶を頼りに街並みを歩く。

懐かしの東部戦線の空気は、かつてと比べて明らかに淀んでいた。再びやって来たのはアドラー帝国軍の東部戦線における要衝、フランクフルトだった。かつてオレとクリス、それにアルと一緒に前線で駆けずり回っていた頃の名残はそのままだが、明らかに空気が変わっている。報告で聞いてはいたものの、前線がかなり押し返されたという実感を肌で感じてしまう。

「だいぶこっぴどくやられたらしいな、こりや……」

「勢い付いてたところに冷や水を掛けられたようなもんだ、そりや意気消沈もするだろうさ」

囁き声くらしいの調子で隣のアルと会話を交わしながら辺りを見回す。オレたちがいた数年前と比較すると影の落ちた街並みは、そのまま東部戦線の戦況を映しているのだろう。それも当然というべきか、かつてクリスが居た頃と比べて現在の戦果はパツとせず、しかも悪辣な傭兵相手に手玉に取られるようでは自信を失うのも仕方ない。

アドラーは軍事帝国なのだから、暴力で負けてしまえば当たり前に威信は翳る。いや、この場合はむしろ一国を相手に驚異的な戦果を叩き出している例の傭兵が異常なのか。そんな相手が敵にいと理解してしまえば、余計に脅威が伝わってしまうのも無理はなかった。

「ま、その上で星辰奏者<sup>エスベラント</sup>として何処まで戦えるかだな」

「実際前線に出るのは俺たちが初めてなんだろ？ いくら話は通つてるにせよこっちの奴らからすれば不安にもなるわな」

「むしろ二人だけの援軍とか頭おかしいのかって言われてもおかしくないっつーか」

「どんな嫌味を言われるかも分かったもんじゃない。さすがに頭ごなしに否定はしないだろうけどよ」

「まったくだ」

はあ、と一つ溜息を吐く。この先で待つ相手を思えばどうにも気が

乗らない。

一騎当千の身体能力と星辰光があるとはいえ、実情を知らなければ不信感を覚える話だ。しかもオレとアルは指揮系統としても微妙な扱いであり、平たく言えば『命令を聞きつつ好き勝手に暴れてこい』という枠組みにある。なので余計に扱い辛く、あたかも遊撃軍のような配置となるのは容易に想像が付いた。

だからまあ、何はともあれまず第六東部制圧部隊血染処女隊長こと、カイト・影・アマツ中将閣下に面通しをしてこななければならないのだが——はつきり言つてオレはあの隊長がどうも苦手だった。

別に極端な無能ではない。ただギルベルトと比べれば超有能とも思えず、そもそも嫌な意味で貴族としての振る舞いが染みついていいる。スラムから昇ってきた軍属は躊躇なく捨て駒にするとか、妙に嫌味っぽいとか、そんな調子だ。あと初めて東部に配属された際の、あの何ともいえない視線も未だに忘れられない。

まさしく血統派な彼が改革派に属するオレたちを見た時、どんな皮肉や嫌味を言われるやら。覚悟しながら帝国軍の本拠となるビルへと向かえば、

「……なんというか、拍子抜けだな」

「まさか有無を言わさず前線に行つて来いとは思わなかったぞ」

覚悟してたような応酬はちつともなく、帝都からの再配属の旨を受領し短いやり取りを交わしてすぐに終わった。

これはまさか改心なり見直したりしたのか、なんて訳ではもちろんない。原因は誰が見ても明らかだ。

「随分とこう、やつれてたな」

「順調だったのが押し返されればそうもなるだろ。責任問題とか采配の如何だとか、偉くなればそれだけ厄介事や重責も背負い込む羽目になるさ」

「今まで偉かったから好き勝手にやれてたのが、偉いから追い詰められるのも皮肉なもんだな」

「人間うっかりイイところまで昇りつめても難儀なこった。クリスの奴にも言つといてやらないとな」

重役になるのも結構だが、それはそれで下っ端には理解できない苦労やプレッシャーは存在する。今や改革派の筆頭として名を上げたクリスの立場や難しさなどさもありなんだ。改めてオレたち親友が支えられるところは支えていく必要があると認識したところで――

「そういうえば、“アイツ”は元気にやってるのかね」

暗い話題から明るい話題へと切り替える。ふと思いついたのは東部戦線で戦う中で邂逅した、とある青年兵卒のことだ。

予想外すぎる出来事からオレたち全員に強烈な印象を残した“彼のことは、長い血染<sup>バ</sup>処<sup>ル</sup>女<sup>ゴ</sup>務<sup>メ</sup>めの中でも一際忘れられない愉快な思い出だった。

「ああ、“アイツ”のことか。何言ってるんだか、クリスに喧嘩売るような跳ねっ返りがそう簡単にくたばってたまるかよ」

「はは、だよな。少しだけ心配になったのが馬鹿らしいよ」

やはり忘れていなかったらしいアルの言葉に自然と笑みが浮かんだ。

数年前、とある街に滞在していた頃、無謀にもクリスに喧嘩を売ってきた力自慢の乱暴な青年。ギルベルトですらあまりの事態に一瞬固まり、次いで笑いだすような出来事を起こした“彼”は、今もアドラー軍で元気でやっているのだろう。いつ死んでもおかしくない激戦区であるというのに、不思議とその確信が持ててしまった。

「時間があれば顔も見ておこうぜ、息災って知ればきつとクリスも喜ぶだろ」

「だな、こんなところでも俺たちの思い出の場所と言えばそうなんだし」

死ぬような目にあったり、打ち上げしたり、色々あった。

スラムでも、戦場でも、年月を重ねた土地にはどうしても郷愁が湧いてしまうものらしい。

◇

かつて死ぬような目に遭ったテューリンゲンの森の先、やや開けた土地に今の前線基地は存在する。

フランクフルトに到着したその日の内に早速オレたちは出発し、現

在のアドラー帝国とアンタルヤ商業連合の戦端近くまでやって来た。慌ただしいことこの上ないが、星辰奏者は体力も人並み外れているのでアルと一緒にピンピンしているくらいだ。その足で早速お偉いさんの下で挨拶をし、さらに一般兵卒相手にも面を通すことにした。

果たして、中央からいきなり東部へと飛ばされてきたオレたちへの反応はまちまちだった。数年振りに会った戦友なんかは無邪気に再会を喜んでくれるものの、胡散臭そうな視線で見られたり明らかに舐められた空気を感じたり。挙句の果てには「中央仕えから地獄の最前線に飛ばされるなんてよっぼどですね」と遠回しに言ってきた相手もいるくらいだ。

「ここまで温度差があるとは思わなかったぞ……！」

「嬉しいやらちよつと腹立つやらで複雑だな……ま、悪意や皮肉なんて今に始まったことじゃないさ」

ある程度は顔を見せて回り、ひとまず切り上げたところで外周の防壁へと背中を預けた。

中心から離れたこの近辺は人が少ないおかげで落ち着いた雰囲気がある。心身共に疲れ始めてたのでちようど良い穴場だ。

「いいよなーアルは、そうやって流せる度量があつてさ」

「性分だからな。レーテに比べりゃ色んな意味で大きい自信があるぞ」

「はいはい、それは良かったですねー」

身長についてサラツと触れてきたのはムカつくけれどグツと我慢。

ここでムキになればニヤついている巨漢アルの思う壺だ。

それに、こうして軽口を叩き合うだけでもいい休息になる。無意識に強張っていた肩の力を抜いて深呼吸。すっかり夜も更けた冷たい空気が火照った身体を冷やしていく。

「ま、散々言われたことは置いとくとしてもだ。ちゃんと目的自体は達成しないとな」

帝国の星辰奏者はまさしく戦場の覇者を決め得る人材である——実戦でそれを証明し、戦意を上げつつ敵国への牽制とするのが第一目標だった。

「ド派手にぶっ放すのはレーテの能力向きだろ、心配することないさ。俺の地味な能力に比べりゃ羨ましいくらいだぜ」

「……ま、不意だけど戦乙女ワルキューレで誓約者テールズだからな、名前に負けなくらいは活躍してみせるさ。でも万が一の時はその地味な能力でサポート頼むぞ」

「任せとけ、それこそ俺の得意分野だからな。お前は正面だけ見れば十分さ」

「ああ、頼りにしてる」

たった二人ながらもこうして信頼できる相手と居るのだ、不安がる必要なんてこれっぽっちもありはしない。

そう安心したところで……ふと、嗅覚が奇妙な匂いを察知した。ほんの少しだけ焦げ臭いような、どうにも鼻を突く嫌な匂い。火薬と脂の焼ける匂いに酷似したそれは、戦場で散々に感じてきたものであり。

「おいレーテ、マズいぞ」

「……ああ、分かってるさ。まさかここまで堂々と来るなんて」

「それどころじゃない、ここら一帯がもう死線地帯だッ！」

「嘘だろ——！」

言いかけた直後、静寂を引き裂くように轟音が響き渡った。先ほどまで寄りかかっていた防壁を吹き飛ばしながら爆風が駆け抜け、間一髪で飛びのいたオレの髪先を焦がしていく。もしアルの警告がなければ仲良く巻き込まれて大怪我を負っていたことだろう。

見張りはどうしたとか、そもそも帝国軍基地に殴り込みなんて正気かとか、気になる所は多いがまずは抜刀。アダマタイト製の直刀を握りしめて意識を戦闘用へとシフトさせていく。だけどどうにも奇妙なことに、人の気配は感じられない。むしろ肉の焦げた臭気が立ち込めていることから、すぐにそのやり口を悟った。

「人間に爆弾を持たせて特攻させたな……えげつないことしやる」

「報告にあった一般人に爆弾持たせて特攻ってヤツか、胸糞わりいな。だけどそれなら見張りが止めそうなんだが……いや、この場合は」  
「先に排除されてたか、だな。にしても誰にも気取られなかったのが

信じられないが」

少なくとも帝国軍側はこの兆候にまったく気づいていなかった。そうでなければ向こうの方が蜂の巣をつついたような騒ぎとなつてはいないし、さらに他の地点からまで爆音が響いてはこないはず。傭兵相手に完璧な奇襲を決められてしまい軍事帝国としての面目は丸潰れもいところだ。

だが威信や面子以上に重要なのは、一連の流れを一切気取られずに成し遂げたとんでもない大胆さと用心深さである。まず常識的な頭を持つていれば『敵陣ど真ん中に襲撃をかける』など選ばないし、なのに奇襲を仕掛けるやり口は見事なまでに鮮やかだ。加えて当然の権利とばかりに人倫すら無視とくればいよいよテロリストじみた相手である。

こんな頭のおかしいやり口をしてくる相手に、残念ながら心当たりが一つだけあった。

「執拗にアドラー帝国だけを狙ってくるアンタルヤの傭兵……まさか進軍を止めてる元凶とこんな早く遭遇するなんざ運が良いのか悪いのか」

「これじゃ運が良いとはあんまし思いたくないもんだぜ。とにかく俺たちがどう動くかだ、敵の狙いも数も不明となれば下手に行動するのも悪手になる」

「勝手に前へ飛び出すなって言うんだろ？ それくらいは分かっているけど……」

突然の襲撃のせいで指揮系統はズタズタ。さらに新入りかつどうにも曖昧さを残した立場のままのオレたちが、マトモに命令を仰げるとも思えない。軍人ならば勝手な行為は慎むべきだと頭では理解しているのだが——座して待っただけでは事態が好転しないのも事実だった。

「そつちの星辰光アステリズムから見て、明らかに危険地帯になつてる所は？」

「見た限りだと基地内部はほぼ平気だが向こうの外周に……っておいおい」

「あんまりやりたくないけど、打つて出る。帝国への嫌がらせに特化

した相手が主導権までゲットしてるんだ、マトモなやり方じゃ影も踏めないだろ」

過信はしないが、これでも新西暦における最新の暴力兵器エスベラントのだから、多少の無茶は押し通せる根拠がある。何より幾度となく帝国を後手に回らせているやり手を前にして、これ以上手を拱こまねく方が危険だと判断した。

「どうやらアルも同じようなことを考慮していたのか、ほんの数秒迷うように腕を組み、

「……よし、その提案に乗ってやる。ただし指示はオレが出すから、旗色が悪くなったり帝国軍の足並みが揃い次第引くか合流する。分かったか？」

「オツケー、それで十分だ。油断なく慢心なく、やれるところまで駆け抜けてやろうぜ」

たとえ尋常ならざる敵だろうと関係ない。

親友に倣って「勝つ」のはオレだと信じるだけだ。

◇

「さて、と……仕込みは上々。あとは結果がどう転ぶかだな」

帝国軍基地から少し離れた林に紛れ、男はクツクツと嗤っていた。

両手に装備した竜爪のごとき籠手ジャマダハル剣は血で赤々と染まっており、つい先ほど帝国兵士数名を斬り殺したことを如実に語っている。誰にも気取られずに暗殺を成し遂げるといふ難行を達成した男であるが、その事実はどうでもいとはばかりに帝国軍基地を睥睨する。

「帝国の誇る虎の子の兵器——というほど希少でもないらしいが、ともあれ初の顔合わせだ。実戦でどれだけやれるのか、是非とも見せてもらいたいもんだがね」

アドラーが星辰奏者エスベラントという不可思議な兵種を生み出し、しかも量産に取り掛かっているという内情を男は知っていた。帝国への溢れんばかりの敵意に目を付けた十氏族ポソンのミツバサイからのタレコミだ、それなりに以上に信用できる筋だと確信している。

よって男の目的は二つとなる。第一に、この東部戦線に送られたという星辰奏者と交戦し、その実力を測ること。第二として、血液でも



髪でも肉片でも構わないので、研究用のサンプルを採取すること。捕虜とするのは考慮しない、超人相手にその考えは容易く死を招くだろうと男は確信しているから。

そのためにわざわざ星<sup>エスベラント</sup>辰奏者が待機していると予想される前線基地へ襲撃を仕掛け、あぶり出すことにしたのだ。これでお目当てが出てこなければ次の機会を窺うし、麻痺させた指揮系統が予定より早く復帰したなら見切りを付けてすぐ逃げる。もし首尾よく星辰奏者が出てくれば儲けものだが、すなわち超人相手に戦うという無謀を通さなければならぬ。

どう足掻いても苦境に立たされるのが末路なのだが……男はそれでこそと言わんばかりの笑みを深める。

「本気で挑めば不可能など一つもない、それを教えてくれた麗しの英<sup>ジルクフリード</sup>雄<sup>ワルキューレ</sup>と戦乙女を裏切ることなんざ出来やしねえさ。この局面すら糧として、次の高みへ至ろうじゃないか」

無理無茶無謀を次なるチャンスへ繋げるのは光に焦がれた者の特権だ。本気で未来を目指すからこそ死すら恐れぬ覚悟で挑むし、必ずや憧れの背に魔剣を突き立てるべく牙を研ぐ。そこに驕りは一切なかった。

だが、その上で生き残るための準備もまた怠らない。男の背後にはまだまだ洗脳された予備の人間爆弾が控えているし、同じく帝国への敵意を燃やした正気の傭兵たちも数名いる。彼らは一様に男の強さと目的に惹かれて集った仲間であり、男の援護に入る手立てとなっている。

「さあ、殺し殺され合おうぜ、新時代の超兵士よ。願わくば、前を目指して命を燃やせる益荒男であることを祈ってるぜ——」

全力だから手段は選ばず、あらゆる外道の手管を以って光を目指し滅ぼそう。

邪竜にして魔剣——ファヴニル・ダインスレイフは己が欲望の赴くまま、ここに開戦の狼煙を上げたのである。

## Chapter 41 強欲竜/Dainsleif

帝国軍基地に強襲を仕掛けたアンタルヤの傭兵団――後に強欲竜フアヴニルと呼ばれ畏怖されることになる彼らは、息をひそめて林の中に潜んでいた。

初手で指揮系統を麻痺させかき回し、超人が力に驕り単独で出てくるように誘導。しかも敢えてこの林の方に自分たちが居ると匂わせでもある。これに釣り出された星辰奏者を待ち伏せし、数と奇襲で一気に畳みかけようというのがフアヴニル・ダインスレイフの仕掛ける策だ。

シンプルゆえに穴はないが、失敗すれば順当に押し負けて死ぬ確率が高い。だから不安や怖れを抱いて当然のはずなのに、集う傭兵たちの目に怯えの色はなかった。それどころかむしろ、首魁たるダインスレイフを筆頭に口角を吊り上げ今か今かと待ちわびている有様である。

「帝国の奴ら、来ますかね」

「こちとらやつこ奴さんらには恨み骨髓なんだ、ご自慢の超人相手に一泡吹かせてやりたいねえ」

獯猛に嘯く傭兵たちを横目にダインスレイフはいつそう凄絶な笑みを深める。

「いいねえ、その意気だ。帝国は強大で、新たな兵士は超人だから勝てっこない？　ったく、お前たちの本気を腰抜け共に見せてやりたいくらいだぜ」

ほんの少人数で帝国の快進撃を止めた邪竜だからか、男の言葉にはこれ以上ない説得力が存在した。

すなわち、人間全力でやれば大抵何とかなってしまふこと。挑むことすらせずに何もしない他の傭兵共腰抜を筆頭に、リスクを恐れて口だけ達者なまま逃げ回る輩は唾棄すべき姿と腹の底から信じている。

だけど自分たちは違うのだ。頑張れば一泡吹かせることも出来たのだし、これからも意志の限りやってやれないことはない。狂氣的なまでの自負を胸に今宵、未知へと挑まんとしているのだが、

「来たぞ」

短い言葉と共にざわりと生温い風が駆け抜けた。なのに反射的に肌が粟立ち背筋が冷える。これまで何度となく死線を潜り抜け、銃火飛び交う戦場を駆け抜けた勘が騒いでいるのだ——これより相対する敵手は過去最強の怪物であるのだと。

「お前たちが基地襲撃の手下人だな？」

「聞くまでもねえ、コイツらは真つ黒だよ。やっちまえ、レーテ」

眼前にやって来たのは軍服の男女が二人だけ。立ち姿に隙は無いが、真正面から堂々と現れる様はいつそ滑稽にも思えてしまう。なのに誰もそれを嘲笑しなかったのは粟立つ肌が警鐘を鳴らしているからか。

「おまえら、ありつたければ撒け！」

会敵による一瞬の空白、即座に動いたのはやはりというかダインスレイフだった。

次の瞬間には号令に従って滅亡剣含む全員が一斉に発砲、銃火器は雨霰と鉛玉を吐き出し、たつた二人の軍人を蜂の巣にすべく猛威を振るう。なのだが超<sup>エスぺラント</sup>人二人は何処までも落ち着いていて、一秒後には風穴が空くというのに慌てた様子もなく睥睨していた。

「悪いが銃弾の雨霰はもう見てるんでな」

レーテと呼ばれていた茶髪の女がスツと手を前に出した。まさか銃弾を手掴みするとも言うのかと傭兵たちが目を見張る。

だがそれ以上に見覚えのある整った顔立ちにダインスレイフが瞠目したのも束の間、すべての銃弾が地面へとめり込み停止する。どう考えても物理法則に喧嘩を売るような驚きの光景が眼前で繰り広げられたのだ。

「……へえ、銃撃が曲がるとは、いったいどんな手品だいそいつは」

「企業秘密——ああ、いや、帝国秘密って言った方がいいか」

呼び方なんてどうでも良いが、とにかく事実として無数の弾丸は軍人二人に一切傷を与えていない。まるで上から見えない手に叩き落されたかのよう。あるいは急に銃弾が意思を持って地面に飛び込んだとも思えるほどだ。

しかし星辰奏者の隠し玉、特殊能力について考察材料を知れたのは大きい。もう一人の男の能力は現状不明だが、明らかに油断できる相手ではないだろう。

「ま、嫌なら無理に教えてくれなくても構わないぜ？ こちとら勝手に解析でもさせてもらうからなア——！」

どうにせよ先手必勝、下手に自由を与える意味はまったくない。銃撃が効かないのなら次の手段、次の策をぶつけなければ構わない。

一般常識の通用しない相手にも驚異的なポジティブさを発揮する強欲竜だが、しかし。

それでもまだ認識が甘かったと言わざるを得ないだろう。新西暦最新にして最強の人間兵器、その真価と恐ろしさはまだまだこの程度では計れないということ。

「意気込んでるところ悪いけど、もう詰みだよ」

「あ……？」

どこまでも対照的な冷たい声音と共に、駆け出したダインスレイフ達の身体が地面へと沈んだ。

まるで全身に鉛を付けられたかのような重量感に誰もが抗うことも出来ぬまま、成す術もなく大地へ磔となる。都合十人程度の傭兵たちは揃って身じろぎすら不能、片腕すら動かせずただ藻掻くだけ。

「おい、なんだこれ！」

「クソツ、動けねえ！」

「畜生、いくら何でも寝るには早すぎんだろ！」

こうして呆気なく勝負は付いた。女の操る超能力は馬鹿らしい程に圧倒的で、抵抗すら無駄である。所詮一般人は超人に勝てる余地がない事を刻み込まれ、それでもまだまだと滅亡剣が視線だけでも上に向ければ——

狂おしくも懐かしい光景が閃光のようにフラッシュバックした。

そうだ、邪竜にして魔剣が生まれた時もそうだった。這いつくばったまま見上げた先に、忘れもしない姿をその眼に焼き付けたのだから。

「おいおい……俺の目は節穴か……？」

ニルヴァーナ  
古巣を破壊したのは不死身の英雄ともう一人、戦乙女フルキューレが居たではないか。英雄の輝きに負けないように付き従う姿に、羨望と嫉妬を抱いたのをよく覚えていいる。あの時と比べて互いに容姿や立場の変化も見られるものの、分かっただけじゃ間違えようがない。むしろどうして遭遇時点で気付かなかったのか、己の眼を抉って呪い殺したくなる衝動に駆られてしまう。

いや、それだつて違う。自責でも後悔でもなく、もっとやるべきことは他にあるのだ。

「ああア……つたく、それならこんなところで寝てる場合じゃないだろうツ！」

憧れを前に地面に倒れ伏したまま？

ここまで本気で生きた証を見せつけることなく敗北する？

なんだそれは、馬鹿げてる。こんなにも成長した己を見て欲しい相手に対して、これ以上の無様を晒すなんて出来る訳がない。血が滲むほどに拳を握り締めながら、諦められぬと吠える意思が全身を駆け巡り、そして常識を超えた爆発力が身体に宿っていく。

さながらそれは憧れた英雄が起こす覚醒のように……心一つで新たな段階ステージへと駆け上がる。光と対極の邪竜ヤミを名乗っておきながら、その在り方は何処までも英雄と同じもの。

よつてここに、ダインスレイフは更なる脱皮しんかを遂げたのだ。鱗と魔剣を悪意のままに軋ませて、輝く光を喰らい尽くさんと星に咆哮したのだった。

◇

「ま、そう難しい仕事じゃなかったな」

「俺はさすがにヒヤツとしたぜ。銃弾をあんな簡単に避けられるなんざ聞いてなかったからな」

「そりゃ悪かった」

グラビトン  
星辰光のおかげで帝国軍基地強襲の傭兵はんじんたちを拘束するのは楽勝だった。やはりというか一般人が急に十倍以上の重力負荷に晒されれば行動は不可能なようで、呆気なく無力化に成功した。

なのに一人だけ、赤髪に巨大な籠手剣が特徴的な男だけは様子がお

かしい。おそらくはリーダー格だろうこの男は地面に伏せたままこちらを見上げ、次いで何かに気が付いたようにハツとして……次の瞬間には口元に獰猛な笑みを浮かべていた。

「下がれアル、なんかヤバいぞ」

嫌な予感がする。こちらを見上げる瞳に宿っているのは諦観ではなく決意と克己心で、それがどうにもオレの憧れを想起させて仕方ない。

この手の人物は絶対に何かやらかす。だから念には念をでより強力な拘束を掛けようと力を込めようとしたが、もう遅かった。

「クハッ、ハッハハハハッ！ 邪竜を戒めるには一步遅かったようだなア戦乙女！」

「おいおいマジかッ！」

哄笑を引つ提げながら信じられない勢いで起き上がり突撃してくる。重力の軛は今も有効であるはずなのに、それを一切感じさせない身のこなし。星辰奏者でもないのに意志力だけで強引にねじ伏せたとでも言うのか。

ある意味で星辰光アステリズム以上に現実を無視した挙動に不意を突かれたのも一瞬、振りかぶられた籠手剣ジャマダハルに対して即座に直刀を引き抜いて対応した。あたかも竜の爪を模したような武器は常人が扱える代物じゃないだろう。

「その状態でよく動けるよ、普通は無理だと思っただがな」

「無理だと？ なんだそりや、そんなつまらない理屈は前におまえと会った時に捨てちまったぞッ！ 成せば成るって教えて貰ったんだよ、おまえたちの背中にな！」

「前……!?!」

記憶を探ってもこんな男など出会った覚えがない。ここまで覚悟のキマった人間との出会いはそれこそジエイスのように印象に残るだろうに、ちつとも分からないのが逆に恐ろしい。因縁も力の源も分からない相手と戦うなどご免被りたいところである。

だが依然として有利なのはオレの方だ。この男の重力負荷は解除していないし、他の傭兵が横やりを入れてくることもない。身体能力

でも圧倒的となれば負ける要素は一つもない——はずだ。

「そらどうした戦乙女<sup>フルキューレ</sup>！ 超人となったおまえの力はそんなものかアツ!?」

「ちっ……！ アル、悪いが他の奴ら任せた！ コイツをほつとくのはヤバイ！」

「おう、了解！」

そう、負ける要素など微塵もないはずなのに。

己が勝つと信じて憚らない姿がどうしても幼馴染<sup>クリス</sup>を想起させるものだから。きつと、どうせ、意志の力で何か不条理をやらかすのだろうと覚悟を決めて籠手剣<sup>ジャマダハル</sup>を振り払う。他の奴らはアルに任せオレはコイツだけに集中しよう。

果たして男は身体にかかる十倍以上の負荷をもともせず、当然のように衝撃を受け止め直立姿勢を維持していた。もはや驚くまでもない。

「ちよいと身体は重たいが、慣れちまえばこんなもんか。むしろ良い鍛錬になると礼を言ってもいいくらいだぜ」

軽口を叩く余裕すらあるらしい。つくづくとんだ規格外、あり得ない事があり得ないまま実現できる強さはまさしく、帝国軍を後退せしめるに相応しいというべきか。

だけどそれも今日までだ。帝国<sup>クリス</sup>に仇なす危険人物はここで確実に終わらせる。可能ならば捕虜にでもするのが一番だが、無理そうならば容赦なく殺す以外にない。

「トレーニングしてるなら悪いけど、生憎これだけが取り柄って訳でもないんでな」

「へえ、やってみろよ」

「言われずとも！」

男に集束させていた重力を一時解除、かつてギルベルトにそうした如く上方向へ変換すると即座に無重力へと投げ出した。これだけで普通ならば対応不可能であり、ぱつと見て籠手剣以外に装備のない男には対応不可能な嵌め技だ。

もちろん行動不能にするだけでは終わらない。向こうが戸惑って

いる間に拳銃を抜いて狙い撃ち。極力頭ではなく胴体や手足を狙っていくが、どうも手ごたえがおかしい。鈍い金属音と共に、身体に銃弾が弾かれる。

「まるで鋼の肉体でも持つてるみたいな……」

宙づり状態にして狙い撃ちというやや間抜けな状況ではあるが、どうも身体か服になんらかの措置が施されているらしい。ならばもう直接斬りこむ方が早い、そう断じて刃の間合いまで一足飛びに踏み込んだ。

だけど男は、まるでそれこそを待っていたかのように笑みを浮かべ。空中でクルリと体勢を変化させると鮮やかにこちらの刃を受け止めた。鋼の噛み合う音にいつそう男の笑みが深まり、反比例するようにこちらは渋面を浮かべるばかり。

巨大な武装を用いた重心移動、なのだろうか？ それにしても鮮やかな上に淀みがない。ただ身体を捻るだけでは実現できないような、あたかも全身に重りがあるかの如く勢いをつけている。

しかし所詮はほんの一合防いだだけ、故に鏢迫り合いとなった直刀を即座に引いて二の太刀、今度は鋭い突きをお見舞いする。この至近距離かつ自由に動けない相手に対して外すことなどありえない。

吸い込まれるように一閃が男の胴体へと刺さり——妙に硬い手ごたえを残しながらも過たず腹部へと潜り込む。だが、なんだこれは？

「機械と……オイル？」

うつすら火花が散っているのはどうみても機械の類で、血と共に滴るのは匂いからして油の類で間違いない。しかしそんなものが人体から出てくるといふ異常事態に脳が思わず理解を拒む。まさかこの男、自分の肉体を、

「——改造したんじゃないかって？ おいおい、強化人間様エスベラントがそれを言っていいのかい!？」

「くッ……!？」

内心を見透かされると同時、男の肉体が文字通りに爆ぜた。ノーモーションで放たれた爆風をすんでのところで回避し、引き抜いた直刀を握りしめる。傷はないが、ほんの少し焼け焦げた髪の毛が鼻に



突く。

どうやらこの赤髪の男、自らの身体を機械兵へと改造しているらしい。それもおそらく、全身の至るところをだ。だから銃弾を弾くしパワーもある、奥の手として内部に仕込んだ隠し武器すら備えているということか。にしても躊躇なく自爆紛いの攻撃を選ぶなど、頭の方も相当改造したと見える。

「クセは掴んだぜ、ようはこうすりゃ動けるってことだろ？」

驚愕も束の間、男は左腕を後方に向けてと箆手剣をおもむろに取り外した。一見生身にも見える掌が晒された瞬間、信じがたいことに爆炎が吹き上がる。あたかも火炎放射器と化した左腕を推力とし、無重力空間における動きを体得してしまったらしい。

「どいつもこいつも嵌め技の対抗策持ちすぎだろ！ なら空の果てから墜落して、現実ごと潰されてみろ！」

ギルベルト然り、どうやら安全なところから一方的に終わらせるという手段は取らせてくれないようだ。こちらに向けられた炎を避けながらさらに重力操作、半ば自棄となつて男を上空へと落下させた。

いくら改造人間といえど空を飛ぶことは不可能で、自由落下の衝撃は誰であろうと平等だ。そしてこの頭のイカれた男に対して生け捕りなどと生温いことは言つてられない。殺意と敵意を混ぜたままに上へ上へと持ち上げる。

地上から非常に小さくなり、男が放つ苦し紛れの銃弾すら当たらなくなつたところで、重力反転。フリーフォール自然法則をハンマーに模して男へそのまま叩きつける。ほんの数秒後には地面にぶつかり無様な押し花となるのがこれで決定づけられた。

「いいぜ、それがおまえの与える試練だつてんなら、俺は乗り越えてみせるとも。やってみろよ戦乙女、フルキユレ邪悪な魔性を滅してみせろォー！」

なのに、やはり、これでも男は止まらない。我に秘策ありとでも言うのか、それともただの鼓舞なのか。

邪悪な魔性は叫びながら地面へと吸い込まれ——派手に爆発した。

「おっ、と」

とんでもない大爆発だ。駆け抜けた爆風が激しく髪を揺らし、思わ

ず足を取られてよろめきそうになるほど。反射的に顔を覆った手の隙間から爆心地を見やれば、燃え上がる炎で男を確認するどころじやない。既に維持性の限界もあり男を捉えていた重力も解除されてしまっている。

まさか男の中に途方もない火薬があつた訳でもあるまい。この爆発は周辺一帯の地面からも出てきたもの、つまりは地雷を意図的に爆破させたとみて間違いない。そして、そんな無謀をするとなれば……「空を飛ぶなんて貴重な経験をありがとうよ。中々刺激的な時間だったぜ」

「仕掛けてた爆風をクッションにしたのか……つくづく螺子が外れてやがる」

当然のように炎の中から男が現れた。身体は歪み無傷なところは何処にもないが、それでも生きて立っている。機械と人肉を晒しながら登場する様は出来の悪いホラー映画か何かを連想させる程だ。

そして再び攻撃の姿勢を見せるかと思いきや、意外にも男は肩を竦めて参ったというように息を吐く。

「さて、と。せっかくの再会を祝して心行くまで殺し合いたいところだが。今の俺じゃどうにも実力不足なのは間違いないらしい。こんな様じゃ英雄ヴァルハラの館に招かれるには不相応さ」

「で、だから？　素直に逃がすと思うのか？」

「まさか。んな妥協はしないだろうさ」

だからこうする、と頬を吊り上げて男が指を鳴らした。

なんの合図かと訝しんだのも束の間、横合いの木々から何かが飛び出してきた。それはちやうど爆風から逃れた範囲で、アルもまだ目を向けてない箇所。“そいつ”は一目散にオレへと飛び掛かると、焦点の合わない濁った瞳を向けてきた。

咄嗟に引き剥がしながらもすぐに正体には思い当たった。

「薬物中毒者か……！」

「明察、ついでに言えばそいつらはまだマシな方だな。上手く治療すればマトモに戻してやれるかもだぜ？」

愉快気に語る男にどうしようもなく不快感を隠せない。

一般人を攫つて薬で洗脳、人間爆弾に仕立て上げる悪魔の所業をここで持ち出してくるとは。しかもごく丁寧に『助けられるかもしれない』という逃げ道を出すおまけつき。だから下手なことをせず俺を見逃せと男は傲岸にも告げているのだ。

……ここで男を逃がす方が後の犠牲は大きくなる、そんなことは分かっているとも。だけど今もワラワラとこちらへ向かつてくる人間爆弾ひがいしやの数は十や二十よりなお多く、ただ利用されただけの相手を瞬時に見捨てる覚悟はどうしたって決められない。

「だと、してもー」

逡巡したのは一秒か二秒ほど、まわりついてくる中毒者たちを容赦なく斬り捨てる。心の中で謝りながら、けれど犠牲の分だけ次の被害は増やさないと誓って蹴散らした。

舞い散る血しぶきの先に見えるのは喝采を浮かべんばかりの男の姿。憎たらしい敵手へ必ず引導を渡すと踏み込んだ瞬間に、足元がカチリと不吉に鳴る。地雷だと反射的に判断した時には炸裂、大した規模ではなかったが数秒の時間稼ぎには十分すぎる隙が出来てしまう。

「土壇場で運も向いてくれるとはついてるぜ——と、いう訳でさよならだ。次はもっとおまえに相応しいファヴニル・ダインスレイフ魔剣にして邪竜となってみせるから、光を磨いて待っててくれよ」

「待てー」

即座に重力操作で足止めを狙う。けれど一手先んじて周囲の斬り捨てた人間爆弾たちが、生存者諸共に一斉爆発する。今度こそ躲しきすることは出来ず爆風に吹き飛ばされ、どうにか空中で立て直して着地するも既に遅い。爆風と一緒に焚かれた煙幕に紛れ、もはや男の姿は影も形も見えなくなってしまうていた。

戦闘狂らしき言動でありながら引き際も鮮やかだった。憎たらしいほどの静寂の中、残っているのは爆心地に取り残されたオレ一人だけである。

「……マジかよ」

呆然と呟いた言葉が全てだ。慢心はしていなかったと思いたいが……超能力を得てもなお、たった一人相手に逃げられてしまうなど。

あまりにも情けなくて言葉が出ない。最後は全員が使い潰された中毒者たちの肉片を払い落とし、よりいつそう惨めな気分になった。

結局、残った傭兵を気絶させたアルが戻ってくるまで、オレはその場に佇んでしまっていたのである。

◇

「ま、初戦にしては上々か。思った以上の難敵だったが生き残れたのならそれでよしだ」

逃げ伸びたダインスレイフは口元の血を拭いながら不敵に笑った。火花を散らして血とオイルを垂れ流す身体もなんのその、この戦闘で得た成果を思い出して歓喜すら溢れる始末だ。

マルガレーテ・ブラウンも途中までは生け捕りにするつもりだったはず。完全には殺す気が無かったおかげで付け入る隙も生まれしたが、もし最初から本気だったら間違いなく死んでいた。最後に偶然地雷を踏んでくれたこともふまえ、運を味方に付けた上での逃走成功なのは間違いない。

そして、帝国の誇る最新最強の人間から逃れたというのは経験値以上に大きな意味を持つ。

「星辰奏者エスベラントとの生の戦闘データは高く売れるぜこりやあ。いよいよ俺も傭兵団でも持つてみる時期かねこりやあ」

超人の宿す不可思議な能力の実体験もある。アンタルヤの重鎮からすればこの報告は喉から手が出る程に欲しいものだろう。これに肉片の一欠片や血の一滴でもあればより良かったのだが……贅沢を言っではいられない。

「さてと、そんじやお色直しの始まりだ。次はいつたいどこを改造しようかねえ。ハーハツハツハツ！」

一度の逃走なんのその。本気で次に繋げるならば構いやしない。

瀕死の身体も意に介さず、帝国に仇なす邪竜は夜空へ向けて哄笑を放つのだった。

## Chapter 42 限界突破な後輩／Overdrive

「——で、まんまとリーダーに逃げられちゃまったって訳か！ こりや上が不機嫌になるのも当然っちゃ当然ですなあ」

「うっさい、オレだって気にしてるんだから少しは気遣え」

「そいつは失礼しました、姐御。ま、人間失敗の一つや二つは誰だってあるもんです、これくらいでへこたれてちゃ“あの人”に顔向け出来ないはず。ハハハハハ！」

「確かにそうかもな……」

実際その通りすぎて特に反論もせず、隣で豪快に笑う後輩から目を逸らした。過ぎてしまった事を悔やんでも仕方ない。大事なものは次に同じ失敗をせず、この経験を活かして打開することだ。これを忘れてはいけないだろう。

とはいえ、痛いところを突かれたのも事実で。気晴らしばかりに昼食へと手を伸ばしてもぐもぐと咀嚼していると、対面に座るアルが「今回は差し引きゼロに近いし気にするな」と呟いた。

「そうなのか？」

「そりやダインスレイフとかいう、頭のおかしい反帝国傭兵を逃がしちゃったのは大きいさ。だけど他の奴らをサクツと無傷で捕まえたのもレーテの星辰光ちからがあつてこそだし、俺もそれとなくアピールはしてる。つーか今回は相手の方が異常だったってのはすぐにお偉いさん方も理解してくれるだろうさ」

「……いや、ホントそうだよな！ 無重力状態なのに普通に対抗してきた挙句、身体を改造してたり人質取って爆発させたりあんなのマトモな奴に出来るわけないって！」

「鬱憤溜まってるなあ」

当たり前だ、とばかりに水の入ったグラスをテーブルに叩きつける。  
こっちは真面目に相手を行動不能にする能力を使っているという

のに、あの手この手で脱出されてはかなわない。しかもダインスレイフにいたっては身体改造による後付け武装や手段を選ばぬ外道戦法まで使ってくる始末。これを諦めない不屈の精神で支えているとくれば、手が付けられないにも程があった。あんなのが東部戦線で暴れてるともなれば帝国軍の足踏みも納得しかない。

同時に、思う所もまた一つ。

「妥協せずにあらゆる手段を模索して、常に本気で頑張って自分を磨く……なんて言えば聞こえはいいけどさ。関係ない人間まで巻き込みまくって自分の目的しか頭にない、あんな奴をクリスと同じ人種ヒカリだなんてオレは呼びたくないね」

本人の評価はどうあれ、オレが憧れた光は間違いなく誰かの為に頑張っているのだ。なのにそれを穢して踏み躪るような真似をされるのは面白くない。

ついでに、何故かオレを『憧れの戦乙女ワルキューレ』と称していたのも気になるところだ。やはり思い返してもあんな鮮烈な男と出会った覚えはないのだが……こんなオレを憧れと言い切るからには『不死身の英雄ジークフリート』が指す人物も一人しかいない。やはり気に食わないところだ。

などと考えていたら、隣の後輩に頭を軽く小突かれた。

「そう難しく考えなくてもいいんじゃないかと。気に入らないからぶっ飛ばす、これも一種の処世術だと思いませんか？」

「ハッ、さすが初対面でクリスに喧嘩売った男は言う事が違うな」

「つと、それを今更持ち出すのは無しでしょうよ」

皮肉半分感心半分にからかつてやれば、慌てたようにその後輩——  
ジェイス・ザ・オーバードライブは手を振って誤魔化した。かつての黒歴史にして帝国軍人となった切っ掛けに関して、話のタネとして弄られると彼は結構弱いのだ。むしろ今も鮮烈に思い出せるエピソードなのだから仕方ないというか。

元々はジェイス・ランリーグとして荒くれ者な一市民として生きていたのが、驚くべきことに彼はクリスに喧嘩を売るという無謀を通り越した無茶をしでかしたのだ。もちろん呆気なく返り討ちにされて

しまい、それで落ちぶれたり逆恨みするならその程度で終わったのだろうか……跳ね返りな彼は“クリスマスに一発やり返す”というやつぱり驚きの理由で軍へと入り東部戦線へと参戦した。

理由が理由なのでそりやあジエイスはクリスマスに反発してたし、オレたちもまたそんな青年が気に食わなかった……という事もなく。むしろ珍しいタイプの相手に好奇心があったし、何よりクリスマス自身が邪険にしても無かったせいで積極的に絡みに行ってた始末である。

『よお、今日もクリスマス殴るために頑張ってるのかー?』

『げっ……ほっといってくれて、アンタらには関係ないだろ』

『そうかそうか、せっかくクリスマスの耳寄りな情報を持ってきたのになー?』

『マジか!?』

『マジだぞー。その無茶な鍛錬をストップして休憩するなら話してやるけどなー?』

『ちっ、分かったよ……』

なんてやり取りを何度繰り返したのか。クリスマスへの対抗心で無茶な訓練を続けようとするジエイスを止めたり、たまには付き合ってみたり、からかい混じりに面倒を見ていた。そこには密かにクリスマスからの頼みがあったのだが、本人がそれを知るのはまた後の話だ。

といった風に仲良くなりそうでなれない空気がしばらく続き……一つの切っ掛けから荒くれ者の青年は大きく変わった。その出来事については聞き及んでこそいるが、部外者があまり語ることもないだろう。結果として彼は“誰か”を守ることの大切さを知り、それを体現するクリスマスへ憧れたと分かれば十分だ。

以降はこれまでの気まずい空気もなくなり本当の意味で仲良くしてきたのだが、その最中にオレたちは政府中央棟セントラルへ帰還することとなり、それ以来の再会となったのが昨日のことだった。

ダインスレイフとの戦闘から数日経ち、厄介な報告などもあらかた終えたところでの再会は良いリフレッシュになった。そのままアルも含めて三人で近況を語り明かし、今はこうしてオレの奢り——実は星辰奏者となってから結構な給金が出ている——で昼飯を食べてい

るという具合である。

「だけど今回はっかりは感謝しときますよ。人の奢りで食う飯は美味しいもんですわ」

「でも良かったのか？ ジェイスはともかく俺だって金くらい出すが」

「気にすんな、オレの失態の分の埋め合わせって事にしといてくれ。あとおまえも、食べ過ぎて胃袋が限界突破オーバード라이フしないようにな」

「わーってますよ。そこは軍人なんで、自己管理も仕事の内ってやつですよ」

ジト目で睨んでみると、ジェイスは肩を竦めて水を飲んだ。どうやら本当に分水嶺は弁えているらしい。

「にしても、ブラウンの姐御が戦ったそいつは今後も色々やらかすって事ですかね。だとしたら放つては置けないわけですが」

「これは勝手な予想だが、しばらくは出てこないだろうぜ。レーテの話聞くにだいぶ傷……というか損傷を与えたみたいだからな。しばらくは星辰奏者エスブランドを警戒して表立って暴れたりしないだろう」

「だけど裏で何をしてるかはまた分からない。本当に、逃がした獲物は大きかったな……」

眩きながらも改めて自分のミスを痛感する。未熟さが胸に刺さって仕方ない。

もしあの時、ダインスレイフの言葉に惑わされず人質を躊躇なく見捨てる判断が出来ていたならば、結果は違っていたのか。数秒の差が互いの運命を変えたのは間違いない。あるいは奴を捕まえ無力化出来たかもしれない。来たかもしれない。

「なんて考えたりもするんだけどさ。実際問題、あの時は何が正解だったんだろうな」

あの時のあらましを簡単に説明して、それでも煮え切れない想いを零してしまうと、男二人は呆れたように顔を見合わせた。

「間違いなくそれが正解だろ。おまえは別に何も間違っちゃいない、胸を張ればいいだろ」

「俺もロデオン中尉に同感ですね。そこで躊躇いなく斬れたとしても



誇れることはなんもないかと思いませんぜ」

「……そうか？」

「そうだろ。迷いなく目的に突き進めるヤツはそりゃ強いが、同時に人として大切なモンを忘れちまつてる。余計な躊躇や甘さだつて時には大切だと俺は思うぜ」

どっかの誰かさんにもそれを分かつて欲しいもんだが。

此処にはいない親友へとそう呟いて水を煽る姿を横目に、今度はジエイヌへ問いかける。

「ジエイヌはどう思うんだよ」

「やつぱ同意見つすわ。軍人なら時には残酷さも必要なんでしょうが、話を聞く限り俺だつて少し躊躇いますよ。その上でなお『乗り越えてみせる』と決意したなら軍人としても及第点だと思えますがね」  
「どつちに転び過ぎてもダメとなれば、いよいよ難しい問題になっちゃうな」

「葛藤もせず斬れるなら軍人として正しくとも人としてはおかしく見えるし、逆にビビって何もしなけりや人として正解でも軍人としちや失格だ。だから今回の話で言えば、レーテの悩みと結論は上手くイイところ取り出来たと思うがな」

アルの言葉はとても優しく納得できるものだったけど。

それはつまり、斬り捨てる前に嘆いて葛藤をすれば許されるという理屈にも繋がってしまう訳で。その時になって神妙な心持でいれば正しい人間かと言われれば一概にも言い切れない。

結局こんなのは、深く考えてしまえば堂々巡りで結論なんか出やしない議論だった。

「考えすぎれば雁字搦めだな、どうしたつて粗が出る」

だからそれ以上の思考はここで打ち切ろう。結論が出なければそれでも構わない、再びダインスレイフと戦った際に今度こそ完全なる勝利を得れば良いという話。人質を斬る斬らないの話に決着がつかないのなら、そもそも取らせなければ良いだけの事である。

「ふー……相談に乗ってもらつてスッキリしたよ。ありがとな、愚痴に付き合つてくれて」

「これくらいの相談ならお安いごようさ」

「飯奢ってもらった借りもありますんでね」

「そっか、なら自腹切った甲斐もあったな」

失敗やこうすれば良かったという後悔は一人で抱え込むより誰かに相談するに限る。気分がサツパリすれば次こそはという気持ちになり、新たに頑張れる力ともなる。孤高で頑張り続けられるのは本当に一握りの傑物だけで、オレはそんな傑物えいゆうなんかじゃないのだから。

と、少し考え込みがちな思考を遮るように「そっか」とジエイスが明るく言った。

「実は気になってたんすけど、無重力状態ってどんな感じなんすかね？ 旧暦以前はあの空の先で無重力を体験できたなんて話も聞いてますが」

「お、そいつは俺も気になるな。ふわふわ浮かぶって要はどういう感覚なんだ？」

「なんだよ子供か」

「男の子はいつだってデツカイ子供みたいなもんさ。なあジエイス？」

「おう、そうですね！ やった事ない経験は一も二もなく飛び込んでみたい性分なんすよ」

「なるほどな」

元男の子としては無重力を経験してみた気持ちは理解できる。少年心があれば誰だって憧れてしまうものだ。

そうなれば気晴らしに付き合ってみるのも悪くない。星の力を使っただけ馬鹿騒ぎ、なんてのも実は密かにやってみたり使ったりするし。

「じゃ、食べ終わったらやってみるか。ただし、昼食がある程度消化されてからだぞ？」

よく分かってないらしくハテナを浮かべる二人を見ながらこっそり嘆息。

……虹をまき散らしながら空中浮遊する男たちなんて、死んでもみたくないからな。

◇

その後は比較的平和な時間がいくらか続き、ジェイス以外の知己とも落ち着いて話し合えたりもしたのだが、最前線に送られた星辰奏者<sup>エスベラント</sup>に暇な時間はそうそう無い。ダインスレイフとの一戦だけで有用性を判断するのはあまりに早計という判断もあり、すぐにでも結果を求めて最前線の戦場へと飛び込んだ。

もちろん今度はちゃんと戦果を出そうと意気込んでいたし、改めて超人としての驕りや油断もなくして全力で取り組もうと決意していた訳なのだが……ハッキリ言っておレとアルの星辰光<sup>アステリズム</sup>は戦場とマツチしすぎていた。

今もそうだ。鉄風と血臭の蔓延する戦場において二人の星辰奏者はとんでもない猛威を振るっている。

「レーテ、正面左から銃弾来るぞ！ 防御頼む！」  
「了解、つとー！」

部隊を指揮するアルの言葉に合わせて意識を向ければ、果たして遠方から不意打ち気味に機関銃が掃射された。だが銃弾の動きを認識できる今となつては不意打ちにも動じず、冷静に重力の網で銃弾を絡め取っていく。淡々と鉛の雨を処理しながら機関銃本体にも過負荷を掛けて圧壊させ、ついではばかりに射手も同時に潰して沈黙させた。

これによつてアルが率いる部隊の誰にも被害は出ず、帝国軍は更なる進軍を続けていく。他の部隊と比べて明らかに前に出ているが、包囲しようとする傭兵たちの動きすら食い破らんばかりの奮戦である。

「本当に馬鹿げた強さっすね、星の力とやらは。銃弾を防ぎながら遠距離で敵も銃も戦車も潰すなんざ、常識外れも良い所だ」

「そつちこそ、腰の銃が今じゃ飾りになつてるなんて思わなかつたぞ。まさか本当に拳だけで奮戦してるなんてな」

「銃を撃つより殴る蹴るの方が性に合うもんでして、ねッ！」

ここ数度の戦闘から相棒はアルではなく、共に前線を駆けるジェイスになつていた。剛腕で敵手の頭を揺さぶり強烈な蹴りで容易くダ

ウンさせるといふ、まるでクリスを思わせるような近接戦闘のみの戦い方。己が肉体を武器に戦う男は不合理ながらも不条理な強さを誇っており、確実に相手を殺しながら自分は生き残るといふ無双を實現していた。

かつての名前ランリクという名前を捨て、自ら限界突破を名乗り出した男はどうやら伊達じゃないらしい。戦場で磨かれた実力は紛れもなく人間としての限界すら容易く突破してしまいそうな可能性に溢れている。今じゃジェイスに憧れる一兵卒も現れ始めているらしいのも頷ける話だった。

「ロデオン大尉の能力もすごいもんですよ。危険な場所が即座に分かるなぎ、兵士なら誰でも欲しい能力だ」

「死線認識能力、だったっけな。ちょうど指揮官気質なアルが持つには出来過ぎた力だよ、少し地味だけど」

星辰奏者となって階級も上がり、現在オレとアルの階級は大尉となっている。この時点でも結構な地位と部下を持つことにもなるのだが、東部への送られ方がマズかったのか初期は部下なんてほとんどいなかった。それを戦果と生存者数を出すことで地道に認めさせ、今じゃ階級に相応しく数百人規模の部隊となっているのはアルの能力があつてこそだ。

危険地帯が見抜ければ当たり前前に死傷者の数は減る。さらにオレという広範囲型の特攻兵器が先んじて危険を潰せばご覧の通り、前に出ながらひたすら先手を打ち続けるという途轍もない戦況になる訳で。

「この直近五回の戦闘ひつくるめても死者は三十人足らず……よその指揮官が血涙流してそうだな」

「ま、俺としちゃ頼れる先輩がいつそう頼れるとなれば嬉しいことですがね」

「ならもつとその期待に応えてやらないとな」

嘯きながらひらすらに星辰光アステリズムを駆動させて敵兵を押し潰す。空間に付属するのではなく個人や物を対象に発動させる重力操作グラビトンだから、目視した対象にしか使えないのが弱点ではある。しかし強化された

五感とアルのサポート、さらにそこら中に敵兵がいる状況下において、この欠点はほとんど意味を成さずに無慈悲な暴力を積み上げた。

あたかも無双ゲームか何かのように簡単に命を奪っていく所業に、一抹の嫌悪感と飽きを覚えそうになるが……これは戦争でオレは軍人だ。自分の意思で戦場に來てる相手に対して余計な感傷は持ち込まない。

「星辰奏者になれば俺もそれくらい強くなれるんすかね？」

「さあな、どうだろう。宿す能力はピンキリらしいから保証は出来ないな」

「そつすか、なら精々期待しときましようかね！」

戦いながらも雑談を交わす余裕すらある始末。本当に星の恩恵を受けた超人とは圧倒的だ。

こんな存在が今後も量産されるならば、いずれ戦場はアドラー帝国一強へと変貌するだろう。オレたちの挙げた、あるいは今も挙げている戦果は将来を暗示するには十分すぎる。時にはダインスレイフのように対抗しうる牙を持つ相手もいるが、それだって極希少な存在と言わざるを得ない。

——だからつまるところ、これは予定調和なのだろう。

大した物語も山場もなくオレたちは戦功を重ね続け、ほんの一年もしない間にアドラーは着実に東への進軍を再開させた。その頃には星辰奏者の数も以前に比べて大きく増え、激戦区たる東部へ着実に投入される事となる。質と数が揃ってしまえばアドラーを止める要素など最早無い。

そして新西暦1023年、再びオレたちの下に転属命令が出る。どうやら今度の内容を見る限り、今度の功績で十分とされ再び帝都へ戻ることになるらしいが……そうなるといよいよ、アルにはあの話をしておくべきなのだろう。

帝都の地下深くに座し、密かにクリスと同盟を結んでいる鋼の恒星ほむら——カグツチについての情報を共有しておく時が來たのだ。

## Chapter 43 帰還の前に／Exposur e

「うーむ……」

机の前に広げられた紙の前でひたすら唸る。手に持ったペンをクルクルと回しながらあーでもないこーでもないと考えを巡らせる。議題は自らの星辰光アステリズムの使い方についてだ。

重力というのは非常に普遍的な力である。この地球にいる限り影響を受け続けるし、大破壊カタストロフと星辰体アストラルによる環境激変が起きても消えなかったほど強固とも言えよう。オレの『いざ希求せよ誓約者、眩き地平を抱くがいい』はその重力を操る性質上、ぶつちやけかなり強力な星なのは間違いない。

なのだが、強い故に頭を抱えるという贅沢な悩みもある。「汎用性が高すぎる、つてのも考え物だな」

個人や物体ごとに重力を操ることなど朝飯前、“集束”させれば不可視の束縛となるし“操縦”すれば空中浮遊も軌道の捻じ曲げもお手の物。自らに“付属”して不可思議な挙動を取るのも案外できる。戦闘利用ばかりでなく、輸送体として途方もない重量の荷物を簡単に運ぶのだって可能だろう。

星辰体アストラルの影響で新西暦では飛行機も飛べないからな、ミサイルだって勿論駆逐されている。なのでクリスをミサイルよろしく戦地へ射出したら凄いことになるかもしれない、事実上の弾道ミサイル——やめようやめよう、幼馴染を核弾頭にでもする気か。

閑話休題。

ともかく、重力に関して思いつくことなら大抵は実現でき、思い付き次第でいっそう幅を広げられる。前世かつての知識と合わせれば可能性は無限大だ。伝え聞く“第三次”なんかは各地で一斉蜂起からの戦争という凄い事になったらいいし、参考にできる兵器や戦術もあるかもしれない。VRはちよつと関係なさすぎるけど。

だからこそ、なのか。やれそうなことが多すぎてどこから手を付け

れば良いのか困ってしまふ。汎用性の高さを最大限に活かす術が難しい。極端を言えば、戦闘中に思い付きで出来てしまったことが原因で敗北する可能性だつてある。手札が広すぎて『妙手も悪手も多く出来てしまふ』というか。

「その辺、あんまり機転が利くタイプかといえちよつとなあ……」

この前のダインスレイフの取り逃がしといい、強力な星辰光故アステリズムに無意識で慢心してしまい、結果としてミスに繋がる場面は確かにある。何でも出来るから場当たりの対応、とはしたくない。

なので必殺技、ないし汎用性に長けた行動をいくつか前もって考えておこうという寸法だ。練習させて五体に覚えさせた行動はいざという時に強力な手札となる。同時に、焦つて変な手筋を生まないようにする布石にもなつてくれる。

そこで最初の話に戻り、なにか妙案はないかと頭を捻っている最中なのだ。

重力を用いた必殺技といえ、ブラックホールなんかはまず真つ先に思いつく。小さな石ころを用意して極限まで重力を集束させれば理論上は出来るだろう。しかし、果たしてどれだけの集束性が必要とされるか。星辰奏者エスベラントが増えた現在、簡易的なステータス表記による能力目安が出来始めているが、それによるとオレの集束性は至つて平均的らしい。これではとてもブラックホールなんて作れない。

後はギルベルトやダインスレイフに使つた重力に“干渉”した無重力化による空中浮遊。アレはかなりの嵌め殺し技だと思ふのだが、立て続けに攻略されてしまつて自信を無くした。なんでアイツらはあんな簡単に攻略してくるんだらうな……まあ教訓になつたと前向きに考えよう。

他にも空中に持ち上げてからの空中落下なんてのも、下に水かクツションでもなければまず即死だ。案の定ダインスレイフには通用しなかつたが使えるはず。逆に質量のある物体を浮かばせて重力偏向し、横に落下させて直撃させるなんてのもアリだろう。

と、ここまで考えたところで急に気付いてしまった。

「もしかしてオレの星辰光アステリズム……思つたよりも地味？」

超能力といえど火や水を出したり、一撃必殺のビームなり斬撃なりを放つたり、そういうイメージじゃないのか？ ギルベルトは衝撃で床が爆発したし、クリスは剣が輝いていた。なのにオレは無重力とか、落下させるとか、モノをぶつけるとか、なんか思った以上に使い道に華がない。目に見えない力なのもあるだろうけどこれは酷いぞ。

いや、空中浮遊とかは間違いなく派手なはず……：……なんだけどな。いずれギルベルト辺りは自前の衝撃操作だけで飛びかねない。アイツはそういうこと絶対やるだろ、うん。

などと謎の確信を得つつ、何かないかと考える。オレの場合、どうも『操縦性』と『干渉性』がずば抜けて高いらしい。他の星辰奏者<sup>エスベラント</sup>と比べても頭一つどころか二つは抜けてるとか。だから銃弾一つにまで重力による“干渉”を行い、向きを曲げるといふ“操縦”が出来たのかと後から納得したものだ。

対多数の場合は数百ある銃弾すら強化された五感で見切り、掌握できる制圧力がある。やろうと思えば剣を数本飛ばして自在に操り、遠隔攻撃なんて真似も出来るかもしれない。まあオレの頭の処理が追いつくのか甚だ怪しいものだけど。

「単に直進するだけの銃弾なら意識して“干渉”するのは容易。ただしオレ自身が知覚してない存在には重力干渉できないし、空間に丸ごと“付属”<sup>エンチャント</sup>なんて力技もまた不可能。重力の“集束”による拘束<sup>ドライブ</sup>も発動値の高い星辰奏者相手なら確実な戒めとも言い切れない、と……」

こうして考えると微妙な地味さ以外にも欠点はそこそこある。特に脳死で重力操作するのではなく、対象の重力を一つ一つ意識しなきゃいけないのは結構疲れるものだ。対人戦で手足を逆方向に引っ張り千切る、なんて器用な使い方が出来ないのも、オレが『人体の各部位にかかる重力』を全部まとめ一つ<sup>ちから</sup>の力と認識してるからに他ならない。繊細なのに大雑把な星である。

まあ、アドラーから技術流出しない限りVS星辰奏者<sup>エスベラント</sup>なんてカードは起こるはずもないか。なのに考慮してしまう辺り、ギルベルトとの一戦がそれだけ強く印象に残っているということだ。本当になん



んだアイツは、隙あらば思考の片隅に出てくるじゃないか。頼もしい味方だろうとさすがにイヤだ。

思考を脱線させつつ思い付きを紙へと書き留めていく。とりとめない内容ばかり膨れ上がっていくが、良い感じの必殺技は浮かばない。さて、どうしたものか――

「おーいレーテ、居るかー?」

「アルか、入っていいぞー」

控えめなノックに考えを打ち切られ、反射的に返答した。

入ってきたのは何度顔を見たかも分からない幼馴染の一人だ。勝手知ったると言わんばかりに部屋に入ると、椅子の一つに腰かけている。

「随分と殺風景になったな。もう大体準備は完了つてか」

「ああ、明後日にはまた帝都に出戻りだからな。どうせ荷物も多くな  
いんだ、さっさとやるに限るさ」

エスベラント 星辰奏者として東部戦線に戻ってからおよそ一年が経ち、初期の  
エスベラント 星辰奏者である俺たちの役目もひとまず終わった。アステリズム 星光を操る強  
化兵としての力を激戦区にて存分に見せつけ、改革派の切り札が飾り  
の剣でないと実戦でも証明した形となる。

そして、今のアドラーには星の恩恵を受けた超人が百人単位で存在  
しており、観測された異能も多種多様だとか。もはや俺たち二人だけ  
で東部戦線のエスベラント 星辰奏者代表を名乗る必要もなく、入れ替わりでたくさ  
んの新しい星辰奏者がやってくる手筈だ。

「なんつーか、普通はもつと荷物纏めるのに慌ただしくしてそうなん  
だと思ってたが……レーテならこうもなるか」

「うっさいっての。つーか軍人が荷物大量に持ち込むとかどうなんだ  
よ」

「はは、それもそうか。だけどそろそろ俺たちもいい歳だし、ちよつと  
は気を配った方がよくないか? エスベラント 星辰奏者になってから若返った感  
じもするとはいえ、もう三十代手前――」

「おい馬鹿やめろ、それ以上言ったら重力でぶっ飛ばすぞ」

「シャレになんねえからやめろつて! 悪かった悪かった、意外と気

にしてくんな」

「意外ってなんだよ……」

はあ、と溜息を一つ。何が悲しくて自分の歳と向き合わねばならぬのか。ここまで無我夢中で全然気にしたことも無かったが、すっかり年齢も重ねてしまった。貧民窟で暮らしていた薄汚い少女が今や最先端の超人とは、不思議な縁もあるものだ。

二十代前半から、外見もあんまり年齢重ねたように見えないしなあ……などと言いつつ、自分の年齢は忘れておく。既にアルの雰囲気先ほどまでと違い、固いものを纏っていたからだ。

「ま、冗談はこれくらいにしといてだ。俺を呼んだ理由、ちゃんとあるんだろ？」

「——ああ、政府中央棟に戻る前に話しておきたかったことがある」

これが本題、東部戦線の思い出話のために呼び出したわけでは断じてない。

だいぶ引つ張ってしまったが、いい加減にアルには話しておくべきなのだ。政府中央棟の地下に眠る鋼の恒星、クリスに何某かの代行を担わせたカグツチという存在についてを。

「星辰奏者技術を齎した存在は、表向きはクリスと叡智宝瓶の手柄になつてゐるが、これは半分正解で半分間違いだ。もつと根本的などころに黒幕がいる——って言ったらどう思う？」

「……聞かせてくれよ。アイツが関わってるなら俺が聞かない道理はねえ」

そして、すべて包み隠さずぶちまけた。

秘密だとか機密事項だとか、そんなことは関係ない。カグツチという旧日本軍の遺物がクリスに何かをさせようとしてること、その見返りに星辰奏者技術を提供されたこと、第一号としてクリスが選ばれ、続く第二号第三号にギルベルトとオレが選ばれたことまで……アルも多少は知ってる内容から微塵も関与してないことまで、洗いざらい話し切った。

「っていうのが、星辰奏者技術が世に出た真実だ。もちろんこれらは公表されてないってのはアルも分かっているだろ」

「随分ととんでもない話つつうか……帝都の地下に大和の遺物が残ってて、そいつがクリスと手を組んだだと？ しかもそつからこの技術が誕生って……出すとこに出せば全部がひっくり返りかねない情報じゃねーか！ 俺たちに何も言わずそんなことに首突っ込んでやがったのか」

アルの驚愕ももつともだ。カタストロフ大破壊以前の遺物が国の中枢に潜んでいたなど、エルドラド・ジパンク極東黄金教を掲げるカンタベリーが知ればどうなることか。ただでさえ東部戦線の先、プラーガに残る国会議事堂を神聖視してるといふのに……帝国の首都にあると知れば奪取のために全面戦争となつてもおかしくない。

だけど、そんなこと以上にクリスと結託しているという事実には驚いているのがオレには分かる。オレたちは幼馴染で親友同士だ。なのに肝心な事実をひた隠しにされ、挙句の果てにカグツチのことなど欠片も聞いてはいない有様。オレだって三人目選ばれなければ奴を知ることには無かつただろう。

「わざわざ手を組んだつてことは利害の一致があるんだろ？ そのカグツチって奴はクリスに何をさせようとしてるんだ？」

「分からない、そこだけは何度聞いてもはぐらかされた。ギルベルトに聞いても無駄だぞ、アイツと情報戦するとか馬鹿らしいにも程がある」

「んなこと知ってるさ……しかし、結果的に帝国の為になる事ではあるんだろうな」

もしカグツチの目的が結果的に帝国を滅ぼすことになるなら、ここでエスベラント星辰奏者技術を与えられようとクリスが手を組むことは無いと断言できる。一時の繁栄を得たところでそれが無意味に終わるなら思い留まるはずだから。彼を何年も間近で見たからこそ疑う余地はない。

「だつてのに、俺たちには一言も声を掛けず、勝手にギルベルトの野郎やアクエリアス叡智宝瓶と共謀して突っ走ろうつてのかよ。ふざけやがって、んな重大なことに関わるならどうして俺らも噛ませないんだ」

そう、結局問題はそこに終始する。

クリスがカグツチの代行となつてゐる時点で、理由と目的を知らればオレたちはほぼ間違ひなく納得するはずなのに。彼もきつと、そのことを頭では理解できてゐるはずなのに。アイツはこちらの意見を聞くともせず一人で納得して完結させるのだ。

『重大なことだからこそ、友人を巻き込む訳には行かないだろう。困難を背負うべきは俺一人で十分だ』とか言いやがったよ、アイツは。ハッキリ言つてありがた迷惑だ」

「そこまで言われて、まさかレーテは引き下がったのか？」

「それこそまさかだ」

答えを承知してゐるだろう問いかけに、ニヤリと笑みを浮かべて返す。

「なら好きにしろ、勝手に追いかけてやるつて啖呵を切つてやったさ」  
「はっ、そいつはレーテらしい。ただ少しだけ文句を言わせてもらうなら、もっと早く俺にも話して欲しかったもんだがな」

「悪かったとは思つてるさ。でも政府中央棟<sup>セントラル</sup>じゃどこに監視の目があるかも分からない。オレだけがどうこうしてゐるならまだしも、他の人間まで巻き込みましたら絶対介入されるだろう？」

「だから東部にまで来た今がチャンスつてことか。だけど帰る直前に言うか普通？」

そこはまあ、悪かつたと思うけど。忙しくて話すタイミングが無かつたので許して欲しい。お互い各地の戦場に引つ張りだこだったじゃないか。

果たしてそんな想いが通じたのか、「ま、今更言つても仕方ないか」と呆れたようにアルが頭をかけた。

「実際問題、レーテはどうするつもりだったんだ？ 素直に俺たちも協力させろつて言つたところで聞く耳持たない頑固者だぞ」

「馬鹿らしいかもしれないが——まずは一発ぶん殴る。言葉で言つても聞かないんだ、それしかないだろう？」

「マジかよ。まあ確かに理には適つてゐる……のか？ にしても無理やりじゃねえかつて思うが」

「ああ、もちろん物理的にぶん殴るだけじゃないぞ。立場や権力、そう

「いう方向性からでも殴ってやろうと思ってる」

要するに、クリスがオレたちの事を“頼らざるを得ない存在”だと認識すれば良いのだ。

例えば、彼の隣に並べるだけの腕つぶしの強さ。あるいは改革派の筆頭にも負けず劣らずの立場や権威。これらを手に入れてから「オレたちと協力した方が事は早く進むぞー？」とアピールする訳である。

幸い、とは言いたくないが今のクリスは血統派にマークされているせいで、軍の階級自体は不相応な程に低い。逆にこちらは強くマークされておらず、かつ星辰奏者エスペラントであることから、今後の昇進は比較的早いと予測される。

「――今までオレは、剣でもなんでも強くなればどうにかなると考えてた。だけど星辰奏者エスペラントになって、カグツチとかいう帝国の裏に触れて思った。それだけじゃ全然足りない」

横に並べるだけの実力さえあれば、と考えていたこれまでの間に、本当の意味で差が縮まったと感じたことはほとんど無い。いつだって憧れの背中を見上げて追いかけるばかり、追いついたという感慨を抱いたことなど一度だって存在しない。

意地になっていたのだろう。初めて会ったとき、オレを助けてくれた姿があまりにも印象的で、以降もオレにとつて最強であり続けているから。どんな不条理でも薙ぎ倒せる力を求めないと相応しくないと考えてしまった。

「星の恩恵を受けて飛躍的に強くなっても、まだまだ足りない。差が埋まったと思えない。ならもう、重要なのはそこじゃないんだろうなって」

「要するに総合力ってことか。同感だな、俺なんざ単純な戦闘力は皆無と来た、それだけでやってくにはもう遅いんだろうな」

既に、いいやずつと前からか、アルも同じような結論に至っていたのだろう。オレの言葉に驚くこともなく頷いた。

だからお互いに導きだした今後の展望も、やはり同じようなものだった。

「実はな、近衛白羊アリエスから誘いが来てるんだ。東部戦線で鍛えた星の力

を守護の為に使ってくれ——なんて建前で。難しい立場になるだろうが、受けようと思ってる」

「こっちは帝都に戻ったら深謀双児ジエミエに移ろうと考えたところさ。諜報部隊なら何かと帝国内の情報も集めやすいだろう？」

「なんだ、やっぱり考えることは同じだったか」

もう、単純な武力だけじゃ足りないのだ。立場や情報すら容赦なく追い求め、あればあるだけ良いを体現しないと一点特化の怪物たるクリストファー・ヴァルゼライドには追いつけない。本当は最初からこうするべきだったのだろう、ようやくそれを認められた。

そこで部隊異動の誘いが来たのはまさしく降って湧いた天運ともいふべきか。

「近衛白羊アリエスからとは驚いたな。仮にも帝都のエリート部隊じゃないか、大出世おめでとうって言つとくか？」

「よしてくれ、権謀術数が渦巻いてるのくらいオレにだって分かる。どちらかといえば獅子身中の虫になる気分だよ」

第一近衛部隊近衛白羊アリエスといえば、現総統含む高官たちを補佐し守護するための存在であり、特に敵対派閥血統派の息が掛かった部隊となる。しかし長い間戦場に出ていない近衛兵などお飾りも良いところであり、他部隊からは玩具の兵隊と揶揄されたりするのが実情だ。

そこで、星辰奏者エスベラントとして戦果を挙げたマルガレーテ・ブラウンに話が回って来た。というより、お飾りな実情に付け込んでスパイとすべく味方側の方がオレを紹介したのだ。名が売れていて、しかも単騎で多数を相手できる超人は箔付けと近衛の喧伝に打ってつけだぞ、などと吹き込んだのは想像に難くない。

当然、そんな見え透いた誘いに向こうも乗る訳がない……と思いきや、意外にもこれを承諾した。改革派所属という事実を差し引いても——否、敵対派閥だからこそ欲しがっている面もあるか。オレを通して改革派こちらの実情を探りながら、あわよくば取り込むか暗殺でも企んでるのかもしれない。今や血統派エスベラントに属する星辰奏者も存在する以上、仮にオレが力で暴れたところで抑えられる算段もあるのだろう。もちろんそこまでやる気はないが。

「飼い殺しになるか、それとも上手いこと利用してやるかだ。どちらにも裏があるのは承知の上で、オレは乗ろうと思ってる。上層部の思惑なんて食い破る気概がないとクリスに追いつくなんて不可能だ」  
「なるほどな、そんだけ覚悟が決まってるなら頑張れよ。応援してるぜ」

「そつちこそ、諜報部隊なんてこれまでと真逆なところじゃないか。ちやんとやれるのかあ？」

「自信の有る無しで言えばそりゃあ難しいと思ってるが……やらなきや駄目だろ。どうせレーテの話聞くまでもなく、クリスが何か企んでるとは思ってたんだ。その為に決めてたことだからな、今更引くつもりもない」

分野も畑も違うような部隊に乗り込む決意を固めたアルは、普段の柔和な気配が嘘のように強固な雰囲気を放っている。どれだけの困難が待ち受けていようと関係ない、やると決めたらからやるのだと、その瞳が語っている。

「アイツは何処まで行っても馬鹿だからな。すぐ傍にいる友人を忘れて何かやらかそうってんなら、引き留めて力になってやるのもまた友人<sup>ダチ</sup>って奴だろ」

「だな、誰も彼もが改革派筆頭のヴァルゼライドって男ばかり見てるなら、そうじゃない奴が近くに居たっていいだろう。文句は誰にも言わせない」

使えるものは何でも使ってやれば良い。それで憧れの男に頼られるなら、オレは全然かまわない。

「だけど、こうも思うのだ。結局のところ覚悟を決めた大馬鹿野郎を振りむかせるには、本当の意味で一発殴りつける以外の手段は無いんじゃないか、と――」

## Chapter 44 友との語り／Aries

近衛といえどエリート揃いが当たり前、国のトップを守るために厳しい訓練を己に課しながら、いざとなれば主君の盾となることも厭わない——などとまあ、ザックリした印象を近衛に対し抱いていた。だから自分の職務に対して忠実で、しかも多少偉そうにする気持ちも分らない。栄えあるトップから「お前は強くて信用できる人間だ」とお墨付きを貰えばそりゃ嬉しいだろうさ。

「エリート……エリートねえ……」

だからこそ、もう何度目かも分からない溜息が出してしまうのも勘弁して欲しいものである。

残念だがアドラー帝国の近衛とは、聞かされていた通り本当に名ばかりだったらしい。確かに座学は出来るのだろう、血筋だって上流階級ばかりで、何というか品がある。だが肝心の實力はちっともない。

帝都は戦火より遠く安全だからと最低限の訓練だけで済ませた結果、近衛兵の地位に甘んじた実戦を知らない兵の群れ。誰かを守るために、敵を殺したことがある人間など皆無だろう。上から目線と成ってしまうが、そのような印象を近衛部隊へと所属した二日後には抱く羽目になったのだ。

「誓約者殿からすれば、やはりこの近衛部隊の在り方は嘆かわしいものか」

「実が伴っていないのに威張り散らす奴とか嫌いな人間の典型だつての。つか誓約者というのやめろよ、嫌がらせか？」

そして、早いことに近衛白羊への転属から早数か月後。再びの政府中央棟勤務にすっかり身体が慣れてきた頃だった。

時間がなくて中々会う機会の無かった東部戦線からの戦友をねめつけてやると、「これは失敬」と爽やかに笑い返してきたのである。

「そちらに相応しい呼び名を扱う方が礼儀に則るかと思ったのだがね。これは失礼した、ブラウン中佐殿」

「……ハーヴェス大佐殿におかれましては、皮肉もまたお上手なようで。もう何でもいいよ、勝手にしてくれ」



先日またも階級が上がったらしいので素直に祝ってやろうかと思えば、すっかりその気が失せてしまった。久々に会ったというのに、はあ、とまた一つ溜息をついてしまう。

ともあれ、オレとアルが一年ほど東部戦線で頑張ってる間に、ギルベルトはギルベルトなりに改革派として行動していたようだった。息災そうで嬉しいような、何とも言えないような。

「さて、旧交を温めたところで本題だが、近衛としての仕事はどうだね？ 数か月もあれば見えてくるものは多いと思うが」

「東部より遥かに楽——なんてのは当然だな。殺し合いが滅多に起こらないだけでも気は休まる」

「これはこれは、人間関係で気苦労してるだろうという私の心配は杞憂だったかな？」

「……なんでもお見通しって訳か。ご明察だよ、身体は休まるけど心は結構きつかったりする」

かなり強引にねじ込まれた代償か、オレがいるとそれだけで近衛部隊アリエスの空気がギスギスし出すのがだ**い**ぶ堪えるのだ。

なまじ血統派むこうからすれば『下賤な民が恥知らず共の力を借りて無理やり栄えある舞台にやってきた』という印象であり、しかも一兵卒としての実力なら文字通り人外と化している始末。目の上のたん瘤なのに力で黙らせることも出来ない、厄介な成り上がり者である。

そのせいでほとんど全員から敵対的な雰囲気を感じ取るし、隙あらばこちらを蹴落とそうと睨まれている。同じ部隊の同僚たちのはずがちつとも信用できないのは思った以上に負担となった。いくら自分が正しい方だと信じていても、その一念を貫き悪意を跳ね除けるのも疲れるものだ。

「少しくらいは良い奴もいるんだけどな。アマツなのに腐敗に靡かず、微力ながらどうにかしようって気概のある人間もいたぞ」

「見どころのある上流階級も居たという訳か、これは重畳。向かい風に負けず己の足で立つことのできる人間ばかりならば、世の中はどれだけ綺麗に進んだものか。不遇の身から足掻く誓約者テールズを見習ってほしいものだ」

「現状だとホントに足掻いてるだけだけだな」

「現在いまに腐あらず未来あしたのために足掻き続けなければいずれ成果は出せようさ。そうして諦め膝を屈するにはまだ早いと、気骨ある者に伝えられれば同じ光を仰ぐ人間としてこれ以上ない喜びだろう」

同じ光を仰ぐ人間か、と呟く。クリスを筆頭に諦めないことだけはオレたちも一級品だったからな、そんな姿に感化された人が集えばアドラーもより良い国になるだろうか。簡単に投げ出さず自分の力を磨いていくのは大事なことだとオレも思う。何事も程々に、ではあるけれど。

「良いじゃないか、みんなの手本になれるように頑張ろうぜ。そう考えれば近衛アリエス白羊での職務もやり甲斐が出るってもんだ」

「……言葉を交わすまでも無かったようだ。私も同感だよ、共に輝く未来あしたを目指し邁進するでしょう」

などと良い話風に終わらせようとしてきたので、そこに急いで待ったをかける。

「——待てよギルベルト。いや、審判者ラダメンテユスと呼んだ方がいいか？」

極めて挑戦的に、かつ敢えて二つ名を用いて他人行儀に呼びかける。

星辰奏者エスベラントの裏事情を知る数少ない人間同士、友人として雑談だけで終わらせるわけにはいかない。手がかりが何処までいつても少ないのだ、手段を選んでいられない。

「おや、どうかしたかね？」

「なあ、おまえは最近なにしてるんだ？ 色々色々と気になることがあるんだ、教えてくれよ」

この男相手に揺さぶり、策謀を仕掛けるなど以ての外とはいえ……やらねばカグツチに関する情報が一つも手に入らないままだ。故にクリスの他に唯一彼らの野望を知ってるだろう炯眼の——審判者ラダメンテユスとあだ名され始めた男へ不遜にも勝負を仕掛ける。

婉曲な言い回しをしたが白夜の頭脳は即座に本題を見抜いたようだ。向けられる視線の質がスツと変わり、あたかも値踏みでもするかのような冷徹なものへと変化する。

「おまえに言っても仕方ないことだが、被験者を選ぶだけ選んで後は知らぬ存ぜぬなんて酷い扱いだと思わないか？ 僅かでも奴に関わった者の権利として訊くが——カグツチの目的はどこにある？」

「答える義務はない……と普段なら返すところだが、友誼を結んだ相手に対しすべてを秘匿するのもまた難しいか。ここで私が口を噤んだところで行動を起こすつもりなのだろうか？」

「当たり前だ。何ならこの場で殴りつける準備と覚悟もしてきてるぞ」

最初から素直に内部事情を教えてくれるとは期待していない。ならばオレも光クリスに倣い意志と暴力を携えて目的を叶えよう。褒められた手段じゃないがお行儀よく手段を選んでいられる段階じゃない。

しかしこちらの物騒な覚悟とは裏腹に、ギルベルトの言動は予想外のものだった。

「ならば良いだろう、簡潔な説明程度はしても構わない。余計な敵を増やした挙句、知らぬところ引つ掻き回されるのがもつとも厄介だからな」

「……敵ってなんだよ、随分な言い草じゃないか」

「物の例えさ、しかし我が英雄にとってはあながち外れた表現でもないだろう」

ついて来たまえ、とギルベルトが視線で促してきたので大人しく彼の後ろをついて行く。広大な政府中央棟セントラルの中でも人気ひとけの少ない一角に到着して、ようやく男は口を開いた。

「君の詳しい事情は知らないが、英雄と神星の両者が盟約を結んだ結果エスベラント星辰奏者が帝国に齎されたことは承知している。となれば、その最終目的が一体何か、これが一番知りたいことではないかね？」

「開口一番、完璧な推理だな。ああ、オレはカグツチとやらに選ばれた三人目の星辰奏者だよ。曰く、女性の被験者のデータを欲していたんだとさ」

「ほう、女性のか……私もそれは初めて聞いたが、なるほど、理由もおおよそ察しがつく」

一人で納得したようなギルベルトへとさらに詰め寄る。

「その辺りの事情も含めて知ってること洗いざらい吐いてもらうぞ。いい加減に情報量で後塵を拝するのはご免だからな」

「覚悟があり、挑戦する気骨があるなら私に止めるつもりは無いが……敢えて問おう、どうして本人に直接訊ねはしないのかね？」

正論の刃が胸に刺さる。分かっているとも、それが一番の王道であり、誰もが真つ先に思いつくような行動だ。

正面から本人にぶつからず婉曲に周囲から情報を集めている時点で、覚悟に緩みがある、まだ甘いと言われても何も否定は出来なかった。

しかしだとしても、オレ達だってわざとこんな回りくどい方法を取っている訳じゃない。

「理由を訊ねて素直に答えてくれないから、なんて答えじゃ納得しないよな」

「無論だとも。他ならぬ戦友であり認めている君だからこそ疑うつもりはないが、そうでなければ懦弱の一言で斬り捨てているところだ」  
「なら聞くが……互いに正しい理屈を掲げたとき、最終的に自分の意志を押し通せるのはどっちの方だ？」

「より決意ただしきの強い方に相違ない。正しければ勝つ、それがこの世のあべき姿なのだから」

「間違つてはない、それも一つの真理だ。そしてクリスは誰よりも正しい以上、ぶつかれば必ず最後は力で押し通す羽目になる」

正しいことを正しいときに行つて、ただの一度も間違えない。そんな男だからオレはクリスに憧れた。ではそんな正しさの傑物相手に善意を剣に同じ土俵でやり合ったとき、最後は何が残るのか。

決まっている、互いの正しさを振りかざしての凄惨な殴り合いだ。彼が自らを案じてくれる相手すら切り捨てて前に進ただしきめてしまう光の奴隷であることを、オレは誰よりも深く痛感している。かつてはそれでもと意地を張つたし、今でも譲る気はないのだが……本当に相手を想つて勝負を挑むことが正しいことなのか？

「で、正論同士のぶつかり合いなら力で殴つて構わない？ 相手の力になるためなら、相手を傷つけてでも認めさせる？ 時には必要な

衝突こつとなのは認めるが、普通は誰が聞いたって矛盾だらけの論じやないか」

「その痛みを糧にしてなお飛翔を遂げるのが英雄というもので、それに憧れた者の取るべき行いではないかね？　はて、私と君でここに相違があるとは感じていなかったが」

「無用に傷つかなくて良いならそれが一番だろ。わざわざ好き好んで殴り合いたい馬鹿が何処にいるんだ」

結局のところ、オレは恐れているのだろう。〃助けるために助けた相手と戦う〃という矛盾を避けるために、こんなにも迂遠な道を通っている。目的の為に一直線であるクリスや、それに同調しているギルベルトからすれば何故最短を取らないのか疑問にばかり思はずだ。

だけど決まっている、これで良い。皆が皆、頑固者である必要はないのだから。相手の筋金入りの信念を理解した上でその力になる、それだけは何年も何十年も前から些かも変わってない。

「だからこうして、オレはオレなりの最短を突き進むことにした。さあ理由は話したぞ、政府中央棟ちゆうちゆうとうの地下に眠こっている怪物について、おまえの知ってる内容を話してもらおうか」

「……なるほど、ならば良いだろう。ただし私も既にヴァルゼライドに敗北した身だ、故に上位者の意向に従うべきと我が身を戒めている最中でね。君ならば英雄の力になれると信じるからこそ開陳するが、同時に英雄の意思があるから全ては語れない。構わんね？」

「ああ結構だとも、後はせいぜいオレ達でどうにかして、その信頼を裏切らないようにだけしてやるさ」

元よりギルベルト相手に完璧に説得、出し抜くことが叶うとまでは考えていないから、断片的な情報だけでも構わない。これをどう活かし、取っ掛かりとするかはあくまでオレ達の仕事なのだから。何もかもおんぶに抱っこではクリスにもこの男にも顔向けできなくなってしまう。

「さて、もったいぶってしまったが君が把握しておらず、私が知っていることなどそれこそ一つしかないのだろう——『聖戦』という言葉

について、聞いたことはあるかな？」

## Chapter 45 星間転生／Living Dead

コツコツと、足音を響かせながら目的地へと歩いていく。

「『聖戦』、か……」

ギルベルトから聞き出した内容について反芻しながら、淀みなく地の底へと進んでいく。今のオレは近衛白羊アリエスの仕事の一つ、政府中央棟での巡回任務にかこつけ、本来のルートを外れて私欲のまま動いている。これじゃオレも立派な屑だなど自嘲して、けれど振り返ることなく止まらない。

その間にも考えることは、クリストファー・ヴァルゼライドの抱える最大の秘密、聖戦についてだ。

「今後帝国の発展のために必要なリソースを得るため、と言われればそりゃ納得はするが」

聞いた内容としては簡潔であり、クリスはカグツチと協力して半永久的な資源リソースを手中に収めようと考えているらしい。この資源リソースが何か、というのはボカされたが……星辰体技術アストララルに関するものだろうと目途は立てている。そして、最終的にこの資源を巡って争うことを『聖戦』と呼称しているのだとか。

なるほど確かに、これはかなりの大事だ。未だ謎の多い星辰体アストララルを有効活用できれば新西暦の王冠を得たも同然で、星辰奏者エスベラント以外にも応用できれば帝国アドラーの優位性は揺るぎないものとなる。同時に他国も虎視眈々と隙を狙っているとすれば秘匿性を重視するのも頷ける。

「つてだけなら、まだ良かったんだけどな。『組織とはどのような腐るか』、なんてアルと語ってたのを思い出す」

なのだが、しかし。クリスの場合には秘匿性がどうこうという理由ではなく、『意志の純粋性を保つため』という一点だという。つまりところ大人数で事に挑めば足を引っ張られてしまうから、ギルベルト以外の誰にもカグツチとの決戦と、その果てに待つ利益について語っていないというのが真相なのだろう。

幼少の頃から本当に何も変わってない。別に個人ですべてを成せるとは彼だつて思つてない癖に、いざとなれば何の躊躇もなく単独での行動に踏み切り、あらゆる道理を置いていく。そして驚異的な意志力で無理を可能にしてしまうから格好良いし憧れてしまうのだ。

とにかく、彼はあのカグツチを相手に戦う算段を立てているのは間違いない。曰く、カグツチは「魔星」と呼ばれる星辰奏者の上位互換であり、比較にならない強大さを持つのだとか。今は半壊の姿に甘んじているが、聖戦を発動させる暁には完全復活するのが決まっているらしい。今でも思い出すだけで肌が粟立つような気配を鑑みれば欠片も嘘とは思えない。

「ま、理解はしたよ。確かに大和が残した魔星相手に油断は持ち込めず、星辰奏者技術の源流ともなれば馬鹿みたいな強さだろうさ。そんなのと戦う前に余計な気を配りたくない、善意だろうと足を引つ張られるなど言語道断——それも理解できる」

正論、正道、正着手——どれもこれも正しさに満ち溢れた選択だ。普通なら誰もが我慢できないことを、その方が確実だからという理由一つで容易に決断できてしまう。確かに、クリスならそれをやるとオレも知っていた。

「とはいえ、理解できたからって気持ちを汲んでやるかといえは、否だけどな」

足を止めた。眼前には固く固く閉ざされた鋼の門がそびえている。さながら冥府の門かの如く、生命の気配を感じさせない静けさに支配されている。

ここは政府中央棟の地下、カグツチの居城の入口だった。かつて星辰奏者になる直前に一度だけ招かれ、そしてその後は二度とオレに対して開かれることのなかった開かずの扉だ。重力操作をぶつけてみたりもしたが壊れないほど頑丈で、かつては頭を抱えたものだ。アダマントタイトよりも硬度がありそうだが、果たしてどんな材質で出来ているのやら。

「集束、干渉——重力増幅変更、圧壊しろ」

なのだが、しかし、今度は呆気なく扉が吹き飛び四散した。見えざ



る巨人の手により破壊の限りを尽くされたかのような残骸を横目に、堂々と歩を進めていく。前にも見たような機器の横を過ぎ、否応なしに視線を前へと向ければ、そこにはやはり、奴がいた。

「これはまた、久しいというべきかな。マルガレーテ・ブラウン、第三号星<sup>エスベラント</sup>辰体感応奏者よ」

「ああ、久しぶりだな、カグツチ。こっちはおまえに会いたくて仕方なかったつてのに、随分とつれないじゃないか」

圧倒的な意志の力に押し潰されぬよう、努めて平静を保ちながら軽口を叩いた。

カグツチは硝子管<sup>フラスコ</sup>の中から相変わらず出られていないというのに、どこまでも悠然として、高みから見下ろすようであり。そして困ったことにそんな様が似合っているからたまらない。

「今回はまたすんなり入れてくれたじゃないか。どうせオレが来るのも分かっていたるうちに、どういう心変わりだ？」

「一つ、新たに実験<sup>テスト</sup>を行ってみたいと考えたのさ。恥ずかしながら今の我らは手詰まりでな、打開策の一つとして改めておまえを利用しようと考えたのだ」

「へえ、おまえたち程の存在から手詰まりなんて言葉が聞けるとはな。ああ、もしかしてとは思うが、ギルベルトに情報を流すよう指示でもしたのか？」

「相も変わらず直感には優れているようだ。ヴァルゼライドが知れば反対すると分かっていた故、些か回りくどい手段を取ったが、果たしておまえは予想に違わずここに来た。ああ、しっかりと星の力も使いこなせているようで何よりだよ」

満足気なカグツチを前に不思議な納得を得た。薄々そうだと感じていたが、やはりコイツの掌の上で踊らされていたらしい。あの開かずの扉も無理やり突破できたというより、敢えてオレが全力で行けば壊せるようにでもしたのだろう。ついでに力試しもさせるとはどこまでも合理的だ。

「おまえからの評価なんざどうでもいい。確信犯でオレをここに呼び寄せた以上、互いの目的は一致してるだろう？」

「そうさな、ならば本題に入るとしよう。かつてヴァルゼライドがその身で行った星辰光再強化措置、これに興味があるのだろうか？」

無言で頷く。

「死亡率は九割強、成功しても寿命は大幅に削れ長くは生きられぬ。所詮は人類種の持つ寿命の前借りでしかないのだが……さて、そのような手段を本当に受けたいと思うかね」

「ハッキリ言うが、悩むところだな」

「ほう」

正直に告げたこちらの言葉にカグツチは興味深げに相槌を打った。

「強さの方面からクリスに少しでも近づけるのは歓迎だけだな、それだけじゃどうしても足りないのが事実だ。というか、九割強なんて流石に死ぬだろ、気合と根性以前の確率論で現実的じゃない」

「……それが普通の回答であるはずなのだがな。あの男が何の躊躇いもなく三度も再強化措置を行ったせいで、己は少しばかり拍子抜けしてしまったよ」

「悪かったな、こっちは凡人なもんでな。助けになつてやりたくて手術したら意志力が足りず死亡しました、なんて間抜けはしたくないんだ」

滔々と語りながら、しかし相反する感情もまた抱く。いよいよとなれば恐らくオレも躊躇せずとその再強化措置を受けようという不思議な確信も心の片隅には存在した。死亡率九割だろうが十割だろうが、きつと勢いだけでやらかしてしまうのだろうか。

そんな内心の決意を見透かしたのか、カグツチの視線がオレを貫く。「ここからが本題なのだが」と前置きしてから語り出す。

「まあよい、己の目的はここからが本題だ——再強化措置ほど死亡率は高くなく、けれどより強力な星の力を入れる手段があると言われたらおまえはどうする？」

「随分と都合の良い仮定じゃないか。そんなことが出来るのか？」

「可能だとも。己がその証人なのだから」

「……………それが、エスベラント星辰奏者の上位互換って奴か」

「いかにも。ブラネテス“人造惑星”、あるいは“魔星”と呼んでくれて構わな

いが、そちらへ変貌するという道もある。無論のこと、選ばれし星々への切符は相応に狭い門であるのだが——」

そこでカグツチは、初めてオレに対して明確に視線を向けた。既に己の実験を果たし役目の終わった端役から、ようやく少しは利用価値のある相手になったということか。

硝子管越しに放たれる圧力に対し睨みつけることで均衡を保ちながら、呼吸を深く静かに行う。

「喜ぶがいい、マルガレーテ・ブラウン。またしてもおまえは合格だよ、人造惑星へ至る切符をその身は確かに有している」

「なんだと？」

「そう疑うな、言葉通りの意味だとも。己らは聖戦に備え新たな人造惑星の製造を行うために、その素質を有する人間を探す手段を既に有している。故にこそ、素体が素質を持っているならば見抜くことも容易いのだ」

「都合が良すぎるな。星辰奏者だけじゃなくて人造惑星とやらにまでなれるなんざ、鵜呑みにする方がどうかしてる。おまえ、オレを騙して都合のいい様に転がそうとしているだけじゃないのか？」

望んだ力を手に入れる土壌をそう何度も都合よく持っているはずがない。何よりもオレ自身が、自らが特別な人間であるはずがないと信じている。勇者の資格、特別なただ一人、誰もが驚くような過去の経歴——そんなものとは無縁の凡人なのだから。

「都合がよい……確かに己らも疑うところさ。奴ほどの傑物の周囲には星辰奏者になれる逸材が溢れていて、しかもその内の一人は魔星にまでなれる始末。まるで出来の悪い脚本か、あるいは目に見えぬ運命とやらにでも翻弄されているようではないか」

「ロボットのお前がそれを言うのか」

「機械だからこそ、あるがままに出来事を受け止めるだけでは不十分なのだよ」

そこまで語ってから、カグツチは不敵な笑みのままオレを一瞥する。

「ならば問うが——おまえ程度の人類種を、回りくどい策を弄してま

で罫に嵌める必要が己らにあると思うかね?」

「言ってくれるじゃないか、壊れたロボット風情が」

「己はただ事実を述べただけさ。ごく僅かな英雄れいがいを除いて、どれだけ足掻き藻掻こうと個人で解決できないことは幾らでもある。ここに来るまでのおまえがそうであつたように」

「はっ、そうかよ」

随分な言い草に腹も立つが、まあ良いだろう。

「つまり、その人造惑星プラネテスを作るための試金石にオレがなれば、対価として力を与え、強制的に『聖戦』とやらにも噛ませようつてことか」

「そうだ。乗るか降りるか、どうするかね?」

「待てよ、まだ肝心なことを聞いてないぞ。再強化措置ほどの危険性は無いと言っていたが、これについては?」

「ふむ、詳しい話は割愛するが——適性のある死体を元に改造を施し、新たな骨格フレームへと強化する関係上、危険性が無いことはあり得ない。対価なき力など存在しないのだよ」

「……おい、聞き間違いじゃなければ、死体つて言ったか? 素体じゃなくて?」

「己の設計した星辰奏者エスベラントは聴力も強化しているはずだが?」

「チツ、そうかよ」

何が危険性は無いだ、九割死ぬか十割死ぬかの違いじゃないか。むしろ確実に死ぬだけこっちの方が余程タチが悪い。その後で身体も新たに蘇ることが可能として、それが現在から続く自分自身だとして言い切ることができるのか。

しかし今の悩みすべてを打開する切っ掛けが目の前に転がっているのもまた事実で……クソ、心が落ち着かない。

「オレは……いったいどうしたい?」

暴力だけがすべてではない——必要なのは総合力——しかし力が無ければ同じ土俵にすら上がれない——クリスの敵から恵んでもらった星光で道を切り開くことは正しいことなのか——あらゆる逡巡戸惑い後悔に誘惑が脳内を駆け巡る。

「二つ確認するが、つまり人造惑星プラネテスになりたいなら今ここで死ねばい

「いんだな？」

「そうだ。楽に死ぬ手段ならば己が提供しても構わないが？」

腰に佩いた直刀を引き抜く。

よく磨かれたアダマンタイトの刀身に反射した自らの顔を覗き込む。迷っているのだろうか、自分自身の心の行方が分からない。

ただ一つ、どこまでも澄んだような、落ち着いた表情を湛えた顔つきがオレを見返してくる。その眼がオレに訴えかけてくるのだ、『ここで迷うという贅沢な選択肢がおまえにあるのか？』と。

いつまで経つても周回遅れ、憧れ続けるだけで終わるなんて。それだけはたとえ死んでもご免だから、ようやくここで意志は一つになる。

「覚悟は決めた。オレは死んでもクリスに追いつくと決めただ、なら一度死ぬくらいはやってやるさ」

その切っ先を、自分の心臓へと当てながら——躊躇なく刃を押し込んだのだった。

自己の定義とは、いったいどこにあるのだろうか？

難しい命題だが、一つ意見を挙げてみるなら心の存在を指していると思う。では心とはそもそも何か？ ドライな見方をする人間なら、脳の細胞一つ一つが複雑に絡み合った末の電気信号を心と錯覚してただけと語るだろう。確かにそれも正論だが、味気ないし夢がない。というより心を機械的に紐解くことがナンセンスにも感じられる。

では肉体的な方面よりも哲学的な方向で考えてみよう。西暦以前の有名な哲学者の思想に、『我思<sup>Cogito</sup>、故に我あり<sup>ergo sum</sup>』という言葉があった。思考していればそこに自己があるのは間違いないと、大体そんな意味だ。こちらの方がロマンチックで納得もしやすいと思うのは個人的な感傷が過ぎるだろうか？

話が長くなってしまったのでまとめよう。

つまるところ、過程がどうあれ自らを認識して考えることができていれば、すなわちそれが自分自身に他ならない。肉体がどうか、死や転生がどうかのとか、小難しい理屈を挟む必要は一切ない。オレは私<sup>オレ</sup>、天地がひっくり返ったってそれがすべてだ。

◇ 意識だけが水の中を揺蕩うような不思議な感覚。

頭は覚醒しているはずなのに、身体がまだ眠ったままのような。ぼんやりと思考はできるのに目を開けることができず、ただ周囲の音だけが耳に届いて認識できる。でも内容は専門的な話ばかりで、残念ながら私に理解できるような情報は一つもなかった。

あれ——いま、私って呼称した？

どうしてだろう、それが一番自分の中でしっくり来ているはずなのに、途轍もない違和感を覚えてしまう。もっと違う一人称だったような、私という個人が根本から揺らいでしまうような、大きな齟齬<sup>そご</sup>。なのに思い出そうとしても砂のように手のひらから零れ落ちて掴めない

い。

しばらく考えても理由を思い出せなかった。なら良いか、今は忘れよう。まず最初に現状の整理から始めようじゃないか。

現状は目も開けられなければ身体も動かせない、できることと言えれば思考をする程度だ。ではこの直前の記憶はといえば、これは覚えてる。私はあの神星の下へ訪れて、星辰奏者の先があるという話を聞いて、ならクリスに追いつくためにはそれしかないと選択して……自分の胸に刃を突き立てた。痛みも覚悟もすべて自分のものとして思い出せる。

いや待て、となると私は一度死んだのか？ でもこうして意識は続いているし、まさかこの暗闇がああ世な訳がない。私は私、マルガレーテ・ブラウンで間違いないのだから。

そう考えていたとき、不意に身体を動かせることに気が付いた。指先がピクリと動く。金属質の冷たいものに触れている感覚。身体の状態的に寝かされているのだとここでようやく気が付いた。

「ん……」

微かだが声も出る。その瞬間、耳に届く声がどよめきが変わった。雰囲気からして喜んでいそうな状況か。「実験成功」だとか「理論は証明された」だのいかにも科学者といった内容が聞き取れた。

さて、こうなればいい加減に察しも付く。要するに自分はカグツチの語った人造惑星<sup>プラネテス</sup>とやらに成ることに成功したのだろう。そして今になってようやく目が覚めた。感覚的には星辰奏者<sup>エスベラント</sup>となった時と同じで”気が付いたら”という印象が強い。

そして目元に意識を集中すれば、呆気なく目蓋が開いた。

「ここは……」

場所はおそらくカグツチのいる政府中央棟地下深くだと思う。ただ、暗い天井しか見えない。体の左右すぐ傍には低い壁があり、それが足元の方まで続いている。形状からするに、これは棺桶か？ 随分と不吉なものに納めてくれたものだ。

文句を抱きながらもゆっくりと立ち上がる。服は普段通りの軍服、肩より少し長い茶髪にも変化はない。おそらく外見に大きな差異は

起きていないのだろうか……中身が明らかにこれまでと異なっている。これではまるで――

「生まれ変わった気分はどうか、マルガレーテ・ブラウンよ」

唐突に投げかけられた声に思考を中断され、そちらを見やった。

視線の先にはやはりというか、揺蕩う人型機械の姿がある。

「目覚めてすぐ出会うのがおまえとはな、カグツチ。どうせならクリスに起こしてもらいたかったもんだが」

正面に鎮座するこの部屋カグツチの主へと皮肉を以て答えてみせる。いい加減にヤツの発する威圧的なオーラにも身体が竦まなくなってきた。いや、この感覚はただの慣れだけじゃない。

明らかに以前より強くなっているが故の自信と、それに付随する危機感の欠如。まるで神星を相手に”勝ち目がある”と思いかねないエネルギーが体内に渦巻いているのを感じ取れた。

「さて、どうかね？ 星辰奏者の起源にして最先端、人造惑星エスブラントとなった感想は」

「素直に言うなら、思ったより悪くない。ああ、私らしくない馬鹿げた誘いに乗った価値があつたよ」

「ほう」

……私の返答の何が琴線に触れたのか、カグツチは興味深そうにこちらを見つめている。あたかも人造惑星プラネテスとなる前と後の私を比較しているように……まるで実験動物モルモットになったかのような不躰な視線は居心地が悪い。

そのようなやり取りをしている間に、先ほどまでいたはずの科学者たちはそそくさと立ち去ってしまった。まるでカグツチの注目を引きたくないとばかりに無言かつ気配を消していたが、事実そうなのだろう。いくらマッドサイエンティストの類だろうと魔星の主が発する”圧力”は心地よいものではない。

そして、広い部屋には私と神星だけが残された。

「一応礼は言っておくべきか？ おまえにとって私は計画のための敵か端役だろうに、よくもまあ誠実にやってくれたよ」

「礼には及ばんさ。己には己の思惑があり、それがたまさかそちらの



思惑と被ったにすぎない。そして、一つ勘違いをしているようだが一」  
「強い敵が一人増えた程度で揺らぐほど、自身の計画に狂いはない、だろ？」

眼前で笑う不具の絶対者にとって、クリス以外の戦力がいくら増えようと取るに足らない存在だと分かっている。それを見越しての発言だったのだが……ヤツは愉快そうに心外だという笑みを浮かべた。「いいや、敵が一人増えたのではない。こうして魔星となった時点で、おまえもまた己の眷属の一つとなった。製造時にそれらの情報はインフラット入力済みのはずだが、まさか知らないとは言うまいな？」

「分かっているさ。英雄あこがれに近づいたために太陽あくまに魂を売った今、私の所有権を持つのはおまえなんだろうさ」

今や自分でもまったく知らなかったはずの情報が頭の中に流れ込んできている自覚がある。カグツチのより詳しい来歴、アドラーの暗部、他の魔星の作成計画や一向に目覚めない月天女アルテミスとやらのことまで……その中には私があればだけ切望した聖戦の情報と、その争いにカグツチ側で参戦しなければならぬという契約までも織り込まれている。

それらすべてを踏まえた上で、最後は結局こう告げるのだ。

「で、だから？ 私素直にその誘いに乗るとでも思ったのか？」

「ああ、やはりそうなるか。知っていたとも、英雄の薫陶を受けた者がこの程度で己に従うはずがないと」

真つ向から叩きつけてやった絶縁状を受けてなお、カグツチは余裕を崩さず泰然としていた。

「故にこそ己はおまえにこう告げよう——知っていたとも好きにしろ、とな」

「なんだ、力を恵んでやった立場のくせに、随分と寛大な処置じゃないか」

「己は別におまえがどちらの側に立っていても構わんのだよ。いや、むしろ……あの英雄が聖戦の舞台へと上がるそのときまで、奴の味方であって欲しいとすら願っている」

意外な発言だった。敵のくせにいったい何を、などと怒るべきかもしれないが……超然とした態度が薄れ、どこか真摯さすら滲ませて語るカグツチに私は不思議なほどのシンパシーすら覚えていた。

英雄という孤高の道を歩むクリストファー・ヴァルゼライドへ向ける敵意と信頼と尊敬を呆れるほどに有しているから、万が一にも他の些末事に足を掬われてほしくないという願い。その気持ちはよく理解できる、できてしまう。外野の余計な手出しがどれだけ厄介なのは政府中央棟セントラルで何度も見てきたとも。

「誰か」のことを慮っているから誰にも真実を話さず、だからこそ守るべき”誰か”から不信感を抱かれる。たとえばおまえが何としても奴の喉元に喰らいつこうとしたように」

「……否定はしないさ、する権利もない。力になりたいという願いが当人の邪魔になることがままあるのも、悲しいが認めなきやいけない不条理だからな」

「故にこそたった一人で己と相對し、すべてに”勝利”すると誓った奴の気概を己は尊重したい。お前はそのためだけの避雷針となり、英雄の視線を己にだけ向けさせる役割を果たせば構わない」

そして聖戦が起動した暁には、英雄の前座としてまとめて打ち倒す——そう語るカグツチの言葉に嘘は微塵も存在していない。

「嫌になるな、本当に」

呟いた言葉は小さかった。ここまで尊大かつ心を込めて「奴を守る避雷針となれ」と言われることの意味が理解できてしまう。

だから今抱いている呆れにも似た”嫉妬心”を舌に乗せて、精一杯の皮肉を吐いてやる。

「——お前、本当にクリスに首ったけなんだな」

「何か問題でもあるかな？ 対等にして唯一無二の好敵手、ヴァルゼライド以外に己と聖戦を演じることでできる者など、今後二度と登場はしまい。なればこそ、この機会に己が存在理由のすべてを賭けるのが道理というもの」

「そうかいそうかい、よく分かったよ。悔しいがお前たちは相思相愛、本当に私のことなんか眼中にないんだな」

「己は最初からそのように告げていたはずだが？」

「ようやく肌で意味を知ったってことだよ」

まったくとんだ蚊帳の外だ。随分と妬けてしまうじゃないか。

「けどこんな程度じゃ諦められない。私の胸の内であつた一つの感情が嵐のように吹き荒れては燃え上がる。」

すなわち、『立派な友に並び立てるようになりたい』という想い。そのために生きてそのために死んでも構わないという純化された覚悟。きつと今の私なら、眼前に誰が立ち塞がろうとその覚悟を貫き通せる。

——たとえそれが一番の憧れヴァルゼライドだつたとしても。

「……待って、私はいったい何を考えて」

立派な友に並び立つために、その友を排除してでも想いを貫く？

「なんだそれは、矛盾だらけじゃないか。いいや違う、そもそもオレは、」

「そういうえば一つ、お前にまだ話していないことがあつたな」

意味の分からない思考に翻弄される”私”へ、カグツチは忘れていたとばかりに語り掛ける。

「魔星とは死者を素体として作成される星辰体運用兵器と語つたが、肝要なのは力を制御するための感情ベクトルの方向なのだよ。残留思念と言ひ換えても良い」

「残留思念……だと？」

「そう、すなわち死者の情念を用いて無色のエネルギーに色を付け、アステリズム星辰光として発現させること。これが人造惑星プラネテスの大前提であり、問題点でもある」

問題点——死者の残留思念。

カグツチの語る言葉に嫌な予感が止まらない。この身が死者であるのは構わない、こうして意思を持って動ける時点で一度の生死がどうだというのだ。

だから真に問題となるのはこの次であり……さつき脳裏をよぎつたように、いつの間にか手段のために目的を選ばない思考となつているのが問題なのだ。それはまるで、『目的達成のためなら何でもする』

という意思が根底にあるかのような。良心や躊躇もあるはずなのに総じて些事と片付けてしまいかねないような、恐ろしいまでの危うさがある。

現に今の私もまた、目覚めたときに抱いた自分への違和感がほとんど消えている。何かが大きく変わったはずなのにどうでも良いことと心は片付けてしまっている。

「気が付いたかな？ 死者は死者故に成長できず、製造時から完成された存在となる。よって不変となるただ一つの感情に振り回され、人間らしい思考とて一皮剥けば止まったままの情念に突き動かされているだけ。我ながら、兵器としては度し難いにも程があると自認はしているさ」

「っ、なるほどな……死者は死者で、こうして立っている私自身も厳密には本人じゃないってか。なのに不思議だな、ちつとも動揺できないから困ったもんだ」

きつと今の私は『クリスに追いつけ、並び立て』という意味だけが残った状態なんだ。だから光に恥じるようなことは出来ないと考えられる頭と、彼に追いつくためには他の事柄など総じて些事だという考えが同居してしまっている。

単一の感情で染まった殺戮兵器プラネテスに成り果てようとも構わない。今更ながら自分の選択が客観的には恐ろしく思えるが、主観としては既にどうでもいい。理屈と感情が致命的に乖離を起こしていた。

「気持ち悪いけど仕方ないか。それはそれで、これはこれだ。自分で選んだ道なんだから、利用させてもらどうぞ神星」

だとしても想いは微塵も変わらない。そういう意味ではこつちだつてどこまで行っても光に首ったけなわけで、カグツチのことを少しも笑えなかった。

「ならば決まりだな、誓約者改めガイア—ディガンマ N.O.? よ。目覚めぬアルテミス  
月乙女に代わり産み落とされた大地の魔星。聖戦までに星の力を磨き、英雄を己の下まで確実に導いてみせるが良い。それこそが、お前の抱いた根源の願いであればこそ——」

「言われるまでもない、やってやるさ。知らないか？ これでも私、

戦乙女フルキューレなんて呼ばれてたこともあるんだよ」

ああ、それから。

もう一つだけ言っておかなければならないことがある。

「クリスを甘く見るなよ、機械風情が。あいつは私なんか居なくても必ずお前の前までやってくる。私はただ、私がそうしたいからそうしているだけだ」

「無論、理解しているとも。しかし己も本気でこの聖戦に挑んでいるのでな、打てる手はすべて打つのが礼儀であろう?」

「言ってる」

これにてやっと、聖戦ぶたいに参じる切符を得た。敵の技術を借りることの不満とか、結局最後は力を欲するのとか、自身に対する不満はあるが文句は言わない。それも含めて私の選択だ、これだけは誰にも譲らない。

……よく考えてみれば、私が魔星になると決断して刃を突き立てた時から、どれだけ時間が経過したのだろうか?

クリスやギルベルトはともかく、アルが心配してなければ良いなど頭の片隅で思うのだった。

## Chapter 47 友・暗殺者・錬金術師／In the underworld

魔星となることを選んだ後の私の扱いは少しばかり複雑だったよ  
うだ。

まず、人造惑星として目覚めるまでの空白期間について。どうやら  
魔星となるのに半年ほどかかったらしく、その間は近衛白羊アリエスの極秘任  
務を受けて表に出れないという扱いだったらしい。

カグツチの根回しなのは間違いないが、果たしてどう働きかけたの  
やら。興味はあるがあまり聞きたいことでもない。たぶんカグツチ  
を知る叡智宝瓶アケエリアス暗部辺りを介しての圧力だと思うが。

ともあれ、政府中央棟セントラルに再配属直後に長期間軍務から離れていたこ  
とへのお咎めは無くして一安心だ。影響はせいぜい近衛白羊アリエスの一部か  
らの視線がもう少し厳しくなった程度だし。

どちらかと言えば数少ない友人たちの方が問題だったというか  
……三者三様の反応を受けてすごく苦労したのが印象深い。

まずギルベルト・ハーヴェスだが、あいつはいつものすまし顔で  
祝ってきた。

「思惑通りに運んだようでは何よりだとも、おめでどう誓約者テルルスよ。次の  
位階へと躊躇うことなく踏み込んだその勇氣、是非とも賞賛させてく  
れたまえ」

私が魔星となったことをきつと心の底から寿いでいるのだろうか  
ど、胡散臭くてしょうがない。その選択と葛藤もお見通しと言わんば  
かりの口調に変わってないなと苦笑の方が先に出た。たった半年程  
度会っていなかったというのに、まるで初めて私と会話したかのよう  
な奇妙な感慨だ。

審判者ラダメンテユスとは今後も聖戦を巡り共闘したり、あるいは対立すること  
もあるかもしれない。心強い味方であると同時に油断ならない相手  
だ、万が一に備え気を付けよう。

次にアルバート・ロデオン、彼の方は大いに私の身体を心配してい

た。

「魔星となつたつてそりやどういうこつた……!? 星辰奏者とはまた違う存在になつちまつたのか? 問題とかそういうのはねえんだろうな、つーか何をまた一人で決断してやがる大馬鹿が!」

当たり前というか、アルにはめつちや怒られた。そりやそうだ、私だつて立場が逆なら絶対怒る。詫びという訳ではないが彼とはこつそり情報共有も行つた。包み隠さず知っていることすべて、だ。色々と驚かれたがこれは仕方ない。

それから、細かいことだが一人称が変わっていると突つ込まれた。私としては『私』という呼称に違和感を覚えませんが、どうやらアル曰く元々は『オレ』だつたらしい。言われ見ればそつちもしくりくるが……あまり心配もさせたくないの、「立場相応の振る舞いを心がけるようにただけだよ」と誤魔化しておいた。

アルとは今度も志を同じくする関係でいたい。今回は私の方が先走つてしまつたが、次回からは彼の言う通りちゃんと相互連絡は取つて行動しよう。カグツチの描く巨大な計画、悔しいが私一人で粉々に行けるとはとても思えないし。

そして最後に、私がこの道を選んだ最大の理由たるクリストファー・ヴァルゼライドからは――

「すまなかつた、マルガレーテ・ブラウン。お前にそこまで身を削らせることを選ばせてしまつた、俺の落ち度だ。この償いは聖戦が終わつた後、必ず」

まつたくもつて的外れな謝罪を開口一番に受けた。

いやいや、何を言つてるんだと。私がそうしたいから行動している訳で、それを勝手に”自分のせい”だと謝罪されてしまつては堪らない。欲しい言葉はそんなものじゃ断じてなくて――と言いたいことは山ほどあつたはずなのに。

頭に浮かんできたのは悲嘆でも呆れでもなく、ただただ怒りだけ。そうまでして私を認めてくれないのかという身勝手に激しい怒りばかりが胸の内へと広がっていく。ならば彼こそ私の乗り越えるべき”敵”であり、想いを貫き通すために力づくでも認めさせてみせるし

かないと思いが一色に染まっていき、

「俺が言えた義理ではないが、身体の方に不調は無いか？ 偽善かもしれないが問題があればいつでも話は聞こう」

「ああ……大丈夫だよ、迷惑なんてかけないさ。私の誇りにかけて、な」

声を掛けられた途端にそんな考えは雲散霧消となった。

当たり前だ、何を考えているのやら。この思考と衝動こそ魔星となった代償なのかと自分自身に恐れと呆れを抱いてしまう。

足を止め、しつかり考えることを覚えなければ。短絡的な手段では目標へと至れない。でなければいつか必ず、クリスを助けるために得た刃が彼自身に向けられることとなる。

よって、光に恥じない人間に私はならなければいけない。それは決して、立ち塞がる者を塵殺してでも目指すものじゃなく。人として当たり前に誇らしい人間でなければ、彼の隣は相応しくない。

そのように自制を意識した私へと、クリスは真つすぐな瞳で告げてくる。

「こうなってしまうてはもはや無理に遠ざける理由もないか。レーテ、お前が宿した魔星の力を見込み、状況次第ではその手を借りたい。構わないか？」

「――」  
憧れが、私に対して力を貸してくれと告げてくれた。

かつて、貧民窟スラムで育ったときからずっと、ずっと待ち望んだその言葉。

私が返す言葉などたった一つきりだ。

「任せろ、そのための誓約者わたくしだからな」

◇

改革派と血統派の争いは日に日に激しさを増していく。

私が人造惑星プラネテスへと改造されている間に、クリスは始まりの星辰奏者エスペラントとして軍部を掌握すべく積極的に行動を開始していたらしい。水面下の権力闘争、表面での蹴落とし合い、要人警護に暗殺と……いよいよ殺伐さを増してくる政府中央棟セントラルはどこか息苦しさすら感じるほど



だ。

近衛白羊<sup>アリエス</sup>も今や敵対派閥からの暗殺警戒・対処が主な任務となり二分化される有様である。個人的には内部抗争よりも外部からの脅威に対して剣を磨くのが正当だと思っただが、言ってる場合でもなかった。

暗殺に次ぐ暗殺と、それを防ぐためにも量産されていく人間兵器<sup>エスベラント</sup>。今や東部戦線の戦力拡充よりも、暗殺者に仕立て上げる方がメインではないかと錯覚してしまう程だ。

そういう事情もあって、私としても彼らの手口や考え方というのは知りたいと考えていたのだが、偶然にも少し話す機会が生まれたのがつい先ほどのこと。聖戦の始まらない”原因”でも挿んでやろうと思いついた。地下へと向かっている最中の出来事だった。

「暗殺者の視点から見ると、絶好の暗殺タイミングはどこだと思う？」  
「そんなこと俺に聞かれましたも……まあ月並みですけど気が緩んでるときは狙い目だと思いますけどね、はい。相手の嫌がることを予想して、その通りに攪乱できればもっとやりやすくなりますね」  
「なるほど……参考になるよ。守る側はその逆を意識すれば良いってことだ」

やる気の無さそうな顔に、アマツにも思える黒髪が特徴的な青年。彼は精鋭揃いの裁剣天秤<sup>ライブラ</sup>に所属する星辰奏者<sup>エスベラント</sup>であり、ここ最近で随分とキルスコアを稼いだ暗殺者のようだ。

第七特務部隊裁剣天秤<sup>ライブラ</sup>は名の通り、軍部でも特殊な立ち位置となっている。とりわけ内部粛清機構としての面が強く、不正でもしようものなら即座に裁きの剣の錆にされると知られていた。

そんな彼らは腐りきったアドラー上層部の中では比較的正常に機能していて、現状でもどちらの派閥にも属さない中立を保つ立ち位置だった。

「いやいや、止してくださいよ。俺の言葉なんて参考にされても仕方ないですって、もっと適任者の方に聞いた方がいいですよ」

で、中でも次世代の暗殺者として密かに注目を浴びているのが目の前の覇気があまりない青年という訳だ。しかしまあ、とんでもなく自

己評価が低い。黒髪赤目という特徴と、腕は確かだという話を聞いてなければ人違いかと思ったくらいだ。

青年の名前は確か、そう、

「——えっと、その、聞いてますう……？　かの誓約者テールさんに意見できることなんて私わたしめには一切ないと言いますか……」

自信なさげな声に思索を打ち切られた。いや、驚くくらい低姿勢だ。まことしやかに腕の良さを囁かれるくらいなのだから、もっと自信を持っていいだろうに。

「……そんな卑屈になられてもな。今回教えを請うのは私の方なんだし、もっと偉そうにしても構わないけど。あと知ってるんだな、私のこと」

「そりやあまあ、例の英雄殿と最前線を駆けてた女傑の話は有名ですし？　うちの相棒もあなたみたい**な強さ**を目指して励んでて、毎日大変だったらないですよ」

「なんか悪かったよ……ぶっちゃけ私なんかを目指すより、クリ——ヴァルゼライドの方を模範にする方が良い気もするけどな。あいつは本当の意味で規格外だぞ？」

などと笑い交じりに言ってみたら、暗い顔が一転して「何言ってるだコイツ」という信じられないものを見る目が変わった。え、そんな顔するか普通？

「所感ながら、あの人はあんまり見習っちゃいけないタイプにも思いますがけどね……怒らないで欲しいですけど、英雄様は真面目すぎますよ。一般人が模範になんてしたら潰れるのが関の山じゃないですね？」

「真面目に正しく生きるのも難易度高いからな、そう思うのも当然だ。私だって懂れてはいてもあそこまで到達できるかっていえば、無理っ  
て言ううしかないもんな」

「あー……そうですね。何を目指して目標にするかは人それぞれってことで……勝ち続けるなんざ地獄みたいだと思いますけどね……」

歯切れの悪い言葉で濁されてしまった。最後の言葉は少し気にかかるが、きつと彼なりの人生哲学に基づく言葉だろう。あまり勝手な

深入りをするつもりもない。

「と、すみません、この後少し用事がありました。他にも聞きたいことがあるなら、一応お答えはしますけど」

「じゃあ最後に一つだけ。あなたは、どんなモチベーションを持って軍で頑張ってる？」

今の私のモチベーションは「死者としての残留思念」に固定されているから、他人が何をモチベーションに戦っているのか軽い興味があった。加えて暗殺者の内面を知っておけばいざという時、こつちが逆に嫌なことをやり返せるかもという打算もある。そのような気持ちで訊ねた答えは――

「生きるため、底辺の育ちなんで給料がいいならどこでも良かったって感じですよ。ま、たまには金や食べ物恵んでくれる妙な軍人さんもいましたが」

「へえ……そりやまた、苦労したろうな。お金の為でも良いじゃないか、何も恥じることはない立派な動機さ」

「正直、ちよつと意外です。あなたってバリバリ改革派な人ですし、もつと立派な志を持ってって叱られるかと思っていました」

「私だってあんまり凄い人間じゃないから偉そうなことは言えないさ。俗で結構、立派になることと明日を生き抜くことはまた別の話さ」

目標とする人間が凄すぎるだけで、私本人はそこまで厳しくもないんだけどなー、などと思いつながら。しかし先輩面して色々言えるようになった辺り、年を取って経験も重ねてきたんだなと寂しさも感じる。体力の衰えや肌の皺に恐れる日も近いのか。

ともかく、「時間取らせて悪かったよ、ありがとう」と礼を言つてこちらから切り上げた。これ以上留めておくのも彼に悪い。

「いえ、別に。それじゃ俺は失礼しますね」

そそくさと去っていく背中を見送って、こちらも本来の目的地へと足を向ける。

思わぬ雑談となってしまうたが、それなりに面白かったし勉強にもなった。世の中いろんな人間がいるものだと内心で笑い、あれくらい

の謙虚さは一種の傲慢さにもなりそうだなと考えだす。

どちらにせよ——エリートらしからぬ性根も含めて興味深い人間だった。底辺の生まれとかサラツと言っていたし、どこか親近感も覚える。機会があればまたいつか、今度はのんびり話してみたいものである。

◇  
裁剣<sup>ライブラ</sup>天秤<sup>セントラル</sup>お抱えの暗殺者との雑談も終え、本来の予定通りに政府中央棟の地下へと向かう。魔星となり聖戦にも一枚噛んだ現状、地下への門はフリーパス状態だ。用が無ければもちろん行かないが、少し気が向いたから足を運ぶのも許されている。

そして私は薄暗い地下の研究室にて、液体の中に浮かぶ銀の少女を眺めていた。

「こいつが月<sup>アルテミス</sup>天女<sup>ペー</sup>——N<sup>タ</sup>o.β……変更後のコードネームは死<sup>エウリュディケ</sup>想恋歌<sup>エウリュディケ</sup>だったか。よく眠ってるよ、のんきなもんだ」

クリスとカグツチの求める聖戦を発動させる鍵として、本来ならば数年前に起動予定だった魔星。それがこの死<sup>エウリュディケ</sup>想恋歌<sup>エウリュディケ</sup>であり、鍵と同時に悩みの種であると知識には入っている。

そもそも私が第三号星<sup>エスベラント</sup>辰奏者<sup>エスベラント</sup>に選定された理由も、目覚めぬ死<sup>エウリュディケ</sup>想恋歌<sup>エウリュディケ</sup>を解析する一助になればとの事だと後から聞いた。同じ女性の肉体を改造した際に私と死<sup>エウリュディケ</sup>想恋歌<sup>エウリュディケ</sup>でどこが違うか比較したという訳だが、生<sup>わたし</sup>憎<sup>ブラネテス</sup>と第三号<sup>ブラネテス</sup>が人造<sup>ブラネテス</sup>惑星<sup>ブラネテス</sup>となってもなお答えは見つかっていないようだ。

神話のように冥府の底から連れ出す吟遊<sup>オルフェウス</sup>詩人<sup>オルフェウス</sup>も存在せず、完全なる手詰まり状態。月天女は一向に目覚めの糸口すら見せないまま、徒に時間<sup>ブラネテス</sup>と実験<sup>ブラネテス</sup>体ばかり浪費され続けていた。

「どうやったら目覚めるんだろうな、こいつは」  
さっさと聖戦なんて物騒なことは終わらせて、平和にアドラー軍人でもやっていたいものだと思息した。

と、背後の扉が開く気配が。コツコツと足音を鳴らしながらこちらへとやってくる。この場にやってくる人物はそう多くなく、軍人らしくない歩き方をしているとすればたぶん一人しかありえない。

「このまま永遠に目覚めないうまま、眠り続けていて欲しいものですね。英雄と神星がぶつかり合うより、その方がよほど平和で得する展開だ」

私の隣に並んで皮肉気に死想恋歌へと吐き捨てる白色の貴公子。優男らしい風貌はまったく戦闘に向いているようには見えず、現に彼の前職と今の役割は共に商人だったはずだ。

「ルシード・グランセニック……あなたがこんなところに来るなんて、珍しい」

「そつちこそ、荣誉あるアドラー軍人様がこんなところで何を油売ってるんですか？ どうやら軍人様は随分と暇になったようだ」

ヘルメス—No. 8、錬金術師の名を関した人造惑星。私が製造された直後に完成した魔星らしく、番外的な扱いのNo. 9？と違い正式な型番が割り振られている。

彼は聖戦への参加は消極的で、私自身もあまり接点はない。以前にちらつと顔を見た程度であり面と向かって言葉を交わすのはこれが初めてだった。

錬金術師はこちらを一瞥することもなく、忌々しそうに死想恋歌を見上げている。その視線には今すぐにも彼女を星の力で破壊しかねない物騒な思念が宿っていた。

「彼女がさつきと目覚めてくれれば死人である僕らがこうして駆り出されることも無かつたらうに、とんだ人騒がせな眠り姫だよ。いつも憎たらしいね」

言いたいことは、まあ理解できる。文字通り死人に鞭打つというのはあまり褒められたことじゃない。ましてや聖戦に欠片も興味が無い相手からすれば勝手に巻き込むなどといったところか。

ただそのうえで、こちらの言い分を述べさせてもらうなら、「死んだ後でもう一度やり直しできる機会なんざ普通は無いし、せつかくなら可能な範囲でやりたいようにやれば良い。あまり悲観しすぎても良いことは無いし、それじゃ蘇った甲斐がないだろ」

「蘇った甲斐って……確かにそれは、前向きで正しい言葉だとは思いますがね。世の中の誰もがあなたみたいになれると考えてるなら

大間違いだ」

「いやいや、別に前向きだからどうかじゃなくて一般論で——ああ、そういういえばそうか。あなたは確か、肅清に巻き込まれて死んだんだっけ？」

「ええ、そうですよ。馬鹿なことをしたものだ、あの英雄様に喧嘩売った拳句に一族郎党皆殺しつてオチなんだから」

アンタルヤ連合国の商人としてアドラーに拠点の一つを構えていたグランセニツク商会は、最高機密である星辰奏者のデータエスベラントをアンタルヤに流そうとした罪で肅清されたと聞いた。ルシード自身は身内であっても関係者ではなかったらしいので、傍から見れば同情と残念ながら当然が五分五分くらいだ。

そんな人間が、肅清に巻き込まれた後で抱く残留思念。考えてみれば答えなんて一つだろう。

「死ぬのが怖い、戦うのが怖い、二度とそんな目に遭いたくないし遭うくらいなら死んでいた方がマシ……そんな衝動に引きずられているなら、それだけ臆病なのも納得するさ」

「だけど、納得しても共感はできないってところでしょう？ そりやそうだ、あなたみたいに死ぬ間際まで立派であろうとした人間に、負け犬の気持ちは分からないさ」

「……そんな風に思われるのは心外だな。でも確かに、勿体ないとは感じてるけど」

「だからあなたはそっち側の人間なのさ。あまり自覚は無いようだけど、ちよつと話してみればすぐに理解できる」

なるほど、これが商人の目利きというヤツなのか。甚だ不本意な言い回しだけど本質的には間違っていないなさそうな評価だった。確かに私は、今や弱者の側の人間ではない。この短時間でそれを言い当てたグランセニツクの御曹司は見事だった。

「第二の人生？ やり直しのチャンス？ 蘇った甲斐？ —— 知るかよそんなの、結局最後は殺しに来るような輩に言われたところで執行猶予が延びただけだ。あなたは一応魔星側こちらだけど、どうせ裏切る気満々なんでしょう？ 重力操るような化け物相手に苦しい思いなん

「ざごめんだ、勘弁してくれよ」

「……分かったよ、そういうことならこれ以上は言わないさ。悪かった」

ここで納得せずに励ましたり叱ったりすることは簡単だが、それこそルシードと同じく衝動に引きずられることの証明となってしまう。モヤモヤする気持ちはあるけれど、ここは気持ちをねじ伏せ彼の言い分を尊重しよう。

「だけど一つだけ聞かせてくれ。あなたは魔星として、アドラーで大暴れしてやるとか考えたことは？」

「なんですそれ、意趣返しに無関係な人間諸共火の海に沈めてやれとでも？ やるわけないでしょう、そんなこと。屋敷でおびえながら金を数えてる方がよっぽど建設的だし僕の性に合っている」

「そっか、なら安心したよ、アドラーに弓引かないならあなたもまた一市民ではある、いざとなったら少しくらいは守ってやるさ」

それでもアドラー軍人ではあるのだし、罪のない人間が巻き込まれるのを見過ごすのは寝覚めが悪い。錬金術師アルケミストに関しては微妙なところだが、直接被害を出さず聖戦に関わる気も無い限り無害な相手だ。別に構いはしないだろう。

それに何より、勝手に蘇らせた挙句に関係者だからと殺してしまうのは傲慢だと感じてしまう。そんな弱者にんげんを、私の憧れが手にかけてほしくない願ってしまうから。

「正気で言ってるのかい、それ？ 魔星で、しかもアンタルヤの人間だった僕を一市民とみなして庇う？ 冗談きついで、まったくき……だから立派な人間は嫌なんだ。眩しくってしょうがない」

「安心してくれ、命を賭しても守るって程じゃないさ。いざとなったら自分で戦って自衛してくれ」

「そんな勇気が僕にあつたららの話ですけどね」

力なく笑う姿は、着飾った外見とは裏腹に惨めで悲しい負け犬そのものだった。これ以上はこちらからも言葉をかけるつもりはない。

これにて錬金術師アルケミストの真意は分かった。私のように「これは一つ譲れない」とでもならなければ、きつと参戦してくることはありえない。

魔星としては今後も含めて一、二を争う能力を持つこの男が出てこないのは正直助かるところだ。

「それにしても——」

「ん、どうした?」

「月天女アルテミスといい、誓約者テールズといい、神星に選ばれた女性はことごとく貧相な身体ばかりだ。もし彼らにロリコン趣味があるとすれば、僕はそうなりたくないものだね」

「言ったなお前、潰してやるぞ」

負け犬ではあっても、口の悪さは随分と堂に入ってるようだった。